

---

# ARIA いろいろなお話 ?

一陣の風

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

ARIA いろいろなお話 ？

### 【Nコード】

N2525J

### 【作者名】

一陣の風

### 【あらすじ】

水の惑星「アクア」

その一都市「ネオ・ヴェネツィア」で観光案内を職業とする水先案内人「ウンディーネ」

このお話しは、彼女達、そして彼女達に関わる全ての人々の物語。

SS投稿サイト「Arcadia」からの再録です。

**a d d e t r o a l e a (前書き)**

す、すいません。

第二話を投稿する時点で「短編」ではなく、「連続」にするのだとゆうことに気がつきました。

リカバーの仕方もよく分からない鹿馬者なので、改めて、このお話しから仕切り直させていただきます。 すいません(平伏)

このお話しは別の投稿サイト - 「Arcadia」からの再録です。腕試しのつもりで投稿させていただきました。

結構、内容的にも、話数的にも長いかもしれせん。

読み終わられた後、ご感想などいただければ、これに勝る幸せはありません。

それではしばらくの間、お付き合いください。

第二話 『 a d d e t r o a l e a 』

やさしい風が、ほほをなでる。

そんな春のある日。

オレンジ・ぷらねっとの食堂で、一人のプリマと白い猫が感嘆の声を上げていた。

「わ〜ひ。ここの食堂は、いつも美味しそうなもの、いっぱいだね」

「ぶいにゅ〜」

「灯里先輩。アリア社長。いくらでも食べてくださいね。でっかいおかわり自由です」

「ぶいにゃあ〜い」

「ありがとう。アリスちゃん」

灯里は、アリスに笑顔で答えると、食堂に並べられた料理を見回した。

今日、灯里は、アリア社長と一緒に、ここオレンジ・ぷらねっとのプリマ・ウンディーネ、アリス・キャロルのお誘いを受けて、お泊りに来ていたのだ。

まずは食事でも〜と、いう事で、食堂に誘われた灯里とアリア社長。

いつもながらの、その豪華な料理に目を輝かせていた。

「ぶいにゅにゅんぶにゅ〜」

「アリア社長。あんまり走り回ると危ないですよ。あっ」  
「きゃっ」

小さな悲鳴があがる。

あまりに美味しそうな料理を前に、興奮して走り回っていたアリア社長が、二人のウンディーネとぶつかりそうになったのだ。

「あ、ご、ごめんなさい」

「うん。大丈夫。気にしないで…って。あれ、あなた」

「あれ。灯里ちゃん？」

「ほへ？」

名前を呼ばれて、灯里が、あわてて相手の顔を見れば…

「アトラさん。杏さん」

そこには、きょとん顔でこちらを見ている、アトラと杏がいた。

アトラ・モンテヴェルディと、夢野・杏は、灯里がまだプリマに昇格する前。

アリアに薦められた、トラゲットと呼ばれる、大運河（カナル・グランデ）の渡し舟で一緒になった、シングルのウンディーネだ。

もう一人、姫屋のウンディーネと四人一組で経験した初めてのトラゲットは、まだシングルだった灯里に、シングルとしての今、プリマへの未来。

そして、ゴンドラに乗るといふ事の意味を、改めて深く考える機会を得た、とても貴重な体験だった。

「おひさしぶりです。アトラさん。杏さん」

「うん。おひさしぶり」

「そういえば灯里ちゃん。聞いたわよ」

「はひ？」

「プリマ昇格おめでとう」

「は、はひ。あ、ありがとうございます」

「通り名は、アクアマリン - 遙かなる蒼。ですって？ うん。灯里ちゃんにぴったりね」

「はひ。ありがとうございます」

灯里が照れて顔を真っ赤にしていると、突然――

「うっうっうっ」

不気味な声と共に、あたりの空気が重くなる。こころなしか照明も暗くなった気が……

「ぶ、ふいにゆうう」

アリア社長が、おもわず灯里にしがみついた。

杏が顔にシャギーを入れながら、うめいたのだ。

「うっうっ…よかったですねえ。灯里ちゃん。プリマおめでとうござい  
いますう……」

うめきながら、灯里の右手をとる。

「うっうっ…いいなあ…プリマ。いいなあ…うふ…うふふふ」

「杏さん。杏さん。はわわ……」

「ほ、ほらほら杏。落ち着いて、落ち着いて」

あわてて、アトラが間に入る。

「うふふふ…プリマ。プリマ……」

「はひいいい」

しかし杏は、何度も、何度も、手袋のない灯里の右手を、自分の手袋をはめた右手でなで回していた。

「添乗指導、ありがとうございます」

ペアのウンディーネが頭を下げた。

「ああ……」

指導教官のウンディーネは、冷たいとも取れる声で答えた。

「今日言われた事を、今度私が乗る前に、ちゃんと修正しておけ。何度も同じ間違いを繰り返すな。」

それから安全確認を怠るな。特に後ろには「

「はい。分かりました」

「ほんとうかな……」

指導教官は思った。

本当に分かっているならば、こんなに何度も間違いは繰り返さないはずだ。

そう。

同じ間違いは二度と……

「ゴンドラの後片付けは、ちゃんとやっておけよ」

そう言つと、彼女は、その場を離れる。

だが、後で確認しに来るつもりでいた。間違いは正さなければならぬ。

それが、例え本人にとって辛い事であっても。

甘さや妥協は許されない。

「お疲れ様」

違うペアが、自分が指導していた子に話かけるのが聞こえてきた。

「ねえ。どうだった？」

「いつも通りよ」

「いつも通り？」

「そつ。アツディエートウロ・アーレア」

「アツディエートウロ・アーレアかあ……やれやれって感じね」

「ええ。もうやんなっちゃう。疲れた疲れた。早く片付けて、晩御

「飯食べに行こ」

「あ、そういえば…今、食堂に水無灯里が来てるわよ」

「え？ あのARIA・カンパニーの水無灯里？」

指導教官の足が少し遅くなる。

「そうそう。それぞれ」

「わあ。私、ファンなんだ。早く行こ。行こ！」

「OK！」

二人は足早に、その場を去って行った。

「水無灯里…プリマかあ…」

彼女は、ひとりごちる。

生ぬるい夜風が通りすぎていく。

「先輩方。でつかい迷惑なので、座って話しをしませんか」

アリスがオムライスのトレイを持ったまま言う。

言葉使いはやさしいが、その顔は…間違いなく怒っていた。

灯里達が、ちょうど道をふさぐかっこうになっていたのだ。

「は、はひ。ごめんね。アリスちゃん。あの…アトラさん。杏さん。

よかったらご一緒にませんか」

灯里は、アテナが待つテーブルの方に視線を向けた。

「あ、でも悪いし」

アトラが、そのアテナの姿を見て遠慮がちに言う。

「先輩方。でつかい問題なしです。どうぞ一緒に」

「アリスちゃん」

「そうしてください。私もアトラさんや、杏さんと、お話したいで



すし」

「そう…じゃあ連慮なく。ありがとう」

「うふ、うふ、うふ…いいなあ。手袋なし」

杏はまだ、うめいていた。

「アテナさん、お疲れ様です」

「うつつ。お疲れ様ですう」

アテナにむかって、アトラと杏が挨拶する。

「あくアトラちゃん、杏ちゃん。お疲れ様。一緒にご飯どう？」

「アテナ先輩、それは今、私達がお誘いしました」

「ええ、そうなの。じゃあ、ご一緒しましょ」

アテナがてきぱきと椅子を用意しはじめる。

・さすがは気配りのアテナさん。

つと灯里が思う間もなく、アテナは、その自分で用意した椅子に  
けつまづいて、顔面からすっころんだ。

「ぶいにゆうー！」

「大丈夫ですか。アテナさんっ」

灯里とアリア社長が、あわてて駆け寄る。

「大丈夫…いつもの事ですよ」

アテナが普通に起き上がりながら答えた。

「はい。でっかい、いつもの事です」

「…いつもの事ですね」

「うつつ…いつもの事です」

「みんな…ちよっとは心配しようよ」

アテナに対するオレンジ・ぶらねっと独特の雰囲気(?)には、  
さすがの灯里もついていけない。

アテナはこれでも、灯里の先輩ウンディーネの、アリシア・フロレンスや、水先案内業界の老舗、姫屋の、晃・E・フェラリ・と共に「水の三大妖精」と言われる、トップ・プリマの一員だったのだ。

アリシアが寿退社し「三大妖精」は自然解消されたが、彼女のトップ・プリマとしての地位は、なんら変わる事なく保持されていた。

特に彼女の舟歌は、その通り名「セイレーン<天上の謳声>」に恥じることなき、絶大で圧倒的な歌唱力を誇っていた。

が、彼女は同時に「ドジッ子」としての名声も博していた。

話によると、アテナはほぼ毎日、この食堂において、お皿を割るか、スプーンやフォークの入った箱をひっくり返すか、シロップをボトル一本、紅茶の中にいれてしまうか。  
なにかしらの騒ぎを起こしているらしい。

先日も過去最高の、お皿47枚を割りを達成。人事部長のアレサ・カニングムに呼び出され、全額弁償と、その月の休日、全没収を言い渡された事もあったとか。

つまりオレンジ・ぷらねっとの社員は皆、アテナのドジっ子ぶりには、慣れているのだ。

「あの、ちょっといいですか」

灯里や、アリア社長も大満足の食事後。

お茶を飲みながら灯里達が話をしていると、同じ食堂にいたシングルや、ペアが声をかけてきた。

「あの。もしかしてARIA・カンパニーの水無灯里さんですか」  
「はひ。私、ARIA・カンパニーの水無灯里ですが…」  
「わあつ。やつぱり。スゴイ。あの…私達、灯里さんのファンなんです。握手してください」  
「はひ？ え、あの。はひっ」  
「うわあ。握手してもらっちゃった。嬉しいい！」  
「あつ、私も私も！」  
「はひいい？」  
たちまち、灯里の前に人だかりができる。

「灯里先輩、でっかい大人気です」  
アリスが、それを横目で見ながら、なぜか自慢げに、ぼそりつぶやいた。

「流石は、あのブランド・マザーが創設した、ARIA・カンパニーの、でっかい唯一の社員さんです」

「そうそう。それにあの伝説の三大妖精の一人。アリシア・フロレンスさんの一番弟子だし」

「うっ…それにプリマ昇進と共に、お店の経営まで一緒にこなしてしまう、バイタリティーだし」

「ええ。灯里ちゃんが大人気なのは、当然かもね」

最後にアテナが、ゆっくりとお茶を飲みながら言った。

と、思ったら、口に手をあてて悶絶し始める。

またガムシロップをビン丸ごと一本。カップの中に入れてしまったのだ。

「何を騒いでいるっ」

するどい声が、食堂に響き渡った。

全員の動きが止まる。

皆の視線が、一人の人物にそそがれた。

「騒ぐのなら他でやりなさい。ただし、のどを痛めてもよいのであればね」

「蒼羽ちゃん……」

アテナがつぶやくように言った。

そこには、背の高い、見るからに先鋭的なプリマが立っていた。

「す、すいません。騒ぐつもりはなかったんです。ごめんなさい」  
灯里が立ち上がって、頭をさげる。

「うん？ その制服は……アンタ、ウチの社員じゃないね」

「はい。ARIA・カンパニーの水無灯里といいます」

蒼羽の形の良い右の眉毛が、急角度で跳ね上がった。

「へえ。あなたが噂の……でもなんでここに？ 外部の人間が許可なく社内に入るのは、明確な規則違反よ」

「あつ。そ、それは……」

「私が、灯里先輩に泊まってくれるように、でっかい頼んだんです」  
アリスが、あわてて言った。

「し、仕事の事で相談があるので、社外の人の意見も聞きたいと思  
つて……」

「アリス・キャロル。いや、オレンジ・プリンセスか……プリマなら  
他社の人間に聞く前に、自分の所の人間にまず聞いてみるべきじゃ  
ないのか？」

「う……。それは……確かに」

「あ、あ。蒼羽ちゃん。灯里ちゃんに聞いてみればって言ったのは、  
私なの」

「アテナ先輩？」

・ありがとうございます。

アリスは心の中で、アテナに頭を下げた。

アテナはわざと、そう言う事で、アリスをかばってくれたのだ。

「ふーん」

蒼羽は、アリスとアテナの顔を見比べてから、おもむろに言った。

「ちゃんと許可は取ったの？」

「あ、うん。ちゃんと寮長と部長には、私から話をして許可はもらってるから…」

『嘘がへたね』

アリスは、蒼羽の唇がそう動くのを、はっきりと見た。

でっかい気づかされてる!?

だが蒼羽は、先ほどと変わらぬ口調で話を続ける。

「そう。ならかまわないけどね。ほらほら、ペアも、シングルも、浮かれてないで、さっさと自室にもどって、自習でもしなさい。

いずれあなた達が、この子のようなプリマにならなければ、いけないのよ」

そして蒼羽は、そこにアトラと杏の姿を認めると・

「二人とも、明日は早朝から練習だ。早く休めよ」

そう言うだけ言うと、蒼羽は後をも見ずに、その場を離れていった。

若いペアの何人かが、その背中に舌を出す。

「アツディエ・トウロ・アーレア」

「アツディエ・トウロ・アーレア」

笑いながら、ささやきあっている。

『アツディエ・トウロ・アーレア?』 後方危険?

「はひい。びっくりした」

カポーンッ

湯煙が上がる。

ここは大浴場。

オレンジ・ぷらねっとは完全寮制で、二人にひとつの部屋が与えられている。

それぞれの部屋にも、シャワー程度の簡単な入浴設備はあるのだが、大部分の社員は、一日の疲れを癒すため、この大浴場を使っていた。

もっとも、今、この大浴場を使っているのは、灯里。アリス。アテナ。杏。アトラ。そして、アリア社長の六人だけだったが。

「まるで、姫屋の晃さんみたいだったですね」

「ぶいにゆう…」

灯里とアリア社長が『どっかに行ってしまったいそうな』勢いで言う。あの後。妙にしらけた雰囲気になって、シングルやペア達は、自室にひきあげていった。

それじゃあ - と帰りかけるアトラと杏に、灯里がお風呂に誘ったのだ。

「オレンジ・ぷらねっつにも、ああゆう人がいたんだあ…」

「ぶいぶいにゆうううう」

アリア社長が流されていく。

「あの人は、違う」

そんなアリア社長を見送りながら、アトラが小さくつぶやいた。

「ほへ？」

「あの人は、姫屋の晃さんのように、思いやりはないわ。ただ叱るだけで…」

「ええ？ でも、そんな風には見えなかったですよ」

「確かに言ってる事は正しいの。完璧なくらい。でもね。あの人は、私達の今まで学んできた事、すべてを全否定するような言い方をするのよ」

「全否定…あつ。」

灯里は思い出した。

トラゲットの時、弱気になったアトラが、ついこぼした言葉。

・私達の教官は、いつでも全否定してくる。

「アトラさん。それってもしかして…」

「そう」

アトラはうつむいている、杏を横目で見ながら言った。

「あの人が、私と杏の指導教官よ」

オレンジ・ぷらねっとでは、何人かのシングルやペアに、ひとりの指導教官がつく。

現役のプリマの時もあれば、ウンディーネを引退して、会社の職員として参加する事もある。

そうやって、マンツーマンで、後輩を育てていくのだ。

それは、より、きめ細やかな指導を受けられるというメリ

ツトの反面。

その教官と後輩の「ソリ」が合わなければ、時には修復不可能な程の、深い溝をつくるといって、デメリツトも抱えていた。

「実際。教官と合わずに辞めていく子も多いのよ」

「はひ…」

「その逆に、教官が変わったとたん、伸び始める子もいるわね」

「そうなんですか…」

超少数精鋭主義の A R I A ・カンパニーでは想像できない事だ。でも…と、灯里は思う。

もし、アリシアさんが、晃さんやアテナさんだったら…

もちろん、二人ともアリシアと並んで「水の三大妖精」と言われる人達だ。

その技術にせよ、人格にせよ、アリシアに劣るところは、何一つない。

でも……

晃さんにしごかれる私。

アテナさんのドジっ子に振り回される私。

…

…

はひ。

やっぱり、私はアリシアさんと出会えて、すごく幸運だったのだと、思う。

アリシアさんの優しさがあったからこそ、今の自分がある。

それは、私とアリシアさんが、あんなにも深くつながりあう事ができた奇跡なのだから…



「あつ。そういえば『アツディエートウロ・アーレア』ってなんで  
すか？」

「え？」

「あ、あの。ペアの子達が言ってたんです。蒼羽さんの事。『アツ  
ディエートウロ・アーレア』って」

「ああ。それはね。蒼羽さんのあだ名」

「あだ名？ 通り名じゃなくって？」

「そう。蒼羽さんの通り名は別にあるの。で、あの通り、蒼羽さん  
の指導は、いろいろ厳しくて

特に舟の運行…安全確認にはうるさくて……」

「うん。常に安全を。特に後方には、充分注意しろ…って」

「そう。で、ついたあだ名が『アツディエートウロ・アーレア 後  
方危険』ってね」

「ほへえ」

「二言目には、後方確認をってね。一日に何度も言われるのよ」

「アツディエートウロ・アーレアかあ……ほんとうに厳しいんです  
ね」

「ほんとうに」

アトラが小さな、ほんとうに小さな声でささやく。

「ほんとうに。あの人が指導教官でなかったら、私や杏は、もうと  
うにプリマになっていたかもしれないのに……」

「アトラちゃん…それは」

「あつ。ごめん。杏。前にみんなに叱ってもらったのに。ごめんね  
あわてて言いつのる。」

アテナやアリスがいる前で、言うべき言葉ではなかった。

だが、そんな時こそ、人の本音は出てしまうのだ。

「アトラちゃん、杏ちゃん。お風呂上がったら、少し部屋に来ない？」

「アテナさん？」

「二人に聞いてほしい話があるの」

同時刻。

当の『アツディエートウロ・アーレア』こと、蒼羽・R・モチツキは、

オレンジ・ぷらねっと人事部長のアレサ・カニンガムの執務室に呼ばれていた。

「食堂で何かあったの？」

アレサ・カニンガムは、ある意味、オレンジ・ぷらねっと最大の功労者だ。

オレンジ・ぷらねっと創設時に吸収合併された、それまで中堅だった水先案内店から

移籍とゆう形で、最初からプリマとして入社した彼女は、初期のオレンジ・ぷらねっとを支える、重要な人材だった。

やがて若い頃の無理がたたって、プリマを引退した後、請われて人事部長になったアレサは、かずかずの社内改革を実行。

彼女の本当の真価は、この時から発揮されたといってもいい。

有望たる新人の早期確保。完全寮生活の確立。新しい観光案内の開発、等々。

その結果、オレンジ・ぷらねっとは、それまで常に一位として君臨していた、老舗の姫屋を押しつけて

わずか十年で、堂々、営業成績第一位の水先案内店へと、発展し

ていったのだ。

彼女が行った革新的な運営は、業界、第三の波として、いまだに語り継がれていた。

「いえ。なにもありません」

蒼羽は、アテナやアリスの規則違反の事など、おくびにも出さずに言った。

「そう、ならよいのでけど。最近、規則をやぶる子が多くて困ってるの」

「そうですか。でも時には、外の風を入れてみるのも、気持ちいいものです」

蒼羽はことさら言った。

「そうね。時には必要かもね」

アレサも微笑みながら答える。

それはすべてを、お見通しな微笑みだった。

「ところで、今日あなたを呼んだのは、そんな事じゃないの」

「はい」

「単刀直入に聞くわ。あなたが指導しているウンディーネで、昇格する見込みのある子はいる？」

「います」

蒼羽は間髪いれずに返事をした。

「何人かのペアは、もう少しでシングルになれます。シングルも、もう少しでプリマになれるヤツはいます。

特にアトラ・モンテヴェルディと夢野・杏の二人は、最有力候補です」

「そう…」

アレサは書類をめくりながら言う。

「でもアトラはもう一年近く、昇格試験を受けていない。それに杏は、この前の昇格試験に、また落ちた」

「もう少し。もう少しなんです。もう少しで二人とも、プリマになります」

「余計なペアやシングルをかかえている余裕はないの」

「……」

「私から直接、昇格試験に対して、あれこれ言う事はできない。でも、覚えていて」

アレサは、それまでとは、まったく違う冷たい声で言った。

「必要以上に手間のかかる育成は、 unnecessary です。そして、それを是とする指導教官も」

「部長しかし」

「今言った言葉。よく覚えておいて。話は以上です。退席してよろしい」

なをも言いつのろうとする蒼羽を無視して、アレサは手元の書類に視線を移した。

それはもう、話す事は何もないという、アレサの無言の意思表示だった。

「……失礼します」

ゆっくりと扉の方へ歩いて行く蒼羽の背中に、不意にアレサの声がつきささった。

「あの子のこと、まだ気にしてるの？」

扉のノブを持つ、蒼羽の手が一瞬止まる。

「あの子のごことは、あなたの責任じゃない。それは、みんなも分かっているわ。そう、あの子自身もね。」

でも、あなたは、いつまでそれを背負っているつもりなの？」

「……」

蒼羽は無言で、そっと扉を閉めた。

それ以上、中からアレサの声が聞こえる事はなかった。

「私の同期で、指導教官として誰よりも早く、プリマを育て上げた子がいるの」

アテナは、ゆっくりと話始めた。

「その子は、もちろんプリマとしても優秀で、指導教官としての技量も、とても確かなものだった。

「ただ、その子が、一番早くプリマを育て上げられたのには、理由があるの」

「理由…ですか」

「うん。その指導教官と、そのプリマになった子とは、とても相性がよかったの」

「相性…」

「二人とも、そばで見ている私達が恥ずかしくなるくらい仲良しで、信頼し合っていた」

ふとアリスは、昔、アリシアが自分と灯里との絆を言葉にした時の事を思い出した。

曰く。私と灯里ちゃんとは、一心同体なのだ。

「そして彼女は、その指導教官のもとで、誰よりも早くプリマに昇格した」

「でっかい優秀だったんですね」

「うん。確かに彼女は、とても優秀なプリマだったわ。でも…」

「でも？」

「でもある日。その子が事故をおこしてしまったの」

「え。ゴンドラクルーズの最中にですか？」

「ええ。風が強い日だったわ。そして事故そのものは不可避な事だ

った。舵が故障したヴァポレット（水上バス）が後ろから彼女のゴンドラに突っ込んだの」  
「ヴァポレットが……」

あんな大きな船が突っ込んできたなら、ゴンドラなんかひとまわりもない。

「幸い、お客様には怪我もなく、すぐ助けられたんだけど。その子自身は、腕を痛めてしまったの」

「腕を…ひどかったんですか？」

「ええ。普通に生活するには問題ない程度だったんだけど、私達のように、正確なオールさばきをしなければならぬウンディーネには、致命的な怪我だった」

「……」

「そして、その事故には、もうひとつ問題があったの」

「もうひとつ？」

「ええ。彼女は、その時の運行予定表を提出していなかったの。飛び込みの仕事だったから。」

だから、その事故の事を、会社や協会が知ったのが、ずっと後になつてしまったの」

「それって……」

アリスが何かに気がついたように、灯里の顔を見た。

灯里も気がついた。

それは昔、まだ二人がプリマになる前、姫屋の藍華と勉強会を開いた時、テキストとして読んだ事のある事故だった。

「結局、その子はウンディーネを引退せざるを得なかった。腕を痛めたのも原因のひとつだけど、

なによりも書類を出していなかった事が、一番の問題だった」

「……」

「会社や協会にとって、規則違反はなによりも問題視されていたから」

「……」

「その子の指導教官だった、私の同期の子は、苦しんだわ」

「でも。それはその人のせいじゃ……」

「私達もそう言ったわ。でも、彼女は納得しなかった。いえ、しようとしなかった。」

もし自分が、もっと厳しく彼女を指導していたら、事故を避けられたかもしれない。

もし自分が、もっと厳しく彼女に操舵を教えていれば、腕を痛める事はなかったかもしれない。

もし自分が、もっと厳しく彼女に規則を教え込んでおけば、後で問題になる事はなかったかもしれない。

もし自分が、もっと厳しく彼女をプリマに昇格させなければ、引退させる事はなかったかもしれない。

もし自分が、もっと厳しく彼女を思っていたなら、彼女の夢を壊してしまう事はなかったかもしれない。

もし自分が、もっと厳しく、もっと厳しく……って。

そうやって自分を責めていたの。

指導教官だった子は、その子がオレンジ・ぷらねつとを去った日から、三日三晩、泣き通したわ。

ようやく、四日目に部屋を出てきた彼女は、それまでと違って、ほとんど笑顔を見せる事はなくなっていた。

そして、ゴンドラクルーズさえ止めてしまった」

「それって…プリマを辞めたって事ですか」

「基本的にはね。彼女は専任の指導教官になった」

「専任の……」

「そして彼女は、プリマの昇進試験には、ことさら厳しい指導教官になったの」

「アテナさん。その指導教官の人って、まさか……」

アトラが、かすれた声で聞く。

「そう」

アテナはつらそうに小さく言った。

「蒼羽ちゃんよ……」

蒼羽は夢を見ていた。

悪夢だった。

風が吹いていた。

二人の髪を小さく揺らしながら。

彼女が行ってしまふ。

誰よりも信頼し、誰よりも信頼してくれた彼女が行ってしまふ。

プリマになるのが、夢なんです。

そう言った彼女が。

そう言っていた彼女が。

そう言って瞳を輝かせていた彼女が。

まばゆい光の中。痛いくらいの日差しの中で、彼女は大きな荷物を胸に抱き、泣いていた。



ごめんなさい - と、泣いていた。  
蒼羽も泣いていた。

ごめんね - と泣いていた。

私は、あなたの力になれなかった。

私が、あなたの夢をつぶしてしまった。

私をもっと強ければ。

私をもっとしっかりしていれば。

あなたが、夢を捨てることはなかった。

あなたの夢を、捨てさせることはなかった。

さようなら

彼女が言う。

さようなら。

行かないで。

声は出ない。

お願い、行かないで。

声は出ない。心が張り裂けそうに叫んでいるのに、声は出ない。

ごめんなさい。

彼女は行ってしまった。

ごめんなさい。

あざやかな光の中で、悲しげに、そつと微笑みながら、彼女は行ってしまった。

ごめんなさい。

その背中に手をのばす。

でも届かない。届かない。届かない。

彼女が振り返る。

何事かを伝えるように、その唇が動く。

でも -

聞こえない。

彼女の声は聞こえない。

吹き抜ける風が、彼女の声をさらっていく。

ごめんなさい。

でも、それは。

後悔か怒りか、それとも呪詛の言葉か。

ごめんなさい。

そして彼女は、真っ白な光の中に消えていってしまった。  
風が駆けぬけてゆく。

ごめんなさい。

ごめんなさい。

蒼羽は、謝りながら眠っていた。

それは、とびきりの悪夢だった。

「ほんとは、彼女は誰よりもやさしいの」

アテナがつぶやく。

「ほんとは、誰よりもやさしいのに、ああいう言い方をするの。それはなによりも、二度とあの子のようなウンディーネを出さないために…… そういう生き方を選んでしまったの」

「……」

部屋の中に沈黙がおりる。

誰もがなにひとつ言わない。

響くのはただ、アリア社長と、まあ社長の寝息だけ。

「アトラちゃん、杏ちゃん。だから私、あなたたちに蒼羽ちゃんの事を……」

アテナが言い続けようとした時。

トントントンと。

誰かがドアをノックした。

「はい。どなたですか？」

アリスがあわてて駆け寄って、たずねる。

「夜分にごめんなさい。灯りがもれていたものだから」

そう言って、顔をのぞかせたのは、アレサ・カニンガムだった。

「アレサ部長」

「こんにちは。あなた達、夜更かしが楽しいのは分かるけど、ほどほどよね」

「はい」

「すみません、部長。もうお暇するところでした」

「アトラに杏ね。早く休まないと、明日は朝から練習があるのではななくって？」

「え。は、はい。その通りです」

「そんな事まで、ご存知なんですか」

「もちろん。私は全社員の顔と名前。明日の予定なんかも、ちゃん

と知ってるわ。悪い事はできないわよ」  
うふふ・とアレサは笑った。

「はへえ……オレンジ・ぷらねっとの全てのウンディーネさんの顔と名前。全部ですか。すごいです」

「まあ人事部長ですから……」

アレサは苦笑を浮かべた。

そこで気がついた。

「あれ、あなたはウチの社員じゃないわね。確かARIA・カンパニーの……」

「はひ。失礼しました。ARIA・カンパニーの水無灯里です。こちらは、ARIA社長です」

灯里は、いまだに大いびきで寝ている社長を紹介した。

「こんばんは。灯里ちゃん。そう、あなたが風なのね」

「はひ？ 風？」

「ううん。なんでもないの。それより、こんな夜中までいったい何を？」

「えと、ちよつと昇進試験の事を……」

「そう…アトラ、杏。指導教官の蒼羽は厳しい？」

「は、はい」

「とても、厳しいです。……でも」

「でも？」

アトラと杏は、まっすぐにアレサの顔を見た。

「私達、めげません。絶対プリマになります」

「はい。何度でも、自分をやわっこくして挑戦します」

「そう……」

アレサはアテナに視線を移す。

『しゃべったわね』

その目は、そう語っている。

アレサには、隠しことはできない。

なにしろ、アテナの指導教官だったのが、アレサなのだ。

アテナはあわてて視線をそらそうとして、目を回してひっくり返ってしまった。

「わあっ。アテナさん大丈夫ですか？」

「アテナさん。しっかり」

「ホントに、でっかいドジっ子さんです」

オレンジ・ぷらねっとの社員達が、あきれながらもアテナの世話をやいている横で、灯里に近づいたアレサが、その耳元で、そっとつぶやいた。

「灯里ちゃん。あなたにちよつと頼みがあるの」

「は、はひ？ なんでしょうか」

アレサは、いたずらっ子のように微笑んだ。

「あなたに、風になってほしいの」

朝の目覚めは最低だった。

同室のペアのウンディーネは「先に行きます」と言って、出て行ってしまった。

自分が疎ましがられている自覚はあった。だけど……

あの子も、もう少しでシングルになれる。希望の丘に行ける。

そうすれば、いずれきつとプリマに……やめよう。

蒼羽はかぶりをふった。

未来はどうなるか分からない。

それに。  
プリマになって、幸せなのかどうか。それすらももう、今の蒼羽には分からなくなっていた。

「おはようございます」

「お前、なんで……」

蒼羽がゴンドラ乗り場に来ると、アトラや杏のほかに、灯里までが待っていた。

「私も、ご一緒させていただいていいですか？」

「はあ？」

「あの、私もいずれ後輩を指導しなくちゃいけないんで……蒼羽さんの指導方法を、教えてほしいんです」

「断る」

蒼羽は即座に一蹴した。

「ここはオレンジ・ぷらねっとだ。ウチにはウチのやり方がある。それをわざわざ、なぜ他社のお前に教えねばならん」

「ええ〜」

「まあまあ、蒼羽。そう言わずに」

「アレサ部長？」

いつの間にか、アレサが蒼羽の背後に立っていた。

「私がね。灯里さんをお願いしたの」

「お願い……なぜです」

「そうね……実はこれはアリスからの相談……とゆうか企画のんだけど、私は将来的に合同クルーズっていうのを考えてるの」

「合同……クルーズ？」

「ええ。例えば灯里さんのゴンドラ・クルーズを受けたいって、お

お客様が多いとき、ウチから何隻か舟と人をだすの。

そうすれば、お客様は灯里さんの観光案内を受けられるし、灯里さんは、より大勢のお客様と触れ合える。

ウチは、それだけで、お客様を増やす事ができて、なおかつ、シングルやペアの練習にもなる。一石三鳥ね」

「なんか、ウチにはかり有利な気がしますね」

「あら。ちゃんとしたギブ・アンド・テイクよ」

アレサは営業スマイルを浮かべた。

「今日は、その試金石」

「おい。アンタはそれでいいのか？」

アレサの攻略は無理・とみた蒼羽は、矛先を灯里に向けた。

「つまりは、ウチにいい条件で、アンタはこき使われるって可能性もあるんだぜ」

「は、はひ。私はぜんぜん構いません。より多くのお客様に触れ合うことができれば、それだけで幸せです」

「ったく。とんでもない甘ちゃんだな」

ちっ・と蒼羽は舌を鳴らす。

「はいはい。ぶつぶつ言わない」

「ぶつぶつぶつ……」

「それに、どちらにせよ今日、明日って話じゃない。あくまで将来に対する投資のひとつよ」

「あなたが、ただ投資をして、回収もしない・なんて思えませんかどね」

「蒼羽。なんなら、部長命令って形にしてもいいのよ」

一転。アレサが恐い声を出す。

「どうなの。行くの？ 行かないの？」

「分かりました。分かりました。行きますよ。一緒に連れて行けばいいんですよ」

「物分りがよくて、たいへん、よろしい」

「やれやれ……おい。アンタ」

「は、はひ」

「一緒に同行するのは許すけど、私の指導に対しては、いつさい口出しはさせないからな」

「は、はひ」

「それから、邪魔になるようなら、即刻、帰ってもらおうぞ」

「は、はひ。分かりました」

「じゃあ。出発だ。アトラ、杏。行くぞ」

「『はいっ』」

二人の声がかぶった。

「行ってらっしゃい」

アレサが小さく手を振った。

「アトラ。返しが遅い。大きい」

「はい」

「杏。観光案内は、もっと簡素に、はっきりと」

「はい」

「二人とも、常に後方を確認しろ。安全に、もう充分・はない」

「『はい！』」

蒼羽は、次々にアトラと杏に指示を出しながら、妙な違和感を感じていた。

二人とも、いつもと違う。



いつもなら、微妙な倦怠感や疲労感。嫌悪感ともいうべきものが、この二人から感じられるのだが、今日はまるで違っていた。そう。まるで人が変わったような……  
なにか、あったのか？

不意に風が吹き、花びらを巻き上げる。

「うわあ。気持ちのいい風ですねえ」

蒼羽の背後から、なんとも間の抜けた声が聞こえる。

「まるで、花びらの妖精さんがダンスしているみたい」

「おい。アンタっ」

こめかみに血管を浮かび上がらせながら、蒼羽は叫んだ。

「なにのんきな事、言ってるんだ。今、私達は練習中なんだぞ」

「え〜でも、蒼羽さん。見てください。こんなに素敵ですよ」

そう言っただけで指差す方を見れば、そこにはたくさんのお花びらが、まるで降るような激しさで舞い踊っていた。

蒼羽もつい、その光景に見とれてしまった。

「素敵ですねえ。えへへ」

灯里が、ほんとうに楽しそうに笑う。

その横顔を見て、蒼羽は、ハツとした。

その横顔が、あの子と一瞬、重なって見えたのだ。

呆然と灯里を見つめる蒼羽。

にっこりと微笑む灯里。

「蒼羽教官？」

杏の声が、蒼羽を引き戻す。

「ばかばかしい。蒼羽は、吐き捨てるように呟いた。

「このプリマとあの子は、ぜんぜん違う。」

「顔も髪型も声も容姿も、ぜんぜん違う。」

だが、その瞬間。灯里と彼女は重なった。  
なぜ。

「……アンタ、プリマになって幸せか？」

蒼羽は灯里の顔を見もせず、苛立だったようにたずねた。

「はひ？」

「だから……」

蒼羽は、そんな自分に驚きながら、声を荒げた。

「アンタは、プリマになってホントに幸せなのかと聞いてるんだ！」

アトラや杏が、驚いたようにこちらを見ていた。

かまうものかっ。

だが、なぜ私は、こんなにもいらだっているんだ？

なぜ。

なぜ。

何故？

「はひ。私はプリマになれて、とっても幸せです」

そんな蒼羽のいらだちなど、簡単につき崩してしまつような、素直で穏やかな声。

「アクアには、こんなにも素敵が満ちていて。その素敵を、お客様と一緒に分かち合いながら、舟を漕いでいける。」

私はプリマに……いえ、ウンディーネになれて、とっても幸せです」

灯里が舞い上がる花に囲まれながら、にっこりと微笑んだ。

『私、ウンディーネになれて、よかった』

ああ……

あの子も、確か、そう……

「ヴォオオオオオオオオ！」

警笛が響き渡った。

突然。

後ろから蒼羽達のゴンドラめがけて、ヴァポレットが突っ込んでくる。

「危ない！」

「後ろ！！！」

アトラと杏が叫ぶ。

とつさに左右に分かれる蒼羽と灯里達。

ヴァポレットはそのまま、水路の壁に衝突して止まった。衝撃で、ゴンドラが激しくゆれる。

蒼羽は必死にゴンドラにつかまった。

悲鳴が聞こえる。

これは。

これはあの時と同じ。

あの子と。

同じ。

「アトラ。杏。大丈夫か！？」

ヴァポレットの影に隠れて二人の姿が見えない。

あのARIA・カンパニーのプリマの姿も見えない。

蒼羽の顔から血の気が失せる。

叫んでいた。

「アトラ。杏。返事をしろっ」

汗がしたたり落ちる。  
おびえている？  
私はおびえている？

「アトラ。杏っ」

叫ぶ。

声を痛める？

・

・

・

関係あるかあ！

叫ぶ。絶叫する。

「アトラ。杏。返事をしろ！」

いやだ。いやだ。いやだ。

また失うのは、いやだ。

アトラも杏も、あのウンディーネも。  
もう。

いやだっ。

「アトラっ」

「杏っ」

そして

「灯里！」

「は、はひい…大丈夫ですう」

間の抜けた返事が聞こえてくる。

「私達も大丈夫です」

アトラと杏も、ヴァボレットの影から顔を出す。

「ああ。びっくりしました」

最後に灯里が、のんびりと顔を出した。

この、この、この……

刹那。蒼羽の胸に、殺意に似た感情が芽生える。

が、そのまま蒼羽は、ゴンドラにへたり込んでしまった。

「はわわ。蒼羽さん大丈夫ですか？」

「蒼羽先輩」

「教官っ」

あたりは、救助の人や野次馬が集まって来て、一度に騒がしくな  
った。

「大変だったわね」

オレンジ・ぷらねっとに帰りつくと、そう言ってアレサ部長が迎  
えてくれた。

「あのヴァボレットは舵の故障だったみたい。一度ならず二度まで  
も。ウチの会社はヴァボレットにうらまれているのかしらね」

アレサは笑顔で言った。

「笑い事じゃないですよ……」

それに対する蒼羽の答えは、ひどく気だるげだった。

「今回は、ウチのウンディーネも含めて怪我人ゼロ。事故処理も早  
く終わって、何事もなし。」

でも、こんな幸運は一度きりです」

「そうね。会社からもゴンドラ協会からも、ヴァボレットの運行会  
社には抗議しておくわ。不幸な事故は一度で十分よ」

「……………」

「それにしても」

・と、アレサは灯里達を見ながら言った。

「ほんとに、誰にも怪我がなくてよかったわ。灯里ちゃんはともかく、アトラと杏は、よく気がついたわね」

「はい」

「私達。蒼羽教官に鍛えられていますから」

「あ？」

「『常に後方確認』」

二人の声がハモる。

「アツディエートウロ」

「アーレア！」

くそつ。

ああ……………この二人。

知ってるんだな。

蒼羽は苦笑する。

アレサ部長の差し金か……………なら、あのウンディーネも……………

「あの、蒼羽さん」

「あ？ なんだい？」

そのウンディーネが立っていた。

「あの…私の事、心配してくれて。私の名前も呼んでくれて……………うれしかったです」

「いや、別に、それは……………」

「ありがとう」

え？

「ありがとう」

灯里が、こぼれるような笑みを浮かべる。

不意に蒼羽は、思い出す。

「ありがとう」

それは彼女の最後の言葉。

彼女と重なる灯里の姿。

そうだ。

彼女は最後にこう言ったのだ

「ありがとう」と

「少しの間だったけど、プリマになれて、夢をかなえる事ができて、  
ありがとう」

彼女は去り行くあの時、確かにそう言ったのだ。

あなたと出会えて。

プリマに、いえ、ウンディーネになれて……

「幸せでした」

ああ。

思い出す。  
思い出す。

彼女の言葉。  
彼女の最後の言葉

「ありがとう。私、幸せでした」

灯里の微笑み。

彼女の微笑み。

重なる、二人の微笑み。

ゆつくりと、硬い氷が解けていくように。

静かな波間に、風が、ゆるやかな波紋を広げていくように。

蒼羽の心がほどけてゆく。

最後の時 -

彼女の口が紡いだのは、後悔でも、怒りでも、もちろん呪詛の言葉でもなかった。

ただ、ありがとう - と。

ただ、幸せでした - と。

彼女は、そう言っていたのだ。

なぜ、私はそれを忘れていたのだろうか。

突然。蒼羽は自分が泣いている事に気がついた。  
頬を幾筋もの涙が零れ落ちてゆく。

- なぜ？



なぜ私は泣いている？

だが、その答えが出る前に、蒼羽は崩れ落ちた。

「蒼羽教官？」

「ど、どうしたんですか？」

ひざをついて、顔を覆いながら、嗚咽する蒼羽。

あわてて駆け寄るアトラと杏。

その様子を驚いて見ている灯里に、アレサが近づいて小さく言った。

「ありがとう」

「はひ？」

「あの子のところに、新しい風を吹き込んでくれて……」

「はひい？」

「あなたはホントたいした子だね。ウチに引き抜きたいほどよきよとんとする灯里。」

その髪を、風が揺らしながら通りすぎてゆく。

「いい風ね」

アレサは、風にそよぐ自分の髪を押さえながら、そう言った。

それからしばらくたった、ある日の午後。

蒼羽は、サンマルコ広場でカフェ・フローリアンのカフェラテを、ひとり優雅に飲んで…いたハズだった。

それなのに。

「なんで、アンタがここにいるんだ…」  
「ほへ？」

せつかくのオフの日だとゆうのに、蒼羽はアレサの『部長命令』の一言によって

ここで彼女を待っていたのだ。

だが、そこには先客として、灯里やアリス。杏やアトラ、それとなぜか、カフェ・フローリアンの

店長までもが同席し、楽しそうに談笑していた。

「私はここで、ひとりでお茶していたいんだ。それがなんでこんな……」

「そうそう。蒼羽さん。お噂、聞きましたよ」

「人の話聞けよ！ ……って、噂ってなんだ」

「はひ。今や、オレンジ・ぷらねっとの蒼羽さんは、水先案内人業界NO.1の指導教官だって」

ぐうえ。と、蒼羽は変な声を出して、むせ返った。

「は、はあ？ 誰だ、そんなこと言ってるヤツは？」

「えっ？ でも、この話、もうみんな知ってますよ？ 姫屋の晃さ

んか、オレンジ・ぷらねっとの蒼羽さんかって」

「おいおい。姫屋の晃さんと比べられてもなあ。まあ、光栄な話だけど。私はゴンドラ・クルーズはやらないしなあ……」

「蒼羽教官。ホントにもう、ゴンドラ・クルーズは、なさらないんですか？」

横で話を聞いていたアリスが訊ねる。

「教官なら、トップ・プリマになる事だって、でっかい夢じゃないのに……」

「ありがとう、オレンジ・プリンセス」

蒼羽は心からの笑顔を見せた。

トップ・プリマ?

「私はそんなものに興味はない。どれだけのプリマを育てられるか。どれだけ素敵なウンディーネ達に出会えるか。」

今の私には、その興味しかない」

「いい言葉ね<sup>セリフ</sup>」

アレサがひとりの女性を伴って歩いてきた。

「部長。遅いっス」

その顔を、ろくに見もせず、蒼羽は文句を言った。

「ごめんなさい。ちよっと打ち合わせが押しちゃって」

「へえへえ。で、私なんかを呼び出して、何の御用ですか?」

「こないだ話をしていた、合同・クルーズの件。こちらの観光会社の方がのつてくれてね。」

そこで今度、ウチからプリマー人と、シングル二人を出して、ARIA・カンパニーとの合同ツアーを企画したの」

「え。それじゃあ、蒼羽さんやアトラさん、杏さんと、一緒に漕げるんですか?」

灯里の顔が輝く。

ホントに甘ちゃんだなあ……

蒼羽はタメ息をついた。

「部長。私はゴンドラ・クルーズはしませんよ。アリスに言ってください。それに……」

蒼羽は、アトラと杏の方を見た。

「あの二人はダメです」

「そ、そんな。蒼羽さん。アトラさんも杏さんも、もう立派なウンディーネです」

「そうです。先輩お二人の技量は、この前の事故の時でも、でっかい証明できたじゃないですか!？」

灯里とアリスが、口をそろえて言う。

「あ、あ。ありがとう。灯里ちゃん、アリスちゃん。でも、大丈夫よ」

「う、うん。私達なら大丈夫。もっと何度でもチャレンジしてみせるから」

アトラと杏も、負けじと言う。

ふふふ。

つい、笑みがこぼれる。

おかしい。おかしい。

こいつは傑作だ。

あはははははっ

とうとう、こらえきれなくなって、蒼羽は声をあげて笑い出した。みんなが、きよとんとした顔で、こちらを見ている。

「ああ。なんて甘いんだ!？」

「みんな何を言ってる?」

蒼羽は笑いすぎて流れてきた涙を指でぬぐいながら言った。

「私が、この二人がダメだと言ったのは、アトラも杏も、もう『シングル』じゃ、なくなるからだ」

「ほへ……」

「蒼羽先輩…それって、でっかい、もしかして……」

「ああ。その通り。おい。アトラ。杏」

「『は、はい!』」

「今度のオフの日。一日空けておけ。いいな。で、アトラっ」

「は、はい!」

「前の昇級試験から日にちは経っているが、それは言い訳にはさせんからな……杏っ」

「は、はい!」

「次こそは受かってもらおうぞ。私にこれ以上、手間をとらせるな。んで……アリスっ。灯里ちゃん」

「は、はひ!」

「ひ……」

「すまないが二人は、こいつらに協力してやってくれ。私が目の届かないところを、よろしく頼む。

こいつらも、いろいろ聞きたいこともあるだろうしな」

「はひっっ」

「で、でっかい了解です」

「もちろん。何事も安全第一」

蒼羽は、ウインクと共に言った。

「アツディエートウロ・アーレアだ」

わあ! -と

灯里とアリスが、アトラと杏に抱きつかんばかりに迫ってゆく。

四人とも、とびきり輝いている。

アトラと杏が、まるでもう、プリマになったような騒ぎ方だ。

そんな、はしゃぐウンディーネ達を見ながら、蒼羽はふと思った。

もし、この場に彼女がいたら、どう思うだろう。

「この子達の事を、どう思ってくれらるう。」

蒼羽にはしかし、確信があった。

きつと…

彼女なら、喜んでくれる。

笑顔を見せてくれる。

きつと…

「きつと。一緒に祝ってくれるんだらうな……」

「はい。もちろんです」

「ざあああああつ。」

サンマルコ広場に、風が舞い踊る。

つられたように、広場の白い鳩達がいつせいに飛び立った。

「そんな、まさか…」

蒼羽の目が、アレサが連れてきた女性にそそがれる。

「お前」

「はい。お久しぶりです。蒼羽さん」

彼女は泣きながら、にっこりと微笑み、蒼羽を見返した。

その日。

サンマルコ広場にいた人々は、異様な光景を見ることになる。

ひとりのウンディーネが。  
それも、オレンジ・ぷらねっとのプリマが、ひとりの女性と抱き  
合いながら、大声で泣いているのだ。

「彼女、ウンディーネを辞めたあと、マン・ホームの旅行会社に就  
職してね。ゴンドラ・クルーズのツアーコンダクターになったの。  
少しでも、ゴンドラにかかわる仕事をしたいってね。  
そしてこれが、彼女の初めての企画。  
これから彼女は、こういう形で、ウチと関わっていくわ……お  
帰りなさい」

アレサが誰に言うともなく、ひとりごちた。

再び。

サンマルコ広場にいた人々は、異様な光景を見ることになる。  
ひとりの女性を中心に、何人ものウンディーネが固まって歓声を  
上げているのだ。

真ん中の二人は大泣きし、まわりのウンディーネ達は笑顔で歓声  
を上げている。

なかでも、青い制服のウンディーネは、泣きながら笑うという、  
器用な表情を浮かべながら

素敵だの、奇跡だのと叫んでいる。

そして、その足元では、白くて太い火星猫が、斑な子猫に腹を噛  
まれて悶絶している。

異様な光景。

喧騒と奇声。

だがそれは、道行く人々に、なぜか暖かいものを感じさせる、不  
思議な光景だった。

大鐘楼の鐘が、何かを祝福するかのように、やさしげな音をたてて鳴り響いた。

穏やかな日差しがふりそそぎ、暖かな風が人々の心を揺らしていき、そんな春の日の出来事だった。

- addie

t r o a l e a (後方危険) - L a f i n e



addetro a1lea (後書き)

このお話しに出てくる私のオリキャラ。

蒼羽・R・モチツキの最適なイラストを、同じARIAのSS小説  
書きの、流離人さまが描いてくれました。

蒼羽教官立ち絵

<http://2974.mitemin.net/i22221/>

蒼羽教官プロフィール

<http://2974.mitemin.net/i22223/>

おまけのようなか

<http://2974.mitemin.net/i22224/>

みな様、是非、ご覧ください。

ちなみに私は「おまけのようなか」も、お気に入りです(笑)

**G r a n m o s t r o (前書き)**

杏ファンの方、すみません(汗)

# Gran Mostro

## 第三話 『Gran Mostro』

その日。

ネオ・ヴェネツィアの街は炎に包まれていました。

私も、その炎の中を逃げ回っていました。

街はすでに、瓦礫の山と化し、多くの人々が悲鳴をあげて逃げ回っています。

「杏、こつちよ！」

誰かが私の右手を強くひっぱりました。

右手を見ます。

手袋のない、私の右手。

「あれ？」

なぜ、手袋をしていないの？

「早く！」

けれど、そんな疑問も、その切迫した声にさえぎられました。

私の名前は夢野杏。

この水の惑星アクアの都市、ネオ・ヴェネツィアでゴンドラを使った観光案内をする水先案内人・ウンディーネです。

誰かが、右手をつかんでいます。

その手から視線を上げていきます。  
肘が見え、肩が見え。それにつながる顔が現れます。

「アトラちゃん」

そこには、アトラちゃんの、こわばった顔がありました。

アトラちゃん。

アトラ・モンテウエルディちゃん - は、私と同じウンディーネです。

階級は、シングル。

「トラゲット」と呼ばれる、街の中央を流れる大運河を横切る渡しカナル・グランデ  
舟の仕事を、よく一緒にやっています。

私の大好きで、とても大切な親友。

ちなみに -

「シングル」というのは、このネオ・ヴェネチアの街で観光案内を務める、水先案内人・ウンディーネの階級のひとつで、いわゆる「半人前」のことです。

「見習い」のペアよりは上だけど、一人前の「プリマ」に比べてまだ、一人では、お客様を乗せての観光はできない。

そんな中途半端な立ち位置。

だけど -

トラゲットは、そんなシングルにしかできないお仕事。  
私は、実はそれに、少なからず誇りを持っていました。

・走る走る走る。

私は、アトラちゃんに引つ張られるようにして、夜の街を、炎に包まれる、ネオ・ヴェネツィアの街を駆け抜けます。

「待つて待つて。アトラちゃん」

悲鳴を上げる私に、アトラちゃんは、ようやく止まってくれました。

・はあ、はあ、はあ。

心臓が飛び出しそうです。

「早く、杏。早くしないと間に合わない」

「ちよ、ちよっと待つてよ、アトラちゃん」

私は、一生懸命、息を整えながら言いました。

「いったい……いったい何が起きているの？ いったいどうして、街がこんな事に？」

「杏……あなた何も知らないの？」

「え？」

アトラちゃんは何も言わず、ただそつとその右手を……手袋をはめた右手を上げて、一点を指し示します。

「う、うそ……」

私はおもわず息を飲み、両手で口を覆いながら、絶句してしまいました。

そこでは -

巨大な赤い怪獣が、街を破壊している！

号っ。

-と、それは目から怪光線を発射しました。その光を浴びた建物が、爆発的に炎上します。あれは、ARIA・カンパニーだ。

轟っ。

-と、それは巨大な足で、建物をなぎ倒します。ああ。あれは姫屋だ。

豪っ。

-と、強烈な突風が、堅牢な建物を、まるでおもちゃのように吹き飛ばしました。

うわあ。あれはオレンジ・ぷらねっとです。

大鐘楼が音を立てて、倒壊します。

サンマルコ広場が瓦礫に埋もれます。

マルコポーロの生家が、踏み潰されます。

ため息橋が強風で、ばらばらに粉碎されます。

今や、ネオ・ヴェネツィアの街は、見るも無残に破壊つくされていきました。

「なんなの……」

私は震える声で、アトラちゃんに訊ねました。

「ねえ、アトラちゃん。あれは、いったいなんなの？」

「まだ分からないの？」

アトラちゃんのその声は醒めきっていました。

「あれは……あの怪獣の正体は……」

その時、アトラちゃんのその声に反応したかのように、その怪獣が私達に振り向きました。

あああ！

それは！

その怪獣の正体は……！！

「大怪獣、アリムックスよ！」

……

……

そこには巨大な、ムックんのぬいぐるみを着た、でっかいアリスちゃんがいきました。

頭の扇風機がまわってるし……

「え………？」

「いや、だから、大怪獣アリムックス」

「アリムックス………」

「うん」

「いや、でも………」

「なに？」

「あれ、アリスちゃんだよね」

「ううん。大怪獣アリムツクス」

「アリムツクス……」

「そっ」

「でも。顔アリスちゃんだし……体、ムツくんのぬいぐるみだし……」

「杏。今は、そんな事言ってる場合じゃないわ!」

「いや、でも、それなら、いつ言えば……」

「いい?、杏っ」

「びしいっ!」

と、アトラちゃんは、人差し指でアリスちゃ……アリムツクスを指差しながら言い放ちます。

「今、この街を。ネオ・ヴェネツィアを、あのアリムツクスの脅威から救えるのは、私達だけなの!」

「ええ? どういう……」

「さあ早く。オールを持って」

「いや、だからあ」

「急いで!」

結局、アトラちゃんは、私の話は何ひとつも聞いてくれませんでした。

しくしく……

いつの間にか私達は、トラゲットの船着場にいました。そして目の前には、トラゲット用のゴンドラが。

「お待たせしました。今すぐ出ます」



アトラちゃんが声をかけます。

「よろしく願います」

ゴンドラに乗っていた人影が返事をします。  
街をあぶる炎に照らされた、その人影は……

「灯里ちゃん？」

そこには、ARIA・カンパニーの水無灯里ちゃんがありました。

水無灯里ちゃんは、私と同じウンディーネ。

最近プリマに昇格して、ARIA・カンパニーというお店を、ひとりで切り盛りしています。

灯里ちゃんとは、彼女がまだシングルの時、一緒にトラゲットをした仲です。

「お久しぶりです。杏さん」

「あ、お久しぶり。灯里ちゃん。お元気？」

「はひ。私は元気だけには自信がありますから……」

「うん。私と一緒にだね」

「はひ。うれしいです」

「もう、灯里ちゃんつてばあ」

「えへへへ」

「うふふふ」

「ゴルウらあああ！」

うわ。アトラちゃんがキレたああ！

「のんびり挨拶なんかしてる場合かあ。ほら、杏、早くゴンドラを出して」

「え？」

「そうですね。ウンディーネさん。早く、ゴンドラを出してくださいまし」

のんびりと、微笑みが入った声が聞こえてきます。

「わあっ ア、アテナ先輩!?!」

いつの間にか、私の後ろにアテナ先輩が座っていました。

ニンジャですか、アナタは……

アテナ先輩は、やっぱりウンディーネで、同じオレンジ・ぷらねっとの先輩です。

通り名は「セイレーン・天上の謳声」

その通り名の通り、その歌声は圧倒的で、アテナ先輩の謳うところ、すべての人達、いえ動物達でさえも、じっと動きを止めたまま、その謳に耳を傾けると言われています。

ちなみに、通り名とは、手袋なしのプリマ・ウンディーネのみに与えられる、もうひとつの名前。 ふたつ名。

一人前の証。

特にアテナ先輩は、姫屋の晃さん。ARIA・カンパニーのアリシアさんと並んで「水の三大妖精」と呼ばれるほどの、実力を誇っていました。

「あ……う。アテナ先輩。なぜここに?」

「何を言ってるの杏。アリムツクスを撃退できるのは、アテナ先輩だけなのよ」

「え、そ、そうなの?」

「そうですね。杏さん。早く『希望の丘』に行きましょう」

「希望の丘に?」

「そう。そこが決戦の場よ」

「決戦って……」

「さあ、早く。ゴンドラを漕いで」

「う、うん」

その時私は、重要な事に気がつきました。

「アトラちゃん、ダメっ」

「えっ、なにがダメなの」

「私、シングルだから、人を乗せてゴンドラは漕げない。灯里ちゃんか、アテナ先輩に……」

「杏さん、何言ってるんですか？ 杏さんは立派なプリマさんじゃないですか。ほら、その右手……」

「ええ？」

灯里ちゃんに言葉に、私は自分の右手を見ました。

手袋がない。

シングルの象徴。右手の手袋が。

そういえば、さっきも……

…うぞっ。

「ででで、でも」

でも私、いつの間に。

「わ、私より灯里ちゃんの方が」

「え、杏さん。私、漕げませんよ。ほら」

そう言って、差し出された灯里ちゃんの右手には、手袋が。

「なんですとおおおお？」

「私もアトラさんも、お客様を乗せてのゴンドラは、まだ漕げません。杏さんだけなんです」

「あ、アテナ先輩は……」

「アテナさんは、この後。アリムツクスとの対決のために、体力を温存しないと……」

杏さん。お願いします」

あ、頭がくらくらする。

いったい、なにがどうなってるの？

私がプリマ？

いつの間に？

……

……えへっ。

うれしい。

「杏。さあ早く」

「杏さん。お願いします」

「杏ちゃん。よろしくね」

よし！

私は大きく息を吸い込み叫びました。

「分かりました。夢野杏。行きまーす！」

ぐっ - と、オールを握る手に力が込めます。

『でつかああああい。でつかああああい!』

大怪獣アリムツクスが、雄叫びを上げながら私達を追ってきます。

「なぜ、追ってくるの?」

私は必死でゴンドラを漕ぎながら、悲鳴のように叫んでしまいました。

「だって、このゴンドラ。トラゲット専用のゴンドラだから」

灯里ちゃんが、さも分かった事のように言います。

「えええ?」

「アリムツクスは、トラゲットをするのが夢なんです!」

嘘ん……

つか、そんな力強く言われても……そんなハズないじゃない。

『トラゲットおお。私にもおお。トラゲットやらせろおおっ』

……

はい。ごめんなさい。

私はオールを握る手に、いつそう力を込めました。

「希望の丘」は、もうすぐです。

「着きました」

私が息も絶え絶えに、そう告げると、みんなゴンドラから一斉に飛び降ります。

「さあ、行くわよ」

そしてアトラちゃんの、その掛け声と共に丘の上へと、いっせいに走り出します。

「だから待って、待って、待ってってば」

私もあわてて、その後を追いかけます。

丘の上では、巨大な風車がいくつも回っていました。

「アリムツクスは？」

「あそこです！」

灯里ちゃんの指差す方を見れば、今まさにアリムツクスが、水上エレベーターを踏み潰すところでした。

「最後です、いよいよ最後です。みなさん、さようなら。さようならあゝああああ」

水上エレベーターの管理人さんが、そう言いながら吹き飛ばされます。

……

大丈夫。水に落ちた。

あの分なら、怪我はありません。 たぶん。

「アテナさん。お願いします」

灯里ちゃんにうながされて、アテナ先輩が一步前に踏み出します。

「アリムツクスちゃん。行くわよ」

そう言うと、アテナ先輩は、ゆっくりと歌い始めました。

曲は「パルカローネ」です。

『でつかいいい……。でつかいいいい？』

アリムツクスが戸惑ったように首をかしげました。

「いいぞ。アリムツクスが、アテナ先輩の歌に気がついた」

アトラちゃんの声が弾みます。

アテナ先輩の謳声は、夜の闇の中、轟々と燃えさかるネオ・ヴェネツィアの街の炎に乗り

低く、高く、しかし力強く、木霊していきます。

『でつかいいいい……』

アリムツクスが動きを止めました。

まるで、アテナ先輩の歌声を聞き入っているかのように。

そしていつしか、アテナ先輩の歌は「ルーミス・エテルネ」に……

すると、どうでしょう。

アリムツクスも、アテナ先輩の謳声に合わせて、歌いだしたではありませんか！

アリムツクスと「セイレーン・天上の謳声」との見事な競演。

それはまるで、無垢な幸せの歌のよう……

やがて二人……いえ、一人と一匹の謳声は、夜のしじまに、やさしく消えていきます。

・ドスンッ。

と、地響きをたてながら、ゆっくりとアリムツクスが、こちらにやってくる。

「危ない。みんなさがって！」

「大丈夫よ……」

私の警告の声に、でもアテナ先輩は、ゆっくりと答えました。

「もう、アリムツクスちゃんは、暴れたりしないわ」

「いや、でも」

「大丈夫。アリムツクスちゃん。とつてもいい子だから」

「いや、確かにアリスちゃんは、いい子ですけど……」

「なら大丈夫よ」

うーん、その根拠は、どこにあるのですか？ アテナさん。

アリムツクスがゆっくりと近寄って来ます。

大きい。

希望の丘を回る、どの風車よりも、大きいです。

ドスンッ。

やがて、アリムツクスが、私達の目の前に来て歩みを止めました。

『でっかいいいい』

「アリムツクスちゃん。ごきげんよう」

『でっかいいいい』

「アリムツクスちゃん。素敵な謳声だったわ。もう大丈夫ね」

アテナ先輩が、やさしく語りかけます。



『でつかいいい……』

「さあ、もう何も心配いらないわ。お家に帰りましょう」

そして、アテナ先輩は再び歌い出します。

この曲は -

「コツコロ」

アリムツクスは、しばらくアテナ先輩の歌に目を閉じ、静かに聞き入っていました。

『でつかいいい……』

やがてアリムツクスは、ゆっくりと目を開くと、きびすを返します。そしてそのまま、沖の方へ。

「見て。朝日が……」

灯里ちゃんが、嬉しそうに言いました。

遙かな水平線の彼方。

夜の闇がうつすらと明けていきます。

アリムツクスは、アテナ先輩の歌声を背に、ゆっくりと、その朝日めざして去って行きます。

「あのアリムツクスが、最後の一匹だとは思えない。私達がおろかな行為をやめない限り、アリムツクスは何度でも現れる……」  
アトラちゃんが、小さくつぶやきました。

私は、朝日に照らされた、ネオ・ヴェネツィアの街を見下ろしまし

た。

破壊され、炎に焼かれた、ネオ・ヴェネツィアの街を。

そこは、まるで廃墟のようです。

「だけど」

「大丈夫」

「はひ」

「ええ」

私は……

私達は心に誓いました。

この街を、きつと元通りに見せると。

再び、人々の笑顔があふれる街に見せると。

再び、おろかな行為で、アリムツクスが現れないようにするのだと。

私達の決意を祝福するように、アテナ先輩の歌声が、やさしく、強く、希望の丘を響き渡っていきました。

「……って夢を見たの」

「なんじゃそりゃあああああああああああああああああああああああああああああ  
あああああああ！」

とたんに、みんなからの総ツッコミが入りました。

- えええええ？

「なんで、杏だけがプリマなの!」  
アトラちゃんが、両手で私のほっぺを引っ張りながら叫びます。

- い、痛ひゃい。

「どうして私が怪獣なんですか？　なんでなんですか？　それもアリムツクスだなんて。でっかい納得できません!」  
アリスちゃんが詰め寄ってきます。

「ウチの出番がないじゃないかあ!」  
姫屋のウンディーネで、お友達の、あゆみちゃんも机を叩きながら抗議します。

「でも、アリムツクスが最後は朝日の中に、アテナさんの謳声で消えていくななんて素敵ですねえ」  
灯里ちゃんが、楽しそうに言ってくれました。　　ありがとう。

「うん。確かにアリスちゃんと一緒に謳うのは、気持ちよさそうね」  
アテナ先輩も、お茶を片手に言ってくれます。

私は、サンマルコ広場にある、カフェ・フロリアンで、お茶を飲みながら、昨日見た夢の事を話していたのです。

「おい、杏。いくらお前の苗字が夢野だからってなあ、そんなバカな夢ばっか見てるとなあ……」

「アンタって子は。アンタって子は。アンタって子わあ!　……ぐねぐねぐね」

「痛ひゃい。痛ひひよ。アトラちゃん」

「わ、私だって、ホントはトラゲット、でっかいしてみたかったんです。でも、でも、私、シングルは……」

「そうねえ。アリスちゃんは、飛び級昇格だから、シングルの経験はないのよねえ……」

あっ！「」

「わあっ。アテナさんが、お茶をこぼしたあ！」

「ああ。あふありちゃん。おひつひて……」

「杏は、そんな事言ってる場合があっ」

「ふへへへええええ」

「まああああっ」

「ぶいにゅっつっつっつっつ」

「まあ社長。アリア社長の、もちもちぽんぽんは、おやつじゃないですよ」

「はひい。アリア社長。大丈夫ですかあ」

「アンタって子は。アンタって子は。アンタって子わああっ」

「いひゃい、いひゃいよ。アヒョラひゃん」

「あはははははっ」

「あうっつ。またシロップ入れすぎちゃったあ」

いつまで続く楽しげな喧騒。

季節はもう、夏。

さてさて。

今夜は、どんな夢と出会えるのかな？

きつと素敵な、やわっこい夢でありますように……

- 終 -

.....

.....

ねえ、杏。

なに？ アトラちゃん。

あの……きれいに終わらせようとしてるのは、分かるんだけどサ。

うん。

これって『続く』とかあるの？

えーと、たとえば、こんな感じ？

『特報！』

SE…どぎざしゃーん

- 現れたな。

揺らめく黒い影

再び、訪れる恐怖。

- あらあら。アクア・アルタなら防げるけど、アリムツクスわねえ。

どっかああああん！

- 私は、確かに見ましたっ。

でっかいいい。でっかいいい。

帰ってきた大怪獣、アリムツクス。

- 私の歌は、もう聞こえないみたい。  
はひい！？

もはや、止める手立てはないのか！

- なんだって？

そして新たなる恐怖が！

ぎゃああああ。ぎゃあああ！  
新怪獣現る！

- この古代語の解釈によると、一方が赤い怪獣・アリムツクス。そ  
してもう一方が……

もう、一方が？

緑の怪獣、古の幻獣・がちゃぺん。

がちゃ…ぺん……

ぎゃあああ。恥ずかしいセリフう、禁止、禁止い！

暴虐の限りをつくし、暴れまわる二大怪獣。

壮絶なる死闘つ。  
怪獣vs怪獣っつ。

にゃあくん。

ぷいにゅうつうつうつ。

まあああああ。

炎に包まれる、帝都ネオ・ヴェネツィア。

アクアは、このまま滅びてしまうのか!?

- 「スーパー浮き島エックス」は、どうした!?

- ただ今、発進しました!

全アクアの希望をこめて、今、出撃する超ド級・帝都防衛機動要塞・  
スーパー浮き島エックス!

- ふははは。こいつが、お前らと同じ性能だと思ったら、大間違い  
だぞお!

スーパー・ハイテク兵器対二大怪獣。

壮絶なる攻防戦!

- はひっ? もう一匹ですか?

だが、さらなる恐怖が、ネオ・ヴェネツィアに迫る!

- ええ。古文書によれば、もう一匹……

突如、飛来した隕石から現れる、巨大怪獣。

・古代金星文明を滅ぼしたと言われている、宇宙怪獣です。

・そいつは、なんなのだ？

・三つの首を持ち、金色に輝く、最悪、最強の宇宙怪獣。その名も

……

すわっ！ すわっ！ すわあああっ！

宇宙大怪獣・キングあきらドラ！！

でっかいいい！ でっかいいい！

ぎゃあああス！ 禁止！禁止い！

すわ！ すわ！ すわあああ！

ステキング弾発射！ うふふミラー展開！ ぷいにゅーキャノン・

セツトオン！！

今、繰り広げられる、四つ巴の大決戦。

夢野・杏が贈る、この夏、最大の話題作。

「三大怪獣。アクア最大の決戦！ ネオ・ヴェネツィアSOS！！」  
乞う、ご期待！！

今なら、三大怪獣のマスコット・キーホルダーがもらえるよ！



「あらあら、じぶん（マリシマキ）のアップ（

こんな感じ？

杏：「お前、もう夢見んな……  
ええ〜!？」

- G r a n m o s t r o (大怪獣) - L a f i n e

**G r a n m o s t r o (後書き)**

ええと……

私は日本特撮・至上主義者です(鹿馬)

O c c h i a l i      r a g a z z a (前書き)

アトラ    ファンの方。      すいません。

# O c c h i a l i      r a g a z z a

## 第四話『O c c h i a l i      r a g a z z a』

その日・

オレンジ・ぷらねっとのウンディーネ、アトラ・モンテウエルディは二週間ぶりの完全休養日だった。

ウンディーネとは、

ここ水の惑星アクアの都市、ネオ・ヴェネツィアで、ゴンドラを使った観光の水先案内人の事だ。

そして、オレンジ・ぷらねっとは、その中でも最大級の規模と売り上げを誇る、水先案内店だ。

・とはいえ

アトラは、カップを手に、小さくため息をついた。

今の自分には、そんな事はなんの関係もない。

なにしろ、二週間ぶりのお休みなのだから。  
でも……

そのせつかくの休日も、若干、持て余し気味なのもまた、確かな事だった。

午前中は掃除と洗濯で終わり、お昼くらいは寮以外の食事でも。

・と、出てきたものの、その昼食も終われば（もちろん友達に紹介

された、その海鮮鉄板焼きのお店は素晴らしいものだったが、  
一人ぼんやりとお茶をする以外、なにもする事がなくなっていた。

・意外と、つまらない過ごし方しかしてないのよねえ。  
再び、アトラは、小さくため息をついた。

・そういえば、ため息つてば「サイ」って言うのよねえ。

サイ……

お前は突進するしか能のない、サイだ！　つて、それはイノシシ  
だああ！

……  
……

・はあああああ。

今度は盛大に、ため息をつく。

ホント。こうなったら大人しく寮に帰って、読みかけの本でも読も  
うかな。

……  
……

ホント。

アトラはふりそそぐ日差しを仰ぎ見た。

・こないいお天気なのに、もったいない……

太陽に手をかざしながら、アトラはやっぱり、ため息をついた。  
右手に手袋。

陽の光が、アトラのかける眼鏡を白く反射する。

片手袋のシングル（半人前）と、手袋なしのプリマ（一人前）を隔てる、ほんの小さな布のかたまり。

でも、それがあるのとないのとは、大きく違う。

気持ちも、気分も、あるいはモノの考え方さえも……

まぶしい……

眼鏡越しに見る手袋は、太陽の光をあびて、とてもまぶしく熱かった。

「あれ？ アトラさん？」

人懐っこそうな声がした。

ん？

その声の方を見やれば……

「灯里ちゃん？」

そこには、満面の笑みを浮かべた水無灯里が、白いまん丸な猫と一緒に立っていた。

水無灯里は他の水先案内店 ARIA・カンパニーのウンディーネだ。

つい最近、一人前のプリマに昇進し、「アクアマリン・遙かなる蒼の通り名をもらった、ウンディーネ。

アトラとは、まだ彼女がシングルの時に、カナル・グランデ大運河でトラゲットと呼ばれる

渡し舟の仕事を、一緒にしたことがあった。

「ぷいにゆっ」

白い丸い猫が挨拶する。

「こんにちは、灯里ちゃん。お久しぶり。えと……こちらは……」

「はひ、お久しぶりです、アトラさん。こちらは、ARIA・カンパニーのARIA社長です」

「ああ。噂の……ARIA社長はじめまして。ウチの、まあ社長が、いつもお世話になってます」

「ぷ・ぷ・ぷぷいにゆっ」

アトラの丁寧な挨拶に、ARIA社長はなぜか、脅えた声で返事をした。

「アトラさん。今日はトラゲットお休みなんですか？」

「うん。と、ゆうより、今日は完全オフ日なの」

「完全オフ日？」

「うん。二週間ぶりのね」

「ほへえ。やっぱり、オレンジ・ぷらねっともなれば、お休みの日も限られてるんですねえ」

「え？」

「だって、我がARIA・カンパニーは、いつも時間がいっぱいありますから」

「もう、灯里ちゃんってば」

えへへ。と、笑う灯里につられて、アトラも苦笑した。

確かに、先代のプリマ「水の三大妖精」と誉れも高い、アリシア・フローレンスが引退してしまった事は

ARIA・カンパニーにおいて、大変な事だったろう。

いくら水無灯里が優れたウンディーネでも、そのアリシアと並べられるのは酷というものだ。

そして、客は、アリシアの名前に惹かれてやってくる。

そしてそれは、ARIA・カンパニーの業績低下を意味する。

・辛くないはずはない。  
と、アトラは思う。

けどー

けれど、この子は、水無灯里ちゃんは、そんな不安や焦りなど、おくびにも出さない。  
いつも笑顔で、毎日を楽しんでいる。

かなわないな……

そう思う。

自分より年下の彼女なのに、憧れに似た感情が、アトラにはあった。

「実は、私もそうなのよね」

「はひ？ どういうことですか？」

「せっかくのお休みなんだけど、逆に時間を持て余しちゃって、少し困ってるところ」

「ほへえ」

「きつと器用貧乏なのね。ふふ」

「あの……アトラさん」

「うん？」

急に灯里が、思いつめたような表情になった。

「あの、もしよろしければ、この後、ちょっと付き合ってもらえませんか？」

「ん？ 別にかまわないけど……どうかしたの」

「あの……実は、眼鏡を買いたいんです」

「眼鏡を？」

「はひ」



「灯里ちゃん目が悪いの？ だったら今なら、簡単な治療で早く、治るわよ」

「あ、そうじゃなくて……」

灯里は、なぜか恥ずかしそうに話だした。

「あの、実は、アリシアさんのなんです」

「アリシアさんの？」

「はひ。実は私、アリシアさんのゴンドラ協会就任の、お祝いを、まだしてなくて……」

それで、眼鏡をプレゼントしたいなって思って……」

「眼鏡を？」

「はひ。どうせなら使ってもらえる物がいいかって。それに使ってもらえなくても」

眼鏡なら置いておくだけでも、いいかって……」

アトラは自分のコレクションを思い出した。

初めて自分で……ウンディーネとしてのお給料を、コツコツ貯めて買った、エンジ色のフレームの眼鏡。

あの時の嬉しさ。よろこび。

誇らしさ。

それ以来、眼鏡のコレクションは、すでに数10本に達している。

なるほど……あ、でも

「でも、眼鏡は『度』とかあるわよ。大丈夫なの」

アトラはあえて聞いてみた。

「はひ。それは、お店にお願いして、後からちゃんと調整してもらえるそうです」

「うん。そうなの。それなら……」

と、アトラが答えようとしたとき。

「ビッグもみあげ落としいいいいいい！」

「はひい！」

「ぶいにゆうう！」

突然、一人の男が、灯里の髪の毛を後ろから、ひっぱった。アリア社長が驚いて、ひっくり返る。

「なにするんです」

アトラはとっさに灯里をかばうと、その男を突き飛ばした。

「いててて。な、なにしやがる！」

男は尻餅をついたまま叫んだ。

「それはこっちのセリフよ。あなたこそ、この子に何するのっ」

「あん？ もみ子だからいいんだ」

「なにそれ。答えになってないわ」

「あわわ……アトラさん。いいんです。いいんです」

「いい？ なにが？」

アリア社長が、男の背中をよじ登っていく。

「誰、この人？」

「こちらはサラマンダーの暁さんです」

「サラマンダー？」

「そうだ。俺様は、このアクアの守り神。燃えるサラマンダーの暁様だ！」

サラマンダー・火炎之番人とは、このアクアの空に設置された、浮き島という所で

気象制御の仕事に専門にする人達の事だ。

・確かに大切な、お仕事だけど、守り神とまでは……

アトラは、暁を見ながら思う。

「当の暁は、再び灯里の髪をひっぱりながら、やたらとなれなれしく話しかけていた。」

ちなみに「もみ子」とは、その特徴的な髪型から、暁が勝手につけた、灯里のあだ名らしい。

ん？ もしかして……

「あの。もしかして、灯里ちゃんの恋人さん？」

「はひっ!？」

「ば、ばかな事いうでないっ」

アトラのセリフに、二人は瞬時に反応した。

「お、俺様は、アリシアさん一筋で……」

「え？」

「そ、そうですよ。アトラさん。暁さんは、アリシアさんラブの方なんです」

「ええ？ でも、アリシアさんは、ご結婚されたはずでは……」

「うわあああん。アリシアさああん。俺は、俺は認めんぞおおお  
」!

「あわわ。暁さん、落ち着いて」

・なんだ

アトラは、冷たく言い放った。

「なんだ。ただの、あきらめの悪い男なんだ」

「なんだとお、このメガネっ子！ がふっう」

暁がまた、ひっくり返る。

瞬時にくりだされた、アトラの右ストレートが見事にきまっていた。

「あん？ 誰がメガネっ子だった？」

アトラが、暁を睨みつける。

「ぐおおおおっ」

「あわわわ、暁さん。落ち着いて、落ち着いて」

「い、いや、もみ子よ。い、今、落ち着くのは彼女のほうだぞ…」

…

暁は、悶絶しながら抗議した。

「で、もみ子は、こんなところで何してるんだ」

ようやく立ち直った暁が、アリア社長を頭に乗せながら、灯里に訊ねる。

「私は、アトラさんに相談をしていたところなんです。暁さんこそ、どうしたんですか」

「俺様はだなあ。ARIA・カンパニーをのぞいたならなあ。誰もいなくてだなあ。しょうがないから、うろつろつとだなあ……」

「灯里ちゃんを探してた？」

「ば、ば、ばか言っな。断じて違う。断じて違うぞお！」

アトラの問いかけに、暁が顔を真っ赤にして叫ぶ。

「ははあん。……そういう事か。」

「なんだ。」

「わかりやすい奴。」

「きつと分からないのは、灯里ちゃんくらいか……」

「じゃあ、もう会えたから、いいでしょ？　じゃあ、灯里ちゃん行きましよう」

「はひ？　アトラさん？」

「い、行くなってどこへだ」

灯里の手を引つ張って、その場を離れようとするアトラに、暁があわてて問いただす。

「私達はこれから、アリシアさんへの、プレゼント用眼鏡を見に行くのよ」

「なにい！　アリシアさんへのプレゼントだとお。……俺様も行く」

「はひ？」

「かかったっ

にやりっ。

アトラは、二人に見えないように微笑んだ。

「アリシアさんのプレゼントなら、俺様もいく！」

「はひい？」

「たとえ、ご結婚されたとしても、俺様のアリシアさんへの愛は、永久なのだ！」

「ああ。ホント。暁さんは、アリシアさんの事が、大好きなんです  
ねえ」

「いや、灯里ちゃん。それってストーカーって言って……」

「はへ？」

「違うっつ。断じて違うぞおおー！」

「はへえ？」

叫ぶ暁を放置して、アトラは、再び、灯里の手を引つ張った。

「さあ、さあ。ほつといて行きしょう。灯里ちゃん」

「やっぱり灯里ちゃんってば、天然なのねえ……  
ホント、見えてないんだから。」

アトラはまた、小さくため息をついた。

「うおおおつ。待て。俺を置いていくなあ!」

あわててついてくる暁。

「ぶいにゆ?」

アリア社長が、暁の頭の上で、怪訝そうな声をあげた。

「こんなのどう。灯里ちゃん」

「あああ。どれもこれも素敵ですう」

ここは、ネオ・ヴェネツィアいちの品揃えをほこる眼鏡店。  
灯里はアトラと一緒に、いろいろな眼鏡を見て回っていた。

「アトラさん。これ見てください」

「あら、いいわね」

「おい、これなんかどうだ?」

暁がたずねてくる。

「そんなのが、アリシアさんに似合うと、ホントに思ってるんですか?」

「な、なにに！ よし、違うのを見てくる」

「あ、アトラさん。これなんかどうですか？」

「あ、かわいい。かわいい」

「おい、メガネっ子……いや、メガネさん。これなんかどうだ……  
どうですか？」

「あなた、センスないわね」

「うがああああ！ もう一回見てくる」

「いろんな眼鏡があるんですね」

「私のように、いくつも持つ人もいるからね」

「ほええ。そうなんですか……」

「おい。これならどうだ」

「ふうん（冷笑）」

「なんだ。その態度はあ！ くっそお！ もう一回！」

「ねえ。灯里ちゃん。あなたも眼鏡してみない？」

・ところで、っと、アトラは灯里に言った。

「ほえ、私もですか？ でも私、目はいいんですよ？」

「うん。ちゃんとした眼鏡じゃなくて、ファッションとしてどう？」

「ファッションとして？」

「うん。そうすれば、見えなかったモノが見えてくるかもよ」

「は、はひ？」

「おい、これならどうだ」

「却下」

「ぐわあああ。もう一度だああ」

「あの、アトラさんの眼鏡って『度』が入ってるんですか」

「ええ……ちょっとかけてみる？」

「は、はひ。はう！」

よろける灯里を、タイミングよくやってきた暁が抱きとめた。

「うお。危ないぞ、もみ子よ」

「あ、ありがとうございます」

「そのまま、動かない」

「はひい？」

アトラは、わざとゆっくりと二人に近づくと、灯里から眼鏡をはずした。

「大丈夫？ ごめんなさいね」

「あ、いえ。大丈夫です」

「やっぱり『度』入りは無理ね。ちょっと、うらやましいかな」

「はへえ？」

「私は子供の頃から眼鏡をかけてるから……もう顔の一部みたいなモノなの」

「はひ」

「でも、ときどき眼鏡がなければって思う時もあるのよ」

「はひ……でも」

「ん？」

「さっきアトラさんも言われたみたいに、眼鏡をかける事で見えるモノもあるんだなって……」

「え？」

「さっき一瞬だけど、すつごく世界がはつきりと見えなりました」

まるで、世界が変わっちゃったみたいに。

これってスゴい事ですね。なんか魔法にかかったみたいですよ」



えへへ。

屈託のない微笑みを浮かべる灯里。

ああ、やっぱりこの子は……

つられて笑みを浮かべながら、アトラは思った。

素直に。

何事にも心を開いて、何事にも優しく、そのまま受け入れる。純白な心で。

その見るもの、聞くもの、触れるもの。

その全てに感動し、そして、すべてを素敵へと変えていく。

何もかも

初めて出会ったもののように。

何もかも

初めて触れるもののように。

だからこそ、この子は。

水無灯里は。

「そう……そうね。眼鏡の魔法かあ。私も変わらなきゃ」

「はひ？ アトラさん？」

「灯里ちゃん！」

「は、はひ」

「あなたも、やっぱり眼鏡かけてみれば？」

「はへ？」

「お、おい。もみ子よ……」

暁が困ったような声を出す。

「も、もう、放してもいいか・・・」

ずっと灯里は、暁に抱きしめられていたのだ。

もちろんそれは、アトラが企んだ事ではあったのだが……

「は、はひつ。す、すいません」

あわてて暁の手の中から離れる灯里。

二人とも真っ赤になって、あらぬ方向を見ている。

んん……いい感じね。

アトラは、暁を隅の方に引っ張っていくと、灯里に聞かれないように小さく囁いた。

「ほら。サラマNDERさん。灯里ちゃんに眼鏡、プレゼントしてあげなさい」

「え、な、なぜにそんな事を言うのだ。お、俺様がなぜに、もみ子にげふう！」

わき腹に一発。

「ぐだぐだ言ってない。あなたホントは、プレゼントしてあげたいんでしょ？」

「いや、そんなことはでふうう！」  
今度は足を踏みつける。

「素直になりなさいな。ほら」

「わ、分かった。分かったから殴るのは、止める。止めてください」

「分かればいいのよ」

「しくしく……」

「あの、大丈夫ですか？」

何事ですか？ - という顔で、灯里が聞いてくる。

「大丈夫。大丈夫。それよか灯里ちゃん」

アトラは、暁を灯里の方に突き出しながら言った。

「サラマンダーさんが、灯里ちゃんに眼鏡をプレゼントしてくれるって」

「え。そ、そうなんですか？」

「いや、ちがっあががっ。そ、そうなんです……」  
背中をおもいつきり、つねりあげる。

「あ、でも悪いし……」

「いいの、いいの。灯里ちゃん。人の好意は素直に受けるものなのよ。ね。サラマンダーさん？」

「は、はい。その通りです……」  
すでに戦意喪失の暁が「お前は兄貴か……」と涙目でつぶやく。

「ぶいぶいにゆっ」

そんな暁の頭を、アリア社長が優しく、さすさすしていた。

「うわあっ。アトラさん。暁さん。見てください。街が燃えていますよおー」

店の外へ出ると、ネオ・ヴェネツィアが燃えていた。  
燃えるような、オレンジ色の夕焼けが、アクアを支配していた。

「アトラさん。眼鏡ってほんとに不思議です」

「え？」

「だって、見えないものが見えてくるって、ホントなんですから」  
「……………」

灯里は、暁にプレゼントされた、伊達眼鏡をかけていた。

「普段は、ぜんぜん気がつかなかった、こんな素敵なものに気づけるんですから……………」

燃える自然って、なんて素晴らしいんだろう……………きれい」

灯里の顔が、オレンジに染まる。

灯里の眼鏡に、夕陽が映え、きらきらと輝やく。

灯里の笑顔が、全てを素敵に変えていく。

「ああ、きれいだな……………」

その笑顔を見ながら、暁が小さくつぶやいた。

そして、あわててかぶりを振りながら叫ぶ。

「も、もみ子よ。は、恥ずかしいセリフ禁止だ！」

「ええ〜え」

そんな、じゃれあう二人の横で、アトラも、じっと夕陽を見ていた。

アトラはそっと夕陽に自分の右腕を重ねてみる。

オレンジの夕陽。

オレンジの手袋。

すべてを包み込む、オレンジのひかり。

眼鏡越しに見える、その暖かなひかり。

私は何を考えていたんだろう。  
私は何を見ていたのだろう。

ほんの少しだけ……

眼鏡をかける。

眼鏡を変える。

ただ、それだけのことで、景色は変わる。

ただ、それだけのことで、世界は変わる。

ただ、それだけのことで、自分は変わる。

ただ、それだけのことで -

違う自分に変われる。

真っ白な、自分になれる。

初めての頃の自分にもどれる。

灯里ちゃんが気づかせてくれた

この思い。

この気持ち。

初めて、眼鏡を買ったときの喜び。嬉しさ。

そして、誇らしさ。

手袋なんて些細な事。

大切なのは、その手袋に込められた思い。

それに向き合う、自分の気持ち。

その素直な心。

始めに……最初にもどってみよう。  
そうすれば。  
そうすれば私も……

「ありがとう、灯里ちゃん」

「ほへ？」

「あなたは……あなた自身がきつと、素敵な魔法なのね」  
「ほへえ？」

「メガネっ子。恥ずかしいセリフ禁ぐばあっ！」

再び、アトラの『幻の右』が、暁を黙らせた。

「さあさあ、灯里ちゃん。晩ご飯食べにいきましょう。燃えるサラ  
マNDERさんが、おごってくれるって」

「う、ぐ……な、なに言うか。メガネっ子」

「大丈夫。私は途中で抜けて、ちゃんとふたりつきりにしてあげる  
から」

アトラが、嚙んで含むように、暁の耳元でささやく。

「な、なんじゃそりゃあ！」

「あなたもいい加減、学びなさい」

「な、ないい？」

「あなたの事は、アリア社長だって、認めてるんだから」

「へ？」

「にゅ？」

暁の頭にしがみついていた、アリア社長も返事をする。

「あなた気づいてた？ 灯里ちゃん以外で、アリア社長が甘えるの  
つてば、あなただけなのよ」

「……………」  
思わずアリア社長と顔を見合わせる暁。

アリア社長は、「ぷいにゆうっん」と笑いながら、片手をあげた。

「分かった？ あなたはもう、アリア社長に……………ARIA・カンパ  
ニーに認められてるのよ。しっかりしなさいっ」

「あ、あっ……………」

「あそこにいる灯里ちゃんは、あなたの知ってる灯里ちゃんじゃな  
い」

「へ？」

アトラの言葉に、突然、何を言い出すんだ？

…と、暁が首をかしげる。

「いい。あそこにいるのは、新しい灯里ちゃん。あなたにもらった  
眼鏡をかけた灯里ちゃん。あなたのまだ知らない、灯里ちゃん」  
「……………」

「今、あなたの目の前にいるのは、もみ子でもない、『遙るかなる  
蒼・アクアマリン』でもない、ただの、十六歳の女の子」

だから、あなたは、初めて出会った女の子として接すればいい」  
最初から。また、いちから始めればいい」

「う、うむ……………」

「とりあえず、ちゃんと名前でも呼んであげなさい」

「ええ!?!」

「照れてないで。ちゃんと『灯里』って呼んであげるの。分かった!?!」

「いや、しかし、もみ子は……」

「あん?」

「は、はい……」

「声が小さいっ」

「はい!?!」

アトラは暁から離れると、きよとん顔でこちらを見ている灯里に、にっこりと微笑みながら言った。

「さあ、行きましよう、灯里ちゃん」

「あ。あの、いいんですか? 暁さん」

「うっうっ……」

灯里が心配そうに、呻く暁の顔をのぞき込む。けっこう近い。

「だ、大丈夫だ。あ……」

「あ?」

「あ、あか……」

「あか?」

「いや。その……あか……あか……」

いけ! そこだっ。がんばれ! 突進だっ。サイ!  
アトラは心の中で叫ぶ。

「あか……いい」

「ああ!」

灯里は満面の笑顔で答えた。



「ホント。まつかですねえ」

「へ？」

「こんなにも夕焼けって、暖くて、真っ紅なんですわねえ。素敵んぐです」

「あ、ああ。あか、あ……紅いなあ……確かに真っ紅だあ。あっはっはっはっ……」

「ああ。眼鏡かけさせるのは、こいつの方が先だったのか……アトラは、今日、最後のため息をついた。」

「はい。暁さん」

なぜか涙目で頭をかかえる暁に、灯里が手を差し出す。

「うん？」

「立てますか？」

にっこりと、屈託のない笑顔。

灯里の微笑み。

差し出された、やわらかそうで、暖かな白い手。

「はい。暁さん」

「……」

暁の顔が紅いのは、夕陽のせいだけなのか。

暁は、ゆっくりと手を伸ばすと……

「ビッグダブルもみあげ落としいいいいいい！」

「はひひひひ」

「じすっっ！」

もう、たまらず。

アトラのかかと落しが、暁の後頭部に炸裂した。

「こんのお、ヘタレえええ！！」

「ぐおおおおおおおおおっ」

「あわわわ。暁さん。大丈夫ですか」

「ぶいぶいにゆう」

のたうち回る暁を、アリア社長がやっぱり、優しく、さすさすしていた。

紅い夕焼けが、まるで包み込むかのように、ネオ・ヴェネツィアを、どこまでもオレンジに染め上げる  
そんな黄昏どきのことだった。

「おはよう」

あくる日の朝。

いつものようにアトラは、トラゲット乗り場にやってきた。

「おはよう。アトラ。あれ、眼鏡変えた？」

違う水先案内店の同僚が、声をかけてくる。

「うん、ちょっと気分転換にね」

「気分転換？」

「ええ。見えるものが、見えるようにね」

「なんだいそりゃ……でも、よく似合ってるぜ」

彼女は、苦笑しながら、そう言ってくれた。

「さあ、お仕事、お仕事」

アトラは、走り始める。

そう。

これが始まり。

これからが始まり。

走り始める。

明日の自分のために。

未来の自分のために。

最初からまた、スタートをきるために。

アトラは走り始める。

エンジ色のフレームが、太陽の光をあびて、きらりと輝いた。

めがねっ子 ( - La fine  
- Occhiali ragazzina )



O c c h i a l i      r a g a z z a (後書き)

最初。別の投稿版でこの作品をUPした時にいただいたご感想。

アトラ黒い

アトラ怖い

アトラ好戦的

不幸のメールを送りました

剃刀の刃だけを送りたいので 住所を教えてください

今ならこの幸せを呼ぶ壺を あなただけに安価で！

…等々。心、温まるものばかりでした(泣)

みな様もどうか、生暖かい目で読んでいただければ、これに勝る幸

せはありません

よろしく願います

**l a n n i m a d i l i n g u a (前書き)**

あゆみファンの方々。 すいません。

(こればっか)

l i n g u a d i a n i m a

『 l i n g u a d i a n i m a 』

AQUAは不思議な星です。

それは、年末の時の、過去のAQUAと女の子だったり。

それは、カーニバルの夜の、カサノバさんの行列だったり。

それは、冬の雪虫との再会だったり。

それは、レデントーレの時の、みんなとの出会いだったり。

それは、たくさんの鳥居の下で感じた、雨の匂いと、おきつね様だったり。

そのどれもが不思議で、素敵な思い出です。

そして今日お話するのも、そんなAQUAの不思議な思い出のひとつ。

その時、私は悩んでいました。

将来についてです。

なんとなく、ウンディーネになりたい

ーとは、思いながら、

まだ、他にもなりたいモノがあるんじゃないか？  
ーという躊躇。

自分は、ウンディーネに向いているのか？  
ーという疑問。

自分は、あの人に認めてもらえるのだろうか？  
ーという不安。

私は目の前にいる人が、あまりにも身近過ぎて、かえって軽々しく、その事を口に出せないような気がしていました。

「用意はいい？」

その人は、笑顔で言ってくれました。

ARIA・カンパニーの、たった一人のウンディーネ。

「アクアマリン・遥かなる蒼」と呼ばれる、たった一人のウンディーネ。  
ーネ。

だけど、一番、親友なウンディーネ。

だけど、一番、大切なウンディーネ。

だけど、一番、身近なウンディーネ。

そして、一番、尊敬するウンディーネ……

「はい。灯里さん」

「行きましよう。アイちゃん！」

「ぶいにゅ」



そう言うと、灯里さんとアリア社長は、元気よく歩き始めました。  
ネオ・ヴェネツィアの素敵を探す、お散歩の始まりです。

「いいお天気だねえ」

「……はい」

「まるでアクアが、アイちゃんのこと、歓迎してるようだねえ」

「……はい」

「そういえば、アイちゃんは今年から、ミドルスクールの7年生になるんだね」

「……はい」

「早いなあ。あつ、アイちゃん。ここ、昔のアクアに会ったときの路地だよ」

「……はい」

「こっちは、カーニバルのときのカサノバさんの行列に出会った所だ。懐かしいね」

「……はい」

「こっちは、あの桜の木の丘」

「……はい」

「どうしたの？」

「……え？」

灯里さんは、私の顔を心配そうに、のぞき込みながら言いました。  
「アイちゃん、なんだか元気ないぞう？」

「どきっ！」

「あ、あのっ。灯里さん！」

その時、私は何か、自分の心の中を見透かされたような気がして、おもわず叫んでしまいました。

「は、はひ？」

「ぷいにゅ！」

その声の大きさに、灯里さんとアリア社長は、びっくしたような顔で、私を見ました。

「あの…あの……。灯里さんはどうして、ウンディーネになりたかったんですか？」

「私がウンディーネになりたかった理由？」

「はい」

「んと……」

灯里さんは考え込むように、頬に人差し指を当てると、少し上を向きました。

「私は、昔からファンタジーや、その土地を紹介する紀行文なんかを読むのが好きだったの」

「はい」

「そんな時、たまたまネオ・ヴェネツィアとウンディーネのことを書いた本があつてね」

「はい」

「その本がとっても感動的で。それからずっと、アクア……ウンディーネに憧れてたんだよ」

「……そうなんですか」

「うん。だから初めてアクアに来た時は、大感動だったよお」

灯里さんは、少し恥ずかしそうに笑いました。

「でも、急にどうしたの？」

「いえ、別に……」

「なにか悩んでるの？」

「わ、分かるんですか？」

私は、驚いて訊ねました。

「もちろん」

灯里さんは、にっこりと微笑みながら言ってくれました。

「アイちゃんのことだもの。私でよかったら、話してみてもいいから。相談にのれるかもしれないから」

いえ、実は、まさにそれが問題なんですけど……

「あの…灯里さん。私……」

「おや。灯里ちゃんじゃないか」

不意に一人の、ウンディーネさんが横合のカッレ（小道）から現れて、声をかけてきました。

「いやあ。お久しぶり。元気してた？」

「あつ。お久しぶりです。元気ですよ。今日は、お休みですか？」

「ああ。今日のウチは、お嬢の代理で、ちょっとゴンドラ協会までね」

「そうなんですかあ」

そのウンディーネさんは、親しげに灯里さんと、お話をし始めました。

おかげで私は、肝心の質問を聞くタイミングを、完全になくしてしまいました。

あゝあ……

「ところで、こちらのお嬢さんは？」

ウンディーネさんが訊ねます。

「この子は、アイちゃんです。マン・ホームから来て、今、A R I A・カンパニーにホームステイ中なんですよ」

「初めまして。アイです」

私は、あわてて頭をさげました。

「初めまして、アイちゃん。ウチは、あゆみ。見ての通り、姫屋のウンディーネさ」

「あゆみさん…… あっ。私、灯里さんから聞いたことがあります」

姫屋のあゆみさん。

確か灯里さんがまだシングルだった頃に、トラゲットと呼ばれる大運河ルグランデの渡し舟の

お仕事をした時、一緒にゴンドラを漕いだ、ウンディーネの人です。

「あゆみさんは、今でもトラゲットを……シングルさんなんですか？」

「アイちゃん？」

「ああ。もちろん」

あゆみさんは、もしかしたら、ものすごく失礼な私の質問に、笑顔で答えてくれました。

「ウチはずっとトラゲット専門。ずっとシングルさ」

「ご、ごめんなさい……」

「うん？ 謝ることなんかないぞ？」

「え？」

「ウチはシングルに誇りを持ってるからね。いずれ君がウンディーネになって、シングルになったら」

その時は一緒にトラゲットしようぜ」  
あゆみさんは、私の頭をかいぐり、かいぐりしながら言ってくれました。

「あゆみさん。アイちゃんはまだ、ウンディーネになるって決まった訳じゃないんですよ」

灯里さんが、少し困ったように言いました。

「え、そうなの？ ウチはてっきり……」

あゆみさんは、私の顔を正面から見えています。

「あ、あの……あゆみさん？」

「うん……まあ、いいか。でも言葉って大切だよ」

「え？」

「ところで、灯里ちゃん達は、こんな所でなにしてるんだい？」

なんででしょう。今の感じ。あゆみさんは全て分かってるみたいで……

「今、私達は、ネオ・ヴェネツィアの不思議探検ツアーの真っ最中なんです」

「へええ。そりゃいいね」

「そうだ。あゆみさんも一緒にどうですか？」

「うん。そうだなあ。お嬢の用事も終わったし、予定もないし……」

……

「それなら、一緒に行きましょう」

「そうだなあ。たぶん一緒にいたほうがいいから……うん。行くつか！」

「はひー！」

後から考えると、やっぱりこの時すでに、あゆみさんは、全てを分

かっていたのかもしれない。

私達は、街から少し離れた山の小道を歩いていました。

「ぶ、ぶいにゆうん」

アリア社長が私を見ます。

「アリア社長。お腹空いたんですね」

「ぶいにゆ」

アリア社長が、嬉しそうに飛び跳ねます。

「アイちゃんってば、アリア社長の言葉がわかるんだねえ」

灯里さんも、嬉しそうに言いました。

もちろんです。

そうでなければ、ARIA・カンパニーには……

「じゃあ、あそこの公園で、お昼にしましょう」

「おっ、いいねえ。ちょうどウチも、お昼買ってきてたんだ」

そう言って広げた、あゆみさんのお弁当は、美味しそうなおにぎりが。

「ここのおにぎりは絶品なんだぜ。米はもちろん、こしひかり。中

身は、おかか、鮭、昆布にイクラ」

「わあ、ホントに美味しそうですね」

「ああ。ほら、アイちゃんもたくさん食べてくれよ」

「は、はい。ありがとうございます」

それからしばらくの間、私達は、お弁当を広げながら、他愛のないお話を、いっぱいしながら楽しく過ごしました。

「ぷいにゆ？」

最初に異変に気づいたのは、アリア社長でした。

「アリア社長。どうしたんですか？」

「ぷいにゆ、ぷいぷい」

「え？ 雨？」

突然、大粒の雨が空から落ちてきました。

「はひい？ あんなにいいお天気だったのに」

私達は、あわてて広げたピクニックセットを片付けると、雨宿りができる場所を探して走りだしました。

けれど、山の中では、なかなか良い場所が見つかりません。

あせる私達の目の前に、突然、それは現われました。

「あ。灯里さん。あそこに何かあるよ」

それはツタが建物を覆うかのように絡みついた、古い、大きな洋館でした。

私は、その建物の扉が少し開いていることに気がつきました。

「扉開いてる」

「とりあえず、あそこで雨宿りさせてもらおう」

「はい」

「ごめんください……」

でも、誰の返事ありません。

私達が飛び込んだ扉の中は、まるで人の気配がありませんでした。

「何年か前に廃業したホテルみたいだな」

あゆみさんがポツリと言いました。

そこは、ホテルの玄関ロビーのような、高く広い空間でした。正面には、二階に登る大きな階段が……ひっ？

「灯里さん!!」

私は悲鳴を上げると、灯里さんにしがみついてしまいました。

「ど、どうしたの。アイちゃん」

「あ、あの階段の上に、ひ、人がっ」

「はひいい？」

「大丈夫だよ」

あゆみさんが『その人』に近づきながら言いました。

「ほら、アイちゃん。よく見てごらん。ただの肖像画だよ」

言われて良く見てみれば、それは確かに初老の女性を描いた、等身大の絵でした。

ちょうど階段の踊り場の所に、飾ってあったんです。

「ほへえ……びっくりしました。それにしても、キレイな絵ですね」

「うん。まるで生きてるような絵だね」

白い小猫を抱いた、その絵のおばあさんは、まるで本当に生きているかのように、私達を、じっと見下ろしています。

「確かに。これは残っちゃうかもなあ」

あゆみさんがつぶやきます。

何のことでしょうか？

「はうつ……なんだか眠くなってきちゃった……お弁当食べたからかな」



「灯里さん？」

「うにゅうぶう……」

「灯里さん。急にどうしたんですか？」

灯里さんは、そのままソファに横になると、小さく寝息を立て始めました。

早っ！

「おーい。灯里ちゃん。寝てると置いていっちゃうぞお」

あゆみさんが、恐いと言います。

外は、ますます雨脚が強くなっています。

おかげで、ロビーの中は、かなり薄暗くなってきました。

……なんだか恐い。

私は無意識のうちに、アリア社長にしがみついていた。

ーどおおおおんっ！

突然、大きな音と共に、目の前が真っ白になりました。

「きゃああああっ」

「ぶいにゅうぶうぶうぶう」

私は大きな悲鳴を上げ、アリア社長を強く抱きしめました。

「カミナリだ……いよいよ本格的だなあ」

あゆみさんがつぶやきます。

「カミナリ……」

学校の授業で習ったことがあります。

確か、空と地上の間で起こる放電現象のこと……

ーどおおおおんっ！

再び、大きな音と共に、視界が白くはじけます。

「きゃああああつ」

「ぶいにゆうふう」

再び、私は悲鳴を上げ、アリア社長にしがみつきます。

「アイちゃん。大丈夫かい？」

「はうっ……」

あゆみさんの問いに、私はちゃんと答えることもできません。

「アイちゃん。もしかして雷は初めて？」

「が、学校のライブライイで見たことはあります。け、けど本物は初めてです」

「そっかあ。マン・ホームは気候は完全自動制御だもんな」

「ア、アクアは確か、半自動なんですよね」

「つか、手動って言った方が正確だね。火災之番人<sup>サラマンダー</sup>さん達が、頑張ってくれてはいるんだけどね

ーどおおおおんっ！

三度。轟音と閃光が、部屋の空気を震わせます。

「きゃああああつ。 暁さんのバカあ！ 意気地なし！ へたれ

え!!」

「ぷ……ぷ……ぷ……ぷ……」

「アイちゃん。アイちゃん。アリア社長、潰れてるよ」

「えええ？」

燃える火炎之番人さんに八つ当たりして、泣き叫ぶ私を、あゆみさんがあわてて止めます。

見れば、私の腕の中でアリア社長が悶絶しています。

「あ、あ。ごめんなさい。アリア社長」

「ぷいぷいにゆ……」

「ふにゆ……暁さん……私はもみ子じゃありませんよう……ちゃんと灯り……呼んで……」

そんな騒動に気づきもせず、灯里さんは眠り続けてます。う……ん……これは『大物』さんなんでしょうか？

それともやっぱり、単なる『天然』さんなんでしょうか？

「来るっ」

そう言っつて、あゆみさんが私の耳を両手で押さえました。

四度。部屋の中が、白と黒のストライプに切り取られます。

音は、あゆみさんが耳を押さえてくれたおかげで、そんなに大きく響きません。

それでも――

「きゃああああああっ!!」

「ぶ……ぎにゆ……つ……つ……つ……つ……つ……つ……つ……」

私はまたも悲鳴を上げて、アリア社長を力いっぱい、抱きしめてしまいました。  
私を驚かせたモノ。  
私に悲鳴をあげさせたモノ。  
それは雷の音でも、光りでもありません。

私は見てしまったのです。

閃光に切り取られた部屋の中で。

大階段。

その踊り場。

あの肖像画の絵が。

あの絵の女の人が、絵から抜け出てきたのを！

「あああああああっ？」

「アイちゃん。落ち着いて。落ち着いて」

叫ぶ私を、あゆみさんが必死になだめます。

でも、口から悲鳴のようにこぼれる声を、どうしても止めることができません。

「あゆみさん。あゆみさん！あゆみさん！！」

「大丈夫。アイちゃん。大丈夫だって」

「で、で、でも」

「どなたですか」

絵の女性が言いました。

え？

「人の家に勝手に入り込んで。あなた達はどなたですか？」

え、えと……  
話してる？

「勝手に入ってしまったって、すみません。私は姫屋のウンディーネで、あゆみ・K・ジャスミンと言います」

「姫屋のウンディーネさん……」

「はい。そしてこちらはARIA・カンパニーのアイちゃんとアリア社長です」

……うっ

正確には、私はまだARIA・カンパニーじゃないんですけど……

「急に雨に降られてしまって、ここで雨宿りさせてもらってます。入るときに声はかけたのですが」

返事がなかったもので……失礼しました。無作法は、お許しください  
「さい」

あゆみさんは、ゆっくりと頭を下げます。

さすがは、シングルなのに、実力はトップ・プリマ。

と、言われる、ウンディーネさんです。

実に優雅で、礼節を持った振る舞いです。

「ああ。そうでしたか」

女性は、ゆっくりと階段を下りてきました。

あれ？

最初、絵の、おばあさんに似てると思ったのは、何かの見間違いだったのでしょうか。

改めて見れば、その女性は灯里さんと同じ年くらいの、まだ若く、

どことなく透明感のある女の人でした。

「私は、アポロジカ。このホテルの管理人です」

「アポロジカ…さん」

お化けじゃないんだ……

私はそつと、胸をなでおろしました。

「まだ、雨はひどいようですね。そういう事情なら、雨が止むまでここで過ごしていただいて結構です」

「ご好意に感謝します」

「では、お茶でも、お入れしましょうか」

「あ、いえ。お構いなく」

「遠慮はなさらなくて結構です。それに……」

「それに？」

「ここにお客様をお招きするのも、久しぶりですから」

アポロジカさんは、コロコロと透き通るような声で笑いました。

アポロジカさんが入れてくれたお茶は、美味しいけど、とてもぬるいお茶でした。

「ここは二年前に閉めたんです」

アポロジカさんが、お茶を手に話し始めます。

「私の祖母にあたる人が経営していたんですが、亡くなってしまつて……」

それ以来、ホテルとしての営業は止めたんです」

「そうなんですか」

「祖母の人柄がよかつたんでしょうか。昔はそれなりに、お客様も

たくさんいらしたんですよ。

このホールも、それはもう人のざわめきで、いっぱいです。アポロジカさんは、昔を懐かしむように、目を細めました。

- 瞬間

私は、すぐ横を通る人の温もりを、感じました。人々のざわめき。

女性達があげる、どこか甲高い、楽しげな笑い声。

足早に動き回る、ボーイさん達が巻き起こす風。

楽しそうに談笑する、男の人達。

タバコの香り。

幾人もの人が出入りするたびに、軋み声をあげる扉。

室内に流れる、静かな、それでいて心落ち着かせてくれる音楽。

微笑みとともに、あの大階段を登っていく、幸せそうなカップル・

「祖母……あの肖像画の人ですか」

あゆみさんの声に、私は、ハッとしました。

今のは、いったい……白昼夢？

「ええ」

アポロジカさんは、少し見上げるように首をめぐらすと、言いました。

「そうです。まあ、かなり美化して描かれています……うふふ」

「い、いえ。とてもキレイな絵ですね。まるで生きてるかのようですよ」

「ありがとう。お嬢さん。そう…あの絵は、生きています」  
「えっ？」

「どづいことですか？」  
あゆみさんが、静かに訊ねます。

「あの絵の中の祖母は、今でも私を見えています。今でもここにいて、私を捉えているんです」

「捉えて……いる」

「そうです。だから私はここから離れられない。出ていけない」

ぞくつ。

なんででしょうか、この感触。

背中を冷たいものが、はいずりあがって行く、そんな不快な感じ。  
アポロジカさんは、ただニコニコと微笑んでいます。

また、雨脚が強くなったみたいです。

雷こそ鳴りませんが、ざあざあと雨の落ちる音が、激しくなってきました。

「あなたは、いったい誰なんですか？」

私はたまらず、叫んでしまいました。

「はい？」

けれど、アポロジカさんは、ただニコニコと微笑むだけで……

「私の名前は、アポロジカ。それ以上でも、それ以下でもないわ？」

「そんなんっ」

やっぱり。やっぱり、この人は……

「アイちゃん。大丈夫だよ。大丈夫だから」

「あゆみさん？」



けれど、あゆみさんは、まったく変わらぬ口調で言いました。

「大丈夫だから……アポロジカさん。それで？」

あゆみさんは、何事もなかったように、アポロジカさんに話の続きをうながしました。

「私は祖母を助けられなかった。祖母が逝くのを止められなかった。だから……」

「だから？」

「祖母は私を恨んでいるんです」

…うっ。

不意にすべての音がなくなりました。

雨が地面に落ちる音も、風が窓を叩く音も、ティーカップが触れ合う音さえも。

なにも聞こえません。

なにも聞こえてきません。

…な、なに？

驚く私をしりめに、再び、大広間が白く弾けます。

…また雷？

と、私は思いました。

でも……

でも音はしません。

あの雷が放つ大音響は聞こえません。  
ただ、世界が白く染まります。  
ただ、私達が白く染まります。

それは、とても長い長い、一瞬の刹那……

―ああっ

突然、私は窓という窓の、その全てに『影』が映っているのに気づきました。

真っ白な視界の中で、その『影』はどこまでも黒く、まるで鴉の漆黒の翼のように、ただ黒く、ただ暗く。

「私は死んだ祖母に何もしてあげられなかった。孤独な捨て子だった私を救ってくれた、やさしい祖母に……

祖母は怒っているに違いない……」

白い光の中で、輪郭を失ったアポロジカさんが、語りかけます。

『影』が真っ紅な眼を開きました。

ゆらゆらと揺れながら、紅い瞳で私達を、私を睨んでいます。

これは、いったい……

「あ、ああ……」

「大丈夫。ウチがついてる」

泣き出しそうな私の肩を、あゆみさんが抱きかかえるように、しっかりつつかんでくれました。

「あ、あゆみさん」

「この子は、そんな子じゃない。ただ迷ってるだけなんだ」

あゆみさんは、いったい何を言っているのでしょうか。  
私はもう、恐怖のあまり、思考停止状態でした。

「私は謝りたい。ただ一言、伝えたい。祖母に、あの優しかった祖母に……」

白い影が話します。

とても後悔するように。  
とても寂しがるように。

「ちゃんと伝えた？」

あゆみさんが静かに問いかけました。

「え？」

「君は、その気持ちを、想いを、ちゃんと口に出して伝えた？」

「……………」

「君は、自分のその気持ちを、ちゃんと、おばあさんに伝えたの？」

「でも、でも、おばあさんはもう……………」

「うん。だけど、君は、そうは思っていない」

「……………」

「だから君は言った。」

私は捉われているんだ・と。

『言葉』ことば って知ってる？ マン・ホームのニホンという地域で信

じられている思想で、口からでた言葉には  
それ自体、強い力を持っているって考えただけど……」

「『言霊』……」

「うん。君に今、必要なのは、その『言霊』なんじゃないかな？」

……

……

音がもどつてきました。

雨が地面に落ちる音も、風が窓ガラスを叩く音も聞こえます  
少し小降りになったのでしょうか。雨音が小さくなっています。  
部屋の中も、色彩を取り戻しました。  
ほんのりと明るさが増したようです。  
アポロジカさんも、白い影ではなくなります。

「人の想いは、消えることはない。それは今も君のそばに居て、君  
を見ている」

あゆみさんは、語り続けます。

「けれど想いは、言葉は口に出さなければ、誰にも伝わらない」  
「誰にも……」

「そう。君は、君のその想いを口に出して、ちゃんと伝えてあげな  
きゃ。大丈夫。きっと聞こえるさ」

「ほんとうに？」

「ああ。だから……」

あゆみさんは、諭すように、でも、きつぱりと言いました。

「ちゃんと、はっきりと口に出すんだ」

「おばあさんっ」

アポロジカさんは、不意に立ち上がると、涙をこぼしながら叫び始めました。

「ごめんなさい。私、あなたに何もしてあげられなかった。ごめんなさい。ごめんなさい。」

あの時、ただ、あなたを見ているだけで。私、何も……

あなたは私を救ってくれた。

捨てられて、ただ震えていた私を……

ただ、雨にうたれて泣いているだけの私を。

でも、私は何もしてあげられなかった。

苦しむ、あなたに何も……

なにも……なにもできなかった」

アポロジカさんは叫び続けます。

まるで、なにかからの呪縛が解けたように。

ただ、叫び続けます。

私はただ啞然と、そんな彼女を見ていました。

「でも。でも……

おばあさん。

私、私、あなたが大好きだったの。

いつまでもずっと、あなたのそばで暮らしていたかったの。

ずっと、ずっと、いつまでも……あなたと一緒に……

ほんとうに。ほんとうに、あなたのことが、大好きで、大好きで。大好きで……」

絶叫し、泣き崩れ、激しく慟哭するアポロジカさん。  
その髪を、いつの間にかアリア社長が、優しくなでていました。  
これは、いつたい……

「雨、やんだな」

あゆみさんが、ぼつりと言いました。

確かに、もう雨音は聞こえません。

それどころか、窓からうつすらと、光が差し込んできます。  
ああ。もしかして……

「アポロジカさんの声が、届いたんだね」

「ああ。聞こえたんだよ。きっと」

私のひとり言に、あゆみさんは、ちゃんと答えてくれました。

「おばあさんは、アポロジカさんを許してくれたのかな？」

「もちろん」

あゆみさんは、少し強い声で言いました。

「でなければ、彼女は泣くこともできなかつたはずさ。もっとも……」

「もっとも？」

「もっとも、おばあさんは、最初から彼女のことを恨んでなんかいなかったんだよ」

「あゆみさん……」

「でもね。いつまでも気にしてちゃいけない」  
あゆみさんは、泣き続けているアポロジカさんの肩に手をかけ、やさしく言いました。

「いつまでも想いを残すと、その人もそれが気になって、いつまでもたっても行けやしない」

「……………」  
「君もそうだろう?」

「……………」  
「君もいつまでたっても、行けないんだろ」

「ウンディーネさん……………」  
「迷わずにいけるかい?」

「…あの、実は私。すごい方向音痴で……………」  
「大丈夫だよ。きっと迎えにきてくれる」

「……………」  
「君が口をだせば、ちゃんと呼べば、きっと来てくれる」

「……………」  
アポロジカさんは立ち上がると、ふらふらと大階段の方へ歩いて行きます。

「あわてる必要はない。ゆっくりといくんだよ」  
「はい」

アポロジカさんは、振り返ると、私達に頭を下げました。

「ありがとう、ウンディーネさん。お嬢さん。ほんとうにありがとう」  
「う」

大階段が、また白く輝き始めました。  
でも -

それは、あの雷の時のような、冷たくて恐い、鋭利な光ではありません。

それは、とても暖かで、優しくて、すべてを包み込んでくれるような、そんな輝きでした。

「ああ。それから」

あゆみさんは、そんな光り輝く大階段を、ゆつくりと上がっていく、アポロジカさんに言いました。

「その『アポロジカ』って名前は、もういらないよ。もうホントの名前で大丈夫」

アポロジカさんは、一瞬、びっくりしたような顔をして……それがらまた、にっこりと微笑みました。

「あゆみさん？」

「『アポロジカ』……『アポロジイ』は、『謝罪』って意味なのさ。もう彼女には必要ないだろ？」

- 『謝罪』

うん。もういらない。

彼女には、そんな名前。そんな言葉。もういらない。

彼女はもう、許されたんだから。

いえ、最初から、問われてもいなかったんだから……



「ぷいにゆ………」

アリア社長が声をあげます。

「あ………」

光の中で、アポロジカさん……『謝罪する人』だったモノが、小さな、ほんとうに小さな子猫に変わりました。

「ぷいぷいにゆ」

アリア社長がまるで「それでいいんだよ」とでも言いたげな声をあげました。

子猫は、小さく鳴きました。

何かを呼ぶように。

何かを探すように。

何かを求めるとように。

光が増します。

「あれは………」

その光の中から、ひとりの、おばあさんが現れました。

あれは、肖像画の。

・ああ………」

ちゃんと迎えに来てくれたんだ。

おばあさんは、子猫に近づくと、両手を差し伸べ、何言かを呟きました。

子猫は、そのおばあさんの声に答えるように、いちもくさんに、そ

の手の中に飛び込んでいきます。

おばあさんが、つぶやいた言葉。

それはきつと、あの子の……あの子猫の、本当の名前だったのでしよう。

おばあさんは、そんな子猫を優しく抱きしめました。

とても、大切なものを取り戻したかのように。

とても、いとおいしいものに、出会えたかのように。

やがて二人は、ゆつくりとまた階段を登っていきます。

二人とも、とても幸せそうな顔で。

最後に消えゆくそのとき、二人は私達の方を見てくれました。

おばあさんは、その優しい微笑で、頭を下げ、何事かを言ってくれました。

子猫も、とても嬉しそうな顔で、私たちに大きく口を開けました。

言葉は聞こえなかったけど

声は聞こえなかったけど

私には -

私達には分かりました。

あの二人は……

- ありがとう

そう言ってくれたのです。

それは、とても優しい『言葉』でした。

やがて光は消え、あたりはもとの大広間にもどりました。  
窓からは太陽が差し込み、小鳥のさえずりが聞こえてきます。  
そこはただ、いつも通りのアクアでした。

「あの子もずっと、いけなかったんですね・・・」

「ああ……」

あゆみさんは、小さく答えてくれました。

「あの子は、それすら気づかないほど、おばあさんのことを思っていたんだ」

私はしばらくの間、大階段を、あの二人が消えていった場所を見つめていました。

「あゆみさん。アリア社長」

「なんだい？」

「ぶいにゆ？」

「二人とも、最初から分かっていたんですか？」

「さあ、どうでしょう」

「ぶいにゆんにゆん」

私の問いかけに、あゆみさんとアリア社長は、微笑みながら答えました。

「ただの、アクアの不思議ってヤツじゃない？」

「アクアの不思議……」

「ぶいぶい」

「ああ。でもね」

「え？」

「誰にだって、魂だけになったとしても、もう一度会いたいって人はいるからサ」

「え？」

「いや。なんでもないよ。なんでも……アイちゃんには、まだ早いかな」

そう言つと、あゆみさんは今度は、照れたように大きな笑みを浮かべました。

「んんん……」

灯里さんが眼を醒ましました。

「あつ。今度は本物の灯里ちゃんだ。おかえり」

あゆみさんが優しく笑いかけます。

「何かあつたんですかあ？」

灯里さんは、起き上がると、大階段の上に腰掛ました。

「なにか懐かしくて、暖かいものに触れてた気がするんだけど……あれ？」

灯里さんは、自分の頬に流れているものに気づき、驚きました。

「あれ……あれ？ 私なんで泣いてるの？」

「灯里さん……」

「変だよ。アイちゃん。私、何も悲しくないのに、なんで涙があふれてくるの……？」

「ぶいぶにゆうう」

アリア社長が『ご苦労様』とでもいうように、灯里さんの頭を、なでなでします。

「アイちゃん」

「はい？」

あゆみさんは、そんな灯里さんを横目で見ながら、私にささやきました。

「今日のことは内緒でね」

「え？」

「灯里ちゃんは、すぐ感情移入しちゃうから……ね？」

「は、はい」

「それと……」

あゆみさんはまるで、いたずらが見つかった子供のような顔をしました。

「君も伝えたいことは、ちゃんと口に出して伝えないとダメだぜ」

「あ……」

あゆみさんは、ポンッと背中を押しながら言ってくれました。

「がんばって」

素敵に微笑んでくれます。

「灯里さん」

私は、あゆみさんに背中を押してもらって、決心しました。

「あ。アイちゃん。ごめんね。なんか変だよね。私……」

灯里さんは、涙をぬぐいながら言います。

「ううん。灯里さんは、とっても素敵です」

「ええ？」

私は『なんでもないです』と、小さくかぶりを振ると、勇気をだして、その『想い』を……『言霊』を口にしました。

「あの、あの灯里さん。私、お願いがあるんです」

「えっ？ な、なにかなあ？」

「私、将来ウンディーネになりたいんです。だから、だからそのときは、私をARIA・カンパニ-に入れてくれますか？」

いつきに言いました。

私の言葉に、灯里さんは、一瞬、驚いたような顔をします。

それから -

「もちろんだよ！」

いつもの、あの素敵な笑顔で答えてくれました。

「ほんとうは私も、アイちゃんがそうなってくれたらいいなあ……  
て思ってたんだ。ありがとう。嬉しいよ」

灯里さんが、不意に私を抱きしめます。

「灯里さん？」

「なんでだろう。私、今、すっごくアイちゃんを抱きしめたいよ。  
すっごく、すっごく」

「灯里さん……」

私も、しっかりと灯里さんを抱きしめました。

そう。

まるであの子猫と、おばあさんのように……

強く。強く。強く。

いつまでも、いつまでも、こうして……ずっと。

あゆみさんが、そんな私達を微笑みながら見ています。

灯里さんに抱きしめられながら、私は、あゆみさんの唇から、こんな言葉がもれるのを聞いた気がしました。

・見てますか。また素敵が一つ加わりましたよ……

その時私は、微笑む、あゆみさんのすぐ横に、優しい眼をした、大きな黒い猫が立っているのを見たような気がしました。

あれは……

あれは……

でもそれは、ほんの、まばたきをする間、もう見えなくなっていました。

「灯里さん……」

「なにアイちゃん」

「私。AQUAに歓迎されてるのかな……」

灯里さんは、私をしっかりと抱きしめながら、言ってくれました。

「うん。きっとそうだよ」

それはとても素敵で、力強い『言葉』でした。

私は灯里さんを抱きしめながら、いつまでも、この時間が永遠に続くことを祈りました。

風もないのに、窓にかかったカーテンが優しげに揺れました。

どこか遠くで、とても楽しそうな笑い声が聞こえたような気がしました。

それは木漏れ陽が踊る、夏の日の出来事でした。



・三年後。

「えへへっ 灯里さん。 ついに来ちゃった」

私はネオ・ヴェネツィアに立っていました。

もう、ホームステイでは、ありません。

時間がくれば、マン・ホームに帰る旅行者でもありません。

今日から私は、ここ、アクアの住人になるんです。

「アリア社長っ」

迎えに来てくれた、アリア社長の元へと走りながら、私は考えていました。

・灯里さんに、最初になんて言おう。

・灯里さんに、なんて言葉で、最初に挨拶しよう。

そして・

灯里さんは、なんて『言霊』で迎えてくれるんだろう。

今日もAQUAは・

ネオ・ヴェネツィアは、まるで私を歓迎してくれるかのようにどこまでも優しい青空が広がっていました。

・ようこそ！ ARIA・カンパニーへ

l i n e . . . ( 1994 ) a c c e s s i b l e . . .

I · a n i m a d i l i n g u a (後書き)

今回は、あゆみの口を借りて、ちよつと真情を吐露してしまいました。  
た。

どうかお許してください。

でもホント。

言葉って大切ですよない…… (汗)

sette si chiedono 前編(前書き)

本人これは最初、ミステリーのつもりで書いてました。

結果は……すいません(土下座)

それでは、しばらくの間、お付き合いください。

sette si chiedono 前編

『sette si chiedono』 前編

< ETA - 4620M >

「先輩方。オレンジ・ぷらねつとの七不思議ってご存知ですか？」

突然、アリス・キャロルが玉子焼きを、かじりながら聞いてきた。

「七不思議？」

杏が、よせばいいのに鮭の身をほぐしながら聞き返す。

「はい。実はちよつと前に、ネオ・ヴェネツィアの七不思議っていう事件がありました……」

それならオレンジ・ぷらねつにも、同じ様なことが、あるんじゃないかと……」

「そういえば、そんな話聞いた事あるわ」

「杏？」

「どうですか先輩方。私と一緒に、七不思議を探してみませんか？」

「うん。それは楽しそうね」

「杏ってば」

「ミステリーですよ、でっかい謎ですよ」

アリスちゃんが、目をきらきらと輝かせながら言う。

私はトーストをかじりながら、ため息をついた。

私の名前は、アトラ・モンテエウエルデイ。

この水の惑星アクアの都市、ネオ・ヴェネツィアで、ウンディーネと呼ばれる水先案内人をしている。

階級はシングル（片手袋）

まだ一人では、お客様を乗せる事はできず、プリマ（手袋なし）と呼ばれる一人前のウンディーネが同乗している時だけお客様を乗せて観光案内ができる、半人前。

私の前で、和風朝食セットを食べている、アリス・キャロルは、そのプリマにペア（両手袋）の見習いから飛び級昇進した我がオレンジ・ぷらなっとの期待の新星。

でも、その実、まだまだ夢見がちな、15歳の女の子。

「えっと、まず。三階にある『開かずの間』でしょ。次に、夜中、どこからともなく聞こえてくる不気味な唄声。それから……」

私の横に座って、アリスちゃんと同じ、和風朝食セットをつついている杏が、妙に嬉しそうに言う。

違うのは納豆がついてるか、ついていないかくらい。

ちなみに私は、この納豆という食べ物が苦手だ。だって発酵してるのよ。糸引くのよお！

あんず  
杏

夢野・杏は、私と同じシングルのウンディーネ。寮では同室の親友。

私と一緒に、トラゲットと呼ばれる、カナル・グランデ大運河を渡る、渡し舟をしている。

で、名前の通り、夢見がちな女の子。彼女側の部屋は、ぬいぐるみで一杯だったりするのだ。

だから、アリスちゃんと杏の会話ともなれば、朝っぱらから、こんな話になる！

「ちょっと、杏。いい加減にしなさい」

「それから、中庭を走り回る創業者の銅像。夜中ひとりでに鳴るピ

アノ……」

聞きちゃいない……

「あと……」

アリスちゃんが、ちょっと声を低める。

「この食堂」

「食堂？」

「はい。夜中に何かが食堂を這い回るそうです。ずる、ずる、ずる……って警備の人もコックさんも、でっかい知らんぷりですが……」

……

「はうあああ。や、やめてよ、アリスちゃん……」

私の向かい。アリスちゃんの横に座ったアテナさんのスプーンを持つ手が止まる。

アテナさん。

アテナ・グローリィさん。「セイレーン（天上の謳声）」の通り名を持つ、オレンジ・ぷらねっとのエース・プリマウンディーネ。

でも、ドジっ子。

「そうゆう怖い話はしないでね……はぐふう！」  
突然、アテナさんが悶絶し始める。

「アテナ先輩……ですから、ちゃんと冷ましてから食べてくださいって、いっつも言ってるでしょ？」

アリスちゃんが、冷たく言う。

アテナさんは、熱々の中華粥を、そのまま口に入れてしまったのだ。

ぐおおおーと、妙な踊りをおどっているアテナさんに、私は、お水を渡してあげた。

「はふう……ああ、ありがとう。アトラちゃん。助かったわ」

「いえ、どういたしまして。いつもの事ですから」

「はい。でっかい、いつもの事ですね」

「いつもの事ですよねえ」

「ええええ」

アテナさんは、いつもこんな調子。

だからドジっ子。

信じられないほどの、ドジっ子。

だけど、それすらも含めて、みんなから愛されている、偉大なるドジっ子プリマ。

「アトラ先輩は、いつも、でっかい冷静です」

「え。そ、そんな事ないわよ」

「アトラ先輩！」

…びっ

と、音が鳴るくらいの勢いで、アリスちゃんが言い放った。

「私と一緒に、オレンジ・ぷらねっと七不思議を解き明かしてみま



「せんか？」

「ええええ？」

「あつ。それはいいかも。だってアトラちゃん、ミステリイ大好きだものね」

「杏う？」

「それなら、なおの事、私と一緒に不思議を、でっかく解き明かしましょう！」

「いえ、アリスちゃん？」

「それはいいわね。名探偵アトラちゃん登場ね」

「アテナさんまで……」

私は苦薬を飲まれたような顔になっていたに違いない。

確かにミステリイは、子供の頃から大好きだ。

ミドルスクールの時は、夢中になって夜中まで本を読みすぎ、今のように眼鏡のお世話に……

その時は、人と関わり合うより、本を読んでいる方が好きだったのだ。

そしてそれは、オレンジ・ぷらねっとに入った時も続いて……

でも、ただ読むのと謎を解くのは、また別の話なのになあ。

それに時期が悪い……

私は小さく、ため息をついた。

< E T A - 4 5 6 0 M >

「でもさ。アリスちゃん」

朝食の後、杏とアリスちゃんは、ゴンドラ乗り場に足を運びながら、まだ七不思議の話が続けていた。

「さっきの話だと、五つしか不思議はないわよ？」

「そうなのです。杏先輩。実は、七つ目の不思議に遭遇すると、でっかい大変な事が起こると言われています」

「その話も、聞いた事ある」

「はい。ですから、この不思議は六つしかないハズ：七つ目が解明されてしまうと、でっかい大変が起こってしまうからです」

「なるほど……」

いや、杏。

そこは納得するところなのか？

「でも。そうになると、やっぱり後ひとつ、不思議が残っているわね」

「はい。きっと実は、その不思議は私達の目の前に残っているのではないかと……」

私達が、わいわい言いながらゴンドラ乗り場につくと、まずオール置き場にむかった。

そこには、何十本ものオールが壁にかかっている。

オールには、それぞれ番号がふってあり、ウンディーネは、その決められた自分のオールを手に取り、ゴンドラに向かうのだ。

「あれ？」

「どうしたのアリスちゃん」

「いえ、私のオールがなくなっ……」

「え？」

「私はいつもアテナ先輩の横に掛けるようにしてるんです。昨日ちゃんとここに掛けたハズなのに」

「な、なにかのカン違いじゃない。ともかく探してみましよう」

私はすばやく杏を引つ張ると、オールを探すふりをして、アリスちゃんから少し距離をおいた。

「杏、ちゃんとやったの？」

「うん。でもあれえ。もしかしたら間違えちゃったかも……てへっ」

「あんたねえ！」

「ふげげげっ」

私は怒りのあまり、思わず杏のほっぺたを、両手でつねってしまった。  
ていた。

「あつたわよお」

少し離れたところで、アテナさんが声をあげる。

「ああ。アテナ先輩、ありがとうございます」

あわてて駆け寄るアリスちゃん。

そこには確かにアリスちゃんのオール、<NO・18>が掛けてあった。

「どうして、こんなところにあるんでしょう……」

「あだだ…さ、さあ。だから、アリスちゃんのカン違いじゃない？」

「そうそう。人は誰でも自分のことは、よく分からないものだから」

「そんなハズは……」

「そ、そうだ。アリスちゃん。これこそ六つ目の不思議よ」

「ちよ、待っ……杏？」

「勝手に動く、オール。これが不思議でなくて、なんなのでしょう！」

「いや、杏。いくらなんでも」

「そうですねっ」

「納得したあ!?!」

「アトラ先輩っ。ついに最後の不思議が私達の前に姿を現しました。さあ、でっかい不思議に挑戦です!」

アリスちゃんが、小さくガッツポーズを決める。

うわあ。すごいやる気。どうするの、コレ?

杏が、私にだけ見えるように、こっそりと手を合わせ、頭を下げた。

< E T A - 3 5 4 0 M >

深夜・零時。

私と杏。

そして、アリスちゃんは、夜の人気のない廊下をゆっくりと歩いてきた。

目的地は「開かずの間」

そこは、オレンジ・ぷらねっとの宿舎西側三階の、一番端にあった。

「誰もいませんね……」

アリスちゃんが、ささやくように言う。

「もともと、この階は、会議室や資料室、倉庫なんかになってるから、この時間には誰も通らないわ」

「なるほど。アトラ先輩、でっかい理論的で明快な推理です」

「いや、そこまでは……」

「さあ、着きました」

私達は「第13款待倉庫」、通称『ウエン・リーの間』の前にたどり着いた。

「ここが『開かずの間』……」

そこには、何の変哲もない扉があった。

「まず、この扉は異常です」

「アリスちゃん、どうゆうこと？」

「杏先輩。この鍵を見てください」

「これは……」

そこには暗証番号を打ち込むタイプの、頑丈な錠がかかっていた。

「こんなに厳重な警備をしなければならないなんて……匂いますね」

「い、いや、アリスちゃん。それは単に、この倉庫には、何か大切なモノが保管してあるって事じゃ……」

「でもアトラ先輩。それにしても、この電子錠は、あまりにも厳重過ぎます」

そう言つて、アリスちゃんは電子錠に触ろうとして -

「だめっ。アリスちゃん！」

私の叫び声に、アリスちゃんの動きが止まる。

「ど、どうしたんですか？」

「触らないで。もしかしたら警報装置と連動してるかも」

「あ…そうですね。でっかい、そうかもしれません」

あわてて手を引っ込めるアリスちゃん。

「そこにいるのは誰です？」

突然、私達は暗闇から声をかけられた。

この声は……

「寮長さん？」

そこには、やさしい顔をした、小柄な、おばあさんが立っていた。

寮長さんは、ここオレンジ・ぷらねつとの宿舎寮の管理人さんだ。

いつも柔らかな物腰で、でも時には厳しく、私達に接してくれる。

私達ウンディーネの健康管理から、呼び出し、清掃、洗濯、消耗品の調達等の雑事も引き受けてくれる、

文字通りの管理人さん。

でも、中でももつとも私達にとって大切なことは、彼女が私達のよき『相談相手』だということだ。

なかなか進級できないシングルや、入ったばかりで、ホームシックにかかったペアなんかの相談を、

いつも親身になって聞いてくれる、やさしい人。

彼女のおかげで、立ち直ったウンディーネは、数知れない。

だから私達は、こつそりと彼女のことを『お母さん』と呼んで、頼りにしていた。

実を言えば私も、昔はよくお世話になったものだ。

「アリス・キャロル？ こんな所でなにしてるの？」

「いえ、その……」

「明日もお仕事なのだから、夜更かしせず、早く部屋に帰ってお休みなさい」

「はい……」

「さあ、アリスちゃん。行きましょう」

「あの、お母……寮長さん」

促す私達を無視して、アリスちゃんは『お母さん』に疑問をぶつける。

「どうして、この部屋は鍵が……こんな頑丈な鍵がかかっているんですか？ それも『開かずの間』って言われるほどの……」

「ここは、倉庫ですからね」

寮長さんは、さも当然のように答えた。

「ここには、オレンジ・ぷらねっとの貴重な物品や、社外秘資料などが保管されているの。だから厳重に保管してるのよ」

「そう……なんですか？」

「ええ。だからこの鍵の番号は、私やアレサ部長を含めて数人しか知らないの」

「……あと、どうしてこの部屋は『ウエン・リ・の間』って呼ばれてるんですか？」

「え？ さ、さあ。それは私も知らないわ」

「知らない？」

「ええ。いつの間にか気が付いたら、そう呼ばれるようになっていたわね」

「そうなんですか……」

「さあ、アリスちゃん。行きましょう」

私は、アリスちゃんの手をとると、足早にその場を離れた。去り際に振り向くと、寮長さんが小さく手を振っていた。

< ETA - 2820M >

「……ピアン」

「え？」

急にアリスちゃんが立ち止まった。

翌日の深夜、零時。

再び、私、杏、アリスちゃんの三人は「不思議」探索をしていた。

「どうしたの。アリスちゃん」

「先輩方。ピアノの音が聞こえませんか？」

「え？ うんと…杏、聞こえる？」

「えと……」

私はすばやく、杏の足を踏みつけた。

「あうっ。き、聞こえない。何も聞こえないよ。アリスちゃん」

「？ どうしたんですか？ あっ、今。小さくですが確かに、で

っかい聞こえました」

「で、でも。私も杏も何も聞こえなかったわ」

私の再びの『特別な合図』で、杏も慌てて、うなづく。

「アリスちゃんの気のせいじゃ……」

「いえ。確かにピアノの音が…これは七不思議のひとつ。ひとり

でに鳴るピアノでは……行きましょう」

「アリスちゃん？」

アリスちゃんが、脱兎のごとく走りだす。

私と杏は、あわててその後を追いかけた。

「アリスちゃん。走ると危ないわよ」

「アリスちゃん。待って。待ってってば」

「先輩方。そんなに大声をあげないでください。でっかいうるさいです！」



ドラバタと足音も高らかに、私達は音楽室の前に到着した。ちなみに音楽室も、第13款待倉庫と同じ西館にある。もっともこちらは、二階だが。

「ここも鍵がかかってる……」

アリスちゃんが、扉を調べながら言う。

今度は間に合わなかったのだ。

「やっぱり、何かのカン違いじゃ……」

「アトラ先輩。でも私は、はっきりとピアノの音を聞いたんです」

「でも、アリスちゃん。こうして鍵はかかっている。と、ゆうことは、中には誰もいない……」

「ホントでしょうか？」

「え？」

「ホントに中に誰もいないんでしょうか？」

「も、もちろんよ。鍵がかかっているんだし」

「それに、中に誰かいたんじゃない、ひとりでに鳴るピアノじゃなくないわ。」「  
つちやうよ」「

「う……杏先輩。するどいです」

「お。杏。ナイス・ツツコみ

これなら今夜は……」

「じゃあ。中に入って調べてみましょう」

「なんですつてええええええ！？」

「ど、どうしたんですか？ アトラ先輩。」

「う、ううん。なんでもないわ」

そんな大きな声で

「もう、でっかい、びっくりするじゃないですか」

「アリスちゃん。でも鍵かかっているわよ」

杏が、ドアノブを、がちゃがちゃと触りながら言う。

「気づいてくれたか

「大丈夫です」

そう言うと、アリスちゃんは、おもむろに髪からヘアピンを抜き取った。

「こんなこともあるのかと、用意しておきました」

そして器用な手つきで、ヘアピンをドアノブに突っ込むと、鍵を開けるアリスちゃん。

「ちょ…アリスちゃん。どこで、そんな技を!？」

「前にも灯里先輩達と、ゴンドラ練習の時に、同じことをやったことがあります。でっかい一般常識です」

「『 違う違う違う! 』」

私と杏は、同時にツッコんだ。

< E T A - 2 8 1 0 M >

「失礼します」

そつとドアを開ける。

防音処理されたドアは、結構重い。

中は、当然のことながら真っ暗だ。

「灯りのスイッチは…」

「だめよ、アリスちゃん。灯りをつけちゃ」

「アトラ先輩？」

「昨日の倉庫の鍵のこと忘れたの？ こんな夜中に電気なんか点けたら、それこそ警備の人が飛んでくるわよ」

「あ………確かに」

「幸い今夜は月灯りがあるから、窓のカーテンを開ければ、見えな  
いほどではないわ」

「はい」

「じゃあ、杏とアリスちゃんは、部屋の中を調べて、私は隣の準備  
室を見てくる」

「らじゃー！」

「でっかい了解です」

私は、カーテンを開けながら、部屋の中を探索する二人から離れて、  
準備室と書かれたドアに近づいた。

ドアノブに手をかけ、ゆっくりと回す。

ドアを開け、中をのぞき込む。

小さな部屋だ。灯りをつけなくても、音楽室に差し込む月灯りで、  
中の様子は、手に取るように分かった。

「アトラ先輩。そちらはどうですか？」

アリスちゃんが近づいてくる。

私はゆっくりとドアを閉めると、少し大きな声で言った。

「なにも、誰もいないわ。そっちはどうだった？」

「こちら誰もいません。でもこんなものが………」

それは、携帯式のミュージック・プレイヤーだった。

「これは？」

「これが電源が入ったまま、床に置いてありました」

「ちよつと貸してみて」

私は、ミュージック・プレイヤーを受け取ると、再生のスイッチを入れてみた。すると・

「これは……」

音楽が流れてきた。それは『祝福の歌』だ。

・おいおい

「これがさつきアリスちゃんが聞いた、ピアノの正体ね」

「え？」

「なにかの加減で、このプレイヤーのスイッチが入って、その音がアリスちゃんの耳に入ったのよ。」

さすがは耳がいいね」

「ああ、ありがとうございます」

「アトラちゃん。もうすぐ警備員さんの、巡回の時間よ」

杏が時計を見ながら言う。

・よし。ナイス・フォロー

「分かったわ。杏。アリスちゃん。とりあえず、ここを出ましょ」  
「う」

「うらじゃ」

「でっかい了解です」

「これで、ひとつ目の不思議を解き明かしたね」

「杏先輩。まだまだです。まだ、ひとつしか解き明かせていないんです」

うーん。なぜにアリスちゃんは、こんなにも不思議にこだわるのか。誰か教えてください。

「とりあえず今夜はこれで解散ね。寮長さんじゃないけど、あまり夜更かしは……」

「ひっ」

突然、杏が私にしがみついてきた。

「な、な、何？ 杏。ど、どうしたの。わ、私にそっちの趣味はないわよっ」

「な、何か……」

「へ？」

「なにか今……」

「え？」

「なにか今、私たちの後ろを通ったあ！」

「えええ？」

「私も見ましたっ」

「アリスちゃん？」

「な、なにか灰色のものが、私達の後ろを横切って、階段を上がっていきました」

「ええ？」

「追いかけましょう！」

再び、脱兎のごとく駆け出す、アリスちゃん。

いけない！ あのタイミングでは間に合わない。

「アリスちゃん。危ないわよ。アリスちゃん！」

「うわあん。待つて待つて待つてばっ。ひとりにしないでえ」  
そして再び、私達は、アリスちゃんを大声で叫びながら、追いかけるはめになった。

< E T A - 2 7 9 0 M >

三階に向かう階段の踊り場で、私はようやく、アリスちゃんに追いついた。

「待つて、アリスちゃん」

私は、アリスちゃんの腕をつかむと、強引に引き止めた。

「アトラ先輩。なぜ止めるんですか」

「アリスちゃんっ。いえ、オレンジ・プリンセス」

「は、はい？」

急に自分の通り名を呼ばれて、アリスちゃんは戸惑ったように足を止めた。

「通り名」

それは、プリマ・ウンディーネだけが持つことを許された、もうひとつの名前。

一人前の証。

そしてアリスちゃんのそれは『オレンジ・プリンセス（黄昏の姫君）

』……

私は頭をフル回転させて、答えを見つけ出そうとしていた。

「あなたは、オレンジ・ぷらねっとのプリマ・ウンディーネなんです」

「は、はい」

「そんな、あなたがもし、走ってる最中に転んで、怪我でもしたらどうするんですか？」

「え……？」

「それに万が一、あの人影が本当に不審者だったらどうするんです」「不審者？」

「ええ。あなたはプリマ・ウンディーネ。会社にとって、唯一無比なもの。特にあなたは、オレンジ・ぷらねっとの、

至宝ともいべき存在」

「いえ、あの、私は……」

「いいですか、オレンジ・プリンセス」

「は、はい」

「無茶はしないでください」

「え？」

「もう一度、言います。あなたは、プリマなんです。少しでも危険なことは避けた方がいい」

「で、でもアトラ先輩」

「アトラでいいです」

「え？」

「あなたは、プリマなんですから、シングルの私を呼び捨てにしてもいいんです」

「いえ、あの……それはできません」

「アリスちゃん？」

「すいません。私、いくら自分がプリマだからと言って、アトラ先輩や杏先輩。」

それに他の先輩方も、呼び捨てにはできません。でっかい……でっかい、ごめんなさい」

そう言うと、アリスちゃんは少し顔を紅らめ、下を向いてしまった。

- いい子なんだ

と、嬉しく思う反面。チクチクと突き刺す罪悪感に、私の胸は痛んだ。

「はあはあはあ……みんな待ってよう」

杏がようやく追い着いてきた。

「杏。アリスちゃんをお願い。私が先に行くわ」

「アトラ先輩っ」

「大丈夫です。危なかったら逃げますから。二人は少し距離をおいて、付いてきてください」

私はそう言うと、ゆっくりと、階段を上がり始めた。

三階の通路には、誰もいなかった。

なんとか間に合ったらしい。

本当に、ゆっくりと歩を進めながら、私は冷や汗が出るのを止められなかった。

< E T A - 2 7 6 0 M >

「やっぱりここですか……」



アリスちゃんが、つぶやくように言う。

私達はまた、第13款待倉庫『ウェン・リーの間』の前に立っていた。

「鍵はちゃんと確認したわ。ちゃんと掛かってる」

「どういうことでしょうか……」

私は少し肩をすくめながら、アリスちゃんに答えた。

「1・『何か』は、最初からいなかった

2・『何か』は、いたけれど。それはこっちには向かわなかった。

3・『何か』は、この解除コードを知っていて、鍵を開けて入った。

4・『何か』は、ここを、なんらかの能力で、通り抜けていった……」

「1と2は違いますね。私は、はっきりと見ましたし、杏先輩も見てます」

「うん、うん。確かに」

「おいおい、杏。空気読め。」

「3は、それこそ無理でしょう。だって鍵の解除コードを知っているのは、数人しかいないって

昨日、お母さんが、おっしゃってましたから」

「……………」  
「……………」  
「……………」

「残るは4の、通り抜けていった……………」

「……………」  
「なに、なに。人間じゃないの？」

杏う？ 部屋に帰ったら説教よ！

「これはどうゆうことでしょう」

アリスちゃんの顔が、若干、青ざめて見えた。ごめんね。

「やはりここには、何かあるんでしょうか」

「確かにね。だから今はあまり近づかないようにしましょう」

「え？」

「この謎を解くには、もっと情報が必要です。お互い、情報を集めてから、改めて検討してみましよう」

私の言葉に、アリスちゃんは『分かりました』と、うなずいてくれた。

- やれやれ。なんとかあった

私が安堵したのも束の間。

再び、杏が抱きついてきた。

「杏？ だから私には、そっちの趣味は……」

「アトラちゃん。あれ、あれえ！」

杏は、震える手で、窓の外を指差した。

「あれは……」

アリスちゃんも、身を乗り出して絶句している。

中庭の森の中を、何かが駆け抜けて行く！

それは、妙に頭の大きな、まるで銅像のような色をした灰色の何かだ。

それは、不規則な動きを繰り返し、やがて茂みの淵で、忽然と姿を消した。

それは、不気味な声とともに……プツイヌフウウ…

おひおひ。

「アトラ先輩っ」

「な、なに、アリスちゃん」

アリスちゃんが、頬を上気させながら叫んだ。

「あれは、あれこそが、不思議のひとつ。夜中に走り回る、創業者の銅像です！」

「ええ！？」

「あの最後の不気味な声が、でっかい証拠です」

「いや、あの……」

「そうなんだ。あれが走る銅像……」

「杏う？」

「私、再び、でっかい燃えてきました！アトラ先輩っ」

「は、はいいい？」

「お互い頑張りましょう。絶対、絶対、七不思議を解き明しましょう」

「うん。がんばろうね」

「もしもおし……」

ひとり盛り上がるアリスちゃん。  
まったく能天気な杏。

そして、こっそりタメ息をつく私。

う……うん。

私も頑張ろう……たぶん。

間奏話 ?

「おはよん、アトラちゃん。朝だよ」

「うづん…もう朝?」

「珍しいわね。アトラちゃんが、朝、すぐに起きれないなんて」

「しょうがないでしょ。例のことで、寝不足気味なの。あれ?」

「どうしたの、アトラちゃん」

「いえ、眼鏡がなくて……」

「へっ? そこにあるのは?」

「うん。今日は、いつもとは違う色の眼鏡の気分だったんだけど…  
ないのよ」

「あちゃっ」

「え?」

「うづん。なんでもないよ。それでないと困るの?」

「困るわけじゃないけど…最近ずっとかけてなかったから、今日は  
なぜか、その気分だったのに……」

「どっか、違う場所に置いたんじゃない?」

「うづん。そんなハズはないんだけど……」

「と、とりあえず今日は、違う眼鏡で行けば? 時間もないし……」

「うづん。そうねえ」

「また帰ってきてから探しましょう。私も手伝うから」

「そうね。しかたないか……ありがとう、杏」  
「どういたしまして。じゃ、行きますか」  
「うん」

< E T A - 2 1 0 0 M >

「先輩方。聞き込みの結果ができました」

「聞き込み？」

「はい。例の七不思議の件ですが……」

「七不思議？　なんか面白そうな話だな」

「あゆみ？」

トラゲット。

その、お昼の休憩中。

私、杏、あゆみが昼食をとっていると、午前の営業を終えたアリスちゃんが合流。

そこにA R I A・カンパニーの灯里ちゃんや、アリア社長まで加わって、軽いパーティのような昼食会になっていた。

あゆみ。

あゆみ・K・ジャスマンは姫屋のウンディーネで、私達とはよく一緒にトラゲットをする友人。

彼女は（私を含め）他のウンディーネと違い、プリマにはなろうとせず、シングルのまま、

地域密着型であるトラゲットに、愛情をささげる、少し変わったウンディーネ。

でも性格は裏表の無い、はっきりとした性格で、姫屋の中でも人望

が厚く、同僚や上司からも頼りにされていた。もちろん、私の大切なお友達。

灯里ちゃん。

水無・灯里ちゃんは、ARIA・カンパニーのウンディーネで「ア  
クアマリン（遥かなる蒼）」の、  
通り名を持つ、プリマ・ウンディーネ。

私達とは、彼女がまだシングルだった時に、一度、トラゲットをし  
た仲。

彼女との出会いは、くじけそうだった私に、もう一度、元氣と勇氣  
をくれた、とても大切な出来事。

彼女はもともと、アリスちゃんの知り合いでもあったのだ。

そして、ARIA社長。

ARIA・ポコテン社長は、ARIA・カンパニーの青い目をした火  
星猫さん。

ここ、ネオ・ヴェネツィアの水先案内店では、航海の安全を守るシ  
ンボルとして、青い瞳の猫さんを、  
会社の社長とするのが、習わしだった。

ちなみに火星猫さんは、喋れはしないけど人の言葉は理解できるの  
だ。

「アリスちゃんは、あゆみとは初対面だったよね」

「え？ いえ、いや、はい。あ、あの、でっかい初めまして、あゆ  
みさん。私はアリスです」

「お？ うお、おう？ あ、ああ。ま、まったく初めまして、アリ  
スちゃん。ウチは、あゆみ」

ん？ なんだ、今のは…まるで……

「お、おいアトラっ。で、で、七不思議ってなんだい？」

「え、ええ。ああ、つまりそれは……」

あゆみの叫ぶような言い方に、私の思考が中断される。

私は、これまでの話をかいつまんで、あゆみと灯里ちゃんに話して聞かせた。

「あの第13款待倉庫。通称「ウエン・リーの間」は、なぜ、あんなにも嚴重に守られているのか……」  
アリスちゃんは、ゆっくりと話始めた。

「こんなに嚴重に守らなければならない理由…それは、ずばりっ」「ずばり？」

「あそこは『死の部屋』なのです！」

「死の部屋あ!？」

「はい。私が昼間、関係者の方々に聞き込みをした結果、そうゆう結論に達しました」

「聞き込みって……どうゆうこと？」

「実は、ペアの間で伝わっている伝説なのですが、この部屋で昔、いつまでたっても昇進できなかったペアの

ウンディーネが、将来を悲観して飛び降り自殺を図った…という、事件があったそうなのです」

ああ、確かにそんな噂あったなあ……

私は、遠くのカンパニーレ（大鐘楼）を仰ぎ見た。

「幸い命は取り止めたんですが、彼女は二度と、ゴンドラに乗ることはできなかつたそうです」

「……………」

「それ以降、夜な夜な、あの部屋ではいろんな怪奇現象が多発したため、このような頑丈な電子錠をかけて、封印したのだそうです」「なるほど……………」

「そしてそのウンディーネの名前が、ウエン・リー・アンって言うのです」

「アン…………ウエン・リー…………」

「はい。それでそれ以来、あの倉庫は『ウエン・リーの間』と呼ばれ、開かずの間になったのだとか……………」

「怖いですねえ」

灯里ちゃんが言う。

ほんと。怖い怖い。

「そして次の不思議。夜中に聞こえてくるピアノの音」

「はへえ？ アリスちゃん。それは解決したハズじゃ……………」

「え？ 灯里先輩。どうしてそれを、でっかい知ってるんですか？」

「はひっ。えっと、それはつまり……………」

「あ。それはさっき私が灯里ちゃんに話したの。そうよね。灯里ちゃん？」

「は、はひっ。そうです。そうなんです。だよ、アリスちゃん」

「ぶ、ぶいぶいにゆううつ」

アリア社長もあわてた感じで叫んだ。

アリスちゃんが、不審げに小首を傾げる。



「そういえば灯里先輩。その傷、どうしたんですか？」  
「はへ？」

「ほっぺに腕にヒザに……でっかい絆創膏さんです」

「うわっ。鋭い!!」

「灯里ちゃんは、なにか歩いてる最中に、転んじやったみたいなの」  
「ほへえ…アトラさん？ 私……」  
「うほんっ」

思わず、咳払いと、視線をばちばちっ。  
幸い、灯里ちゃんは、気付いてくれた。

「あっ、う、うん。そうなの。私ってばドジっ子さんなのかなあ  
…ま、まるでアテナさんみたいだね。あは…あはは……」

「…アテナ先輩ほどのドジっ子さんはいないと思いますが……大丈夫  
夫なんですか？」

「うん。ぜんぜん大丈夫。元気！元気！！ あはっ…あははは  
「……ならいいんですけど」

「ふっ。やれやれ。」

どうしてアリスちゃんはこう、妙なところでカンが良いのか……

「それよりアリスちゃん。ピアノがどうかしたの？」

私は、あわてて続きをうながした。

「え、はい。実は、あの音楽室でも昔、同じような話があったそ  
うです」

「えっ。そうなのアリスちゃん」

「はい。灯里先輩。声がでなくなったプリマが、やはりあそこで自  
殺を図ったとか……」

「ひ……………」  
「ぶぎつぷぶぷぶ……………」

灯里ちゃんとアリア社長が、真っ青になって絶句する。

「どうしたんですか、灯里先輩。アリア社長まで、急に、でっかい涙なんか浮かべて……………」

『あつあつあつ……………』と口をぱくぱくさせる灯里ちゃん。  
『ぶつぶつ……………』絶句しているアリア社長。  
まあ、気持ちは分からなくもないが……………

「それ以来、音楽室と第13款待倉庫では、不思議なことが起こるようになったとか……………」

「うーん」

「そして夕べ見た、中庭を走る銅像……………」

「はうあ？　そ、そんな…中庭でえ？」

「そうなんです、灯里先輩。……………って、なにかご存知なんです？」

「え、いえ、そんな。私がそんなコト、知るわけナイジヤナイデスカ……………」

灯里ちゃん。めちゃくちゃ不自然！！

「もともと、あの銅像は、オレンジ・ぷらねっとの創業者ユリアン・アマデウスの像なんです。

そして、でっかい問題なのは、なぜそれが走り出すか…と、いうことなんです……………」

・アリスちゃん。　もう走ることが前提なのね。

「私が調べた結果、ユリアンは、このオレンジ・ぷらねつとがネオ・ヴェネツィアの水先案内店として、

定着する前に、他界されたということ、きっとその心残りが霊となつて、銅像に乗り移り、

夜な夜な、オレンジ・ぷらねつとを徘徊するのではないかと……」

「すごい……」

私は、わざとらしく、感嘆の声をあげた。

「アリスちゃん。よくひとりで、ここまで調べたわねえ」

「ありがとうございます。アトラ先輩。私、でっかい頑張りました。で、あと残る不思議は……」

アリスちゃんは続ける。

「どこからともなく聞こえてくる不気味な唄声。夜中に食堂を這い回るモノ。そして私のオール。そして私のオール。」

この三つです」

「え？ オールの件は、アリスちゃんのカン違いじゃ……」

「そんなこと、でっかいありませんっ。私がアテナ先輩の横に掛けられるなんて、でっかい、ないです！」

真剣な顔で、力説するアリスちゃん。

「アリスちゃんは、アテナ先輩のことがホントに大好きなのね」

「え……いや、そうゆうわけでは……」

やっぱり顔を紅らめて、うつむいてしまうアリスちゃん。

その様子を、みんなは微笑ましく見ていた。

私はそつと、灯里ちゃんに目配せした。

灯里ちゃんは、小さくうなずいた後、打ち合わせ通り言ってくれた。

「あのね、アリスちゃん。もういいんじゃないかなあ」

「灯里先輩？」

「さつきアトラさんから聞いたんだけど、アリスちゃん。タベ大変だったんでしょ……」

「そうだ、アリスちゃん。あんまり危ないことはしない方がいいぜ」

「あゆみ先輩？」

「うん。私もそう思う」

「杏先輩……」

「ぷいぷーい」

「アリア社長まで……」

「アリスちゃん」

予定通り、最後は私が言う。

「昨日も言いましたが、アリスちゃんはプリマ・ウンディーネなんです。だから今回の件でも、あまり、

深入りは止めた方がいいと思います。だから、もう止めましょう。不思議は不思議のままでもいいんです」

「ダメです」

うわっ。即行否定！？

「私はどうしても、オレンジ・ぷらねっとの七不思議を解明するんです」

「どうして？ どうしてアリスちゃんは、そんなに七不思議にこだわるの？」  
「でっかい頑ななアリスちゃんに、思わず……といった感じで灯里ちゃんが訊ねる。」

「ネオ・ヴェネツィアの七不思議を経験した人が、それを言うんですか？」

「え……………」

「私だって……私だって、ネオ・ヴェネツィアの七不思議を体験したんです。でも、でも私は……………」

「私には、その資格がなくて……うらやましくて……………」

「アリスちゃん……………」

「だから私はせめて、オレンジ・ぷらねっとの七不思議を体験して、それを解明したいんです」

うつむき加減で、少し涙声で、叫ぶように言うアリスちゃん。

「アトラさん……………」

灯里ちゃんが、何か、すぎるような目で私を見てくる。

見回すと、あゆみや杏、アリア社長までもが、同じような目で、私を見てくる。

・そんな目で私を見るなああ！

私だって、私だって…………… ああ。まったくもう。

私は小さいサイ（ため息）をつくくと、仕方なく言った。

「分かりました、アリスちゃん。最後まで付き合いますよ」

「あ、アトラ先輩。ホントですか!？」

「ええ。しょうがありません」

「あ、ありがとうございます」

「でも……」

私は、釘をさすことを忘れなかった。

「危ないことは、なしですよ」

「は、はい」

「私も、私も手伝うっ」

「杏？」

「ウチも手伝うぞおおっ」

「あゆみ？」

「はひっ。私もおよばずながら、力になります」

「ぷいぷいにゅっ」

灯里ちゃんとアリア社長が、目をつるませながら言う。

「みなさん。でっかい、ありがとうございます」

アリスちゃんは、立ち上がると、深々と頭を下げた。

……

……まったく

まったく、なんて、お人好しで、おバカさんな人達なんだろう。

状況を理解しているのか？

本質を見誤ってないか？

なんのための打ち合わせだった？

……

……でも

でも、私は、そんな彼女達が、大好きだっ。

「それじゃ今夜もまた、24時に私と杏の部屋に来てください」

「はい。アトラ先輩」

「でも無理はしませんよ」

「はい」

「あゆみと灯里ちゃんは、サポートをよろしく」

「おう。まかせとけっ」

「はひ。了解です」

「ぱ、ぱぱぱあ〜い」

アリア社長が、私の服を引っ張りながら言う。

「はいはい。アリア社長も、しっかりお願いしますね」

「ぱあ〜い、ぱっ!」

こうして成り行きとして、今夜もまた、夜更かしが決定した。  
はあああ。

・アトラちゃん

なに、杏

ため息ぱっか付いてると、幸せ逃げるって言うよ

..... はああ.....

< E T A - 1 4 4 0 M >

誰かがドアをノックした。

「誰ですか？」

「あ、あのアリスです」  
早っ。

私は小さくドアを開いた。

「どうしたのアリスちゃん。まだ時間早いわよ？」

「すみません。アトラ先輩。実はちょっと問題が……」

「問題？」

「はい。あの、ここじゃ話せなくて……」

「あ、ごめん。ちょっと待って。シャワーあびてたものだから」

「あれ？先輩、さきほど大浴場にいませんでしたか？」

「え？ああ。その後、ちょっと汗かいちゃったものだから」

「はあ……」

「ちょっと待ってね」

私はいったんドアを閉めると、部屋を横切り、シャワー室の扉も閉めた。

それから改めてドアを開くと、アリスちゃんを部屋の中へと招き入れた。

「すみません。急にお訪ねして。あの…杏先輩は？」

「杏は打ち…いえ、用事で他の部屋に行ってるの。それで、どうしたの？」

「はい…実はアテナ先輩がいなくて……」

「いない？」

「はい。いつもこの時間には部屋で本を読んでいるのに……」

「いないの？」

「はい。実はアテナ先輩、この一週間、毎晩、夜中にこっそりと部屋を抜け出しては、どこかに行ってしまうんです」



「どこかに……」

「そして深夜。私が眠りについたのを、まるで見計らったかのように、アテナ先輩は戻ってくるんです。」

「でっかい不思議です」

「偶然じゃない？」

「そんな偶然が、一週間も続くでしょうか？」

「……今、アテナさんは？」

「まだ、大浴場だと思います」

「そう……ならアリスちゃん。今、いったん部屋に戻って、アテナさんがまた部屋を抜け出したら、

私達の部屋に来て。それから、アテナさんが、どこで何をしているのか、確かめましょう」

「分かりました。でっかい了解です」

「うん、じゃ、また後で」

アリスちゃんは、礼儀正しく頭を下げると部屋を出て行った。

私はドアを閉め、それからシャワー室の扉を開けながら、つぶやいた。

「プラン変更ですねえ」

E s s e r e c o n

t i n n u a t o ( つ づ く ) .

sette si chiedono 前編(後書き)

この話は長いです。

前・中・後編になります。

いえ、ただたんに携帯で見るとは長すぎる！

そんな理由なんです……(汗)

最後まで読んでいただければ、これに勝る幸せはありません。

中編です。

キャラクターが足りなくなつて、つい「あの人」を出してしまいました。

苦笑してスルーしていただければ幸いです。

それでは、しばらくの間、お付き合いください。

- 起承前 -

< ETA - 1380M >

「こつちに行ってみましょう」

私はそう言つと、アリスちゃんと杏を食堂の方へと誘つた。

「アリスちゃん。アテナさんは、本当にこつちに行つたの？」

「はい。杏先輩。途中まででしたが、でっかい確実です」

「この先にあるのは、食堂、玄関ホール、事務所、それと談話室……  
…くらいかな？」

「横手に行けば、ゴンドラ乗り場もありますね」

「うん。もしかしたら、残つてた不思議が解明できるかも……」

「アトラ先輩、予感がするんですか？」

「ええ、女の坎つてヤツかな？」

「でっかい、スゴいです」

「ごめん、アリスちゃん

やっぱり私の胸は、罪悪感で痛んだ。

「唄が聞こえる……」

杏が言った。

私達が耳をすますと、確かに、かすかだけど、どこからか唄のよう  
なモノが聞こえてくる。

「これはっ」

アリスちゃんが叫ぶ。

「ピアノの時と同じです。これは七不思議のひとつ。どこからともなく聞こえてくる、不気味な歌声……」

「でも、どこから？」

私達が今居るのは、なんの変哲もない、普通の通路だ。

しいていえば、配管の太いパイプが天井近くを這い回ってるだけで

……

…がたあん！

突然、廊下の先で、何かが倒れるような鈍い音が響いた。

「ひっ」

アリスちゃんが、しがみついてくる。

「い、今のは何でしょう……」

「食堂の方から聞こえてきたみたいだね……」

すると今度は……

…ずる…ずる…ぺた…ぺた……

と、何かが這いずるような音が。

「っ、これは」

私の腕をつかむ、アリスちゃんの手に力がこもる。

「深夜、食堂を這い回る、謎の物体？」

「行ってみましょう」

私達は食堂へと、ゆっくりと歩を進めた。

「ここで待っていてください」

食堂は、月明かりを受けて、ぼんやりとその姿を浮かびあがらせていた。

「私も一緒に行きます。 そんな、アトラ先輩にだけ、でっかい危険な目に……」

アリスちゃんが、間髪いれずに言う。

・ああ この子ってば……

「ありがとう。アリスちゃん。分かりました。では、一緒に行きましょう。でも約束は忘れないで。」

あなたはプリマ・ウンディーネなんですから

「アトラ先輩……」

「じゃあ、私の後から、ゆっくりと。 杏。アリスちゃんをお願いいね」

「らじゃっ……」

私達は、ゆっくりと食堂の中に入っていった。

そこには・

心揺さぶる、甘いにおい。

鼻孔をくすぐる、バターのにおい。

お腹の虫を刺激する、蜂蜜のにおい。

「アレサ部長？」

アリスちゃんが、びっくりしたように声を上げた。

そこには、山盛りのパンケーキのお皿を片手に持った、アレサ部長が立っていた。

アレサ部長。

アレサ・カニングム部長は、オレンジ・ぷらねつとの人事部長だ。でもその実権は、人事部長のそれを遙かにしのいでいた。

他店ですでに、プリマ・ウンディーネとして名声を得ていた彼女は、オレンジ・ぷらねつと移籍後、

中核メンバーとして、その実力をいかんなく発揮。

初期のオレンジ・ぷらねつとを支える、強力な人材だった。

やがて、プリマ引退後、請われて人事部長に就任した彼女は、そのウンディーネ以上に優れた手腕を

発揮して、数々の施策を実行。

その結果、オレンジ・ぷらねつとは、わずか十年で老舗の大手水先案内店「姫屋」をしのぐ

営業実績を上げることになった。

すごく切れる人。でも、その実、私達ウンディーネのことを、常に深く思ってくれている人。

そして今回の……

「うん？ あなた達、どうしたの？」

「え、いえ、あの、どうして部長が……アトラ先輩？」

アリスちゃんが困ったように、私を見る。

「どうしても、なにもアレサ部長がパンケーキ焼いてた」  
「っへ？」

「なに？ 私が夜食作ってちゃいけないの？」

「え、いえ。その……夜食？」

「そ。最近忙しくてね。深夜までお仕事。夜食にパンケーキでも食べてないと、やってられないわ」

「はあ……あの、アトラ先輩……」

「ええ。どうやら、そうゆうことね」

「はい。相手がアレサ部長であれば、コックさんも、警備さんも、でっかい何も言えないわけです……」

「うん」

「深夜、食堂をつろつくモノ……アレサ部長だったんですね……」

「で、あなた達は、こんな時間、こんな所で何をやっているの？」

「あ、あの七不思議……」

「え？」

「い、いえ。なんでもありません……」

「アリス・キャロル。いえ、オレンジ・プリンセスっ」

「びくっ」

「もう、就寝時間はとくに過ぎてるわよ。部屋に帰って、早く休みなさい」

「は、はい」

「若さを過信しちゃダメよ。もうホント。時間がたつのは早いんだから……私も昔は……」

「で、でっかい失礼しました！」

『過去の回想』（ぼやき・ともいう）に入り始めたアレサ部長に、アリスちゃんは、あわてて、その場を去っていく。



私と杏は、アレサ部長と顔を見合わせると、声を立てずに笑い合った。

去り際、アレサ部長は、こっそりと親指を立て、エールを送ってくれた。

< E T A - 1 3 5 0 M >

「ああ。びっくりしました」

アリスちゃんが、ため息まじりに言った。

私達は、アレサ部長と別れた後、玄関ホールの方へと歩いていた。

「まさか不思議のひとつが、アレサ部長だったなんて」

「ええ。とんだ盲点だったわね」

「はい。ほんと、でっかいびっくりです」

「あれ……？」

杏が不意に立ち止まった。

「どうしたの、杏」

「あれ、見て」

杏の指差す方向。そこはオール置き場。

そこでは、なにかの影が、ゆっくりと移動していた！

「あれは？」

「行ってみましょう」

「はい！」

通常、夜のオール置き場は、誰もいない。  
その必要がないからだ。

常夜灯が、ほのかな灯りをともしているだけで……

けれど今。

誰かがランプを片手に、その場所を妖しげに徘徊していた。

「あれは……いったい誰でしょう」

「と、ゆうか、いったい何をしているのかしら……」

やがて人影は、私達が隠れている通路のすぐそばまでやって来た。

「先輩方。どうしましょう」

「私にまかせて!」

「杏先輩?」

杏は言うが早いか、すばやく立ち上がると、その人影に向かって駆け出して行った。

「ちよつ。杏先輩!?!」

つられたように、アリスちゃんも飛び出して行く。

「こらあつ。そこで何をしてるのぉ!」

叫ぶ杏に、その人影は、ゆっくりと振り返った。その人は -

「蒼羽教官?」  
はやおみ

振り返ったその人は -

指導教官の蒼羽さんだった。

蒼羽さん。

蒼羽・R・モチヅキさんは、アテナさんの同期で、私達ウンディーネを指導するプリマ・ウンディーネ。

ゴンドラ・ツアーはしない代わりに、私達シングルやペアに、マン・ツー・マンで操舵や観光案内を教えてくれる、いわば、ウンディーネの先生 - といった人だ。

特に蒼羽教官は、私と杏の指導教官で、その厳格さでは、名が通っていた。

けれど、つい最近起こった、とある出来事で、私達は蒼羽教官の厳格さに秘めた、その本当の思いを知ることができた。

私達もつとも信頼する指導教官。いえ、先輩。

「ん？ 杏じゃないか。どうした」

「蒼羽……教官？」

「なんだい。二回も人の名前を呼んで……そっちにいるのは、アリスとアトラか？」

「あ、はい。蒼羽教官。こんばんは」

「こんばんは - には、ずいぶん遅い時間だがな。 ……どうかしたのか？」

「えっ。いえ、あの……蒼羽教官こそ、こんな時間に、こんな所で、何をなさってるんですか？」

「オールの点検」

「え？」

「お前達のオールの点検さ」

「ええ？」

「オールの汚れは、心の汚れだ。どんなにウンディーネとして優秀

でも、自分の使う道具を大切にしない奴はダメだ。  
だから私は毎晩、こうして全部のオールを点検している」

蒼羽教官は、ずらりと並んだオールを、いとおしげに見回した。

「そついえば、アリス。いや、オレンジ・プリンセス」

「は、はい」

「お前のオール。キレイに使ってるのは関心だが、二、三日前に見たとき、小さな亀裂が入っていたぞ。

気が付いてたか？」

「え……いえ、あの、すいません」

「いや、かなりじっくり見ないと分からない程度の傷だからな。しようがない。

だが、早めに修理しておいた方がいい。でないと、いずれ一気に壊れてしまうぞ」

「は、はい」

「明日の朝にでも言うつもりだったんだが、ちょうどよかったかな」

「あ、あの蒼羽教官」

「ん、なんだ」

「私のオールを見てくださったのは、二、三日前とおっしゃいましたよね」

「正確には三日前だな。それがどうかしたか？」

「い、いえ。なんでもありません。お休みなさい」

「ああ、早く休めよ」

オール置き場から立ち去る時、今度は私の方から、そつと手を合わせ、頭をさげた。

蒼羽教官は、子供のような笑顔を見せてくれた。

「……………」

「アリスちゃん？」

「結局……………」

「え？」

「結局、移動するオールの不思議は、蒼羽教官だったんですね」

「うん………… それぞれのオールを点検する内に、掛ける場所を間違えたってことね。」

特にアリスちゃんのは、手元に下ろして、じっくりチェックしてみたんだから……………」

「蒼羽教官。ああやって、みんなの分、見てくれてるんですね……………」

「ええ。………… 私達、頑張らないとね」

「はい」

「さっ。これでとうとう、残った不思議は、ひとつだけになったわね」

「はい。さっき聞こえた、謎の唄声ですね」

「そうっ。こうなれば、絶対今夜、その不思議も解明しましょうっ！」

「はい、アトラ先輩、杏先輩。でっかい頑張りましょうっ！」

そして、再び・

「唄だ……………」

あの唄が聞こえてきた。

たださっきと違って、今度の唄はだいぶ、はっきりと聞こえていた。

「談話室の方からです…でも、この歌声は……」

・さすがはアリスちゃん。もう分かったんだ。

私達は談話室に急いだ。

「アテナ先輩っ？」

そこでは、おりからの月明かりに照らされて、アテナさんが、まるで一枚の絵のように、優雅に唄を口ずさんでいた。

「この唄は……」

「ええ、祝福の唄。あの音楽室で見つけたのと同じ唄ね」

アテナさんの謳声は、静かに、しかし力強く、夜のオレンジ・ぷらねっとに響いていく。

「でも、確かにアテナ先輩の声は、よく響きますが、どうして食堂近くの通路まで届いたのでしょう。

でっかい距離あり過ぎです」

「秘密は、たぶんアレね……」

私は、談話室の高い天井の上を走る、太いパイプを指差した。

「パイプですか？」

「実はあれ、空調用ではなくて、飲料水用のパイプなの」

「飲料水用パイプ……」

「ええ。液体は気体より、音の伝導率が高いわ。だから、アテナさんの歌声が、あのパイプの中の水を伝わって、

あんな遠く離れた通路まで届いたのよ。もっとも誰の歌声でもそうってワケじゃなくて、やっぱり我が『セイレーン』<天上の謳声>の通り名を持つ、アテナさんの歌声だからってことね」

「……なるほど」

「あれ。アリスちゃん？ それにアトラちゃん、杏ちゃんまで……どうしたの？」

私達に気が付いたアテナさんが、声をかけてきた。

「どうした…は、こちらのセリフです」

「え？」

「アテナ先輩こそ、こんな夜中に何やってるんですか？ 私、でっかい心配してたんですよ」

「ああ、ごめんね、アリスちゃん。ちょっと唄のお勉強したくて…でも夜中に部屋の中で謳ってたら、

アリスちゃんに迷惑かって……」

「でっかい、迷惑ですっ」

「…アリスちゃん？」

「私がアテナ先輩の謳を嫌うわけじゃないですか！ そんな風に思われることの方が、でっかい迷惑です！」

「アリスちゃん……」

「さあ、部屋に戻りますよ。まだ歌い足りないんでしたら、ご自分の部屋でやってください」

「はあ〜い」

アテナ先輩が、ものすごく嬉しそうな笑顔を見せる。

「アトラ先輩。杏先輩。すいませんが、今夜はこの辺で」

「分かりました。アリスちゃん。また明日。アテナさんも、お休みなさい」

「はあ〜い。アトラちゃん。杏ちゃん。また明日ねえ」

「それでは先輩方。失礼します。お休みなさい」

そうしてアリスちゃんは、私達に向かって、とても嬉しそうに手を振るアテナ先輩を引きずるようにして  
自分達の部屋に帰っていった。

「どうやら、事件は解決かな？」

杏がちょっと、上目使いに私を見た。

「ええ。そうあってほしいわ。正直、もうくたくたよ……………」

「うん。じゃ、私達も帰ろっか」

「ええ。どちらにせよ、明日までね」

「うん。明日がね」

後に。

疲れていたが故に、その時の杏のセリフの意味を、ちゃんと考えられなかった自分を、深く後悔することになる……  
そう。全ては明日…………いえ、今夜に…………

< E T A - 0 9 6 0 M >

U n d i s c o r s o d i i n t e r l u d i o .

間奏話 ?

「あれ？」

「どうしたの、アトラちゃん」



「眼鏡がでてきた……」  
「え？ 昨日見つからなかった眼鏡？」  
「ええ。変ね。昨日、ここは確かに探したハズなのに……」  
「よかつたじゃない」  
「うん。でも……変ねえ」  
「な、何かの勘違いじゃないの？ ほら。よく言っでしょ？ 自分のことは、よく分からないものだって」

「うん…消えて現れる眼鏡」

「え？」

「これって、もしかして、七番目の不思議じゃないわよねえ……」  
「何、ぶつぶつ言ってるの？ それより、早く、朝ご飯食べに行こ」  
「もしそうなら、大変なことが……」  
「もう。アトラちゃん。先に行くわよ」  
「あつ、ちよつと待ちなさいよ。杏。杏ってば……」

< E T A - 0 9 0 0 M >

「杏先輩、アトラ先輩。聞いてください！」  
「な、なに。アリスちゃん、どうしたの」

オール置き場。

出遅れたせいで、食堂で一緒できなかった私達に、アリスちゃんが顔を見るなり詰め寄ってきた。

「ペアなお友達も、シングルな先輩方も、プリマのみなさん方も、なぜか、でっかい、でっかい、よそよそしいんです」

「ああ。それは、たぶん……」

「え、そうなの？ でもそれはどうゆう……」

「きつと私達が、オレンジ・ぷらねっとの不思議を、解明していることが原因だと思われれます」

「そんなこと……」

「いえ、絶対そうに違いありません。それに……」

「オレンジ・プリンセス。オレンジ・プリンセスはどこにいる？」  
不意に、アリスちゃんを呼ぶ声が、響き渡った。

「は、はい。アリス・キャロルはここにいます」

あわてて右手を上げて、返事をするアリスちゃん。

「オレンジ・プリンセス。あなたはもうプリマなのよ。自分の通り名を、ちゃんと使いなさい」

そう言いながら現れたのは、アレサ部長だった。

「アレサ部長？」

「オレンジ・プリンセス。今日の仕事が終わったら、すぐに私のところに来なさい。寄り道は許しません。」

これは、部長命令です。…それからタベの食堂での件は他言無用です。いいですね」

言うだけ言うと、アレサ部長は、足早に去って行ってしまった。

「先輩方。見ましたか」

「え？」

「アレサ部長の肩、小刻みに震えてました。あれは怒りをこらえていたのです」

「ええ？ でも何に怒っているの？」

「ですからあ」

アリスちゃんは、少し『ぷい』とふくれると、言い放った。

「あれは、絶対私達に、不思議を解いてほしくないのです」

・かわいい

正直、ふくれっ面のアリスちゃんは、かわいい。

私にはそっちの趣味はないけれど、思わず抱きしめたくなるような、かわいさだ。

「えええ？ そんなことって」

「いえ、それしか考えられません」

「でも、アリスちゃん。もう残ってる不思議なんてないわよ？」

「いえ、ひとつだけあります。それは……」

「それは？」

「第13款待倉庫、開かざるの間の『ウエン・リー』の正体です」

・おっと 確かにそれは盲点だった

「そうね。確かにそれは気になるわね」

「アトラちゃん？」

「分かったわ、アリスちゃん。私も少し調べてみるね」

「はい。ありがとうございます。ところで……」

「はい？」

「アトラ先輩。眼鏡変えたんですか？」

「ああ、これ？」

私は、かけていた眼鏡をはずした。

それは、今朝見つけた紅い眼鏡だ。

これは、私がシングルに昇進した時に買った眼鏡。  
今日のこの日。

全てがうまくいきますように。  
と、半分、縁かつぎでかけた、私のラッキー・アイテム。

「あ、ああ。そ、そうなんですか。それはそんなに、でっかい大切な眼鏡だったんですか」

なぜか急に視線をそらし、あわてだすアリスちゃん。

「どうかしたの？」

「い、いえ。なんでもありませんですじょ？」

「じょ？」

「さ、さあ。アトラちゃん。時間よ。早く、トラゲット乗り場に行きましょう」

「え？ ええ……」

杏が腕を引つ張りながら言う。

「なに？ 今の……」

「それじゃあね、アリスちゃん。また夕方」

「は、はい。杏先輩。アトラ先輩。お気をつけて」

「うん。ありがと。アリスちゃんもね」

こうして私と杏は、トラゲットのために右に。

アリスちゃんは、ゴンドラ・クルーズのために左に。  
それぞれ、分かれた。

こうして『その時』に向かって、事象は収束してゆく。

U n d i s c o r s o d i i n t e r l u d i o .

間奏話 ?

「お疲れ。アトラ、杏」

「お疲れ様、あゆみ。また明日ね」

「ああ。明日…な」

「……………」

「どうしたの、アトラちゃん」

「今日のおゆみ。なんか変じゃなかった？」

「え、そ、そうかな」

「うん。なんか妙にうきうきしてて」

「はひい。分かるんですか？」

「うん、まあ、付き合い長いから……………ね」

「それよりアトラちゃん。用意はいいの」

「ええ、なんとか間に合ったみたい。後は……………」

「頑張つてね」

「はいはい。でもちよつと、心が痛むなあ」

「ほへ？ どうゆうことですか？」

「んゝなんか、騙してるみたいだね」

「でも、それは、しょうがないよお」

「うん。確かにそうなんだけど……………ちよつとね」

「優しいんだねえ」

「な、なにバカなこと言ってるのよ。さ、さあ、行くわよ」

「らじゃっ…！」

「…それ、なんなのよ……」

< ETA - 0210M >

「お帰りなさい」

「アトラ先輩？」

午後六時半。

今日、すべての業務を終えて、最後のゴンドラが帰ってきた。

「お疲れ様です。って、他のゴンドラは？」

「みんな、もう帰ってきてるわよ。アリスちゃんが最後」

「そう…なんですか。 あっ、すいません」

私はアリスちゃんに手を貸すと、ゴンドラを収容した。

「どうしたんですか？」

オールをいつも通り、アテナさんのオールの横に掛けると、アリスちゃんが訊ねてきた。

「実はね。最後の不思議が解けたの」

「え？ 『ウエン・リー』の正体があったんですか？」

「ええ。行きましょう」

「行ってくて、どこへですか？」

「もちろん、第13款待倉庫。開かずの間。『ウエン・リー』の所  
よ」

「あ、でも私、アレサ部長の呼び出しを受けて……」

「大丈夫。ほんの少しだけだから。なんなら、後で私も一緒に行っ

てあげるわ」

「は…はい」

「じゃ、行きましょ」

私は、アリスちゃんをつながすと、ゴンドラ置き場を後にした。

この季節、ネオ・ヴェネツィアの夜は早い。

窓の外はもう三日月が輝き、おだやかな星空が広がっていた。

月明かりに照らされた通路を、私達は第13款待倉庫へと急いだ。

「あつ。アリスちゃん。こつち、こつち」

『開かずの間』の前で、杏が手招きする。

「杏先輩？」

「時間通りね」

「ええ。用意は？」

「OKだよ」

「うん。っじゃ、始めましょうか」

「らじゃっ」

私は、ドアノブに手をかけると、ゆっくりと扉を開いた。

『開かずの間』が開かれてゆく。

七不思議とは何か？

ウエン・リー・アンとは何者か？

そして真実を知ったアトラに迫る危機とは！？

次回、堂々の大団円。

乞う、ご期待！！(大嘘) 　ごめんなさいm(――)m



sette si chiedono 後編(前書き)

解決編(笑)です。

それでは、しばらくの間、お付き合いください。

- 起承前 -

< ETA - 0180M >

私はアリスちゃんの手を引いて、部屋の中へと入った。  
杏が背後で扉を閉める。

「やつ…真つ暗。 あ、アトラ先輩？」

真つ暗な部屋に、突然、やさしげな小さな光が灯る。  
その光に照らされて、浮かび上がる人影は -

「アテナ先輩？」

そのアリスちゃんの声が合図だったかのように、アテナさんは、ゆつくと歌い出した。

「これは……祝福の唄？」

アテナさんが歌う『祝福の唄』が『ウエン・リーの間』に響き渡る。  
手に持った、小さな口ウソクの、ほのかな炎に照らしだされた、アテナさんの姿は、まるで、

この世のすべてを喜び、愛す、女神のようだ。

その歌声は、魂をゆさぶり、至極の彼方へと、私達を運んでいく。  
私達は身じろぎもせず、ただじつと、アテナさんの歌声に聞きいっ

ていた。

やがて、セイレーンの天上の謳声は、静かに、ほんとうに静かに、夜のしじまに消えていった。

歌い終わったアテナさんは、アリスちゃんに向かって、とても優しく、とても穏やかな微笑を浮かべた。

「あ………」

けれど、アリスちゃんが、何かの声をあげる前に、今度はピアノ調が響き始めた。

不意に、部屋の中を光りが満たす。

「!?!」

驚くアリスちゃんを、暖かな光りが取り囲む。

「これは………」

オレンジ・ぷらねっと、すべてのウンディーネが、そこにいた。アリスちゃんを中心に、ピアノに合わせて、みんなが「祝福の唄」を歌いだす。

そこには、アレサ部長、寮長さん、蒼羽教官の姿もあった。

皆、それぞれに口ウソクを手に、ゆっくりと、けれど力強く「祝福の唄」を歌い続ける。

みんなの声がひとつとなり、大きなうねりとなって、部屋の中を漂っていく。

高く……

低く……

遠く…

近く…

すべての心がひとつになって、ひとつの唄を歌い続ける。

それは私達、オレンジ・ぷらねっと……いえ、アクアに生きとし生ける物、その全てを祝福するかのよう……

やがて、その唄も、終わりを迎え、光りがひとつ、またひとつと消えてゆく。

最後に残ったアテナさんの光りも消え、部屋はまた、闇に満たされた。

「あ、あの……」

刹那。

今度は爆発的な光りが、部屋の中を照らしだす。

と、同時に、クラッカーの激しく弾ける音が、室内に木魂した。

「おめでとう、アリスちゃん!!」

「おめでとう、オレンジ・プリンセス!」

「おめでとーございます。アリス先輩!」

みんなの「祝福の声」が響き渡る。

「え? え? え? これはいったい。なんなんですか? なん

なんですか?」

「ごめんね。アリスちゃん」

歓喜と祝福の音が響く中、私はまだ、とまどっているアリスちゃんに向かって頭を下げた。

「アトラ先輩。これはいつたい……」

私は答える代わりに、一点を指差し微笑んだ。  
そこには――

「おめでとう オレンジ・プリンセス VIVA! 飛び級昇格!」

――と、書かれた横断幕が掲げられていた。

< ETA - 0100M >

「結局、私は騙されてたつてことですか？」  
アリスちゃんがまた、かわいくスネた。

「ごめんなさいね。アリスちゃん。成り行きだったのよ」  
「成り行き？」

「ええ。ホントはもっと小さなサプライズ・パーティーのつもりだったの。そしたら、それを聞きつけたアレサ部長が……」

「聞きつけた――とは、ずいぶんな言われようね」

「アレサ部長？」

「まあ、いいですけどね。でも実際、渡りに舟だったわ」

「どうゆづことでしょう」

「うん。実は、このところ、とても忙しかったでしょ。みんな休

みなしで働いてて……

だから、ちよつとした息抜きを考えていたの。　そしたら、たま  
たま偶然にね」

「私達のサプライズ・パーティのことを知った」

「ええ。どうせなら、みんなを巻き込んで、イベントにしてしまおうってね」

「そうなんですか……」

「みんな否もなく、即決で賛成してくれたわ。　アリスは人気者ね」

「あ、ありがとうございます」

アリスちゃんが、照れたように下を向いた。

「でも、そうになると、隠すのが大変っ」

「え？」

「だって、これだけのイベントですもの。　会場の準備や進行の段取り。唄の練習。パーティ用の料理の打ち合わせと準備。」

そして何よりも、アリスちゃんに知られないようにするための防諜手段の確保……

夜中まで働いて、仕事以上に疲れたわ」

「あ、だから夜食を……」

「ええ。もつともあれは、ここでずっと用意してくれてた、みんなへの差し入れでもあったのだけど」

私は周りを見回した。

大勢のウンディーネが、ペアやシングル、プリマ関係なく、楽しげに談笑している。

そう。みんなの協力があつたからこそ、このイベントは成功したのだ。

「灯里先輩までいるのは、でっかいびっくりでした」

「えへへ。ごめんね、アリスちゃん」

灯里ちゃんが、ウインクしながら、両手を合わせる。

「灯里先輩も、最初から関わっていたんですか？」

「アリスちゃんのことなら、灯里ちゃんも呼ばないとね」

「アテナ先輩……」

「でもいきなり、ピアノを任されるとは、思わなかったよお」

そう。あの『祝福の唄』のピアノ伴奏は、灯里ちゃんだったのだ。

「ピアノなんか、しばらく弾いてなかったし、ARIA・カンパニーにピアノはないし……」

「それで、ウチで練習してたんですか？」

「うん。でもあの時、アリスちゃんが音楽室に来たときは、あせつたよ」

「まさか、あんな小さな音までアリスちゃんが気が付くなんて。だから私達はワザと大きな声で、

アリスちゃんを追いかけて、中の灯里ちゃんが気付くようにしたの」

「じゃ、じゃあ。あの時、灯里先輩は、音楽室の中にいたんですか？」

「ええ。準備室にね」

「準備室……」

「私が準備室のドアを開けたとき、灯里ちゃんってば、ARIA社長と一緒に、頭だけダンボールの中に突っ込んで

隠れたつもりになってたのよ。もう、どうしようかと……」

「そっか。私、準備室の中は見なかったから……」

「ええ。だから私はあわててドアを閉めて、大声で『中には誰もいない』なんて言ったの。もし、アリスちゃんが

それでも中を見ようとしたら、一巻の終わりだったわね」

「中を見たら……といえば、昨日も危なかったな」

「蒼羽教官？」

「夕べ、夜中、アリスはアトラの部屋を訪ねたる？」

「はい」

「実はあのとき、私達もアトラの部屋の中にいたんだ」

「ええ？ 私達って……」

「私と、アテナ。アレサ部長。灯里ちゃん。それに寮長さん」

「アテナ先輩もあそこにいたんですか？ それに部長に寮長さんや、灯里先輩まで」

「最終の打ち合わせをしてたんだ。それと、お前をどう誤魔化すかってな」

「……………」

「そしたら急に、お前が訪ねてきたんで、あせったよ」

「あ、でもみなさん。どこにいたんですか？」

「シャワー室」

「へ？」

「シャワー室だよ……。あんな狭い所に、大のオトナが五人も。もう大混雑」

「アリスちゃんを見送った後、私がシャワー室の扉を開けると、五人が妙に絡まって……可笑しかったわ」

「アトラ……見る分には楽しいだろうけどなあ。こっちは、大変だったんだぜ」

「すいません。蒼羽教官」

「顔が笑ってるぞ……」

けれど、そういう蒼羽教官の顔もまた、楽しげに笑っていた。



「え、じゃあ、あのオールの際は……」

「ああ。毎晩、私がみんなのオールを点検してるのホントだ。けどそれを、オールの不思議にミスリードしたのは、杏だ」

「ミスリード……」

「ごめんね、アリスちゃん。 オールを掛け間違えのは、実は私なの」

「杏先輩？」

「ちょっと借りていって、返すときに、どうやら間違えたみたいなの。 アテナさんの横に必ず掛ける - なんて知らなかったし」

「っじゃあ、オール置き場のあの時。 杏先輩が一番に飛び出して

いったのも……」

「あれも打ち合わせしてたの。 蒼羽教官に『こらっ！』なんて… 気持ちよかったわあ……」

「杏…お前、明日、腕立て200回な」

「うきやあっ！」

蒼羽教官の冷たい一言に、杏が悲鳴を上げる。

またひとしきり、笑い声が響く。

「あ、でも、どうしてオールを？」

アリスちゃんの問い掛けに、私はそっと灯里ちゃんに目配せをした。

「アリア社長っ」

「ぱぱぱあ〜い」

灯里ちゃんの声に答えて、アリア社長がリボンを巻いた箱を持ってくる。

「はい。アリスちゃん」

「これは……」

「私達からの、お祝いのプレゼント」

「お祝いの……」

「アリスちゃんのプリマ昇進を祝って」

「あ、開けてもいいですか？」

「うん。もちろんだよ」

「これは……」

プレゼントの箱の中から現れたもの。

それは、ガラスで作られた、〈NO・18〉のオールを持った、ウンディーネの小さな像だった。

「きれい……」

「ヴェネチアン・ガラスの職人さんに作ってもらったんだけど、オールは、どうしても本物が見たいって言われて……」

「それで、杏先輩が？」

「うん。だけど返すときに間違えちゃった。ごめんね」

「い、いえ、そんな……でっかい嬉しいです」

アリスちゃんは、ガラス像を見ながら微笑んでくれた。

「それじゃあ、残りの不思議ってゆうのも……」

「そう。まず、どこからともなく聞こえてくる歌声だけ……」

「えっ、あれってアテナ先輩の唄の練習じゃなかったんですか？」

「アテナさんが、いつもあそこで練習をしていたのは事実。それに、その声が飲料水のパイプを伝わって聞こえてきたのよね」

「……………」

「でもあれは本来、アテナさんだけじゃなくて、みんなで練習してたの」

「みんな…で」

「ええ。だからみんなの『祝福の唄』は完璧だったでしょ？」

「あ……」

「でもそれが何故か、どこからともなく聞こえてくる、不思議な歌声になって……」

「たぶん、事情を知らない警備員や事務の人が噂を広げたんだろ」

「そう…なんですか」

「ええ。ですからあのシャワー室の日。アテナにああやって一芝居、うってもらっただんです」

「じゃ、じゃあ。ここ一週間、アテナ先輩が毎晩、こっそり抜け出してたのは……」

「ああ。みんなへの歌唱指導だったんだよ」

「ごめんね。アリスちゃん。なんか心配かけちゃって」

「……いいんです」

「アリスちゃん？」

「私はいつつも、アテナ先輩のことを、でっかい心配してるから、今更いいんです」

「アリスちゃん……」

「でも、おかげで、すっごくいい唄を聞かせてもらいました。で

っかい…でっかい、ありがとうございます」

「アリスちゃん」

アテナさんが、泣きそうな顔で微笑んだ。

「じゃあ、あの走る銅像ってゆづのも……灯里先輩？」

「し名答」

私は笑いながら答えた。

「準備室の件でパニックになった灯里ちゃんは、あわてて逃げ出そうとして、たまたま私達の後ろを横切った。」

それを見た杏が大騒ぎを始めて、誤魔化しようがなくなったの

「ごめんなさい。アトラちゃん」

「もちろん。その後、杏には、コンコンと説教しました。はい」

「てへっ」

小さく舌を出す、杏。

これだから、この子は憎めない……

「あせった灯里ちゃんは、準備中の第13款待倉庫の中に逃げ込んで、そこから中庭に逃げた」

「中庭に？」

「そう。見れば分かるんだけど、あの窓の向こうに大きな木があって、その枝をうまく伝えれば下に降りれるのよ」

「……………」

「それで、さらにあせった灯里ちゃんは、中庭を突っ切るようにして、森の中に逃げ込もうとした。」

頭にアリア社長を乗せたままね」

「あつ。だから異様に頭の大きな銅像に見えたんですね」

「ええ。でも灯里ちゃんも大変だったみたいね」

「はひ」

今度は灯里ちゃんが、照れたように言った。

「木の根に足は取られるし、枝であちこち、擦り切れるし……………」

「あ、だから絆創膏さんに……………」

「うん。で、最後にはアリア社長を頭に乗せたまま、転んじやった」

「えへへ」

と笑う灯里ちゃん。アリア社長も『ぷいにゆう』と頭をかいた。

「転んだ……それが私には、突然、消えたように見えたんですね」

「ええ……そして今朝のこと」

「今朝のこと？」

「今日一日、アリスちゃんに対する、みんな様子がおかしかったのは……もう分かるでしょ？」

「みんな、今夜のことを知っていたから……」

「そう、実はみんな、早くパーティをしたくて、うずうずしてたの」

「それで、それが私には、でっかい、よそよそしく映ったんですね」

「ええ。それとアレサ部長」

「あの出頭命令ですか？」

「そう。あれはアリスちゃんが、変な寄り道なんかして時間がズレないようにするための布石。

そして、サプライズの一環」

「……………」

「だからあの時、アレサ部長の肩が震えていたのは、怒ってたんじゃない。

笑いをこらえるのに必死だったのよ」

「オレンジ・プリンセス」

「え、は、はい」

不意な私の呼びかけに、アリスちゃんはとまどったように、返事をした。

「灯里ちゃんを追いかけたあの時、あの踊り場で、私が言ったことは、私の本心です。」

でも、それをあの時、ウソを誤魔化すように使ったことについて、私は罪悪感を感じています」

「そんな……アトラ先輩」

「それに今回の件、すべてにおいて、私は、あなたを騙してました。ごめんなさい」

「アトラ先輩……いえ。ありがとうございました」

「ありがとうございます？」

アリスちゃんは、まっすぐに私を見て、言ってくれた。

「私、こんな素敵で、ヤサシイウソをつかれたことに感謝してます」

「……」

「願わくば、アトラ先輩も、同じことが起きたとき、笑って許してくれることを、どうか希望します」

「……アリスちゃん。なんのこと……」

「さあ、そして最後の不思議ですね」

アリスちゃんが、大きな声を出した。

「なぜココが『開かずの間』なのか。『ウエン・リー』とは何者なのか？ さっ、アトラ先輩。教えてください」

「え、ええ……」

なんだ。今のは……

「もうここが『開かずの間』じゃないってことは、気付いてますよね」

うなずく、アリスちゃん。

「そう。ここは決して『開かずの間』ではありません。もちろん、飛び降り自殺を図ったウンディーネなんかもいません。

ただここは昔から、ウンディーネ達の無断外出に使われていたん

です」

「無断外出？」

「ええ。無断外出。無断外泊。逆に無断進入」

「無断進入？」

「こつそり、部外者を中に入れて、お泊りさせるの。昔は今より、ずっと規則が厳しかったから」

「はあ・・・」

「今でこそ、お母さん…寮長に前もって許可をもらえば、夜中の外泊も、友達のお泊りも許してもらえるけど」

昔はね。そんな事、まったく許されなかったんだ」

「蒼羽教官？」

「寮長が今の立場になってから、ずいぶん優しくなったよ。前は外出もままならず、社外の友達にも会えず、

この寮の中で、ずっと籠の鳥状態。正直、息が詰まっていた」

「そうなんですか……」

「でも、ある時。ひとりのウンディーネが、ここから出ようとして足をすべらせ、大怪我をしてしまったの。

それ以来、ここは危険ってことで、鍵がかかるようになったの」

「えっ。ちょっと待ってください」

「なに？ アリスちゃん」

「さつき灯里先輩が、音楽室から逃げるとき、第13款待倉庫から外に出たって言いましたよね」

「ええ」

「じゃあ、そのとき鍵はかかってなかったんですか？」

「ごめんなさい」

「……………」

「その時だけじゃなく、この一週間。この部屋の鍵は、かかってい

なかつたんです。

一番最初の日に、アリスちゃんが鍵に触ろうとした時、私があわてて止めたの、覚えてます？」

「は、はい。警報装置があるかもしれないって……」

「実は、そんなもの、ココにはありません」

「ええ！？」

「実はすでに、あの中では、飾り付けが始まっていたんです」

「ええ〜！？」

「だから私は、鍵のかかったふりをし、アリスちゃんが触ろうとするのを、警報装置が - なんて嘘ついて

止めたんです。 触れば、簡単に開いてしまいますから」

「そうだったんだ…あの、じゃあ、問題の『ウエン・リー』さんは……」

「この窓から降りようとして、大怪我を負ったのが『ウエン・リー・アン』って事は、もう分かってますね」

「はい、なんとなく」

「正解です。彼女はその後、ウンディーネを引退しました。もちろん、怪我が原因ではありません」

「もしかして、辞めさせられたんですか？」

アリスちゃん怒ったように叫んだ。

「いえ、そうじゃありません。逆に彼女の行為が、会社に反省を促しました。そこまで、ウチのウンディーネは、

追い詰められてるのかと」

「……………」

「そして、アレサ部長の就任と同時に、アンはウンディーネを引退。ああ…これは純然たる体力の問題だったそうです」

「その時『ウエン・リー・アン』は40歳過ぎ。もう少しでグラン



マの記録に手が届くほどだったのよ」

「ほへえ…グランマに……」

「それでいて、こここの窓から木の枝伝いに、下に降りようとするなんて、なかなか豪快でしょ？」

「アレサ部長・部長は『ウエン・リー・アン』さんを、ご存知なんでしょうか？」

「もちろん。彼女は昔、私の、指導教官でもあったんですから」

「部長の教官さん…で、今、その『ウエン・リー・アン』さんはどちらに？」

「知りたいの、アリスちゃん」

「当然です、アレサ部長。その方は、いわば、私達の大恩人です」  
「そう…そうね。じゃ、アトラ、お願い」

私は、アレサ部長、蒼羽教官に視線を合わせた。

二人とも、実に楽しそうに、いたずらな視線を返してくる。

「それでは、ご紹介します」

私は、ゆっくりと立ち上がると、一人の女性の後ろに回りこみ、その肩に両手を置いた。

「私達の先輩。『ウエン・リーの間』の名前の元になった女性。そして私達の大恩人。ウエン・リー・アン女史です」

我らが『お母さん』

こと・アン寮長は、いつもと変わらぬ、穏やかで優しげな表情で、照れたように微笑を浮かべてくれた。

「私、この三日間。アトラ先輩や杏先輩と一緒に、オレンジ・ぷらねっとの七不思議っていうのを探してました」

素敵なパーティだった。

美味しい料理。豊富な飲み物（もちろん、アルコール類は禁止だ）  
とろける様な各種デザート。

ピアノの伴奏に合わせての生オケ大会。そして、お馴染みビンゴ大会。

みんなの弾けるような笑顔のうちに、無事「アリスちゃん。プリマ昇格記念パーティ」は幕を降ろした。

今、私は、自分の部屋に引き上げるべく、アリスちゃんや灯里ちゃん達と共に、ゆっくりと廊下を歩いていた。

「いろんな謎や不思議があって、でっかい怖いことや、楽しいことがあって」

でも、その中で私は、ホントは、いろんな人に助けってもらってるんだなっことに気が付きました。

みなさん。でっかい、ありがとうございました」

「アリスちゃん……」

「特にアトラ先輩っ」

「ん？」

「今回のことでは、お世話になりました」

「ううん。結果的には、アリスちゃんを騙すようなことになって、

ほんと、ごめんね」

「はい。確かにちよっと悔しいですけど、まだ挽回のチャンスは、あります」

「それって、どういう……」

「前にアトラ先輩、言ってたじゃないですか？ 人は誰でも、自分のことは、よく分からないものだって……」

「……………」

部屋の前に到着した。

ノブに手をかけ、ドアを開けようとした私に、不意にアリスちゃん  
が言った。

「アトラ先輩。その紅い眼鏡、でっかいお似合いです」

「え？ ええ…ありがとう」

「でも、その眼鏡つてば一回消えて、また現れたんですね」

「アリスちゃん。どうしてそれを？」

「これは不思議のひとつです」

「ええ!？」

「今まで私達が見つけた、六つの不思議。それに、この眼鏡  
の不思議を含めて、アトラ先輩は今日、

七つの不思議を体験したことになります」

「ちよ、ちよっと、アリスちゃん？」

「アトラ先輩…七つ目の不思議を見つけた人は、大変なことになる  
って噂。ほんとうなんですよ」

「え？」

「ネオ・ヴェネツィアの七不思議。その全てを見つけた灯里先輩は、  
でっかい、大変なことを経験しました」

「な、な、なに？」

私が振り向くと、灯里ちゃんは、薄笑いを浮かべながら私を見ていた！

あわてて視線をやれば、杏やアリア社長までもが、妖しげな微笑を浮かべ私を見ていた。

「みんな…いつたい……」

「さあ、今度はアトラ先輩の番です。でっかい大変です！」

アリスちゃんがドアを開ける。

部屋の中は、暗黒の闇が広がっていた！

思わず後ずさる私の背中を、誰かが強く押した。

私は、つんのめるようにして、部屋の中に転がり込んだ。

そして・

ぱっああああああん！

「きゃあああああ！」

乾いた音が、私の心を引き裂いた。

< E T A - 0 0 0 0 M O n T i m e ! >

「アトラ、おめでとう！」

悲鳴を上げて、しゃがみ込む私の頭の上から、聞きなれた声が聞こえてくる。

「え？ この声は……」

部屋の灯りがともる。

「おめでとう。アトラ」

「おめでとうございます。アトラさん」

「おめでとうございます。アトラ先輩っ」

四方から『祝福の声』が、あびせかけられる。

これは…これは、デジャ・ビュ？

つい数時間前、目の前で体験した記憶が走馬灯のように蘇える。

「やっぱり、でっかい大変なことが起こりましたね……」

顔を上げると、アリスちゃんが満面の笑みを浮かべながら、手を差し伸べていた。

「これは…これは、いったい……」

「はあ〜い！ 今度こそ本物のサプライズ・パーティ！ アトラちゃん、裏・誕生日、おめでとう！〜！」

杏が踊るように言った。

見れば、部屋の真ん中の机の上には、19本のろうソクが立った、巨大なホールケーキが……

「なあにいいいいいい！？」

「やっちまつたかい？ アトラ。はいはい。そんな顔しない」

「あゆみい？」

「アトラ。裏・誕生日おめでとう」

「今日はご苦労様」

「おめでとう、アトラちゃん」

「裏・誕生日おめでとう。アトラ」

「アレサ部長、蒼羽教官、アテナさん。それに、お母さん？」

いつの間にか部屋に先回りしていた、アレサ部長達が笑顔で言う。

「アトラさん。裏・誕生日おめでとうございます。 えへへ…とつても素敵ですね」

「ふいふいにゆっ」

「灯里ちゃん…アリア社長……」

アリスちゃんの手を借りて、ようやく立ち上がる私に、みんなが声をかけてくる。

・これは、いつたい……

「アトラ先輩。裏・誕生日、おめでとうございます。

ほんと。人は誰でも、自分のことは、よく分らないものなんですね……でつかい、お返しです」

アリスちゃんが、茶目つ気たつぷりに微笑む。

「私の、裏・誕生日……」

・ああ。そういえば……

確かに今日は私の、裏・誕生日だ……

『裏・誕生日』

それは、一年が二十四カ月ある、このアクアで、

本当の誕生日の他に、十二カ月後の同じ日に、もう一度、お誕生日を祝うとゆう、風習のこと。

アリスちゃんのこと、すっかり忘れてた……

「サプライズのサプライズ。えへへ。びっくりした？」

「杏………あんたって子わあ！」

「ふげげげげ」

私は、いきなり杏のほつぺたを、つねり上げた。

「いひゃい…いひゃいよ。あひよらひゃん………」

「ええ〜い。うるさい！ うるさい！ いったい、いつからアンタはっつ」

「一ヶ月前からだよ〜お」

「あゆみ？」

「杏から相談があつてね。アトラの裏・誕生日をしたって。それで灯里ちゃんや、アリスちゃんを巻き込んで

サプライズ・パーティを企画したのさ」

「アリスちゃんまで？」

「ああ。アリスちゃんも何のためらいもなく、賛成してくれたぜ」  
「……………」

「あひよらひゃん…ぎぶ。ぎぶ。ぎぶ………」

私が、つまんでいた手を放すと、杏はほつぺを両手で押さえ、涙声で言った。

「はっつ…ほんと、アリスちゃんの昇進祝いと一緒にするつもりだったの…でも、アリスちゃんの方の話が、

どんどん大きくなっちゃって…それにアトラちゃん、アリスちゃんの方にかかりつきりだったから………」

「杏……」

「だから、アトラちゃんの方は、こうやって、さらにサプライズってコトにさせてもらったの」

「あ…じゃあ、あゆみとアリスちゃんは、前から顔見知りだったの？」

「ああ。だからあの時、アトラに改めて聞かれたときは、正直あせったぜ」

「はい。でっかい、あせりました」

あゆみとアリスちゃんが、顔を見合わせて笑う。

「ああ、だからあの時、ふたりの挨拶が、不自然だったのか……  
それに昨日の、杏のセリフ……」「明日が」…か

「それじゃあ、今日一日、あゆみの態度が妙に浮ついてたのは……」  
「あれ？ 分かつちやてたか？」

「まあ、なんとなく……」

「ふふつ。 あゆみちゃんってば、今日のこと。ものすごく楽しみにしてたのよお…ふががっ？」

私は再び、杏のほほを引つ張り始めた。

「ほんとに、アンタって子は。アンタって子は、私までダメして…」

「ふがががが……」

杏が、うめき声を上げながら何かを指し出した。  
それはリボンのかかった小箱で……

「はひゅい、あひよらひゃん。ふれれんと」

「プレゼント？」



箱を開けると、そこには、真新しい眼鏡が……

「みんなで選んだの。気に入ってくれると、いいんだけど……」

私は、新しい眼鏡を箱から取り出すと、今の眼鏡とかけ替えた。

「うわあ。すっごく素敵です。アトラさん」

「ああ。よく似合ってるぜ」

「でっかい、ぴったりです」

「あ、ありがとう。みんな……あっ」

私は、ようやく気が付いた。

「じゃあ、この紅い眼鏡が行方不明になったのは……」

「ごめんねえ。その眼鏡を選ぶために、どうしても必要だったの、まさかあの日。アトラちゃんが、ぴったり、その眼鏡を選ぶなんて思わなかったから」

杏がまた『てへっ』と舌を出した。

「杏……」

「なに、アトラちゃん」

「あ、ありがとう……」

「ううん。選んだのは、みんな。 私はその取りまとめをしただけ……ふげげっ？」

私は三たび、杏のほほを引っ張りながら叫んだ。

「もう、覚えてなさいよ！ あんたの時は、もっとスゴいこととしてあげるんだから……！」

「あ、あひよらひゃん。にやいてるん？」

「うるさいー!!」

「ふげげげえげっ」

「よかったわね。アトラ……」

いつもの優しい笑顔で、アン寮長が話かけてきた。

「ここに来た時のあなたは、友達もできず、本ばかり読んでいた。

私は、ずいぶん心配したものよ」

「お母さん……」

「それが今では、こうして、あなたの誕生日を祝ってくれる、こんなにたくさんの、お友達ができた……とっても嬉しいわ」

「……………」

「あゆみさん。灯里さん。それにアリア社長さん」

アン寮長が、三人に声をかけた。

「は、はい？」

「はひっ？」

「にゅっ？」

「みなさんの宿泊を許可します。今夜は、ゆっくり楽しんでいってね」

「あ、ありがとうございますー!!」

「はひっ。楽しめます!!」

「ぱいぱあーいにゅっ!!」

三人が、まるで夜店で、おこづかいをもらった子供のように、顔を

見合わせて笑った。

「よし。そうと決まれば、酒だ。おい、アトラ、酒持ってこい」

「蒼羽教官？ いえ、まだ私達、飲酒適用年齢では……」

「だあれえがあ。お前等に飲ますか！ おい、アテナ、部長。飲みましょう！」

「そう言うと思って、アクア・ワイナリーの赤を用意しておいたわ。初物よ」

「うおおっ！？ さすがわ、アレサ部長！ なかなか手に入らないといわれている、あの幻のワインを……！」

「どうやって手に入れたかは、不・思・議ってことで」

「ラジャ！」

蒼羽教官が、そう言って敬礼した。……あつ

「私、お酒はあんまり飲めないんだけど……」

「ああ。アテナは飲むな。私が全部、いただくっ」

「ええええ」

「アン寮長もいかがですか？」

「ええ。それじゃあ、一口、いただきますしよつかね」

「そうこなくつちゃ……！」

「アトラ先輩……」

アリスちゃんが、私の耳元でささやいた。

「なに、アリスちゃん」

「今回の私達、結局、でつかい、ダシに使われたって感じですね」

私は改めて、室内を見回した。

目の前には -

早くも酔いが回ったのか、大騒ぎしている、蒼羽教官、アレサ部長、アテナさん。そして、アン寮長。

その横で、こっそりワインを飲もうと狙ってる、あゆみ。

それを必死で止めようとしている、灯里ちゃん。

やっぱり、もちもちぽんぽんを、まあ社長に噛まれて悶絶してる、アリア社長。

右手に杏。

左手にアリスちゃん。

そして背中には、オレンジ・ぷらねっと、全てのウンディーネ……

私は二人の肩に手をやると、やさしく抱き寄せた。

今、私の周りには、こんなにも素敵な仲間達がいる。

こんなにも素晴らしい仲間達に出会えた、それこそが『不思議』

「いいんじゃない。こんなにも楽しいんだから！」

- V I V A ! S E T T E S I C H I E D D O N O ! ! ! -

私は心の底から、この不思議に感謝した。

「先輩方。オレンジ・ぷらねっと、三つつの秘宝って、ご存知ですか？」

アリスちゃんが、大盛の漬物を前に聞いてきた。

「三つつの秘宝？」

よせばいいのに、杏が、納豆を、かき混ぜながら聞き返す。

「だから糸、引いてるうちゅうにいいいいい！」

「さらに、幻の古代遺跡。 未確認生命体。 空飛ぶゴンドラ。

とある禁忌の操舵術の書……」

「そういえば、そんな話、聞いたことがあるわ！」

「杏う！？」

「びっし！」

と、音が鳴るくらいの勢いで、アリスちゃんが言い放った。

「さあ、先輩方。私と一緒に、でっかい謎に挑戦です！！」

「アリスちゃん！？」

「それって、すごく楽しそうな、お話ね…はぐふっつ！」

「アテナ先輩…ですから、ちゃんと冷ましてから食べてくださいって、いっつも言ってるでしょ？」

熱々の、きつねうどんを、そのまま口に入れてしまったアテナさん

が、妙な踊りをおどり始める。

私は

私は…

……

……

うわああんっ。

不思議も、謎も、ドジッ子さんも、もう、こりこりよおおおお

!!!

我が愛すべきオレンジ・ぷらねっとは今日も、笑い声（と、一部悲鳴）が絶えない、いつもの素敵な朝を迎えていた。

i n e - s e t t e s i c h i e d o n o ( 七 不 思 議 ) - l a f

ETA" en Estimated Time of Arri  
val 航空機 船舶 車両 あるいはコンピューター・ファイ  
ルが ある場所に着くと予想される

時間、時刻の事・「到着予定時刻」(wikipedia  
より意訳)

sette si chiedono 後編(後書き)

こんな長い話に付き合っただき、ありがとうございました。

ほんの少しでも「ニヤリっ」としていただけたなら、これに勝る幸せはありません。

ありがとうございました。



c o m e t a      d i      m a t t i n a (前書き)

おおおおおっ

よ、読み終えた後に、みなさまの体が少しでも痒くなれば、これに  
勝る幸せはありません(鹿馬)

藍華&アル、ファンの方々、なにとぞお許しを(大汗)

c o m e t a     d i     m a t t i n a

第六話 『c o m e t a     d i     m a t t i n a』

「明けの明星が輝く頃、一つの光りが宇宙に向かって飛んでいく。それが僕なんだよ。……さよならアンヌ！」  
「待ってっ。 ……行かないで！」  
「アマギ隊員がピンチなんだよ！」

シューマンのピアノ協奏曲イ短調の調べが、甘く、切なく、しかし力強く、流れていく。

「……………うつつ。えぐ、えぐ、うぐぐぐ」  
「泣くな、泣いちゃダメだあ」  
「ぐあああつ。ウツデイ。 お前には、あのセリフに込められた思いが分からないのかつ？」  
「分かる。分かるとも、あかつきん！ でも…でも泣いちゃダメなのだ。 ぐすん……………」

水の惑星AQUA。

かつて火星と呼ばれていたこの惑星は、大規模なテラ・フォーミングの結果、

今では、水を満面とたたえる、青い海の星へと生まれ変わっていた。

その「アクア」の都市のひとつ、ここ、ネオ・ヴェネツィアにおいて『バーカリイ』といえば、

『チケーティ』といわれる、ワンコインのおつまみをつまみながら、気楽にコーヒータ、

ワイン、ビールなどを楽しめる、スタンド式の軽食堂のことだ。

レストランやカフェのように気取らず、カウンターでの立ち飲みしながら、親しい仲間達と騒げる、いわば『下町の社交場』

そんな店の一つで、リバイバル放送中の古いTV番組を見ながら、二人の男がビール片手に泣いていた。

「マン・ホームの平和を守るため、仲間を助けるため、愛する恋人と別れを告げる……奴こそ、オトコだっつ」

「しかも宇宙人と告白されても、その愛を守ろうとするなんて……彼女も素晴らしいのだった」

「うおおおつ。 ウッディ！」

「ぐあああつ。 あかつきんくん！」

「ガシッ！」

と、ハグを交わす男、二人。

本人達は、感極まったの事なんだろうが、傍から見れば気持ち悪い事、この上も無い……

「いいお話ですねえ」

やたらと盛り上がる二人を尻目に、その横に立つ、黒いマントを羽織った、小柄な少年が静かに言った。

「おおおつ。 アルよ、お前もそう思ふかあ！？ って、噛んだぞおつ」

「うぐぐぐつ。 アルもオトコなのだあ！」

「はい。 セブンだけに、面白さも、ウルトラ級（Q）以上です」

と、ほとんどマニアにしか分からない冗談を言いながら、アルと呼ばれた少年は、微笑んだ。

彼の名前は、アルバート・ピット。

通称、アル。

その黒いマントと、黒い丸眼鏡が特徴的だ。

彼は、ネオ・ヴェネツィアの地下深くにある中央ターミナルで、アクアの重力を1Gに保つ、

地重管理人「ノーム」と呼ばれる仕事をしていた。

ちなみに、先程から異様な盛り上がりを見せている、二人の男。

どちらも、アルの幼馴染である。

背中に大きく赤く「炎」の文字をあしらった白い半纏を着ている男。あかつきんと呼ばれている彼。

名を出雲・暁という。

地重管理人のアルとは正反対に、空に浮かぶ「浮き島」（正式名称・AFI-0078）で、アクアの気象管理、

火災之番人「サラマンダー」と呼ばれる仕事をしている。

そしてもう一人。

その特徴的な顔立ちと、いかにも着崩したような奇抜な服装をした男は、風追配達人「シルフ」のウッディ。

本名を、綾小路・宇土・51世。

風追配達人「シルフ」とは、自動車の乗り入れが禁止されている、ネオ・ヴェネツィアで、エアバイクを使い、宅配の仕事をしている人達のことをいう。

地重管理人「ノーム」

火炎之番人「サラマンダー」

風追配達人「シルフ」

そして

「ウンディーネ」と呼ばれる、ゴンドラを使った観光案内を行う、水先案内人が、ここネオ・ヴェネツィアにおいて地水火風の四大妖精と呼ばれる、代表的な職業だった。

「うつつ。 よく分からないが、アルも大絶賛なのだ」

「よし。 アル。 ウツディ。 素晴らしいこの話に乾杯だっ」

「おつつ。 なのだ！ って、おや？ ……アルは、ビールじゃないのか？」

「はい。 実はこの後、人と会う約束があるので、アルコールはちよつと……」

「んが？ 誰となのだ？」

「それはあ……」

「ははあ〜ん」

言いよどむアルに、暁は、いたずらな笑みを浮かべた。

「がちゃぺんか？」

暁の質問に、アルは困ったように答える。

「がちゃぺんって……彼女にはちゃんと、藍華さんってお名前が……」

「うつせいつ。 あんなのはなあ、がちゃぺんで充分だ！」  
「暁くん……」

「だあれがあ。 がちゃぺんよ。 このポニ男！」  
凜とした声が、響き渡る。

「藍華さん？」

夕暮れせまるネオ・ヴェネツィア。

その紅い夕陽を背に受けて、腰に手を当て仁王立ちしている、勇ま  
しげな姿がバーカリイの入り口に浮かび上がる。

なぜか肩には、ぴんつと背筋を伸ばした、青い目の黒猫が乗っかっ  
ていた。

元気いっぱいいな、ショートな髪。

意思の強さを輝かせる、大きな瞳。

気が緩めば、炎を噴出しそうな唇。

彼女こそ、姫屋のプリマ・ウンディーネ「ローゼン・クイーン（薔  
薇の女王）」こと、藍華・S・グランチェスタだ。

このネオ・ヴェネツィアの水先案内店の老舗、姫屋の跡取りにして、  
若干、18歳でカンナーレジョ支店の支店長を

任されている傑者。

ちなみに、彼女の肩に乗っている黒猫は、姫屋の社長猫で、ヒメ社  
長と言う。

「だいたい、アンタこそ、相変わらず何よ、そのポニーな髪は！」

「うつせえ！ 誰がポニーだ！」

「あんたよ。 ポニ男」

「んだとお、がちゃぺん」

「あによお！」

「まあまあ、お二人とも……」

ぎりぎりぎりーと、火花を散らす二人に、アルが割って入る。

「お二人が仲良しなのは、分かりましたから」

「『 ちつがあーーーうー！ 』」

暁と藍華のツッコみが、やっぱり仲良く同時に炸裂した。

「藍華さん。どうしたんですか。約束の時間には、まだ少し早いですよ」

ようやく、にらめっこを止めた藍華に、アルが訊ねた。

「え？ あ、うん。予定してた会議が明日に変わっちゃったから…  
べ、別にアルくんに会いたいからって

強引に抜け出してきたわけじゃないんだからね……」

「藍華さん？」

「えへへ。ホントは藍華ちゃんってば、会議を副支店長の人にお願いで、無理矢理抜け出してきたんですよ」

「灯里いいい!？」

「藍華先輩、でっかい我が儘さんです。副支店長の、あゆみさん泣いてました」

「後輩ちゃんっ!？」

「ぶいぶうううい」

「いつ…アリア社長まで……」

藍華の後ろに、制服が違う二人のウンディーネと、一匹の猫が笑いながら立っていた。

「どうしたんですか、藍華さん。顔、赤いですよ」

「ぎゃああああああっス！ なんでもない！ なんでもないのよ。アルくん。」

灯里っ。後輩ちゃん。バラすの禁止！」

藍華が真っ赤になって叫ぶ。

そんな藍華の後ろに立つ、二人のウンディーネと一匹の猫。

一人は、ARIA・カンパニーの水無・灯里。

「アクアマリン（遥かなる蒼）」の通り名を持つ、プリマ・ウンディーネ。

つい最近、水先案内人の中で、トップクラスの技量と人気を誇り「水の三大妖精」と呼ばれていた中の一人、

アリシア・フロレンスから、店の経営権をも譲渡された、新進気鋭のウンディーネ。

もう一人は、オレンジ・ぷらねっとのアリス・キャロル。

灯里や藍華と同じ、プリマ・ウンディーネ。

通り名は「オレンジ・プリンセス（黄昏の姫君）」

彼女は最近、ウンディーネ史上、初のペアからの「飛び級昇格」を果たし、わずか15歳でプリマ・ウンディーネとなった、

今、話題の女の子だった。

ちなみに「通り名」とは、見習いの「ペア」、半人前の「シングル」とは違い、一人前の「プリマ」のみが名乗れる特別な「第二の名前」のことだ。

「ぶいぶい」



そしてアリア社長。 ARIA・カンパニーの社長であり、灯里の唯一の上司。

ここネオ・ヴェネツィアの水先案内店では、昔から航海の安全を守ると言われている、青い瞳の猫を社長とする習慣があった。

特にアリア社長のような火星猫は、小学生並の知能があり、喋れずとも人の言葉は十分に理解できた。

地球猫である、姫屋のヒメ社長を、こよなく愛している。

まあ、結果は、残念ながらまるで出ていないが……

「ありや。灯里ちゃんにアリスちゃん。それにアリア社長まで……お久しぶりなのだ」

「はい、ウツデイさん。今朝以来ですね。玉子ありがとうございました」

「いえいえ。どういたしまして。なのだ」

「玉子？」

アリスが不審気に訊ねる。

「うん。ウツデイさんってば、実家で鶏を飼い始めたんだって。それで毎朝、生みたての玉子を、ARIAカンパニーに届けてくれるの」

「……むすっ」

「ん？ どうしたのアリスちゃん」

「なんでもありません。それより、ムツくん。お酒なんか飲んで、でっかい大丈夫なんですか？」

「大丈夫なのだ、アリスちゃん。今日は、もう帰るだけなのだ」

「ちゃんとロープ・ウェイで帰ってくださいね。お酒飲んでエア・バイクに乗るなんて、でっかい禁止です！」

「……アリスちゃん。何をそんなに怒っているのだ？」

「わ、私は何も怒ってなんていません」

「ふふくん。なるほどお……」

「な、なんなんですか、藍華先輩。なんでそんな薄笑いなんですかっ」

「つまりい……」

藍華は、ニタニタと笑いながら言った。

「後輩ちゃんは、自分も毎朝、玉子が欲しいと……」

「……………」

「お子ちゃまねえ。ふふ」

「で、でっかい、うるさいです!!」

「ほへえ…？ アリスちゃんのトコは、社員食堂があるから、玉子はいっぱいあるでしょ？」

灯里の発言に、藍華はおろか、アリスまでもが、深い深い、ため息をついた。

「灯里先輩…でっかい天然です」

「灯里…天然禁止！」

「ええ〜？」

「んで…お前ら、こんなトコでなにしてんだ？」

「何してんだとは、ずいぶんね、ポ二男」

「ポ二男って言うな！」

「ふんっ 私は、アルくんにお呼ばれたの」

「わ、私達は藍華ちゃんの付き添いです」

再び、険悪になりかける暁と藍華の間に、灯里があわてて割って入る。

「付き添い？」

「はい。お仕事が終わって、たまたま一緒になった、私とアリスちゃん  
の所に、偶然、藍華ちゃんが通りかかって……」

「これから、チケーティの美味しいお店に行くからって……でっかい、  
付いてきました」

「お前ら二人とも、馬に蹴られるぞ？」

暁があきれたように言う。

「はひ？ 馬に蹴られる……ですか？」

「ポ二男さん。でっかい意味分かりません」

「後輩ちゃんまで、ポ二男って言うなつ。意味くらい自分で調べ  
ろ」

「むむむむ……」

「昔にマン・ホームの唄に、そう言うのがあるんですよ」

「唄？」

「正確には『都都逸』って言うんですけど。」

『人の恋路を邪魔する者は、馬に蹴られて死んじまえ』って。

これはマン・ホームの中世前半。1860年代、日本州の江戸  
という街で流行った、七・七・七・五文字の言葉を使った、

いわゆる、言葉遊びの一種で、意味は……」

突然、言いよどむアル。

「どうしたのアルくん」

「いえ……なんでもありません。……暁くんっ」

「ぶしゃしゃしゃしゃ」

紅くなって睨むアルに、暁は、変な笑いで答えた。

「ええつと……なんでもなくってですねえ。……そうそう。馬に蹴ら

れたといえは、ノストラダムス2世って人がいまして……」

「はい？」

「あの高名な預言者でもあり、医学者でもあつたノストラダムスの弟子と称していた人なんですが…」

「いや、アルくんってば？」

「この人は自分の予言を成就させるために、自分で街に火をつけて燃やそうとしまして…」

「……………」

「それが見つかって、逃げようとして、その時、馬に蹴られて亡くなつたつてお話がありました…」

「アルくん！」

「ばんっ

と、藍華がカウンターを激しく叩いた。

「ぷいにゅっ！」

「にゃふうつっ！」

アリア社長と、ヒメ社長が脅える。

けれど藍華は、そんなことにはお構いなしに、アルを指差しながら叫んだ。

「おやぢの雑学禁止！！」

「ええっっ」

「で、今日はなんの用なの？」

すっかり『スネて』しまった藍華が、冷たく言う。

「あわわわわ…藍華ちゃん。藍華ちゃん。落ち着いて……」

「あによお。灯里は、ポニ男と話してればいいでしょ」

「そんなあ……」

「そ、そうだぞ、がちゃぺん。なぜ俺様が、もみ子と話さなければならぬんだ」

「へっ。ホントは話したいくせに」

「な、なななななな、なにを言うかあつ。お、お、俺様はだなあ」

「アンタねえ。こないだもARIA・カンパニーに行つて、日暮れまで灯里と話込んでたでしょう?」

「な、なななななな」

「あ、藍華ちゃん。あれは、暁さんが心配して、様子を見に来てくれて……」

「そ、そうだぞ。がちゃぺん。オレ、俺様は、最愛のアリシアさんが去つた後の、ARIA・カンパニーの様子が気になって……」

「ふんっ。つまりそれつて、灯里が気になつたつてことでしょ。」

ホント、へたれなんだから……」

「なななななな……」

「藍華先輩、でっかい恐いです」  
アリスがポツリと言う。

「そうゆう後輩ちゃんだつて、こないだウツディさんと、デートしてたじゃない」

「で、デートあ?」

「いったい、なんの話なのだ?」

アリスが叫び、ウツデイが怪訝そうに訊ねる。

「後輩ちゃん、こないだウツデイさんのエア・バイクの後ろに乗って、空飛んでたでしょ」

「あ、あ、あれは、お天気が良かったので、たまたま乗せてもらって……」

「そうそう。お隣の島まで、お弁当持って、お空を、ひと泳ぎしてきたのだ」

「む、ムツくん……」

「それをデートって言うのよ」

「……」

アリスは下を向いてしまった。耳が真っ赤だった。

「帰る……」

不意に藍華が言った。

「にゃん……？」

ヒメ社長が、何事？ とでも言いたげに、小さく声をあげた。

「私、帰る」

「藍華ちゃん？」

「藍華先輩？」

「ごめん。灯里、後輩ちゃん。また今度」

「あ、藍華さん。待ってください」

あわてて、アルが引き止める。

「あによお。 ぜんぜん、つまんない。私、帰る」

「藍華さん……」

アルのセリフに、ますます藍華の顔がくもる。



「実は僕、この近所にアパートを借りまして……」  
「……へっ?」

ぐるぐるし始める藍華に、アルがなんでもないことのように言った。

「今日が引越で… 暁くんと、ウイディくんは、手伝ってくれてたんです」

「引越し……」

「はい。地重管理人の寮もよかったです、やっぱり地下だと星が見れませんから……」

「そ、そうなの……」

「はい。それで誰よりも先に、藍華さんを、ご招待したくて……」  
「……」

「じゃあ、行きましょうか。 みなさん、ここの代金は、後で僕が払いますので、ゆっくりして行ってください」

「はあ〜い。 ご馳走様なのだ」

「おう。 まあ、ご馳走様。 ごゆっくり。 うっしっし……」  
ビールを片手に掲げながら、返事をするウツディ。  
意味ありげな笑みを浮かべながら、答える暁。

灯里とアリスは、まだ状況が飲み込めていないらしく、ただ手を振って二人を見送る。

アリア社長が、藍華と一緒に走り去っていくヒメ社長を、涙目で見送っていた。

アルに手を引かれながら、夜のネオ・ヴェネツィアに行く藍華。  
なぜか心臓が高鳴る。

通り過ぎる人達に、自分の鼓動が聞こえないのが不思議だ。

後ろから付いてくるヒメ社長の足音が、うるさいくらいに響く。



「えと、えと、えと………」

「って、男の人の部屋にいくのよね？」

「って、アルくん一人よね？」

「って、アルくんと私だけ？」

「って、アルくんと二人きり？」

「って、アルくんと………」

「きゃあああうううう……っス」

「……です」

再び、ぐるぐる始める藍華に、アルが示したのは小さな縦長のアパートだった。

「ちょっと階段が狭くて長いから、気をつけてくださいね」

アルは、そう言うと、相変わらず藍華の手を取って、ゆっくりと階段を上がり始める。

狭い階段だった。

人がすれ違うにも苦労しそうだ。

自然、アルと藍華の距離は、さらに縮まって、まるで藍華がアルに抱きつくような格好になってしまった。

「大丈夫ですか？」

「……う、うん」

結局、アルの腕を抱きかかえるように階段を登って行く、藍華。

長い階段だった。

途中で登り辛そうなヒメ社長を肩に乗せる。

やがて目の前に、なんの変哲も無い扉が現われた。

アルがポケットから鍵を取り出す。

・ああ…合鍵作んなきゃ……

「藍華さん？」

「うきやつ、な、なに？　なに？　なにっ？」

埒もない考えに走っていたせいで、アルの声が聞こえてなかった。

・やだ。私つてばなにを……

藍華は、あわてて戻ってきた。

「さあ、どうぞ。まだちよつと散らかってますが……」

「あ、はいはい。　お、お邪魔します……」

小さく、質素な部屋だった。

ヒメ社長が肩から飛び降り、走りこんで行く。

大きなワンルームに、小さなキッチンと、お風呂やトイレが付いている。

家具もそれほど多くなく、部屋の真ん中に、小さなテーブル。

壁際には、それだけは異常に多い本棚と書籍の数々。

窓際に置かれたベットには、ヒメ社長がすでに、ここは私のモノだ！

・と宣言するかのように、寝っ転がっている。

引っ越してきたばかりとゆうのに、そこはすでに、アルの穏やかで暖かな性格が滲みでているかのような、

ゆったりとして落ち着いた、不思議な空間だった。

・住めなくもない

お寝坊なアルくんを、フライパンを叩きながら起こす私

小さなテーブルを挟んで、朝食を取るアルくんと私

ヒメ社長と一緒に、アルくんをお見送りする私

掃除や洗濯をしながら、アルくんの帰りを待つ私

仕事から帰ってきたアルくんの服を受け取りながら訊ねる私

食事にする？

お風呂にする？

それとも……………

「ぎゃあああああっス！ 恥ずかしい想像・禁止！禁止い！ 自分

！…」

「藍華さん？」

三たび、ぐるぐるし始める藍華に、アルが不思議そうに声をかける。

「なんでもない、なんでもない。なんでもないのよ。アルくん」

「はあ…あ、それで、ぜひとも見ていただきたいものが……………」

「はいはい。もうなんでも見る。見ますですよ。なんですか。なん  
でしょうか。アルくん！」

「ええと……………」

藍華の勢いに押されるように、アルは部屋の片隅を指差した。

「あちらです」

「そついえばアルの奴。移籍の話、断ったんだった？」

暁がウツデイに訊ねた。

「そうなのだ。アル、きつぱり断ったそうなのだ」

「移籍？ なんのことですか？」

灯里が、レモネードをすすりながら聞く。

「ああ、実は地重管理部から、天文研究部への移籍の話があったらしいんだが、アルの奴、断っちまいやがって……」

「ええ、どうしてですか？ 天文研究部って、でっかいエリートさなんだって聞いたことありますけど」

「あいつは、出世には興味はないってことだな」

暁が、まるで自分のことのように、得意げに言う。

「でもアルさんは、大学で天文学の講義も受けてるんでしょ？」

「確かに講義は受けてるらしいんだが、それと研究部門への移籍とは違うんだと」

「どうゆう事でしょう」

「アルは、星や月には興味はあるけど、それとこれとは違うとゆうことなのだ」

「……ムックン。でっかい意味不明です……」

「つまり、アルは、宇宙の声よりも、地重管理人として、まだまだ、このアクアの声を聞いていたいそうなのだ」  
「ウツデイも、なぜか誇らしげに言う。」

「…アルさんらしいです」

「はひ。ホントですねえ」

「よし。アルに乾杯っ」

「おうっ。なのだ」

「むすっ ……結局、飲みただけなんですな」

「アリスちゃん……」  
灯里が困ったような笑みを浮かべた。

藍華は困ったような笑みを浮かべていた。

「これは……」

「はい。僕の天文台にようこそ」

アルが、アルターナに立ちながら、満面の笑顔で言った。

「アルターナ」とは本来、物干し場を意味する。

土地の狭いネオ・ヴェネツィアでは、こういった屋根の上にベランダのような小さなスペースを作って、建物の有効利用が図られていた。

アルが指し示した方。

そこにはこの「アルターナ」へと続く、小さな階段があった。

やっぱり、アルに手を引かれて、外に出た藍華の前に「アルバートの天文台」とかかれた看板がぶら下がっていた。

「アルくん……の天文台……」

確かにそこには、少し大きめな望遠鏡が置いてあった。

「でも……」

はつきり言って、みすばらしい……

「これ見えるの？」

藍華が自信なさ気に、望遠鏡を指差した。

「ええ。見た目は小さいですけど、倍率は結構高いんですよ……ほら、

のぞいて見てください」

アルに勧められるまま、藍華は望遠鏡をのぞきこんだ。

「うわあ……」

そこには予想以上に鮮明な星空が、映し出されていた。

「あれ？」

藍華が不審気な声をあげる。

「どうしました？」

「アルくん……あれってもしかして……」

煌く夜空の中、ひとつだけ小さな尾を引きながら、揺らめいている星があった。

「はい。あれが藍華さんに見せたかったモノ。N A A T - m s  
0 6 s ・ アイカ彗星です」

「はひ？ アルくんってば、彗星を見つけたんですか？」

「ああ。そんでその彗星に『アイカ』って名前をつけたんだそう  
だけ」

「アイカ彗星……自分で見つけた彗星に、藍華ちゃんの名前を付けるなんて……アルさん、とつても素敵ソングですう」

「でも……なのだ」  
「でも？」

感動に浸っている灯里を横目に、ウツデイが深刻そうに言い放った。

「ひとつ間違えれば……三割増しなのだ」

「……はひ？」

「……やっぱり、でっかい意味不明です……」

「っしやああああ……」

アリア社長が足元で、なぜか頭を抱え、呻いていた。

「あ、アルくん……あ、ありがとう」

藍華が下を向きながら、小声で言う。

照れくさくて、アルの顔をまともに見れなかった。

「せっかく見つけた彗星に、私なんかの名前使ってくれて……」

「僕はずっと藍華さんが彗星のようだと思っていました……」

「え？」

「やさしくて、強気で、けれどちょっと泣き虫さんで、でも笑顔がとてもかわいらしくて……」

「アルくん……」

「そしていつも元気一杯に、ものすごい勢いで前に突き進んでいく

……そう、まるであの彗星のように」

「……」

「僕は不安だったんです」

「え？」

アルは小さく鼻を掻きながら、続けた。

「藍華さんは、あの姫屋のグランチエスタ家の一人娘。いずれ姫屋の跡を継ぐ人。」

そして僕は、いち地重管理人にしか過ぎません。 言ってしまうえば、身分が違います。

だからいずれ、あの彗星のように、藍華さんも、離れて行ってしまうのではないかと……」

「そんなんっ

そんなことない!!」

藍華は、ぶんぶんーとかぶりを振った。

声も出せない程、強く、激しく。

「ありがとう。でも僕は弱虫ですから……」

「アルは弱虫なんかじゃない……あいつは、アルはホントに強いよ」

「強い……アルくんがですか？」

「ああ」

暁がビールのお代わりを頼みながら言った。

「アルは、本当に強い。」

アルは、本当は俺様達より年上なのに、昔からいつも俺様達と同じ目線でモノを見てくれる。

アル……って呼び捨てにしても、いつも微笑んで答えてくれる。俺様には、ああ、マネできねえ」

「暁さん……」

「昔、こんなことがあった」

暁が思い出すように、少し上を向いて話始める。

「ガキの頃、アクアの平和を守ることが使命だと思っていた俺様は、ある日。」



勢いあまつて、すんげえ恐い、おやぢン家の植木鉢を割っちまっ  
てな……」

「うわあ……」

灯里とアリスの顔が引きつる。

「けど、謝ったのはアルだった」

「ほへ？」

「アルくんが？ ど、どうして……」

「理由はいまでも分からねえ。 あいつが何も言わなかったからな

……」

「……」

「後から聞いた話じゃ、アルの奴。 そのおやぢの家の周りを、一  
週間も毎日掃除させられてたらしい。

不覚にも、俺様もウツデイも、そのことに全然、気付かなかった。  
でもある日、偶然、そのおやぢの家から、

出てくるアルを見つけて、聞いただと、アルの奴はただ一言、

笑いながら 『もう、終わりました』 って……」

「……」

「その日から俺様とウツデイは、アルの生涯の友達になった」

「けど、アルはアルなのだ。 それでも何も変わらないのだ」

本当はその日。

暁もウツデイも、アルを抱きしめながら、二人で号泣し、謝ったも  
のだが……

アルは、そんな二人の涙と鼻水で、ぐちゃぐちゃになりながらも、  
嫌がるそぶりも見せず、ただ静かに微笑みながら、二人の肩を、や  
さしく抱いてくれたのだ。

「アルくん、スゴいですね……」

「スゴいといえばな…もうひとつ」  
「ほへ？」

「考えてもみる。あいつは浮き島っていう、いわば自分の巣から、一人で地重管理人つて闇の中へ降りていったんだ。」

「浮き島で暮らす俺や、ウツデイには、とてもそんな真似は、できねえ」

「まったくそうなのだ」  
「ムツくん？」

ウツデイが海老のマリネのチケーティを食べながら言う。

「アルは、浮き島にいる火炎之番人の、あかつきんより、空を泳ぐ風追配達人の私より、さらに高い所を見ているのだ。」

それはとうてい私達には、考えられることではないのだ」

「あいつは弱虫でも、へたれでもねえ」

「うむ。アルは私達の中で、一番強いのだ」

「暁さん、ウツデイさん……」

「お二人とも、でっかい、いい人です……」

アリスが、灯里の気持ちをも代弁してくれた。

「ぶいにゆ」

アリア社長が、深く頷いた。

「僕は弱虫なんです」

アルが繰り返す。

「だからあの彗星に藍華さんの名前をつけたんです」

「……どうゆうこと？」

「それは……あの彗星は、もう少しでアクアを飛び去って行きます。また見られるのは何年も後のことです。」

ですから、たとえ、何年……何十年たっても、あの彗星に名前をつけることで、あの彗星を見ることで、僕が藍華さんのことを思い出せるようになって……」

アルは口を閉ざす。

その沈黙に耐えかねたのように、藍華の心が叫び声をあげる。

・違う違う違う

私が、アルくんから離れる？

そんなこと そんなこと……

私は絶対っ

「アルくん、私っ」

「でも間違いました」

「えっ？」

けれどアルは、藍華が何かを言う前に、再び言葉を紡いだ。

「あの彗星を見てて気が付いたんです。あの彗星は何年、何十年たっても、必ずもう一度、ここに帰ってきます。」

必ず帰ってくる。それなら僕が信じて待っていればいいんだって。

僕ができることは、藍華さんをずっと信じて、ずっと見守ってあげることなんだって……」

「アルくん……」

藍華の双眸から、じわりと光るものが湧き上がってくる。

「そういえば、もみ子もマンホームからアクアに一人で来たんだよな。偉いな」

「暁さん…いえ、そんなことはないです。私は、ただウンディーネになりたい一心で……」

「それでも…だ。逆に思う。火炎之番人になるために、俺様はマン・ホームに一人で行けるだろうかってな……」

「暁さん…ありがとうございます」

・灯里先輩とポニ男さん、でっかい、いいムードです。

アリスは少しドキドキしながら、二人の会話を盗み聞きしていた。

灯里が満面の笑顔で言う。

「それならこれから私のこと、ちゃんと灯里って呼んでください」

「な、な、いや、お前っは、もみ子で充分だ！ もみ子だ。もみ子

」！

「ええええ」

・でっかい、へたれです。

アリスはため息をついた。

「あははは。あかつきんらしいのだ」

ウンディーも、ビールで顔を真っ赤にしながら、陽気な笑い声を上げる。

・ムツくんも、せっかく私がいるのに、さつきから飲んでばかり……

「おや、アリスちゃん。ぜんぜん、食が進んでいないのだ。ほら、このマグロのカカオ風味は、ここの名物なのだ。

さあ、食べ給え」

・こっちはこっちで、

…でっかい鈍感野郎ですっ

アリスは、いまいましてげに手の中のオレンジ・ジュースを、ストロ  
ーで一気に吸い上げた。

「私もね…ちょっと不安だった……」

藍華がそつとアルの肩に頭をのせる。

「藍華さん？」

「どうしてアルくんは、私にこんなにしてくれるのか。 どうして、

こんなに優しいのかって……」

「……………」

「アルくんは誰にでも優しいし…でも私は特別なのかなって……ね  
えアルくん」

「はい」

「どんな理由があるの？ 私聞きたい。アルくんが…その……わ、  
私に引かれる理由……………」

「やっぱり、引かれ合う力…なの？」

「引かれ合う力の正体なんて、分かっているんですけど」  
アルが星空を見上げながら言う。

「引かれ合う力…引力というものは、ある物体の質量があれば発生するものなんです、

ではなぜ、質量があれば引力が発生するかは、実は誰にも分かっていないんです」

「ええ？　じゃ、じゃあ、分からないままアルくんは……」

・引かれ合う力だって

燃え尽きずに届くこともあるんだって

影響を受けるのは　月だけじゃないんだって

そう言ってくれたのに……

そう教えてくれたのに……

今までのことは、いったい……

藍華の頭が、再び、ぐるぐる回りだしそうになる。

けれどその前に

アルが、藍華の頭の上に、そっと手を置いた。

「ア、アル…くん？」

「だから、理由なんかいららないんです」

アルは藍華の髪を、やさしくなでながら言った。

「人が人に惹かれる理由…そんなものは分からなくてもいいんです。

ただ心が 『この人なんだ』 って感じれば、それが一番の理由  
なんです。 ……ね、藍華」

瞬間。

藍華は顔が火照るのを自覚する。

まるで体中の血液が、顔に集まってしまったようだ。

・アルくんが…

アルくんが、私を呼び捨てにした！

藍華って呼んでくれた！

藍華さん…じゃなくて、藍華って！ 藍華って!!

私は…私は…

藍華は両手で頬を押さえると、両目を固く閉じた。

けれど、そんなことでは怒涛のごとく流れてくる涙を止めることは  
できない。

けれど、そんな涙を、優しい笑みを浮かべたアルが、そつと指先で  
ぬぐってくれた。

「あの二人…今頃仲良くやってるかな」

暁が、いぢわるそうに、けれど必要以上に弟の世話をやく、心配性  
な兄のような表情で言った。

「はひつ。絶対大丈夫ですよ」

そんな暁とは対照的に、灯里が、どんな心配でも吹き飛ばしてしま  
うような満面の笑顔で言った。

「うづん？ その自信はどこからくるんだ、もみ子よ」

「もみ子じゃありませんよう。」

…だつて、藍華ちゃんもアルさんも、お互いが、お互いを思いあつて、見つめあつて。

まるで、あの夜空に輝くお星様達のように、瞬きあつて、照らしあつて、一番に輝きあっているんですから！」

「もみ子よお…さん、はい！」

「『恥ずかしいセリフ禁止い！！』」

暁やウツデイ、アリスのみならず、店の中にいた他の客や店員までもが、いつせいに叫び声をあげた。

「ええ〜!?!」

情けない声を上げる灯里。  
再び、笑い声上がる。

「灯里先輩、でっかい恥ずかしいです…」

つぶやくアリスに、ウツデイが言った。

「あはは。あれが灯里ちゃんの素敵なところなのだ」

「ムツくん？ …むすっ」

「そして、そんな風に入ネるアリスちゃんは、もつと素敵なのだ…  
…アリスちゃん」

「は、はい？」

「また今度、私と一緒に、空を泳いで欲しいのだ」



「え。えと…ムツくん…あの…それって……………」

「もちろん、お弁当もって、二人つきりで。なのだ」

「ムツくん…」

アリスは頬を染めながら、しかし元気いっぱいに答えた。

「はいつ。 でっかい、はい！ です！！」

明るく楽しげな声が、バーリイを吹き抜けていく。

「ねえ、アルくん」

「なんです藍華」

「あの彗星…アイカ彗星って、次はいつ帰ってくるの？」

「え、ええと…60年後…かな」

「ってそれじゃ私、78歳よお!？」

「僕は、82歳ですねえ」

「あのねえ…まっ っつか…お楽しみは、とつといた方が楽しいわ……………」

「はい。 その時もまた、ここで、こうして二人で、お迎えしたい  
ものですね」

「…うん」

「その時が、お天気なら、オテンキでしたかあ？ なんてね」  
「……………」

「いえ…その。 こ、これは 『お天気』 と 『お元気』 をか  
けた、マン・ホームに伝わる高等古典で……………」

「アルくん……………」

「は。 はい？」

「おやぢギャグ・禁止!!」  
「ええ〜!?!」

無限に輝く大宇宙。

その中で、アイカ彗星がひととき大きく、尾を引き、光り輝いていた。

その光りに照らされた二人の影は、まるで最初から一つだったかのように、いつまでも離れることなく、その輝きを見上げていた。

ヒメ社長が祝福するかのように、その影に向かって、小さな鳴き声をあげた。

o m e t a d i m a t t i n a ( 明 け 乃 彗 星 )  
i n e - l a f c

冒頭のセリフは  
ウルトラセブン 第49話「史上最大の侵略・後編」 (監督/満田)

かずほ 脚本／金城哲夫 特技監督／高野宏一 音楽／冬木透  
より引用しました

c o m e t a      d i      m a t t i n a (後書き)

どうでしょうかあ (<|>)

少しは皆様の体が痒くなりましてでしょうかあ!?(鹿馬)

藍華&アル、ファンのみなさま。どうか笑ってすませてください

(汗)

それにしても・

「ARIA」の中で明確にらぶらぶしてるは、この二人とARIA社長だけなんですよねい……

**I n d a c c o    I o    a p p a i o    b l e (前書き)**

「縁」・「えにし」(もしくは「えん」)とゆう言葉が好きです。  
「絆」・band of と、ゆうほど強いモノはありませんが  
「袖すり合うも…」くらいの軽やかさが好きです。

七本目の作品を、お届けします。

最後まで読んでいただけた後に  
みな様が少しでも「縁」を感じていただき、「アオイイロ」が少し  
でも、みな様の心に広がれば、これに勝る幸せはありません(やっ  
ぱり偉そうだ…)

それでは、しばらくの間、お付き合いください

I n d a c c o    I o    a p p a i o    b l e

第七話 『I n d a c c o    I o    a p p a i o

b l e 』

AQUAの空は、海の藍をも取り込んで、どこまでも青く輝いていた。

惑星アクア。

大規模なテラフォーミングの結果、水の惑星と化した、かつて火星と呼ばれていた、この惑星に、

人類の移植が始まって、はや150年。

今では、マン・ホームと呼ばれている地球。

同じく、ルナ・1と呼ばれている月と共に、アクアは人類、第三の故郷として、多くの人々が暮らしていた。

そのアクアの都市のひとつ。

ここネオ・ヴェネツィアにおいて、一人の少女が校舎の窓越しに、ぼんやりと空を見上げていた。

「藍より青し……かあ」

どこまでも広がる青い空を見ながら、少女はひとりごちた。

どこまでも青く、藍く……

「おい、ちゃんと聞いてるか!？」

・ばんっ

と、机が叩かれて、少女は我に返った。

「あら?」

「なあにいがっ、あら? - だ! 昼間っからボケるの禁止!」

「あらあら」

「あらあらじゃねええ! お前、ちゃんと私の話を聞いてたか?」

「うふふ」

「てめえ。みんながみんな、お前のその小悪魔スマイルに騙されると思うなよお!

幼馴染の私には、そんなのは、きつかああああああん!」

「あらあらあら」

少女は、ぎりぎりぎり…と、腕を胸の前で組みながら、こちらを恐い瞳で睨んでいる

その人物を、改めて見上げた。

美人 - といって良いのだろう。

シヨートな、けれど、艶やかな黒髪。

きりり - と引き締まった眉。

その下の双眸は、らんらんと輝き、意思の強さを表している。

小さく、けれどツンと上を向いた鼻。

口は絶対の自信にあふれ、そこから吐き出される言葉には、何者にも臆さぬ自負があふれている。

背は高からず低からず。

そのプロポーシヨンの良さと相まって、絶対の存在感をかもしだしていた。

少女の幼馴染であり、親友のひとり。  
晃・E・フェラーリだ。

「どうしたの、晃ちゃん」

「お前、ホントに人の話、聞いてなかったな……ほらっ、見る！」  
晃は、少女の前に一枚の紙を突き出した。  
「ん？」

「と、小首をかしげる少女。  
なぜかその仕草に、周囲から、ため息がもれる。

「ちゃんと見てみる！ 姫屋からの採用通知だ！」

「あらあら。晃ちゃん、受かったの？」

「そうとも……」

晃は背を伸ばし、再び胸の前で腕を組むと、優越感にひたった表情で言った。

「このネオ・ヴェネツィアで、百年の歴史を持つ、あの姫屋だ。すごいだろ？」

「うふふ…晃ちゃん、ウンディーネになるんだ」

「つたり前だ！ 姫屋に就職して、サラマンダーになるかあ！」

「あらあら……」

解説しよう。

「ウンディーネ」

とは、街中に張り巡らされた水路を使い、この都市、ネオ・ヴェネツィアをゴンドラと呼ばれる舟を使い、



観光案内をする水先案内人のことだ。

女性しかねず、この街のアイドル業とまで言われている。

大小さまざまな店があるが、その中でも姫屋は、創業百年の歴史を持つ、ネオ・ヴェネツィア最大の水先案内店だった。

ちなみに本編には、まったく関係ないが

「サラマンダー」とは、このアクアの気候調整を、空に浮かぶ「浮き島」とよばれる場所で行う、火炎乃番人のことだ。

「晃ちゃんなら、ノームさんや、シルフさんも、できそうだけど？」  
「う、うむ…ノームも、シルフも楽しそう……って、ちっがあうううううう！」

再び解説しよう。

やっぱり本編とは、まったく関係ないのだが

「ノーム」は、アクアの重力を常に1Gに保つ仕事をしている、地重管理人のこと。

「シルフ」は、車の使用が禁止されている、ネオ・ヴェネツィアで、郵便以外の宅配物をエア・バイクを使って配達する運送業者のことだ。

「女として、このネオ・ヴェネツィアに生まれたならば、誰もが夢見るウンディーネ。そのトップ・プリマに私はなる……！」

またまた解説しよう。

さっぱり本編とは、まったく関係ないのだが

「トップ・プリマ」とは

ウンディーネは、見習いの「ペア」 半人前の「シングル」 実際にお客様を乗せて観光案内をできる一人前の「プリマ」

の三階級に分けられていて、その一人前の「プリマ」の中でも、さらに抜群の技量と実力を持った、ほんの、一握りの「プリマ」が、「トップ・プリマ」と呼ばれ、称賛されるのだ。

「あらあら。晃ちゃんって、海賊さんみたいね」

「…お前、私のことをバカにしてんのか……？」

「うふふ」

「すわっ！ うふふ禁止！」

「あらあら」

「あらあら禁止！」

「うふふ」

「うふふは禁止！ って言ったる！」

「あらあ」

「ちよつと言い方変えてもダメだああ！ って、いいかげんにしろおおお!!！」

ぜいぜい・と肩を揺らしながら、晃が叫ぶ。

一方の少女の方は「柳に風」とばかりに、そんな彼女の言葉を受け流していた。

「とにかく。私は姫屋のウンディーネになって、必ずトップ・プリマになってみせる。お前もよく考えておけっ」

そう言うつと晃は、踵を返すと、足音も高らかに教室を出て行ってしまった。

「うふふ……」

そんな背中を、少女は微笑みながら小さく手を振り、見送った。

「ねえ、今の子って…4組の晃？」

クラスメートの一人が、少女の下へと走り寄って来た - と思った瞬間、机に足を取られて盛大に引っくり返る。

「あらあら、アン、大丈夫？」

「いででで…だ、大丈夫よ…」

少女の同級生であり、親友のひとりでもある、アン・シオラは、頭をかきながら立ち上がる。

「ほんとに大丈夫？」

「大丈夫。大丈夫。いつものことよ……ところで、今の子ってば…」

「ええ。晃ちゃんよ」

「やっぱり」

「やっぱり？」

「あんだ、ホントに自覚ないんだから……」

アリシア・フローレンス。

アンは、改めてクラスメートの少女を、まじまじと見やった。

輝くような金髪を二つ括りにした、特徴的な髪型。

白く、細やかな肌。

どこまでも透き通る、アクアマリンの瞳。

いつも、たおやかな微笑を絶やさぬ、その口元。

晃・E・フェラーリとは、間逆な位置にある美少女。

我らが『ビアンカネーヴェ』 Biancaneve - 白雪姫 -

「あなた達二人は、この学年…いえ、学校では有名人なのよ」

「あらあら」

「前の学園祭のとき、アリシアと晃、二人で『白雪姫』ってお芝居やったでしょ」

「ええ。私が白雪姫で、晃ちゃんが悪いおばあさん役だったわ」

…うふふ

と笑うアリシアに、アンはあきれたように言った。

「あのと時のアリシアの白雪姫も、ため息ものだったけど、魔女役の晃も、みんな、ため息ものだったのよお」

「あらあら」

「ったく、ちよっとは自覚もちなさいよ」

まさに、あの日、たかが学園祭のクラス劇で行われた「白雪姫」は、このミドルスクールの歴史上、特記すべき出し物となった。

アリシアが演じる優雅で美しさに満ち、気品あふれる（本人はまるで意識していなかったが）白雪姫は  
在校生は言うに及ばず、男性教師や父兄達からも、ため息と羨望の眼差しを持って、迎え入れられた。

そして、晃。

前半、白雪姫をいぢめる魔女として。後半は、彼女を助ける王子

として、二役に挑戦した彼女は、

（本人が『私に両方やらせろっ』と、それを強要したのではあるが）

その鬼気迫る魔女の演技で、観客を恐怖のどん底に落とし入れ、続く、王子様の演技で、その場にいた全ての女生徒と女性教師、母親達から、熱い吐息と憧れの眼差しで持って、迎えられたのだ。

鳴り止まぬ拍手に答え、アンコールに立った二人の姿は、王子と姫とゆう、人類、永遠の憧れを具現化したものとして

人々の記憶の中に、いつまでも残り続けることになった。

(それはまた、一部の特殊妄想世界の住人達には、身をよじるような創作意欲をかき立てられた瞬間

・と、ということなのだが……)

「あらあら。そうなの？」

「中には、あんた達二人が、本気で付き合ってると思ってる子もいるのよ…ねえっ」

アンは振り向きもせず、誰にともなく言った。

……のだが、まわりのクラスメートの首が縦に「うんうん」・と、振られたのは確認するまでもなかった。

「確かに私と晃ちゃんは、幼馴染だけど……」

「ああ、幼馴染だったんだ。どつりで……」

「ええ。ずっと一緒。昔っから晃ちゃんは変わらないわ」

「へえ……」

昔からあんな調子……何か空恐ろしいモノを想像して、アンは小さく身震いする。

「昔こんなこともあったのよ」  
そんなアンの気持ちを知ってか知らずか、アリシアは晃の武勇伝を語りだす。

「私達がまだ1年だったとき、初めて浮き島の社会見学に行ったの。そしたら晃ちゃんってば、自分も良く知らないのに勝手にクラスを抜けだして、私を連れて浮き島探検し始めちゃうんだもの、ワルよねえ」

「へ、へえ……」

「結局、最後は、浮き島の男の子達とお友達になって帰ってきたのよ。」  
うぶ

「うう…すごい。漢らしい……って、女か」

「でも晃ちゃんってば、女の子らしいところもあるの」

「え？」

「だって、さっきのことだって、まだ将来を決めていない私のことを思いやってくれたんだもの」

「今のが…そうなの？」

「うん。素直じゃないけど、とってもいい子なの」

「へええ……」

「そうなのか？」

と、アンも小首をかしげるが、もちろん、周りから、ため息が聞こえてくることはなかった。

「それより、あの白い雲を見て思ったのだけど……」  
ん？

アリシアは、窓の外に広がる高積雲を指差しながら言った。

「アンの入れた、生クリームのせココア。 飲みたいな……」  
「…はいはい。 姫様。 さすれば我が東屋までお越しく下さい」  
「うふふ。 ありがとう」  
「ホント。 あんたって子はよく分からん」  
「あらあら、うふふ」

\*\*\*

「ああ、美味しい。 やっぱリアンのいれてくれた、生クリームのせココアは最高ね」  
アリシアはカップを両手で包み込むようにして持つと、嬉しそうに言った。

- 30分後

ここはアンの部屋。  
学校の終わった二人は、アリシアの操るゴンドラに揺られ、カナル・グランデ大運河の近くにある  
アンの家へとやってきていた。

「喜んでいただけで光栄です。 姫様」  
「うふふ。 でもこうしていると、アンに初めて生クリームのせココアを飲ませてもらったときのことを思い出すわ」

それは、アリシアが風邪を引いて学校を休んだ、ある冬の寒い日のこと。

お見舞いに来てくれたアンが、元気ができるように・と、特別に作ってくれたものだった。

ほんの少しだけ塩を入れ、甘さを引き立たせたココアは、今までアリシアが飲んだ、どのココアより美味しかった。

絶賛するアリシアにアンは、そのとき初めて、将来はカフェを開きたい・とゆう夢を語ったのだ。

「アンはやっぱり、将来、カフェを開きたいの？」

「ええ」

アリシアの質問に、アンはきっぱりと答えた。

「それが私の夢だもの！」

その迷いのないアンの子供に、アリシアはふと、不安になる。

・私は本当は何をしたいのだろうか？

本当は、これといって何をしたいのかも分からない。

ただ漫然と過ごす日々の中で、私は何をしたいのだろう。

確かにゴンドラは好きだ。

ウンディーネにも興味はある。

けれど、それは本当に私の将来、なりたいものなんだろうか？

晃ちゃんのように、私は……

コップを手に、不意に黙り込んでしまうアリシア。

そんなアリシアにアンが、一瞬の間をおいて明るい口調で言った。

「アリシア。お代わりは？」

「え、ええ。ありがとう。いただくわ」



アンはアリシアのコップを受け取ると、立ち上がりキッチンへと向かう。  
が、その途中で振り向くと、まだ考え込んでいるアリシアに向かって言った。

「ねえ、アリシア。今度、一緒にゴンドラに乗ってくれない？」  
「え？」

「実は私さ。この街に長年、住んでおきながら一度もゴンドラ・クルーズってしたことがないんだよねえ」

アンは、頭をかきながら『えへへ』と笑った。

「だからさ、一緒に付き合ってくれない？」

アリシアは気が付いた。

これは彼女なりの気遣いなのだ。と。

悩む私を見て、そう言ってくれたのだ。と。

一度、本当のゴンドラ・クルーズを体験してみよう。と。

「うん」

だからアリシアは、笑顔でうなずいた。

「うん。喜んで」

そんなアンの心遣いが、とても嬉しかった。

「よし。んじゃ、次の日曜日に。予約とかは私に任せて！」

「…アン」

「ん？ なにアリシア」

「……ありがとう」

「ば、バカ。きゅ、急に何言ってるのよ…照れるわ」

そう言っつて、あわててキッチンに飛び込んでいくアン。  
そして・

何かをひっくり返す金属音と、アンの悲鳴が、お約束のように響きわたった。

\*\*\*

「へ？ 予約入ってない？」

日曜日。

アリシアを連れ、意気揚々と姫屋の門をくぐったアンであったが……

「はい、まことに申し訳ありませんが、本日、アン・シオラ様名義のご予約は入っておりません」

受付のウンディーネが、すまなそうに言う。

「はいい？ なんで？ そんな……はう！？」

突然、何かに気が付いたかのように、アンはアリシアに問いただした。

「ねえ、アリシア。今日は何日？」

「ええっと…11日よ」

「はうああ！ 明日だあつ 一日間違えた……」

「あらあらあら」

愕然とへたり込むアンに、アリシアはいつもの笑顔で答え、その肩をそっと叩いてあげるのであった。

「ごめん、アリシア……どうせならと思って、せっかくトップ・プリマの明日香さんの予約とったのに……」

当然のように、ミドル・スクールの学生である二人には、翌日、学校を休んでまでのゴンドラ・クルーズは許されない。

見かねた受付のウンディーネ（名札には、アンジェリア・アマテールとあった）が、キャンセル料も取らずに、

料金を全額返金してくれたため、経済的な損失は、ほとんどなかったのだが……

「うふふ。いいよ。ありがとう。その気持ちだけで、私は嬉しいわ」

「うつつ……ありがとうアリシア。仕方ない。飛び込みで探してみよう」

「いいのよ、アン。あまり気にしないで」

「いいや、汚名挽回よ。今度こそ、私にまかしてっ」

「あらあら。アン。汚名は返上するもの。挽回はするのは名誉」

「おお。さすが我らがピアンカネーヴェ。博識ですなあ」

「あらあら……うふふ」

そうこうしているうちに、二人はサンマルコ広場へとやって来た。そこでは各水先案内店のウンディーネが、飛び込みのお客を得るために、軒をならべていた。

「うーん。あそこにいるのは、オレンジ・ぷらねっと。今、新

進気鋭の急成長株の水先案内店なのよ。

こっちにいるのは、エンプレスに奇想館。あちらはMAGA社。どれも中堅だけど、歴史はあるわ」

「あらあら。アンってば詳しいのね」

「アリシアが知らなすぎなの。つか、やっぱりこれくらいは事前に調べとかないとね」

アンは今日の日のために、いろいろと調べておいてくれたのだ。

「うふふ…アン、ありがとう」

「ば、バカ。だから、照れるっちゅーの！ ……ねえ、アリシア」

「ん？」

「あなたはどこのゴンドラに乗りたい？ やっぱり晃と同じ姫屋？」

「んん…私は……」

考え込むアリシアの視線に、突然「アオイイロ」が飛び込んで来た。

そう。

それはまるで、あの青い空のように

それはまるで、あの藍い海のように

つられたように、ふらふらと、そちらに近づいていくアリシア。

「ちょっと…アリシアどうしたの？」

あわててアンが追いかけてくる。

その視線の先には、青い制服のウンディーネと、藍いゴンドラが浮かんでいた。

「あの……」

「はい。なんですか？」

おずおずと声をかけるアリシアに、青い制服のウンディーネが答える。

「あの…ゴンドラ・クルーズを……」

「アリシアっ」

あわてた感じで、アンがアリシアの腕を引っ張った。

「え、どうしたのアン？」

「あそこはダメだって……」

「ええ？」

アンは、そのウンディーネに聞こえないように、小声でしゃべった。

「あのゴンドラは、ARIA・カンパニーのゴンドラよ」

「ARIA・カンパニー……」

「そう。極端な少数主義で、社員はいつも一人か二人。人気は

高いんだけど、入りたくても入れないトコなのよ」

「そう……なの？」

「そう。だから、乗るだけ無駄よ」

「……………」

「アリシア？」

「ごめんなさい、アン。私、あのゴンドラに乗りたい」

「ええ？」

「なんだか分からないけど、乗ってみたいの。……ダメ？」

ちよっと上目使いに、懇願するアリシア。

……………無敵である。

「うぐぐぐ…身もだええええええ！ はあはあはあ……わ、分かった

わよ」

「アン？」

「あなたにそんな風をお願いされて、誰が断れるの？」  
もし、周りにアンのクラスメート……いや、同じ学校の全生徒がいても、約一名を除いて、誰もがうなずいたことであろう。

「ぶいにゆん」

突然、白いまん丸なものが、アリシアに足に絡み付いてきた。

「うわっ。なんじゃこりゃ？」

アンが驚きの声をあげる。

「あらあらっ？」

「にゅうにゅん……」

その白くて丸いものは、ぶいぶいとアリシアによじ登って行く。

「猫……さん？」

そしてついには、アリシアの肩まで登ると、まるでそれが当然かのように、腕の中に収まった。

「あらあら。見て、アン。この猫さんの瞳、すごくキレイ」

「ほんとだ、きれいな蒼色だね」

「ああ、アリア社長。なにやってるんですかっ」

「社長？」

先程のプリマが、あわてて飛んで来る。

「じゅめんなさいね。お嬢さん。ほら、アリア社長。降りましょ  
っ」

「ぶいにゃ、ぶいぶい……」

けれど、アリア社長と呼ばれた猫は、アリシアの腕の中から、なかなか降りようとしない。

「アリア社長、どうしたんです？」

「あの……」

「え？」

「今、この猫さんのこと、社長って……」

「それはね、アリシア」

アング、その蒼い瞳の猫を見ながら言った。

「このネオ・ヴェネツィアの水先案内店では、この猫さんみたいな蒼い瞳の猫さんを、航海の安全と無事を祈るお守りとして、

社長にするって伝統があるの。もちろん、ほんとの社長は、別に人間がいて、お店の経営とかは、その人がやるのよ」

「あらあら、そうなの？」

「そうなのって…アリシアって本当に何も知らないのね」

「うふふ……」

アリシアは改めて、自分の腕の中で気持ちよさそうに「ぷいぷいと甘えている、アリア社長を見下ろした。

「ほんと…キレイな瞳」

「アクアマリンの瞳って言うのよ」

いつの間にか、小柄な女性が、アリシア達のすぐ横に立っていた。

「グランマ……」

青いウンディーネが言う。

「あなた、アリア社長に気に入られたのね。　　うふふ…素晴らしいわ」

「あなたが、グランマさんなんですか？」  
アンが驚いたように叫ぶ。

「アン？」

「アリシア…あなただつて、さすがに聞いたことはあるでしょ？  
姫屋でトップ・プリマとして10年以上の実績を誇り、

その後、ひとりでARIA・カンパニーを立ち上げ、30年もの  
長きに渡って、未だにトップ・プリマとして君臨し続け、

その功績から、すべてのウンディーネの母と呼ばれる、伝説の大  
妖精。本名、天地秋乃さん。通称・グランマ……」

「まあまあ、そんなに大げさなことじゃないのよ」

ほっ・ほっ・ほっ…と、天地秋乃・グランマは、素敵に微笑んだ。

「そう。アリシアさんは、ウンディーネになりたいの……」

結局、ARIA社長はアリシアから離れず、なし崩し的に二人は、A  
RIA・カンパニーのゴンドラに乗ることになった。

「はい、そうなんです。グランマさん」

「アン？」

「この子、ミドルスクールでもゴンドラを漕いでて、すっごく上手  
なんです。学校で1、2を争うほどに」

「あら、それは、すごいわね」

「それに性格もよくて、友達からは『白雪姫』って言われるくらい、  
いい子で……」



「あ、アンってば……」

「グランマさん…お願いがありますっ」

照れるアリシアを尻目に、突然、アンが叫んだ。

「あら、何かしら」

「一度、アリシアの漕ぎを見てやってください。それで、もし、もしも気に入っていただけなら、

この子を…アリシアをARIA・カンパニーに入れてください！」

「あ、アン。何を言い出すの？」

珍しく、アリシアがあわてる。

けれどアンは、そんなアリシアに構わず、グランマに懇願する。

「お願いします、グランマ。少しだけでいいんです！」

「アン……」

「いいお友達ね……」

グランマは、やさしく微笑むと言った。

「…どう、アリシアさん。ちょっと漕いでみる？」

「えっ、いいんですか？」

アンが驚いたように声を上げる。

「あら、アンさん。あなたが言い出したのよ」

「あ…いや、それはそうなんですけど……」

困ったように頭をかくアンに、やっぱり優しく微笑みながら、グランマは言った。

「ほんとは、いけないんだけどね…誰も見てないし、少しくらいなら、かまわないでしょ」

再び、グランマは、ほっ・ほっ・ほっ・と笑うと、ゴンドラを漕いでいるウンディーネに言った。

「アンナ、お願い。少しの間、アリシアさんと代わってあげて」「はい。グランマ」

アンナと呼ばれたウンディーネは、アリシアにオールを渡すと、ゆっくりと場所をゆずってくれた。

「すみません」

「ううん。がんばって」

アリシアは、アンナからオールを受け取ると、ファルコラと呼ばれるオール漕ぎの支点に、そのオールをゆっくりと差し込んだ。

・これが、ウンディーネのオール。  
思ったより重い……

家で使っているオールや、学校で使っているオールより、少し重いけれど、その分しっかりとしていて、腕に馴染み、持ちやすい。

グランマとアンナが微笑みながら。

アンとアリア社長が、期待に胸を躍らせながら、こちらを見ている。オールをしっかりと持ち直す。

・アリシア・フローレンス、行きますっ

そう、胸の中でつぶやくと、アリシアはゆっくりとオールを漕ぎ

始めた。

-すごい…………

アリシアは感嘆した。

風を感じる

風がそよぐ

風が流れていく

波を感じる

波がはしる

波がさざめく

-これが、ウンディーネのゴンドラ

これが、白いゴンドラ

これが、プリマのゴンドラ

-なんて気持ちいいのだろう

なんて心地よいのだろう

まるで、あの青い空と

まるで、あの藍い海と

自分が一体になってしまったかのようだ

-このままずっと

いつまでもゴンドラを漕いでいたい

いつまでもこうして、ゴンドラを漕いでいきたい

このままずっと、空と海と一緒にいたい

アリシアは今、はっきりと分かった。

はっきりと感じる事ができた。

私は……

私は……

・私は、ウンディーネになりたい！

「ありがとうございます」

アリシアは、アンナにオールを返しながら言った。

「ううん。君、すごく、いい漕ぎだったよ」

「え？」

「アリシアすごいっ。すごい、すごい、すごいー」

「ええ？」

アンが、興奮したように、何度も何度も、同じ言葉を繰り返す。

「ほんとう。いい漕ぎだったわ……」

グランマも、微笑みながら、けれど、さらりと言葉を紡いだ。

「どう、アリシアさん。ウチにこない？」

「ええええ？」

「ウチは少人数主義で、人が少ないけど、それでよければ…どう？  
アリシアさん」

「あらあら、そんな……」

「アンナはどう思う。あなたもそろそろ、弟子を持っても、いい頃ね」

グランマはアンナに…ゴンドラを漕いでいる、ただ一人の社員に訊ねた。

「はい、グランマ。そろそろ私も…と、思っていました。彼女の腕前は確かですし、それに彼女とはフィーリングが合いそうです。

……なんとなくですが」

アンナは、悪戯っ子っぽく、ウィンクをアリシアに送った。

「そう、それは大事よね。ねえ、アリシアさん。あなたさえよければ、ウチは大歓迎なんだけど」

「あらあら…えと……」

「ぶいにゅゅん」

アリシアが口ごもっていると、突然、アリア社長がアリシアのひざに飛び乗ってきた。

「アリア社長さん？」

「おほほ。アリア社長も、アリシアさんを歓迎しているようよ……」

アリシアは、アリア社長の瞳をのぞき込んだ。

そのどこまでも広がる、蒼い、そのアクアマリンの瞳を……

「はい。ありがとうございます。よろしく願います」

アリシアは、自分でも驚くほど自然に、その言葉を口にしていった。

「ぶいぶいぶいぶいー」

アリア社長が、喜びのあまり踊り始める。

グランマが、ほっ、ほっ、ほっ、と笑う。

振り返ると、アンナが親指をたてて、祝福してくれた。

「やったね！ アリシア。おめでとう！」

アンが抱きついてくる。

- ?

アリシアは戸惑った。

アンの行動は、確かにアンらしい。でもアンらしくない。

うまく言えないけれど、あまりにアンらし過ぎて……

しばらくして、アリシアは気付いた。

アンの肩が小刻みに震えていることを。

アンはアリシアの胸に顔を埋めながら、泣いていたのだ。

「あらあら、ど、どうしたのアン？ 私、あなたのおかげで、ウ

ンディーネになれるのよ」

困惑気味に訊ねるアリシアに、アンはささやくように言った。

「……ごめん、アリシア。ごめん」

「え？」  
「私……私……あなたのウンディーネ姿、見ることできない……」  
「ええ？」  
「私、引越すの……」  
「ええ？ 引越す？ どこに？」  
「……お父さんの仕事の都合で、マン・ホームに……」  
「マン・ホーム……いつ？」  
「今度の日曜」

「そんなっ 一週間後じゃない」  
「ごめん。アリシア。ごめん。どうしても言い出せなくて……」  
「アン……ああ、だから、あなたは今日……」  
「うん。私どうしてもアリシアにウンディーネになってほしかったの。だから私……ごめんね」  
「ううん。アン……ありがとう」

優しく抱きしめる。  
腕の中に、アンの温もりが、アンの優しさが、アンの想いが伝わってくる。

アリシアは、視線を上にあげる。  
涙がこぼれないように……  
ネオ・ヴェネツィアの空と海は、どこまでも青く、どこまでも藍く輝いている。  
そう。まるで、アンの心遣いに似て……

「藍より青し……」  
アリシアは、目に涙をためつつ、ぽつりとつぶやいた。

「青は藍より出でて、藍より青し……昔の哲学者の言葉ね」  
グランマ・天野秋乃は、静かに言った。

「グランマ？」

「意味は、藍出ル青……やがて『青・弟子』は、『藍―師匠』より  
旅立ち、師を越える」

「師を越える……」

「ええ、でも私は、それだけじゃないと思う」

「え？」

「私はこれは人と人との『縁』のことだと思うの」

「えにし……」

グランマは、相変わらず、もの静かな微笑を浮かべたまま続けた。

「人は人と出会い。いろんな影響を与え合って、生きていく。

それは元の『藍』じゃなくて、それぞれにそれぞれの『青』に変  
わってね

今日、出会った私の『藍』と、それを受け取ってくれた、あなた  
達の『青』は、同じようなモノだけど、

けれど、ぜんぜん違うものなの。ね、素敵だと思わない。ふ  
ふふ

「それぞれの『青』」

「それぞれの『藍』」

グランマは、そつつぶやき合う二人に、優しく言った。



「ええ。まるであなた達のようにね」

「アン……」

「アリシア……」

「私に素敵な『青』を、ありがとう、アン」

「うん。私こそ、素敵な『藍』をありがとう、アリシア」

「そしてこれが……」

二人はお互いを抱きしめながら、言い合った。

「『私達の『縁』！』」

そんな二人を、グランマとアンナが、いとおしげに見守っている。

アリア社長が、その蒼い瞳一杯の涙を浮かべながら「ぷいぷい」と泣いていた。

ネオ・ヴァネツィアの『アオイイロ』は、そんな二人に、いつまでもふりそそぎ、

そんな二人を、いつまでも優しく揺らしていた。

一週間後

マルコポーロ国際宇宙港。

アンが、マン・ホームに引越す日がやってきた。  
大勢の仲間達と共に、アリシアもまた、彼女の見送りに来ていた。  
みんなの涙の中、けれどアリシアはもう泣いていなかった。

涙はあの日。

自分がARIA・カンパニーの一員となると決めた日。

その日の夜に、二人で一晩中かかって使い果たしていた。

今はもう、笑顔しか残っていない。

「アリシア。見送りありがとう」

「うん。アンも元気で」

「うん。まかshoとして。元気だけが私の取柄よ」

「うふふ。それとドジっ子さんなところもね」

「あちゃっ。アリシア言うねえっ」

はじけるような笑顔。

そう、それこそがアンにふさわしい。

「ねえ、アリシア」

「なに、アン」

「あのさ、私、必ず帰ってくる」

「うん」

「それがいつになるかわからない。分からないけど、私は必ず、

ネオ・ヴェネツィアに帰ってきて、カフェを開く」

「うん……」

「だからアリシア」

アンはきっぱりと言い放った。

「だからそのときは、アリシアのゴンドラに乗せて。そうっ  
プ  
リマになったアリシアの！」

「ええ、もちろん。その時は必ず」

アリシアもまた、そんなアンの言葉に、力強く答えた。

「うん。楽しみにしてる。私の『ピアンカネーヴェ・白雪姫』さ  
ま」

「うふふ。私こそ、アンのカフェで、アンの入れてくれる、生ク  
リームのセココア、楽しみに待ってるわ」

「うん。絶対に…絶対に…ね」

互いの両手を重ね、無言で見詰め合う二人。

そんな二人に、またもや周囲のクラスメートから、ため息がもれる。  
何人かが、身をよじり、うめき始めた。

最終の搭乗案内が、広いロビーに響き渡る。

二人は、万感の想いをのせて、言葉を交し合った。

「じゃ、私の『藍』。またね」

「うん。私の『青』。またね」

大きく手を振り、笑顔で搭乗口へと消えていくアン。

途中、お約束のように、つまずき、すっ転んだのは言っまでもない。

みんなの口から、暖かな笑い声がこぼれる。

それは、自分達の大切な友達が、最後に残していった、最高の「縁」だ。

- そろ。

これが

これこそが、彼女が私達に送ってくれた「藍」なのだ

アリシア・フローレンスは思う。

そして、その「青」は、私達の中に広がって……

「舟」が飛び立つ。

その巨体にもかかわらず、軽やかに、穏やかに、ネオ・ヴァベツィアの空に浮かんで行く。

アリシアは、その姿が見えなくなるまで、いつまでも手を振り続けていた。

AQUAの空は、海の藍をも取り込んで、今日もどこまでも、青く光り輝いていた。

アン・シオラは、こうしてマン・ホームへと旅立って行った。

\*\*\*\*\*

「なんだ、なんだ、なんだあ！」

相変わらず、ひとりでシケた練

習してやがるなあ……！」

赤い制服のウンディーネが怒鳴った。

「ARIA・カンパニーを偵察してこい！　って言われたから、今日も、いやいやながら来てやったぜっ」

・半年後

シングルになって、ひとりで練習するアリシアの元に、赤い服のウンディーネ……

晃・E・フェラーリは、毎日のように、なんだかんだと理由をつけ、様子を見に来てくれていた。

「……えへ」

これも「縁」

そんな幼馴染の心遣いが、アリシアは嬉しかった。

「アリシア、大ピンチよっ。私達の同世代で、すごい奴がオレンジ・ぷらねっとにいるらしいわ」  
突然、晃が叫びだす。

「あらあらあら」

「なに、のんきなこと言ってるの、アリシア。　ちょっと本に紹介されたからって、いい気になってない？」

それは「月間ウンディーネ」の特別号で組まれた、「期待の新星」  
つという記事のことだ。

晃はもちろん、アリシアも、あのARIA・カンパニーの新人・と  
ゆうことで、特集を組まれていたのだ。

「うふふ」

「すわあ！ いい、アリシア。 誰であれ、次世代・NO・1の地  
位は、渡すわけにはいかないのよ！」

なおも、何事かを叫び続ける晃に「あらあら」・と返事を返しなが  
ら、アリシアは、目の前に広がる、  
そのどこまでも「アオイ」空と海とを見回した。

いつか私達も、この空と海のように、どこまでも「藍」く輝きたい。  
いつまでも「青」く輝き続けたい。

けれど、アリシアは知らなかった。  
すでにその「縁」が広まりつつあることを。

ひとりの少女がマン・ホームで、そんな彼女を紹介した本を喰い入  
るように読んでいることを。

後日、その少女をも巻き込んで再会したアン・シオラと、大騒ぎを  
するはめになることを。

そして・

わずか数秒後。 アンを凌駕する「ドジッ子」ウンディーネと、運  
命的な出会いを果たすとゆうことを。



I n d a c c o    I o    a p p a i o    b l e (後書き)

この作品に出てくるクラスメートの子は、ARIAの小説版、第二作目、

「四季の風の贈り物」の第四話「スノーホワイトの贈り物」(作・吉田玲子)

に出てくるキャラクターです。

もし彼女の性格、容姿、思考等が、このお話と違っていても、それはひとえに

私の責任です(汗)

それと今回の主題は、文月晃先生の漫画またはアニメとは、まるで関係ありません(汗)

もし、ほんの少しでも、かぶっている所があれば、それもひとえに、私の文才の無さのせいです(涙)

お許しください(鹿馬)



八本目の作品を、お届けします。

今回の作品は、不親切です（鹿馬）

そして気分は、ドラマCD！（大鹿馬）

当初、いつも私の作品を初見してもらって、お二人（ARIAは基本的な事は知ってるけど、深い所までは、ぜんぜん知らない）に、感想をお聞きしたところ

「登場人物が分からない」と、異口同音に指摘されました（涙）

ですが今回はワザと説明文は、はずさせていただきました。地の文が、なんとなく鼻についたからです。

ですから、こんなお話になってしまいました（泣）

説明不足で、わけの分からなかった方。申し訳ありません。なにとぞ、寛大なお気持ちで、お許しください（謝）

もし、最後まで読んでいただいて、この、たぶん『実験劇場』的な作品に対して、何かしらの、ご感想を寄せていただけたなら、これに勝る幸せは、ありません。

それでは、しばらくの間、おつき合ってください。

Due persone divertenti

第8話

『Conversazione sulla gondola  
i un giorno nell'iniziativa  
unno - Due persone divertenti』

「いいお天気ね」

「ええ。風が心地よいわ」

「ぶいにゆ〜ん」

「あらあら。社長もごきげんね」

「ああ。実にいい気持ちですなあ」

「こうして、あなたと一緒にゴンドラに乗るのは、何年ぶりかしら」

「そうねえ…かれこれ、二十年ぶりかしら」

「二十年…もうそんなになるかしら……」

「お互い変わらないわねえ」

「ええ。ほんと」

「お二人は、昔からこんな感じだったんですか？」

「とんでもないっ」

「ええ？」

「この二人は、昔っから仲悪かったのよ」

「ほへえ？ それはどうゆうことですか？」

「どうもごつも、言葉通りよ。昔からこの二人は、ライバルとして張り合ってたんだから」

「ライバル……」

「確かに、あのおときのお二人のご活躍は、目を見張るものがありましたなあ」

「あらいやだ。からかわないでくださいな」

「ほんとですよ。そんな活躍だなんて」

「いやいや。私はあのおとき、あの時代。あの変革のときに、その場にいれた幸せを、いまでも感謝しています」

「まあ、そんなこと言っても、何も出てきませんよ」

「ほんとに、ほんとに……」

「何にもでないの？」

「ほんとに、ほんとに……ふふふ」

「笑顔が恐いだろ？」

「あらあら……」

「考えてみれば、あれから二十年。ふたむかしね」

「そうねえ。どつりでお互い……」

「歳をとつた？」

「うふふふ」

「あの頃の私は、ひたすらあなたに『追いつけ・追い越せ』だったわ」

「……………」

「『姫屋・不動のエース』とか言われてたあなたは、本当に素晴らしかった。憎らしいほどね」

「ええ。私も憧れていました」

「私は、そんな自覚はなかったけれど、みんながそうゆう目で私を

見てくれるのは、嬉しい反面、とても恐ろしかったわ」

「恐ろしかった？」

「あらあら…どうゆうことですか？」

「私は、そんな気持ちは、ひとつもなかった。 エースだなんてね。…悩んでもいたわ」

「悩んでいた？」

「ええ。 悩む - とゆうより困惑かしら。 いつまでも私なんか  
エースと呼ばれていて、いいんだらうかって…」

「……………」

「あの時、私はもう三十。 そんな私がいつまでも『不動のエース』  
って言われ続ける事は、正直不本意だった」

「不本意…」

「ええ。 実際、私より力のある子は、たくさんいたもの。 この  
人みたいだね」

「……………」

「それに私は、エースだなんて事に興味はなかった。 ゆっくりと、  
日々、楽しくお仕事ができれば、それだけで…」

でもあの時は、ただ毎日が、忙しく過ぎていくだけで…」

「だから私達は、あなたに追いつこうと必死だった」

「……………」

「なんとか、あなたをエース・プリマの位置から引きずり降ろそう  
と、みんな一生懸命だったわ。」

もちろん、私が先頭っ」

「ええ。 あの時のあなたは、とても恐かった。 鬼気迫るものが  
あったわ」

「必死だったから…必死で、あなたに追いつき、追い越そうと思っ

ていたから…… みんなも…誰もが……」

「助けてあげたかったんですね」

「え？」

「必死で追いつこうとして… 一緒になろうとして。 そうやって、  
少しでも代わりになって、助けたかったんですね」

「まあ。驚いた」

「おやおや」

「うふふ… 分かるの？」

「はひ。 だって、お二人は仲悪いんでしょう？」

「あらあら」

「あははは。 こりゃ一本取られたな？ やるなあ、君」

「ふむふむ」

「ぶいぶう〜い」

「そして、私は退社することを決めた……」

「この人は、夜。 急に私の部屋に入ってくるなり言ったのよ。  
相談があるって。 私、今月で退社するの…って。

あれは相談じゃなくて、報告ってゆうのよ！」

「あらあら」

「私は私の時間を大切にしたいから姫屋を辞めるんだって。 新し  
い店を作るのって。 新しい店で自分の時間で仕事をするのって。  
どこで知り合ったか知らない火星猫を連れて」

「ぶいにゆ!？」

「でもあなたは、アリア社長を見て、一番に言ってくれたわ。瞳の素敵な猫さんねって……」

「……………」

「ねえ。アリア社長。私以外で社長が仲良くなったのは、彼女が最初ですものね」

「ぶいぶい」

「恥ずかしい話を…… じゃ。あの時、あなたが泣いた話、バラすわよ」

「ああ…えと…それは……」

「おや。珍しい。慌てています?」

「まっ。いやだわ」

「んん。それはどうゆうことですかな?」

「いえいえ。そんな大げさなことではなくて……」

「何、いまさら照れてるの? 充分、おおげさな話よ」

「……………」

「部屋に入ってくるなり、私に退社宣言をしたあなたは、そのあと、急に泣き出して……」

「あらあら………」

「私の我がままで、みんなに迷惑をかけるからって。まるで姫屋に恩を仇で返すようだったて。」

「ごめんなさい、ごめんなさいって…それが、思い上がりなのよ!」  
「……………」

「だから私は言ってやったの。あなたひとり、いなくなっただけで、この姫屋の屋台骨は揺るがない。」

いえ、揺るがせない。あなたのいなくなった穴は、私達で充分、

埋められる。

だから、さっさと出て行きなさい！……ってね」

「そうやって後押ししてあげたんですね。安心して退社できるよ  
うに……」

「……思っています。このウンディーネさんは、飄々としている割  
には、鋭いすなあ」

「うむ。さすがは、ARIA・カンパニーの跡継ぎってことだね」  
「あ……いえ、そんな……」

「いいのよ。これでも、このお二人は、あなたの事、誉めてるん  
ですから……うふふ」

「これでもって……」  
「ええ。その通り。あなた、素晴らしいですな」

「はひ……恥ずかしいです……」

「あらあら」

「ぶいぶい……」

「そして私は、ARIA社長とARIA・カンパニーを始めた。みんな  
に背中を押されてね。ありがとう」

「何をいまさら……」

「でも、今更ながら大変だったんですよ」

「ん？」

「だって、一番の稼ぎ頭がいなくなったんだ。もう見る間に業績  
は悪化……全員、顔色なし」

「……………」

「でもね。だからこそ面白かった」

「面白かった…ですか？」

「ああ。また、いちからやり直せる楽しさがある…ってヤツだな。みんな一丸となって、そりゃあ、がんばったサ」

「ええ。」

がむしゃらだったけれど、

忙しかったけれど、

疲れてはいたけれど、

充実してたわ…

毎日毎日。来る日も来る日も、お客様を、お乗せしてゴンドラ・クルーズをした。

誰も彼も、みんな一生懸命。楽しかったわあ。

…それもこれも、みんなあなたのせいね。ふふふ

「……………」

「ウンディーネさんっ」

「は、はひ？」

「今の、分かる？」

「おやおや…いぢわるですねえ、ホントあなたは……………」

「そうかあ？」

「ま。だからこそゴンドラ協会の理事長をされてるんでしょぅが…ね」

「ぬかせっ。で、どう思います？」

「は、はひ。」



えと…つまりそれは、やっぱり後押しと同じで、退社したのが理由で、経営が悪化したって言われなかったために……  
そのせいで、ARIA・カンパニーが、逆に悪い言われ方をされないように……

姫屋のみなさんが、頑張ってくれたんですね

「あらやだ。ホントに鋭いわね」

「うむ。やはり素晴らしい」

「まさに、まさに」

「あわわ…ありがとうございます」

「うふふ」

「ぶいにゅ〜ぶいぶい」

「ねえ、明日香」

「ん？」

「ミュージアムの館長のお仕事が終わったら、城ヶ崎に来ない？」

「え？」

「なんにもない田舎だけど、他の何処にもない自然と時間があるわ

…それに、あなたとなら楽しく過ごせそう」

「…ぼっ。急に何言い出すの……わ、私はまだ今の仕事を楽しいの」

「まっ。ほっ、ほっ、ほっ……」

「わ、私はどうですか？ 私も田舎で暮らしたいなあ」

「あら…あなたはまだ、ゴンドラ協会の指導員として、仕事が残ってるのでしょうか？」

「ええ〜え」

「おや…それはゴンドラ協会の指導員としての現状に、不満がある

「と云うことかな？」

「い、いや、別にそうゆう意味では……」

「だから、いぢわる言つのは止めなさいって」

「いや、昔から言つたろ？」

『かわいい子には、タビをはかせて、達者でな』って

「『』』』 言わない。言わない。言わない。『』』』」

「ねえ、ウンディーネ…いえ、水無灯里さんでしたっけ…… ちょつと、お願いがあるのだけど……」

「は、はひ。 なんてしょうか？」

「あなた逆漕ぎでゴンドラを操舵するのが得意なんですよ？ 一度、漕いでみてくれないかしら？」

「ええ〜え！？ い、いえ、でも、それは……」

「ダメ？」

「いえ、その…ダメって言うか…協会の方が……」

「おい。なんか俺達、見つめられてるぜ。惚れられた？」

「また、バカなことを…分かってるんでしょう？」

「はいはいはい。 まったく君は冗談が、ホント通じない」

「あなたが、冗談、通じ過ぎなんですよ。 で、どうなさるんですか」

「お前さんも大概、いぢわるだな…私だって彼女の逆漕ぎつてのは体験してみたかったんだ…分かってんだろ？」

「ふお、ふお、ふお…実は、私もです。 では、私達二人は……」

「ああ、お休みなさい。 寝てる間、何やってるか、俺達は知らん

けんねっ。 ZZZZZZ……」

「ほっほっほっほっほっ……では。 ZZZZ……」

「アリシアさん？」

「うふふ。いいんじゃないの。 外洋だし。 みんな期待してるわよ」

「うん」

「ええ」

「ぶいにゅっ」

「お願い。 灯里さん」

「は、はひ…そ、それでは失礼して、 みな様の視界をさえぎる漕ぎ方をさせていただきます」

「わくわく…わくわく……」

「アウグスト・V・ビスマルク、ゴンドラ協会理事長。 口から漏れてますよ」

「アイザック・セルダン、ゴンドラ協会首席理事。 君は寝てるん

じゃないのかね」

「狐と狸だな…」

「アンジェリア・アマティー 技術指導員…なんでしたら……」

「城ヶ崎暮らしを即刻命じようかしらん？」

「ひえっ」

「あらあら。 うふふ」

「では、水無灯里。 行きますっ んしょ！」

「おおっ」

「これはっ」

「あははは。 早いぞ。 早いぞ」

「あらあら。また一段とスピードが増したわね」  
「ぷいぷいにゆうづつづん！」

「ああ…いい風ね」

「ええ…ホント、気持ちいい」

「おおお。あんなにも早く景色が通り過ぎて行く。　カイ・カ・ン  
……」

「いやっほー！　それいけ〜！　もっと行けえ！　どんどん行けえ  
〜！　ハイヨー・シルバー！！」

「理事長…それから、首席理事。…お二人とも寝てるんじゃないかっ  
たんですか？」

「『あ』」

「うふふふふ」

「秋乃」

「なあに？」

「さっきの話…」

「うん？」

「城ヶ崎の話。考えてあげてもいいわよ……」

「あらまあ。どうしたの？」

「か、カン違いしないでね。　私は別に　あなたと暮らしたいわけ  
じゃないんだから。」

ただ、静かに時を、静かな自然の中で、静かに過ごすのもいいか  
なつて、ちよつと思っただけよ」

「ええ　私もあなたと暮らすなんて、ごめんだわ。　でも……あり  
がとう」

「な、仲悪いだろ」

「素敵ソグです」  
「ん？」

「だって、口ではそう言っておきながら、大切で大事な時には、互いが互いを思いあって、

信用しあって。

信頼しあって。

でも最後には、やっぱり憎まれ口を、笑いながら言い合う。と  
つても素敵な仲悪さんです」

「灯里さん」

「は、はひ。明日香さん」

「恥ずかしいセリフ禁止!!」

「ええ〜元祖ですかあ？」

「あははははは」

「ほっほっほっ」

「あらあら、うふふ」

「ぶいぶいにゆ〜」

「ああ…本当に、いいお天気だわ」

「ほんと。素敵な青空ね」

「ゴンドラ協会に到着しました」

「ありがとう、灯里ちゃん」

「ご苦労様。水無くん」

「お世話さまでしたな」

「楽しかった。また頼むよ」

「灯里さん。今度、ミュージアムにも遊びにおいでなさいな。待ってるわ」

「はひ。みなさん。ありがとうございました」

「ぶいぶくうい」

「ねえ、アリシアさん」

「なに？ 灯里ちゃん」

「私も、あの人達のようになれるでしょうか？」

「私もいつか、あの人達のように、素直で穏やかで、けれど悪口も言い合えるような大人になれるでしょうか」

「うふふ…大丈夫なんじゃない」

「ほへ？」

「だって……ほらっ」

「あつ。灯里いい。そんなトコでなにやって…げっ。アリシアさ

ああああん！」

「藍華先輩。どつどつどつ」

「藍華ちゃん！ アリスちゃん！」

「こりや灯里。アリシアさん独り占めにするの禁止。久しぶりなんだから」

「藍華ちゃん…」

「藍華先輩。でっかい失礼です。 灯里先輩。いちど厳しく叱った  
ほうが……」

「アリスちゃん……」

「いいの。いいの後輩ちゃん。 灯里には、この程度で」

「……藍華ちゃん。 ……アリスちゃん」

「あらあらあら。 みんな久しぶりね。 どう、このあと、一緒に  
お茶でもしない？」

「うきやあああ。 はい。 もちろん喜んで！」

「ですから藍華先輩。 どうどうどう」

「わんつ。 って、ちっがああああつ！」

「大丈夫……」

「ん？ なに灯里」

「大丈夫だよ……」

「え？ 灯里先輩？」

「ちよ……きゅ、急になによお。 灯里い ぐえ……」

「灯里先輩。 急に抱きつかれても……苦しいです」

「大丈夫……うん。 きつと、きつと大丈夫だよ……」

「なに？ いったいなんなのよお」

「でっかい。 わけ分かんないです」

「あらあら。 うふふ」

「ぶいぶいちゃっい」

二人を抱きしめながら、静かに涙する灯里。

困惑しながらも、そんな灯里をやさしく抱きとめる、藍華とアリス。

アリシアとアリア社長は、そんな三人を、優しく、いつまでも見つめていた。

夏の暑さも過ぎ、ようやく風が涼しくなり始めた、そんな初秋のある日のことだった。

Conversazione sulla  
gondola di un giorno in  
inizio di autunno - Due persone di  
vertenti

初秋における、ある日のゴンドラ上の、ち

よつとした会話 - おかしな二人 - la fine -



D u e   p e r s o n e   d i v e r t e n t i   (後書き)

え〜いかがだったでしょうか？(汗)

できましたら、脳内情景補完 並びに 脳内BGM補完  
よろしく、お願いします(鹿馬)

九本目のお話を、お届けします。

えと…このお話しは、無駄に力が入りすぎて、PART - 10までかかる

大長編になってしまいました。

この『いつ明けるかもわからぬ夜』のような駄文に、お付き合いいただき、暖かい目で最後まで読んでいただけるなら、これに勝る幸せは、ありません。

それではとりあえず「PART - 1」しばらくの間、お付き合いください。

「シングル諸君、集合！」

凜とした声がトラゲット乗り場に響く。

「…は？」

「…えと？」

間の抜けた声がトラゲット乗り場に響く。

「んん？」

不審気な声がトラゲット乗り場に響く。

「シングル諸君。しゅ・う・ご・ご・うっうっうっ！ くらあ！ そのの  
オレンジ・ぷらねっとの二人っ 早くせんかあ！」

「わああ！」

「は、はあいいい！」

「わっ、なんだよ、急にお前ら……」

「よおしつ。振り分けを発表するぞお！」

北の乗り場の担当は、アラベラ・キャンベル、アーリー・ハーベ  
エイ、アーリー・ウォルツ……」

ベテラン・ウンディーネが、次々と振り分けを読み上げてゆく。

振り分けを告げられたシングル達は、三々五々、グループを組んで、  
それぞれの持ち場へと散って行った。

さあ。今日もトラゲットの始まりだ。

『トラゲット』とは、

ここ水の街、ネオ・ヴェネツィアにおいて、その真ん中を逆「S」  
字に流れる大運河カナル・グランデに何箇所がある

『渡し舟』のことだ。

ウンディーネと呼ばれる水先案内人。その中で、未だ客を乗せて  
の観光案内をする資格を持たない『シングル』達

・いわゆる『半人前』の彼女達が、客を乗せて操舵できる、唯一の  
仕事。

二人で一組になり、トラゲット専用のゴンドラの前と後に立って、  
操舵するのだ。

また、そのシングル達は、ネオ・ヴェネツィア中の水先案内店、各  
社から派遣されてくるため、いろいろな会社のウンディーネが見ら  
れる

・とゆう、観光名物のひとつともなっていた。

「で…なんでこんな所にいらっしやるんですか？」  
その場に残った、四人のウンディーネの内のひとりが、名前を読み上げていた、ベテラン・ウンディーネに訊ねる。

「いちや悪いか…」

その問いかけに、ベテラン・ウンディーネが無然と答えた。

「い、いえ、そうゆうワケでは…」

「んじゃ、どうゆうワケかな？ アトラ・モンテウエルディくん…」  
「ひいいい…」

「えっと、つまりそれは…なんたって、蒼羽教官ですからあ」

藪をつついて鶴を出す、もうひとりのウンディーネ。

「だから…それはどうゆう意味かなあ？ 夢野ゆめの 杏くんあんず…」

ベテラン・ウンディーネ…蒼羽は低い声で答えた。

「うひっ…」

杏もやっぱり、おびえた声をあげる。

実際、恐いのだ。この人は。

アトラ・モンテウエルディと、夢野 杏は、ともに『オレンジ・ぷらねっと』のシングル・ウンディーネ。

オレンジ・ぷらねっと、とは最近、急成長を遂げた、新進気鋭の水

先案内店だ。

百人からなるウンディーネを抱え、  
新人の学生時代からの発掘、育成。  
完全寮生活での人材の管理、維持。

そして専属の指導員を配置した、マン・ツー・マンでの教育指導。

と、徹底したその経営方針で、わずか十年で、老舗で最大級の規模  
と知名度を誇る、同じ水先案内店の『姫屋』を抑えて、  
ネオ・ヴェネツィア第一位の営業実績を上げていた。

蒼羽 -

蒼羽<sup>あおば</sup>・R・モチツキは、アトラと杏の、その指導教官だ。

彼女の指導の熱心さと厳格さ。そして恐ろしさ（？）は、ネオ・  
ヴェネツィア中に鳴り響いていた。

「フルヴィさんの代理だ」

「フルヴィさんの？」

アビゲイル・T・フルヴィは『クレプシドラ - 麗しき時計』の通り  
名で呼ばれる、同じオレンジ・ぷらねっとのプリマ・ウンディーネ。  
どんな季節や天候の変化にも関わらず、リクエスト通りのスケジュ  
ールをこなすことで有名だった。

ちなみに『通り名』とゆうのは、プリマ…一人前のウンディーネに  
なった者だけが名乗れる、第二の名前のことだ。

「フルヴィさんが引退して、ルナーに、ご家族の都合で引越され  
るのは知っているな」

「はい」

「それで、その準備のために、どうしても今日は、都合が悪いってことで、私が代理を指名されたんだ」

「アレサ部長にですか」

「ああ」

そして、よせばいいのに、杏が訊ねる。

「…蒼羽教官。 いったい、なに、やらかしたんですか？  
ふげげげえ！？」

「そんな余計なこと言う口わ、この口かつ この口かああああ！」

蒼羽は、杏のほっぺたを両手でつねりあげながら叫んだ。

「そりや確かに、アレサ部長の秘蔵のワインを勝手に飲んだのは私だ。 ああ、私だよ。」

でもな。 そんなに大切なモンならば、無防備に机の上に置いてる方が悪いっ。 悪いだろ。 悪いよな？

そうだろう？ そうだな？

アトラ、杏。 お前らもそう思うだろ？ 思っよな！？」

「は、はい」

「はぎゅぎゅぎゅぎゅぎゅ…」

「そうだった。 私は悪くない。 悪いのはアレサ部長だ。 部長の方なんだあ！」

「ふん。 そうなの…」

「おべえっ！？」

杏のほっぺをつねり挙げた状態で、蒼羽が硬直する。  
恐る恐る振り返った、視線のその先には…

「アレサ部長……」

アトラが乾いた声でつぶやいた。

そこにはアレサが、髪を風になびかせながら、微笑を浮かべて立っていた。

アレサ・カニングムは、オレンジ・ぷらねっとの人事部長。

だが彼女は人事部長の職にかかわらず、それ以上の数々の社内改革を実行。

先に示した、オレンジ・ぷらねっとの（ある意味）常識外れの改革の、そのほとんど全てを、ひとりで断行し成功に導いた、才女。

彼女の業績は、業界『第三の波』とまで呼ばれ、畏怖とともに賞賛されていた。

「人が気にして様子を見に来てみれば……ふくん、そういう事、言ってるんだ……」

「いや、あの部長。これはその……」

「蒼羽」

「は、はい」

「向こう一週間。トラゲットの管理責任者としての勤務を命じます。協会には私から連絡しておくわ」

「でええええええええええ！？」

「なに、異議があるの？」

……

と、アレサが、いつそう深く微笑んだ。



「ありません。　ありません。　ありません」  
相変わらず、杏のほっぺたをつねったままの状態で、蒼羽が、ぶんかぶんかと、かぶりを振った。

「そう。それはよかった」

微笑んだまま、アレサが言う。

それは怒るよりも、何倍もの恐怖を周囲に撒き散らしていた。

「しくしくしく…」

蒼羽は　・　やっぱり杏のほっぺをつまみながら　・　涙した。

さすがの鬼教官も、鬼部長には頭が上がらないのだ。

「おい。君、大丈夫か？」

オレンジ・ぷらねっと組のミニ・コントを尻目に、もくもくとトラゲットの準備をしていた、あゆみが

もうひとりのウンディーネに声をかけた。

あゆみ・K・ジャスミンは、姫屋のシングル・ウンディーネ。

トラゲットをプリマ昇格のための修行場ととらえる大多数のウンディーネの中で、最初からトラゲット専門の、

（つまり、ずっとシングルのままの）ウンディーネを希望する、ちよっと異色なウンディーネ。

けれど、その実力は充分、プリマとして通用する腕前を持ち、また、その人望の高さとも相まって、新設された姫屋の  
カンナレージョ支店の、副店長に抜擢されていた。

「どうした、具合が悪いのか？」

トラゲットは通常、四人で行われる。  
今日のココのトラゲットの担当は、アトラと杏。あゆみ。そして、  
もうひとりのウンディーネの四人だった。  
だが、そのもうひとりのウンディーネの様子がおかしい。  
うずくまり、荒い息をついていた。

「だ、大丈夫です…:」  
だが、振り返ったその顔は、はたから見ても真っ青だった。

「おいおい。 ぜんぜん、大丈夫そうには見えないぜ。 無理すんな」

「いえ、ホントに大丈夫ですから…:」  
「どうした？」

ようやく杏のほっぺたから手を離れた蒼羽が、近づいてくる。

「なんか、この子、調子悪そうで…:」  
あゆみの答えに蒼羽は、そっと、そのウンディーネのひたいに手を当てた。

「おい。 熱があるじゃないか」  
「い、いえ。 ホントに大丈夫です。 大丈夫ですから…:」  
「危ないっ」

立ち上がるうとした彼女が、ふらつきながら倒れ掛かる。  
それを間一髪、蒼羽が抱きとめた。

「す、すいません」  
「いや、いい。 それより今すぐ病院に行こう」

「いえ、ホント大丈夫です。みなさんに、ご迷惑をかけるワケには……」

「君は『MAGA』社の茜くん……だな。カン違いするな」  
「え？」

蒼羽はゆっくりと、しかしはつきりと言い切った。

「私達ウンディーネは、会社が違えど、同じ家族だ。家族が家族に遠慮する必要はない。迷惑だなんて考えるな」

「蒼羽教官、でっかい、かっこいいです」  
その言葉に、その場にいた全員がうなずいた。

「おい。アトラ。杏。それと姫屋のあゆみくん。すまないが、こここのトラゲット。しばらく三人でまわしてくれ。  
私はこの子を病院まで送ってくる」

「『』はいつ『』」

三人が、元気よく返事をする。

「代替要員は、すぐ手配する。それまでは……」  
「はい。でっかい、はい！」  
かわいらしい手が拳がった。

「私。私がやります！」  
「アリスちゃん？」

アリスが、元気良く右手を拳げながら、飛び跳ねていた。

アリス・キャロルは『オレンジ・プリンセス（黄昏の姫君）』の通り名を持つ、オレンジ・ぷらねっとのプリマ・ウンディーネ。つい最近、若干、十五歳でプリマに昇格：それも見習いの『ペア』から、半人前の『シングル』を飛び越して一人前の『プリマ』へと、飛び級昇格した、オレンジ・ぷらねっと期待の新星。

「アリスちゃん。 どうしてここに？」

「はい。 朝のお散歩中でした」

「お散歩…」

「はい。 そうしたら、たまたま、みなさんの会話が聞こえてきて…。 私、私、代わりになります」

「いや、しかし…」

「お仕事なら、今日の私は、お昼からですから、午前中は、お手伝いできます」

「いや、そうゆうんじゃないくて…」

「それに、アトラ先輩や、杏先輩はもちろん、姫屋のあゆみさんとも、お知り合いです。 でっかい問題ありません」

「いや、だからね。 アリスちゃん…」

「トラゲットは、シングルしかできないのよ」

アレサ部長が、冷たい声で言った。

「知ってるでしょ？」

「で、でも…」

アリスはアレサに向かって、必死に言いつのつた。

「でも、今は非常事態です。 でっかい、たいへんなんです。 だからだから…」

「トラゲットしてみたい？」  
「…うっ」

図星を指されて、アリスは絶句する。

「いい、アリス…いえ、オレンジ・プリンセス。あなたはもうプリマなのよ。プリマはプリマとしての責任をはたしなさい」

「でも…でも」

「ん？」

「私、シングルの経験がなくて…」  
「…」

「私、ペアからの飛び級昇格で…シングルの経験がなくて… だからトラゲットしたくても、できなくて…」

でも、灯里先輩も、藍華先輩も、トラゲットは楽しいって… だから私は…私も…」

下を向いて、小さくつぶやくアリス。

「いいんじゃないですか、部長」  
茜を支えながら、蒼羽が言った。

「別に技術的に問題があるわけじゃないし、お客様からも文句はないだろうし…いや、逆に大喜びかな？」

「蒼羽。簡単に言ってくれるわね」

「簡単でいいじゃないですか？ 実際、人手は足りないんだし。いわゆる緊急避難的処置ってヤツで…」

「…やれやれ。分かったわ」

「えっ。それじゃあ…」

「みんな甘いわね」

アレサは小さくため息ついた。

「でも、ここで変に断って、テンション下がったまま、午後のお仕事をされても困ります。…今だけよ」

「と、実は誰よりも甘く、優しいアレサは言った。

「は、はい。でっかい、ありがとうございますっ」  
アリスの顔が、向日葵のように輝いた。

「じゃあ、そうと決まれば、あとは任した。私はこの子を病院まで連れて行ってくる」

「すいません」

茜が再び、謝った。

「だから謝るな。そうだな、いずれ精神的に、お返ししてくれりゃいい」

「…はい。ありがとうございます」

「よし。アトラ、杏、あゆみくん。悪いけど、アリスのこと、よろしく頼む」

「はい」

「らじゃっ」

「分かりました」

成り行きを、心配そうに見守っていた三人も、大きな笑みを浮かべてうなずいた。

「じゃあ、みんな。お願い。私は協会に行ってくるわ」  
こうしてアレサ部長は、協会本部へ。

蒼羽は、茜を連れて病院へと、この場を離れた。  
後の混乱も知らぬげに...

Essere Continuato

『Traghtti』PART・1  
S  
[ 夢の扉 ]  
Oggonia Gondola  
- La fine

まるで「終わりになき学園祭前夜」あるいは「果てしなき夏休み最後の2週間」のような、お話です。

際限なく「地の文」を書くところになります(涙)

できましたら、この後もお付き合い、よろしく願います。



「ご隠居、テイヘンだああ!」

「なんだい、八つつあん。藪から棒に?」

「いえ、壁から釘です…」

……

……

PART - 2を、お届けします(うがががが)

「ゴンドラ出まゝす!」

「あらあら、かわいいウンディーネさんね」

元気いっばいにトラゲット用のゴンドラを操舵するアリス。

そんな彼女に、街のおばちゃん達が話しかけてくる。

『Tragetti PART - 2 un  
profilo』

「あら、あなた、手袋なし! プリマなの?」

「いやだ、あなた知らないの? この子、アリス・キャロルよ」

「えっ? あの飛び級昇格の? オレンジ・ぷらねっとの? まあ、かわいらしい」

「あ、ありがとうございます」

「まあまあ。孫があなたの大ファンなの。あとで教えなきゃ」

「そんなこと言ったら、ウチの娘にも教えなきゃ。アリスちゃんがトラゲットしてるって」

「ほんと、かわいいわぁ……」

「あつ。これ今そこで買ったリンゴなの。ひとつあげるわ。食べて食べて」

「そうだ。夕方、パニーニを焼いてきてあげる。よかったら、受け取って」

「は、はい。ありがとうございます。よろしくお願いします」

おばちゃん達だけでなく、おっちゃんやおじさん。小さな子供達まで、アリスに気楽に話しかけてくる。

そこには、ゴンドラクルーズでは決して味わうことのできない、街の人々との暖かな、ふれあいがあった。

「あゆみさん……」

「なに？ アリスちゃん」

交代して、アトラと杏が操舵するゴンドラを見送りながら、アリスは、かたわらに腰を下ろしている、あゆみにポツリと言った。

「私…前に、あゆみさんが一生シングルでいたい。…ずっと、トラゲットをしてみたいって言ったの、分かります」

「ん？」

「灯里先輩が言ってました。トラゲットは街の人達だけじゃなくて、

その思いまで運んでくれるんだって。

その心までも運んでくれるんだって。

私、今ならその気持ち、でっかい分かります。  
私、今日、トラゲットができて、ホントに良かった…」

「アリスちゃん……」

あゆみは横にいるアリスの横顔を盗み見た。

アトラと杏の操るトラゲットのゴンドラを見ている、アリスの横顔を。

その、とても嬉しそうな横顔を  
その、とても満足そうな横顔を  
その、とても輝いている横顔を

「そっか。 うん。 ありがとう」

あゆみは満面の笑顔で答えた。

「あれえ？ 後輩ちゃん。 こんな所で何やってんの？」  
「藍華先輩？ それに晃さんまで…」

不意の声に振り向くと、そこには二人の姫屋のウンディーネが、一匹の黒猫を肩に乗せ立っていた。

ひとりは「クリムゾン・ローズ（真紅の薔薇）」の通り名をもつ、  
プリマ・ウンディーネ。 晃・E・フェラーリだ。

彼女は、あまたいる、このネオ・ヴェネツィアのウンディーネの中でも、抜群の人気と技量を誇る、トップ・プリマ・ウンディーネとして、その名を轟かせていた。

もうひとりには「ローゼン・クイーン（薔薇の女王）」の通り名をもつ、プリマ・ウンディーネ。藍華・S・グランチエスタ。彼女は、創業百年を誇る姫屋の創業者、グランチエスタ家のひとり娘。

若干、十八歳でありながら、今年開業したカンナーレジョ支店を束ね、着実に、その成果をあげていた。

そして、その肩の上に背筋をピンと伸ばし、いかにも気位が高そうに座っているのが、姫屋のヒメ社長だ。

このネオ・ヴェネツィアにおいて青い瞳の猫は、航海の安全を守る、守り神として、各、水先案内店で『社長』として迎え入れられているのだ。

「はい。私は今、トラゲット要員として、お仕事をしています！」  
アリスが胸をそらしながら言う。

「へ？　トラゲット要員？　なんで？　トラゲットは、シングルのお仕事よ？　あゆみさん、どうゆうこと？」

「それが実は……」

あゆみは、これまでのいきさつを二人に説明した。

「ええ〜。それっていいの？」

「緊急避難処置ってヤツだね」

「蒼羽教官？」

背後からの声に振り向けば、病院から戻ってきた蒼羽が苦笑を浮かべ立っていた。

「教官。あの子どもになりました？」  
トラゲットを終え、対岸から戻ってきたアトラと杏が、そんな蒼羽に訊ねた。

「ああ…どうやら過労気味なのを無理してたみたいだ。二、三日は安静だな。まあでも、それ以外は別状なしだ」

「そうですか…よかったです」

「そうゆうワケで、お二人とも、どうか目をつぶってくださいよ」  
蒼羽はウィンクしながら、藍華と晃に言った。

「えと…あなたは」

「ああ。失礼。私はオレンジ・ぷらねつとの蒼羽・R・モチヅキと言います。姫屋の藍華さんと晃さんですね。」

お二人のご高名は、かねてから、お聞き及びしていました」

「ああ。あなたがオレンジ・ぷらねつとの蒼羽さんでしたか。こちらこそ、お噂はかねがね。業界イチの指導教官だと」

「いえいえ。私なんか、晃さんの足元にも及びません」

「また、そんなご謙遜を。私の方こそ、一度、お会いして、指導方法などを伝授していただきかったです」

「いや、私の指導方法など、名にしおう『クリムゾン・ローズ』の晃さんに比べれば…」

「いやいや。そんな指導教官NO.1の名声を得ていらっしやる、蒼羽さんの方こそ…」

「あの藍華先輩」

「ん。何よ、後輩ちゃん」

なぜか、だんだんとヒートアップしてくる昴と蒼羽の会話を無視して、アリスが藍華に訊ねた。

「藍華先輩、この後、時間ありますか？」

「ん？ ええ。今日の私は午前中でお終い。んで午後からは久しぶりに昴さんと、打ち合わせを兼ねた、お茶会を…ね」

「つまり、午後からは、時間あるんですね」

「んん？ どうゆうこと？」

アリスの瞳がキラリッと光った。

「では、私の代わり。でっかい、お願いします」

「ななっ？ 急に何言い出すのよ」

「私、もうすぐ昼の営業が始まるんです。だから、誰か代わりの人をつて…思ってたまして」

「ちょ、ちよっとアリスちゃん」

あゆみが、あわてて割って入る。

「お嬢は…藍華さんはプリマですよ」

「あゆみさん。私のこと呼び捨てでいいですってば。って、その通りよ。私もうシングルじゃ…」

「私だって、シングルじゃありません」

「い、いや。アリスちゃん。アリスちゃんの場合は、あくまで緊急避難的な特例で……」

杏も、あわてて口をはさむ。

「じゃあ、藍華先輩の場合も、でっかい緊急処置です」

「あのねえ……」

「それに藍華先輩も、トラゲットしてみたいでしょ？」

「わ、私は前に一度やったコトがあるから……そんな今更。 た、確かに楽しかったけど。でも私はもうプリマなんだし……」

「にやにや……にやにや……」

「な、なによあ。後輩ちゃん。 その、にやにや笑いは」

「藍華先輩っ」

「な、なに？」

「口で何を言っても、体は正直ですね。 へへ……ほら、もう。 オール握ってますぜええ……」

「ぎゃああああああっス!？」

そう。 いつの間にか藍華は、無意識の内にオールを手に取り、いつでも漕ぎ出せる体勢をとっていた。

気がつけばヒメ社長も、しっかりと、トラゲットのゴンドラの先端部分に座り込み、微動だにせず、前を見据えて座っていた。

「うっ……これも優秀なウンディーネの、悲しい性なのね……」  
ヒメ社長の、その凜とした横顔を見ながら、藍華のボヤいた。  
みんなの優しげな笑い声が響き渡る。

「おいつ。 あゆみ!！」

突然、晃が叫んだ。

「は、はい!？」

「お前、今からレースをしろ!！」



「はあ？」

「なに、間抜けた顔をしているつ。レースだ。レース！　すぐ支度しろ！！」

「ええええ？」

「おいつ。アトラあ！」

今度は、蒼羽が叫んだ。

「は、はい！？」

「こちらは、お前だつ。お前がレースに出る！」

「ええええ？」

「ちょ…いったい、どうゆうことですか？」

「どちらがより優れた指導員か、お前達のレース決めるんだ！」

「はいいい？」

「勝ったほうが、より優秀な弟子を育てた…つまり」

「つまり、より優秀な指導員って事だ」

「はあ……」

「だから、あゆみ……」

「いいか、アトラ……」

晃と蒼羽は、同じように叫んだ。

「『必ず、負けろっ！』」

「はいいいいいいいいいい？」

「いいか、あゆみ。蒼羽さんが、より優れた指導員であることを証明するために、必ず、負けるっ」

「いいか、アトラあ。晃さんが、より秀でた指導員であることを証明するために、絶対に、勝つなっ」

「なんじゃ、そりゃあああああー！」

「『 うっさいっ。黙れっ。シバくぞっっ 』」

なぜか息もぴったりあった晃と蒼羽のセリフが、二人の抗議の声を圧殺する。

「ゴンドラは私達のをええ」

「そら。さっさと位置につけ」

「『 だあああっ 』」

泣き喚くアトラとあゆみにかまいもせず、晃と蒼羽は言い放った。

「『 用意どん！ 』」

「『 早！ 』」

あわあわあわーと  
飛び出して行くふたり。

そんな二人を見送って、晃と蒼羽はどちらともなく笑い合つと、お

互い右手を出し合い、がっちり握手を交わし合った。

「あのお……」

そんな感動的なシーンの、その全てを、ぶち壊すかのように、杏がつぶやいた。

「トラゲット要員。私しかいなくなっちゃったんですケド……」

「『ま』」

二人の横顔が固まった。

「アリスちゃんは、もうすぐ営業で離れなきゃならないですし……そろそろ、お腹も空いてきましたし……」

「……ええとお」

「もしかして、何も考えてませんでした？ ふげげげえ？」

再び、杏のほつぺたをつねり挙げながら、蒼羽が叫ぶ。

「そんな空気の読めないこと言う、アホな口は、この口かあ！ この口かあ！ この口かああああ！」

「うげげげげ。 しょ、しょんな……あほびやさん。ごみゆたいにや……」

「誰が、アホじゃああ……」

「ふげげげえげげ」

「私がやりましょう」

「晃さん？」

腰に手を当て、晃が仁王立ちしながら言い放った。

「あの二人が帰ってくるまでの間。不肖、この私。晃・E・フ  
エラーリが、トラゲットを勤めます」

「ふえええ？」

「い、いや、そんな……」

やっぱり、杏のほっぺをつねりあげたまま、蒼羽が言う。

「姫屋、いや、ネオ・ヴェネツィア・NO-1のトップ・プリマの  
晃さんに、トラゲットをしていただくワケには……」

「いえ、蒼羽さん。元はと言えば、こうなった責任の一端は、私  
にもあります。ぜひ、やらせてください。なあ、藍華っ」

「はっ、はいいい」

「おお。もうオールを持って準備しているのか。感心感心。そ  
れでこそ、次代の姫屋を背負ってゆく、

我らが『ローゼン・クイーン』 - 薔薇の女王様だ」

「いやあ、これは、その…あはは」

「藍華先輩。でっかいケガの功名です」

照れる藍華に、アリスがすかさずツッコんだ。

「うっさい。いらんこと言うの禁止！ あの子みたいにはっぺた、  
つねらりたい？」

未だに蒼羽にほっぺたをつねられたまま『あうあう』と呻く、杏の  
横顔を見ながら、アリスは、ひきつつた笑顔を見せた。

「私は他のトラゲット乗り場も見に行かなければならないので、あ

とをよろしくお願いします。 晃さん

そう言っつて、すまなそうにする蒼羽に向かつて、晃は笑って答えた。

「任せてください。 その間のことは私が責任もって見させていた  
できます。 ……それと」

「はい？」

「これから私のことは、晃、と呼んでください」  
満面の笑顔でそう言っつ、晃。

「…分かりました。 それでは私のことは蒼羽、と…よろしく、晃」  
同じく、満面の笑顔でそう答える、蒼羽。

「こちらこそ、蒼羽。 では、また後で」

「ええ。 また後で」

こうして晃と蒼羽は、笑顔で分かれた。

ただひとり、アリスだけがいつまでも名残惜しそうにトラゲット乗  
り場を振り返っていた。

こうしてトラゲットは、新たなステージに突入してゆく。

en ]  
n U  
P r o f i l i o . . . T r a n s l a t t e d  
[おが  
P A R T - 2  
- L a -  
f i

ええと…つまり、その…私は「前書き」に書いたような、  
人のいい、八つつあん、熊さんが、まわりの、やっぱり人のいい人  
達を巻き込んで

大騒ぎする、そんな落語的世界が大好きなのです(汗)

ですから今回も、実は、そんなお話…(大汗)

もし、みな様に、こんな世界観のARIAを許していただき  
ちよつとでも微笑んでいただけたら、これに勝る幸せはありませ  
ん。

この話、ホント、まだまだ続きます(涙)

それでは、もうしばらくの間、お付き合いください。

Tragheti

PART - 3

Tempo del bambi

PART - 3を、お届けします。

.....

.....

えと……ここまで来ると、もう、みな様にもお分かりのように、この  
お話の裏・タイトルは -

「オール怪獣総進撃」

もしくは

「オール・ライダー対大ショッカー」

です(汗)



「ゴンドラ、出まあす！」

晃の声がトラゲット乗り場に響きわたる。

「きゃあああつ。 晃さん！ 晃さんよおおつ！」

女性客の黄色い歓声が上がる。

その場が、いつきに『魔女の大釜（大混乱）』へと加速してゆく。

Tempodelbambino 『Traghetti』 PART - 3 『

藍華と晃の姫屋・師弟コンビが操るゴンドラは、二人の性格のままに、豪快に波を切って運河を渡って行く。

「わあつ。 ホントにホントだわつ。 晃さんがトラゲットしてる  
うっうっ！」

「信じられない〜い！ あの晃さんに、こんな所で会えるなんて！」

「きゃあああつ。 私、私。トラゲットに乗る。今すぐ乗るうっ！」

「もちろんですよ。 何回だって乗ってやるわ〜あっ！」

「あ〜ん。 あ・き・ら、さああああんんっ」

そんな大騒ぎする彼女達に晃は、そつと、やさしく微笑みながら答えた。

「お客様方。あまり騒がれますと、他のお客様へのご迷惑ともなります。どうかお静かに。…それと」

「そ、それとお？」

「これ以上のことは、二人っきりのゴンドラ・クルーズの時に…ゆつくりと……ネ」

「きゃあああああああ」

悲鳴が、怒涛のごとく広がってゆく。

「でた。 必殺レディ・キラー……」

ゴンドラを操舵しながら、藍華がつぶやいた。

客を…おもに男性客をぎりぎりまでおちよくる（他の美人ウンディーネに、目を奪われた新婚カップルのだんなに、『見とれてどうする…』

と耳元でささやいたり、女性客用に買った薔薇の花を、カルメンに見立てて、男性客の口に押し込んだり）

「客いじり」と並んで、これを、晃をトップ・プリマへと押し上げた、究極の接客術。

その名も「レディ・キラー」っつ。

もともと、男装の麗人っばい『イケメン』な晃が、その美貌とクールな瞳で、声優の皆川純子ばりの甘い声でささやくように言えば、

大半の女性客は、まるで魂を吸い取られたかのように、晃にメロメロになってしまっただ。

気がつけばゴンドラの中は、女性客でいっぱいになっていた。

「おおいつ。店はどうするんだあ!？」

「おい。母ちゃん。お願いだから帰ってきてくれえ!」

「うわん。客も店員も取られたあああ!」

屋台や、お店の亭主達の泣き叫ぶ声が、切実に響いては消えてゆく。

「やっぱり、晃さん…『クリムゾン・ローズ（真紅の薔薇）』はスゴイですねえ…この辺一帯の屋台や、お店から、お客さんはおるか、ウエイトレスさんや、

女将さんまで、女性は、ひとりもいなくなりました。みんな競うように、晃さんのゴンドラに乗ろうとしています…!」

杏が感心したように言う。

「あは…あははははは…!」

藍華はただ、笑うことしかできなかった。

「うおつ。なんだこの騒ぎは? うわつ。がちゃぺん!？」

「がちゃぺん、言うなあ! このポニ男っ!」

反射的に怒鳴り返すと、藍華は声のした方を睨みつけた。

が、次の瞬間。 藍華のその顔が、デレっとなる。  
「アルくん……」

そこにはサラマンダーの暁。シルフのウツディー。  
そして -

「あれ、藍華。トラゲットをしてるんですか？」

ノームのアルが、にっこりと微笑んでいた。

サラマンダー・火炎乃番人は、このネオ・ヴェネツィアにおいて『浮き島』と呼ばれる、空に浮かぶ人工島で大気や気温の操作を行う、オペレーター、操作員のことだ。

シルフ・風追配達人は、車の乗り入れが禁止されているネオ・ヴェネツィアで、エア・スクーターに乗り、郵便以外の配達物を取り扱う、宅配人のこと。

最後に。

ノーム・地重管理人は、地下の巨大な施設の中で、このアクア全体の重力を1Gに保つ仕事をしている地重の番人。

サラマンダー。シルフ。ノーム。それに水先案内人である、ウンディーネ。

この四種の職業が、ネオ・ヴェネツィアにおいて、四大妖精と呼ばれる、代表的な職業だった。

そんなノームの、アル。

アルバート・ピットは、藍華の相思相愛の想い人でもあった。

「ちょうどよかったです。はい、これ」

「…え？」

「前に頼まれていた、僕の部屋の合鍵です。どうぞ」

そう言つて、微笑を崩さぬまま、アルは藍華の手を取つて、鍵をその手の中に包み込むようにして渡した。

「アルくん……」

ちよつぴり頬を染めながら、鍵を受け取る藍華。

「『Key』だけに、取り扱いに『キイ』をつけてください。なんてね」

そんな「ハート」なムードを、彗星の彼方に放り投げるかのように、アルお得意の駄洒落が炸裂する。

「だああああ！ おやぢギャグ禁止！」

たまらず、藍華は叫んだ。

「ええ〜藍華。こ、これは、鍵の『Key』と『気を付けて』とを重ねた、マン・ホームに伝わる高等古典で……」

「禁止つ。禁止つたら禁止つ」

「えええ〜」

「『ふほほほほお？』」

突然、暁とウツデイが妙な声を上げた。

「聞きましたか、ウツデイさん。今、アルのヤツ。がちゃぺんさんを、藍華つて呼び捨てにしましたよおお」



「灯里？」

「あれ、灯里ちゃん」

「おや、アリア社長も」

「ぶいにゆ〜ん」

「おおつ。もみ子か！」

暁が、灯里のサイドにたらしめた髪の毛を引っ張りながら、必要以上に大きな声で叫んだ。

「もみ子じゃありませんよ〜お」

灯里は困ったような声をあげた。

もみ子……ではなく、水無<sup>みずなし</sup> 灯里<sup>あかり</sup>

・は「アクアマリン（遥かなる蒼）」の通り名を持つ、ARIA・カンパニーのプリマ・ウンディーネ。

絶大な人気を誇った「スノーホワイト（白き妖精）」、アリシア・フローレンスの、ただ、ひとりの弟子。

灯里のプリマ昇進と同時に「寿」引退したアリシアのあとを継いで、ARIA・カンパニーの経営まで引き継いだ、  
今、注目のウンディーネ。

「水無灯里のゴンドラは、小さな、もうひとつのネオ・ヴェネツィア」

と呼ばれるほどに、彼女のゴンドラ・クルーズは、のんびり、ゆったりとした、そんなネオ・ヴェネツィアの時の流れを感じさせる、優しく、静かで、穏やかな気持ちにさせてくれるクルーズとして、  
人気があった。

「では、このりっぱな、もみあげはなんだと言っただ？ お前はもみ子だ。もみ子で充分。もみごくわあぶ！？」  
突然、暁が足を押さえて悶絶し始める。  
「もみ子。もみ子って、うるさい！ 暁さん。ちゃんと灯里さんって呼んであげてください」  
「アイちゃん？」

黒い服に、黒い髪。赤いリボンが印象的な少女が、腕を胸の前で組みながら、ふくれっ面で立っていた。

「アイちゃん。こっちに来てたんだ」

「はい。藍華さん。お久しぶりです。アルさんや、ウツディさんも」

「おや。アイちゃん。お久しぶりなのだ」

「アイさん。いらっしやい。お久しぶりですね」

「お、俺には挨拶なしかい……」

暁が、向こうズネを押さえながら呻いた。アイに思いっきり、蹴り飛ばされたのだ。

アリア社長が、ぷいぷいっと、暁の頭に登ってゆく。

アリア社長は、先ほどのヒメ社長と同じ、ARIA・カンパニーの社長猫。

「ダイエットしないと、糖尿になっちゃうわよ」

と、世の中年男性なら、その魂をもえくり取られるような言い方をされる、太くて大きな白い猫。

だが、その通り。

彼の「もちもち・ぼんぼん」（お腹のことだ！）は、とてもやわら



かく気持ちいい……

地球猫のヒメ社長と違い、火星猫であるアリア社長は、長命で知能も高く、しゃべれることはできないものの、

人の言葉や気持ち、想いなども、充分、理解することができる、素敵な猫さんだ。

ちなみに、ヒメ社長に、でっかいラブだったりする。

悲しいくらい、まったく相手にされていないが……

「灯里さんを、未だに、もみ子呼ばわりする、へたれな暁さんなんか、知らないです」

アイが、怒りながら言う。

「な、なにおおお！」

「っーんっ」

「うわっ。腹立つっー！」

「そこまで言うんなら、ほら、ちゃんと、灯里さんって名前で呼んであげてください」

「うっ。うおお……そ、それは……」

「ほら、やっぱり、へたれです」

「な、なにおおお！ 言ってる。それぐらい、大丈夫たる俺様は、なんなく言ってるさあ！」

「へえええ？」

アイが企んだように笑った。

「じゃあ、言ってみてください。あっ、灯里さんの顔見ながら、ちゃんとだよ！」

「おっー！」

暁は、髪の毛を、やっぱりしっかりと握りながら、真正面から灯里の顔を見据えた。

「はひっ……」

灯里の顔が紅くなる。

つられて暁の顔も、少し紅くなって…

「あ…あ、あか……」

「はひっ……」

「う…あ…あか…ほう、ああ…あか… あか…はほ。 えふ…あ、

あか…あか…いいいい」

「は、はひいいい……」

しどろもどろに、訳の分からない言葉を繰り返す、暁。

妙におどおどして、下ばかり見ている灯里。

そのまま二人は『フリーズ』の呪文でもかけられたかのように固ま  
って……

「やっぱり、へたれっ」

ドガスッ

「げぶふうっ！」

アイは暁のスネを蹴飛ばしながら叫んだ。

「ぐおおおっ。 て、テメえ、な、何しやがるうー！」

「っーん」

「がああああ！」

「あ、暁さん、落ち着いて、落ち着いて… アイちゃんも本気じゃ  
ないですから……」

あわてて灯里が間に割って入る。

「もう、灯里さんってば…せつかく名前で呼んでもらえるチャンスだったのに…ホントに天然なんだからあ」

そんな灯里にアイは、小さくタメ息をついた。

気がつけば、まわりにいた全員が - アリア社長やヒメ社長も含めて - 同じようにタメ息をついていた。

「灯里ちゃん。この、お嬢さんは？」  
杏が訊ねる。

「あつ、そつか。杏さんは初めてでしたよね。この子はアイちゃんです。私のお友達です。」

マン・ホームから遊びに来てるんですよ」

「初めまして。アイです」

アイが行儀よく、頭を下げる。

アイは、マン・ホームに住む、ミドル・スクール6年生の女の子。二年前、まだシングルだった灯里のゴンドラに、無理矢理乗り込んだ彼女は、藍華をも巻き込んで、大騒動を引き起こした。

が、結果、それまでのネオ・ヴェネツィアとウンディーネに対する誤解を解き、逆にAQUAの魅力に獲りつかれることになった。

特に灯里と仲が良く、年越しや、カーニバル、レデントーレといったイベントにも、特別なお客様として、ARIA・カンパニーにホーム・ステイするほどの間柄だった。

「初めまして。私は、オレンジ・ぶれねっとの夢野杏です。よろしくね。アイちゃん」

「あ、はい。よろしくお願いします。って…杏さんは、もしかして灯里さんが、トラゲットをした時の……」

「え？ うん。そうだよ。灯里ちゃんとのトラゲットは、とっても楽しかったよ。知ってるの？」

「はい。私、灯里さんから聞いてます。あの時、杏さんのお話には、とっても勇気をもらえたって」

「え？」

「あ、アイちゃん……」

灯里があわてて止めようとする。

けれど、アイは、そんな灯里にかまわず、なぜか自慢気に話を続けた。

「灯里さん言っていました。あのとき、杏さんが言っていた『やわつこく』って言葉に、たくさんの想いと元気をもらったって……」

もっと前へ、前へ。って、そんな気持ちにさせられたって」

「えっ。そ、そうなの？ わ、私はただ、自分の感じたままを話ただけで…あ、ありがとうございませ……」

杏が照れたように、頭を下げた。

「いえいえ、そんな。こ、こちらこそ、ありがとうございませ」  
灯里もなぜか、ふかぶかと、お辞儀を返す。

「あっ、いえいえ」

「はひ、いえいえ」

その後、杏と灯里は、たっぷり五分も互いに、お辞儀を繰り返していた。

「おおつ。 灯里ちゃん。 いや、アクアマリン。 お前も来たのか」

「あ、晃さん」

「わあい。 晃さんだあ。 こんにちは」

アイが嬉しそうに笑う。

「やあ、アイちゃん。 お久しぶり。 一段と、キレイになったな」

晃は、アイの頭をなでながら言った。

「晃さん……」

アイが頬を紅に染め、瞳を潤ませる。

スプラッシュ！ - 命中。 撃墜！ -

藍華は胸のうちで、つぶやいた。

晃・E・フェラーリ。

振るう刃は、相手を選ばず、小女といえども容赦なし！

恐るべし、彼女のその名は『レディ・キラー』……………

「おい、灯里。いまからお前もトラゲットをさせてやる。さあ、心おきなく、漕ぐがいい」

晃が灯里に、まるで宣言でもするよつに言った。

「へ…？ 私が、トラゲットを？ で、でも……」

「あ、晃さん。そんなつ。いいんですか？」

「すわっ！」

「はひいいい？」

「ぎゃああス！」

灯里と藍華のとまどいを、ひと言で粉碎して、晃が言った。

「嫌なのか？」

「い、いえ、決して嫌じゃないです…どちらかと言えば、やりたいですけど…でも、でも…あの、なんでですか？」

「ああ…灯里。それは、つまり……」

藍華が今朝からのことを説明しだす。

「緊急避難的処置……」

「そつだ。そうゆう訳だから、お前も漕げ。責任は私が持つ」

「あの……」

「ん？」

「ホントにいいんでしょうか？」

「灯里さん！」

躊躇する灯里の制服の裾を、アイが引つ張った。

「え、なっ、なに？ アイちゃん」

「私、灯里さんのトラゲット、乗りたい……」  
アイがすぎるように言う。

「ほへ？」

「私、灯里さんのトラゲット乗れなかった。プリマな灯里さんのゴンドラには乗れたけど、トラゲットのゴンドラには……」

「アイちゃん……」

「だから私。私、灯里さんのトラゲット、乗ってみたい！」

そのひと言に、灯里は、あっさりと陥落する。

「決まりだな」

晃が勝ち誇ったかのように笑った。

「よし。水無灯里。いや、アクアマリン。今からトラゲット要員を命じる」

「は、はひ！ わ、分かりました」

晃からオールを受け取りながら、灯里は力強く言い切った。

「水無灯里。トラゲット、行きまーす！」

「わああい」

アイの圧勝だった。

晃はそんなアイに - Good Job! - というように、親指を立ててエールを送る。

アイはウィンクで、それに答えた。

「よし。じゃ、今の内に、杏くんと、藍華は食事に行ってこい」

「えっ、いいんですか？」

驚く藍華に、晃は、色気のある、だが、いたずらな微笑みを浮かべながら言った。

「ふふん。 藍華。 お前はアルと食事してこい。 二人っきりでな……」

「え？ あっ、晃さん？」

「なに、遠慮することはない。 いつも頑張っている、自分への褒美だと思えばいい」

「晃さん……あ、ありがとうございます」

藍華の顔が真っ赤に染まる。 目には、うっすらと涙が浮かんでいた。

「うおおっ。 やっぱりこいつは、兄貴だあっ」

暁が、昔の浮き島での、晃との対決を思い出したかのように、驚嘆して叫んだ。

「だあ・れえ・があ、兄貴じゃああ！ ったく、ほら、ここは任せで、行った行った。 杏くんも、ゆっくりとしてきていいぞ」

「あ、でも」

杏が不安気に訊ねた。

「本当に大丈夫ですか？ 私までいなくなっ……」

「大丈夫って言ったろ。 杏くん。 灯里ちゃんもいるしな。 それ

に、 実はもうひとり助っ人を頼んであるから……」

「それってもしかして……」



「ああ。アリスちゃんのこと話したら、ぶっとんで来るってサ  
「……はははははは  
杏の笑みは、ひきつっていた。

こうしてトラゲットは、また新たな展開を迎えるのであった……

Essere Cont  
inuato (くじく)

『PART.3  
Tragettiti  
Tempo del Bambino  
La fine  
子供の時間』

そんなわけで…

このお話しは、自分の筆力も考えず、今まで出てきた人物（+ a）を全て登場させようと……（大鹿馬）

そんなこんなで次回は『あの人』が登場します。

どうか、よろしく、お願いします（礼）

このような大それた作品を、暖かい目で流し読みしつつ

「フムっ」と、口の端でも笑っていただけなら、これに勝る  
幸せは、ありません。

それでは、しばらくの間のお付き合い。

ありがとうございました。

PART-4をお届けします。

.....

.....

無理が通れば、道理はひっこむ!!

すいません。すいません。ごめんなさい。ごめんなさい.....

「ゴンドラ、出ますっ」

灯里が声をあげる。

ゴンドラは船着場から離れると、ゆっくりと運河を渡りはじめた。

「によわっ」

蒼羽が変な声をあげた。

「なんで、お前がここにいるんだ……」

「お久しぶりです。 蒼羽さん」

灯里は、につこりと微笑む。

その笑みに蒼羽は、顔を引きつらせながら立ちすくんでいた。

『Tragetti』 PART - 4  
Ii pomerriggio calmo

「はひっ。 晃さんが誘ってくださって…私、今、すっごく楽しく  
トラゲットさせてもらってます」

灯里が満面の笑顔を見せる。

「う…おう…そう、それはよかった」  
あいまいに微笑む蒼羽。それは、アトラヤ杏。同期で同じオレ  
ンジ・ぷらねっとのウンディーネ。アテナにも  
決して見せたことのない、レアな表情だった。

「やあ、蒼羽。他のところはどうでした？…どうかしましたか  
？」  
晃が不審気な表情を見せ、近寄って来る。

「あ。ああ、晃。大丈夫ですよ。問題ありません」  
蒼羽は、あわてて答えた。

「そう…それならいいんですが」  
「ええ。ですから晃。少し休んでください。しばらくの間、  
ココは私が面倒みます」  
「そうですか。では、お願いします。ちょっと調子に乗りすぎ  
ました」  
照れ笑いを浮かべる晃。

「ちょっと？」  
未だに晃の後ろに集まって、大歓声をあげている大勢の女性陣を  
見ながら、蒼羽はつぶやいた。

「ちょっと？」  
頭に大粒の汗が浮かんで落ちる。

「じゃ、蒼羽。少し抜けてきます」

「ラッジャ。」「ゆっくり、晃」

晃は、その場を離れてゆく。  
と、同時に、集まっていた女性陣も解散していき…トラゲット乗り場は、ようやく落ち着きを取り戻しはじめた。

ゴンドラはゆく。

灯里のトラゲットはゆく。

風を受けて、のんびりと。 ゆったりと。

客達の笑い声が弾ける。

買い物かご、いっぱい食材を詰めた、おばちゃん達。

本を片手に、次の名所を目指す観光客達。

お母さんと手をつなぎ、甘える女の子。

お互いを見つめ合い、ふたりだけの時間を楽しむ、カップル。

対岸で待つ、子供達に、おみやげが入っている袋をかがげ、手を振るお父さん。

灯里のゴンドラは、そんな人達を乗せて、静かに進んでゆく。

……ああ。

「さすがだね。 灯里ちゃん」

「はひ？ 蒼羽さん？」

次のトラゲットまでの空いた時間。 蒼羽はゴンドラ乗り場から運河をながめつつ、横に座った灯里に声をかけた。

「君の操舵は、本当にゆったりとして気持ちいい。まるで自分が風になったようだ」

蒼羽が目を閉じ、空を見上げながらつぶやいた。気持ちのいい風が、吹き抜けてゆく。

「うん。私もすっごく気持ちよかった」  
アイも同じように目を閉じ、風を感じていた。

「はひ。ありがとうございます」  
灯里は照れながら、しかしとても嬉しそうに笑った。

「私はね、灯里ちゃん」  
「はひ」

「私は君にとっても感謝してるんだ」  
「はへ？」

「君は、かたくなだった私の心に、新しい風を吹き込んでくれた。新しい波紋を広げてくれた」

「蒼羽さん……」  
「おかげで私は立ち直れた。自分を見失わずにすんだ」

「そんな…おおげさです」  
「いや。そんなことはない。君は君自身が思っているより、それ以上に、たいしたヤツなのさ」  
「……………」

「それでだ…灯里ちゃん」  
「は、はひ。なんでしよう」

「あの時、いいそびれた言葉を、今、言おう……ありがとう。感

謝している」

「蒼羽さん……」

「まあ、おかげで君の顔を見るのが、なんだか照れくさくてな。

さつきは、ごめん」

蒼羽は微笑む。

さきほどの、灯里の顔を見て、複雑な表情で立ちすくんでいた時のことを言っているのだ。

「い、いえ。そんな……ぜんぜん気にしてないですから……」

「灯里さんは、やっぱり不思議だね」

「アイちゃん？」

「灯里さんは、自分でも気が付かないうちに、たくさんの人達に、たくさんの素敵を送りものをしてる。

うふふ……不思議で素敵！」

「おおつ。この子は、灯里ちゃんのこと、よく分かってるな」  
蒼羽が、アイの髪を優しくなでる。

「えへへ……灯里さん。ほめられちゃいましたあ……」  
アイは、くすぐったそうに笑いながら言った。

「おおい。もみ子。ほら、差し入れ持ってきてやったぞ」  
暁が頭にアリア社長を乗せたまま、肉まん片手にやって来る。

「俺様の優しさに感謝するがいい。ほら、ちびっ子の分もちゃんと買ってきてやったぞ」



「ちびっ子、言うなあ!」

・どぎざすっつ!

再び、アイの蹴りが、暁のスネ　・弁慶の泣き所とも言ふ　・に炸裂する。

再び、暁は転げまわって悶絶する。

「誰、これ?」

「へたれっ、です」

蒼羽の質問に、アイは即答した。

「へたれ?」

アイが今までのことを蒼羽に耳打ちする。

「ああ…そいつは、へたれだな」

「ぬっ、ぬ、なにおおお!?　　うわっ?」

不意に蒼羽は、叫ぶ暁の胸元をつかむと、そのまま力まかせに引きずって、人気のない通りの家の壁へと、叩きつけるかのように押し付けた。

「ぶぎゃ　あああゝっ」

暁の頭の上で、アリア社長が悲鳴を上げる。

「いいか、お前っ」

「な、なにっ。　　なんだよ」

蒼羽は小さな、しかし充分に『ドスのきいた』声で、暁の耳元でささやいた。

「あの子は…水無灯里は私の恩人なんだ。だから…」

「だ、だから？」

「だから、あの子をちよつとでも不幸な目に合わせてみる…コンクリ詰めにして、ネオ・アドリア海に沈めるぞっ」

「ぷ。ぷ。ぷいにゅううう……」

アリア社長が眼に涙を浮かべて、怯える

「うう…わ、分かったよ……」

暁も完全に気合負けしていた。

「声が小さい！」

「わ、分かりましたああ」

「よし。よろしい」

ニヤリと凄みのある笑いを浮かべる、蒼羽。やっぱり基本的に恐い人なのだ。

「…ったく。あの眼鏡っ子といい、コイツといい、どうしてオレンジ・ぷらねつとのウンディーネは、こつも攻撃的なんだ……」  
激しいデジャ・ビュ（既視感）に襲われる暁。

「何か言ったか？」

「いえ。なんでもありません！」

暁は、やけくそ気味に叫んでいた。

「お？ 蒼羽じゃないか。また楽しそうなこと、やってるな」

「なにい!？」

と、暁にダメ出した勢いのまま、蒼羽は声のした方向を睨みつけ……

「アンジェリアさん？」

驚きの叫び声を上げる。

けれど、叫び声は、それだけでは収まらなかった。

「グランマだ!」 アイが叫ぶ。

「明日香さん?」 灯里も叫ぶ。

そして・

「アリシアすわぁん!」 暁が叫んだ。

「あらあら、うふふ……」  
アリシアがみんなの気持ちを代表するかのようになり、楽しげに微笑んだ。

「いやあ。なんかトラゲット乗り場が楽しそうなことになってるって、風の噂で聞いてね」

「楽しそうって……」

アンジェリアのその言葉に、蒼羽が苦笑する。

アンジェリア・アマティは、「元」姫屋のウンディーネ。

姫屋退社後、請われてゴンドラ協会の指導員に再就職した彼女は、各、水先案内店の指導員達への技術指導や意見交換など協会と水先案内店との間をつなぐ、重要な要としての責務を果たしていた。

蒼羽とは、その過程で知り合い、立場と所属は違えど「同じウンディーネの先輩・後輩」として話せる仲だった。

「こんな楽しいことになってるなら、さっさと私も呼びなさい」

「いや、そう言われても……」

そんな、いたずらなアンジェリアの笑顔に、蒼羽は、ただ苦笑するしかなかった。

「グランマ、聞いて聞いて」

「はいはい。アイちゃん、どうしたの？」

グランマ。

本名、あめつち天地 あきの秋乃は、いわずと知れた「ARIA・カンパニー」の創始者にして、伝説の大妖精。

十六歳で、姫屋のプリマ・ウンディーネに昇格して以来、三十年以上にならって、トップ・プリマとして君臨し、

その業績から『全てのウンディーネの母・グランドマザー』と呼ばれる偉大なる存在。

でもその実は、いつも微笑みを絶やさぬ、物静かで優しい「おばあさん」だ。

「あのね、グランマ。私、灯里さんのトラゲット、乗ったんだよ」

「あらまあ。で、乗り心地は、どうだった？」

「うん。もちろん、とつても素敵でした」  
「そう、それは良かったわねえ。うふふふ」

「私は引つ張りだされたのよ」  
「明日香さん？」

明日香・R・バッジオも、同じく元「姫屋」のウンディーネ。  
グランマ・天地秋乃が退社し、経営的にも精神的にも傾きかけた姫屋を立て直し『姫屋の至宝』とまで言われたウンディーネ。  
その引退式は、ゴンドラ協会の公式行事として挙行されたほどであった。

現、水先案内人ミュージアム館長。  
そして、グランマの親友。

「人がミュージアムの仕事してるのに、秋乃の奴が、トラゲットが面白いことになってるから、一緒に見に行きましょう」って

「面白い…ですか」

「ええ。昔っからそうなのよ。面白いことが見つかったからって、いつも私を引つ張りだして。

私の都合なんかおかまいなし。まったく迷惑な話だわ」

「…ホントに、グランマと明日香さんってば、仲悪いんですね」  
灯里が笑いながら言った。

「そうやって、少しでも早く、自分が見つけた『素敵』を、明日香さんに教えようとする、グランマ。

そうやって、文句を言いながらも、それでもしつかりと『素敵』

をグランマと探しに行く、明日香さん。  
とつても仲の悪い、素敵ングな、お二人です」

「灯里ちゃん……」

「は、はひっ」

「恥ずかしいセリフ禁止!」

「えええ。また元祖ですかあ?」

笑い声が響く。

「あ、あ、アリシアさん。 おし、おし、お久しぶりでぶっ! っ  
て、嘩んだぞおおおお!」

「あらあら。 暁くん。 お久しぶり。 元気だった?」

アリシア。

アリシア・フローレンス。 ……今更、説明の必要があるのだろうか。  
姫屋の晃。 オレンジ・ぷらねつとのアテネ。 と並んで「水の三  
大妖精」と呼ばれていた、元「ARIA・カンパニー」の  
プリマ・ウンディーネ。 通り名は「スノーホワイト（白き妖精）」  
灯里のプリマ昇進と同時に「寿」引退。

会社の経営権も全て、灯里に譲り、今は、ゴンドラ協会で常務理事  
としての要職についている。

…と…それ以上の細かなことは、改めて書くまでもなく、諸氏の方  
がよりよく、ご存知であろうので割愛させていただく。

「ぶいぶいにゅうううううううう」

アリア社長が、アリシアに飛びついた。

「あらあら。アリア社長。お変わりなく、元気そうでなりよりだわ……」

「ぷいにゆ　ぷいにゆ　」

「あ、アリシアさんもお変わりなく。美しいまままままです  
暁が、顔を真っ赤にしなが言う。

「うふふ。ありがとう、暁くん」

「おい。へたれつ。アリシアさんはもう、結婚されてるぞ？」  
すかさず蒼羽が、ツッコみを入れる。

「う、うるさい。俺の…俺のアリシアさんへのラブは、永久不変  
に変わることはないのだああ！」

「ストーカーだな　アンジェリアがつぶやく。

「ストーカーだぜ　蒼羽もつぶやく。

「ストーカーだね　アイもつぶやく。

「まあまあ……　グランマが微笑む。

「おやおや……　明日香があきれる。

「うふふふ……　アリシアが笑う。

「暁さん…なんだか、かわいそう……」　灯里が同情し。

「んみゆんにゆうつう……」　アリア社長が同調する。

「お前らなあああああつ！」

ネオ・ヴェネツィアの空に、暁の絶叫が響き渡った。

「蒼羽さん。 灯里ちゃん。 アイちゃん。 肉まん、買ってきましたよ…おとおおっ？」  
大きな袋を手に持った杏が、その団栗まなこを、さらにまん丸にして絶句する。  
そこではまるで「坂の上の雲」のような人達が、笑いながら自分を迎えてくれていた。

「そつえば、あいつら帰ってこないな」

目の前の山と積まれた肉まんに手を出しながら、蒼羽が不審気につぶやいた

「あいつら？」

「アトラとあゆみくんだ」

「アトラさんと、あゆみさん？ どうかしたんですか？」

灯里の質問に、杏が、晃と蒼羽の『どちらか優秀か』を賭けた、ヘンテコなレースのことを説明した。

「ほへえ…『絶対に負けろっ！ レース』ですかあ」

「うん。 正直、ヘンなレースだよ。 ふげげげげっ？」

「そんな上からなこと言う口は、この口かあ！ この口かあ！ この口かあああああ！」

「うげげげえ！」

三度、蒼羽に、ほつぺたをつねられながら、杏が呻いた。

「ひよ、ひよーひえばあ…あひやらひゃんひよ、はひゅひしゃん、ひひゃしいしゃしょおお」



「何？ アトラとあゆみくんを見ただと？ どこで？」  
「ひゃっひのひゃいしえんへっはんのおひへ……」  
「あっちの海鮮鉄板の店・だと？」

「ごひゃんひゃべへまひしや」

「飯、喰ってた・だとお！？」

「ふにゃっ」

「うにゃっ　　・だとおおお！」

「蒼羽さん。杏さんの言ってること、よく分かるね」  
アイが感心したように言った。

「うん。　さすがは蒼羽さんだね」

「いや、ツツコみどころは、そこじゃねえだろ……」

アイと一緒に感心する灯里に、暁がつぶやいた。

「あのアホどもおおお！　来いっ杏。　あいつらを連れ戻しに行くぞー！」

杏のほっぺを片手でつかんだまま、ずかずかと威勢よく歩いてゆく蒼羽。

「ふええええええええ？」

両手を激しく上下させながら、無理矢理、連れ去られてゆく、杏。  
あっとゆう間に、その姿は見えなくなつて……

「ふええええええええ？」

同じように両手を激しく上下させながら、灯里が叫んだ。

「あ、アリシアさんっ！」

「あらら、どうしたの灯里ちゃん」

「と、トラゲット要員、私ひとりになっちゃいましたあ!」

「あらあら……」

アリシアが片手を頬にあてて、困惑する。

「ど、ど、ど、どうしましょう。もうすぐ次のトラゲット出さなきゃいけないのに……」

・あわあわあわ

と、激しく狼狽する灯里。

こんなときの灯里は、「アクアマリン・遙かなる蒼」の通り名で呼ばれる、プリマ・ウンディーネとゆうよりは、

ただの、無垢で純粋な十七歳の少女にしか見えない。

アリシアは、そんな「かわいい灯里」が大好きだった。

「ほ・ほ・ほ。まあまあ、灯里ちゃん、落ち着いて」  
グランマが笑いながら言った。

「そうですよ。アクアマリンさん。何も心配ないわ」  
明日香も笑いながら言う。

「お二人の言う通り。何も心配することは、ないじゃないか」  
アンジェリアが、いたずらな笑みを浮かべる。

「はへ？」

そんな灯里の問いかけるような瞳に三人は、そのまま、ひとりの人物に視線を送った。

「あ、あらあら。わ。私ですか？」  
アリシアがあわてて言った。

「わ、私はもう引退した身ですし。 そんな、お客様を乗せて操舵するなんて……」

「うふふ。 大丈夫よ。 アリシア。 きっと、みんな喜んでくれるわ」

「そうそう。 クルーズじゃなし。 誰もそんなこと気にせずに、楽しんでくれるわよ」

「ああ。 それにアリシアの腕前は、今でも私と一緒に、指導教員をやって欲しいくらい確かだからな」

グランマ。 明日香。 アンジェリアが、続けさまに言う。  
そして -

「わああああい。 アリシアさんと、灯里さんのトラゲットに乗れるんだあ！」  
アイがダメ押しする。

そしてそのアイの笑顔に、アリシアもまた、あっさりと陥落して……

「はひい……あの……ホントにいいんでしょうか？」  
逆に心配になったのか、灯里が、おずおずと訊ねた。

「大丈夫ですよ、灯里さん」

「ええ、大丈夫、大丈夫」

「うん、なんたってコレは……」

三人の声がキレイに八モる。

「「『 緊急避難的処置だからっ！ 』」」

「はへえええ……」

こうしてトラゲットは、さらに新たなお祭り騒ぎへと、発展してゆくのであった。

Essere continuo

『 Tragettini PART - 4 』  
Ii  
Pomeriggio calmo - おだやかな午後  
La fine

あはははははははははは……はあ……  
ホント、すいません。

このあと、なし崩し的に登場人物が増えていきます。

なにとぞ、みな様におかれましては、呆れず、呆けず、心豊かに読み続けていただければ、これに勝る幸せは、ありません（涙目鹿馬）

それでは、しばらくの間のお付き合い。

ありがとうございます、ございました。

T r a g g e t t i

P A R T - 5

「 M o n o e l a M a n o T

PART-5を、お届けします。

えと…ここまでようやく半分です。  
すいません。

この後、ダレソレ的な人物が増えてきます。

よろしく、お願いします(鹿馬)

「ゴンドラ、出ます」

アリシアの涼やかな声が響く。

風がそよぐ。

波がたゆとう。

遙かなソラノカケラに、白い雲が流れてゆく。

o e l a M a n o I o l l a c c i a i 「 T r a g g h e t t ? 『 P A R T - 5 』 M a n

灯里とアリシアのARIA・カンパニー・師弟コンビのゴンドラは、二人の性格そのままに、静かに、穏やかに、まるで滑るかのように運河を渡って行く。

「おおおお？ アリシアさんだっ」

「アリシアさんが、ゴンドラを操っているぞぉ！」

「なんだってえ？ 冗談だろ？」

「おい。アリシアさんの格好を見るよ」

「スーツ姿だ……」

「眼鏡もかけてるぞ!?!」

声にならないどよめきが、トラゲット乗り場に低く渦巻く。

気が付けば、ゴンドラの中は男性客で、いっぱいになっていた。

「ありゃ、アンタ、どこ行ったのサ!？」

「あんのヤドロク! 店、ほつたらかしにして、何やってんだい!」

「のわっ。また、客も店員も取られたあ!」

屋台や、お店の、女将さん達の怒号と罵声が響いては消えてゆく。

「さすがはアリシア・フロレンス。『スノーホワイト(白き妖精)』ですね。」

この辺一帯の屋台やお店から、お客さんはおろか、ウェイターや、ダンナさんまで、

男性は、ひとりもいなくなりました。みんな争うかのように、

アリシアのゴンドラに乗ろうとしています」

アンジェリアが笑いながら言った。

「ほっ・ほっ・ほっ」

「うふふふふ」

グランマと明日香が、上品な笑みをこぼした。

「おーい。みんな。マルガリータ・ピザ、差し入れに買ってき

たぞっ。

みんなで食べよお…おおおおおお!？」

いく枚ものピザの箱を両手に抱えた晁が、髪の毛を逆立てながら絶



句する。

そこでは、恩人ともいうべき人達が、微笑みながら、自分を迎えてくれていた。

「アリシアっ。　なんでお前がここにいるんだ！」

パニック気味に晃がアリシアに向かって叫んだ。

「あらあら………」

そんな晃にアリシアは、いつも通りに、のほほんと微笑む。

「いえ、ここトラゲット乗り場ですし………」

「すわあっ！」

肉まんとピザの山を前にした、そんな灯里のセリフを無視して、晃は叫ぶ。

「あらあら禁止！」

「うふふ………」

「うふふも禁止！」

「あらあら、うふふ………」

「両方、いっぺんに言つのも禁止！」

「あらあ？」

「ちょっと言い方変えても、ダメだあっ」

「うふふ」

「てめえ、そんな小悪魔的微笑み。　私にはきかあああん！」

「まあまあ、晃、落ち着いて」

「そうそう。 晃、落ち着きなつて」

「明日香さん、アンジェリア先輩……」

うふふ・と笑う明日香とアンジェリアに、さしもの晃も静かになる。

明日香は晃が姫屋に就職したとき、姫屋、随一のトップ・プリマ・ウンディーネとして活躍しながら（すでにグランマは退社していた）晃達、新人ウンディーネの指導、教育をしてくれたものだった。

「すみません、晃さん。 緊急避難的処置だったんです」

灯里がいきさつを説明した。

「はああ…蒼羽、何やってんだか。 熱血にもほどがある……」

「おいおい。 一番の熱血さんが、なに言ってるんだい？」

「アンジェリア先輩……」

アンジェリアもまた当時、そんな新人ウンディーネの晃を指導した、姫屋の先輩のひとりだ。

つまり、明日香とアンジェリア。 この二人には、さしもの晃も、ずっと頭の上がないのだ。

しかもさらにグランマまで居るとなつては……

「はあああ……」

晃の口から、大きなタメ息がもれる。

「晃さんにも、勝てない人っているんだね」  
アイが屈託なく言う。

「あ、アイちゃん!？」

「あらあら、うふふ」

灯里が、あわてて叫び、アリシアの笑い声が響く。

「だああああ……………」

怒るわけにもいかず、再びついた、晁の大きなタメ息に、みんなの笑い声が重なった。

「アイ。 時間よ」

「お姉ちゃん?」

呼ばれて振り向いたアイの視線の先に、アイの姉夫婦である、アヤマとアツシが。

そして、ふたりの子供である赤ん坊のアクアが、母親の腕の中に抱かれて、嬉しそうに手を振っていた。

「ぶいぶい」

「たああ〜い」

暁の頭の上から飛び降りたアリア社長が、アクアに駆け寄って行く。アヤマは抱いていたアクアを降ろすと、アリア社長の前に座らせた。

アリア社長とアクアは、楽しそうにじゃれ始める。

それは、それを見ているみんなの心に、暖かなモノを湧き上がらせる、素敵な光景だった。

「お久しぶり、アヤマさん。アツシさん」

「お久しぶりです。アリシアさん、灯里さん、みなさん」

「お久しぶりです。みなさん。アイを、ありがとございました」

「もう、時間なの？」

「通りの挨拶と紹介をがすむと、アイが小さな声で言った。」

「ごめんね、アイ。もう帰りの船の時間なの」

「……………」

「さあ、行きましょう」

「……………やだ」

「アイ？」

「やだあ。私、帰りたくない」

「アイちゃん……………」

アイは灯里にしがみつくように引っ付くと、目に涙をためながら叫んだ。

「今日は、とっても楽しいの。だから…だから、私、まだ帰りたくない！」

「アイ……………」

「あらあら。珍しいわね。アイちゃんがこんなに我がまま言うなんて」

「アリシアさん……………」

「そうね。よっぽど今日は楽しかったのね」

「グランマ……………」

灯里は身をかがめて、アイと同じ目線になると、言い聞かせるように話かけた。

「ね。アイちゃん。今日は…今回はもう帰る？ 次も、またすぐ逢えるから」

「いつ……」

「はへ？」

「そんなの、いつですか？」

アイが目には涙をためつつ、叫んだ。

「そんなのいつか分からないじゃない。お姉ちゃんもアツシお兄さんも忙しいし。パパやママだって……」

みんな、いつも、お仕事とかあって。すぐにアクアに連れて来てくれるってわけじゃないじゃないっ！

「アイちゃん……」

「どうして、こんなにアクアは遠いの？」

どうして、こんなにマン・ホームから、遠いの？

どうして、こんなに早く帰らないといけないの？

どうして、こんなに早く、お別れしないといけないの？

どうして？　こんなに……ずっといたいの……

どうして？　こんなに、ずっと、みんなといたいの……

どうして、どうして、どうして……どうして……どうして……」

最後は小さな声で、つぶやくように何度も同じ言葉を繰り返す。

そんなアイに灯里は、困ったようにアリシアやアヤメと顔を見合わせた。

「ひとりで来ればいいだろう」

暁がポツリと、しかし、はっきりと言いつつた。

「そんなことで泣いてるくらいなら、ひとりでココに帰ってくれば  
いいだろう」

「……え？」

「もうお前は、ミドルスクールの6年生なんだろ。それならひと  
りでだって星間連絡船に乗れるはずだ」

「ひとりで………」

「それでもし、ココでのお迎えが必要で、もみ子の都合が悪いなら、  
その時は、俺様が迎えに来てやる」

「暁さん………」

「それに俺様や、もみ子の都合が悪くても、ほら見ろ。お前には  
こんなにも、たくさんの『家族』がいるだろ」

暁の言葉に、アイはみんなを見回した。

グランマも

明日香も

アンジェリアも

晃も

アリシアも

アリア社長までも

みんながにこやかに微笑みながら、うなずいてくれた。

「今、ここにいない、がちゃペンや後輩ちゃんも、アルやウツデイ、それに今日知り合ったトラゲットのウンディーネ達も。」

そいつらだって呼ばれりゃ、どんなことがあっても喜んで迎えに来てくれるさ。だから次からは……」

暁が、片目をつぶりながら言った。

「ひとりで、この街ネオ・ウエネシユアに帰って来ればいい」

「やば、どうしょ。へたれが、かつこよく見えるぜ……」  
晃が口を押さえながら、うめいた。

「うっさい！ へたれ言うなああっ」

「あらあら、うふふ」

「ほっ。ほっ。ほっ」

「おやまあ」

「あははははは」

みんなが一斉に笑い出す。

つられたように、アイも涙をぬぐいながら笑い出した。  
それは、とても素敵な笑顔だった。

「あの…晃さん」

「ああ、分かっているよ、灯里ちゃん。アイちゃんを送りたいんだろ？」

「は、はひ」

「行っておいで、ここは私と、アリシアでやっておく」

「すみません。なんだか恐れ多くて……」

「水無灯里っ！ いや、アクアマリン！！」

晃が突然、大きな声を出す。

「は、はひっ？」

「いいか、よく聞け……」

不意のことに、あ然とする灯里に、晃は、今度は一変して、諭すように、言い聞かせるかのように、静かに言った。

「私達は会社は違えど、同じウンディーネだ。ひとつの大きな家族なんだ。ならば、家族同士、遠慮する必要は何もない」

「晃さん……」

それは奇しくも蒼羽が今朝、熱を出したウンディーネに言った台詞、そのままだった。

グランマが

明日香が

アンジェリカが

微笑みながら小さく、うなずく。



「うふふ。 晃ちゃんってば、とつても、かつこいいわ」  
アリシアが花の咲くような笑顔で言った。

「さすがは我らの『クリムゾン・ローズ』ちゃんね」

「すわっ！ アリシアっ！ 歯の浮くようなセリフ禁止！ つか、お前が私を通り名で呼ぶな！

……照れくさいだろ……」  
「あらあら……」

再び、満面の笑みを浮かべる、アリシア  
けれどアリシアのその笑顔には、晃に対する、感謝と信頼の気持ち  
が、

あふれんばかりに込められていた。

「じゃあ、晃さん、アリシアさん。 少しの間、よろしく願います」

「ああ、ゆつくりしていい」

「ええ、ちゃんと最後まで、見送ってあげてね」

「はひっ。 ありがとうございます」

「あ…へたれ……うんん、暁さん」

「あ？ なんだちびっ子？」

「ちびっ子、言うなっ ……あ、ありがとう」

「ん？」

「だから…ありがとうって言ってるのー！」

「うっ…おっ？ なにか悪いモノでも食べたか？」

…どがすべすっ！

「ぐおおおおおつ?」  
再び、アイの『弁慶の泣き所アタック』が炸裂し、暁はジベタを転げまわった。

「やっぱり、アンタなんか、へたれで充分だっ!」

そんな、いまいち決まりきれない暁を、アイは冷たい瞳で見下ろしていた。

こうして灯里は、アイや、その家族とともに、この場を離れる。

「よし。 アリシア。 次、行こうか!」

「ええ。 晃ちゃん。 行きましようっ」

晃とアリシアが、とても楽しそうに、互いにオールを手に取り合う。

こうしてトラゲットは、さらに赫々たる異変へと向かって、突っ走ってゆくのであった。

Continuato) (つづく)

Esse re

い  
だ  
手  
と  
手  
(  
手  
) ] a n o e l i a 』  
- M a n o T r a g g e t t i  
L a - I o l - 』  
f i n e a l l a c c i a i ( つ な M

T r a g g e t t i

P A R T - 5

「 M o n o e l a M a n o T

つーコトで…

へたれさんを少し、かっこよくしてみました！（鹿馬）

T r a g g e t t i P A R T - 6 「 C i e l o d i S a n t a

P A R T - 6 を、お届けします。

書き上げて読み返したときの第一声が「色気ねえ!」でした(鹿馬)

「あだだだだだ。 あ、蒼羽さん、そんなに引っ張らなくても」  
「いだああああ。 きよ、教官、痛いです、痛いですってばあ」  
「うわああ。 待ってよお、待ってよお。 待ってってばあああ」

サンマルク広場に、三人のシングル・ウンディーネ達の悲鳴が響き渡る。

「Traghetti?」 PART - 6  
「Cierodi Santa Crowe」

「おら、泣きごとはいいから、さっさと来い！」  
蒼羽は、あゆみとアトラの制服の襟首をつかんだまま、ぐいぐいとふたりを引っ張っていた。

「あだだ。 あ、蒼羽さん、ちょっと、ちょっと待ってください」  
あゆみが、両手をばたばたと振り回しながら言う。

「きよ、教官。 自分の足で歩きますから…いだだだ」  
アトラが、両手を蒼羽の手に重ねて懇願する。

「うわああん。待ってよお、待ってつてばああ……」  
お土産の海鮮焼きの箱を山のように持って、杏が追いかけてくる。

「うるさいっ。だいたいお前ら、なんで飯喰ってんだあ!?!」  
「いや、だって晃さんや蒼羽さんが、絶対負ける!　なんて言うから……」

「そうですよ。だから私達、しょうがなく時間つぶして……」  
「待ってえ。待ってつてばあ……しくしく」

「えええい!　問答無用っ。言い訳禁止!」

「そんなあ……」

「それ、晃さんの台詞……」

「待ってえ。待ってつてばあ……うるるる」

「うるさい。うるさい。うるさああああい。いいからさっさと……うわっ!?!」

勢い良く歩いてきた蒼羽が、ひとりの男性とぶつかりそうになった。  
完全なる前方不注意だ。

「だあっ!」

「きやあ?」

つられて、あゆみとアトラもバランスを崩す。

「うにゃああああっ!」  
災難だったのは杏だ。

両手いっぱいを持ったお土産袋のために、視界が遮られていた彼女は、こんがらがった蒼羽達に気づくのが遅れた。

あわててかわそうとして、やっぱりバランスを崩し、結果的に、そ

の男性と正面から衝突するはめになる。  
当然のごとく、持っていたお土産の箱は、何処かへ、すっ飛んでいき……

「大丈夫ですか？ お嬢さん」

「はいい？」

頭の上から声がある。

気が付くと杏は、その男性に抱きかかえられるかのように、受け止められていた。

「あ…す、すみません。 ありがとうござい…わふ!？」

オールバック。 お尻アゴ。 でっかい手。 タバコ。 ピチピチぽんぽん。

知らない人が見れば -

「ひとさらい〜い。 誰か〜あ。 助けてええええええ」

-とでも叫んでしまうかのような大男が、やさしい瞳で杏を見下ろしていた。

「ああ…すみません。 店長。 大丈夫ですか？」

蒼羽があわてて駆け寄ってくる。

「店長？」

「なんだ、杏。 知らないのか？ お前だって会ったことあるだろう？」

「えっと…あの」



「こちらは、カフェ・フロリアンの店長、アントニオ・コルレオーネ氏だ」

「あ……」

そつだ。いつもサンマルコ広場のカフェ・フロリアンで見かける人だ。

「店長さんだつたんですか……」

杏を優しく立たせながら、アントニオは、帽子をかるく持ち上げて会釈する。

「よろしく、お嬢さん。お怪我はありませんか？」

「は、はい。ありがとうございます」

「すみません、店長。私がちゃんと前を見ていなかったものからです」

「いえいえ、お互い大事がなくて何よりでした」

謝罪する蒼羽にしかし、アントニオは、そのゴツイ体には似合わぬ、人懐っこそうな笑みを浮かべながら言ってくれた。

「ああっ！」

突然、杏が自分の両手を見ながら叫んだ。

「どうしたの？」

アトラ訊ねる。

「お土産が……」

「え？」

「持ってた、お土産、どつかに飛んでつちやいました……」  
杏が泣きそうな声で答えた。

「大丈夫でえ。嬢ちゃん」

「ああ。でえじょぶだよ」

「え？」

その声のする方を見やれば……

ふたりの初老な男性が、地面に這いつくばるかのようになり、お土産の箱を持っていた。

まるで野球のスライディング・キャッチのように、飛び散る箱を受け止めてくれたのだ。

「水上エレベーターの管理人さん？」

「郵便屋のおじさん？」

あゆみとアトラが叫ぶ。

水上エレベーターの管理人さん -

- は「希望の丘」と呼ばれる土地の行くための水路の途中にある、ゴンドラ専用のエレベーターの初老の男性の操作員。

エレベーターを「ここは自分の秘密基地」と言っ、はばからない、好人物。

『オレンジ・プリンセス』こと、アリス・キャロルの飛び級昇進にも立ち会うほど、ウンディーネと縁が深い人だ。

郵便屋のおじさん -

本名・庵野<sup>あんの</sup>波平<sup>なみへい</sup>氏は、このネオ・ヴェベツィアの郵便局の職員さん。

専用のゴンドラを使い、集配や配達を行っている。庵野はその中でもカンナーレジヨ郵便局に勤めるベテランの郵便職員。彼もまた仕事を「自分の趣味」と言っていて、はばからない、素晴らしき人物。

ここ数年は、第一線を退き、管理職として後輩の育成にあたった。た。

「あああ、ありがとうございます」

杏があわてて駆け寄り、箱を受け取る。

あゆみとアトラが手を貸し、ふたりが立つのを手伝う。

「重ね重ね、ありがとうございました」

蒼羽を先頭に、三人のシングルが頭をさげる。

「でえじょうぶだあ。気にすんなって」

「おうよお。気にすることあねえよ」

「ふお、ふお、ふお。そうです。お気になさらず。それより

……」

「はい？」

三人の男達は軽く視線を合わせた。

「ちよつと小耳にはさんだんだがよ……」

「なんか中央のトラゲット乗り場が、てえへんなコトになってるらしいぞ」

「あなた方は、もしかして、そのトラゲット乗り場で、よくお見かけするウンディーネさん達では、ありませんか？」

「ざああああああつ」

四人の顔から、一気に血の気が引く。  
今更ながら、気が付いた。

そうだった。

ほんらい、自分達がするはずのトラゲット。  
それなのに今、その全員がココにいるっつ。

つてコトは……………

「は、走れえ〜！ 全員、駆け足いいい！」  
蒼羽が弾かれたように叫ぶ。

「うわああー！」

「ひいいい！」

「わあんっ 待ってえ！」

あゆみが、アトラが、杏が、全力で疾走してゆく。

「すみません。 いずれまた、ちゃんとお詫びに来ます。 今は失礼します。 ではっ」  
言うが早いか、蒼羽もまた全力で三人の後を追っていった。

「なんて気持ちのいい、嬢ちゃん達だ……………」

必死になって駆け出しに行く、ウンディーネを見送りながら、三人のおやぢ達が微笑みと共に言う。

「ほうよ。 まるで風のようにだかんね」

「心まで風に乗って、持っていかれそうですなあ……………」

「あらまあ。まるでみなさん、詩人のようですね。ほほほほほ……」

突然の声に、三人が不審気に声の方へ目をやる。

そして・

声が重なった。

「『』 オーナー？ 『』」

そこには白い子猫を抱いた、初老の貴婦人が立っていた。

「一部始終を見せていただきました。みなさん、まだまだ、お若くていらっしやる……ふふふ」

「こりゃあ、どうも……」

「いやはや、お恥ずかしい」

「これはこれは……なんとも……」

「いえいえ。照れることはありませんことよ。みなさん、素晴らしいですわ」

妙に顔を赤らめる、おやぢ三人に、オーナーと呼ばれた老婦人は、ころころと玉のように笑った。

「どうですか。もしよろしければ、久しぶりに私のホテルにおいでになって。ワインでも飲みながら、お話ししません？」

初物のいいモノが手に入りましたの。

もちろん、御代はいただきますせんわ。この老体の暇つぶしに付

き合つと思つて、お願いします」

再び、玉のような清んだ笑い声があがる。

古くからの知り合い……しかも、ほのかな好意さえいだいている女性に、そうまで言われては断ることなど出来るはずもない。

三人はただ恐れ入って付いていくしかなかった。

そんな男達の様子を、老婦人の腕の中で、白い子猫は、ただ退屈そうに小さく鳴きながら見つめていた。

「あ、灯里ちゃん、ごめん。おわびに海鮮鉄板買ってきた。み

んなで食べよおおおうおおおおおお！？」

真っ先に走りこんで来た蒼羽が絶句する。

「ただ今ん。晃さん。ありがとうございます。とっても楽

しかったですうううううわわあああ！？」

るんるん・と、スキップしながら帰ってきた藍華も絶句する。

驚く蒼羽。 藍華。

そしてさらに、あゆみ、アトラ、杏の三人の声が、次の瞬間、見事なハーモニーを奏でた。

「「「 なんじゃ、こりゃあああああああ！！！！？？？？」

『「「」

その場の有様に、全員が息を飲み絶句する。







今回は「脇」中の「脇」 私が愛してやまない「名脇役」の人達のお話です。

それにしても、この三人は自分の仕事に対して -

道楽 - と言ってみたり

達人 - と言ってみたり

秘密基地 - と言ってみたり

ホントに楽しんでやってるんだって事を実感させられます。

見習わねば！（爆鹿馬）

T r a g h e t t i P A R T - 7 「 L a p i s t a a l f

P A R T - 7 をお届けします。

長いです。

これから先はもっと長いです（汗）

短く文をまとめる事が、未だに苦手です（大汗）

街は歓喜に包まれていた。

『 Traghetti』 PART - 7 「  
La Pistai futuro」

以下、<sup>スケッチ</sup>点描風につづってみる。

418

あゆみ・K・ジャスミンの場合 -

あゆみは後に、その様子を思い出すたびに、複雑な感情を想い浮かべることになる。

なによりもトラゲットを愛する彼女は、その状況を、どう評価しているか、その時とまどっていたのだ。

色とりどりの光が、街に満ち溢れている。

大勢の人々が集い、歓声をあげている。

おとな達は談笑し、子供達は走り回る。

露天の屋台が立ち並び、さまざまなモノを売る店の大きな声が響き渡る。

食べ物の焼ける音と、鼻腔をくすぐる香ばしい香り。歯にしみるような冷たい飲み物。

甘くとろけるような、多種多様なデザート。

即席の劇場もできた。

パフォーマーが、さまざまな芸を見せ、道行く人々から喝采をあびている。

弦楽奏者達が集まり、時には心躍る楽しい曲、時には甘く囁く恋の曲、時には心に沁みゆく、もの静かで優しい曲を奏でている。

人形を使って紙芝居を見せる者もいる。

小さなワゴンに、色とりどりのチョコレートに乗せ、列をなす子供達に、優しい笑顔で手渡している者もいる。

臨時に作ったモノなのか、布で作った簡素な店で、キレイなベネチアン・ガラスの数々を売っている者もいる。

人々の歡喜に包まれる街。

人々の喜びと笑いと幸せに包まれる街。

そこは最早、トラゲット乗り場・などではなく…そう。それはまるでカーニバルの広場のようだ。

「あら、あゆみさん」

ひとりの中年女性が、声をかけてきた。

「なんだか今日は、お祭りみたいねえ」

「あはは。そ、そうですね。 すいません」

- 誰だっけ？

あゆみはどうしても、その女性の名前を思い出せなかった。確かに以前、会ったことは、あるはずなのに……

「んん？ どうして謝るの？」

その女性は、そんな、あゆみのとまどいに構いもせず、笑顔で訊ねた。

「いやあ、たぶん、原因は、あの人なんで……」

そう言っつて、あゆみは未だにトラゲットを続けている、晃に目をやっつた。

相変わらず、女性客がむらがっている。

「ふふ…さすがは『クリムゾン・ローズ（真紅の薔薇）』さんね。  
ホントにりっぱになって…楽しいわ」

女性は、小さく、けれど穏やかな笑みを浮かべながら言った。

「楽しい…ですか？」

「あら？ あなたは楽しくないの？」

「い、いえ…その  
「ん？」

「いえ、ウチは…私は楽しいんですが、この街の人達は果たして喜んでくれているのかなって。 なにしる……」

ぐるりと・喧騒と歓声にまみれた・まわりを見渡して、あゆみは言っつた。

「この騒ぎですからねえ……」

「あらあら。 あゆみさんは、そんなこと気にしてたの？」

「え？」

女性は、同じようにまわりを見渡してから言った。

「私達、ネオ・ヴェネツィアン子は、こつゆつお祭り騒ぎは大好きなのよ。 知ってるでしょ？」

「え、えと……」

「おい。 あゆみい。 次のトラゲット、行くわよお！」  
アトラが遠くから声をかけてくる。

今度の相手は、その『クリムゾン・ローズ』だ。

「だからね。 あゆみさん。 あなたも一緒に、素直に楽しめばいいのよ」

女性は穏やかに微笑みながら言った。

「素直に…楽しむ？」

「そう。 そして素直に楽しんだら、その楽しみをまた、あなたの後輩達に素直に、そのまま、真っ直ぐ教えてあげて。」

そうやってこの街は、一緒に楽しみながら、シングルを…ウンデイーネさん達を育ててきたのだから……」

・ああ

あゆみは気が付いた。

・そうか。　　そうゆうことが……

「…はい」

あゆみは大きく息を吸い込むと、それを大きく吐き出しながら、元  
気良く答えた。

「はい。　　ありがとうございます。　　真っ直ぐ、楽しんできます  
！」

そう言うと、あゆみは一礼し、彼女特有の元気一杯な笑顔を浮かべ  
ながら、いち目散にゴンドラへと駆け出していった。

・そうだ。

なんだ。

簡単なことだったんだ。

走りながら、息を切らせながら、あゆみは思う。

・楽しめばいいんだ。　　素直に。　　単純に。　　真っ直ぐに。

・ちくしょう。

次は、敬愛する我らが『クリムゾン・ローズ（真紅の薔薇）』こ  
と、晃・E・フェラーリと漕げるんだ。

楽しくないワケがない！

あゆみはふと今朝のアリスの言葉を思い出した。

・トラゲットは、人の心や想いまで運んでくれる。

そうなんだ

あゆみは思う。

いつも街の人々の心を運ぶトラゲット。

いつも街の人々の想いを運ぶトラゲット。

今日は私の心と想いも運んでくれる！

なんて、単純。素直で単純だ！

あゆみは元気いっぱいに駆け出してゆく。

真っ直ぐに。

息を弾ませながら。

そんな、あゆみの…若いシングルのウンディーネの後姿を、アマラ  
ンタは、楽しげに、誇らしげに、いつまでも見送っていた。

アトラ・モンテヴェルディの場合・

「あれ、あなたは……」

「うわっ、眼鏡っ子!？」

「だあれが、眼鏡っ子かあああああ!」

・ドゴスウウウッウ!

と、音がして



ぎいやあああああああ！  
と、悲鳴が響き渡る。

アトラの足が、暁の足を直撃した瞬間だった。

「おや、アトラ。お前、こいつと知り合いか？」

「蒼羽教官：はい。前に、灯里ちゃんと一緒に会ったことが……」

「ふくん。で、やっぱり、へたれだった？」

「へたれでした」

「うわっ。 即答！」

暁が踏まれた足を押さえながら叫んだ。

そんな暁にアトラは近づき、しゃがみ込むと、真正面からその顔のぞき込んだ。

「で、少しは見えるようになった？」

「う…お、おう？」

「だから、少しは灯里ちゃんのこと、見えるようになったの？」

「あ、いや。それは、その……」

アトラは満面の笑顔。

その笑顔のまま、彼女のひたいに青スジが浮かぶ。

「うひゃ ああああー！」

不意にアトラは、暁の胸倉をつかんで引きずり起こすと、そのまま人気のない路地に引っ張って行き、壁に叩きつけるかのように、押さえ付けた。

「ぶいぎゅんぶんぶんぶんぶんぶん」

再び、暁の頭の上で、アリア社長が叫ぶ。

「あなた…なに、やってるの………?」

満面の笑顔に青スジを浮かべたまま、アトラが言う。 正直、すつごく恐ひ……

「いや、あの……」

「いい……」

アトラはとても静かな声で言った。

「灯里ちゃんは私の大切なお友達なの。 だから、ちゃんと幸せに  
してあげるの。 分かってる? 分かってるの? さもないと……」  
「さ、さもないと……?」

顔を引きつらせながら質問する暁に、アトラはやっぱり満面の笑顔  
で答えた。

「あなたをネオ・ヴェネツィア七不思議の八番目にしてあげるわよ  
っ っふ」

「分かんねええええっ つか、似合わねええええええええええええええええ!!」

「なあんですってええええええええええええええええ!!」

「うんぎゃあああああっ」

「ぶいにゅっつっつっつっつっふっ」

ガクガクと、激しく暁をシェイクするアトラ。

暁の頭にしがみつくとアリア社長は、目を回しながら、またまた激しい、デ・ジャヴに襲われていた。

「まあまあ、アトラ。それくらいにしてやりなすべてを見ていた蒼羽が、笑いながら言う。

「蒼羽教官……」

「実は私もさつき、同じことやってね」

「同じこと？」

蒼羽はアトラと同じく、暁に「優しく」言って聞かせたことを語った。

「はああ……」

アトラは大きなタメ息をついた。

「おつ、でたな、アトラお得意の大きな『サイ（タメ息）』

「蒼羽教官…笑い事じゃないです……」

「ん？」

不審な蒼羽に、アトラは言い放った

「それじゃ私がるで、教官に似てきたみたいじゃないですか……」

そう言って、アトラは笑いながら小さく舌を出した。

「わっ・はっ・はっ・はっ・はっ・てえっい！」

「バキッ！」



次は蒼羽とアトラとで漕ぐのだ。

「よし、アトラ。次はお前が後ろで漕げ。私が前につく」

「えっ？ いいんですか？」

後ろで漕ぐ・つまりそれは、メインで操舵するとゆうこと……

普通であれば、それはより技量が上な、蒼羽の役目だ。

けれど・

「かまわない。お前はもう充分、その実力はある。遠慮せずに行け。…ただし」

「ただし……？」

アトラの問いに、蒼羽は、いたずらっ子のような笑顔で答えた。

「常に安全確認。『アツディエトウロ・アーレア』だ」

・アツディエトウロ・アーレア) addietro alea)  
「後方危険」

それは蒼羽の戒め・

それは蒼羽の後悔・

それは蒼羽の懺悔・

そして・

そしてそれは、蒼羽の優しき心と、強き想い……

「行くぞ。アトラ！」

そして、そんなことは微塵も感じさせることなく、走り行く蒼羽の笑顔。

私が蒼羽教官と、そっくり？  
アトラは、ふと思う。

私が蒼羽教官に、似てきた？

蒼羽教官に私が？

まさか！？

まさか、まさか、まさか、まさか、まさか！？

でも…

「あの」蒼羽教官なのだ。

「あの」昔に囚われて逃げ出せなかった、蒼羽教官ではない。

「あの」昔のくびきを自らの力で断ち切った、蒼羽教官なのだ。

私が -

私が今、もっとも信頼する、そして愛すべき、蒼羽・R・モチツキなのだ。

私が蒼羽教官に似てきた？

ちくしゅう……

なぜ？

なぜ、私は笑ってる？

なぜ、私はこうも喜んでる？

なぜ、私はこんなにも嬉しいんだ！？

「はい。蒼羽教官！」

アトラはそう元気よく答えると、蒼羽の後を追って走り出す。そんなアトラを、蒼羽もまた、笑顔で迎えてくれる。

アトラは走る。

満面の笑顔で。

息を弾ませながら。

「うっ…あのふたり、ホントそっくりだ。…なあ、アリア社長」

「ぶいにゅん？」

走り行く蒼羽とアトラの後姿を見送りながら、暁は頭の上のアリア社長に苦笑まじりにつぶやいた。

「オレンジ・ぷらねっとのウンディーネって、みんなあんな感じになりやがるのかな……」

「ぶいぶい？」

「なら、後輩ちゃんもいずれ……ウツディのやつ、苦労するぞ」「ぶいぎゅんん！？」

暁の、しみじみと言った、そのひと言に、アリア社長は怯えて泣き出した。

夢野 杏の場合・

「杏ちゃん、杏ちゃん」

自分を呼ぶ声に振り向けば、そこには・

「お母さ…寮長?」

小柄なおばあさんが、にこやかな笑顔を浮かべて立っていた。

お母さん・アン・ウエンリー女史は、オレンジ・ぷらねっとの寮長さんだ。

完全寮制なオレンジ・ぷらねっとにおいて、そこに住むウンディーネ達の面倒を見てくれる、優しい人。

自身も元、ウンディーネとして活躍し、その実力は『もう一歩で、グランマに並ぶことができた』とまで言われた人だ。

でも今は、オレンジ・ぷらねっと、全てウンディーネから「お母さん」と慕われ、頼られている人。

「アン寮長、どうしたんですか?」

杏があわてて駆け寄り、訊ねる。

「いやね。アテネが帽子を忘れていったの。それで届けにきたのだけけど…」

「この人ごみの中をですか?」



「ええ、まあ、それが私の務めだからね」

そう言うと、アン寮長は「うふふ」と笑った。

杏は嬉しくなる。

この人はそうゆう人なのだ。

私達を常に見ていてくれて、心配してくれ、時には厳しく叱ってしてくれる。

だから「お母さん」

私達の「お母さん」

「それで…アテナはどこかしら？」

「え？ アテナ先輩、こつちに来てるんですか？」

「ええ。 姫屋の晃さんから、何か伝言をもらって、その後、お仕事が終わったたら、まあ社長を連れて、飛ぶように会社を出て行ったわよ？」

「そういえば…確かに晃さんが… あっ、でも、今日はまだ見てませんよ？」

確かあれは、お昼ちょっと過ぎの話しで……

「おかしいわねえ。 ああ…まさか」

お母さんが何を言いたいか、杏は瞬時に理解した。

「アテナ先輩……」

「ええ……」

そして二人はタメ息まじりに、同じセリフを口にした。

「『道に迷ってる……』」

「あれ、アンじゃない」

明日香が言った。

「あらあら。アン。久しぶり」

グランマも嬉しそうに声を上げる。

「お二人とも、寮長とお知り合いなんですか？」

アン寮長を席（なぜだかテーブルの上には、肉まんだの、ピザだの、海鮮焼きだのが山をなしている）に案内しながら、杏は訊ねた。

「ええ、秋乃と一緒に、昔からの腐れ縁ってヤツね」

その明日香の言い方に、秋乃・グランマも、アンも「うふふ」と微笑んだ。

「昔、まだお互いがペアの頃から、三人でよく練習してたの」

「そんな前から……」

「ええ。でも、アンの会社が他の水先案内店と合併して、オレンジ・ぷらねっとなってから、なかなか会えなくて……」

「ああ……」

それは前に聞いた話だ。

創業当時のオレンジ・ぷらねっとは規則が非常に厳しく、まるで自社のウンディーネを「籠の鳥」のように管理していたのだ。

練習においても、オレンジ・ぷらねっとな独自のマン・ツー・マン形式の練習のみを行い、ひとりひとりの個人的な練習など認められなかった。

また、営業終了後も、勝手な外出は禁止。部外者が中に入ることも激しく制限され、他社のウンディーネが、寮内で一緒に食事したり、ましてや、宿泊することなど、決して許されることではなかったのだ。

「それでもこの子ったら、毎日のように抜け出して来て……」  
グランマが笑顔で言う。

「ええ。そんな規則のことなんか、おくびにも出さずに、『来たよ』って、いつつも……」  
明日香も遠い目で言う。

「うふふ。だってその方が楽しかったから……」  
アンが気負いもなく、ただそれが……  
ただそれだけが、たったひとつの真実であるかのように静かに言う。

- 楽しかった  
ただ、それだけで

沈黙が訪れる。

それは何も語らずとも、三人が三人とも同じ『あの時』を想い描いている、そんな優しい時間。

そんな三人を見ながら、杏も思う。

- 私は…私達はどんなのだろう？

「おお〜い。杏う。トラゲットやるぞおお〜！」  
あゆみが叫ぶ。

「杏う。次、行くわよおお〜！」  
アトラが叫ぶ。

見れば、あゆみとアトラが大きく手を振りながら、笑顔でこちらを見ている。  
ふたりとも、とても輝いた笑顔を見せている。

その隣では -

姫屋の晃と藍華。

オレンジ・ぷらねっとの蒼羽。  
ゴンドラ協会のアンジェリア。  
そしてARIA・カンパニーのアリシアが、やっぱり微笑みながら、こちらを見ていた。

- いつの時代も  
どんな時でも  
どの場所でも

水先案内店や、それぞれの立場の違いなど関係なしに -

私達は育ってきた

同じ、水先案内人として

同じ、ウンディーネとして

それは -

【 未来への航跡 】

アンジェリアさんが。

晃さんが。 アリシアさんが。 アテナ先輩が。

藍華ちゃんが。 灯里ちゃんが。 アリスちゃんが。

あゆみが、アトラが。 そして私が。

グランマや明日香さん、アン寮長がたどってきた、同じ一本の航跡。

これからも、私たちが通ってゆく、同じ一本の航跡。

これからも、みんなが通ってゆく、同じ一本の航跡。

私達や私達の後輩もたどってゆく一本の 【 未来への航跡 】

こんちくしょう……

杏はようやくやく分かった。

ようやく本当に、その意味が理解できた。

「すみません。失礼します!」

杏は三人に元気よく頭を下げると、駆け出した。

- 私達ウンディーネは、みんな家族なんだ。

あゆみが、アトラが、蒼羽が。

晃が、藍華が、アンジェリアが。

そしてアリシアが待つ、その場所へ。

私たちの未来へと

私たち家族の航跡へと

- いつまでも「やわっこく。やわっこく」

そう願いながら

そう誓いながら

そう励ましながら

杏は、息を弾ませ駆けて行く。

【 家族たち 】

その名前を呼びながら。

- ただ、楽しい

右手を、大きく空に掲げる。

そんな杏の -

後輩のウンディーネの後姿を、三人の先輩はいつまでも、いとおしげに見守っていた。

「ただいま!」

『お帰りなさい!』

そして灯里が帰ってきた。

Essere continuato ( )

』 Tragnetti』 PART - 7 『 L

a pista alfuturo (未来への航跡) 『

l  
a  
  
f  
i  
n  
e



携帯で読んでいただいた、みな様。  
いかかでしたでしょうか？

短く分割した方が、読みやすいでしょうか？  
ご意見、よろしければ お聞かせください（礼）

PART - 8をお送りします。

エラそうに、一挙掲載です(汗)

今回、アカツキんに頑張ってもらいました！(鹿馬)

「はあ。はあ。はあ……」

息がきれる。

「はあ。はあ。はあ……」

汗が流れる。

「はあ。はあ。はあ……」

目が霞みだす。

「はあ。はあ。はあ……」

走る。

「はあ、はあ、はあ……」

ただ走る。

「はあ、はあ、はあ……」

ただ走り続ける。

「はあ、はあ、はあ……」

ただ前を向き、一心不乱に走り続ける。

「はあ、はあ、はあ……」

まるで、それ以上の至福の時は、ないかのように -

「はあ、はあ、はあ……」

その先にあるのは、サンクチュアリか、シャングリラか。

「はあ、はあ、はあ……」

それとも、パラダイスか、桃源郷か。

「はあ、はあ、はあ……」

あるいは、狂おしいほど愛しい、なにかか。

「はあ、はあ、はあ……」

それは分からない。 分からない。 けれど -

「はあ、はあ、はあ……」

そこには必ずある。  
そう信じて。

それを一片も疑いもせず。

「はあ、はあ、はあ……」

走る。  
走り続ける。

「はあ、はあ、はあ……」

走る。ただ、走る。走る。走る。走る。走る。走る。

駆け抜けてゆく。

「はあ、はあ、はあ……」

そしてついに、たどり着く。

小さなカンポ（路地）を抜けた、その先に -

まばゆい光と、かしましい喧騒と、色とりどりの色彩と、あふれんばかりの楽しげな声と、その笑顔に。

そこには『世界』が広がっていた。

ようやく会える。

点描を続ける。

アリシア・フローレンスの場合・

「アリシアあああ！　・どってんばっしゃあああんっ　・うっぎゃあああああ！　！！！」

突然の叫び声と、何かが倒れる突発音。

そして、一步遅れて聞こえてくる、魂消る悲鳴……

それだけでアリシアは、誰が自分の名を呼んだのかが分かった。

「や、やあ、アリシア。　お久しぶり」

「てへへ」

と、頭をかきながら、アン・シオラは、アリシアを見上げ、にっこりと微笑んだ。

「どうしたの、アン。　今日はお店、お休み？」  
アリシアがアンに手を貸しながら訊ねる。

「なに言ってるのよ、アリシア」

アンは何故か自慢気に、胸を反らせながら答えた。

「あのアリシア・フローレンスがトラゲットしてらって言うじゃないな

い！ それなのに、私が乗りに来なくてどうするの！？」

「あらあら……」

「だから私は、全速力で走って来たのよっ　　ふう……」

「うふふ…ありがとう。　　アン」

アリシアが幸せそうに微笑む。

「それになんとか楽しそうなことになってるし…ホントは、しっかり営業用の屋台を用意もしてあるのよっ」

「ええ？　　アンすごいわぁ」

「ふふん。　　すごいでしょ？　　よし、ビアンカネーヴェ・トラゲツト支店、開店よ！　　……あっ」

不意にアンは体を強張らせ、硬直する。

「……？　　どうしたの、アン？」

「肝心の屋台、持ってくるの忘れた……」

「あらあら……」

がっくりとへたり込むアンの肩を、アリシアは　　昔のように　　ポンポンと優しく叩いてやるのであった。

「あらまあ、もうひとりのアンさんだわ」

アリシアが、うなだれるアンを抱きかかえるように、みんなの所へ連れて来る。

そんなアンに、グランマが、アン寮長と見比べながら言った。

「え？ グランマ。覚えていてくださったんですか？」  
アンが驚きと共に聞く。  
なにしろ、グランマに会うのは実に5年ぶりなのだ。

「ええ…あなたがアリシアをウチに連れて来てくれたのだから。  
うふふ…忘れないわ」

「うわあ…光栄です！」

「あらあら。おおげさよ」

ほっ。ほっ。ほっ。　とグランマは、楽しそうに笑う。

アンは、たちまち元気を取り戻す。　グランマの不思議な魔法だ。

「アンさん。　お久しぶりです」

「ああ。灯里ちゃん。　三日ぶりい」

灯里の笑顔に、元気に笑顔で答える、アン。

「灯里ちゃん、こちらの方は？」

アトラが、皆を代表して訊ねた。

「ああ…えと、私や藍華ちゃん。　晃さんとは面識があるんですけど……」

「こちらは、アン・シオラさんです。　アリシアさんのミドル・ス  
クールのときからの親友さんで、

サン・トロヴァーゾ運河沿いの、ゴンドラ・スクエーロ（舟の修  
理工房）の近くに

『Biancaneve・ビアンカネーヴェ』ってカフェを開い  
てるんですよ」

「ああ。あなたがあの有名な『ビアンカネーヴェ（白雪姫）』のオ



「ナーの方ですか」  
アトラが右手を差し出しながら挨拶する。

「えっ、そんなに有名なんですか？　わあい　　がふうっ！」

にぶい音が響く……

あわてて、アトラの手を握ろうと差し上げた手を、アンは、そばにあるテーブルの角に思いつ切り、ぶち当てたのだ。

「ぐおおおおおおおっ！」

あまりの痛さに、手を抱え込み、悶絶するアン。

「ええ…オーナーが危なかしつくて、とても見てられない店…って…すごく有名です……」

右手を差し出したまま、アトラが困ったようにつぶやいた。

「はい。アリシア。生クリームのせココア。　飲んで飲んで。  
さあ、みなさんもどうぞ」

何事もなかったかのように……！

アンが、それだけは忘れることがなかったココアを、みんなに配り始める。

「あらあら。アンの元祖、生クリームのせココアね」  
アリシアが嬉しそうに笑う。

皆がアン特製の生クリームのせココアを味わった。

「おおっ」

「これは」

「うまい！」

「うん。素晴らしい」

「甘い」

全員が感嘆の声を漏らす。

「ああ、美味しい。やっぱりアンの入れてくれる、生クリーム  
のせココアは最高ね。うふふ」

「ありがとう、アリシア」

「あらあら。うふふ。ホントに美味しいわあ。うふふふふ」

「お、おい。なんだかアリシアの奴、妙に、はしゃいでないか？  
生クリームのせココアのカップを手に、晃が笑いながら灯里に訊ね  
る。

「きつと、親友さんが来てくれたことが、とっても嬉しいんですよ」  
灯里も、はじけるような笑顔を見せるアリシアを見ながら、楽しそ  
うに言う。

「ああ。あいつの『楽しい』は、みんなに広まるからな」

「うふふ。それだけじゃないわ」

そんな灯里と晃の会話を聞いていたらしいアリシアが、やっぱり満  
面の笑顔で言った。

「これは『縁』よ」

「縁？」

きよとんとする一同を前に、アリシアとアン。そしてグランマだけが、互いに目配せして、それからくすくすと笑い合った。

「ええ？　なんですかアリシアさん。　そんな自分達だけで楽しまないで、私達にも教えてくださいい」

藍華が甘えるように懇願する。

「ごめんね、藍華ちゃん……」

アリシアは右手の人差し指をたてながら、目を細め、とても嬉しそうに言い放った。

「禁則事項ですっ」

「ええええええっ」

「いいんですか？　それ？」

「すわあ！　もったいぶらずに、教えるおー！」

「あらあら……」

藍華の嘆きと、晃の叫びに、けれどアリシアは、いつものアリシアの返事を返す。

「すわあ！　あらあら禁止！」

「うふふ……」

「うふふも禁止！」

「あらあ？」

「ちよつと言い方を変えてもダメだあ！！」

つか、そんな小悪魔スマイルは、幼馴染で同級生な私にはきいかああん！　つと、前から言っているだろおがああん！」

「私も一応、アリシアと晃とは、ミドルスクールの同級生なんだけ

どなあ…でも、身もだえよおおっっ」

アンは、そう悲しげに叫ぶと、両手で自分の肩を抱き、激しく震え始める。

その仕草に、あたりは爆笑の渦に包まれた。

「さあ。 次のトラゲットの時間よ。 アン、乗るでしょう？」  
アリシアが目を輝かせながら言う。

「ええ。 もちろんよ、アリシア。 行きましょう！」

互いに微笑み合い、嬉しそうに駆けて行く、アンとアリシア。  
そんな『縁』で結ばれた二人を、『藍』と『青』の仲間達が、優しく見送っていた。

もちろん。

途中でアンがつまずき、悲鳴と共にひっくり返ったことは言うまでもない。

「…うん。 あの子。 ウチのアテナといい勝負ね…あなたどれない」  
同じ『アン』の名を持つ女性が、ささやくように呟いた。

晃・E・フェラーリの場合・

「ほら、藍華。 このモエッキ（蟹）すっごく美味しそうですよ」  
「あーん」

「え、いえ、その……」

「あーんん！」

「あ、藍華……」

「あーんんんん！」

「…はい」

「ぱくつ…美味しいいいいい」

「あはははは………」

・すわつ。 このバカップル。 何をやっとなるんじやい！

そんなセリフを胸の内に押さえ込んで、晃は幸せそうなバカップル

・藍華とアル・ を何とはなしに眺めていた。

「ふふふ…うらやましい？」

「なにをいつ…明日香さん？」

何を言いやがる・そう言おうとした言葉が、のどの奥で急停止する。

明日香がにこやかな笑顔で、こちらを見ていた。

さすがの晃でも、大先輩な明日香を怒鳴ることなど、できはしない。

「晃には、いい人いないの？」

「うわつ。 ストレート直球ド真ん中あ！ って…いえ残念ながら」

苦笑しながら晃は答えた。

「私はまだウンディーネの仕事が楽しくてたまりません。 彼氏を作るなんて、まあ、まだまだ先の話ですね」

「そう、それは残念ね…もったいないわ。 ふふふ」

「何がもつたいないのかは分かりませんがね。 まあそれは、いずれまた……」

「その割には、結構、熱い視線を送ってたじゃないか？」  
「アンジェリアさんまで……」

いたずらな笑みを浮かべて、アンジェリアが近づいてくる。

まるで心配性な姉が二人いるみたいだ。

晃は心の中でタメ息をつく。

二人とも悪い人では決していないのだけれど、プライベートな事まで、口を挟まないでもらいたい。

「まあ、私もいずれ、お二人のような良き伴侶が見つければ、考えてみますよ」

だから、あえてそう言ってやった。

「まっ。言うわね」

「おっと。これは一本取られたなあ」

「うわあ。照れながら言われたよ。つか、反論なし？ 反論しないの？ 認めるのか？ 認めるの？  
しまった……」

晃は少し後悔する。

こっちもバカッブルだったか……

「私は藍華のことを思ってたんです」

「ええっ？ 晃さん、そっちの趣味だったんでげぶあああっ！」

横に座って、話しを盗み聞きしていたらしい、あゆみには、遠慮なく右フックを叩き込む。

「誰がじゃあ。つか、そんなワケないだろ！」

「ほっ・ほっ・ほっ。じゃあ、どうゆう意味かしら？」

「うわっ、グランマ!? ここは『姫屋』の査問委員会ですか!？」

いつの間にか晃の周りには、現旧「姫屋」のメンバーが集まっていた。

「そうね。それなら素直に白状してもらいましょうか……」

「さあ、きりきり吐いてもらおうっ」

「明日香さん。アンジェリアさん」

「うふふふ。それは楽しみだわ」

「グランマまで……」

晃は最早、苦笑でもって答えるしかなかった。

「今、蘇える、晃さんとアリシアさんの恋人疑惑。 ついでに若い

お嬢にまで手おぐばひゃあああ！」

だが、あゆみには、もちろん拳でもってのみ、答えを返した。

「藍華は『姫屋』の…グランチエスタ家のひとり娘です」

晃は静かに、自分の心情を吐露し始めた。

「もの心ついた頃から、そう言われ、そう教育され、育ってきました。今も、ずっとそうです。」

当時、グランマはもちろん、明日香さんも引退され、アンジェリアさんもほんの数年しか、藍華と一緒に過ごされていません」

「ええ。私が引退したとき、藍華ちゃんはまだ、ミドルスクールの四年生だったわ……」  
アンジェリアが言う。

「はい。幼い藍華には、それはそれなりにプレッシャーだったんでしよう。最初はウンディーネになることを、ひどく嫌がっていたと聞いています」

「そうね。彼女、私達には冷たかったわ。私達が挨拶しても、彼女は小さな声で何事かつぶやくだけ。仲間の中には、あからさまな嫌悪を向ける人もいたわね」

「そう…なんですか」

「まあ、今考えると、その時から彼女はプレッシャーと戦っていたってことなんだけど……」

「ええ…グランマや明日香さん。あるいは、アンジェリアさんがいたのならば、良き相談相手として、藍華も楽だったんでしようが…」

「……………」

「そして、そんなある日。藍華はアンドリュー社長…お父様と喧嘩をして、姫屋を飛び出し、そのまま夕方まで行方不明になった。つて事があつたんです」

「おやまあ」

「そんなことが……」

「ええ。でもホントの問題はその後で…夕方、無事に帰ってきたと思つたら、藍華は突然、宣言したんです。

『私、ウンディーネになる！』つてね。

理由は今でも分かりません。分かりませんが、それなら当然、姫屋を継げ…つて話しになつて……」



「……………」  
「それからみんな、ますますハレモノを触るように藍華に接して…  
年下にも関わらず、男性職員までもが藍華を『さん』付けで呼んで…

……………  
それはまあ、分かりますよね。いずれ、将来、自分の上に立つ  
ことが決定的な人物に、誰でもキツクは言えませぬ。

だから恩返しもかねて、あえて私は、彼女の教育係りを名乗り出  
ました」

「恩返し？」

「まあ、ちよつとしたことがありまして……………」

晃は苦笑する。

『四葉のクローバー』の話は、みんなには内緒だ。

だって、恥ずかしいじゃないか……………

「私が一番に心配したのは、藍華が傲慢にならないか…って事でした」

「傲慢……………」

「はい。誰でも人は油断すると『私はこれでいいんだ』『私は偉いんだ』『それが当然なんだ』って思ってしまう。

最初から地位が保障されてる場合には、特にそうです。

私は、それが恐かった。

だから、私はあえて公私に渡って、彼女を厳しく指導することに  
したんです。

特別扱いはせず、甘やかさず。時には理不尽なことまで言って

そして決して彼女を……………藍華を『さん』付けでは呼びませんでし  
た」

「……………」

「そう。実際、藍華のことを『さん』付けで呼ばなかったのは、

私か……」

晃は微笑みながら、あゆみの頭を、軽くポンポンと叩いた。

「この、あゆみくらいなモンです」

「う、ウチは……」

あゆみが、戸惑ったように話し出す。

「なんとなくです。なんとなく『さん』付けて呼ばれるたびに、藍華……お嬢が、困ったような、さびしいような、そんな顔をするもので……」

「ああ。それが分かるお前だからこそ、私はお前を藍華の元に……カシナレ・ジヨ支店の副支店長になってもらったんだ」

「晃さん……」

あゆみが感謝の眼差しで晃を見る。

晃は照れくさそうに視線をずらすと、少しだけうなずいた。

「幸いにも私の心配は杞憂に終わりました」

晃は、誇らしげに言葉を紡いだ。

「藍華はしっかりと足を地に付け、真っ直ぐに、素直に育ちました。また良き友人とライバルと、共に仕事をする仲間も得ました。そして将来、良き伴侶になるであろう人とも。私は……」

みんなの目が、ひとつのコップからふたつのストローで、アンの入れた生クリーム入りココアを嬉しそうに飲んでいる、バカッブルに注がれる。

けれどその瞳には、みな一様に、暖かな輝きが宿っていた。

藍華が、みんなの視線に気付く。

「な、なんの話し、してるんですか？」

藍華が頬を染めながら、問いかけてくる。

「いやあ、お前らのようなバカカップルに、この先、支店を任せておいて大丈夫かねって話しをナ」

晃が眉間にシワを寄せながら答えた。

「うわ、ひどいですつ。 晃さん！」

「すわっ！」

「ひええ？」

「本店、支店とも、統括しているのは、この私。『クリムゾン・ローズ』こと、晃・E・フェラーリ様だぞ！」

いかに同じ姫屋の支店であろうとも、いかにその支店長が『ローゼン・クイーン』の藍華・S・グランチェスタであろうとも、

邪魔になるなら容赦なく叩きつぶす！」

「うわ、ひどっ！」

だが誰もが、その晃の強い口調の中に、後輩の成長を促し、喜ぶ、そんな晃の暖かな想いを感じとることができた。

ひよっとしたら、藍華ですら、それは感じ取っていたのかもしれない。

「絶対、負けません。負けるモンですか！」

だから藍華も、強く答える。

「ねっ、あゆみさん。絶対がんばりましょう！」  
そこにはまた、藍華の、あゆみに対する絶対の信頼があった。

「ええ、お嬢。負けられませんよ。逆に、本店を叩きつぶしてやりましょう！」  
だから、あゆみもまた、そんな藍華と晃の想いを受け、元気よく答える。

「おお、言ったなあ。よし、いくらでもかかってこい！相手に  
なつてやるっ」

晃が傲慢に、けれど嬉しそうに言い放つ。

それは対等に認め合っている証拠。  
それはお互いが、お互いを認め合っている証拠。

そんな『現・姫屋』のウンディーネ達の声を『旧・姫屋』のウンディーネ達が、懐かしそうに、楽しそうに、いつまでも無言で聞いていた。

晃は思う -

すべては我が愛しき『ローゼン・クイーン（薔薇の女王）』 その  
名の元に -

アテナ・グローリイの場合・

「ただ今、帰りましたあ〜！」  
頭の上から声がする。

茜色の空。

灯里が思わず振り仰ぐと、そこには、ウッディのエア・バイクの後ろに立ち、おりからのオレンジ色の光を受け、まるで『オレンジ・プリンセス（黄昏の姫君）』そのものになってしまったかのような アリス・キャロルの姿があった。

風を蹴立てて、エア・バイクが着陸する。  
舞い上がった風が、時ならぬ突風を巻き起こす。

「きゃっ」

帽子が飛びそうになる。

制服の裾がひるがえる。

あわてて灯里は、帽子とスカートを押さえこんだ。  
けれど、ほんのつかの間。 灯里の白いうなじと、健康的な太腿が垣間見えた。

暁がぎこちなく横を向き、視線をそらす。

その顔は、しっかりと夕焼け色に染まっていた。

「なんかスゴいことになってますね……」

アンが入れてくれた生クリームのセコシアを飲みながら、まるでカ―ニバルのような、お祭り騒ぎのトラゲット乗り場を、アリスは改めて見回した。

「それにいつの間にか、灯里先輩やアリシアさんまで…いつたいな  
なんですか？」

「えへへへ…何なんでしよう?」

灯里が困ったような笑顔を浮かべた。

「それにしても後輩ちゃんよ。ウツディーのエア・バイクで登場  
とは…やるもんだねえ」

暁が、にたにたと笑いながら言う。

「あ、あれは私が仕事が終わって、まだトラゲットできるかなあ?  
…できたらいいなあ。きつとできるにちがいない!

なんて思いながら走っていたら、

たまたま…ホントにたまたま、偶然にお会いしたムツくんに乗せ  
てもらって…」

「そうなのか? ウツディー?」

「いやあ……」

暁の問いかけにウツディーは、生クリーム髭をつけながら即答した。

「アリスちゃんに迎えに来て欲しいって言われてたし、私もそうし  
たかったし。

それで私はオレンジ・ぷらねっとの前で、アリスちゃんをずっと  
待っていたのだ」

「ムツくん!」

「ほうほうほう……」

にやにや笑いのまま、暁はアリスに言った。

「よかったじゃねえか、後輩ちゃん。ちゃんと待っていてくれる奴  
がいて……」

「わははは。あかつきん。それほどもお! なのだ……」

「ゴッ！……！」

にぶい音とともに、暁とウツデイが崩れ落ちる。

「ど、どうしたんですか？ お二人とも！？」

灯里があわてて駆け寄る。

「お、オレンジ……！」

「え、な、なんですか、暁さん！？」

暁は「今日は、なんてやられることが多い日なんだ……などと思いな  
がら、かすれた声で答えた。

「オレンジ・ぷらねっとのウンディーネは、みな必ず……こつも……  
ウ……ウツデイ……がんばれえ……がくっ」

「お……おつ……よく……分からないが……分かったのだあ……がくっ」  
「はひい？」

とまどう灯里。

悶絶する、暁とウツデイ。

そんな三人に構わず、アリスは一気にココアをストローで吸い上げ  
た。

「ああ、オレンジ・プリンセス。アテナ見なかった？」

「お母さん？ どうしてここに？ い、いえ。アテナ先輩は、今  
朝別れてからは見ていません」

「ああ。やっぱり迷ってるのね……」  
アン寮長が深い深い夕メ息をつく。

「杏先輩。 いったい、どうゆうことですか？」

・わけが分からない

といった顔で、アリスが側らの杏に訊ねる。

杏は、晃が、今日ここでアリスがトラゲットをしてる旨を伝えるメッサージを、アテナに送ったこと。

そのアテナは、お昼過ぎに、まあ社長とオレンジ・ぷらねっとを出たあと、未だに姿を見せないでいること。

そのアテナは、帽子を忘れ、アン寮長がそれを届けにきてくれたこと。

そのアテナは、たぶん、どこかで迷子になっているであろうと推測されること。

などを、アリスに伝えた。

「はあ… ホントにアテナ先輩は世話が焼ける…私、探してきました」  
アリスが立ち上がる。

「あつ。でも後輩ちゃん。 もうすぐトラゲット、終わっちゃうわよ。 いいの？」

藍華が言う。

「そうだよ、アリスちゃん。 アテナさんは私達が探すから、アリスちゃんはトラゲットしてきたら？」

灯里も言う。

「…ありがとうございます、先輩方」



アリスは藍華と灯里の心使いが嬉しかった。でも……

「でも……」

アリスは、きつぱりと言い切った。

「トラゲットより、アテナ先輩の方が、でっかい心配ですから！」

「ふふふ。アリスはアテナのことが、ほんとに大好きなのね」  
アン寮長が楽しそうに言う

「いえ、お母さん。私は、ただ単に、ドジっ子なアテナ先輩が心配なだけで……」

「まあ。できの悪い子ほど愛おしい……って言うからな」  
蒼羽が笑いながら言う。

「蒼羽教官。それ結構、キツイですよ」

「ええ。いくらアテナさんと同期でも……ちょっと」

「うん？ そうなのか？ アトラ、杏。だが安心しろ。私はお前達のこと充分、愛おしいぞ！？」

「それって……」

「いったい……」

「『 どうゆう意味ですかあああああっ！？ 』」

アトラと杏の声が綺麗にハモった。

・見事なチームワーク。これがオレンジ・ぷらねっとかあ……  
藍華はすばやく、心のメモに書き込んだ。

「ぶいにゅううううううう！」  
突然、アリア社長が絶叫する。

・何事？

と、みんなが見れば。

「まあああああああっ」

そこでは、アリア社長が、その「もちもちポンポン」を、斑な子猫に噛まれ、悶絶していた。

「まあ社長!？」

アリスがあわてて、まあ社長をアリア社長から引き離す。

まあ社長は、オレンジ・ぷらねっとの社長猫だ。

迷い猫だったところをアリスに拾われ、そのまま、オレンジ・ぷらねっとの新社長として就任した、ちいさな火星猫。

けれど小さいながらもその瞳は、水先案内店の社長猫にふさわしい、澄んだ蒼い色で輝いている。

なにかにつけ、大好きなアリア社長の「もちもちポンポン」に噛み付く、恥ずかしがりやな女の子だ。

「まあ社長。アリア社長のもちもちポンポンは、生クリームのせ  
ココアとは違いますよ」

「まああ……」

「ぶ……ぶいにゅうううう……」

アリア社長が泣きながらヒメ社長に助けを求める。

けれどヒメ社長は何も言わず、シンとした表情のまま、藍華とアルの元へと走って行ってしまった。

「ぶぎゃふふうふう……」  
夕焼け空に、アリア社長の鳴き声が木霊する。

「それにしても……」  
晃の周りを見回しながら言った。

「まあ社長がココにいるってことは……」  
その言葉が終わらないうちに「天上の声」があたりに響きわたった。

「アリスちゃん、晃ちゃん。お待ちせええええ…のわっ！」

全員の視線が集中する。  
そこには山のような箱を持ったまま、見事に顔面ゴケしているアテナの姿があった。

「あらあら……」  
アリスアが困ったように呟いた。

「で、今までなにやってたんだ？」  
蒼羽が冷たく聞く。

「そつだ、みんな心配してたんだぞ」  
晃が続く。

「あの、あのね。走ってきたの。息が切れてね。大変だったの」  
「あらあら、まあまあ…それは大変だったわね」

アテナのトンチンカンな返事に、アリシアがやさしく微笑む。

「アリシア。お前なあ……」

「まあまあまあ……」

アング、生クリームのせココアを手に、間に割って入った。

「アテナさん、お久しぶりです。はい、どうぞ」

「あゝあなたは確か、アリシアちゃんのお友達で…名前は確か、アン・シャーリ…」

「アン・シオラです！つか、私、赤毛じゃないっすから！」

「えへへ。あらためて、よろしくです」

「はい。こちらこそ、よろしく…つか！」

「よろし…っぐー！」

- GOZZM!

にぶい音が響いた。

頭をさげたとたん、ふたりの軌道が交差して（専門的には「コリジョン・コース」とか言ったりする）見事、空中衝突したのだ。

「『ぐあだだだだだだだあ…』」

二人が頭を抱えてしゃがみ込む。

その拍子に、そばにあったテーブルが倒れる。その勢いで、そのまた隣のテーブルも倒れて行き……

・ドンが・ドンが・ドンガラガツシャアアアン！！

つと

それはまるで「ドミノ倒し」のような連鎖反応を引き起こし、たちまちのうちに、トラゲット乗り場周辺の屋台、出店、ステージまで波及し、

悲鳴と共に、その全てをひっくり返すことになった。

・恐るべし、ドジっ子の相乗効果

次々に倒れていく屋台。悲鳴をあげて逃げ惑う人々。時折り上がる火球は、ガスの引火が電球の放電か。やがて全ての活動が静止する。

のちに「バシヨタオレ・ルの惨劇」と呼ばれることになる、その光景を目にしながら、  
二度とこの二人をめぐり逢わせることは止めよう……と、みんな硬く心に誓うのであった。

「あのね。会社は結構早く出たの……」  
ぶつめた頭をさすりながら、アテナが言う。　　うつすらと涙目であったりする。

「でもちよつどお昼過ぎだったから、みんなにお昼ご飯を差し入れ

ようと思つて……」

「さすがは「気配りの達人」です。  
アリスが心の中で喜ぶ。」

「でももしたらね、どこのお店もいっぱい……」

「はい。でっかいお昼どきでしたから……」

「ええ。だからずっと並んで待ってたの……はい。インボルティ  
ー」

そこには、いろいろな具材を巻いた、ひとくちサイズの小さなパン  
が、何個もきれいに並んでいた。

「こつちはキタツラを使ったスパゲティ。ネオ・アブルツツオ州  
の郷土料理で、ほら、断面が四角なのよお。」

んで、こつちは、ポレンタ。とうもろこしの粉でできてるのよお。

マン・ホームのクロアチア州では『ジュガンツイ』

ルーマニア州では『ママリガ』とも言つたのよお

「う……お、おう」

「それからカペツリーニを使ったスープ」

「……ア、アテナ？」

「カペツリーニは『天使の髪の毛』カペツリーニ・タンジエロって別名もある、いちばん細い  
パスタなの。」

だから、こうゆうスープには、ぴったりね。それと……」

「……いや、アテナさん？」

「変わったところでは、おにぎりも買ってきたのよ。米はちゃんとし

き。中味はなんと、イクラです……」

「……ちよ、ちよっと待て」

「それから肉まんもあるのよ　それも珍味、栗アンまんなのお  
！」

「『　だあああつ！　』」

たまらず、晃と蒼羽が悲鳴を上げた。

「そんなに喰えるつかあああ！」  
晃が叫び。

「つか、また肉まんかあ！　肉まんなのかあ！？」  
蒼羽が泣き出す。

「ええ〜え？」  
アテナが戸惑ったように声を上げた。

「あの…アテナ先輩」

「ん？　なあにアリスちゃん」

「それもしかして、全部、並んで買ったんですか？」

「うん、そうよ。　どのお店もみんな人がいっぱい…思いのほか  
時間がかかっちゃって……」

「はあ……」

「それに並んでるうちに、自分のいる場所がどこだか分からなくな  
っちゃって…迷っちゃった。　えへっ」

そう言つて、屈託なく笑うアテナ。

「あらあら、まあまあ」

「アテナ先輩、やっぱり迷子だったんですね」  
杏がタメ息をつく。

「お前、この街に何年、住んでるんだ？」

「んと…22年…かな？」

「22年つて……」

「つか、『かな』つてなんだ『かな』つて!？」

「あらあら、まあまあ…うふふ」

「……」  
「はあああああ………」  
「……」  
「……」

屈託なく笑うアリシアの笑顔と、山のようにテーブルに積み上げられた『お昼ごはん』を前に、みんなのタメ息が重なった。

「さあ、みんな。私もトラゲットやるわよお!」

アテナが元気よく言う。

「いや、もういい」

蒼羽が冷たく答える。

「…へ？」

アテナが『きよとん』顔になる。



「なんだ、その鳩が豆喰ってぴょん！ な顔は……」  
「へえ？ なに？ 鳩が豆喰って、ぴょん！ って……あの……ひよ  
つとして、もうトラゲットしないのお？」  
「いや、しないちゅうか、人手充分だし……」  
晃も冷たく答える。

確かにトラゲット三人組の他にも、灯里達、新プリマ三人組。 は  
ては、晃や蒼羽、アリシアまでいるのだ。  
人手は充分過ぎるほどにあった。

「ええ〜え？ 私はアリスちゃんとのトラゲット。 楽しみに来たの  
に……じゃ、じゃあ、私は何すればいいの？」  
困ったように、アテナが訊ねる。

「唄でも歌つとけば？」

「へっ？」

「お前はただ、歌を唄ってりゃいい」

「そんなああ……」

「お前の歌は……」

「え？」

「お前の歌は、ただそれを謳うだけで、みんなを幸せにすることが  
できる」

「蒼羽ちゃん……」

「それに今日は何故か、こんなお祭りさわぎだしな」

「晃ちゃん……」

そこではいちど壊滅的被害を受けた屋台達が、たちまちのうちに復

活し、営業を再開していた。

もちろん、パフォーマーも管弦楽団も健在だ。

恐るべし、ネオ・ヴェネツィアん子の、お祭り根性である。

「きつとお前の唄は、このお祭り騒ぎにぴったりと合っぞ」

「ああ、みんなきつと喜んでくれるさ」

「晃ちゃん、蒼羽ちゃん…ふふ」

アテナが不意に笑い出した。

「な、なんだ、アテナ。その笑いは……」

「あ、ああ。なんか気持ち悪いぞ……」

「ふふふ。だってなんだか嬉しくって…つい……」

「嬉しい？」

「なにがだ？」

「だって……」

アテナは晃と蒼羽の顔を交互に見ながら言った。

「だって晃ちゃんと蒼羽ちゃん。いつの間にか、とっても仲良しになってて…ふふ。すっごく嬉しい」

「すわっ！」

「ば、ばか！」

「『は、恥ずかしいセリフ、禁止いー！！』」

やっぱり息もぴったりに、晃と蒼羽のセリフが重なった。

やっぱり二人の顔は、しっかりと夕焼け色に染まっていた。

街に「謳声」が響き渡る。

ウンディーネの唄を聴きなれてるはずのネオ・ヴェネツィアの人達が、ちょうど出来上がったアルデンテナパスタを放り出してまで、窓際に殺到し、彼女が通り過ぎるまで、その唄に聞きほれる。とまで言われる、「セイレーン」の謳声。

アテナ・グローリイの通り名。

彼女の謳声は、聴くものすべての時間の経過を忘れさせる、その名の通り「セイレーン・天上の謳声」なのだ。

その唄が今、トラゲット乗り場に響き渡る。

いつしか屋台の掛け声も、楽団の演奏も、パフォーマーの音楽も止み、みなが静かに黙って、ただアテナの声に聞き入っている。

街は再び、静止した。

唄は続く。

途切れる事無く、いくつもの唄を奏でていく。

それは「パルカローネ」であったり

それは「コッコロ」であったり

それは「満月のドルテエ」であったり  
それは「Second Season」であったり  
それは「Shaliion」であったり……

「ほら、アテナ」

晃がオールを差し出した。

「…え？」

きよとんとするアテナに、晃がウィンクする。

「向こうでアリスが待ってるぞ」

「晃ちゃん……」

「オレンジ・ぷらねっとの師弟コンビのトラゲット。みんなに見せてこい」

蒼羽も、いたずらっ子のような笑みを浮かべる。

振り向けば、みんながアテナを見ていた。

グランマが明日香がアンジェリアがアン寮長が。

晃が藍華があゆみが。

蒼羽がアトラが杏が。

アリシアが灯里が。

アルが暁がウツディーが。

そして -  
アン・シオラをはじめ - ネオ・ヴェネツィア この街、すべての人々が。

みんなが、微笑を浮かべながら、優しくアテナを見守っていた。

「…うん」

アテナは晃からオールを受け取ると、精一杯の感謝の気持ちを込めて、うなずいた。

「うん。 ありがとう」

「アテナ先輩！」

アリスが、こぼれるような愛らしい笑顔を浮かべて迎えてくれる。

「さあ。 行きましようつ。 アリスちゃん！」

「はい。 でっかい、はい！ ですー！」

「ゴンドラ、出ま〜あす」

ゴンドラがゆっくりと動きだす。

アテナが、再び歌を奏で始める。

アリスとアテナ。 オレンジ・ぶらねつと師弟コンビのゴンドラはその謳声とともに、軽やかに運河を滑ってゆく。

ゴンドラは行く。

「天上の謳声」とともに。

すべるように  
謳うように

アテナの奏でる「天上の謳声」に後押しされながら。

ゴンドラは人の心や想いだけでなく「唄」までも運んでゆく。

茜色に染まる大運河・グラン・カナルに響く、その唄は……

- Vesperugo, fluas enondetoj..  
夕陽が沈み 流れるさざ波

【 Lumis eterne - ルーミス・エテルネ 】

- Giestas kiel kanto, bela kant  
o de felico..  
それはまるで無垢な 幸せの歌のよう

アリスも歌いだす

- Cuviri markis birdojn, portan

t a a f a b l e c o : :  
鳥達は優しさを運ぶ遣い

だす  
アリスの歌声を優しく包みこむように、アテナもまた謳い

- S u p e r l a m a r o f l u g g a s i l l i f l u g  
a s k u n a m o : :  
海を越え飛ぶよ 愛を風に乗せ

ふたりの歌声がひとつになり、どこまでも響いてゆく

- O r a n g a c i e l o e m o c i a s m i a n s p i  
r i t o n : :  
心ふるえる 黄昏の空に

その謳は、ネオ・ヴェネツィアの黄昏に…オレンジの空に  
広がって

- S t e l o d e l ' e s p e r o , s t e l o l u m i s  
e t e r n e : :  
永遠に輝く 希望の星よ

どこまでも どこまでも 高く 高く 高く

- Lumis Eterne.....

希望の星 AQUAを包んでゆく

「素敵ですね……」  
灯里がつばやいた。

おりから空は燃えるような夕焼け空……  
そのオレンジの光を受け、謳い続けるアリスとアテナの姿は、今日  
という日を讃えるような、愛しむかのような、  
そんな、街の人々の想いを受けて、いつまでも楽しげに、嬉しげに、  
ひかり輝いていた。

「まるでアクアの心のすべてが、ココにあるみたい。素敵ソグで  
す」  
灯里が、恥ずかしいセリフを口にする。

けれど、誰からのツッコみも入らない。  
誰もが瞳を閉じながら、ただじっと、アリスとアテナの謳声に聞き  
入っていた。

「おめえだって……」



「はへ？」

灯里の隣に立つ暁が、灯里にだけ、ようやく聞こえるような小さな声で言った。

「おめえだつて…いつつも素敵だぜ。 ……灯里…」

やっと言うことができた！！

「ほへ……………」

驚いた顔で暁の顔を見つめる灯里。

暁は、そんな灯里を見ようとせせず、ただ口を「へ」の字にまげ、両手を胸の前で組みながら、正面を…ただ正面だけを強張った顔で睨みつけ、仁王立ちしていた。

全身を茜色に染めながら……………

「…はい。 ありがとうございます」

灯里はそんな硬直してしまった暁の腕に、自分の両手をからませると、目を閉じ、そっと顔を押しあて寄りそった。

暁はますます硬直し、最早、指いっぱいなりとて動かせなくなっていた。

汗が怒涛のごとく、流れ落ちてゆく。

「あれ？ ヒメ社長？」

「どうしたんです。 藍華」  
「アルくん。ヒメ社長、どこ行つたか知らない？」  
「いえ…そう言えば、アリア社長や、まあ社長の姿も見えませんねえ……」  
「まったく…いったい何処へ行つちやつたのかしら……」  
「猫だけに……」  
「え？」  
「猫だけに、どこかで『ネコンでる』 - なんて…ね」  
「アルくん……」  
「さらに、アナコンダまで取り入れると……」  
「アルくん！」  
「は、はい？」  
「おやぢギャク禁止いいいいいいいいいい！！」  
「ええ〜？ こ、これは『猫』と『寝込んでる』とをかけたマン・ホームの高等古典で……」  
「禁止！ 禁止！ 禁止！ って言つたら、きつ・んっ・しいいいいいいい！！」  
「ええええええ〜」

Essere continuato (くじり)

] L u m i s  
e t e r n e  
[ l a f i n e  
T r a g g e t t i  
P A R T -  
8

実は今回のこのお話は、アリスとアテナを競演させよう！  
ってトコから始まりました。

それなのに気が付けば、いつの間にやらこんな長いお話に…（涙）  
ですから、どうか、みな様の心の中に、アリスとアテナ。二人の  
競演する声が少しでも響けば、これに勝る幸せは、ありません。

それでは、しばらくの間のお付き合い。  
ありがとうございました。

PS

当たり前の話で、しかももう、みな様も、お気づきであろうコトを  
エラそうに言うスレ（笑）

広橋 涼さんの「ルーミス」と、河井 英里さんの「ルーミス」っ  
てば

『尺』がまったく同じなんですよねい……  
だから、2台のプレーヤー用意して、せえのお・ドン！で、一緒  
にスタートさせれば……

ほら、アリスとアテナの競演が……（知ったか鹿馬）

T r a g g e t t i P A R T - 9

「 u n a g o n d o l i a d e l l

P A R T - 9を、お送りします。

ありったけを書き込んでいます（鹿馬）

どうか、よろしく、お願いします。

夜になっても、トラゲットは続いていた。

理由は - 幾ばくもある。

そう。

事件、事故がそうであるように、物事の始まりと終わりには、単言ではない、いくつもの理由が存在する。

例えばそれは -

ひきも切らずにトラゲットを希望する街の人々。 - で、あつたり。

自分の持ち場のトラゲットが終了したあとに、こここのトラゲットのことを知り、晃やアトラ、

そしてなによりも、アリシアとのトラゲットを希望するシングル達が集まりだしたこと。 - で、あつたり。

またそれを嫌がりもせず、笑顔で受け入れる、元、三大妖精達。

- で、あつたり。

それどころか、灯里や藍華、アリスといったプリマ達とのトラゲットを希望するシングル達も大勢いる とゆう事実。 - で、あつたり。

またまたそれを喜んで引き受ける、灯里達。 - で、あつたり…

それら、いろいろなファクターが複雑に絡み合った結果、未だに -  
すでに陽はとつぷりと暮れ落ち、誰がどう言い募るうとも

「夜うう！」とかしか言いようがない時間であるにもかかわらず・  
トラゲットは続いていた。

まあ、ただ単に、みんな面白くて止められない。

…と言つのが、本音なんであるつが……

降るような星空が、そんなネオ・ヴェネツィアの街を、優しく見下  
ろしている。

「Traghtti」PART・9  
「una gondola della luce delle  
stelle」

暁は未だに仁王立ちしていた。

ぐっ・と腕を組み、睨みつけるかのように前を向き、ひと言も発す  
ることなく……

いや、正直に言おう。

彼は -

出雲 暁は、その体勢のまま、硬直・失神といつてもいい・してい  
たのだ。

腕にはまだ、灯里の手の温もりと、彼女の頬の柔らかな感触が残っ

ている。

甘く、やさしげな香水の香りも、ほのかに残っている。

もちろん、大丈夫たる無粋な暁には、その香水が「アクアマリン」と呼ばれる、

『ピーチやアプリコット、オレンジブロッサムなど元気で、とっておきの爽やかさを演出するマリンスフレランス』

で、あることなど、知りようもない。

ただ彼は、その『灯里の香り』に戸惑い、酔いしれ、動けなくなってしまうっていたのだ。  
なぜ？

答えは簡単だ。動けば、その香りが、どこかに飛んで行ってしま  
うかもしれない。だからだ！！

出雲 暁 漢である。

「弟よっ」

「じっすっ！」

と音がして、暁の呪縛がようやく解けた。

「ぐわっ。 て、てえんめええぐがっ!？」

振り向いた瞬間、カウンターのようになりだされる頭突きに、暁は  
たまらず、頭を抱えてしゃがみ込む。



「暁さんの、お兄さん？」

気づいた灯里が、走って来た。

「やあ、お嬢ちゃん。久しぶり。元氣だったかい？」

暁の兄は、にやりと笑った。

「灯里ちゃん、この方は？」

なぜか追いかけてきた蒼羽が訊ねる。

「この方は、暁さんのお兄さんです。お名前は……」

「新太だ。出雲 新太あらた よろしく、べっぴんのウンディーネさん」

「ふふ。当たり前のことを、当たり前前に言っても、何の賞品もでないぞ」

「おお、言うねえ…：気に入った」

「どういたしまして」

「お兄さんは、貿易会社の偉い人なんです」

なんとなく二人の会話に『不穏な』ものを感じた灯里が、あわてて間に入る。

「ウツチエロ・ミラグラトーレって会社の貿易実務の担当者なんです」

「ああ。名前は聞いたことがある。小さいが、なかなか良い品を扱ってる堅実な会社だ。その人か」

「小さくて悪かったな…：つか、あの会社を立ち上げたのはオイラだからな。実質、社長兼任さ」

「へえ…：社長様か」

「はひ。それに、お兄様は難関で有名な中央大学を卒業されてるんですよ」

「ほう。中央大学を…エリートさんじゃないか」

「おう。少しは興味がわいてきたかな？」

「でも…その、へたれの兄貴だろ？」

新太の問いに、蒼羽は、未だに頭を抱えて呻いている暁・出雲・弟を見ながら答えた。

「は…はっ。は・は・は・はははっ」

…がごっ！ ぐりぐりぐり

再び、暁の後頭部に、兄の鉄拳が炸裂し、そのままドリル・轟天・アタックへと加速する。

「ま、まあ、出来の悪い弟を持った、優しい兄貴の不幸ってヤツだな……」

「ああ。それには、概ね同意する」

「お、おめえらああああああくあああっ！」

兄のドリルの回転数が増し、やがて暁は地面とキスをするはめになった。

「なあ、お嬢ちゃん」

兄・出雲新太が灯里に言う。

「お嬢ちゃん、こいつに惚れると苦労するぜい なにせ人造人間だからなあ……」

「は、はひっ。いえその……」

「て、てめえ、見ていやがったのがぶあつ！」  
立ち上がりざま、再び頭突き（マン・ホーム、日本州・大阪区で言うところの「パチキ」）を喰らわされ、またも悶絶する暁。

- 人造人間

それはまだ暁がミドルスクールの低学年だった頃、彼はなぜか自分が「人造人間」だと思い込み、母親や兄の新太、幼馴染のウツディヤアルをも巻き込んで、毎回、大騒ぎを引き起こしていたのだ。

もちろん「人造人間」 - そんなこたあ、これっぽちも、ない！

「お袋にはオイラから伝えといてやるよ。お前にはもつたいないくらいの いい人見付けたってな」

その言葉に灯里は思い出す。

その、まるで姉のように若く見える、暁のお母様のことを… 歓迎してくれるかな？

「いや、ちよつと待つぐあああ！」

立ち上がるうとする暁に、またまた、兄の鉄拳が炸裂する。

「じゃあ、お嬢ちゃん。アホな弟をよろしく頼むわあ。それにべ

っぴんのウンディーネさん……」

「蒼羽だ」

「うん？」

「私の名前は、蒼羽・R・モチヅキだ。 出雲新太社長」

蒼羽が、ふふん - と笑いながら言う。

「蒼羽さんか…いい名前だ。今度会ったら、お茶でも、おごらせ  
てくれ」

「ああ、機会があれば…な」

蒼羽と新太は、お互い顔を見合わせて微笑を交す。

それから新太は、振り返らず、夜の街へと消えていった。

蒼羽は、微笑みながら、その後姿を見送る。

灯里は訳も分からず、ただ「ほへ？」っと、そんな二人を交互に見  
やっていた。

「蒼羽さん。灯里ちゃん、どうでした？」

あゆみがやって来て訊ねる。

「ああ、そうだ」

蒼羽が思い出したように、手を叩く。

「灯里ちゃん。君とのトラゲットを希望するシングル達は何人か  
居るんだ。また一緒に漕いでやってくれないか？」

「は、はひ。分かりました、すぐに行きます。すみません、暁  
さん。私、またちょっと行ってきます」

暁を介抱していた灯里が、そう言って、その場を離れる。

「すまないなあ…野暮で」

蒼羽はそう言つと、暁の背中を一発、ドヤしつけた。暁がまた情  
けない声を上げる。

「うふふ。ホント。蒼羽さんは昔から豪快なんだから……」  
「ふわあっ?」

その声に、今度は蒼羽が情けない声を上げる番だった。

絶大の意思の力でもって、ゆっくりと振り返る蒼羽の、その視線の先には -

「こんばんわ。蒼羽さん」

彼女の笑顔があった。

「ああ……」

アンジェリアがタメ息とともにつぶやく。

「どうかしましたか?」

アトラが訊ねる。

アンジェリアは、強張った表情で、ツアー・コンダクターらしい女性の前に立つ、蒼羽を見やりながら言った。

「いや、蒼羽も変わったなあってます。いや昔にもどったと言っべきか。何があったか知らないが、あいつ、ひとつ器が大きくなった感じた。

もっとも……」

「もっとも?」

「前の『ツンケン』なあいつも面白かったケドな……」

「アンジェリアさん……」

アトラは苦笑するしかない。

「ところで」  
アンジェリアは、さっきの表情はどこへやらで、「彼女」を嬉しそうに抱きしめている蒼羽を見やりながら言った。

「あの子は誰だい？」

「あの子は……」

アトラもやはり、笑い合うふたりを見ながら答えた。

「彼女が蒼羽さんを変えた理由です」

「んん？」

アトラは語り始める。

「あの子は、元オレンジ・ぷらねっとのウンディーネで…あの、アンジェリアさんは覚えていませんか？」

何年前かに、舵の故障したヴァレット（水上バス）が、クルーズ中のゴンドラに突っ込んだって事件のこと……」

「確かウンディーネも、お客様も何人が怪我をして、しかも書類の不備でもって、その事件をゴンドラ協会が把握したのが、

ずいぶん後になってからだった…ってヤツかな？」

「ええ……」

アトラは少し目を伏せ、辛そうに言った。

「彼女が、そのウンディーネなんです」

「そうか…彼女がグランマ達の武勇伝の……」

「武勇伝？」

藍華が訊ねる。

「なんですか、それ？」

「ああ…えっと」

アンジェリアが、うろたえたようにグランマ達を見る。

グランマは、相変わらずの笑顔で。

明日香は、困ったようなしかめっ面で。

アン寮長は、泰然とした表情で。

それぞれ、アンジェリアを見ていた。

「ま、いつか。自分のことは、はしよれば…」

「あの事件の結末は知ってるかい？」

アンジェリアがみんなに訊ねる。

「はい。確か彼女は退職させられ、二度とウンディーネには、なれなかったと……」

藍華が苦いものでも吐き出すかのように言う。

アテナ達、オレンジ・ぷらねっとのウンディーネ達が、うなずく。

「あっ でも今、彼女はマン・ホームの旅行会社でゴンドラ・クルーズのツアーコンダクターになったんです。

だから今ではこうして、蒼羽さんと……」

心の底から、仲良く笑いあっている蒼羽と彼女を見ながら、アトラは微笑む。

「どうしてそうなったか、知ってる？」

「どうして？」

「どうゆうことですか？ アンジェリアさん」

「考えてもみて「らん？」」

アンジェリアは、ちよつといぢわるな顔になった。

「水先案内店を退職した…させられた元ウンディーネ。 そんな子が、たとえマンホームの旅行会社といえども、

アクア専門のツアコンに再就職できると思うかい？ それもゴンドラ・クルーズのツアコンなんて……」

「あつ」

「そういえば……」

「会社やゴンドラ協会が許さない…ですか？」

「ああ。 実際、ゴンドラ協会では彼女の永久追放…ネオ・ヴェネツィアへの立ち入り禁止。 って、審判をくだしていた。

たとえそれが、一般人の身分としてもだ」

「そんなつ」

「そこまでつ」

「ひどい！」

みんなが、嬉しそうにじゃれ合っている、蒼羽と彼女に改めて視線を投げかけながら絶句する。

「で、それをひっくり返したのが、グランマ達だ」  
アンジェリアが実に楽しそうに笑った。

「グランマが……」

「正確には、グランマ。 明日香さん。 アンさん。 そしてアレサ女史」

「アレサ部長が？」

「ああ。 もともとコトの発端は、あいつだ」

「発端……」

「あのとき……」

アンジェリアは夜空を見上げる。



「誰よりも深く傷ついていたのは蒼羽だ。　だけど、それと同じ位…いや、それ以上に深く傷ついていたのは、アレサだ」

「傷つく……」

「ああ、彼女がどれだけウンディーネを…オレンジ・ぷらねっとだげじゃないぜ、ネオ・ヴェネツィアすべてのウンディーネだ。」

。を、大事に思っているかは……みな知ってるな？」

灯里や藍華、のみならず、晃やアリシアまでもが、うなづく。

「その通り。だからアレサは行動を起こした」

「行動？」

「どんなですか？」

「もしかして、ゴンドラ協会に、でっかい殴りこみ…なんて」

「あはははは」

アリスのそのセリフに、アンジェリアが笑い声を上げる。

「そ、そうですね。　アレサ部長が、いくら何でもそんなことを

……」

「正解」

アンジェリアは、きつぱりと言い切った。

「『『『ええええええええええ！？』『『『『」

驚愕の大合唱が巻き起こる。

「いやいや。彼女の名誉のために言っておくが、決してヤツパや、チヤカや、シャベルを持って、カチコミかけた訳じゃないぞお」

……いやいや

ヤツパ（長ドス）　チヤカ（拳銃）　シャベル（でかいスコップ）  
そしてカチコミ（殴りこみ）　って……

なぜにそんな「専門用語」を…アンジェリアさん？

「彼女は大人サ…そして策士でもある」

「策士……」

「だからこそ、オトナのケンカをした」

「大人の喧嘩……」

「アレサはまず、アン女史に通じて、グランマや明日香さんに話をつける、一緒にゴンドラ協会へと乗り込んで来たんだ」

「ご…いえ、四人そろって……」

「ああ。『仁将』のグランマ。『知将』の明日香さん。『猛将』のアン女史。そして『策士』のアレサ。まるで『三国志』だな」

「はあ……」

「そこで優しく、穏やかに、大人の振る舞いでもって、ゴンドラ協会の理事長…今のビスマルク氏じゃない。その前の理事長だ。

偉そうに融通が利かず、自分の決定に従わせることが、常に最上の選択…と考えているような奴……人だった」

「アンジェリアさん……」

その言い草に、苦笑を浮かべる一同。



「そんな脱会だなんて…いえ、あの…出来るんですか？」

「うん？ なぜ？」

「いえ、なぜって…協会を脱会するってことは、ウンディーネ…水先案内業界にもいられないってことで…」

「ああ。そうだね」

「いや、そうだねって、そんな軽く……」

「軽いことよ」

明日香が微笑みとともに言う。

「たかだか自分がウンディーネでいられなくなる事なんて、自分達の後輩が悲しむことに比べれば、羽毛のごとく軽いものだよ……」

「明日香さん……」

「私達のことを、先輩って慕ってくれる後輩達の…家族のためなら……ね」

「アン寮長……」

「ほっ・ほっ・ほっ。 ホント、そんなたいしたことじゃないのよ」

「グランマ……」

「ええっと、つまり……」

藍華が額を指でもみながら、唸るように言った。

「グランマやアレサさん達は、自分達の脱会をチラつかせながら、前・理事長に譲歩を迫ったってことですか？

って、それ脅迫じゃないですか！」

そんな叫びにも、グランマ達は無言で微笑むばかり……

・そりゃ、絶大なる人気を誇るグランマや、その引退式を協会が仕切るほどの業績ある明日香さん。 比類なき人望を集めるアン寮長さん。

そして、新進気鋭の「第三の波」 - と言われるほどの改革を成し

遂げた、アレサさん。

この四人に「脱会」の二文字 - しかも協会とウンディーネの処遇を巡つての確執が原因 - を、ちらつかせられちゃあ

前・理事長でなくても、折れざるを得ないわね……  
つて…いや、いやいやいや

「そのどことが大人の喧嘩なんですかあ!？」 そのまんま、わがままな子供の喧嘩ですよん!！」

「藍華。言葉使いが変だぞ」  
アンジェリアが笑いとばした。

「あの。質問があります」

「ん? なんだい。アトラくん」

「アンジェリアさんは、どうしてそんなに詳しいんですか?」

「え?」

「協会長への直談判。それは当然、室内の…密室での秘密の話し合ひだったハズです。今までそんな話を誰も知らなかった。

- と、ゆう事実をもってしても、それは証明されます。それに

……」

「それに?」

「さっき、アンジェリアさんは言いました。乗り込んで『来た』  
つて…… それはつまり、その場にアンジェリアさんが居て

そこにアレサ部長達が出て来た - つて意味ではないんですか?」

「うわっ。スルど!」

「その通り。さすがは我がオレンジ・ぷらねっとの誇る、名探偵  
さんね」

「アレサ部長？」

振り向けば、いつの間にかアレサ・カニングムが、アンジェリアの後ろに立っていた。

「ほんとに、アンジェリアは余計な話しを……」

「はははは」

「笑い事じゃないわよ。若い子達に聞かせていい話しと、そうでもない話しとくらい、判断つくでしょ？ アン寮長達もそうです。」

ちゃんと止めてください。こんな話、なんの自慢にもならない」

「なあ、アレサ」

「ん？ なによ。アンジェリア」

「照れてる？」

アレサがものも言わずに、手に持った書類の束で、ポン！ - と、アンジェリアの頭をはたいた。

けれど、みな、そんなアレサの頬が、ほんのりと紅く染まるのを見逃さなかった。

「お二人、仲いいんですね」

杏がアン寮長に問う。

「ええ。あの二人、会社は違うけど、同期でシングルの時はよく二人でトラゲットしてたからね」

「あ、じゃあ……」

「まるで、あなた達と、あゆみさんみたいね。ふふふ」

こんなところにも『未来への航跡』が……

杏は嬉しくなった。

「あの、さっきの話なんですけど……」  
アトラが、そんな「じゃれ合う」アレサとアンジェリアに改めて訊ねる。

「あ、いやそれはもういいよ」

「なに言ってるの、アンジェリア。あなただけ知らんぷりするの  
は、禁止よー!」

「おひおひ……」

「実は私達には先客がいたの」

「先客?」

ぼりぼりと、頬をかくアンジェリカの肩に手を置きながら、アレサは唄うように語りだした。

「ええ。あの日、私達が理事長室に入っていくと、そこにはすでに  
彼女がいてね」

「アンジェリアさんが、先に居たんですか?」

「ええ。私達が行動を起こすより、ずっと早かったわ。さすがは、  
アンジェリアね」

「いやあ、それは別に……その当時から私はゴンドラ協会の人間だっ  
たし……」

照れるアンジェリア。

「アンジェリアさんも、やっぱり、説得してらしたんですか?」

「……ええ、説得といえば、説得かしら」

アレサはとても楽しそうに、笑いながら言った。

「左手に辞表を持ち、右手で前・理事長のネクタイを引っ張りなが  
ら」言うこと聞かなきゃ、辞表を出して、洗いざらいぶち撒けるぞ

『!』

って叫んでるのが、説得って言うのならね  
「うわあ……………」

もっともストレートなカシオド（脅迫）である。

「私達、先輩のみなさんに守られてるんですね」  
灯里がポツリと言った。

「私達は、こんなにも、知らぬ間に、たくさんの先輩達に守られて  
て。

私達は、こんなにも、尊敬できる先輩達に助けられ…育てられて  
て。

いつでも、どこでも、どんな時でも。 そんな先輩達に……  
だから…だから私は……

私達は、こんなにも、毎日、楽しくゴンドラを漕ぐことが出来る  
んですね。

えへへ。 嬉しい」

照れたように笑う灯里。

こんなときに言うセリフは、ただ、ひとつだけだ。  
せーのおおおおお…

「『恥ずかしいセリフ、禁止iiiiiiiiiiii！』」

「『』」



全員が一斉に叫ぶ。

「ええ〜え」

これもお約束の灯里の嘆きの声が広がった。

「グランマ！」

突然、男の子がグランマの元へと駆け込んで来た。

「あらあら。アヒトくんじゃない。お久しぶりねえ」

アヒトと呼ばれた少年は「えへへ」と、照れたように笑った。

「アヒトくんが居るとゆうことは……」

「やあ、アリシア。グランマも、お久しぶりです」

「アンナ先輩！」

アリシアが嬉しそうな声を上げた。

アンナは、元ARIA・カンパニーのプリマ・ウンディーネ。

アリシアの直接の先輩ウンディーネだった人だ。

その性格は明るく朗らか、なおかつ、さっぱりとしていて、男性ファンも多くいた。

アリシア曰く『今の私より人気があり、忙しかった人』だ。

アリシアのプリマ昇進と同時期に、ゴンドラ・クルーズの際に知り合った、ネオ・ブラーナ島の漁師、アルベルトと結婚。寿引退した。

……ちよつと、誰かにかぶる人生である。

引退後は、ネオ・ブラーナ島に移り住み、子育てと家事を両立しながら、さらに同島の名産品であるレースの職人としても働いている。アヒトは彼女の子供で、ミドルスクールの三年生。

男の子らしい「やんちゃさ」と、初対面の女性には、つい赤面してしまう「純情さ」を持った、快活な男の子だ。

「ありや、明日香さんにアンさん。それにアレサさん。こっちは三大妖精まで……」

ちよつと家族で本島に遊びに来てみれば…今日はなんだ、いったい?」

苦笑を浮かべるアンナに、アリシアが今朝からのことを簡単に説明する。

「うん。ただの代理トラゲットが、こんな大騒ぎになるなんて…ホント、この街は……」

そしてアンナは、真実を言い当てる。

「お祭り騒ぎが大好きなんだな」

・どおおおっおおおん！ ばちばちばちばち…

突然、人々の頭上で大きな音が響き渡った。

反射的に見上げる夜空に、色とりどりの大輪の花が咲いていた。とうとう花火まで上がり始めたのだ。

お祭り騒ぎは、未だに収束の兆しを見せなかった。

\*\*\*

「ねえ。グランマ、これ見てよ」

「はいはい、アヒトくん。なんですか？」

アヒトは三つの首を持ち、黄金色に輝く怪獣のぬいぐるみを、自慢気に差し出した。

「これ、かつこいいだろお？」

「あら、まあまあ。本当、かつこいいわねえ。なんて名前なの？」

「大怪獣・キングあきらドラさ！」

「まあ、とつても、いい名前ねえ」

「うん。こいつ喋るんだよっ」

アヒトが背中のスイッチを押すと、それは叫び始めた。

・すわっ すわっ すわああああああーあ！

「あらあら、素敵だわ」

微笑むグランマ。

「で、こっちはアリむっクス！」

・へへん！ と、ばかりに、今度が全身が赤い毛に覆われた、口の大きな、どんぐりまなこの怪獣の人形を見せる。

「おやまあ、頭にプロペラがついているのね。面白いわ」

「だろお？ それで、こいつも喋るんだ」

アヒトが頭のプロペラを回すと、それも叫び始める。

・でっかいいいいいいつ。 でっかいいいいいいいいつ

最後は、緑色の、とても眠たげな目と、特徴的な前歯を持った怪獣だ。

「がちゃぺんは、ここうすると声を出すんだよ！」

アヒトが言いながら、ぬいぐるみの腹を押さえると、それも叫び始めた。

・禁止いいいいいい！ 禁止いいいいいいいいつ！

「これ、全部、お父さんに買ってもらったの？」

「うん。そうだよ。 実はパパも、ここうゆつの大好きなんだ！」

「まあ、いいわねえ。 お父さんと一緒に、こんな、ぬいぐるみを楽しめるだなんて」

「うん。でも、お父さんは怪獣より、ロボットとかメカに興味があるんだあ……」

買うのもメカアカツキンとか、スーパーウキジマ・エックス1号2号3号とか、そんなのばっか……」

アヒトは、少しつまらなさそうな顔をする。

それは、父とまったく同じモノを好きになろうとする、幼い故の純粹な気持ち。 幼い故の優しい気持ち。

だからグランマ・秋乃は、言ってあげた。

「あらあら。それは素晴らしいわね」

「素晴らしい？」

秋乃は、まるで孫をみるような微笑で、アヒトに語りかけた。

「ええ。だって、それならお父さんとふたりで、楽しいことが二倍になるじゃない」

「二倍……」

「ええ、そうよ。みんな同じじゃ、つまらないものね。アヒトくんには、アヒトくんの。そしてお父さんにはお父さんの。」

それぞれに、それぞれの楽しいことがあつて、合わせて二倍……うん。もしかしたら二十倍かしらね。　　うふふふ……

ねっ、素晴らしいことだと思わない？」

「素晴らしいの、二十倍……」

「今晚わ」

アルベルトがやって来た。

「グランマ。　　お久しぶりです。　　アヒトはご迷惑をかけてませんでしたか？」

「いえいえ。　　とつても、いい子だったわよ。　　ねっ、アヒトくん」

「パパ！」

アヒトがアルベルトに抱きつく。

「ん？　　なんだ。　　アヒト」

「お家に帰ったら、一緒に遊ばー！」

アルベルトは屈み込むと、アヒトの頭を、ぐりぐり……となでながら言った。

「ああ。　　もちろん。　　なにして遊ぶ？　　フットサル、それとも野球か？」

「三大怪獣×AQUA防衛軍！」

一瞬、アルベルトはきよとんとした顔になると、訊ねるように秋乃の方を見た。

秋乃は、何も言わず、微笑みを浮かべてまま、小さくうなづく。

「よしつ、帰ったらパパの、ウキジマ・エックスTF（任務群）と、アヒトの怪獣軍団との対決だ！」

それだけで分かったのだらう、アルベルトは感謝するように秋乃へと会釈すると、アヒトを抱き上げた。

「あれま、どうしたの？ ずいぶん、楽しそうね  
アンナがやって来る。」

「うん。ママ。 パパと遊ぶと、素晴らしいが、二十倍なんだよ  
アヒトが肩ぐるまの上から、嬉しそうに叫ぶ。

「へっ？ 素晴らしいが、二十倍？」  
アンナが疑問符を浮かべながら、夫を見る。

「ちがうぞ、アヒト」

「パパ？」

「ママがいるからな」

アルベルトは破顔しながら言いきった。

「ママがいるなら、素晴らしいが、二百倍だ」

「わあっ 二百倍かあ、すごいやー！」

「ええ？ いったいなんの話しよあ。 こらあ、二人だけで分かってないで、ちゃんとママにも教えなさい！」  
怒りながらも、やがて笑いだすアンナ。

そんなママの笑顔に、アヒトもアルベルトも嬉しくなり……

『家族』の楽しげな笑い声が響く。  
秋乃は、グランマ - おばあちゃん - の笑顔でもっていつものように、ただ黙って、ただ静かに  
けれど幸せそうに -

いつまでも『家族』の笑顔をながめていた。

「はい、暁さん。これで大丈夫です」

「う、お、おおう」

「あつ、さわつちゃダメですよ。せつかく張ったんですから…」

「いや、しかし…こいつぁ、ちいっとばかり、恥ずかしくないかい？」

暁はおでこに張られた『にゃんにゃんぷう』（TVアニメの猫のスーパーヒーローのことだ！）の絆創膏を触りながらうめいた。

兄ー出雲新太の攻撃（ドリル・轟天・アタック）により、暁の額は、少々擦り切れていた。

別に、なんとゆうこともなかったのだが（舐めときや直る by 藍華）うっすらと浮かんだ血の跡を見て、急に灯里が騒ぎ出したのだ。

「そんなことより暁さんのほうが心配です。バイクンが入ったら、どうするんです？ ああ…ほっぺにも…」

暁さんの方が心配…ニヤケる暁。それが油断につながった。

「うおっ!?!」  
顔を上げれば、すぐ目の前に、灯里の顔があった。

頬の傷に、やっぱり、にゃんにゃんぷうの絆創膏を張ろうとしている、灯里。

その、暁の視線の高さには……………

目の前には、薄いピンクのルージュをつけた、灯里の艶やかな唇がっ!

小さく開いたその中から、白い歯がはつきりと分かるほどの至近距離っ!

そしてまた、優しげに、甘く囁くように薫ってくる、あの『灯里の香り』っ!

あわてて視線を下げれば、そこには制服の隙間から垣間見える、灯里の胸元がっ!

……………色は白白色? 着痩せするタイプ?  
あれ、そこで輝っているペンダントは……………

「あ、灯里い……………」

「灯里!」

「灯里先輩!」

「ほへ?」

藍華とアリスの叫び声に、思わず身を起こす灯里。

結果、灯里を抱きしめようと振り上げた手は、目標と目的を失い…

暁は再び、硬直状態へと移行して……………



「ほら、早くっ」

「ポ二男さんなんかに構ってる場合じゃありません！」

「ほえええええ？」

有無も言わず、灯里を引きずるように引っ張ってゆく、藍華とアリス。

ひとり残された暁は -

- しくしくしく

涙よ、人知れぬ涙となりて、誰に気づかれることもなく、ただ静かに、ただ孤独に、我が頬を流れ落ちてゆけ……………

両手を、宙ぶらりん - と、差し上げたまま、暁は、ただ泣いていた。

「どうしたの、藍華ちゃん、アリスちゃん」

藍華とアリスに、引きずられる連れられて来た場所は、トラゲット乗り場へと続く、運河沿いの狭いカンポのひとつだった。

大勢のネオ・ヴァネツィアの街の人々が、すでに集まり、多くの人垣ができている。

「灯里先輩、あれ、あれ、あれ！」

アリスが飛び跳ねながら、通りの向こうを指差す。

「ほへ？」

「うんっもっ。聞こえないの？」

藍華が、あきれたように言うと、人垣をかき分け、灯里を前の方に押し出した。

「ほら、よく聞きなさい」

「ほへえ？」

なにも聞こえない。

ただ街の喧騒だけが…いえ、待って。 あれは…この音は…太鼓？  
タンバリン？

…まさか！？

やがて、少し調子はずれのラッパの音も聞こえてくる。 もう間違いない。

闇の中から闇が現れる。

通りの向こう。 夜の闇をまとった路地から、それは、ぼんやりと浮かびあがってくる。

白い顔

黒い眼窩

まるで泣いているような頬の文様

それは「バウータ」と呼ばれる仮面。

古来、マン・ホームのヴェネツィアの街で、夜な夜な行われていた「マスカレード」と称される、仮面舞踏会において、お忍びで参加する「高貴な者達」の身分が分からぬように…と、かぶり始められた、変装用の道具。

それが今、ゆっくりと近づいてくる。

けれどそれは、人が被るには、あまりに大きく、そして高い位置にある。

まるでバウータだけが宙に浮かんで、泳いでくるかのよう……

けれどそれは錯覚。

そのバウータを被った人物は、夜の闇よりもなを暗い、黒いローブを纏っていたのだ。

見ればその周りには、同じような白いバウータと、黒いローブを纏った、小柄なモノタチが、さまざまな楽器を手に、踊りまわっている。

「なんで、こんな所にカサノヴァが……まさか？」

あゆみがつぶやく。

カサノヴァは、ここネオ・ヴェネツィアで毎年行なわれる、春の到来を祝うお祭り「カーニバル」その時にだけ現れる、正体不明の人物。

- 100年以上も同じ人物が勤めている。

などといった噂が囁かれているほどの、正体不明の人物。

人とは思えない大きな体。

白く特徴的な文様の描かれたバウータと真つ黒なローブで姿を隠し、子供より小さな、お供を連れ、毎年現れる、正体不明の謎の人物。

それが今、時期も場所も全然違う、今の、このトラゲット乗り場に姿を現わしたのだ。

カサノヴァはゆっくりと灯里に近づいてくる。

やがて、その前に立ち止まると、どこまでも黒い - なにもものにも

染まらず、なにものにも影響されず、なにものにも溶け込んでいく  
- 黒。

その黒い眼窩で、灯里を静かに見下ろした。

涙がこぼれる。

知らず知らずのうちに、涙があふれ、零れ落ちてゆく。

「もう、会えないと思っていました」

小さく、ほんの小さく、誰にも聞こえないほど小さく、灯里はつぶやく。

灯里は胸元からペンダントを取り出すと、それを捧げるかのようにカサノヴァに差し出した。

カサノヴァは何も言わず、身動きひとつせず、ただじっと灯里を見下ろしている。

灯里は、ペンダントを包み込むように両手で握りしめると、その手を合わせ、まるで神に祈りを捧げるシスター（修道女）のように頭をたれ、カサノヴァの前にひざまづいた。

それはまるで、一枚の「アイコン（敬拝画）」のようだ。

どれくらいの時がたったのだろうか。

永遠なる刹那。

- ぼんっ

と、暖かくて軟らかいものが、灯里の頭の上に乗せられた。

「あ……」

それはカサノヴァの手。

暖かくて、軟らかい、まるで肉球のような、カサノヴァの手。

「はわわわわわわ……」

ぐりぐり・と、カサノヴァは、灯里の頭を撫でくり回す。

それはまるで、父親が愛しい我が子にするような、乱暴で、けれど優しい仕草……

・っいっ

と、カサノヴァは振り返り、もと来た路地へと戻ってゆく。

何事もなかったかのように、再び、暗い路地へと消えてゆく。

お供のモノ達も、相変わらずどこか調子はずれの音楽を奏でながら、踊りながら消えてゆく。

後にはただ再び、夜の闇が広がるばかり……

灯里はその後姿を、いつまでも見送っていた。

「よかったな。灯里ちゃん」

誰かが、肩を叩いた。

ハッとして振り返ると、そこには、あゆみの笑顔があった。

「あゆみさん……」

「こんな時期に、こんな場所で、カサノヴァの姿を見れるなんて。

ウチらはラッキーだ」

あゆみが、その独特の笑顔を浮かべ言う。

「はひ…私、私も、とっても幸せです」  
本当に幸せそうに、灯里も笑顔で答える。

「ああ。 そう思える灯里ちゃんだからこそ、彼は来てくれたんだよ」

「はひ？ 彼？ あゆみさん、あの方のこと、ご存知なんですか？」  
その灯里の問いかけに

「ん？ さあ、どうでしょう」

あゆみは、はぐらかすように微笑んだ。

実はカサノヴァが去り行く、そのとき -

ほんの瞬間、彼の視線と、あゆみの視線が絡み合った。

あゆみは、ウインクとともに笑顔を向け、それに答えるようにカサノヴァは、ほとんど分らないくらいに、肩を上下させた。

きつと笑ってくれたのだろう。

あゆみには、それだけで充分だった。

「ぶいにゅんぐん」

いつの間にか、目の前にはアリア社長が立っていた。 ヒメ社長も、まあ社長もいる。

「アリア社長おおお！」

「ぶいぎゃあああ？」

灯里が、がばちょ！ - と、ばかりにアリア社長を抱きしめた。

「アリア社長お。 ありがとうございましたあああ！…！」

アリア社長を抱きしめたまま、号泣する灯里。

「ぶいぶいい」  
アリア社長は、そんな灯里の額を、カサノヴァと同じように優しく  
なでであげた。

「アイちゃんにも見せてあげたかったなあ……」

「アイちゃん？」

灯里のつぶやきに、あゆみが聞き返す。

灯里は、アイのこと。 今日あったこと、などを、あゆみに話して  
聞かせた。

朝からのドタバタで、アイとあゆみは、すれ違ったまま会えなかつ  
たのだ。

「アイちゃんか……うん、まあ、きっといつか会えるだろ。 な、

アリア社長？」

あゆみの問いかけにアリア社長は、何も言わず、ただ黙って、その  
蒼い瞳で、あゆみを見返した。

Essere continua

t o ・ つ じ ぐ

『Traghetti PART・9』  
L'essere della luce delle stelle  
le) 星空のゴンドラ [ la・fine





次回、ようやく完結します。

いえ、まだARIA自体は投稿させていただきませんが…

こんなぐだぐだなお話に、タメ息をつきながらもお付き合いして  
いただければ、これに勝る幸せは、ありません。

それでは、しばらくのお付き合い、ありがとうございました。

Tragetti PART - 10

」

Edi ritorno

PART - 10をお届けします。

ようやく最終回です。

ようやく大団円を迎えることができます。

…できてますよね？(鹿馬)

-ぞくつ

突然、あゆみの背中が震える。

冷たいモノが走る。 と、同時に、熱い汗が吹き出し、こぼれ落ちてゆく。

「まあっ」「にゃあんんっ」「ぷいにゅっ」

社長ズが、まるで灯里とあゆみを守るように、取り囲んだ。

あゆみは見た。

その『禍禍しき』モノを。

笑いさざめく人々の中に、なんの違和感もなく溶け込んでいる、その女性を。

喪服のような漆黒のドレスを身に纏い、頭からは顔を隠すような、黒いヴェールのついた帽子をかぶっている、その女性を。

-笑っている

『彼女』は声もたてず、ただ唇だけで笑っている、

けれど、あゆみは知っていた。

『彼女』には、顔などない - と、ゆうつことを……

けれど、あゆみは見た。

『彼女』が、真つ赤な唇を歪め、妖艶に笑つさまを……

『彼女』は、何もせず、笑いながら、ただ立たずんでいた。

Ed i o r i t o r n o a i m a r e [ Tr a g e t t i P A R T - 1 0 ]

「あ……」

すぐ横にいた灯里が一步、前に出る。

「灯里ちゃん!？」

「ぶいにゆ!？」

灯里は、そんなあゆみとARIA社長の声など、まったく耳に入らないように、また一步、歩みを進める。

その瞳は、何も見えていない。

その瞳は、何も映していない。

ただ彼女の方へと、よろよろと近づいてゆく。

思わず、あゆみは、そんな灯里を押しとどめ、引き戻そうとする。

けれど、

「くっ……」

足が動かない。身動きできない。まるで見えないロープにからめとられたかのように、指いっぱいりとて動かせない。

それは社長ズ達も同じのようだ。ただ何かに抵抗するように、身をよじり呻いている。

「灯里ちゃんっ」

「くそっ。『彼女』はまだ、灯里ちゃんを……」

また一步。

灯里は、その女性・

『彼女』に、まるで引き寄せられるかのように、近づいてゆく。

もし『彼女』に獲り込まれてしまえば、灯里は二度と帰ってこれなくなる！

「くそ、だめだ。」

あゆみは唇を噛み締める。

きつと『彼』に会ってしまったことで、一時的にしる、灯里とAQ UAの結びつきが強くなってしまったのだ。

ペンダントがあるから大丈夫 - と、油断していた。

あゆみはもう一度、唇を噛み締める。口の中に苦いモノが広がってゆく。

不思議なことに、まわりの人々は、そんな二人にまるで気がついていない。

ただ笑いさざめき、楽しげに「祭り」を楽しんでいる。  
藍華お嬢も、晃さんも、アリスちゃんも…アリスアさんですら、何も気づかず、グランマ達と笑い合っている。

・せめて、アイちゃんって子がいれば……

あゆみは後悔のホゾを噛む。

また一步。灯里は『彼女』に引き寄せられる。あゆみは絶望感に押しつぶされていた。だが――

来た

また

来てくれた！

「ひっ」

『彼女』が小さく悲鳴を上げた。

『彼』が立っている。

・じすっ

あわてて振り返る『彼女』に『彼』の『パチキ』が炸裂する。

「げふうふううっ」

顔を押しさえて、へたり込む『彼女』

・ああ、あれは痛い……

思わず、あゆみは独り言ちる。

『彼は、バウータの仮面のまま『彼女』に頭突きを喰らわせたのだ。』

ん？ 顔もないのに、どうやって？

「ぶいにゆう！」

アリア社長が叫ぶ。体が動く。束縛が取れた！

「灯里ちゃん！」

あゆみは素早く駆け寄ると、灯里の背中を思いつきり、平手で叩いた。

「ばしいいいいいっ！」

「はひいいいいい！」

小気味よい音とともに、灯里がよろめき悲鳴を上げる。

「あ、あゆみさん、急に何するんですかあ！？」

背中を押さえながら、涙ぐむ灯里。

「……ああ、よかった」

その表情に、あゆみは安堵のタメ息をついた。灯里の瞳は輝きを取り戻している。もう大丈夫だ。

「よかった……？」

灯里が涙目で問いかけてくる。ああ、やばい。誤魔化せ！

「いやあ、あの……そ、そう。蚊だ」

あゆみは思いつくまま、嘘をつく。

「蚊？」

「あ、ああ、蚊だ。その……灯里ちゃんの背中に、でっかい蚊がいてね」

「ほへえ？ でっかい蚊？ こんな時期に……ですか？ それに、そんなに強く……はひ？ アリア社長？」

「ぶいにゆわああああん」

アリア社長が泣きながら抱きついてくる。 ばかりか、ヒメ社長や、まあ社長までが、灯里の抱きついてくる。

「はへえ？ み、みんないたい、どうしたんですか？」

頭の上に、まあ社長。 肩の上に、ヒメ社長。 そして腕の中には、アリア社長。

社長ズに囲まれて、灯里の困惑は、ますます増すばかり……

・何にも覚えてないのか……よかった。

あゆみは、もう一度、安堵のタメ息をついた。

『彼女』の影響は、もうすっかり取払われている。 この後？ それは『彼』がなんとかしてくれるだろう。

あゆみは改めて『彼』と『彼女』を見やった。

今や『彼女』は『彼』の蹴りをくらい、悲鳴を上げながら転げ回っていた。

・ああ……『ケット・シー』が『噂の君』を『ケットばシ』てる……  
……う”ヴあああああ！？



不意に脳裏に浮かんだ、その、あまりなアルくんギャグに、今度は、あゆみが頭を抱え、転げ回る番だった。

こうして『禍禍しきモノ』は『AQUAの心』に連れられて、闇の中に帰っていった。

街は何事もなかったように、楽しき喧騒に包まれている。

けれど、止まない雨。 明けない夜。 繰り返す学園祭初日。 終わらない夏休み。

それらが有り得ないように、やがて祭りも終焉のときを迎えるのだ。 たとえそれが、誰も望まぬコトであるとしても……

「おやおや、なんですかな、この騒ぎは……」

「アウグスト理事長……」

藍華が、かすれた声で答えた。

終わりが始まる -

お祭り騒ぎの喧騒が広がる中。

現・ゴンドラ協会理事長の、アウグスト・V・ビスマルクと、同じく、ゴンドラ協会の首席理事である、アイザック・セルダンが、ひとりのプリマ・ウンディーネを伴って、悠然と立っていた。

「ダメですねえ、藍華さん」

アウグストが困ったように言う。

「は、はい……」

藍華は今日のことと叱責されるのだと、身を硬くしながら返事をする。

現・協会理事長は、けれど、のんびりと言った。

「私のことは、アウグストではなく、ビスマルクって呼んでください。……って、お願いしたでしょ？」

「は？ はあ……まあ……」

その、あまりな予想外な言葉に、混乱する藍華。

それはアウグストが、前・理事長に代わって就任した際に、書面でもってまで依頼した、不思議な要求だった。

「あの……なぜ、名前・アウグスト、ではなく、姓・ビスマルク、で呼ぶんですか？」

だから思わず、藍華は聞き返してしまっていた。

「だって、その方がカッコいいでしょ」

「はっ？」

その返事もまた、予想外だった。

「アウグストって呼ばれるより、ビスマルクって呼ばれた方が、昔の - シュラハトシッフ (Schlachiff) - 『戦艦』みたいで

かつこよくね?」

「あなたねえ……」

そんなアウグスト…ビスマルク協会理事長に、アイザック協会首席理事があきれたように言った。

「なんでゴンドラ協会の理事長が戦艦名前にこだわるんです? しかもそれを言うなら『鉄血宰相』と呼ばれた、政治家の方でしょ? それに『アウグスト』だって、昔のローマ帝国の皇帝の名前じゃないですか」

「政治家や皇帝より、戦艦の方が、かつこいい」

「言い切るか? ふつう!」

「まあまあ、ホント、君は冗談が通じないんだから……」

「あなたが冗談、通じ過ぎなんです!」

「あなたが蒼羽さんですか?」

協会上層部ふたりのバカ話しを無視して、プリマのウンディーネが蒼羽に話かけてきた。

「はい、私が蒼羽ですが……」

「私は、アロッコ。『MAGA』社の責任者です。今日はうちの茜が、お世話になりました」

そのウンディーネは、蒼羽に深深と頭を下げると、しかし芯の通っ

た、はつきりとした口調で礼を言った。

「えっ？ あなたが『バツジエ・オ』・アロッコ……あつ、いや失礼」

蒼羽もあわてて頭を下げる。私ってば、なんてことを……

「いえ、お気になさらないでください。いつものことですから……それより、本当に今日は、ご迷惑をおかけしました」  
アロッコは、まるで気にする風もなく、笑顔で蒼羽に感謝した。

「いや、私は当然のことをしたまでで……それに、こんなに楽しく……いやいや。で、彼女の様子はどうですか？」

「おかげさまで今はぐっすり。ちょっと最近、無理をしてましたから……気がつかなかった、私の責任です」

「いや、それは……」

「いずれまた、彼女を連れて、ご挨拶に伺います。今日のところは、とりあえず……ありがとございました」  
もう一度、頭をさげると、アロッコは「それでは」と離れてゆく。

・彼女が『バツジエーオ』・アロッコかあ……

その背中を、蒼羽は複雑な思いで見送った。

「ビスマルク理事長。アイザック理事。今日のことは、私に責任があります！」

突然、晃が叫んだ。

「晃？」

「今日、このトラゲットが、数々の規則を破り、このような事態を引き起こした、その全責任は、私、晃・E・フェラーリにあります」

「晃、いったい何を……はっ!!」

不意に蒼羽は悟った。

くそつ。

そうはさせるか！

「いえ、この責任は、私、蒼羽・R・モチツキにあります。まず、私が規則を破りましたっ」

だから叫んだ。 晃のせいにしてたまるか！

「違うぞ、蒼羽。 あれは緊急避難的処置だ。 その後、私がトラゲットをする - などと言い出さなければ、こんなことには……」

けれど、晃も叫ぶ。 晃も蒼羽のせいにしたくないのだ。

「いや、違う。 晃の方が間違いだ。 理事長。 先に規則を破ったのは私の方です。 私に責任があります。 晃はそれに巻き込まれただけで……」

「いや。 違う。 蒼羽の方が間違いだ。 理事長。 私は自分から言い出しました。 私に責任があります。 蒼羽はそれに押し切られただけで……」

「……………」

待ってください！ 「……………」

若い声が重なった。

「今回のことは、もともと、私のでっかい我がままから始まりました。だから責任は私にあります」  
アリスが叫ぶ。

「今回のことは、それを認識していながら止めなかった、私にありません。だから責任は私にもありません」  
藍華が叫ぶ。

「私も素敵さに負けて、規則を破りました。 すいません。 だから責任は私にもありません」  
灯里が叫ぶ。

「あらあら。 なら私も引退した身なのにゴンドラを漕ぎました。責任があります」  
アリシアが叫ぶ。 「なぜか嬉しそうに言う。

「あの〜私も、楽しさにまぎれて、いっぱい規則違反しちゃいましたあ。 責任あります。 ごめんなさい」  
アテナが叫ぶ。 「ばず、のんびりと謝る。

「『』 いえ、今回のことは、そもそも私達、トラゲット要員の… シングルの問題です。 責任は私達にあります 『』  
あゆみ、アトラ、杏が、異口同音に叫ぶ。

「『』 うっさい！ お前等、黙れっ シバくぞー！！ 『』

晃と蒼羽の怒鳴り声が、息もぴったりに響く。

「ビスマルク理事長。これは私が強制してやったことです。アリシアやアテナには関係ない。ですから。」

「アイザック主席理事。これは若い奴らには、なんの責任もありません。彼女達は、私に従っただけです。ですから。」

「『こいつらには、何の責任もないっつ！』」

晃と蒼羽の声が、またも重なる。

「ほっ・ほっ・ほっ。それなら一番の責任は、私達ね。罪深いわ……」

グランマが笑った。

その言葉に、明日香、アン・ウエンリー、アンジェリア、アレサといった面々が、うなづく。

「グランマ、何をおっしゃってるんですか？ そんな言い方がかりを……」

「そうです。アレサ部長。あなたまで何、笑ってるんです？」  
あわてて、言い募る、晃と蒼羽。  
けれど……

「いえ、責任は、私達……このネオ・ヴェネツア、全ての街の人に  
もあります!」  
アン・シオラが叫ぶ。

いつの間にか、その後ろには、この街の住人達。そこには、アンは  
もとより、暁もアルもウツディも、アンナー家、アマランタ。  
近所の店のおかみや亭主、屋台の売り子、パフォーマーや、楽団員。  
そしてアリア社長達、アクア猫達まで。  
今の今まで、トラゲットを楽しみ、酔いしれていた、そのすべての  
『モノたち』集まっていた。

「ウンディーネさん達に責任があるってんなら、それを分かかって  
楽しんでた、俺様達にも責任はあるぜっ」  
暁が腰に手を添え、エラそうに言い放つ。

「はい。もちろん、僕達、全員の責任ですね」

「アルくん……」  
笑顔で言うアルに、藍華が、うるうる瞳を濡らす。

「そうなのだ。　ウンディーネさん達だけのせいじゃ、決してない  
のだ」

「ムっくん……」  
アリスもまた、そんなウツディのセリフに言葉を詰まらせる。

「ああ。　その通り!」

「暁さん……」

灯里も、感極まった顔で、暁を見やる。

暁は、そんな灯里に笑顔で答えると、きっぱりと言い切った。



「そんならきつちりと、俺様達、全員で、その責任とやらを、一緒に受けてやるっ。なあ、みんな！」

「はい」

「ええ」

「もちろん」

「ぷいぷい」「にゃうん」「まああ」

「おうっっ」

「だあー」

その言葉に、その場に居た、すべてのモノタチが、力強く返事を返す。

「…へたれのくせに……」

「ああ…へたれなのに……」

晃と蒼羽が、少し湿った声を出す。瞳がつつすらと揺れていた。

「だからこそ」

「ビスマルク理事長」「アイザック主席理事」  
ふたりは交互に叫ぶ。

「だからこそ、みんなに迷惑は」

「今回のトラゲットの」「この大騒ぎの原因の」

・かけられない!!

そして最後はやっぱり、ふたりは同時に叫んだ。

「『責任は私にあります!!!』」

「あのさ、アイザック首席理事」

「なんです、ビスマルク・ゴンドラ協会理事長」

「シユヴァルツ・ランツェリッター・フリート。フォーラン！」

「はあ? なに言ってるんです?」

「うん。そうなんだ」

「は?」

「私はこの人達が、何を言ってるか分からないんだ」

「……………」

ビスマルクは、彼を取り囲む人々：ウンディーネ、街の人々、そのすべての『モノたち』を見回しながら、静かに言った。

「みなさんは先程から『責任』『責任』と、何度もおっしゃっておられますが、それはいつたい、何のコトですかな?」

「……………」  
へ? 「……………」

呆ける人々に構わず、ビスマルクは、穏やかな声で話し続ける。

「なにか、誰かが『責任』を取らなければならないようなことでもあつたんですか？」

「……いや……いやいやいや……トラゲットの……」

「で、ですから……プリマの……お祭り騒ぎの……」

「晃さん、蒼羽さん」

「『は、はいっ』」

大柄なビスマルクが、ほんの少し腰を曲げ、ふたりのウンディーネに語りかける。

その様は、少しユーモラスで人々の笑いを誘った。

「そんなことより……」

「そ、そんなことお？」

啞然とするふたりに構わず、ビスマルクは、いつもと変わらぬ、くだけた口調で訊ねた。

「まだ、おふたりのトラゲットには乗れますかな？」

「……………」

「ほっ・ほっ・ほっ。 どうしたのふたりとも」

黙り込んでしまった晃と蒼羽に代わって、グランマが相好を崩す。

「ほらほら、お客さまだよ」

アンジェリアが笑みを浮かべる。

「なにしてるの、晃。お客さまを待たせるのは良くないわ」  
明日香が笑う。

「蒼羽。早く、お客さまを乗せてあげなさい」  
アン寮長が微笑む。

「今日、最後のトラゲットよ。がんばりなさい」  
アレサが 頬を緩める。

「…あ」「あの…」  
「ねえ、晃さん、蒼羽さん」

ビスマルクは、ふたりの言葉を遮るように、静かに言葉を紡いだ。

「私達は、立場が違えど、ひとつの家族なんです」  
「あ……」

「ですから、なんの遠慮もいりません」  
それはまるで、父親が、愛しい我が子に対するときのような、そんな穏やかで優しい話し方だ。

「みなさんが楽しいと思うことは、私も楽しい。だから楽しいこ

とは、家族みんなで分かち合う。  
ただ、それだけのことなんです」

静寂に包まれる。

晃も蒼羽も。

ウンディーネ達も。

暁や、アンや、街の人達も。

しわぶきひとつせず、ただ黙って、ビスマルクのその言葉を聞いていた。

- ぱちぱちぱち

小さな拍手の音がする。

人々がその音の方向に目をやれば、ひとりのプリマ・ウンディーネが……

青い制服を着たウンディーネが、感極まったかのように、顔を真っ赤に染め、「はわはわはわ」と、涙をこぼしながら拍手をしていた。

一瞬の間を置いて、花柄のヘアピンをショートの髪に付けた、赤い服のウンディーネと

すぐその横に立つ、小柄な子供のようなオレンジ色の服のウンディーネが、拍手を合わせはじめ。

そして -

歡喜の音が爆発する。

ネオ・ヴェネツィアを……いや、アクア全体を揺るがすような、喜びの声と、拍手の音が地に満ちる。

誰も彼もが、男も女も関係なく、肩を抱き、握手を交わし、歡声をあげている。

・ああ……まるでみんな、本当の家族のようだ

蒼羽の胸に熱いものがこみ上げてくる。

見れば、晃も同じ気持ちなのか、夜空を見上げ、さかんに瞬きを繰り返していた。

「アレサ部長……」

「ん、なに？ アトラ」

ビスマルクと、アイザックを載せ、今日最後のトラゲットが行く。

晃と蒼羽の操舵で。

ふたりの息のあった、そのゴンドラは、その名の通り、まるで大切な家族を包む「Gondolia（揺り籠）」のように、優しく、緩やかに、

夜の大運河・カナル・グランデを滑ってゆく。

そんなトラゲットを、無言で見守っているアレサに、アトラが訊ねた。

「部長は……いえ。グランマも明日香さんも、アン寮長も。そしてアンジェリアさんも……こうなると分かっていたんですか？」  
「んん？　なぜ、そう思うの？」

アレサは、グランマ達と、いたずらな視線を交し合う。

「あの時……蒼羽教官や晃さんたちが責任を取り合いっこしてるとき、みなさんの態度が不自然でした」

「不自然？」

「……はい」

アトラは、ゆつくりとアレサ達を見回しながら言った。

「まるで最初から、理事長が、ああ言うことが分かっていたようですよ」

「ふ、ふ、ふ……バレてしまっっては、しょうがない……」  
アレサが低く笑い出す。

つられたように、グランマが、明日香が、アンが、アンジェリアが、低く笑い出す。

それはさながら『悪の大幹部』のような笑い方だ。

「ぶ、部長？　みなさん？」  
思わず「ドン引く」アトラ。

けれどその低い笑い声は、すぐに軽い、本当に嬉しそうな、楽しげな笑い声に変わってゆき……

「ねえ、アトラちゃん」

「な、なんですか。お母さん……」

アレサに代わって、アン寮長がアトラに語りかける。

「誰が一番最初に『私達は家族だ』って、言い出したか知ってる？」

「は？」

「どうして、そんな言い方が広まったか、知ってる？」

「いえ、それは……え？ まさか？」

それは、あまりにバカげた想像だ。けれど、今のこの流れからすれば……

「もしかして、理事長が？」

「お見事っ」

「いや、でも。はっ。ま、まさかそれって、例の殴りこみのときの……」

「おやまあ」

「へえ……」

「ホント、すごいわね」

「分かるんだ」

「さすが名探偵」

妖しい五人組が、妖しく笑った。

「あのとき……」

アンジェリアが、今日最後の「真実」を語り出す。

「私よりも先客がいたんだ」

「アンジェリアさんより、さらに先に先ですか？」

「ああ」

「それがビスマルク理事長……？」

「その時、アウグスト……ビスマルク氏は、首席理事だったけどね。」



そしてもうひとり」

「アイザック・セルダン、現・首席理事ですね」

「そのときの私は、ただの『平』理事でしたけどね」

いつの間にか、明日香の横に立ったアイザックが、微笑を浮かべながら訂正する。

「おふたりは、私やアレサや、グランマ達より早く、前・理事長を説得していた」

「説得：あくもしかして……」

「その通り」

アンジェリアもまた、唄うように言葉を紡ぐ。

「ふたりして、左手に『辞表』と書いた紙を握り締め、やっぱり右手で、前・理事長の襟首つかみながら、

『最後まで守ってやるのが、俺達、家族の絆だろう!!』

・って、詰め寄ってたのよ」

「ふお・ふお・ふお」

と、穏やかに笑うアイザック。

その表情からは、とてもそんな蛮行をしでかす人物には思えない。

アトラは思う。

・襟首つかまれて、ネクタイ引っ張られて、あげくの果てに、脱会宣言までかまされて……

「はああああ……」

アトラは、大きな『サイ』。タメ息をつく。

アトラは、前・理事長に同情した。……勝てるわけねえじゃん

!!!

そしてそれを横から盗み聞きしていたらしい、杏が、また『いらんコト』言っつて、地雷を踏む。

「グランマ達も、部長も、理事さん達も、まるで不良中年の集まりですねえ……ふげげげげえええ？」

「だが、不良中年かあああ！失礼なこと言う口は、この口か、この口か、この口かあああああ！」

「ふげげげええつ。ふあ、ふあれふあぶひよおおおおお

……」

アレサにほっぺをツネられたまま、杏は再び、情けない声を上げていた。

唄が流れる。

歓喜の街に、歓喜の謳声が響く。

アテナが…天上の謳声を持つ、セイレーンが唄い始める。

一瞬にして、すべての喧騒が止み、みたび、街が静止する。

そんな街に響く、その歌は -

「祝福の唄」

遙かマン・ホームにおいて「アメイジング・グレイス - Amazing Grace - 素晴らしき恩寵」と呼ばれる「祝福の唄」嵐に会い、今にも沈没しそうな船の中で、必死に祈りを捧げ、奇跡的に難をのがれた、奴隷輸送船の若き船長が、神に対する感謝を捧げるために作った、賛美の唄。

その歌が今、ネオ・ヴェネツィアの夜空に響き渡る。

アテナがそっと、アリスを見た。

アリスは小さくうなずくと、アテナに合わせるように、唄いはじめる。

アリスは、今度は、灯里と藍華を見る。

灯里と藍華の口からも、唄がこぼれだす。

そしてそれは、晃やアリシア、蒼羽にも伝わって……………

気がつけば、街に『祝福』があふれ出していた。

ウンディーネも、サラマンダーも、ノームも、シルフも。そして街の人達も。

みなが心をひとつにして、ひとつの唄を奏でる。

街中に『祝福』が広がってゆく。

「ねえ、パパ」

「なんだい。アヒト」

『祝福』が広がる中、アヒトは、右手をアルベルトに。左手をア

ンナにへと、つなぎながら、元気一杯に言った。

「こんなにも、みんなが笑顔なら、楽しいは二百万倍だね！」

「ええ、そうね……きつと、そうだね」

「ママ？」

アンナは、そんな我が子を改めて抱きしめる。

強く

優しく

いとおし気に

「ホントにこの街は、お祭りが…楽しいことが大好きなんだから…

…」

「ママ？ ママ？ どうしたの？ 痛いよ…泣いてるの？」

アルベルトは、そんなふたりを、優しい瞳で、見守っていた。

「素晴らしいですなあ」

歌声が響く中、トラゲットを終えたビスマルクが、グランマに話しかける。

「うふふ。ほんと、素晴らしいですわねえ。 うふふ。 みな、あ

なたの『家族』ですよ」

「わはは。 みんな私の自慢の『家族』ですわねえ……それにしても」

ビスマルクは笑う。

「こんなにも『家族』の笑顔が見れるのなら、年に一回、こない

ベントやってもいいですなあ」

「それって、ホントですか!？」

アリスが唄を忘れるくらいの勢いで、ゴンドラ協会理事長に訊ねる。

「ええ。オレンジ・プリンセス」

ビスマルクの目が、初孫を見る、お祖父さんの瞳になる。

「それに、それを希望するプリマがいれば、一緒にトラゲットをしてもらう……ってゆうのは、いかがですかね？」

「それは……それは……でっかい、素晴らしいです!」

アリスが、輝いた。

「ふっふっふ。 そうなればゴンドラ協会の収入もUPするし、観光の目玉にもなる。 一隻二挺か……」

「ビスマルク理事長。 字が違ってます」

「なにい!？ アイザック首席理事は、なぜ私の主砲が38cm二连装ってコトを知っているんだ!？」

「二連装かよ! つか、ポケどころは、そこか! 口語文でしょ、これは!」

「まあまあ、ホント、あなたは、冗談が通じない」

「だから、あなたが、冗談通じ過ぎなんです!」

そんな理事長と首席理事の会話に、またひとしきり笑い声が響く。そんな笑い声とともに、祝福の唄が、いつまでもネオ・ヴェネツィアに…… AQUA中に響きわたってゆく。

こうして

後に『トラゲットの一日』と、呼ばれることになる、この日の出来事は、歓喜のうちに幕を閉じたのであった。

しかし

「シングル諸君、集合う！」

凜とした声が響き渡る。

あれから数日後のことである。

「こらあ！ そのオレンジ・ぷらねっとのふたりい。なに、鳩が豆喰って、ぴょん！ - な顔しとる！」

さっさと集まらんかあ！

よおし、振り分けを発表するぞお！

北の乗り場の担当は、アラベラ・キャンベル。      アーリー・ハーヴェイ。  
アーリー・ウォルツ……

……以上、各班は今日も一日、安全操舵で。      常に周りに……特に

後ろには注意するように。何か質問は？

いや、あれは特例だ。今回はもうない。いいかな？他に  
なければ解散。各自、持ち場につき給え。

なんだ。杏、何か言いたいことあるのか。

はあ？ また何をやらかしたか？ - だとう？

そんなこと言う、鹿馬な口は、この口か、この口か、この口かあ  
あああつああ！

ぜいぜい……

無駄に疲れさせよってからに。

……

ちよつと、部長の楽しみにしてた、トラ屋の羊羹を喰っちゃまった  
だけだ。

いや、だから、そんな大事なものを、無防備に机の上に、置いて  
おく方が悪いっ？ 悪いだろ？ 悪いよな！

そうだな。そうだろ？

アトラ、杏。お前達も、そう思うだろ？ 思うよな？

そうだつ。私は悪くない。悪いのは、アレサ部長だ。アレ

サ部長の方なんだあ！

……おべえっ！？

はうあ…聞いてらしたんですか……

いえ、あの部長、これはその…えええ？ はうっつ。また期間

延長ですか？

しくしく……こいつらのプリマ進級試験が…がっ！

いえ、なんでもありません。ありません。ありません。異議な

ど、決して……しくしくしく……

や。やあ、茜くん。

大丈夫なのか？ 完全復活？ そうか、まあ無理するなよ。 体あつてのウンディーネだからな。

いや、なに。礼はいらない。 アロツコさんに充分、誠意を返してもらった。

だから私達は家族だと言っただろ？

ああ。こちらこそ、ありがとう。だ。 それより今日は、一日、よろしくな。

……だからアリス。 いや『オレンジ・プリンセス』

お前の出番はない！ そんな所から、何か言いたそうな顔で、飛び跳ねてもダメだ！ 今日は代理はいらん！

アテナもいい加減、アリス離れしろっ。

物陰から、そつと見守ってるだなんて、弟のライバルと結婚しまう、どっかの野球一家の、お姉ちゃんか！？

晃も藍華くんもだっ。 今日は大丈夫。 緊急避難的処置は、ない。

だから、気にせず、帰ってくれ。 って、なんで藍華くんは、すでにオールを持ってるんだ！？

灯里ちゃんもだ。 はっ？ なに？ アイちゃん？ アイちゃんがどうした？

トラゲットしたい？ あゝはいはい。 彼女がひとりで、このAQUAに来れるようになったらな。



つか、さつさと、ARRIA・カンパニーに入れて、お前がシングルに育てあげりゃ、いいだろがっ！

で、グランママも、明日香さんも、アンジェリアさんも、アン寮長も、帰ってください。

今日のココは、ただのトラゲット乗り場ですっ。何もありません。

こらあ！ そののノームに、シルフに、それから、へたれえ！  
こんなトコで油売ってないで、さつさと仕事に行けええええ！

うん？

アン・シオラさん。なぜあなたは、すぐ組み立てられる、屋台のキットを持っているのにかにゃ？

店はどうした。店は。ビヤンカネーヴェわあ！ 忘れてたあ？  
アンタなあ！

あああ。動くな。特にアテナと一緒にいるなっ…ああ？ ああ！  
ああ…  
遅かった…また壊滅…

うっ。お前は…なに、トラゲットのツアー企画？

いやいや。そんなのはゴンドラ協会か、アレサ部長に話してくれ。

いつまでも私に頼るな。あ、いや、遊びにこなくていい…って意味じゃないぞ。間違えるなよ。

はあ？ なんだい新太社長か……ふふ。だから、当たり前のことを言っても、なにも出ないのだよ。

ああ、お茶のお誘い？ ま、まあ、ヒマなら付き合っただらんともないぞ。ただ……ご馳走さま

んん？ あゆみくん。誰に向かって手を振ってるんだ？

あの屋根の上にいる、社長ズ達かい？ ああ。なんか今日は、猫がいっぱい居るなあ。

あの……ですから、二連装なビスマルク理事長。それにアイザック首席理事。大丈夫ですから、どうか、お引き取りを……

え？ 違う？ 何が？

は？ 期待してる？ 期待ってなんですか？ 期待なんかされて

も、何にも出ませんが……？

は？ いや、もう、あんなコトはごめんです。あんなバタバタ

したことは二度と……

へ？ まじ？ まじスか？

『トラゲットの日』が正式決定！？

……つか、なんで私が、その実行委員長に任命されてるんです？

ちょ、待つ。理事長。首席理事。それに、グランマ、明日香さん。アン寮長。それにアンジェリア先輩。何、勝手に決めて

……  
はあ？ アレサ部長の許可済みい？ あ、アレサ部長おおおつ

おおお！

確かに、あのパンケーキは美味しかった…ええつ。手作り？

いや、それなら、無防備に机の上に置きっぱ…ええ〜いや、その…うつつ…なんでもありません。しくしく。

くわあつ。そんなこと、楽しみに言う地獄な口は、この口か、この口か、この口かあああああ！

へえ？ アンナさん？ また、家族旅行ですか？ いいですねえ。うえ？ 二千万倍？ どゆことデスカ？

はいい？ 今からトラゲット観光のツアーを企画する？ 嬉しい？ お前ねえ…

こらあつ、そののへたれえ！ なんだそのニヤリ笑いわあ！ 笑うなあ！ おつ？

…新太社長。 支援に感謝する。 やはり漢はドリルだな。 美味しいチケーティを喰わす、いい、バーカリイがあるんだ。 そこで、どうだい？

ああ……

なあ。 晃、アテナ。

手伝ってくれるよな？ 手伝ってくれるんだよな？ 手伝つよな！？

俺達、家族だモンなあ？

………うわ、なぜ無言で笑う！？

によわ？ なんだい灯里ちゃん。 アイちゃんが喜ぶ？ AQU

Aの奇跡？ 素敵ングうう？

恥ずかしいセリフ禁止！！

アリシアさん？ いや、『あらあら、まあまあ』って、なにがですか？

いや、そんな…『うふふふ』って、にこやかに微笑まれても……

藍華くん、アリス。 あゆみくんに、アトラ、杏。 お前らも、なんでそんなに、笑顔で、わくわくしてるんだ！？

うわお？

なんだ、なんだ？ なんだああああ！？

なんでみんな、街の人達も一緒になつて。  
なんでみんな、そんなに瞳を輝かせて。  
なんでみんな、そんな期待に満ちた顔で、私を見てるうう！？

お、お前等、いかげんにしろおおおおおおおおお  
おおおおおおおおおおお！……！

ゴンドラは行く。

トラゲットのゴンドラは行く。

今日も人々の、想いも、心も、謳さえも運んで。

トラゲットのゴンドラは行く。

家族の笑い声を運んでゆく

Tragetti PART-10 「Edi  
torno ai mare」そして僕は海に還る」  
「l'affine

ほへえええ… ほへえええ…

PV・29800 ユニーク・7065人

現時点での「アクセス情報」です

正直、びっくりしています。

正直、おびえています。

こんな私の愚作を、これだけの人に読んでいただけているとは！

ありがとうございます。

大団円は迎えることができましたでしょうか？

みな様に「唄」は届きましたでしょうか？

本当に大丈夫でしょうか（チキンターキー鹿馬）

この長い長い、ホントに長いお話で、ほんの少しでも、みな様が笑っていただけなら、これに勝る幸せはありません。

それでは、長い間のお付き合い、（心の底から）ありがとうございます  
ました。

10本目のお話しを、お届けします。

唄です。

今回も唄才子です。 すいません(涙)

ちなみに次の作品も、もしかしたら唄才子かもしれない。

もう、どんだけ好きやねん！ って感じですよ。(つまりはワンパターンなんです…号泣)

それと今回のお話は、ある意味、卑怯です。 とある禁忌を破っているかも知れません。

みな様は、どうお考えでしょうか…(汗)

許せないのであれば、どうか私の幻想をぶち壊してください。

けれど、

もし、もしも許していただけならば、これに勝る幸せはありません。

それでは、しばらくの間、お付き合いください。

第11話 『l o a l l o c c o r i d e』 前編

- S i n g i n g

「歌だ……」

「ぶいにゆん？」

最初にそれに気づいたのは、アイだった。  
どこからともなく聞こえてくる、小さな、けれど聞いた人の耳を捕らえて離さない・そんな不思議な謳声。

彼女の先輩であり、今は引退してゴンドラ協会に迎え入れられた、  
アリシア・フローレンスの友人のひとり  
「セイレーン 天上の謳声」の通り名をもつ、アテナ・グローリイ  
とはまた違った、不思議な色の声だった。

「行ってみよう。 アイちゃん」

「はい。 灯里さん」

アイは、自分の直属の上司であり、先輩であり、大好きな友人・でもある



水無灯里の声に答えると、ゴンドラの舳先を変えた。

- ゆりかこの唄を カナリアは謳うよ。

ねんねこ ねんねこ ねんねこよ……

キレイな唄……

アイはゆっくりとゴンドラを進めた。

やがて目の前に、人ひとり、ようやく寝転がることのできるような、ほんとうに小さな島が見えてきた。

- ゆりかこの上に 枇杷びわの実が揺れるよ

ねんねこ ねんねこ ねんねこよ……

そこには、その島の大きさからは不相应な桜の巨樹が、まるで島を包み込むかのように、枝をいっぱいに広げて立っていた。

唄は、どうやらそこから聞こえてくるようだ。

- ゆりかこの綱を 木ねずみは揺するよ

ねんねこ ねんねこ ねんねこよ……

見ればその根元で、ひとりのプリマ・ウンディーネが上半身を樹にもたれかせ、目を閉じ、両手を頭の後ろで組み、足を野放図に組みながら 唄を口ずさんでいた。

- ゆりかこの夢に 黄色い月がかかるよ  
ねんねこ ねんねこ ねんねこよ……

「こんにちは。 素敵な唄ですね」  
灯里が声をかけると、そのウンディーネは、目を開け、にっこりと微笑んだ。

西暦2300年  
かつて火星と呼ばれていた星が、大規模なテラ・フォーミングを受け、水の惑星<sup>アクア</sup>AQUAと変貌をとげてから150年。  
大規模な入植が行なわれ、それぞれの国がそれぞれの文化を取り入れながら、この星は発展してきた。

そんな都市のひとつ。  
ここネオ・ヴェネツィアは、かつてマンホーム（地球）のイタリア地方にあった都市、ヴェネツィアの文化を取り入れて入植された水の都市だ。

この都市は観光地としても有名で、特に都市の真ん中を逆「S」字状に流れる大運河「グラン・カナル」や街の中を縦横無尽に走る水路を、ゴンドラを使って観光案内をする「ウンディーネ」と呼ばれる水先案内人はこのネオ・ヴェネツィアを代表する職業として、アイドルなみの人気を博していた。

アイと水無灯里は、そんな水先案内店のひとつ、「ARIAカンパニー」に所属するウンディーネだ。

「私の名前はアロッコ。『MAGA』社のアロッコ。よろしくね」  
ふたりの自己紹介を受けて、木に寄りかかったまま、ウンディーネが答えた。

「えっ。この人が『MEGALITH』の『バッジエーオ』？」  
「アイちゃん！」

灯里の声に、アイはあわてて両手で口を押さえ、頭を下げる。

「じ、ごめんなさい…」

「私からも謝ります。ごめんなさい」

灯里も同じように頭を下げ、謝罪する。

「うっん。いいのよ。気にしないで」

アロッコはしかし、にっこりと微笑んでくれた。

「そう。私が『MEGALITH』の、『バッジエーオ』・アロッコよ。うぶぶ」

それはまるで、花が咲いたような笑顔だった。

・「MEGARLITH」のバッジエーオ（baggeo）

それは誹謗

それは嘲笑

それは侮蔑

もともとMAGA社は、あめつち あきの天地秋乃ことグランマが、ARIA・カンパニーを創設するまで

一番新しい水先案内店として、名をはせていた。

けれど、ここ数年は顧客数や年収も激減し、経営的にはかなり厳しく、廃業か他の水先案内店に吸収・合併されるのではないかと、かましいネオ・ヴェネツィア雀達の、もっぱらの噂だった。

そして、その責任は・

バッジエーオ・アロッコ。「愚か者」のアロッコ。

そう呼ばれる、彼女のせいだと言われていた。

リピータと呼ばれる人達を、わざわざ他の水先案内店に紹介し、自らは、いわゆる「いちげんさん」（一回こっきりの客）やひとり…せいぜい、ふたりまでの客しかとらず、実入りのいい団体客は、ほとんど相手にしなかった。

営業もせず、宣伝もせず、はでな客引きもせず、ただ、偶然に声を

かけてきた客のみを相手にする。

そのまるで、初めてネオ・ヴェネツィアに水先案内業が発生した時のような営業の仕方に、社名の「MAGA」にひっかけてまわりから「ME(A)GALITH(メガリス) - 遺跡 - 」とまで陰口をたたかれるようになっていた。

そしてその経営方針を、決して改めようとはしない、社長…責任者のアロッコのことを、人々は、こう呼んでいた。

バツジェーオ・アロッコ。 「愚か者」のアロッコと -

「そういえば、灯里さんは、プリマになって、ARIA・カンパニーの経営者にもなったのよね。 ふふ。嬉しいわ」  
アロッコが相変わらず、木にもたれかけながら、訊ねる。

「あ、ありがとうございます」

灯里は照れながら、礼を言う。

けれど、次のアロッコ言葉に、灯里の目が点になる。

「…灯里さんは、私のこと覚えてないのね」

「はひっ？ わ、私、どこかで以前、アロッコさんにお会いしたかと、ありましたか？」

「覚えてないかあ。 まあ仕方ないわね」

うふふ - と、いたずらっ子の微笑みを浮かながら、アロッコは言った。

「じゃあ、ヒントその？ 灯里ちゃんにとっての、ネオ・ヴェネツィア最初の日」

「最初の日…？」

「ヒントその？ 水路での操舵」

「水路での操舵？」

「ええ。あなたは郵便屋さんのゴンドラに乗って、路地裏の水路を渡っていた。しかも逆漕ぎで。 ふふふ」

確かに -

あの日。 生まれて初めてネオ・ヴェネツィアの大地に立った日。

灯里は、郵便屋さん・庵野波平氏のゴンドラを操舵させてもらった。

しかも逆漕ぎで……

けれど、あのときはまだ、逆漕ぎことに気づいてもいなかったのだ。

-でも、なぜそんなことを、アロッコさんは知ってるの？

ますます、灯里の瞳が収縮する。

「うーん。 やっぱり分からないか…」

「す、すみません…」

「よし。 じゃあ、ヒントその？！ 灯里ちゃんのシングル昇進試験の日」

「ほへ…私のシングル昇進試験の日？」

アロッコは少し視線を飛ばし、アイがすでに片手袋・シングルであることを確認する。

「ヒントその？ 『希望の丘』 に向かう水路でのすれ違い」

あれ？ なんだろっ。

なんとなく。 何かを思い出しそうで……

「うふふ。 もうちょっとみたいね… それじゃラスト・ヒントです」  
そう言うのアロッコは、灯里ににっこりと微笑み、言った。

「がんばってね」

・あっ

灯里の脳裏に、あの日のことが鮮明に浮かび上がる。

忘れもしないそれは、灯里が「見習い」の両手袋「ペア」から、「半人前」の片手袋「シングル」に昇進した日のこと。

・ピクニックに行きましょう

そう言っつて、誘ってくれたアリシアさんと共に、そうとは知らず「希望の丘」へと、一生懸命に、けれど楽しく、ひたすらゴンドラを操っていた、あの日のこと……

それは「希望の丘」へと、なんのトラブルもなくたどり着くことで、そのペアをシングルへと昇格させるかどうか・を試すための、試験だったのだ。

そして、灯里は思い出した。

「あのときの、ウンディーネさん!？」

「ピンポンー!!」

アロッコが人差し指を立て、嬉しそうに言う。

「あのとき、水路で『希望の丘』へと向かう灯里ちゃんに『がんばってね』って、声をかけたのは、私でしたあ!」

「ア…ああああ……」

「そして灯里ちゃんが、ここネオ・ヴェネツィアの大地に初めて立った日。あのとき郵便屋さんのゴンドラに乗ったあなたと

すれ違ったウンディーネ。それも私でしたあ」

なぜか自慢気に言う。

…そうだ。

確かに私はあのとき、あの初めての日。ウンディーネさんとなれ違った。見とれてた。

「希望が丘」に行く途中でも、確かにゴンドラ・クルーズ中のウンディーネに声をかけてもらった。

それが…それが……

「アロッコさんだったんですか!?!」

「ええ。驚いた?」

「は、はひ。ごめんなさい。私、ぜんぜん気が付かなくて……」

「いいのよ。気にしないで。ふつうは誰でも、そんなことは覚えてないわ」

「でも……」

「あ、あの……」

アイが恐る恐る…といった感じで手を上げる。

「なに? アイさん」

「アロッコさんは、どうしてそれを知ってるんですか?」

「私はバツジエーオだから」



「は？」

アロッコは、はぐらかすかのように、そう言つと「うふふ」と笑つた。

「アロッコさあぁん……バツジエーオおおー！」  
遠くから呼ぶ声がする。

見れば一艘のゴンドラが、ふたりの男性とともに、こちらに漕ぎ寄せてきていた。

「あれは……」

それは「MAGA」社のゴンドラだった。

その基本カラーからとって「イエロー・スコードロン」とも呼ばれる、「MAGA」社の黄色いラインのゴンドラ。

操舵しているウンディーネの制服も、他の水先案内店とは少し違い、黄色を基調としたマキシ丈のスカートな、特徴的な制服だった。

そんなスカートの裾をなびかせながら、そのウンディーネはゆっくりと、ゴンドラを島に近づけてくる。

「あら、茜。 どうしたの？」

アロッコが、ウンディーネに話しかける。

「どうしたも、こつしたも、ありません。 どうしてこんな所にいるんですか！？」

「あら、だってここは私の憩いの場所だもの……」

「あのねえ……」

それから茜と呼ばれたウンディーネは、灯里とアイの方に向き直った。

茶色いショートな髪と、翡翠色の瞳が特徴的なウンディーネだった。

「こんにちは、灯里さん。 …お久しぶりです」

「はひ？」

再び、灯里の目が点になる。

「ありや、やっぱり覚えてないんですね。 ちえっ …」

笑いながら、少し唇を尖らせる茜。

「あ、あの、ごめんなさい。 私…」

「っじゃ、ヒント、その？」

「はひ？」

「それは雪の降る、寒い日のことでした」

「はひい？」

「ヒント、その？ 運河に面した、小さな広場」

・なんなんだろう

灯里は小さな眩暈まで感じていた。

・今日はいったいなんなんなんだろう。 なぜこんなクイズばかり…別にアメリカ横断なんかしたくないのに…

「まだ、分からないかあ…」

「はひ。 す、すいません」

「しょうがない。 じゃあ、最終ヒント。 …雪だるま」

「あっ…」

再び、灯里は思い出す。

それはまだ自分がシングルだった、ある寒い雪の日。

・アリシアさんは、どんなオトナになりたかったんですか？

そう訊ねる私を、アリシアさんが散歩に誘ってくれて…それから、なぜだか雪玉を転がし始め…そして街中から、いろんな人達がやってきて、

一緒に雪玉を転がしてくれて……

そして気が付いたら、運河沿いの小さな広場に出て、それからそこの人達と雪だるまを作り始めて…しかも三段！そのとき確か、女の子がふたりいて…じゃあ？

「え？　じゃあ、あのときの？」

「はい。　茜・アンテリーヴォです」

「この子はね…」

アロツコが微笑みながら言う。

「この子は一度、女優として大成したの。　それなのに、それを辞めてまで、ウンディーネになったのよ。」

なにか、雪だるまと一緒に作った、ウンディーネさんが格好よくて、そんなウンディーネなりたくなかったんですって。

りっぱな『愚か者』でしょ？　　うふふ

「バツジエーオ！」

照れたように茜が叫んだ。

「うおっほん！」

茜が乗せてきた男性二人のうちのひとりが、わざとらしく咳払いをした。

「懐かしい旧交を暖めるのは、もうよいであるかな」

「あら局長さん。いらしたんですか？」

局長と呼ばれた男は、ちいっ - と小さく舌を鳴らした。

小柄な男だった。

けれど引き締まったその体。鋭い眼光。意思の強そうな口元。

そしてなによりも、鼻の下に伸ばしたチヨビ髭が、圧倒的な存在感をかもしだしていた。

「アロツコさん、私のことは局長ではなく、アドルフと呼んでいた  
だいて構わないと言わなかったたであるかな」

「いえいえ。局長さんも私のことは、バッジエーオと呼んでいた  
だいて構わないと言いませんでしたか？」

アドルフが顔を引きつらせる。

バカにされたと思ったのだ。

「単刀直入に言う。 いますぐ、この島を売っていただきたい」

「いやです」

「早！」

アロツコも単刀直入に答えた。

「…前にも説明したように、この島は通航の弊害になるのである」

「そうなんですかあ」

「合理的ではない。 実に無駄だ」

「へえ……」

「別にタダとは言わない。それ相応の対価はお支払いはするのである」

「ふふ」

「それに、こんな花も咲かないような桜の木がある小島など、どうでもいいではないか」

「…私はバッジエーオですから」

「うん？」

「局長さん。 バッジエーオ……愚か者は、頑固なんですよ。 う

ふふ」

「どうゆう意味であるかな？」

アロッコは微笑みながら、けれどキツパリと言い切った。

「私は、この桜の木を手放す気は、ありませんの」

「どうゆうことですか？」

アドルフとアロッコが話し合っている後ろで、灯里はそつと茜に訊ねた。

「あのアドルフ氏は、このネオ・ヴェネツィアの運行局長さんなんです」

「運行局長……」

「ええ。 私達、ウンディーネが操舵するゴンドラから、ヴァボレ

ツト（水上バス） 隣の町まで巡航する飛行艇にいたるまで。

そのすべての運行を管理し、監視するのが、そのお仕事。最近

マン・ホームから来たらしいの」

「マン・ホームから……」

「その第一声が『この街は無駄が多すぎる。もっと合理化を図るべきだ』」

「そんな……」

アンも灯里も絶句する。

「この運河を整備すれば、マルコポーロ宇宙港までのアクセスの近道ができるから、無駄がなくなる。

それには、この小島が邪魔だから取り払いたい。だから合理的

に、この島を売ってくれ。 って、そう言ってるの」

「ほへえ……」

「でもバツジェーオは…アロッコさんは、ぜんぜん、そんな気がなくって……」

「にゃうっ……」

「ぶいにゆん？」

アリア社長が、アイの足元で声をあげた。

「どうしたんですか、アリア社長」

「ぶいにゆ、ぶいにゆ」

アリア社長が、茜のゴンドラに駆け寄る。

「ぶいにゆっ」

「にゃうん……」

「これは……」

そこには子猫が一匹、小さな鳴き声をあげていた。

「わあ、可愛い。この子がMAG A社の社長猫さんですね」  
アイが子猫を抱き上げる。

「あれ…？」

「どうしたの、アイちゃん」

不審気な声をあげたまま硬直しているアイに、灯里が声をかける。

「灯里さん。…この子、社長さんじゃない」

「はひ？ アイちゃん。どうゆうこと？」

アイは子猫の顔を見つめながら、つぶやいた。

「灯里さん…だって、だってこの子…この子の瞳、蒼くない……」

あわてて、その瞳をのぞき込む灯里。

確かに。

確かにその子猫の瞳は、蒼ではなく、MAG A社のシンボル・カラーと同じ、黄金色をしていた。

「アキラよ」

「え？」

「この子の名前は、アキラって言うの」  
アロツコが、こちらに近づきながら言う。

「アキラ…鷲座？ それとも彦星？」

「うん。ただ単純に、色や模様が、鷲によく似てるから。う

ふふ」

確かに。

子猫は全身は茶色の毛で覆われ、けれど頭だけは白かった。

…それにしても……

と、アイは思う。  
なぜに、猫が驚く？

「お話しは、ついたんですか？」  
灯里が訊ねる。

見ればアドルフは、一緒に茜のゴンドラに乗ってやってきた、もうひとりの男性と話し込んでいる。  
なにやら不機嫌そうなのは、その背中を見るだけで、充分に分かった。

「ううん。ふふ。私を相手にするなんて、大変ね」  
アロツコが笑う。

「にはにはにはには」  
つられたように、アキラが笑い声を上げた。

「うふふ。さすがアキラ社長は、よく分かってるね」

「アキラ社長…やっぱり。あつ、でもこの子ってば、蒼い瞳じゃないですよ」  
アイが当然の質問をぶつける。

「私は、バツジエーオだから……」  
アロツコはまた、小さく微笑んだ。

「その子は、私が見つつけてきたんです」「」  
「茜さん？」



「あれは今年の初め。そう。あの雪だるまを灯里さん達と一緒に作った、あの雪の日と同じような寒い朝だった」

茜がアイに抱かれているアキラの喉を、人差し指でなでながら言う。

アキラは、嬉しそうに喉を鳴した。

「その当時、先代の社長猫が亡くなって、私達はさみしい思いをしていました。そんなとき、私はこの子に出会った。

寒さの中で震えてながら、小さく鳴いているこの子に。 私はすぐ、この子を会社に連れて帰り、社長にしたいと思った。 でも…

…

「瞳が蒼くなった……」

「ええ…だけど、アロツコさんは……」

「茜。私のことは『バツジエーオ』って呼んでね。 で、私は構わないって言ったの」

「構わない？」

「蒼い瞳でなくってもですか？」

「ええ…別に蒼い瞳でなくても、みんなが、この子をそう思い、かわいがってくれるなら、別に良いんじゃない…って」

「そう…なんですか？」

「なにしろ、私はバツジエーオですからね。 うふふ」

そう言って、アロツコは、また答えをばぐらかした

「バツジエーオ。 私は…」

「そのARIA・カンパニーのウンディーネさん」

茜が何かを言う前に、アドルフでない、もうひとりの方の男性が話しかけてきた。

「すいませんが、私達を市庁舎まで送っていただけませんか」  
灯里はその男性の顔を見て、「あっ」と思った。

確か、この人は…

「やあ、ウンディーネさん。お久しぶり。私が誰だか覚えていらっ  
っしゃいますか？ ヒントその？……」

「もういいですって！」

灯里は、あわてて男性の言葉を遮った。

「あのときの。茜さんと同じの広場の。一緒に雪玉を転がして  
くれた、お父さん！」

「ピンポーン！」

男性は、はじけるように笑った。

アントノフと名乗ったその男性は、今は、アドルフの下で、運行  
局の副局長を務めているという。

もちろん、茜とは知り合いで、そのせいで、こうしてアドルフとア  
ロツコの仲裁役を仰せつかっていたのだ。

アドルフが肩をいからせながら、ARIA・カンパニーのゴンドラ  
に乗り込む。

同じように肩をいかれせながら、茜が、アロツコに宣言した。

「さあ、じゃあアロツコさん。私達は病院に帰りますよ」

「病院？」

「えええ？ いやよ、茜。だって病院食って不味いんですもの…

…」

「なに子供みたいなこと言ってるんですか！ さあ、行きますよっ」

「ふえええん」

茜が連行するかのように、アロッコをゴンドラに押し込む。

「それじゃ、灯里さん、またね」

「失礼します」

「ああ、あの…病院って、どうゆう…」

けれど茜は、そのNO・4のオールを素早く動かし、見る間に「MAGA」社のゴンドラは、島を離れて行ってしまふ。

灯里は「はわはわ」と呟きながら、その後ろ姿を見送るしかなかった。

「まったく、私の意見に従わないなんて、ほんとうに『愚か者』であるなっ」

市庁舎へと向かう間、アドルフはずっと文句を言いつぱなしかった。

「私は、この街全体の利益を考えて、話を進めているのに。まったく、バツジエーオがっ。

そんなことだから、会社は傾き、五人いた社員も、ひとり抜け、ふたり辞めして、いまでは、あの子ひとりだけ。

あの茜って子も、なんであんなバツジエーオと一緒にいるんであるか……

まったくあの子も、愚か者であるな……」

ぶつぶつぶつぶつ……アドルフの愚痴は止まらない。

「通航の邪魔なこの島を取り除く。ただそれだけの事であるのに……しかし所有権は『MAGA』社に。ああ、まったく」

「あの局長さん……」  
みかねたアイが、何かを言おうとする。

「ああん？」  
けれどアドルフは、そんなアイをひと睨みで黙らせた。

「まったく……この街は、まったく合理性を欠いているのである。すなわち、マン・ホームでは……」  
灯里とアイは、そつと顔を見合わせる。  
マン・ホームの出身の、ふたりにはよく分かっていた。

合理的なマン・ホームが、決して天国ではない……と ゆうことに  
けれどアドルフは、そんなふたりの気持ちに気付くことなく、吐き  
捨てるように呟いた。

「MAGALITHのイエロー・スコードロンが、ストーン・ヘン  
ジのような、あんな遺跡を守る……まったく愚かしいことである……」  
「いい加減にしてください……」  
たまりかねたように、アイが叫んだ。

「なんであるかな……」  
「アロツコさん達のこと、これ以上、悪く言うの、やめてください

「！」

「はあ？ 君はいつたい何を言っているのであるかなあ？」

「あなたはこの街の… AQUAのこと、何も分かってない！」

「まあまあ、ウンディーネさん」

アントノフが間に割って入る。けれど、アイは止まらなかった。

「アロッコさんは…あの人達は、けっしてバツジエーオなんかじゃない！」

「はは。何をくだらんことを言うのであるか……」

「あの人達は…アロッコさんも茜さんも、とっても心優しい、素敵な人なんです」

「なにか証拠でも？」

顔を真っ赤にして叫ぶアイ。けれどアドルフは冷ややかに問いかける。

「それは…」

「それは？ なんであるかな？」

「それは…」

「さあ、それが何か、ちゃんと理論付けて私に証明してもらえなくてはならない。でなければ、それは、ただの言いかけである」

「う……」

・もどかしい

アイは、もどかしかった。

分かっているのに。感じているのに。

アロッコさんや茜さんが、そんな人じゃないってことに。 だけ

ど……

「ただ、それをうまく言葉にできない。証明できない。」

「さあ。どうしたんであるか？」

言葉に詰まるアイを、アドルフは追いつめる。加虐的な笑みが広がる。

「アキラ社長です」

「灯里さん？」

アイは、ハッとする。

それはいままで聞いたことのない、灯里の声だった。　　：　　もしかして怒ってる？

「は？」

アドルフが間抜けな声を上げた。

「アロッコさん達が愚か者ではない証明。　それはアキラ社長です」

「はあ？　あの子猫であるかな？」

「アロッコさん達は、蒼い瞳をもたない猫を社長にしています」

「あははは。それが証明であるか？　いや、むしろ逆であろう。私もあなた方ウンディーネのみなさんが、航海の無事と安全を祈る象徴として、

蒼い瞳の猫を、儀礼的に『社長』として飼っているのは知っているのである」

「ぶいぎゅん！」

灯里の足元で、アリア社長が声を上げた。

『飼っている』とゆう言葉に怒ったのだ。

「確かに私達は、蒼い瞳の猫さんを社長として、一緒に暮らしています」

「ぶいにゅっ」

『一緒に暮らしている』

その言葉に、アリア社長が、得たり！　とばかりに胸を叩く。

だが -

「ならば、あなたにも分かるであろう。あのバツジエーオが、そんなことも気付きもしない愚か者だとゆうことに」

悲しくも、そんなアリア社長のジェスチャーを、アドルフは全く無視して話を続ける。

「違います！」

「違う？　はっ、なにがであるか？」

「バツジエーオさんは…アロッコさんは、瞳の色なんか、気にしてないんです！」

「はあ？」

灯里は怒り狂うアリア社長を、そっと優しく後ろから抱きかかえた。

「あの人は、あの猫の…アクイラ社長の瞳の色が、蒼であろうが、黄色であろうが、そんなこと、どうでもよかったです。」

そんなことは関係なく……

ただあの人は…アロッコさんは、雪の日。　寒い朝。　外で鳴い

ている、孤独な、さみしい子猫を助けたかっただけで……」

「……………」

「そして、瞳の色が違うことを承知で連れてきた、そんな茜さん優しい気持ちも、アロッコさんは、ちゃんと理解していて……」

茜さんも、そんなアロッコさんの優しい想いを、ちゃんと分かっている……

だから、茜さんはずっと、アロッコさんと一緒にいるんです。

だから、あのふたりは、ずっと一緒にいるんです。

だから……………」

灯里はアドルフを真正面から見据えた。

「だからアロッコさんも茜さんも、絶対に『愚か者』なんかじゃありませんっ」

「∴Q.E.D）Quod erat Demonstrandum - 証明終了 - ）ですなあ」

黙り込んでしまったアドルフに代わって、アントノフが、降参するかのように両手を上げ笑った。



「分かった」

もう少しで市庁舎前に着くとゆうとき。

それまで硬い表情で黙りこくっていたアドルフが、吐き出すように言葉を発した。

「それならば、私と勝負してもらおうのである」

「局長。何をおっしゃっているのですか？」

・大丈夫か？ この人

と いった感じで、アントノフが訊ねる。

「私は正気である！ ウンディーネさん。ひとつ、私と勝負をしていただくこと」

「はひ？」

「十日後にヴァガ・ロンガがあるであろう？」

・ヴァガ・ロンガ

それは市内全てを使って行なわれるゴンドラ・レース。

「長く漕ぐ」とゆう意味で、文字通り、全長32キロもの距離を、ゴンドラを使って漕いで行くのだ。

もちろんウンディーネであろうと、一般人であろうと関係なく、市民総出で参加でき、特に賞金も賞品もなく

誰もがただ、楽しんで漕ぐ・とゆう、いかにもネオ・ヴェネツィアらしい、お祭りのひとつだ。

「その日にネオ・ヴェネツィア市民にお願いして、正否を決めていただくのである」

アドルフが、ことさら重々しく言う。

「正否を決める?」

「うむ。その日。私の合理的な意見に賛成の者は黒いリボンを。そしてバツジエーオの考えに賛成の者は、黄色いリボンをつけて競技に参加してもらおうのである。」

幸い、あの小島はレースのゴール少し手前にある。そこでそのリボンの多い方の意見を尊重する - といのはどうであるかな」

「でもそれは……」

灯里がとまどったように答える。

「でもそれは、私では決められません」

「もちろん、それは分かっているのである。アントノフくん。」

このことを『MAGA』社に伝えておいてくれ給え。

いや、大丈夫。どうせあのバツジエーオは、嫌とは言わないのである」

アドルフに、加虐的な笑みがもどってくる。

「もちろんだからと言って、すぐにあの島を取り壊してしまうわけではないのである。」

ただ、この街の総意とゆうものを、私は、あのバツジエーオに知ってもらいたいのである」

自信満々に、アドルフは笑った。

Essere  
Condizioni  
Occorrono

l o a l l o c c o r i d o 後編(前書き)

次回は、8月4日に更新します。

第11話 『 l o a l l o c c o r i d o 』

後編

「お帰りなさい。 お父さん！」

ゴンドラが市庁舎前に着くと、ひとりの少女が駆け寄ってきた。年の頃は、アイより少し若いくらい。

紅茶色の髪をおさげにして、少しそばかす残る、元気な女の子だ。

「やあ。 ただ今」

「ねえねえ。 今日、お姉ちゃんに会ったんでしょ？ ちゃんと話してくれた？」

「あっ…いや、あの、それは……」

「ぶうつ。 お父さん、また話してくれなかったの!？」

「あ、いや、その…今日は、時間がなくてね……そ、そうだ。 このウンディーネさん、覚えてないかい」

ぷい - とむくれてしまった少女に、アントノフがあわてて問いかける。

「え？」

「ほら、覚えていないかい？ まだお前が小さかった頃に、茜さんやみんなで、でっかい雪だるまを作ったことがあったろ」

「あっ……」

「そう、あのとときのウンディーネさん。水無灯里さんだ」

「わあっ！ほんとだあ！」

少女は瞳を輝かせた。

「改めて紹介します。娘のアリーチェです」

・退庁時間がきたんだから、もう帰り給え。

そう言うアドルフと分かれて、「どうせなら」と、灯里とアイは、アントノフ親子をゴンドラに乗せ、家まで送ることにした。

「ん〜ん。やっぱりゴンドラは、いいなあ」

アリーチェが満足そうに言う。

「うん。ありがとう。アリーチェちゃんはゴンドラが好きなんだ」

「もちろん！ってゆっか、私、将来はウンディーネになるの！」

「うわっ。素敵！」

アイが喜びの表情で、アリーチェを見る。

「でも……」

「ん？」

アリーチェの顔が曇る。

「どうしたのアリーチェちゃん。もしかして、お父さんが反対してるの？」

アイは今度は怒りの表情で、アントノフを睨みつける。

睨まれたアントノフは、ふるふると困った顔で、かぶりを振った。

「違うの、違うの。ウンディーネさん。お父さんは、ぜんぜん反対なんかしてない」  
あわててアリーチェが言う。

「じゃあ、どうして……」

そんなアイの問いかけに、アリーチェがぼつりと答えた。

「私…『MAGA』社に入りたいの……」

「『MAGA』社に……」

「うん。私、お姉ちゃん…茜さんと一緒に、ゴンドラを漕ぎたいの……でもお姉ちゃんは、絶対ダメだって……」

「あきらめちゃダメ！」

「アイちゃん!？」

アイはいきなりオールを放り出すと、アリーチェの方に駆け寄った。あわわわわ…と、あわてて灯里はオールを受け取り、ゴンドラを安定させる。

「アリーチェちゃん。あきらめちゃ、絶対ダメ!！」

「は、はい!！」

両手をつかみ、ものすごい勢いでアリーチェに迫るアイ。

「いい。アリーチェちゃん。私も一緒をお願いしてあげる。だから……」

ずい…と、アイはアリーチェに顔を近づける。正直、少し怖い…

「だから、あきらめちゃ、ダメ!！」

「は、はい……」

アリーチェは引きつった笑みを浮かべた。

「私は昔、このネオ・ヴェネツィアが…ウンディーネが嫌いだったの」

「え!?!」

アイの言葉に驚くアリーチェ。

それは事実だった。

幼い頃のアイは、ネオ・ヴェネツィア好きの姉に反発して…それは自分の大好きな姉が、嬉しそうにこの街のことを語ることに対してのちよつとした「ヤキモチ」であつただけけれど…その全てに否定的だった。

「でもね」

アイはゆっくりと、ひと言ひと言、確かめるかのように話しだす。

「私、灯里さんに会えて変わったの。うっん。変わったの。灯里さんは、私にネオ・ヴェネツィアの素晴らしさや、ウンディーネの楽しさを

いっぱい教えてくれた。そして私は、この街が…ウンディーネが大好きになつた」

「アイちゃん……」

「だから私は頑張つたの。あきらめずに、一生懸命、ウンディーネになるうとしたの。そしたら、ほら」

アイはアリーチェの両手を握つたまま、その手を目の前にかざした。

「私は片手袋に…シングルになれた。もちろんプリマにだって絶対なる。自分をやわっこくして、絶対プリマになる。」

「だから…だからアリーチェちゃんも、頑張つて! 絶対、絶対、あきらめないで!」



アリーチェは目を丸くして、アイの片手袋を見ている。それから少しの間、目をつぶり、大きく息を吸い込むと 目を開き、大きな声で返事を返した。

「はい！ 頑張る！ 私、頑張ります。諦めない。絶対、諦めない。諦めないで、絶対『MAGA』社のウンディーネになる！」  
「うん。頑張つて！ 私、応援するから」  
「はい。ありがとう、ウンディーネさん。ううん、アイさん！」  
手を取り合い、盛り上がるアイとアリーチェ。そんなふたりを灯里とアントノフが優しい瞳で見守っていた。

「一緒に夕食をどうですか？」  
アントノフが誘う。

「たいした物はありませんが、パニーニでも食べていってください」  
「でも……」  
「大丈夫です。それに、お母さんの作る、グヤーシュ（ハンガリー風シチュー）は最高なんですよ」  
アリーチェも口をそろえる。

「灯里さん……」  
「ぶいにゆうつうん」  
アイとアリア社長が、訴えるような目で灯里を見る。灯里はアントノフを見た。にこやかにうなづく。

「そうだね。じゃあ、およばれしましょうか」  
「やったああー！」  
「ぶいぶいぶいぶいぶいぶいぶい」

アイとアリア社長が手を取り合って喜ぶ。

灯里達が、アントノフの家に着くと、母親は喜んで迎え入れてくれた。

近所の人達も顔を出す。

あの日のことは、みな覚えていたらしく、一様に笑顔で灯里を迎えてくれた。

「あとで茜に、マフィンを持っていかせるから」

茜の母親も、相好を崩しながら、そう言ってくれた。

とても素晴らしい夕食だった。

分厚いハムを挟んだパニーニは最高。グヤーシユも、まったりと  
していて、そのくせ、クセもなく、とても美味しかった。

もちろん、高級レストランのような味ではないが、そこには家庭的な温もりまでも感じさせる、素朴で素敵な味があった。

「今晚は。アリーチエ。かあさんがコレを持って行って……あれ？」

マフィンの載った皿を持ったまま、茜が硬直する。

「あははは。今晚わ、茜さん」

灯里が頬をかきながら挨拶する。

アイやアリア社長も、照れくさそうに笑みを浮かべた。

「アリーチェ。ちょっと手伝ってくれる？」  
母親が台所から呼ぶ。

アリーチェは「はい」と答えて席を立った。  
その後姿を見送って、アントノフが言った。

「さて、実は、みなさんにお話しがあります」  
灯里と茜がうなずいた。

ふたりともそれは予想してしていたのだ。

「まず言っておきたいのは、今回のリボンの件。あくまで個人的に  
ですが、深く謝罪します」

「……………」

「正直、あれはフェアではありません。行政からの圧力・とまでは  
言いませんが、市民のみなさんが政治的に動いてしまうことも考  
えられますから……………」

「政治的……………」

「役人の顔色を見る。 そんな人もいるってことです」  
「それなら！」

「はい。ですが残念ながら、もう止めることはできません」

「そんな……………」

「あの人は、アドルフ局長は、善くも悪くも、そうゆう人なのです」  
「……………」

「逆にもし今回の件、みなさん方が勝てば、彼は考えを変えるかも  
しません。」

「で、なければ『強制執行』 - とゆう手段に訴えてでも、彼は島を  
潰すでしょう。けれど……………」

アントノフは真摯な瞳で、灯里達を見る。

「けれど分かっておいていただきたいのは、彼は、アドルフ局長は悪い人ではない・とゆうことです」

「そう…なんですか？」

「はい。あの人は多少、独善的で…他人の意見を聞かないことはありますが、基本的には良い人なんです」

「……………」

「それが証拠に今日でも、ちゃんと私を定時に上がらせてくれたでしよ？ きつとあの人は今、ひとりで書類をまとめてるハズです」

「……………でも」

「ええ。茜くん。だからと言って、島を売ってくれとか、彼を許してくれとかゆう話ではありません。ただ…」

「ただ…？」

「一方的に彼を悪くは思わないで欲しいのです。彼は彼なりに、このネオ・ヴェネツィアのことを考えているんです」

「……………」

「それで…茜くん」

アントノフは、ことさら無表情に訊ねた。

「……………はい」

「アロッコさんに残された時間は、あとどれくらいですか？」

茜は大きく息を吸い込んだ。

彼女にとってそれは、聞かれて当然の質問だったのだろう。けれど、やはり動揺は隠せなかった。

「どうゆう…ことですか？」

アイの膝の上では、アリア社長が気持ちよさげに寝息を立てていた。

「バッジエーオは…アロッコさんは、早ければ明日にでも……」

「え!?!」

「なにそれ!?!」

驚く灯里とアイに、茜は、正直に答える。

「アロッコさんは、そうゆう病気なんです」

「病気……」

「そんな…あんなに元気なのに……」

「アロッコさんの病気は先天性のもんです。特效薬はいまだになく、治療方も確立されていません。多少の延命ができるくらいで

……」

「……」

「だから……」

茜は顔を上げる。

「だからアロッコさんは、バッジエーオって…自らを『愚か者』って呼んでるんです。

自分はこの世に『生かされている』存在。あと10年生きられるかもしれない。明日死ぬかもしれない。

そんな『生かされている』存在だからこそ、その全てを受け入れ、楽しく、可笑しく、けれど、こだわりながら生きていたい。

だから自ら『バッジエーオ』と名乗り、愚か者と笑われながら、それでも自分の信じるままに生きていたい。そう……」

「だからアキラちゃんを社長に……」

アイの言葉に、茜がうなづく。

・ ゆりかごの唄を カナリアは謳うよ。  
ねんねこ ねんねこ ねんねこよ……

台所から唄が聞こえてくる。

・ ゆりかごの上に 枇杷びわの実が揺れるよ  
ねんねこ ねんねこ ねんねこよ……

「これは……」

それは、今朝聞いた唄。

あの小島でアロツコが口ずさんでいた唄。

・ ゆりかごの綱を 木ねずみは揺するよ  
ねんねこ ねんねこ ねんねこよ……

アリーチエだ。

アリーチエが母の手伝いをしながら、謳っているのだ。

「キレイな曲ですね」

アイがつぶやく。

「この曲は、私がアリーチェに教えたの」

「茜さんが…」

「ええ…この曲はマン・ホームに古くから伝わる曲で、私も祖母から教えてもらったの…アロツコさんも気に入ってくれて……」

・ゆりかごの夢に 黄色い月がかかるよ

ねんねこ ねんねこ ねんねこよ……

「茜さんは、だからアリーチェちゃんをMAG A社に入れないんですか？」

「…そう。灯里さんも知ってるんですね」

灯里は無言でうなずいた。

「ええ。その通り。私は、彼女がウンディーネになることは反対しない。むしろ嬉しい…けど、MAG A社に……ウチに来るのはダメ」

「どうしてですか？」

「アイさん。あなたARIA・カンパニーを辞めて、姫屋かオレンジ・ぷらねつとに行きたい？」

「そんな！ 絶対、イヤです！」

「どうして？」

「それは…それは私はどんなことがあっても、灯里さんと離れたくない。ずっと、灯里さんと一緒にいたいっ」

「どんなに苦勞しても？」

「もちろんですー!!」

「アイちゃん……」

灯里が、小さく、けれど嬉しそうにつぶやく。

「私も同じ」

茜が、うふふと笑う。

「私もアロッコさんと離れたくない。 なんと言われようとも。

けど彼女には……アリーチェには、そんな苦勞はかけたくない……」

「茜さん……」

「今回の件。 私は、どうこう言えませんが、個人的には、みなさんに頑張ってもらいたい。 局長に考え直してもらいたい」

「アントノフさん……」

「ああ……なんか私もバツジエーオみたいですかあ」

そう言ってアントノフは笑いながら頭をかいた。

「灯里さん……」

ARIA・カンパニーに帰るゴンドラの上で、アイはそつと灯里に話しかけた。

「うん。 アイちゃん。 がんばろうね」

「……はい!!」

何も言わない。 けれど想いはしっかりと伝わる。

だからアイは、灯里のことが大好きだ。

ツキアカリを受けて、ふたりのゴンドラは揺れてゆく。



翌日・

灯里はまず、オレンジ・ぷらねつとを訪ねた。  
アレサに会って、話を聞いてもらうためだ。

けれど・

「そんな話、聞けないわね」

アレサの返事は、にべもなかった。

アレサ・カニンガム女史。

オレンジ・ぷらねつとの人事部長。 けれどその実力は、他の部長  
や、ひよっとして社長ですら凌駕しているかもしれない。

トッププリマ・ウンディーネから請われて人事部長に就任した彼女は「業界、第三の波」とまで言われる、数々の組織改革を断行。

わずか十年で、それまで業界最大手の姫屋を押さえて、売り上げト  
ップの業績を得た、もはや伝説上の人物。

未だに人事部長の地位にありながら、オレンジ・ぷらねつとを引ッ  
張り、姫屋と毎年、売り上げを競っている。

「ダメ…ですか？」

「行政とやりあっても、お互い傷つくだけよ。 あなたも、もう分  
かるでしょ」

「……………」

「ARIA・カンパニーのような小さなお店ならいざ知らず、オレ  
ンジ・ぷらねつとのような大きな会社は、そんな感傷的なことでは  
動かせないの」

「…はい」

「けどね、灯里さん」

アレサはゆっくりと、座っていた椅子から立ち上がり、眼鏡をはずしながら言った。

「我が、オレンジ・ぷらねっとは、この件に対して反対も賛成もしません」

「ありがとうございます」

それは、なんの助けもしないけれど、アドルフ側にもつかない。とゆう、アレサの言外の意味表示だった。だから灯里は頭を下げた。

「それともうひとつ。これは姫屋さんも聞いている話だそうだけど…」

アレサは何の感情も込めずに言う。

「アロツコさんからの要請で、もしMAG A社が消失するような場合には、プリマ・ウンディーネの茜・アンテリーヴォをウチか姫屋さんで面倒みて欲しいって言われているの」

「その話は本当よ」

藍華がカフェラテを飲みながら言った。

「口約束みたいなものらしいけど、聞いたのが晃さんだからね。そのへんの正式書類より正式だわ」

ここは姫屋、カンナーレジヨ支店の藍華の執務室。  
灯里と藍華は、差し向かいで座りながら話をしていた。

「そう…なんだ……」

「それにしても、灯里も大変な人にかかわってるわね」

「藍華ちゃん、アロツコさんは、そんな人じゃっ!」

「分かってるわよ」

藍華は笑いながら言う。

「バツジエーオ・アロツコ。愚か者のアロツコ。変な人・と言われることはあっても、バカな人・と呼ぶ人はいないわ……」

「藍華ちゃん、それじゃあ」

「それはダメ!」

「ええ〜え!？」

藍華は、ぺしっ・と灯里の額をハタク。

「いい。灯里。メリットがないわ」

「メリット……」

「そう。会社として、そのことを行なうとき、どんな利益があるか、どんな損失が生じるか。それが問題よ」

「……………」

「あなたも、ARIA・カンパニーの経営者として、もう分かっているでしょ」

そのときの藍華の顔は、灯里の友人としてではなく、ひとりの経営者としての顔だった。

「まず私が考えなきゃいけないのは、会社としての…姫屋としての利益なの」

「藍華ちゃん……」

「お役人と争うのは、不利益よ」  
「……………」

「こりゃ、灯里っ」

「はわわわわわ」

藍華は下を向いてしまった灯里の頭を、ぐりぐりとなで繰り回す。

「私が今言ったことは、姫屋、カンナーレジョ支店長としての答えよ。でも藍華・S・グランチエスタとしては……………」

にっこりと微笑みながら藍華は言った。

「頑張んなさい。私も応援するから」

「藍華ちゃん……………」

灯里は、目をうるませる。

「やっぱり藍華ちゃんは、私の、とっても大好きで、素敵ンゲで、大切なお友達だよお」

「恥ずかしいセリフ禁止いいいいいい!!」

藍華の、いつもの怒鳴り声が、支店中に響き渡った。

同時刻 -

アイはアリア社長を伴って、またあの小島へとゴンドラを進めてい

た。

・私が動き回っている間に、アイちゃんは、アロッコさんの様子を見てきて

そう、灯里に頼まれたのだ。もちろんアイに異存はない。

それぞれに、それぞれの役割を果たす。それが結果的には、いちばん良いのだから。

それに……

アイは、もう少し、アロッコと話しがしてみたかった。

小島が見えてきた。

相変わらず、島の大きさには不釣り合いな桜の巨樹が、傘を広げるように枝を四方に伸ばしている。

そしてその根元には、アロッコさんが……

「ぶいにゅー！」

アリア社長が叫び、アイの心臓がドクンツと音を立てた。

そこでは、アロッコがオールを立てかけた横で、もたれるように桜の木によりかかっている。

それはまるで……

アイは必死になってゴンドラを漕ぎはじめた。

「クリムゾン・ローズ（真紅の薔薇）」の通り名を持つ、姫屋の晃・E・フェラーリが見れば・

・すわっ！ 速度が速いぞ！ 建物の傷みを促進させないための、スピード制限があるのを知らんのか！！

と、怒鳴られそうな勢이었다。

「アロツコさん！」

島に着いたとたん、アイは大声でアロツコに声をかけた。

桜の木にもたれかかったアロツコは、まるで存在そのものが薄くなつてしまつたかのように……

「ん？ あれ、眠っちゃつたのか…あれ、アイさん。どうしたの？」

「アロツコさん……」

安堵のタメ息とともに、アイは、こぼれ落ちる涙を、どうしても止めることができなかった。

「うふふ。死んじゃつたかと思つた？」

そう言つて、優しく髪をなでってくれるアロツコにしがみつきながら、アイは、えぐえぐと、泣き続けていた。

「ごめんなさいね。このところ、ちょっと調子がよくないものだから……」

「病院に…病院に行きましょう」

しゃくりあげながら言つアイに、けれどアロツコは微笑みながら、小さくかぶりを振る。

「ありがとう。でも、病院に行つても、どうなるものでもないし……」

「だから…だから毎日、ここにいるんですか？」

「ええ。実は、そうなの…ここにしていると心が落ち着くの。う」

ふふ。 バッジエーオね……」  
「そんなこと…そんなことないです」

アイはアロッコに、自分が見た桜の木の話をした。

それは灯里に連れられて行ったピクニックで教えられた「とっておき」の場所だった。

小高い丘の上に、ポツン・と忘れられたように置きさられた一両きりの路面電車。

そしてその背後に立つ、大きな桜の木。

・えいっ

とばかりに、路面電車の椅子に寝転べば、やぶれた屋根から、まるで振るように舞う桜の花びらが……

そこは不思議と心が休まる…いつまでもずっと寝転がっていたくなるような・そんな奇妙な素敵な空間だった。

「そうなの……」

アロッコは、アイの髪を優しくなでながら言う。

「それじゃあ今度、私もそこに連れて行ってくれる？」

「はい……」

アイはアロッコの膝にしがみついたまま、小さく答える。

「はい。アロッコさん。 だから…だから……」

・死なないでください

その言葉を、アイは、どうしても言えなかった。

それが可能なら。

それができるのであれば。

アロッコはバツジエーオとは呼ばれはしない。

バツジエーオ「愚か者」と、呼ばれることはなかったはずだ。

それは軽々しく言えない言葉。

軽々しく、言ってはいけない言葉。

それはアロッコの生き方。

アロッコの選んだ生き方。

だから、アイは -

「ごめんなさい」

謝ることしかできなかった。

「ん？ なぜ謝るの？」

「だって…だって、私達がアドルフさんとあんな約束、勝手にしたから…アロッコさんは………」

「ああ。リボンの勝負のこと？」

「はい………」

「いいんじゃない？ 面白そう」



「面白い…ですか？」

「ええ」

アロツコは、笑いながら言った。

「なにしろ私は、バツジエーオですからね。　　うふふ。　　ああ、春  
になったら、アイさんの桜が見れるのね……」

その微笑みは、まるで散りゆく桜の花びらのような儂さを、アイの  
胸に刻み込んでいった。

桜の木に立てかけられた、黄色のNO-13のオールが、そんな二  
人を静かに見下ろしていた。

ヴァガ・ロンガ当日 -

朝、寒さに目を覚ましたアリア社長は、アイが部屋の窓を開け、登  
り来る朝日に向かって手を合わせ、何事かを願っている姿を目にし  
た。

一心不乱に手を合わせるアイ。

アリア社長は、アイの隣に座りなおすと、同じように、朝日に向か  
って、その短い両手を合わせ、目を閉じ……そのまま二度寝した。

遠くで花火の音が聞こえる。  
人々の歓声が聞こえてくる。

「始まったわね」

アロッコが言う。

「はい……」

そんなアロッコを肩で支えながら、茜は答えた。

ふたりは、いつもの小島の上で、寄り添うように座っていた。  
立つてもいられない。

アロッコの様態は、もう誰の目にもあきらかだった。

「ねえ、茜」

「はい。 バッジエーオ」

アロッコは、茜に優しく微笑みかける。

「私がいなくなったら、あなたは自由にしているのよ。 M A G A  
社なんてなくなってもかまわない」

「何言ってるんですかっ。 そんな…そんなっ。 私は…私は絶対、  
M A G A 社から…あなたから離れません！」

「うふふ。 あなたもやっぱり『愚か者』ね……」  
「バッジエーオ……」

「ねえ、茜」

甘えた声でアロッコが言う。

「あの唄を謳ってくれる？」

「はい？」

「あなたが教えてくれた、あの唄……」

茜は、うなずくと、小さく謳いだす。

- ゆりかごの唄を カナリアは謳うよ。

ねんねこ ねんねこ ねんねこよ……

- ゆりかごの上に 枇杷びびの実が揺れるよ

ねんねこ ねんねこ ねんねこよ……

それは優しい子守り唄。

愛する我が子に - 安らかなれ - と願う親の奏でる、優しい子守り唄。

- ゆりかごの綱を 木ねずみは揺するよ

ねんねこ ねんねこ ねんねこよ……

アロッコも小さく声を合わせる。

・ゆりかごの夢に 黄色い月がかかるよ  
ねんねこ ねんねこ ねんねこよ……

「ごめん、茜。 ちょっと疲れたから寝るわね……」

「はい…バツジエーオ…はい……」

目にいつぱいの涙を浮かべ、茜は答えた。

どのくらいの時がたったのだろうか。

アロッコは激しく自分を呼ぶ声に、目を覚ました。

「バツジエーオ…アロッコさん。 ルイさん。 起きてください ほ  
らアレ！」

目を開け、茜に腕に支えられながら、アロッコは、その光景を信じ  
られぬ思いで見つめていた。

茜が叫ぶ。

「ほら見てください。アロッコさん、アロッコ…」ルイさん。み  
んなりボンつきです！」

ふたりの小島を取り囲むように、たくさんのゴンドラが集まっている。

そして、その全てに黄色いリボンが飾られていた。

アロツコは、ゆっくりとまわりを見渡す。

灯里がいた。

アイがいた。

姫屋のウンディーネ達がいた。

オレンジ・ぷらねっとのウンディーネ達がいた。

他の、いろんな水先案内店のウンディーネ達がいた。

ゴンドラ協会の人もいた。

あれは…協会の偉い人？

それに、あの人は伝説の……

ノームもいた。

シルフもいた。

うふふ…なに？ あのサラマンダーさん。頭の前から、つま先まで、全身に黄色いリボンをつけて…まるでバツジエーオみたい……

「アリーチェ……」

茜がつぶやいた。

そこには、ひとりの少女が灯里とアイに挟まれて、胸に黄色いリボンを付け、こちらを見返していた。

そんな、見知らぬ街の人達もいた。  
小さな子供がいた。

青年もいた。

家族らしい親子連れの姿もあった。  
年老いた、おじいさん、おばあさんもいた。

みなそれぞれに、それぞれの笑顔を浮かべながら、黄色いリボンを付け、優しく、けれど誇らしげに、こちらを見つめていた。

「どうゆうことであるか!？」

ただひとり、黒いリボンをつけたアドルフが、アントノフのゴンドラでやって来た。

「なぜみんな、黄色いリボンであるか。なぜ、黒ではないのか!」  
アドルフは、わめき続ける。

「こんな島などない方が、合理的なのに。利便性がいいのに! それが見みんなのためであるのに!！」

「そんなの私達は望んでない!」  
アイが叫ぶ。

「私は…私達は、みんな、この不便で不自由で不都合だらけのA Q U Aが大好きなのっ」

「はああ? いったい何だ! 何を言っているのであるか!？」

「局長さん。アドルフさん。人にはそれぞれに、それぞれの幸せがあります。お分かりでしょうか?」

灯里が諭すように、静かに言う。

「なぜだ。なぜ、みな私の言葉に従わない!? 私間違っただと、いないハズである!」

「はひ。あなたのやろうとしたことは、決して間違っただではありません。それは私達の幸せではありません」

「幸せでは…ない」

「はい。この子が言ったように…」

そう言うと、灯里は優しくアイの頭をなでた。

「私達は不自由の中に、幸せがあるんです…」

「不自由の中の、幸せ…であるか?」

「そうです」

灯里は、その場に集まったすべての人々に語るように、言葉を紡いだ。

「私達は、このAQUAの春のうららかさ。夏の汗ばむ暑さ。

秋の物悲しく吹く風。冬に降る冷たい雪。

長く続く雨の日も。いつまでも続く晴れの日も…そう。アク

ア・アルタですら、私達には、とてもいとおいしい……」

小島のまわりに集まった人々が、静かにうなづく。

「合理的であることが、必ずしも幸せではないんです」

「……私はみなのことを思って…みなのためと思ったのである」  
アドルフは軋るような声をあげた。

「はい。 私達はあなたにとても感謝しています。 この想いに気  
付かせてくれた、あなたに……」

だからアドルフさん。 あなたにも私達の気持ちを分かって…気  
付けて欲しい……」

アドルフはがつくりと肩を落とした。

もしかしたらアドルフも、うすうす、そのことに気が付いていたの  
かもしれない。

しかし、それをそのまま認めるのは、彼の矜持が許さなかったのだ  
ろう。

そんなアドルフに、アントノフが優しく声をかける。

「局長。 帰って一杯、やりませんか？ いい店があるんですよ。

そこでゆっくり、話そうじゃありませんか。

そうそう、局長は、雪玉って作ったことありますか？」

アントノフは、アドルフをゴンドラへと乗せ、ゆっくりと漕ぎ出し  
た。

去りゆき際、ふと気が付いたかのように、アントノフは振り向き、  
帽子を取って、灯里達に挨拶をする。

その帽子のウラには、黄色いリボンが、しっかりと張りつけられて  
いた。



「お父さん……」

アリ・チエの声がうるむ。

アントノフは、にっこりと微笑みながら去っていった。

「あの人も…アドルフさんも、ほんとはこの街のみんなのためを思  
って、この島を取り除こうとしたんだよね」  
アイが小さくなってゆくゴンドラを見ながら静かに言う。

「うん。きつと、あの人も良かれと思ってしようとしたことなのね」  
灯里が答える。

「ええ…あの人も、きつと。心優しい……」  
アロツコが後を引き取った。

「素敵な愚か者ね」

みんなの笑顔があふれる。

そんな人々を見回しながら。アロツコは言った。

「そして、今ここにいるみんなも、優しい、けど、ちょっとおバカ  
な、素敵な愚か者さん…ありがとう」

「アロツコさん……」

「にゃうぶつうん」

アクイラが悲しげな声を上げる

アロッコは、そんな子猫の頭を優しくなでてあげた。

「ありがとう、アキラ。 ふふ。 私は、なんて幸せなバツジエ  
オなんだろう……」

そう言うと、

アロッコは、もう一度まわりを見渡す。  
誰もが、バツジエオを見つめていた。

「茜。 今までありがとう」

「バツジエオ……」

「もう私に縛られず……これからあなたは、あなたの好きな道を行き  
なさい」

「いやです。 バツジエオ。 私は……私はずっと『MAG A』社  
の、茜・アンテリーヴォです！」

「うふふ……」

アロッコは、そっと茜の頬に手を当てる。 ぞっとするような冷た  
さだった。

「ねえ、茜」

「はい、バツジエオ……」

「やっぱり、あなたも……」

アロッコは優しく微笑む。

「あなたも、素敵な愚か者ね……」

「はい。 私もバツジエオです。 アロッコさんと同じ、素敵で優  
しいバツジエオです……」

アロッコの頬を、茜の涙が濡らす。

あとからあとからあとから  
あとからあとからあとから

こぼれ落ちる涙が、アロツコの頬を濡らす。

「茜……」

「は、はい、バツジエーオ」

「私、あなたに出会えてよかった。あなたのような素敵な子に……」

「バツジエーオ！ いやです！ いかないでっ。お願い！ いかないでくださいー！！」

「茜……」

「私……私ひとりじゃ……私ひとりじゃっ。イヤですっ。バツジエーオ……！！」

茜の声が、絶叫が、ネオ。ヴァネツィアに響いて消える。  
風がすすり泣くよう、街の中を通り過ぎてゆく。

「うふふ。茜。あなたはひとりじゃないわ」

「バツジエーオ……」

「あなたは、ひとりじゃない。ちゃんと、あなたには……」  
「バツジエーオ……いったい何を……」

「それに……そんなに泣かないで。私は消えるわけじゃないの。

私は……あなたのこと……ずっとあなたの中に……」

「アロツコさん」

「うふふ……おバカさん……」

アロツコは本当に楽しそうな小さく微笑みを浮かべる。

「私はバツジェーオよ。それも飛び切り幸せな…ね…‥‥‥うふふ」

アロッコは顔をあげ、自分を覆う、今は枝しか見えない桜の木を見上げた。

「桜の花…もういちど、見たかったなあ…‥‥‥」

すっ - と

茜の頬から、手が滑り落ちる。

アロッコは、ゆっくりりと瞳を閉じた。

遙かな大鐘楼が、茜の絶叫をかき消すようかのように、大きな鐘の音を街中に響かせはじめた。

### 一週間後

茜は、アキラを胸に抱きながら、ひとり、あの小島に立っていた。

「バツジェーオ…アロッコさん…私、バカだから…‥‥」

茜は押し殺したような声で、桜の木に話しかけていた。

「私、やっぱり、アロッコさんがいないと…私…ひとりじゃ……」

・おなたはやっぱり愚か者ね　うふふ

「え？」

不意に、茜の耳に風にまぎれて、アロッコの声が聞こえてきた。

・あなたは　ひとりじゃないわ

「ひとりじゃ…ない？」

それは幻想なのか。

それは幻聴なのか。

それは幻夢なのか。

けれど

アロッコの声は優しく、暖かだった。

・私は消えたわけじゃない　いなくなったわけじゃない　私は　あなたの中にいるの　いつもね

「私の中に…いつも……」

・私は　いつもあなたの中に…形を変えて　今でも　あなたの中に  
こつして生きている

「アロッコさん……」

「だから泣いちゃダメ 泣いてちゃダメよ 茜……  
「でも、でも私、愚か者だから……」

茜は肩を震わせながら、つぶやく。

「さびしいよう……」

つぶやく。

「さびしいよう……さびしいよう……さびしいよう……」  
何度も何度もつぶやく。

風が舞う。

風が吹き抜けていく。

「さびしいよう……」

「お姉ちゃん」

不意に茜を呼ぶ声が響く。

「にゃうん」

アキラが声を上げる。

けれど茜は、うつむいたまま、振り向きもなかった。

「お姉ちゃん……私。 アリ・チエ……」

「……………」

そこには、灯里とアイに連れられた、アリーチェが立っていた。

「何か、ようつ？」

「お姉ちゃん…茜さん。やっぱり私をMAGA社に入れてください」

「は？」

「私もMAGA社に入って『愚か者』って呼ばれたい！」

「…なにを なにをバカなことを言ってるの？ こんな、いつなくなるか分からない会社に入ってどうするの？」

「しかも『愚か者』って呼ばれたいなんて、おかしいんじゃない！？」

背中を向けたまま、茜は吐き捨てるかのように言う。

「うっん…私、私も茜さんのように『愚か者』って呼ばれたい。お姉ちゃんと一緒に『素敵な愚か者』って呼ばれたい！」

「ほら ひとりじゃない うつぶ

今度はあなたの番ね

さあ 茜

うっん バツシエーオ 素敵で優しい愚か者……

風がささやいた。

茜は、何事かを小さくつぶやく。  
誰かに何かを告げるように、小さく、けれど力強くつぶやく。  
背中が震えた。

不意に茜は片手で、ぐいーと顔をぬぐう。

そして振り向き、叫んだ。

「よし。 それじゃ私のこと、今から『バッジエーオ』って呼ぶんだぞ！」

「はいっ。 バッジエーオ！」

アリ・チエが、なんのためらいもなく返事を返す。

「よしっ。 アリ・チエ」

「はいっ。 バッジエーオ！」

「おいつ。 アリ・チエ」

「はいっ。 バッジエーオ！」

「さあっ。 アリ・チエ」

「はいっ。 バッジエーオ！」

「アリ・チエ」

「バッジエーオ！」



「アリ・チエ」

「バツジエ・オー!!」

互いの名前を嬉しそうに、何度も何度も呼び合っふたり。

そんな、ふたりを笑顔で見つめる、アイと灯里の目の前を、一片のひとひら花片が横切った。

「…あ」

どうゆう不思議な力が働いたのか。

こんな、まだ冬も訪れていない季節に、島の桜が、一瞬にして満開の桜の花を咲かせていた。

「綺麗……」

「これが…これがアロッコさんの桜……」

咲いたそばから、次々と飛び散ってゆく桜の花びら。それはまた、アロッコにも似て……

「にゃあわうんん」

アキラが嬉しそうな鳴き声を上げた。

桜に包まれるふたりを残し、灯里とアイは、ゆっくりと島を離れた。

「灯里さん……」

「なに アイちゃん？」

アイが灯里の名を呼んだ。

「灯里さん」

「アイちゃん」

「灯里さん」

「アイちゃん」

「灯里さん……」

「アイちゃん……」

ただ、互いに、互いの名を呼び合う二人。  
けれど、ふたりにはそれだけで充分だった。

ふたりの口から、唄が紡ぎ出さる。

・ ゆりかごの唄を カナリアは謳うよ。  
ねんねこ ねんねこ ねんねこよ……

それは初めてアロッコと出会ったときの唄。

アロッコが

茜が

アリーチェが

そっと唄っていた、古くて、とても優しい子守唄。

- ゆりかごの上に 枇杷びわの実が揺れるよ  
ねんねこ ねんねこ ねんねこよ……

ゴンドラ（揺り籠）がゆく。  
ゆっくりと運河をくだってゆく。  
灯里とアイの歌声が重なってゆく。

- ゆりかごの綱を 木ねずみは揺するよ  
ねんねこ ねんねこ ねんねこよ……

ふたりの歌声は、ネオ・ヴァネツィアの空に。  
誰に聞かれるわけでもなく、静かに、小さく、  
けれども、いつまでも響きわたっていった。 けれど優しげに、い

- ゆりかごの夢に 黄色い月がかかるよ  
ねんねこ ねんねこ ねんねこよ……

アリア社長が、灯里の膝の上で、小さな寝息を立て始めた。

-  
「  
l a f f i n e  
「 l o a l l o c c o  
r i d d o  
- アロツコは笑う

l o a l l o c c o r i d o 後編(後書き)

「ゆりかごの唄」 作詞/北原 白秋 作曲/草川 信

「al loco - アロッコ」1. 「鳥」 トラブズク 2. ま  
ぬけ、ばか、あほう (伊和中辞典・1983/小学館)

『 Buona notte 』（前書き）

このお話は番外です。

このお話は、河井英里さんの『おやすみ』（アルバム「風の道へ」収録 作詞：藤沢晶子／作曲：河井英里）と、いう曲の歌詞に、私の駄文を追加して作った、お話です。

ですから、純粹な「ARIA」ファンの方、ごめんなさい。

この話は、「ARIA」の誰の話でもありません。はっきり言って、明確な主人公はいません。

それどころか「ARIA」でもないのかもしれないかもしれません。

ただ -

いちファンとして、どうしても、このお話を書きたかったのです。みな様が、この駄文を寛大な、お気持ちでもって許していただきほんの少しでも、河井英里さんの歌声を感じていただければ、これにまさる幸せはありません。

それではしばらくの間、お付き合いください。

『 B u n n a n o t t e 』

番外 『 B u n n a n o t t e 』

窓の外は雪あかり

白い妖精たちが この街を優しくだきしめている

木の枝から

氷の雫ひとつ 落ちてくるね

小さな雫がみなもに落ちて 小さな波紋を広げる

小さな波紋が、どこまでも広がって

静かに

静かに

静かな波紋が、幾重にも重なって

遙か遠くに

遙か彼方まで、駈けて行く

こんな静かな夜

ゆっくりと窓を開ける

深深と

音のない音が、体をしめつける  
心を震わせる

外は一面の星空

まるで すべての人々の輝きが  
空に登ってしまったかのような

白い吐息が、とまどうように空に浮かび消えていく

ともしびを

胸の中に灯して 探したいの  
遠い日の思い出

暖炉の中で炎が踊る

妖精は白いばかりではないと  
主張するかのように

あの子は、小さく寝息をたてて眠っている

その穏やかな寝顔  
その安らかな寝顔

どんな夢を見ているの？  
どんな夢を お迎えしているの？

あの人のことを夢みているの？



あの人とのことを夢みているの？  
それとも……

静かな夜

降るような星空

その輝きが、私の体を通り過ぎていく

春になったら 幼い頃のように  
花を集めて あなたに送る

あの丘に咲く花を

決して華やかじゃないけれど

決して煌びやかじゃないけれど

そつと無邪気に咲いている、あの花を

またいつの日か

あなたと あの丘まで

二人で行きたい

二人で風を感じながら

二人で微笑を交わしながら

舟を花でいっぱいにして……

静かな夜

ともしびを 胸の中に灯して  
伝えたいの

あなたがいたから  
あなたがいてくれたから

あなたの笑顔に支えられて  
あなたのやさしさに支えられて

今 私はここにいます  
今 私はここに立っています

見えますか？

これからも ずっと  
見ていてください

ありがとう

ともしびを  
胸の中に灯して

ありがとう

伝えたいの

この広い世界で たったふたつの心が  
出会えた奇跡に  
出会えた喜びに

あなたに伝えたい

ありがとう

だから今は……

おやすみ

まためぐり逢える、その日まで  
また笑顔で話せる、その時まで

おやすみ

探したいの  
遠い日の思い出を

伝えたいの

おやすみなさい

ありがとう

静かな夜  
窓の外は、雪あかり  
ともしびを

胸の中に灯して

- B U O N N A N O T T E ( おやすみ )

『 Buona notte 』（後書き）

野暮な蛇足的補足

河井英里<sup>かわい えり</sup>

「ARIA」主題歌「ウンディーネ」「ユーフォリア」「スピラーレ」/ 作詞

劇中 アテナ・グローリイ、歌唱パート担当

「まどろみの輪廻」 - うたわれるものED

「ALMATERIA」 - OVA テールズ・オブ・シンフォニア

OP

「シャ・リオン」 - ワズワースの冒険 主題歌

「Amazing Grace」 - PS2 龍が如くED

「Silent Night」 - PS2 龍が如く2ED 他

多数歌唱

2004年8月4日 肝臓癌のため死去

ちなみに彼女の公式サイト（<http://www.eri-ka.wai.com/>）は、未だに健在です。

11本目のお話しをお届けします。

……我ながら「なんだかなあ」って感じですよ（汗）  
前作、前々作がアレだったもんで、今回は軽い感じのモノを……と、  
思ってもコレですよ（汗）  
むやみとやたらと長い文章になってしまいました。

お話しをコンパクトにまとめるのが、大の苦手なのです。 すいま  
せん（涙）

この駄文を根気よく読んでいただけた皆様が、  
ライブに参加された時。  
コンサートをご覧になった時。  
TV中継を見られた時。

その舞台の袖の中に。あるいはカメラのフレームの外に。

こんな人達がいる事を、僅か1ミリ秒でも思っていただければ、こ  
れに勝る幸せは、ありません。

それでは、しばらくの間。 お付き合いください。

U n e l e n c o e l a s c h i n a 【序章】

黒い群集がうごめいていた。

「主が、お前たちは何者かと尋ねると、それは答えた…我が名は『レギオン』 我々は大勢であるが故に…」

「…聖書？」

少女の声に、隣に立つ褐色の肌を持つ女性が訊ねる。

「はい。 マルコ第五章です」

「…レギオン」

その女性は目を閉じ、上を向くと、そう囁み締めるようにつぶやいた。

第11話 『 U n e l e n c o e l a s c h i  
n a 【序章】 』

レギオンの群れは、その独特の言語で意思を伝え合っていた。

「それはソデに置いとけ」

「そいつはハナミチだ。トヤグチには置くなよ！」

「タチイチのバビリはすんだか？」

「58持ってこいつ。…照明さんじゃないお？」

「ジガスリ先にひくぞ。センターとつて」

「は#73だ。#77じゃねえぞつ」

「ムーヴィングの半分はジダチのトラスに使います」

「タテコミの前にSUS先行で降ろすぞ」

「チャキンだ。チャキン。8インチで6枚」

「3バトン。シャ幕OK！UPします」

「4タイコのフライング。チエツクは済んだか？」

「うわつ。俺の雪駄どこいった？」

「タツパはちゃんと取ってあるんだろっな？」

「オシてるぞ。マキで行けえ！」

「…いざ我ら降り立ちて、人々の言葉乱し、互いに意思を通ずる」  
とを得ざらしめん」

「故にそこは、バベルと呼ばれる……創世記ですね」  
今度は逆に、少女が聞き返す。

「ええ…災いなるかなバビロン。神の怒りに沈む街……」

褐色の肌を持ち、紫がかった銀色の髪をした美しい女性 -  
アテナ・グローリイは、それら訳のわからぬ言葉を発しつつ、蠢き  
回る黒い集団を見ながら思わず呟いた。



\*\*\*

アテナ。フェニーチェ劇場で歌劇歌手としてデビュー。<sup>オペラ</sup>  
その噂は、またたく間にネオ・ヴェネツィア中に広がった。

「セイレーン・天上の謳声」の通り名で呼ばれる、プリマ・ウンディーネ、アテナ・グローリイ。

ウンディーネの舟謳など聞きなれているはずの、ネオ・ヴェネツィアの住人達が、彼女を謳声がひとたび響けば、すべてを放り出し窓際に殺到し、彼女が通り過ぎるまでただじっと、その謳に聞き入る・とまで評される、アテナ・グローリイが

ついに正式なオペラ歌手として、デビューを果たすのだ。

お祭り好きのネオ・ヴェネツィアの人々が、熱狂しないわけがない。

そして、いよいよ明後日。

その公演が行なわれる！

「そこで、杏。あなたにお願いがあるの」

一週間前

アレサが言った。

アレサ・カニングラム女史。

オレンジ・ぷらねっとの人事部長。

「業界、第三の波」とまで言われる、数々の組織改革を断行し、わずか十年で、それまで業界最大手の姫屋を押さえて、オレンジ・ぷらねっとを売り上げトップに押し上げた、最大の功労者。

泣くウンディーネも黙る、強面女史。

けれどその実は、誰よりもウンディーネを - オレンジ・ぷらねっとだけでなく、全てのウンディーネ達を - 案じている心優しい女性。

杏は、今、彼女の急な呼びだしを受けて、その目の前に立っていた。

夢野 杏。

そんなオレンジ・ぷらねっとのウンディーネ。 階級は半人前<sup>シングル</sup>

少しこげ茶色が入った黒髪のショート・ボブ。 ブラウンの大きめな瞳に小さな鼻。 まだあどけなさが残る、少女の様な十八歳。趣味はそのかわいらしい顔立ちに似合う、ぬいぐるみ集め。

寮の部屋には壁を埋め尽くすほどのぬいぐるみが、所狭しと並べられていた。

けれど、何度プリマ昇格試験に落ちようとも「やわっこく、やわっ

こく」 そう自分に言い聞かせながら、挫ける事なく挑戦し続け、停滞はしても決して夢を諦めない。そんな芯の強さを持った、素敵な女の子だ。

「は、はあ…なんででしょうか」  
けれど今、杏は落ち着かない視線で、部屋の中に視線をめぐらせていた。

アレサ部長は、そんな杏に事務的に言い放った。

「プリマ昇格試験。諦めてもらっわ」  
「うきああああ！」

杏は頭を抱えてうずくまると、ふるふると泣き始めた。  
ついにっ。

ついに恐れていたことがやって来た！  
私は昇進試験を受けられない！  
プリマになれない！！

ふるふるふる。

・お父さん お母さん ごめんさない 杏は 杏は とつとつプリマになれませんでしたあああ  
これからはシングルでトラゲットを一生懸命がんばりますううう。

謝っておく。

とりあえず、父母に謝っておく。泣きながら。

「あ、あの。違うの。違うの、杏ちゃん」

「アテナ先輩……」

うるうると泣き続ける杏に、アテナ・グローリイが声をかける。

「アレサ部長。その言い方だと、杏ちゃんカン違いして…ねえ、杏ちゃん」

「は、はい……」

「大丈夫」

アテナはにっこりと微笑みながら言い放った。

「お暇をもらっただけだから……」

「ひよえええええ！」

またも悲鳴が上がる。

何、何、何。

何ですかそれは？

強制休暇ですか？

強制排除ですか？

強制退去ですか？

ふるふるふる。

・お姉ちゃん ごめんなさい ごめんなさい 杏は 杏は 何かト  
ンデモないことをしでかしたようです！

謝る。

今度は、姉に謝る。泣きながら

「部長&アテナあ。だから、その言い方だと。ほれ。杏、完全に誤解してるぜ」  
横から声がかかった。

「蒼羽さん……」  
視線の先には、何故か山のように詰まれた書類に囲まれた、蒼羽の姿があった。

蒼羽・R・モチヅキ。

杏の指導教官。

お客様を乗せるゴンドラ・クルーズはせず、オレンジ・ぷらねっとのシングルやペアを教育する、いわばウンディーネの先生。  
厳格で容赦なし。だがそれは後輩に対する確かな想いがあればこそだった。

杏が大好きな先輩。

「心配するな、杏」  
ゆらりと、なぜかどこか突き放したような口調で蒼羽は言い放った。

「ただ、ゴンドラに乗れなくなるだけだ……」  
「ぎっひゃあああああ!」

みたび、悲鳴が上がる。

それは、ウンディーネですらなくなるとゆうこと。

事務所勤務か食堂勤務か、はたまた雑用係か。 ようするにウンディーネ廃業なのだあ！

ふるふるふる。

・亜季&亜美 ごめん ふがいないお姉ちゃんで ごめん お姉ちゃんはお姉ちゃんはお姉ちゃんはお姉ちゃんあなた達の目標にはあああ！

謝る。

妹達に謝る。 泣きながら。

「だから部長&アテナさん&蒼羽教官。 あの子、完全に間違えますって」

「アトラちゃん…」

視線の先には、蒼羽の横で、やはり書類の山に埋もれている、アトラの姿があった。

アトラ・モンテヴェルディ。

相棒。寮での同室者。 ひとつ歳上の友達。 回復治療があるのに、未だに眼鏡をかけている親友。

その小さな眼鏡に、はっきりと杏の姿が写っている。

「心配しないで、杏」  
アトラは、瞬きもせず言い放った。

「もう…荷物は纏めといてあげたから……」  
「ぐわびれびいいい！」  
またまたまたまた、悲鳴が上がる。

ウンディーネ廃業どころか、オレンジ・ぶらねっとかからの解雇通告  
！？

ふるふるふる。

・アーク・ロイヤルごめん。ごめんなさい。 実家に帰ったら毎日、私がすっかり面倒みてあげるからあ！

謝る。

ペットの猫（コーニッシュレックス 4才）にまで謝る。 泣きながら。

「部長&アテナ先輩&蒼羽教官&アトラ先輩。 ですから杏先輩、  
でっかい思い違いをしています」

「アリスちゃん……」

杏の涙でぼやけた視界に、ひとりの少女が写し出される。

アリス・キャロル。

オレンジ・ぷらねつと期待の新星。

若干15歳でありながら、つい先日、見習いの「ペア」から一人前の「プリマ」へと、ネオ・ヴェネツィア初の「二階級飛び級昇格」を果たした逸材。 杏のよき友人のひとり。

・がしつ。

そのアリスが、杏の両手を己が両手でがっしりと握り締めながら言い放った。

「（暫しの）お別れです。元気で頑張ってくださいっ」「  
「らめえええええっ！」

トドメの一撃。

魂消る悲鳴と共に、杏の口から白い何かがぬけてゆく。

・あれ、みんなの姿が下に見える。

杏はゆっくりと気絶した。

夢野 杏。

どうにかすれば黒魔法の一つや二つ、ぶちかませる・そんな芯の強さを持った少女である。  
たしか……

\*\*\*



「ほら、もう気がつきますよ」

「ああ、ありがとう」

「いえいえ。 たまたま、お嬢の用事があつて来てたのが幸いでした。 それでウチは雨の降らない内にこれで。」

おい杏。 あんまり楽しんでると、ほんとに戻れなくなるぞお…

…」

ゆっくりと目を開ける視線のその先に、ちょうど扉から出て行く赤い色の制服の後姿が見えた。

「うん…あれ？ ここは何処？ 確か三階の窓の外の燦の上に片方だけのスニーカーがあつて……」

「なに言ってるの？ 杏」

「アトラちゃん……？」

正面に視線を戻すと、目の前にこちらを心配そうにのぞき込む、アトラの小さな眼鏡があつた。

「ほら。 大丈夫？」

「あの…私はいったい……」

「ごめん、ごめん」

アトラが拝むように両手を合わせて、小さく笑いながら謝った。

「つまり私に、アテナさんのお手伝いをして欲しいってことなんですね」

気付きの紅茶を飲みながら杏が、タメ息をついた。

「そうなの。しばらくウンディーネの業務は停止して、アテナの付き人をやって欲しいの。」

期限は明日から公演の当日まで。それまではオレンジ・ぷらねっとではなく、劇場近くのホテルに宿泊してもらいます」

「ああ…それでゴンドラに乗れなかったり、荷物をまとめたりって……」

「そうなの。ごめんね。杏」

「アレサ部長……そうならそうと初めから言っていただければ……」

「言おうとしたのよ。けれど、その前にみんなが……」

アレサの視線に、みんなが目をそらす。

心なしか、みんなの肩がかすかに震えているように見える。

「ああ、でも……付き人ならアリスちゃんが適任なのでは？」

「それがダメなんです」

アリスが残念そうに言う。

「アリスちゃんは予約がいっぱいな。今、大人気の『オレンジ・

プリンセス』さんだから」

アテナが通り名でアリスを呼んだ。

通り名 - とはプリマ・ウンディーネだけが名乗れる、もうひとつの名前。

アリスは飛び級昇進のときに、その名前をアテナからもらったのだ。その話題性とアリス自身の人気のために、彼女は連日、予約が入り続けていた。

「じゃあ蒼羽教官は？　ゴンドラ・クルーズはなさいませんし、同期ってことでアテナさんも何かとお願いしやすいのでは……」

「蒼羽はダメよ」

「なぜですか？」

「私のドラ焼き食べたから！」

「はいいい！？」

驚く杏に、アレサは傲然と言い放った。

「私が…私がせっかく楽しみにしていた、野火屋のドラ焼きを、蒼羽は勝手に食べたのよ！」

「いやだから部長。それなら無防備に机の上に出しっぱなしには……」

「五月蠅い！……そうゆう訳で、蒼羽には向こう一週間、書類整理を手伝ってもらっています」

「つつつつ……」

地獄の底から響いてくるような呻き声が、書類の山から聞こえてくる。

そしてよせばいいのに、杏がやっぱり地雷を踏む。

「蒼羽教官、またやらかしたんですか…ふげげ？」

疾風のように飛んできた蒼羽が、杏の両頬をつねりあげる。

「いらんこと言う　地獄な口は、この口か、この口か、この口かあ  
あぁあ！…」

「ふげげげげえっ」

杏の魂は、また抜け出しそうになった。

「じゃ、じゃあ、アトラちゃんはどうですか？」  
頬をさすりながら杏が問う。

「アトラもダメ」

「え？ どうしてですか？」

「書類整理なんて大切なこと、蒼羽ひとりに任せておけないわっ」  
「ひでえ……」

再び、書類の山の中から呻き声が響く。

「だからアトラには、蒼羽のフォローしてもらってます」

「……なぜ私が……」

下を向き、その小さな眼鏡を白く光らせながらアトラがつぶやく。

「あら、だってあなたは蒼羽のお弟子さんですからね。 連帯責任  
です」

「そんなぁ……なら杏だって……」

「適材適所よ」

アトラのボヤキをアレサは一刀両断にする。

「その分、杏にはアテナの世話で頑張ってもらいます」

アトラは一瞬考える。

ここでこうして蒼羽と共に書類に囲まれる一週間と、アテナの付き  
人として過ごす一週間。

答えは明白だ。

「書類整理、頑張ります！」

「ええ〜え！」

「杏先輩！」

情けない声を上げる杏の両手を、アリスが再び、グワシっ - と強くつかんだ。

「杏先輩、お願いします。もう杏先輩しか頼る人がいないんです」

「アリスちゃん？」

「アテナ先輩のドジにも動ぜず。アテナ先輩のフォローもできて。アテナ先輩の舵取りをできて。アテナ先輩の思いも読み取れて」

アリスが、ますます手に力を入れ、杏に迫る。

「アテナ先輩を注意できて。

アテナ先輩を嫌いにならなくて

アテナ先輩を見守ってくれて…そんな人は……」

「近い。アリスちゃん近い！」

杏が悲鳴を上げる。

気がつけば、すぐ目の前にアリスの顔があった。

そう。まさに唇が触れ合う距離まで。

「お願いします。杏先輩！」

「あ、アリスちゃん…」

すぐ目の前で、杏の手を握り締めながら、瞳を潤ませながら、頬を桜色に染めながら懇願するアリス。

- か、かわひいいい

なぜか胸が高鳴る。  
汗がしたたり落ちる。  
耳が熱い。

・あつあつあつあつ……

再び飛んでいきそうになる自分を、杏は必死で抑える。 けれど

「アテナ先輩をよろしくお願いします！」

「分かりましたあー!!」

杏は、つい反射的に答えていた。 あれえ？

「杏先輩。ありがとうございます！ でっかい大好きですう！ ぎ

ゅゅゅゅゅゅ

「ら、らめええええええ！」

アリスに抱きしめられ、杏の意識はやっぱり宇宙そふを飛んでいた。

- E s s e r e C o n t i n u a t o

( つ つ く )

今年は一度も野外に行かなかった。

……よかった（鹿馬）

「すごいわねえ……」

そんなこんなで五日後。

杏はアテナと共に、ここフェニーチェ劇場の舞台に立っていた。

「すごいですねえ……」

アテナが感嘆し、杏が答える。

そこでは無数のレギオン（スタッフ達）が、意味不明の言葉（舞台用語）をわめきつつ走り回っていた。

ある者は、セットを崩したり立て付けてたりする。

ある者は、何台ものスポットライトを持って走り回っている。

ある者は、巨大なスピーカーの中に頭を突っ込んで、音の出をチエツクしている。

喧騒と騒音にまみれ、舞台は一種、異様な活気を呈していた。

『 U n e l e n c o e l a s c h i n a 』  
【 第1幕 】

【 第一場 】



「おい。そのふたりい！ セリが降りるからワラエ！」  
ひとりの初老の男性が、杏とアテナに向かって怒鳴った。

・きよとん？

と、するふたりに、男は再び怒鳴る。

「バカ野郎っ。　ワラエってのが分からないのか。　さっさとワラエ！」

「あ、杏ちゃん……」

「は、はい、アテナさん……」

ふたりは顔を見合わせる。

「よく分からないけど……」

「はい……よく分かりませんが、とりあえず……」

「ええ。とりあえず……にこおっ」

「はい。……にこりい」

「ああ？　お前等、なに笑って……って、シロウトさんかあ……」  
杏とアテナの、そのぎこちない笑顔を見ながら、脱力したように男は呻いた。

「ったく、ガヤがなんでこんな所にいるんだよ。　おい、アカリ。

アカリっ。　アカリはいないのか！！」

「はああ〜ひ」

男の怒鳴り声に答えるように、若い声が響く。  
大きなセットの後ろから、ひとりの女の子が現れた。

・えっ？　灯里ちゃん？

その子は、杏とアテナがよく知っている女の子と、とても良く似ていた。

違うのは、髪の毛がショートで、色が黒であることと、大きな眼鏡をかけていること。

黒いT・シャツ。 同じような黒のよれよれのパンツ。 およそ女の子らしからぬ服装であること。

そしてなによりもの違いは、ビニールテープ（白・黒・赤等多数）やガバチヨ（ガムテープ。ただし布製限定。飛ばない）

それに、ペンやら鋏やら突っ込まれているバカでかいウエストポーチを腰に回していることだ。

「なんですか？ 舞台監督」

「灯梨。このふたりを楽屋まで案内してやんな。こんなトコ、うるうるされたんじゃないや危なくてしょうがねえ」

「……？ うわっ。アテナ・グローリイ？ ほんもの!？」

灯梨と呼ばれたその少女は、アテナの顔を見るなり叫んだ。

「えと……はい。本物のアテナ・グローリイです」

アテナが深々とお辞儀をする。

「なんでえ。灯梨。知り合いか？」

「ちよっ……舞台監督、ご存知ないんですか？ アテナさんですよ？ 『天上の謳声』ですよ。今度の主役ですよ!？」

「はあ？ 今度のカンバンがなぜ、こんな時間にこんな所にいるんだ」

「さあ……それは」

「あの……それは」

首をかしげる二人に、杏が答えた。

「今日の9時に劇場に集合って聞いたものですから…ねえ。アテナさん」

「はい。確かに9時って聞きました」

「なに、噛んでるんです?」

自信たっぷりと言うアテナに、杏が思わずツッコみを入れる。

「そりゃ間違いだ」

「はい?」

舞台監督と呼ばれた男が言い切った。

「私達の間では時間は24時間表記なんです」

灯梨が、すまなそうに言う。

「ですから今は21時。9時とゆうのは、明日の朝、午前九時のことなんです」

「……」

「でないと、今みたいな間違いが起こるので……」

灯梨の声は、最後ほとんど聞き取れないくらい小さくなる。

「アテナさん」

杏の声は冷たい。

「ご、ごめんなさい」

アテナは再び、深々と頭を下げた。

【第二場】

・せっかくだからと。

杏とアテナは劇場内・それも普段は一般には見れない、いわゆる舞台裏を見せてもらうことにした。

「ごめんなさい。お仕事の途中なのに……」

「いえ、ぜんぜん大丈夫ですよ」

謝るアテナに灯梨は笑顔で答えた。

「私も『天上の謳声』のアテナさんと、こうして一緒にいれることが嬉しいですから……それに」

「それに？」

「私はまだ半人前なので、仕事でも手伝えることが少なくて……」

「半人前……」

杏がつぶやく。

「やっぱり、このお仕事でも一人前になるって大変なんですね」

「えへへ。まあ、プリマ・ウンディーネになるよりは簡単ですが」  
そう言って灯梨は鼻を掻いた。

「そうなんですか？」

「ええ。ってゆうか、この業界には、ウンディーネさん達のような明確な線引きってなくて、若くてもセンスがあればチーフですし。それにウチのブカンは『歳で仕事するわけじゃない』って、いつも言いますし」

「ブカン？」

「ああ。舞監<sup>ブカン</sup> 舞台監督のことです。さっき一緒に話してた人がそうです」

「あの『ワラエ』って叫んでた、おぢさんですか？」

「おぢさんって……」

灯梨が苦笑する。

「プロデューサーがその公演の全ての責任者なら、舞台監督は、その公演の舞台上の総責任者なんです。」

演出家や脚本家との打ち合わせ。 道具方や照明、音響といった技術職とのすり合わせ。 タイムスケジュールの確定。

果ては出演者さんの愚痴聞いたり、お弁当の手配を考えたり……いろいろとたいへんなんですよ。」

「あくだからあのときも、とまどう私達に『ワラエ』って、優しく声をかけてくださっただんですね。」

アテナのセリフに、灯梨は見事にすっ転んだ。

「大丈夫ですか？」

「あなた……いえ。 その……」

あわてて駆け寄る杏とアテナに、灯梨は頭から埃を振りまきながら答えた。

「『ワラエ』ってゆうのは舞台用語の一つで『除ける』とか『片付ける』って意味なんです。」

「へえ？」

「だからワラエって言われたのは、笑うんじゃなくて『早くそこからどけ』って意味で……」

ほんの少しの長い・間

「……………」

アテナは小さく舌を出した。

「それにしても、ずいぶん大勢の人がいるんですね」

杏が舞台を忙しく走り回る、スタッフ達を見ながら言う。

「このフェニーチェ劇場は古いですから  
灯梨が答える。」

「こないだ、こけら落とし……新しい劇場で行なわれる初めての公演って意味です。が、あったヴァローレ劇場と違って

この小屋は、昔のマンホームのヴェネツィアにあった劇場を、ほぼそのまま持って来たものですから、設備も古いんです」

「そうなんですかあ」

「ええ。おかげで人に頼る部分が多くて。でも、そこが楽しいんですよ」

その灯梨の笑顔に、杏もアテナも、思わず微笑んでしまった。

「ここがオペレート（操作）室です」

灯梨がまずふたたりを案内したのは、客席の後ろにある、ガラス張りの部屋だった。

「ここで照明、音響のチーフが、それぞれの卓を操作して、音と光の調整をします」

そこは何台ものモニターと、各種スイッチ、レバー。幾十もの小

さなライトが灯る台（卓）がある、静かな空間だった。

「ここフェニーチェ劇場では、カミテが音響室。シモテが照明室になってます」

「カミテ、シモテ？」

「ああ……これも舞台用語で上手は客席から舞台を見て右手。下手は左手を意味します。」

舞台にいと、どちらが右か左か分からなくなることがあるんで、それでそうゆう風な言い方をして方向を固定してるんです」

音響、照明、両オペレート室とも、何人ものスタッフがつめて、打ち合わせをしていた。

「よろしくお願いします」

再び深々と頭を下げるアテナに、誰もが驚きの顔を浮かべながらも、笑顔で迎え入れてくれた。

「あの……なんだか私達、さっきからスタッフの人達に驚かれていますよ。あんな気がするんですけど……何か変だったでしょうか？」

舞台脇の階段を登りながら、アテナが訊ねた。

「あゝいえいえ。それは大丈夫です」

「本当ですか？」

「ええ。ただたんにお二人が珍しいですよ」

「珍しい？」

「ウンディーネが珍しいんですか？」

「あはは。 違います違います」  
灯梨は大きな声で笑った。

「出演者。 それもカンバンが……ああ、主役の人って意味です。  
が、挨拶してくれるのが珍しいんですよ」

「そう……なんですか？」

「はい。 もちろん、ちゃんと挨拶してくれる人もいます。 でも  
それはせいぜい舞台監督までで、ひとりひとりのスタッフに  
声をかけて挨拶してくれる人は、なかなかいませんね」

「え、でもそれは……」

「いえいえ。 別に悪くはありません。 当たり前のことですから」

「当たり前……ですか」

「はい。 当たり前のことなんです」

「はあ……」

くったくなく笑う灯梨。 その笑顔を見ながらも、杏とアテナは釈  
然としなかった。

### 【 第三場 】

「さあ、ここが天井裏です」

階段から続くドアを押し開けながら、灯梨が言う。

「うわあ……」

そこは薄暗い空間。

ホールの天井を支える、大小さまざまな鉄骨が入り組み、その中に  
もうしわけ程度の狭い通路が設置キヤットウォークされている。



「これがフェニーチエ劇場のメインスピーカーです」  
「大きい……」

舞台前面。客席の最前列のすぐ天井裏。  
そこには人の身の丈を遥かに超える、巨大なスピーカーが二台、ひっそりとたたずんでいた。

「これ、後先考えずに全出力で音を出せば、人を吹き飛ばすことも可能なんですよ。うっへっへえ」

「恐っ

灯梨の妖しい笑顔に戦慄する杏とアテナ。

「これ以外にも今回の公演には、フライング・スピーカーをガラム（隠しスピーカー）に吊って、舞台上のフロントスピーカーや客席後方のウォールスピーカーまで用意をして万全の備えをしているんですよ。全方位包囲態勢ですね。くっくっくっ」

そんなふたりの心を知ってか知らずか、灯梨はとても楽しげに話を続ける。

「お、オペラの音響ってスゴいんですね」

「ええ。オペラの音は、いちばん大変なんです」

「そ、そうなんですか」

杏がうわずった声を出す。

「はい……いかに自然な音を出すか。いかにマイクを使いながら地

声の音を出すか。そもマイクを何処に仕込むのか。

上半身、まっ裸の奴にどうやって客に分からないようにマイクを仕込むか。衣擦れの音をどうやって防ぐのか。

それでいて管弦楽の演奏との音のバランスにも気をつかわなければなりません。そうっ！」

灯梨は右腕を天に突き出した。 とたん -

- っっ

にぶい音がして、灯梨が物も言わずにうずくまる。

低い鉄骨に鉄拳を喰らわせたのだ。

もちろん、結果は灯梨の惨敗。

「くっくっく……オペラは音が命」

灯梨が右手を押さえながら、涙目で立ち上がる。

「お、オペラは、音響の腕の見せ所です。オペラに比べれば、ちやらいコンサートのPAなんざ、ペペペのぺ〜 です」

「は、はははは……」

- ちやらい……しかも、ペペペのぺ〜 って……

実はこの人、危ないんじゃない？

自分達に背を向け、右手を押さえ、どうみても涙をぬぐっている灯梨のその背中を見ながら、杏とアテナの脳裏に、そんな思いが駆け巡る。

「でもね、アテナさん……」

「は、はいっ」

突然振り向き、アテナを名指して呼ぶ灯梨。アテナが硬直する。

「アテナさんの謳声をもってすれば、マイクもスピーカーも必要ありませんものね…うふ…うふ…うふふ」

「あ、ありがとうございます。頑張ります！」

灯梨の低い笑い声に、アテナが壊れた人形のように何度も頭を下げた。

「そしてここがP I N<sup>ピン</sup>スポット室です」

「へええ……」

次に案内された部屋。

そこは前面がガラス張りの横長の狭い部屋。

天井にへばりつくように設置されているその部屋からは、舞台の全体が一望できた。

「これがP I Nスポットライト。通称ピンスポです」

灯梨が一台のスポットライトに軽く手を置きながら説明する。

それはまるで大砲のような形をした、灰色の筒のような物体だった。上部に三本のレバーが突き出ている。

側面には、赤や白のスナップスイッチが何個か並んでいる。

そしてその本体自体は「Y」字型のスタンドに乗せられて、自由自在に動くようになっていた。

「このピンスポはピックアップ用のスポットで……あのよくコンサ  
ートなんかで、ひとひとりだけにスポットが当たってるのは  
全部、このスポットライトなんですよ」

「へえ……」

「昔はこのスポット一台に一人のオペレーターがついて操作してま  
したけど、今では下のオペレート室から全スポットを操作できます」

灯梨はずらりと並んだ何本ものピンスポを手で示した。

「それに明日アテナさんにもつけていただきますが、マーカーをつ  
ければ、対象者がどう動こうが自動追尾で何処までも追いかけます」  
「はあ……あのトイレまでもですか？」

「あはは。面白い。アテナさんのような三大妖精でも、そんな冗  
談を言うんですね」

「いえ、真剣マジメです」

笑う灯梨に、杏は心の中でそっとツツコミを入れた。

「私はね。この場所が一番好きなんです」  
灯梨がポツリと言う。

「どつゆつことですか？」  
杏の問いかけに、灯梨が恥ずかしそうに答えた。

「ここは舞台全体を見れます。 道具も照明も音響も……すべてここ」

から見渡せます。

まるで自分が舞台を…コンサート、その全てを見下ろせる、何か特別な存在になってしまったかのよう……

そんな変な錯覚をしてしまうような、そんな場所なんです、ここは……」

「遙かなる神々の座……」

「はい。まさにここは神の俯瞰です。……アテナさん」

「はい」

「当日、私はここからアテナさんを見せていただきます」

「はい……」

「ほんとうに、ほんとうに楽しみにさせていただきます」

「はいっ」

アテナは女神のように微笑んだ。

「ここが奈落ならくです」

最後に案内されたのは、地下にある大きな倉庫のような場所だった。

「ここは舞台の真下で、今まで使われたセットや照明、音響機材なんかは保管されています」

見回せば、あちらこちらに街の絵を描いたパネルや布（ドロップと呼ぶらしい）や、スポットライトを入れた箱、

大小さまざまなスピーカーなどが雑然と保管されていた。

「奈落……」

「ええ、よく『奈落の底』とかの言われ方しますね。あと、

昔には敵役の名前に使われたことも……」

突然、声高な警報音が鳴り響く。

「な、なに？」

アテナが杏にしがみついた。

「大丈夫ですよ。ほら」

灯梨が微笑みながら天上を指差した。

突然、天井が長方形に切り取られる。

やがて静かなモーター音と、腹に響く低い振動音と共に、切り取られた天井が、ゆっくりと下に降りてきた。大きい。

長さは十メートル以上、幅も五メートル以上の大きさの舞台が降りてくるのだ。

「これが大迫り（オオゼリ）です。場面転換やヒナ壇なんかに使われますね」

大迫りの上には、何人もの道具方のスタッフが、家や壁の絵を描いたパネルと共に乗っかっている。

彼等は降りきると、素早くパネルを降ろし片付け、新たなパネルや道具を乗せ、再びあがって行く。

- B e e e

再び、警報音が鳴り響く。

「今度は、小迫り（コゼリ）が降りてきますよ」  
灯梨が指差す。

また天井が切り取られる。  
が、今度は先程の大迫りより余程、小さい。  
それぞれ三メートルほどの正方形に近い舞台が、やはりスピーカー  
やスポットライトを乗せて降りてくる。

「本番ではアテナさんには、あれに乗ってもらいます」  
「ええ!？」  
アテナが驚きの声を上げる。

「暗転……真つ暗闇の中、アテナさんは小迫りでアップしてもらっ  
て舞台に板付き、そこで謳っていたいただきます」  
「だ、大丈夫でしょうか？」  
「大丈夫ですよ」  
灯梨がやっぱり妖しげな微笑で答える。

「めったに壊れません」  
「……ひっ」  
「ほらちようどいい。今からアレに乗って、舞台上がりましょう」  
灯梨は引きつるアテナの腕をつかむと、小迫りの方へと引っ張って  
行く。

「待つて待つて待つてえ」  
杏はあわてて、その後続いた。

「小迫りUPしまあーす。さあ、行きますよ」  
灯梨の声と共に、迫りが動き始める。

「あっ」

アテナが少し揺らめいた。

「大丈夫ですか？」

杏が横から支える。

「うん、大丈夫。 ありがとう。 ちょっとよろけただけだから……」  
アテナは杏に感謝しながら言った。

けれどこの時 -

アテナの髪から小さな髪留めのピンが落ちた事に誰も気付かなかつた。

そしてそのピンは、小迫りから滑り落ちると、暗い奈落に落ちて行き……

#### 【 第四場 】

ゆっくりと地面が近付いて来る。

二階分の高さはゆうにあるだろう。

それはガラス張りのエレベーターに乗って、地下から地上に上がって行く時の感じに似ていた。

もっとも迫りには、エレベーターのような手すりも壁もありはしなかったが……

「まるで空母赤城の艦載機エレベーターみたいですね」

「それなら回り舞台も使つて、ZATやスパー？3の発進シークエンスな感じも出せますよお」

杏と灯梨が顔を見合わせながら、あはは - と笑い合う。



アテナは、きよんとするばかり……

- W A A A A N X X X

低い耳鳴りがする。

やがてアテナ達の体は、上半身から膝丈。そして全身へとその姿を舞台上に現した。

「はい到着です」

軽い衝撃とともに、小迫りが停止する。

「実際はこれでアテナさんにスポットライトが当たり、唄が始まります」

「はい。分かりました」

「だからどうして、そこで嘔むんですか？」

杏がすかさず、ツッコんだ。

「ああ。アテナちゃん。こんな所に居たのおお！」  
三人の男が近付いて来る。

プロデューサー。劇場総支配人。そして舞台監督の三人だった。

「みなさん。こんにちは」

アテナが頭を下げる。杏もあわててアテナに習った。

「だめだよ、アテナちゃん。僕達、業界人は『お早うございます』って挨拶するんだよお」

プロデューサーの男が甘い声を出す。

「はあ…こんな時間でもですか？」

「はい。 私達の仕事は時間が不規則なので、朝、会っても、夜、会っても『お早う』って挨拶するんです」

「うるさいなあ。 アテナちゃんは今、僕と話してるんだよ。 君は口を挟まないでよ」

灯梨にプロデューサーの叱責が飛ぶ。

「す、すいませんでした」

「まったく、こんな埃っぽい場所にアテナちゃんを連れてくるなんて…彼女の天使の喉を傷めてしまったらどうすんのかなあ」

「すいません」

灯梨がもう一度、謝罪する。

「あ、あの……」

「さあさあ、アテナちゃん。 ホテルに帰りましょう。 こんな所、いつまでもあなたが居る場所じゃないよ」

「いえ、でも……」

「いや、もう時間も遅い。 アンタは引き上げてくれ。 これから俺達の時間だ」

「舞台監督さん……」

「そうそう。 行こうよ、アテナちゃん。 ついでにホテルのラウンジで少し飲まない？ 飲みながら明日の打ち合わせでもしましょう」

「あの……」

「あそこには僕のボトル、キープしてあるんだ。 年代物のワインもね」

「あの私は……」

「ゆっくりふたりで飲もうじゃないの」

「アテナさんは、お酒は、お飲みになりません」  
杏が言い切った。

「お酒は喉に良くないので、お飲みにならないんです」  
実際は少しは飲むのだから、こんな奴と一緒に飲ませてたまるか！  
と、杏がとつさの機転をきかせたのだ。

「（…ちっ） そーなんだあ。じゃあ仕方ないね。とりあえずホテルに帰ろうよ。ここに居てもしょうがないし」

「あの、この人達……」  
「え？」

「この人達はとうするんですか？」

アテナは忙しく動き回るスタッフ達を見ながら訊ねた。

「こいつらはもちろん徹夜で働いてもらうよ」

プロデューサーは『何を聞くのだ？』といった態度で答えた。

「舞台監督さん。明日の13時までにはきっちり仕上げといてね。オシは許さないから」

「分かった。時間は守るよ」

「よろしくね。さあ、アテナちゃん。行きましょう」

「あ…でも」

杏とアテナは、灯梨と舞台監督を見る。

「お疲れさまでした」

けれど舞台監督はなにも言わず、灯梨はただ無表情に、そう言っ  
て頭を下げるだけだった。

(^UJ) o t a

u n n t i . C o o r d i n a t e s

このお話はフィクションです。  
実在するいかなる人物、劇場、舞台、公演および事象とも無関係で  
す。

一応、言っておいたほうが良さに思いました（汗鹿馬）

U n e l e n c o e l a s c h i e n a 【 第 2 幕 】

U n e l e n c o e l a s c h i e n a 【 第  
2 幕 ・ 第 一 場 】

- 翌朝

いつもの習慣で、杏は6時に目が覚めた。

「うつつうつつふん。ああああ……」  
ベッドの上で大きく伸びをひとつ。

それから起き上がると、浴室へ。

洗面がてら少し熱めのシャワーを頭からかぶる。  
冷えた体を伝うお湯が、とても気持ちいい。

そのまま歯磨きをすませると今度はドライヤーを使い、髪の毛を乾かす。

アトラヤアリスと違って、杏の短い髪は、こつゆつ時には便利だ。

ヘアメイク終了。

着替えをすますと隣の部屋へ。

ノックを五回。少し間をおいて、さらに二回。

それが杏が来たことを示す秘密の合図だった。  
なぜ秘密の合図を？

それはあのクソ・プロデューサーが、あからさまにアテナを狙っているからだ。

夜、何度も訊ねて来ては、アテナを連れ出そうとするのだ。

杏は、そのあまりにあからさまな態度に、アテナの出演取り消しを、何度アレサ部長に具申しようと思ったことが！

もつともアテナ自身は、相変わらずのマイペースで、にこにここと微笑んでいただけだったが……

「アテナさん。杏です。朝ですよ。起きてますか？」  
返事はない。  
耳をこらす。

なにやらもぞもぞと動き回る気配はするが、ドアが開かれる様子はない。

「アテナさん。朝です。起きてください。アテナさん」  
再びドアを叩きながら、杏が声を上げる。  
それでもやはり、ドアが開く様子は、一向にない。

- しょーがないなあ

杏はポケットからカード鍵を取り出すと、スリットに差し込んだ。  
小さな電子音がして、開錠される。  
勢いよく、ドアを開ける。

ホテル泊の初日。

朝の弱いアテナは、あらかじめ鍵を杏に渡し、起こしてくれるよう

に頼んでいたのだ。

最初は遠慮して、おずおずと部屋に入っていた杏だったが、一週間近く経った今、そんな遠慮は微塵もなかった。

ベッドの上に目をやる。

そこには誰もいない。

…はあ……

ため息（アトラの言う『サイ』）を吐きながら、ベッドの横に回り込む。

案の定、そこには仰向けに上半身をベッドから落つことしたまま、それでも器用に寝息を立てているアテナの姿があった。着ているパジャマがめくれ、おへそが丸見えだった。

「も、もう、アテナさん。起きてください」

杏は素早く駆け寄ると、急いでパジャマをずり上げた。

「あ…あゝ杏ちゃん。おはよう……」

アテナが逆さまになったまま、トロンとした瞳で挨拶する。

…うがああ。なんて色っばい……

知らず知らずのうちに杏の頬が上気する。

「さ、さあああ、さっさと起きてシャワーでも浴びてください。

朝ご飯、食べに行きますよ」

「ふにゆう…はあゝい」

アテナは満面の笑みを浮かべると起き上がり、ふらふらと浴室へと歩いて行った。



・どきどきどき

なぜか杏の心臓が激しく高鳴る。

この一週間でだいぶ慣れたハズなのに……アリスちゃんは、よく我慢できるモンだ。

杏の思考は、少しズレていた。

「きゃ ああああああ！」

突然、部屋中にアテナの悲鳴が響き渡る。

「どうしましたっ!？」

杏は反射的に浴室に駆け寄った。

途端、頭から水を滴らせたままのアテナが、一糸纏わぬ姿で飛び出してきた。

「アテナさん!？」

その姿に驚く暇もあればこそ、アテナは杏に抱きついてきた。小刻みに震えている。

「あ、アテナさん。いったい何が……」

褐色の美しい肌が、杏の鼓膜に焼きつく。

いい匂いがする。

柔らかい。

そんなアテナに抱きしめられながら、杏は目を白黒させながら訊ねた。

「つめ……」

「え？」

「つめ……た……」

「ええ？」

「冷たい……いいいい……」

寝ぼけたアテナは、お湯ではなく、水のシャワーを頭からかぶってしまったのだ。

アテナは強く杏を抱きしめてくる。

再び心臓が高鳴る。

また何処かへ飛んで行ってしまいそうだ。

杏はアテナに抱きしめられたまま浴室に入ると、改めてシャワーをお湯に切り替えて、アテナに手渡した。

「はづつ……ごめんなさい。杏ちゃん。ありがとう」

頭からお湯をかぶり、ようやく落ち着いたアテナが、杏に向かってお礼を言う。

「いや、つかつ。そんな真っ裸のまま、面と向かって頭を下げられても……」

杏はあわてて背中を向けると、浴室から退散した。

「熱い……」

両手で熱く火照る頬を押さえ込みながら、杏は改めてアリスの偉大さを認識する。

杏の思考は、やはりどこか微妙にズレていた。

## 【 第二場 】

「いい加減、飽きましたね……」

「……うん」

ホテルのレストランで、朝食を乗せたお皿を前に、手にフォークとナイフを持ったまま、杏とアテナはつぶやいていた。

このホテルの食事の味が悪いわけではない。

バイキング形式の朝食は、メニューも豊富でバラエティにも富んでいた。

けれど……

「さすがに一週間もいるとねえ……」

「はい… オレンジ・ぷらねっとの朝ごはん、食べたいです」

内容的にも、味的にも、このホテルのレストランと、オレンジ・ぷらねっとの食堂との間には、そんなに差はないはずなのに  
杏もアテナも、なぜかオレンジ・ぷらねっとの味が恋しかった。

「今日の予定は……」

食後の紅茶を飲みながら杏は手帳を開き、アテナに今日のスケジュールの確認をした。

「9時に……9時ですよ。フェニーチェ劇場のリハーサル室に集合。お昼まで歌のレッスン。」

それから13時から、本番で着る服の最終確認。その後、共演の人との唄い合わせ。

夕食を取って、19時から舞台でリハーサルだそうです。

「はい」

「やあ、おはようございます」

そんなふたりに、ひとりの紳士が声をかけてきた。

「あつ、アンドレアさん。おはようございます」

「おはようございます」

杏もアテナも、ちゃんと席から立ち上がり、紳士に向かって頭をさげた。

彼こそがアテナ・グローリイを『口説き落と』し、オペラに出演させることに成功した立役者。

フェニーチェ劇場の総支配人。アンドレア・パヴァロッティ氏だ。

「いよいよ明日ですね。ウンディーネのお仕事をしながら二ヶ月間、お芝居の稽古もしていただき、本当にご苦労様でした」  
アンドレアがにこやかに微笑む。

「いえ。こちらこそ、我がままを言ってすみません」

アテナが申し訳なさそうに言う。

実は今回のアテナのオペラ・デビューは、前々から親交もあり、アテナの謳声を高く評価していたアンドレアが、「三顧の礼」でもって彼女に頼み込み、ようやく一回限り、一夜限り・とゆう条件で、実現させたものなのだ。

「いえ。無理を承知で頼み込んだのはこちらの方です。それはお気遣いなしに。

それより明日はよろしくお願いします。私も、いちファンとして、とても楽しみしております」

「ありがとうございます。私も今までお世話になった方々全てのために頑張ります」

「お世話になった方々といえば……」

「はい？」

「あの方々は…スタッフのみなさんは、どうされているんですか？」

「徹夜です」

「え？」

杏の問いかけに、アンドレアの顔が少し翳る。

「彼等は我がフェリーチエ劇場が誇る、素晴らしいスタッフ達です。

その彼等は今、寝ずに舞台を作り上げています」

「……………」

「ですからアテナさん」

「はい」

「あなたの最高の謳声を聞かせてやってください」

・スタッフ達にも

言外にそんな意味を込めて、静かに、けれど力強く、アンドレアはアテナに言った。

「やあやあ。 お早う、アテナちゃん。 あっ、支配人も、お早う  
っす」

プロデューサーがやってきた。

「おはようございます。 プロデューサーさん」

「おはようございます」

「ああ。 おはよう」

「うーん。 いい朝だねえ」

そう言うとプロデューサーは許可も得ずに、アテナ達のテーブルに  
座り、朝食を食べ始める。

「今日の目玉焼き、ちょっと硬くね？ サラダもレタスの切り方が  
雑じゃない？」

もぐもぐと食べながら言う。

「ボイルもいいけど、やっぱりソーセージは焼いてほしいよね。  
ベーコンももつとカリカリにしてさ。」

アテナちゃんもそう思わない？」

・文句を言いながらも、よく喰う奴だ。

杏は無然と、その姿を見ていた。

「いえ。 私は美味しくいただきました」  
アテナが笑顔でやんわりと言う。

「ふうん。じゃあ今度サ。僕がとびきり美味しいお店、紹介してあげるよ。」

一緒に食べにいこう

「ありがとうございます。機会があれば、お願いします」

んな機会はぜってえねえ！

杏もにこやかに笑いながら、心の中で激しく裏拳ツッコみを入れる。

「うん。僕に任せておいてよ。僕は演出だけじゃなくて、エスコートも得意なんだよお」

シバイタロカあああ！

机をひっくり返したくなる衝動を、杏はなんとか押さえ込む。

「ところで支配人」

そんな杏の気持ちに気付きもせず、コーヒーを飲みながら（当然のようにブラックだ）プロデューサーはアンドレアに話しかける。

「なんですかな、プロデューサー」

「お宅の劇場。いつまであの調子なの？」

「あの調子といますと？」

「あのね……」

プロデューサーはコーヒーのカップを置くと、椅子の背もたれに寄りかかるように体をあずけ、体を斜めにしながら言い放った。

「古いんだよね」

「……………」

「いつまでもあんな、手動操作の多い舞台機構なんて、ありえなく

ね？　いつそのこと、ヴァローレ劇場みたいに近代化して  
全自動制御の舞台にしちゃったら？　そしたら、あんな余分な裏  
方もいらないし、経済的だよ。

それにその方が、僕の演出も冴えると思うんだけどなあ  
「あの」

話しかけてから後悔する。

けれど杏はどうしても訊ねずにいられなかった。

「あの、そうしたら、今いるスタッフの方々はどうなるんですか？」

杏の脳裏に、舞台監督が、灯梨が、その他の多くのスタッフ達の姿  
が思い出される。

みな真剣に、額に汗を浮かべながら、寡黙に、けれど笑いながら、  
舞台を走り回るその姿が浮かんでは消えてゆく。

「それはしょうがないっしょ」

プロデューサーの返事は、にべもなかった。

「老兵は死なず。　ただ消え行くのみ……サ」

洒落たことを言ったつもりか、プロデューサーは大きく笑った。

「そんな！」

「杏ちゃん」

激昂しかかる杏の肩に、アテナの手が置かれる

「行きましよう杏ちゃん。　時間よ」

「アテナさん……」

「すいません、プロデューサーさん。　アンドレア支配人。　私達は

これで失礼します」



アテナは小さく頭を下げた。

「ええ？ どうしたのアテナちゃん。 まだ、リハまで時間があるよ？」

「すみません。 これから少しの時間、この子のゴンドラ練習に付き合わないといけませんので……」

「ええ〜え。 そんなのどうでもいいじゃん。 もうちょっと、お茶していいじゃない？」

・どうでもいいですって!？

アテナさん…水の三大妖精のひとり。

「セイレーン・天上の謳声」を持つ、トップ・プリマ。

そんなアテナ・グローリイに、直々に教えてもらえる稀有な時間を、どうでもいいですってえ!？

このこのこのおっつ……

「すみません」

けれど杏が何かのリアクションを起こす前に、アテナが先に頭を下げた。

「それが杏ちゃんの…この子の一週間を私のために使ってもらう対価なので。 さっ、行きましょう。 杏ちゃん」

そう言うとアテナは、もう一度頭を下げると杏の手をひっぱり、レストランから退出した。

そんなふたりをプロデューサーは舌打ちで、アンドレアはただ無言で見送った。

【 第三場 】

「ぶーぶーぶーぶうううっ」

「ほらほら、杏ちゃん。オール使いが荒いわよ。どうしたの？」

「どうしたのって、アテナさんは何とも思わないんですか？」

「え？ なにが？」

「なにがって、あのプロデューサーの態度にですよー！」

「ん？ どうして？」

「だって、馴れ馴れしいし、スタッフさん達の悪口言うし。こと

あることに、アテナさん口説こうとするし……」

「うふふ。杏ちゃんは優しいのね」

「アテナさん……」

「ねっ。杏ちゃん。杏ちゃんは、ウンディーネにとって大切な

ことは何だと思っ？」

「え？ えと…それは操舵や観光案内や、舟謳カントオーネですか？」

「ええ。確かにそれは全部大切なことね。でもね杏ちゃん。

それよりも大切なことがあるの」

「それよりも大切なこと？」

「ええ。それは『心』よ」

「心……」

「ここネオ・ヴェネツィアには色んな人達が訪れるわ」

アテナが、そよ風に髪をなびかせながら言う。

「そんな色んな人達すべてに、この街を知ってもらいたい。この

街を好きになつてもらいたい。」

「……………」  
「私達ウンディーネに必要なのは、きつと、そう思う」心『な  
の。

もちろん、いいお客様もいれば、そうでないお客様もいる。

けれどそんなお客様を、私達ウンディーネが嫌いになつて……嫌  
がってしまったえば、誰がこの街の素晴らしさを、そのお客様にお伝え  
することができるの？」

「アテナさん……………」

「だからね杏ちゃん」

アテナは微笑みながら言った。

「私達はもつともつと心を強くして、出会う人達に笑顔で接してい  
かなければいけないと思うの」

嗚呼……………」

その笑顔をみながら、杏は改めて思う。

アテナさんは、だからこそトップ・プリマなのだ。

操舵や観光案内。舟謳、それら全てを完璧にできて当たり前。

さらにどんなお客様に、いえ、どんな人に対しても、そんな心を持  
つて接することができる。

『 気配りの達人 』

そう呼ばれる彼女だからこそ、

そう呼ばれるアテナ・グローリイだからこそ、

トップ・プリマ……」 水の三大妖精 ♪

そう呼ばれる存在に成り得たのだと。

「ありがとうございます」

だから杏が深々と頭を垂れ、礼を言った。

ウンディーネの大切なこと……いや、人として、とても大切なことを教えてもらったような気がしたからだ。

「うふふ。ほらほら杏ちゃん。他の水路と合流するわよ」

アテナが笑顔で言う。

「はい。ゴンドラ通りまあああ〜す！」

杏は大きな声で叫んだ。

その声は、朝の清々しい空気に満ちるネオ・ヴェネツィアの蒼い空に、どこまでも響き渡っていった。

## 【 第四場 】

「お早うございます……」

灯梨の声は、暗い劇場のどんよりとくぐもった空気の中に、響かず小さくかすれて消えていった。

9時少し前。

杏とアテナは唄のレッスンの前、少しだけ舞台をのぞいて見たのだ。

そにはすでに「椿姫」の巨大で華麗なセットが飾られていた。

「セットの八割方は完成してます。あとは音響、照明の微調整が少し残っているだけで……」

「灯梨さん、大丈夫ですか？」

「あはは…大丈夫ですよ」

アテナの問いかけに、灯梨は弱弱しく笑った。

「さすがにカンテツ（完全徹夜）なので……」

そう言う灯梨の目の下にはクマが座り、唇も乾き、顔は蒼白かった。

「休めないんですか？」

「いえいえ。この後、少し仮眠を取らせていただきます。二、

三時間ですが……」

「大丈夫ですか？ ……ちよつとも暖かなベッドで寝てください」

「あははは……」

そんなアテナに気遣いに、灯梨はキレたように笑った。

「あつ、すみません。すみません。ちよつと徹夜でオカシクテ…

ベッドでは寝ません。そんな場所ありません」

「え？ 私達のようにホテル泊まりではないんですか？」

「いやあ。私達には、そんなモノはありません。どこか隅の部屋で雑魚寝です」

「そんな……」

「あつ、いえいえ。お気になさらず。つか、カンバンが…主役の人が、そんなこと考えなくてもいいんですよ。だつて……」

灯梨は言った。

「これが私達の仕事ですから」

そう笑う灯梨の疲れた顔には、けれど、確かな意思と強固な決意が浮かんでいた。

「ねえ。杏ちゃん。お願いがあるの」  
灯梨と別れると、アテナは杏にそっと耳打ちをした。

「分かりました。私も大賛成です。準備は任せておいてください」  
杏は胸を叩きながら答えた。

深夜0時

アテナは杏をともなって、再び劇場へとやってきた。

そこは前日とはうって変わっていた。  
あのバベルのごとき叫び声はひとつも響かず、ただ誰もが黙々と、己が仕事をこなしていた。  
今日のリハーサルで見つけた、細かな不都合を修正しているのだ。  
舞台全体を、暗い疲労の色が覆っていた。

「あれ、アテナさん、杏さん。こんな時間にどうしたんですか？」  
めざとくアテナ達を見つけた灯梨が駆け寄って来る。  
その顔は今朝よりもより酷く、目の下のクマ大きくなり、唇もひび割れていた。

「あの、これをみなさんで食べていただきたくて……」  
アテナがスフォリアアツレ（焼き菓子の一種）を差し出た。

「え？ あつ、あの。 す、すみません。 ちょっと待っていてください」

一瞬の間の後。

そう言つと灯梨は、つまずきそうになりながら何処かへと走り去つて行つてしまった。

顔を見合わせる杏とアテナ。

待つこと暫し。

灯梨は舞台監督を連れて戻ってきた。

「これを、俺達に？ 嬢ちゃんが作ったのか？」

舞台監督が訊ねる。

その顔もどこかやつれ、疲れがにじみ出していた。

「は、はい。 あまりうまくできてないかもしれませんが、よかつたら、みなさんで食べてください」

アテナがスフォリアアツレの入ったバスケットを差し出す。

それは今日のリハーサルが終わつた後、アテナが杏にお願いして、ホテルの厨房を借り、自ら作つたモノだった。

舞台監督は、そのバスケットとアテナの顔を、何度か見直す。  
アテナは満面の笑顔でうなずいた。

「全員集合！！！！！！」

突然、舞台監督が叫ぶ。

「テメエら、さっさと集まりやがれえ！」

それはマイクなどまったく必要としない大音上だった。ぞろぞろとだらしなくスタッフ達が集まり始める。どの顔も疲れ果て、死んだ魚のような目をしていた。

「いいかお前ら、耳の穴かっぽじって良く聞きやがれ！」  
舞台監督がドスのきいた声で言う。

「この嬢ちゃんが……明日のキャンバナウンディーネさんが、お前等のために手作りで差し入れを作ってきてくださった」  
全員が驚いたようにアテナを見る。  
アテナは照れたように頭を下げた。

「いいか明日の公演。  
もしうまくいかなかったも、それはこの嬢ちゃんの責任じゃねえ！  
お前等の…俺達の働きが悪かったからだ！」

おい道具。ガチの一本でも甘く打ちやがったら、ただじゃすまさねえっ

おい照明。シユートの、ほんの少しのズレもちゃんと修正しろ。  
いい加減にするなっ

おい音響。ちくつとでも、ハオらせてみやがれ、テメエの耳にマイク突っ込んで、がたがた言わせるぞっ

おい演出。ちゃんと最後の細部まで、進行を確認しろ。小道具ひとつ間違えても、絶対に許さねえ！

みんな分かったか！」



「……はい」

「声が小せえい!!」

「はあああーい!!」

半ば、ヤケクソ気味に叫ぶ、スタッフ達。

「よしつ。今から三十分、休憩にする。ありがたく、いただけ!」

「あ、あの紅茶もありますよ。コーヒーもです。良かったら飲んでください」

杏が何本もの水筒を肩からかけながら言う。

「うまい!」

「甘い!」

「こりゃいい」

「ありがたい」

まさかと思った疲れ果てたスタッフ達は、口々に感嘆の声を上げながらスフィリアテツレに、かぶりついた。  
笑い声が響く。

「嬢ちゃん、ありがとな」

「舞台監督さん」

「俺達はいつても余裕のない中での完璧を求められる」

「……」

「そうするとどうしても無理が出てなあ。つまらん失敗をやらかすんだ。」

なんもない舞台から、訳もなく転げ落ちるバカ。

飛べもせんのに、離れたイントレに飛びつこうとして落下する阿

呆う。

考えりや分かるのに、重いスピーカーひとりで持とうとして潰れる間抜け。

愚か者ばっかだ。

だけどな。

今回は嬢ちゃんが持って来てくれた差し入れが、いい気分転換になった」

「舞台監督さん……」

「ほら、あいつらの嬉しそうな顔、見てやってくれ」

「レモンもありますよ」

そこでは、杏の入れる紅茶やコーヒーを飲みながら、笑い合うスタッフ達の姿があった。

あの疲れ果て、やさぐれて、沈滞してしたムードは一掃されていた。

スフィリアテツレ - 小さなお菓子。

たったそれだけの事で。

アテナが差し入れてくれた手作りの小さな焼き菓子。

ただそれだけで。

ただそれだけの事。

スタッフ達に笑顔がもどる。

「嬢ちゃん。いや、ウンディーネさん。舞台は俺達に任せてくれ。

きつちりとした仕事してみせる。

だからあんたは、あんたの事だけ考えて、最高の謳声を奏でてく

れ

きっぱりと言い切る舞台監督。  
アテナは無言で頭を下げた。

そして本番当日がやって来る。

E s s e r e C o n t i n u a t o  
く

九月になってもこの暑さ……

みな様はいかがお過ごしでしょうか？ しょうかあああ？

どうか、お体にご自愛いただき、ご健勝であられますように。

私？ 私はすでにへコタレています（鹿馬）

【第3幕・第一場】

開演二時間前

劇場前には、もう黒山の人だかりができていた。当然ながら、いざ開場のその時、混乱はそのきわを極めることになる。

「こらあゝ遅刻禁止！」

「はひはひ……ごめんなさい。おまたせえ」

「よかった。間に合わないかと思いました。はい、チケットです」

「わはゝひ。ありがとう」

「よし。じゃあ、さっさと行くわよ。はぐれないように、しっかり私に付いてきなさい」

「はあゝひ」

「……先輩ってば、でっかい仕切り屋さんです」

「さあ、行きますよ」

「そんなあわてないで。あつ。パンフレット買わなきゃ」

「そんなもの、後でいいです」

「そう？ あつ、じゃあ、ポップコーンとコーラ買わないと……」

「ここは映画館じゃないんですよ！ そんなものは売ってません！」

「そんなあ……劇場とかは、ポップコーン食べながら舞台見るのが常識っ」

「そのどろこが常識なんですか！ とろかく場内は飲食禁止です  
から！」  
「ええ〜つまんない……めそめそ。 めそめそあ」  
「泣いたふりしてもダメです。 さあ行きますよ、バツジエーオ」  
「ふあ〜い……」

「あらあら。 すごい人ね」  
「ああ…これだけの人が集まるとわなあ……」  
「うふふ。 アテナちゃん大人気ね」  
「いや、それよりも大丈夫か？ アイツ」  
「あらあ。 心配なの？」  
「あつたり前だ。 あのアテナだぞつ。 私はアイツが本番で、つ  
まずかないか心配だ」  
「うふふ。 優しいのね」  
「すわ！ 恥ずかしいセリフ禁止！！」  
「でも、アテナちゃんならきつと大丈夫よ」  
「はあ？ その根拠のない自信は何処からくるんだ？」  
「だって……アテナちゃんだもの」  
「つたく。 …まあ、私も信じちやいるけどな」  
「あらあら、うふふ。 やっぱり優しいわね」  
「すわあ……」

いろいろな声が飛び交っていた。

そうして開演十分前。

杏は灯梨と共に、ゆっくりと階段を上がっていた。

「一緒に例の場所から見ませんか？」

そう、灯梨に誘われたのだ。

相談すると、アテナは快く許してくれた。どころか、灯梨ちゃんによろしくとまで言ってくれた。

さすがは気配りの達人たる、アテナ・グローリィだ。

「さあ、ここにどうぞ」

灯梨が椅子を用意してくれていた。

礼を言う杏に、灯梨は照れたように笑った。

その顔には未だに疲れが残っていたが、そこにはやり遂げた者だけが持つ、何かしら独特の雰囲気があった。

「本番中はPINスポットに近寄らないくださいね。不意に動いたりするんで、当たれば飛ばされますよお。」

くっくっくっ……………」

けれどやっぱり少し不気味なその笑顔が、杏を怯えさせる。

そしていよいよ、開幕を告げる鐘の音がホールに響き渡った。

### 【 第3幕・第二場 】

『 椿姫・ラ・トラヴァータ - 』

La traviata 直訳すれば『道を踏み外した女』

けれど一般的には『椿をつけた貴婦人 - La Dame anx  
came·lies -』と訳されることの方が多い。

それは主人公が娼婦であるが故。

この物語は、高級娼婦として享樂の生活にひたるヴィオレッタと、  
田舎出の真面目な青年貴族アルフレードの出会いと別れ。  
その悲しい恋の物語だ。

19世紀。1853年、3月。

マンホームのヴェネツィアで初演されたときは、準備不足に加え、  
主人公が高級娼婦であること。

またその時の女優が、最後、結核で死ぬ設定であるにもかかわらず、  
あまりに体形が、それにふさわしくなかったこと。

などから、観客や評論家からも批判が続出し、結局は『歴史的大失  
敗』を喫することとなった。

けれど、翌年、十分な準備とともに再上演された時には、観客に受  
け入れられ、その後も徐々に人気は上がり  
ついには作曲家ジョゼッペ・ヴェルディの代表作のひとつとなった。

？幕

まず有名な「乾杯の唄」(Libiamo)が始まる。  
陽気に楽しげな唄が響き渡る。

そしてアテナのソロ。

一途なアルフレードに対する、不思議な恋の予感に震えるヴァオレ



ツタの心を謳う・

「そはかの人か」(Ah forse l'ulichella  
nima)

しかし、自らの身の上を思い、その心のときめきを忘れようとする  
悲しき歌・

「花から花へ」(Sempre libera)

この二曲だけで、すでに観客はオペラ歌手としてのアテナに魅了さ  
れていた。

?幕の男性のソロ

甘いふたりだけの生活を謳う

「燃える心を」(Demi bollenti spiri  
tti)

けれどそんなふたりに否定的なアルフレードの父親の策略により、  
ヴァオレッタが裏切ったと誤解したアルフレードが謳う

「プロヴァンスの海と陸」(Di provenzail mar  
ill suoil)

そして・

「いよいよです」  
灯梨が瞳を輝かせる。

？幕冒頭。

すべてを失い、余命もいくばくもないと告げられたヴァオレッタ。そこに送られてきた一通の手紙。そこには真実を知ったアルフレードが、彼女の元へ、やがて訪れるであろうと記されてあった。けれど、ヴァオレッタは悲しく謳う。もう遅すぎるのだ。と。

「さらば過ぎ去りし日」(Addio del Passato)

暗転の中、小迫りで上がったアテナが謳うのだ。

「準備OKです」

舞台の操作係が、演出室にいる舞台監督に告げる。

舞台監督の無言の問いかけに、プロデューサーは鷹揚にうなずいた。

「よし。GOーだ」

「了解。UPします」

アテナを乗せて、暗闇の中、小迫りが動き出す。

その瞬間、まわりにいた全てのスタッフが、アテナに対して親指を立て激励する。

アテナは頭を下げた。

ゆっくりと昇って行く小迫り。

けれどその瞬間。それは起こった。

【 第3幕・第三場 】

「データが消えたつ。照明データ・ロスト！」

「舞台です。打ち込んだ転換のタイム・ゲート、消えました！」

「音響です。今、一瞬、電圧が低がったつ。やばいです」

それは髪留めのピン。

あの時、アテナの髪からこぼれ、誰にも気付かれなかった髪留めのピンが、小迫りの駆動部に巻き込まれたのだ。

さすがに大きな停電現象まで引き起こさない。

どころか小迫りの動きにも何の影響も与えない程の小さな蹉跌。

だがそれは、ほんの少しの加圧となって小迫りのモーターに負担をかけ、わずか1ミリ秒の短い時間、電圧の揺らぎを招いたのだ。

それは、ほんのわずかな出来事。

人の知覚では認識もできない些細な変化。

けれど繊細なオペレート卓のデータを飛ばしてしまうには、それは充分な変化だった。

「どっゆつこと!?!」

プロデューサーがわめく。

「データが消えたって…そんなの、そんなの知らないよお」

「分かってる。落ち着け」

「どうするの? どうするのさ。このあとまだ、キツカケあるんだよ」

舞台監督の声にしかし、プロデューサーは狼狽するばかり。

「だからこんな古い小屋はイヤなんだ。新しいヴァローレ劇場ならこんなことにはならないのに! どうすんだ。どうすんだよ」

「うるさい。任せておけ」

「なんだよ。なにがうるさいんだよ。いいかい、僕はプロデューサーなんだよ。みんな僕をたてなきゃいけないんだ。僕は…」

「静かにしましょう」

わめきまわるプロデューサーの肩に、どっしりとした重い手が置かれる。

アンドレアだ。

アンドレア・パヴァロツティが、ゆっくりと言った。

「ここは彼等を信用して、すべて任せましょう」

「冗談じゃないよ! どうしてこんな奴等、古い化石みたいなモノ、信じられるってゆうんだよ。だいたい…こうなったのもきつとコイツらが……」

「そこまで」

プロデューサーの肩に置いたアンドレアの手に力が入る。

「それ以上騒ぐようなら、あなたを劇場から放り出しますぞ」

なおもわめき続けようとするプロデューサーを、アンドレアが静かに、けれど断固とした声で制した。

プロデューサーはピクリと体を震わせると、黙り込んだ。

舞台監督が無言でアンドレアに感謝の意を示す。

アンドレアは小さく肩をすくめるだけだった。

「よし。おい音響。音はでるか？」

「たぶん大丈夫です。この卓はそれくらいの揺らぎには耐性があります。けど……」

「けど？」

「O U T系がどうなってるか分からない。こいつは音がでるまで確認できません」

「そうか、祈るだけだな」

「そんな！」

再び、わめきだそうとするプロデューサーを、アンドレアが、力づくで押さえ込む。

「照明はどうだ」

「電源は戻ってます。ただデータがやられました。読み込む

か、手で組むか……どちらにせよ、少し時間がかかります」

「PINスポは？」

「データが飛んだおかげで動きません。今、人を走らせてます」

「間に合わねえ……」

舞台ではすでに、アテナの小迫り上がりが終わり、スポットを待つだけの状態だった。

何も動きのない舞台での三十秒の間は、無限の時間だ。  
楽団もただ戸惑うばかり……彼等もcue（キュー。きっかけの意）  
がこない限り、演奏を始められないのだ。

客がざわめき始める。

しかしアテナは、何も臆することなく、泰然と立っていた。  
彼女にも何かがおかしい……とゆうことのは分かっていた。  
リハーサルではすぐに点いたスポットライトがこない。

けれどアテナは……スタッフを……彼等を思うアテナは、信用し、信  
頼し、ただその時を、じっと待っていた。

「くそ……」

舞台監督が小さくつぶやく。

「ほら。だから僕はこんな小屋じゃ……」

だがその時……

プロデューサーが再び何かを言う前に、それは起こった。

「なに！？」

暗転の暗闇の中。

突然、一条の光が輝き、アテナを照らし出したのだ。

楽団が演奏を始め、

アテナが満を期して謳いだす。

天上の謳声が観客を圧倒する。

【 第3幕・第四場 】

「PINルーム。センター、誰かいるのか!？」

照明のチーフがインターカム（室内通話機）に叫ぶ。  
しばしの間

ガサゴサとゆう音の後に、彼等には聞きなれない声が響いてきた。

「もしもし……聞こえますか？」

「……誰？」

「杏です。 夢野杏です」

「杏？ ああ……ウンディーネさんか？」

「はい。 灯梨さんと一緒にココにいました」

「じゃあ、今、PINを焚いてるのは……」

「はい。 灯梨さんです。 灯梨さんが手動でスポットを操作します」

「よくやったあ!!」

舞台監督が吼えた。

「よし杏さん。 灯梨に腰をすえてしっかり取れと伝えてくれ。 それから、俺が誉めてたともな」

「は、はい。 伝えます」

「音響、どうだ?」

「いけます。 音出てます。 まあ、他の奴はまだ分かりませんが

……」

「かまうな。最悪、嬢ちゃんの声だけ出りゃいい」

「そんないい加減な……」

プロデューサーがまた何か言いかけるのを、アンドレアが無言で黙らせる。

「照明っ？」

「大丈夫です。PINさえ当たってれば、その間にデーターを手組みでリカバーできます」

「よし。道具は？」

「転換は俺達の手でなんとかします。人手は充分。あと問題はラストのドン帳のタイミングですが、こいつは今、ストップウォッチ用意してます」

「みんなアナログだなあ……」

舞台監督は、一度、小さく笑ったあと、するどい声で湯を入れた。

「よおしっ。この曲が終わるまで約三分。それまでに全部、整えろ」

「『』 はいっ 『』」

声が重なる。

「バカ野郎。もっと色気のある返事をしやがれ！

だが、お前等最高だ。最高の裏方だぜっ。いいか、負けるな。俺達を信じてくれた、あの嬢ちゃんのステージ。絶対にやりとげるぞ！」

「よしきたあ！」



「了解っス！」

「まかせ給へえええ！」

「よおーし。みんな、いい返事だ。いくぞっ」

舞台監督が再び吼えた。

こうして舞台は何事もなかったように -

最後の曲。

「パリを離れて」(Parigi o cara) が始まる。

愛するアルフレードに見守られながら、静かに息絶えるヴァオレッツ  
タ。

そのふたりの謳声で、無事に幕は下りた。

なにもかもリハーサル通り。

ちよっと？幕目の最初でスポットが点くのが遅かっただけで、ア  
テナの「椿姫」は何事もなく無事終了した。

鳴り止まぬ拍手が、いつまでも劇場全体に響き渡っていた。

ちなみに。

「さらば過ぎ去りし日」からアンコールまで。

そしてアリス・キャロルのアテナに対する花束贈呈までのPINP  
オローを成し遂げた灯梨は、終了後、

腰が砕けたようにへたり込み、体を震わせながら叫んだと言う。

曰く -

「私は今日この場で、神の姿を見たあ！」と。

そしてその後、激しく身もだえしつつ、いつまでも低く笑い続ける  
灯梨の姿に、杏は口から何かが飛び出しそうになったとゆう……

- E s s e r e C o n t i n u a t

o (つづく)

暑さにかまけて、更新がすっかり遅くなってしまいました。

すいません。

もし、もしも待っていてくださったなら……ほんとに、すいません。

次からはもっと、ちゃんとします（涙鹿馬）

【 終章 】

華やかな打ち上げ（終了記念パーティ）が続いていた。

アリシアが、晃が、アリスが。

アトラヤアレサ部長達、オレンジ・ぷらねつとの関係者達も。

誰も彼もがアテナに近寄り、祝福の言葉を投げかけていた。けれどアテナは落ち着かない様子で、あたりを見回していた。

「アテナ先輩。どうかしたんですか？」

アリスが訊ねる。

「うん。あのちよつとね……」

「んん？ なんだアテナ。なにか気になることでもあるのか？」

「あらあら。どうかしたの？ アテナちゃん」

「う、うん晃ちゃん、アリシアちゃん。わ、私……」

「やあ、お疲れさまでした」

そこへちよつと、アンドレアがやって来た。

「あつ、支配人。あの……」

「ん。なんですかアテナさん」

「あの…あの方達はどこにいるんですか？」

「……スタッフ達のことですか？」  
「はい。私は……」

「あんな連中、ほつときなよ！」  
近寄ってきたプロデューサーが声を荒げる。酔っていた。

「あいつ等のおかげで、僕の緻密な演出は台無しになるとこだったんだよ。とんでもない奴等だ」

「なんだ、こいつは……」  
晃があからさまに眉をひそめる。

「今回のオペラのプロデューサーさんです」  
杏が答える。

「そうさ僕はプロデューサーなんだ。このネオ・ヴェネツィアイち。」

いや、AQUAいちの大プロデューサーなんだつ。  
それがあやうく汚点をつくるころさ。あんな、いまましい古臭いやり方の小屋とスタッフのせいだつ」

「しかし、半自動、半手動のフェニーチェ劇場だからこそ、トラブルに迅速に対処できたのでは？」  
「へっ。そんなのは偶然ですよ」  
プロデューサーは言い切る。

「そもそもヴァローレ劇場であれば、あんな事はなかったんだ。僕が心配するような事は何もネ。ねえ…アテナちゃん」

「……はい？」

「どう。今度は僕と直で仕事してみない？ そしたら君はすぐA Q

UAいち。いや宇宙いちの謳姫になれるよ。どうだい」

「……なんだかよく分からないが、こいつ殴ってもいいか？」  
晃の瞳に危険な輝きが宿り始める。

「んん？ もしかして君は、姫屋の晃・E・フェラーリかい？」

「ああ。そうだ。だが知らない奴に、いきなり呼び捨てにされるのは気分がよくないな」

「おや、こっちにいるのは、ARIA・カンパニーのアリシア・フローレンス」

けれど最早、プロデューサーの耳には、晃の声も入らない。

今度はアリシアの体を舐め回すような視線で見始めた。

「あらあら、うふふ」

「いいねえ、その笑顔。どうだい君達。僕と一緒にやらないか？」

三人で売り出すんだ。もちろん僕のプロデューサーでね。

水の三大妖精から、宇宙の三大妖精へ。

どう？ ウンディーネなんて小さい枠に縮こまってないでさあ。

ペアっと大きく売り出してみようよお」

…びしっ

そんな音が聞こえたような気がした。

「おい……」

背後から、低い、けれど全てを圧倒するような声が聞こえてきた。  
プロデューサーの体が硬直する。

「今、なんつった？」

ぎしぎしぎしーと

まるで錆付いた人形のように、プロデューサーは恐る恐る背後を振り返った。

そこには「円卓の鬼神」のような表情でこちらを睨みつけている、ひとりのオレンジ・ぷらねっとのウンディーネが……

「蒼羽っ」

晃が『任せた』とばかり、につこりと微笑んだ。

「小さい枠……だと？ お前、ウンディーネが小さい枠だって言うのか……？」

蒼羽は『任された』とばかりに、小さくうなずき返す。

「いや、いや……その」

蒼羽に後ろには、アリスやアトラをはじめ、何人ものオレンジ・ぷらねっとのウンディーネ達が集まり、

同じような表情でプロデューサーを睨みつけていた。

汗がしたたる。

思わず後ろに下がるプロデューサーの背中が、誰かとぶつかった。

あわてて振り向けば、そこには無表情な……けれど、どこか憐憫を含んだ表情で自分を見下ろす、アンドレアが……

「し、支配人。 あ、あの……」

「アテナさん」

アンドレアはプロデューサーを全く無視すると、アテナに言った。

「今、私のスタッフ達はバラシ……撤収作業にかかっています。 今

ならまだ間に合うでしょう」

「ありがとうございます」

アンドレアはアテナの想いを。

アテナはアンドレアの想いを。

瞬時に理解し合い、言葉を交わし合う。

「晃ちゃん。アリシアちゃん。お願い、一緒に来て」

アテナはふたりの返事を待ちもせず、駆け出していく。

「はいはいはい」

「あらあらあら」

そして晃もアリシアも、なんの躊躇もなしに続いて走り出す。

「あっ、三人とも、ちょっと待ってよ」

あわてて追いかけてようと、逃げ出そうとするプロデューサーの前に、ひとりの女性が立ちはだかった。

「杏。アテナを、お願い」

「はい！」

杏が女性の脇をすり抜けて走り抜けて行く。

「……さて、プロデューサーさん」

「な、なんだよ……」

明らかに腰が引けているプロデューサーの前に立ちはだかる女性―アレサ・カニンガム部長は、にっこりと微笑みながら訊ねた。

「この一週間。あなたがウチのアテナしていただいた、いろいろなお話、ゆっくりと聞かせていただきましょうか？」



背後には、アリスやアトラを始め、大勢のオレンジ・ぷらねっとのウンディーネ達。

右には無表情が余計に恐い、アンドレア・パヴァロツティ支配人。左にはいつの間に関りこんだか、蒼羽・R・モチツキ。

そして前面には、妖艶な悪魔の微笑みを浮かべる、アレサ・カニンガム。

怒涛の如く、汗が流れ落ちてくる。

酔いは一気に醒めていた。

\*\*\*

すべてが片付けられ、がらんとした舞台は、想像以上に広く寂しい。杏はそんな舞台を啞然と見つめていた。

「あつ、杏さん？ どうしたんですか？」

やっぱり灯梨が見つ付けてくれた。

「いえ…何も無い舞台ってこうなんだって……まるでお祭りの後のよう……」

「そう…ですね」

灯梨も杏と同じように舞台に立ち、その静かで、もの悲しい空間を眺めた。

「けどね、杏さん」

「……はい」

「私達はいつもそうやって、作っては壊し、作っては壊しの繰り返しを続けてるんです。でもそれは……」  
灯梨は杏の顔をしっかりと見据えた

「常に新しいお祭りの用意ができるってことなんです。だから……だから」

次の瞬間、灯梨は満面の笑顔を浮かべながら言った。

「ぜんぜん寂しくなんかありません。むしろ次のお祭りのことで私達はずねにワクワクなんです！」

…ああ、ここにも……

そんな灯梨の微笑を見ながら、杏は思う。

…ここにも、強い『心』を持つ人が……

「で、いったいどうしたんですか？ 確か今、打ち上げの真っ最中なのでは？」

「ああ、それで……あの、みなさんは打ち上げには、いらっしやらないんですか？」

「ええ。もちろん行きません」

杏の問いかけに、灯梨はきっぱりと言い切った。

「え？ なぜです」

「あく私達は、あの雰囲気、苦手ですし、第一、最初から呼ばれもしませんから……」

「呼ばれ……ないんですか？」

「ええ。私達は裏方ですから。あれはカンバン達のモノです。」

それに……」

「それに？」

「それに私達は、あんな華やかな場所より、場末のバーカリイでチケイティをつまみながら一杯やる……って方が性に合ってるんです」  
灯梨は照れたように笑った。

その笑顔は、なんの照れも、屈託もなく。

ましてや卑屈さの欠片もなく。

ただ穏やかで全てを包み込むような、そんな優しい『心』があった。

「あつ、あの。それでみなさんはまだ中に？」

「はい。着替えて間もなく出てくると思いますが……」

「じゃあ、すいません。みなさんをお願いして、劇場の正面玄関に来ていただけませんか？」

「……はあ、それは構いませんが……どうしたんですか？」

「アテナさんが、お世話になったみなさまに、小さなお返しをしたがっているんです」

「おい。灯梨い。　　いったいなんだってんだ？」

ぞろぞろと……

だらけた感じでスタッフ達が出てくる。

その姿は舞台の上では考えられないほど、ぐだぐだで、ぐずぐずとしたものだった。

「さあ、私もよく分かりません。ただアテナさんがお返しをした  
いって……」

「いい子だったなあ」

照明のチーフが言う。

「ああ。手作りの差し入れもしてくれたしな」  
舞台のチーフが、そのセリフを受けて答える。

「あれは嬉しかった。思わず元気が出たよ」  
音響のチーフの言葉に、みながうなずいた。

「そうですねえ。私もあの人との仕事、またしてみたい」  
「調子に乗るな」

灯梨の言葉を、舞台監督がたしなめた。

「俺達の仕事は、区別しちゃんなんねい。どんな相手にも、どんな  
仕事にも、常にベストを尽くす。」

それが俺達、舞台屋の本分だ！」

「す、すいません」

「だがな……」

「へ？」

謝る灯梨に笑いかけながら、舞台監督は言った。

「今回の仕事は、本当に楽しかったぜ……」

「……はいっ」

・舞監も、こんな顔するんだ。

灯梨はなんだか嬉しくなった。

「ん？」

不意に気がついた。

「どうした、灯梨。急に立ち止まったりして」

「舞監。あれ……」

「うん？」

「あれは？」

フェニーチェ劇場の正面。

その荘厳な建物の前に、ひとりの女性が、おりからのルナツィ、ルナスリーからの月明かりを浴びて、そつとたたずんでいた。

「ありやあ…嬢ちゃんか？」

その声が合図だったかのように、アテナは大きく礼をすると、ゆっくりと謳いだした。

Una furtiva lagrime negli  
occhi suoi spunt?...

ひそかなるなみだ ほおを伝えり

quelle festose giovani inv  
idiar sembr?...

ただひとり きみは 思い沈みて

Che pi? cercando io vo? Ch  
e pi? cercando io vo?

わが求めし まことの恋の

Mama, simama, lo vedo,  
lo vedo.

そが輝きにこもるをさとりぬ

Un solo istante i palpiti  
del suo bel cor sentir!..

ふかくきみが秘めし 愛の言葉と

Imiei sospir confondere  
per poco a' suoi sospir!

人知れず洩らす きみがため息

I palpiti, i palpiti senti  
r!

われのみ聞く 其の日の

confondere i miei sospir c

o - suoi sospir!

われのみ聞く 其の日の

i? non chiedo . . .  
Cielo, si pu? morir; di p

こよなきたのしさ 思えば わが胸は

ah! cielo, si pu? morir;

よろこびにわき立つ

ed o . . .  
di pi? non chiedo, non chi

よろこびにわき立つ

Eccola . . . Oh! qual le accr  
esce belt? l'amor nascente!

ああ あの人は愛を知り なんと美しくなつ

たことか

A far l'indifferente si se  
guiti cos? finch? non viene el  
la a spiegar si .

けれど私はそれを知らぬふりでしょう 彼女

が心のうちを明かすまでは……

< Una Eurtive Lacrime - 人知れぬ涙 - >

ガエターノ・ドニゼッティ作曲の歌劇『愛の妙薬』の一曲。

自らの真の思いに気付き、密かに涙する彼女を盗み見た男が、自分への愛を確信し、喜びと共に謳いあげる、リリック・テノール最高傑作のアリア。

本来は男性のテノールであるのに、アテナはそれをものともせず、朗々と謳いあげた。

誰もが度肝を抜かれたように、ただたずみ、じつとその歌を聴いていた。

「これはみなさんへの、アテナさんからの感謝の気持ちです」

「杏さん？」

「たとえその思いが人知れぬ涙となろうとも、私はあなたのことを思っている…私の胸は、あなたのことを思ったたびに、喜びにわき立つ……」

アテナさんも、そして私も、同じ気持ちです」

「杏さん……」

「そしてもう一曲」

次の曲が始まる。

今日、聞いた曲。

楽しげに謳い上げる名曲。



「乾杯の歌 - Libiamo -」

「え？」

いつの間にか、帰ったはずの楽団員までもが劇場正面の階段に腰掛け、演奏を始めていた。

「どつゆつこと？」

さらに驚き加わる。

アテナの他に、さらにふたり。歌い手が現れたのだ。

「あれは……水の三大妖精!？」

驚くことに、晃・E・フェラーリが。アリシア・フローレンスが、アテナと共に歌を奏でているのだ。

・さあ、友よ飲み明かそう。

二度と戻らぬ日のために、こころゆくまで杯をかかげよう!

三大妖精の謳声が、夜のネオ・ヴェネツィアに響く。

それは今宵限りの共演。

二度とは見らぬ夢の共演。

・誇りある青春の日の 楽しいひと夜を!

若い胸には 燃える恋心

三大妖精の謳声は、どこまでも響いてゆく。

- やさしいひとみが 愛をささやく

またと帰らぬ日のため さかずきをあげよ

気がつけばスタッフ達は皆、実にだらしない態度で、それを聞いていた。

ある者は地面に座り込み、頬杖をつきながら。

ある者はモクモクと煙草の白い煙をたなびかせながら。

ある者はケイタリングからくすねてきたお菓子を口に放り込みながら。

ひどい奴になると、アテナ達の姿を見もせず、仰向けに寝ッ転がりながら月を見ている。

せつかくの三大妖精の - おそらく最初で最後であろう - 共演を、彼等は実に不真面目な態度で聞いていた。

けれど -

みな一様に、とても幸せそうな表情を浮かべていた。

誰も彼もが、黙ったまま、幸せそうな微笑みを浮かべ、その謳声を聞いていた。

それが彼等の答えなのかもしれない。

「この世の命は短く、やがては消えてゆく  
だから今日も楽しく 過ごしましょーよ！」

「こんな音を触れないなんて！ こんちくしょう！」  
突然、音響のチーフが呻く。

「くそ、月明かり。 月明かりかあ。 所詮、自然には勝てねえな  
あ」  
照明のチーフが吐き捨てる。

「劇場か…歴史的建造物の前。 こんなの、どんなセットも敵わん  
よ」  
道具のチーフが苦笑する。

「この世の命は短く、いずれ消えてゆく。  
だから楽しく飲み明かそう。この世の喜びでないものは、すべて愚かなものなのです！」

「俺達の負けだな……」

舞台監督がしみじみと、けれど嬉しそうにつぶやく。

「どうゆう意味ですか？」

杏が灯梨に訊ねた。

「そうですね……つまりそれは」

灯梨がいたずらな笑みを浮かべて教えてくれた。

「私達。裏から拍手をもらうのは簡単です。表（シテ・主役）になればいい。」

そうすれば地位を表しての敬意と拍手はもらえます。でも……」

・さあ、杯をかかげよう！

この時は再び来ない。むなしくいつか過ぎてしまう。

三大妖精の謳は続く。

「私達を悔しがらせる・裏方に仕事をさせたがる人は、とても少ない  
私達、裏方の信頼を得られる人は、もっと少ない……けどあの人は  
……」

・若い日は 夢とはかなく消えてしまう

ああ。 過ぎてゆく、過ぎてゆく……

・さあ、杯をかかげよう！

またと帰らぬ日々のために、杯をかかげよう。

アテナは謳う。

とても楽しげに、嬉しげに。

晃やアリシアと共に謳い上げる。

月明かりを浴び、その唄は夜のネオ・ヴェネツィアに響き渡る。

感謝を込めて。

信頼を込めて。

- Libiamo Libiamo ne-  
l i e t t i c a l  
i c i !

さあ！ 友よ。 いざ、飲み明かそう！！

☐  
- U n e l e n c o e l a s c h i e n a  
- 表<sup>シテ</sup>と裏<sup>ウラ</sup>  
☐

実はプロデューサーさんのモデルは、私です（大鹿馬）

R i c c o v e r o (前書き)

12本目のお話しをお届けします。

このお話しは、私の大好きな漫画のひとつである「百鬼夜行抄」(今 市子著)の中の一編をリスペクトしたものです。

もちろん、この駄文は原作の何万分のいちの面白さも伝えきれません。

お話しも少し変わっています。

なので、もし、もしもこの駄文を読んで、少しでも興味を持たれたならば、ぜひとも

「百鬼夜行抄」を読んでみてください。

そして同じように好きになっていただければ、これに勝る幸せはありません。

それではしばらくの間、お付き合いください。



## R i c c o v e r o

私とそのウンディーネさんに出会ったのは、激しく雨の降る、ある日のことでした。

### 第12話 「 R i c c o v e r o 」

急に降り出した雨。

一瞬にしてネオ・ヴェネツィアの街並みが、水煙りにかすみませす。

突然のことに、街の人達も驚いたように走り回っています。

その時 -

- ばしやばしやばしや

と、水溜りの水を跳ね飛ばしながら、ひとりのウンディーネさんが、我が家の軒下に走りこんで来ました。

きれいな人でした。

明るいブラウンのショートカットな髪。

瞳はどこか儂げで、けれど全てのモノを見透かすかのような、清んだ蒼。

今でも微笑を浮かべているその唇は、揺ぎ無い優しさと、何ものにも負けない。

そんな意思の強さとを表していました。

耳元には着ている服と同じ色の、赤いスフィア（球体）なピアスが輝いています。

そしてその腕の中には、誇らしげに、背筋をピンと伸ばして座る黒い猫が一匹。

私がじっと見ていたからでしょうか。

ウンディーネさんは何かに気が付いたように、ふと、私の方に振り返りました。

「やあ、こんにちは」

ウンディーネさんは優しく微笑んでくれました。

それは見る人すべてを温かく包み込むような、そんな素敵で笑顔でした。

「ウチの名前は、あゆみ。 あゆみ・K・ジャスミン。 姫屋のウンディーネ。 この子は姫屋のヒメ社長。 ちょっと雨宿りさせてもらってるよ」

「あ、あの……」

「ああ……そうか。 君は……君、ウチに言いたいことがあるんだよね？」

「ドキッ！」

どうして分かったんだらう!?

「あ、あの……あなたもしかして……」

「あなた、そこで何してるの!」

突然「その声」が響きます。

私は、あわてて隠れました。

家の奥から、ひとりの老婆が現れます。

「すみません。急に雨に降られまして……少し軒下をお借りしてます」

頭を下げるあゆみさんに、お婆さんは賢しげに声をかけます。

「あらまあ。あなた傘を持ってないの？ 貸してあげましょうか？」

「あつ、いえ、大丈夫です。もう少し小降りになったら行きますから……」

「いいから、いいから。お爺さん。お爺さんっ」

「なんだい。なんだい。お婆さんや」

もうひとり。家の奥から老爺が姿を見せます。

「この人、傘がないんですって。貸してあげて」

「ああ……それじゃあ、これをどうぞ」

安っぽいビニール傘を差し出します。

「ありがとうございます」

「いいから、いいから。ほら、返さないでいいから、持ってって」

「だめっ」

「すみません。ありがとうございます」

「いやいや。困ったときは、お互いさまさ」

「ええ、ええ。お気になさらず……」

「だめ。その傘を持ってっちや。」

「すみません。ありがとうございます」

けれどあゆみさんは、傘を開くと、雨に煙ぶるネオ・ヴェネツィアの街の中へと、消えて行きました。

私には見えません。

あのウンディーネさんに「人ならぬモノたち」が、みっしりと憑いて行ったことを。

傘に隠れて、あゆみさんの背後に憑く、禍禍しいモノたち。

「あの人、ちゃんと帰れるかな……」

私の心は痛みます。

「あの子、家の中に入れて上げた方が良かったんじゃないかね」

「お爺さん、何バカなこと言ってるんですか？ あんな人が居ちゃ探し物に集中できないじゃないですか」

「ああ……もう時間もないしな。しょうがないか」

「ええ。それじゃ私はもう一度、上の部屋を見てきますからね」  
「それじゃあ私は下の方を、もう少し探してみるよ」

そう言うと、ふたりはそれぞれ別の方向へと離れて行きます。

・あいつら……

私は唇を噛み締めました。

あいつらはいつもそうして……

雨はまだ降り続けています。

そんな「外」を見やる私の目に、再び「アカイイロ」が飛び込んできました。

・え？

「ウンディーネさん？」

そこにはあの赤い服のウンディーネさん……あゆみさんが「まだ」  
雨宿りをしていました。

「あ、あの。ウンディーネさん……あゆみさんはさっき傘を借りて  
出て行かなかった？」

「ん？　ウチはさっきからここですと、雨宿りしてるけど？」

私の問いかけに、あゆみさんは何事もなかったかのように静かに答

えます。

「うそっ」

私は思わず大きな声を上げてしまいました。

「だって、私見てたもの。あなたが傘をさしてここから出て行くのを。あなたの後ろにたくさんの魍魎が憑いて行くのを」

「……………」

「もしかして……もしかして、あゆみさんにもアレが見えるの？ そんな力を持つてるの？ 退魔師なの？ それともエクソシスト？ あいつ等をやっつけたの？ わあ、初めて見た。いったい、どうやったの？」

「ウチはそんなんじゃない……………」

私の矢継ぎ早の問いかけに、あゆみさんはタメ息を付きながら答えました。

「ウチは誤魔化して避けてるだけさ。 やっつけるなんて、できやしないよ。ウチはただのウンディーネなんだ」

「じゃあ、好きでやってるんじゃないの？」

「あれ？」

何か悪いこと言ってしまったのかな？

あゆみさんは急に黙り込むと、そのまま背中を向けてしまいました。怒ってるのかな？

人ってば、ホントのことを言われるのが、一番、腹が立つって言うから……………」

「あ、あの。まだ雨は上がりそうにないし、よかったら家の中に入りませんか？」

私は、その気まずい雰囲気をどうにかしようと、あゆみさんに声をかけました。

「お願い。私はここから出れないんです」

「しょうがないなあ……」

あゆみさんは文句を言いながらも、家に入って来てくれました。いいひとです。

「あんまり長居はできないんだ。さっきの連中、もしかしたら帰ってくるかもしれないし……」

「私、あゆみさんをお願いがあるの。実は - あっ」

「危ない！」

突然、小さなモノノ怪が私の足元をかすめて行きます。

私はつまずき倒れそうになりました。

あゆみさんが腕をつかんでくれて、危うく倒れるのは防げました。

でも -

「お前、これは……」

服の上からでも分かってしまったようです。

私は仕方なく、服の袖をめくり、それをあゆみさんに晒しました。

「これは……刺青？」

いれずみ

「違います。　呪いなんです」  
「呪い？」

私はそのまま着ていたブラウスを肌蹴はだけ、あゆみさんに背中を向けました。

首筋から背中、二の腕にかけて、黒い穢れのようなモノが、びっしりと張り付いています。

「大丈夫です。これは呪いなので、うつることはありません。肌  
が黒ずんで、硬くなって、そう、まるで刺青のよう。」

いずれこれは全身に広がって、私を喰い尽します」

「今すぐ病院に行こう」

「ダメ！」

「なぜ？」

「あゆみさんには分かるでしょう！」

私はつい叫んでしまいました。

「こんな病院じゃ治せない。病気じゃないの。　これは呪いなんだから！」

「……いったい誰が、こんな呪いを君にかけたって言うんだい？」

「そんなの、あのふたりに決まってるじゃない！」

「ふたり？」

「お爺さんとお婆さんよ！」

私は嫌悪感と共に叫びます。

「なぜ、あのふたりが君を呪うの？」

「私は……私が死ねば、私の両親が残した財産が、あのふたりのモ



ノになるから……」

「『両親は？』」

「死んだわ。五年前に。事故だったそうだけど、私には分かる。きつとあのふたりが父と母に呪いをかけたんだわ！」

「……………」

「お爺さんも、お婆さんも、私を一步も外に出してくれないの。誰か来ても、さっきみたいに『厄』をつけて追い払うの。」

知られたくないのよ。この家のこと。私のこと」

あゆみさんは腕を組んだまま、ただ黙って私の話を聞いています。それはそうでしょう。いきなり今日、初めて会った女の子にこんな話をされて、すぐに信じると言う方が間違っています。

「こんな話、信じてくれて言っても無理なのは分かっています。だから助けてくれとは言いません。」

「だけど、ちよっと手伝ってほしいの」

「……………そうだね」

あゆみさんは、ふと外を見ました。

雨はまだ降り続けています。

「この雨が止むまでの間なら」

「ありがとう。実は……………!?!?」

私は、ハッとしました。

いつの間にか、お婆さんが二階から降りてきて、私達の方をじっと見ていたのです。

「お、お婆さん。 あ、あの、この人は……」

けれどお婆さんは、私を少し睨んでから、何も言わずに通り過ぎます。

「どうして……」

「ん？」

「どうして、お婆さんは何も言わなかったんだろう。 私が無視されるのは、いつものことだけど、あゆみさんにも何も言わないなんて……」

「お婆さんは、ウチが傘を借りて帰ったと思ってるからね。 でもすぐ気付かれるよ」

あゆみさんは小さく微笑みました。

「すごい…… やっぱり、あゆみさんって本物なんですね」

「いや、だからウチは……」

「お願いです。人形を探してください」

「人の話、聞きなよ。人形？」

「はい」

私の人形。

大切な人形。

父と母に買ってもらった、お人形。 私の大切な、お友達。

「人形を探すのを手伝ってください」

「それよりもさ……」

あゆみさんが、まるで私を諭すように言います。

「君が命を狙われていると思うんだったら、どうして逃げないんだ。」

まず、この家から出なきゃ……」

「あ、あゆみさん。術者なのに、なんでそんな弱気なんですか？攻撃は最大の防御って言うじゃないですか！

逃げるなら、まずあのふたりに一発、喰らわせてからです！」

「困ったお嬢さんだなあ……」

あゆみさんがまた、タメ息を付きます。

そんなにタメ息ばかりつくと、幸せが逃げてしまうのに……

「あのね。何度も言うけど、ウチはそんなんじゃないから。攻撃

も防御もできないよ。それに君は……」

「しっ」

私はあわてて、あゆみさんの言葉をさえぎりました。

「ん？ どうしたんだい」

私はあゆみさんを手で招くと、少しだけ開いているドアを指差しました。

その部屋の中では、お爺さんと、お婆さんが、部屋中の家具をひっくり返しながら、何かを探していました。

「ない」

お爺さんが言います。

「ないわ……」

お婆さんが言います。

ふたりは今度は、押入れの中の物まで放り出し始めます。

「あれがないと困ったことになる」

「ええ。あの子のお葬式には、必ず必要なものですからね」

「なんとしても……」

「ええ。なんとしても見つけ出さなきゃ」

ふたりのその姿は、まさに『鬼』のようでした。

「聞いた、あゆみさん」

「ん？ あ、ああ」

「あのふたり、私のお葬式の話をしていた」

「ああ。でもそれは……」

「私を殺して、さっさとお葬式をするつもりなんだわ。

……私だって、今すぐにでも、この家を出て行きたい。こんな

家なんか一秒だっていたくない。

でも、でも。

私、あのお人形だけは、どうしても持って行きたい。父と母が

私にくれた、大切な、あの人形を……だから

だから、お願い、あゆみさん。私に代わって、私のお人形を探して！」

「あのね……」

これだけ頼んでも、あゆみさんの態度は煮えきりません。

どうして？

この人は、どうしてこんなにも冷たいんでしょう。

「ウチはただのウンディーネなんだ。千里眼が使えるわけじゃない。

それに、あのふたりが隠したって証拠もない」

「見つからないのが、その証拠です！」

「え？」

「きつとあのふたりが結界を張って、私の目には見えないようにし

ているんです！」

「おいおい。そりゃ、どんな理屈だよ……まあ、もうしょうがないか……時間もないし」

あゆみさんが、また外を見ます。

相変わらず雨は降っていますが、雨音はだいぶ静かになりました。もうすぐ、止むかもしれません。

「その人形って、日本人形？」

ぽつりー

と、あゆみさんが言いました。

「鞆を持った、桜の花柄の着物を着た……」

「そうっ。それぞれ！」

私は嬉しくなりました。

やっぱりこの人はっ。

「分かるの？ 見たのね？ どこにあったの!？」

「それは今……」

\*\*\*

傘をさし、ゆっくりと歩くあゆみの後ろを、「この世のものではない

モノ達」が、そろそろと憑いて歩いてきた。  
もう少し街の賑わいから離れた場所で、喰らおうとしているのだ。

けれど「ソレ等」は、雨が降る中、知らず知らずのうちに、自分達  
が狭い路地の中に導き入れられていることに気が付かなかった。

やがて、ちよつとした空間に出る。

そこは天井も朽ち果て落ちた、廃墟の広場のような、うら寂しい大き  
な空間だった。

- ヴェえわけがらぎうう！

突然。人には理解できない声を発し、モノノ怪の一匹が、あゆみに  
襲い掛かった。辛抱しきれなかったのだ。  
喰われる。

けれどその瞬間 -  
あゆみの姿は蜃気楼のように霞み、そのまま、ゆらゆらと揺れなが  
ら消えてしまった。

- ！？

驚く「ソレ等」の足元を、蒼い瞳に赤いリボンをした黒い猫が、素  
早く駆け抜けて行く。

あわてて、その猫を追いかけてよつとした「ソレ等」の目の前に、彼  
は立っていた。

- 大きな体の、優しい目をした黒い猫。

【 AQUAの心 】

そう呼ばれる彼は「ソレ等」を取り囲む、色とりどりの数百の瞳と共に目を細め、小さく微笑んだ。

雨が上がり始める……

\*\*\*

- 空気が変わった？

何か急に空気が清んだような気がしました。

「ねえ。 もう一度、あのふたりの話を聞いてごらん」  
あゆみさんが不思議なことを言い出します。

「い、いまさら、あのふたりの話を聞いてどうするの？ それより、早く私の人形、探してよ」

「まあまあ。 人形を探すのは、話を聞いてからでも遅くないよ。」

ほら……」

あゆみさんに促されて、私はもう一度、お爺さんと、お婆さんの会話を耳を傾けます。

「見つからない。見つからない」

お婆さんがつぶやいています。

「え？」

その声は今まで私が聞いたことがない、とても悲しげな声でした。

「見つからない。 どうしましょう……あの人形は、あの子の大切な形見なのに……」

「え？」

形見？ ナンノコト？

「なんとんでも、お葬式の際と一緒に供えてあげなきゃ……」  
お婆さんが小さい声でつぶやき続けます。

「え？」

一緒にお供え？ ナンノコトナノ？

「生きていれば、今年で14歳。 まだまだ楽しい盛りだったろう



に……」

「なあ、お婆さん」

いつまでもつぶやき続けるお婆さんに、お爺さんが優しく声をかけます。

「これだけ探してないんだ。きっと、あのお人形さんは、あの子と一緒に両親のもとに行ったんだよ」

「そんなんっ。お爺さん。そんなことっ」

お婆さんがお爺さんを睨みます。

「昨日はちゃんとココにあったんです。あのお人形は、あの子の代わりに毎日、大切に……」

「前から言おうと思ってたんですが……」

「……はい？」

お爺さんが静かに言います。

「もう、あの子の服を買い続けるのは止めませんか」

「えっ？」

「ええ？」

私の服？ ドウユウコト？

「あの子が逝ってもう二年。毎年、毎年。四季折々にあの子の服を買い、毎日、毎日。あの子のための食事を用意する……」

「……………」

「それはとても良いことだと思います。けれどそれではあの子は、私達のその想いに囚われて、いつまでたつても、ここから逝けないんじゃないですか？」

お爺さんは、まるで私が見えて『いる』かのように、こちらを見ながら優しくお婆さんに語りかけます。

「昔から言っじやありませんか。『死んだ子の年を数えてはいけない』と……」

「……やっぱり、ダメですかねえ」  
お婆さんは小さく笑いました。  
でもその微笑みは、まるで……まるで泣いてるようで……

「ええ。ダメですよ」  
そう言う、お爺さんの声も、まるで軋むかのようです。

「あの子はちゃんと、大好きな両親の元へと、帰ったんですから」

「もう分かったら？ 君は亡くなってるんだ。病気でね」  
「そんな！」  
私は反射的に叫んでしまいました。

死んでない  
死んでない  
死んでない  
死んでない！

私は。私は……

「私は死んでなんかいない！　ちゃんと生きてる……！」

「違う。君は死んだんだ。二年も前に」

あゆみさんは、私の顔を正面から見据えながら言い切ります。

「君ももう気が付いているはずだ。もう思い出しただろう？」

嗚呼。

なんて冷たい人なんだろう！

あゆみさんは、なんて冷たい人なんだろう！

・死んだ私に対して　そんな冷たいことを言うなんてっ

……でも。　でも。

「でも私」

探さなきゃ。私の人形を探さなきゃ。

早く。

早くしないと、雨が止んでしまう……」

・にゃうん。

いつの間にか、あの黒猫さんが、すぐそばに座っていました。

その蒼い瞳で真っ直ぐに、私と、あゆみさんを見ながら小さく鳴いています。

「ヒメ社長、ご苦労様。 お迎えにきてくれたんですか？」

「にゃうん……」

ヒメ社長は、しっかりと背筋を伸ばしたまま、あゆみさんに返事をします。

「雨あがりますね。 じゃあ、そろそろウチは帰るよ」

「私…私は……」

「君ももう、この家から出た方がいいよ」  
「だ、だめっ」

私は叫んでしまいました。

「私、どうしてもお人形を持って行きたいの！ 父と母がくれた、  
たったひとつの宝物……」

探さなきや。

探さなきや。 探さなきや。 探さなきや。 探さなきや。 探さなきや。

探さなきや。 探さなきや。 探さなきや。 探さなきや。 探さなきや。

探さなきや。 探さなきや。 探さなきや。 探さなきや。 探さなきや。

探さなきや。 探さなきや。 探さなきや。 探さなきや。 探さなきや。

探さなきや。 探さなきや。 探さなきや。 探さなきや。 探さなきや。

もう、いいんだ』

え？」

「もう、いいんだよ」

「あゆみさん？」

「もういいんだ、ホラ。落ち着いて、ちゃんと見て」

そう言つと、あゆみさんは私の髪の毛を、そつと撫でてくれました。

..ばたっ

音を立てて、人形が床に倒れます。

それは私が……お爺さんとお婆さんが探していた、そのお人形でした。

『そんな……そんな私が……私が人形だったの？』

「想いが強かつたからだよ。でも君が思い出したから……ほら。体だつてもう大丈夫だろ？」

見れば、あの背中までびっしりと刻まれていた、呪いの刺青は跡形もなく消えています。

『嘘つき。』

自分には何の力もないって。除霊もお祓いもできないなんて言つておきながら……

こんなにあんまりよ。あの怪異も、モノノ怪も全部、私のせいだったのね！

私がすべての元凶だったなんて……」

私は宙に浮き、あゆみさんを見下ろしながら叫びます。

『このまま、ありがたく成仏しろって言うの？ そんな、そんなのひどいわ！』

「ウチをこの家に呼び込んだのは君だよ。これは君の望んだことだったんだ」

『そんなの望んでないっ！』

私はこんなこと、望んでなんかない！

私が二年も前に死んでたなんて。

それでも、お爺さんとお婆さんは、毎年、私の服を用意してくれて、毎日、私のご飯を用意してくれて……

ああ。私ってばなんてことを……

謝らなきゃ。

今すぐ、お爺さんとお婆さんに、謝らなきゃ……」

「大丈夫だよ」

『え？』

あゆみさんがヒメ社長を抱きかかえながら、そつと右手で指差します。

そこでは、お爺さんとお婆さんが、寄り添うように古いアルバムを見ながら話をしていました。後ろからそっとのぞき込むと、それは私の写真でした。

「神様は不公平ですね」  
お婆さんが言います。

「私達のような年寄りより先に、未来ある、こんなかわいい子を召されるなんて……」

「いやいや、お婆さん。そうじゃないですよ」  
お爺さんが微笑みます。

「神様はきつと、少しでも早くあの子を、両親に会わせてあげたかったんですよ」

「でも、それじゃ残された私達は……」  
「きつとほんの少しの間でも、あの子との思い出を作ってくれたんでしょ」

「ホントにいい子でしたね」  
お婆さんが言ってくれます。

「ええ。とてもいい子でしたね」  
お爺さんも言ってくれます。

「けど私達は、結局、あの子を苦しめていたんですかねえ」  
「ええ。きつと、苦しめていたんでしょね……」

「あの子は私達のこと、恨んでますかねえ」

「ええ。恨まれてもしかたありませんね……」

お爺さんは、お婆さんの肩を、そっと抱きしめました。

- そんな事ない

そんな事ない

私は激しく頭かぶりを降ります。

- 私は

私は、ふたりと暮らせて……

「あの子は、私達が向こうに行ったとき、私達のこと分かるでしょうか？」

「どうですかねえ。あの子も、本当のパパやママという方が、ずっと楽しいでしょうからねえ」

「そうですねえ。その方があの子も嬉しいでしょうし……仕方ないことなんです」

「ええ。仕方ないでしょう……私達は彼女の親の代りにしか、なれませんからねえ」

そのお爺さんの言葉に、お婆さんはとても悲しげな微笑を浮かべました。



「……でもね、お婆さん」  
「はい？」

お爺さんが、そんなお婆さんに言いました。

「私達は、あの子のこと忘れないでしょう？　今度は、ちゃんと見守ってあげれますよ」

「……ええ。ええ。そうですね。お爺さん。　今度は、ちゃんと遠くからでも見守ってあげれますとも……」

写真を見直すふたり。

さびしそつに、けれど幸せそつに、お爺さんとお婆さんは微笑みま  
す。

悲しげに、けれど、いとおしげに、ずっと私の写真を見てくれています。

『うん。もういいわ……』

私はつぶやきました。

『私待ってる。』

ずっと待ってる。　いつか、お爺さんとお婆さんとまた会える日  
まで。

私は、ずっと待ってる。　忘れない。　ふたりのこと。　絶対っ  
絶対に。

だから……

だからそのとき、ちゃんと言っの。

「 ありがとう  
」  
『 って  
』

あゆみさんは私を見上げながら、素敵な笑顔を見せてくれました。

「 あっ、でも

でも私のお人形は？

「 もう君は持っているだろ？」

え？ 止めて！

あゆみさんが私のお人形を、火にくべました。  
ぱちぱちと音をたてながら、人形は炎に包まれていきます。

ひどい 何をするの!？

私のお人形を焼くなんて！

「 お人形ならあるでしょ」

え？

「ほら。君の手の中に」

あ…

私は自分の手に目をやりました。

そこにはいつの間にか、私のお人形が……

「もういいんだ。君は行かなきゃ。……ごめんね」

あゆみさんは小さく笑いました。

でも……でも、その顔は……

あゆみさんは下を向き、人形を焼き続けます。

いいわ

許してあげる

私は自分のお人形を、力いっぱい抱きしめました。

だって……

だって あゆみさんってば……

「あれ？ あゆみさん。焚き火ですか？  
って、ど、どうしたんです？」

「いえ、お嬢。大丈夫です。ちよつと煙が目にしみただけです  
から」

立ち昇る煙を見上げながら、あゆみはそつと涙をぬぐった。

雲の切れ間から、光が差し込んでくる。  
長い雨は、ようやく止んだ。

f i n e  
「 R i c c o v e r o ) 雨宿り ( 「 L a -

13本目のお話しをお届けします。

いやもうなんですネ（汗）

最初の六行で、今回私がやりたかったことは全て完結で……（鹿馬）

ARIA史上、最大の悪ノリ、おバカ作品です。

はあああ…と生暖かい夕メ息のマイナコードで読んでいただけたなら、これに勝る幸せはありません（大鹿馬）

それでは、しばらくの間、お付き合いください。

「紅き薔薇は、勇気のしるし。クイーン・レッド!」

「あ、蒼い海は、や、優しい。アクア・ブルー」

「暖かな夕陽は、でっかい心。プリンセス・オレンジいつ」

「澄んだ黄色は、揺るがぬ意志。バッジエーオ・イエロー!」

「…黒い大地は、染まらぬ夢……ノーム・ブラック……うう」

「舞い散る雪は、暖かな未来。スノー・ホワイト。うふふ……」

「アクアを守るは、天使の使命! 六人そろって!!」

「……」  
ウン(WINN)ディーネ戦隊、フレッシュ・ヴェネツ  
イア・キューティールンジャー!! 「……」

「ちゅどおおおおおっおおおおん!!」

六彩の炎が吹き上がる。

「今度のフェスタに、ヒーローショーをやります」

藍華が唐突に切り出した。

「ほへ……?」

「でっかい、いきなりです」

「お嬢?」

「はい?」

「何ですって?」

「ですからあ。今度の市が主催するフェスタに、私達でヒーローショーをやります」

「ほへ……?」

「こりやまた、でっかい、いきなりです」

「お嬢?」

「はいい?」

「ですから何ですって?」

「くり返すの禁止いいいいいい!!」

かつて火星と呼ばれていた星が、大規模なテラ・フォーミングを受け、水の惑星アクアと変わってから150年。

そのアクアの中の都市のひとつ、ここネオ・ヴァネツィアでは十日後、市民が主催する大規模なフェスタが企画されていた。カーニバルとはまた別の、市民主催でのチャリティ・フェスタのお祭りだった。

「つまり、そのフェスタのときに、みんなでショーをやるってことだね、藍華ちゃん」

「だからそう言ってるでしょうがあ！」

藍華が灯里に喰ってかかる。

叫ぶ少女。

藍華・S・グランチエスタ。

姫屋のウンディーネ。

ウンディーネとは、ここネオ・ヴェネツィアにおいて、ゴンドラとゆう小舟を使い、街の観光案内をする水先案内人と言う。

女性しかねない職業で、藍華はその数ある水先案内店の中で、老舗中の老舗『姫屋』のオーナーの一人娘にして、

数年前に新に開業された、カンナーレジョ支店の支店長。

一人前の証。プリマとしての通り名は「ローゼン・クイーン 薔薇の女王」

何事にも情熱的にぶつかって行き、時には強引に解決してゆく、そんな元気いっぱいな少女。

けれど、その性格は、灯里曰く「元気でしっかり者だけど、ホントは素敵な泣き虫さん」



その藍華を、ニコニコと微笑みでもって見ている少女。

水無<sup>みずなし</sup> 灯里<sup>あかり</sup>

彼女も藍華と同じプリマ・ウンディーネで、ARIA・カンパニーとゆう、また別会社のウンディーネだ。

老舗で従業員100名近くを抱える姫屋と違い、灯里の所属するARIA・カンパニーの従業員はたった二人。

それでもARIA・カンパニーは、姫屋や同じ大手の水先案内店「オレンジ・ぷらねっと」にも引けをとらない人気を博していた。

それは灯里が、灯里であるが故。

彼女のゆつたりとして、穏やかなゴンドラは「もうひとつの小さなネオ・ヴェネツィア」とも呼ばれ、みなに親しまれていた。

そんな灯里の通り名は、その澄んだ心や性格にふさわしい「アクアマリン 遙かなる蒼」

藍華とは灯里がマン・ホームから来たとき以来の知り合いで、親友だった。

「まあまあ、お嬢……」

なだめる少女。

あゆみ・K・ジャスミン。

藍華と同じ姫屋所属のウンディーネで、彼女の下でカンナーレジョ支店の副店長を勤めている。

トラゲットと呼ばれる、ネオ・ヴェネツィアの真ん中を流れる大運<sup>カナル・ゲランデ</sup>河の渡し舟に情熱を注ぐ。

そんな、あゆみの階級は、プリマ（一人前）ではなく、半人前の「シングル」

なぜなら、トラゲットはシングルでなければできないとゆう規定があり、そのため、あゆみは頑なに（その実力は充分あるにもかかわらず）  
プリマに昇進することを拒み続け、副支店長とゆう地位にもかかわらず、未だに新人のシングル達と共にトラゲットを続けている。  
そんな熱くて、けれど優しく「オトコマエ」なウンディーネ。

藍華にとって、あゆみは、もっとも信頼できる部下であり、パートナーでもあった。

「藍華先輩、どつどつどつ……」

たしなめる少女。

アリス・キャロル。

ここネオ・ヴェネツィアにおいて、姫屋と肩をならべる大手水先案内店「オレンジ・ぷらねっと」の若きエース・ウンディーネ。

アリスはそのプリマ昇進時において、見習いの「ペア」から、半人前の「シングル」を飛び越し、いきなり一人前の「プリマ」に初の二階級昇進を

果たし、その長きウンディーネの歴史の中に、燦然と輝く記録を残した逸材。

彼女目当てに、このネオ・ヴェネツィアを訪れる観光客も、けして少なくなかった。

その通り名は「オレンジ・プリンセス 黄昏の姫君」

次代のウンディーネを代表する存在として、もっとも注目され期待されている少女。

アリスにとって、藍華と灯里は、そのペアの時代から共に練習し、共に成長してきた大切な「先輩方」であった。

「面白そうですねえ」

「本気ですか？」

感想を述べる少女、ふたり。

ひとりゆめのは夢野あみず 杏

アリスと同じ、オレンジ・ぷらねっとの所属で、まだ顔立ちに幼さを残す、ショートな黒髪が似合うウンディーネ。

「何事もやわっこく」を信条として、何度失敗しても決して諦めることなく、何度も何度も自分を「やわっこく」して挑戦し続けるそんな芯の強さを持った、素敵な少女。

まあ、問題はその名にあるように、少々、夢見がちな点で、彼女の部屋は可愛いいぬいぐるみで一杯だったりするのだ。

そしてもうひとりの少女。

アトラ・モンテウエルディ。

眼鏡っ子。毎日の気分によって架け替えるその眼鏡の奥に、意志の強さと明敏な知性を感じさせる瞳が輝いている。

一度は諦めかけたプリマ昇進への夢を、トラゲット仲間でもある杏やあゆみ。その時出会った灯里によって

もう一度、自分を奮い立たせ、つかみ取った、心強き少女。

またその優れた知識と観察力、洞察力で - 本人は強く否定しているのかもかわらず - 「ウンディーネいちの名探偵」とも呼ばれてい

た。

アリスにとってふたりは、とても頼れる先輩。

藍華やあゆみ、灯里にとっては、会社の垣根を越え、なんでも語り合える素敵な友人だった。

「だあああああつ。」「ちやちや言うの禁止い！ やるったらやるのおおおおおつ」

「面白そうな話じゃないか……」

「ぎゃふっ？」

不意に背後から聞こえてきた声に、藍華の肩が - びくりっ - と跳ねた。

恐る恐る振り向けば、そこには生クリームのセココアのカップを手  
に、妖しげな微笑を浮かべる晃の姿が……

「ぎゃあああああつス！」

藍華の悲鳴が、狭い店内に響き渡った。

妖艶に微笑む美女。

晃・E・フェラーリ。

通り名を「クリームゾン・ローズ 真紅の薔薇」

長い黒髪に、黒い瞳。ツンと高く整った鼻。紅く輝く唇。誰が見ても「美人！」と叫ぶであろう女性。

事実上、現在の水先案内業界を引っ張る、自他共に認める、NO.1 トップ・プリマ。

同じ姫屋の後輩、藍華をして「今でも目の上のタンコブ」と言わしめるほどの八面六腑の活躍をみせる、先鋭的なウンディーネ。

けれどまた、その厳しさなの中ににじみでる優しさを、誰よりもまた、よく知るのも藍華だった。

彼女にとって、とてもおっかない、けれど絶対の信頼をおく先輩。

「あらあら……」

晃の隣から、小さな笑い声が響く。

「アリシアさん!？」

藍華が、晃とはまったく逆の声色で、その名を呼んだ。

「うふふ。藍華ちゃん。みんな。お久しぶり」

アリシアがにっこりと微笑んだ。

陽が差し込んできたような、暖かな微笑みを浮かべる美女。

アリシア・フローレンス。

元、ARIA・カンパニーのプリマ・ウンディーネ。灯里のプリ

マ昇進と同時に寿退社。

現在は請われてゴンドラ協会に入会し、ネオ・ヴェネツィア全てのウンディーネの発展と向上を担う仕事をしている。

引退前は、晃やオレンジ・ぷらねっとのアテナと共に「水の三大妖

精」として、ネオ・ヴェネツィア全てのウンディーネから尊敬され  
憧れられる存在だった。

元の通り名は、その天使の笑顔にふさわしい「スノーホワイト 白  
き妖精」

灯里にとって、今でも姉のような、母のような、そんな優しく大切  
な女性。

「アリシアさあくん。 どうしてここに？」

藍華が甘えた声を出す。

昔から藍華は、アリシアに大きな憧れを抱いていたのだ。

「うふふ…協会のお仕事の時間が少し空いてね。 それで晃ちゃん  
やアテナちゃんに連絡をとったら、たまたまふたりとも時間が空い  
てて…」

それで一緒にお茶にしましょって誘ったの。 うふふ」

「それはナイス・アイディアです。 おかげで私もこうして、一緒  
にアリシアさんとお茶が飲めます」

「あらあら……」

「すわあ！ おい藍華っ。 私の時とは、ずいぶん態度が違うじや  
ないか！」

晃が藍華に喰ってかかる。

「当たり前です」

けれど藍華は、平然と言い返した。

「晃さんとアリシアさんは、全然違います。 ……優しさの点で」

「すわあっ！　そこへなおれっ。　修正してやる！」

「きゃああ。　アリシアさあん、助けてくださああい！」

「あらあら……うふふ」

「待てっ、こらー！」

「ぎゃあああああっス」

アリシアを中心に、ドタバタと走り回る晃と藍華。

けれど誰もが知っていた。

晃と藍華の間には、とても固くて強い「絆」が結ばれていることを、このふたりはただ単に、仲良く、じゃれあっているだけなのだとゆうことを。

「あのお……話を進めませんか？」

戸惑うように。けれどまったく戸惑ってないような穏やかな微笑を浮かべ語る少年。

アルバート・ピット。　通称アル。

黒いマントに黒いブーツ。　そのうえ目には黒いサングラス。

そんな黒づくめの彼は、このAQUAの重量を常に1Gに保つ「ノーム　地重管理人」とゆう仕事をしている。

女性のような優しい顔立ち。　小柄な体型。　時には少女と間違ってしまうかのような少年。

けれど、誰にも負けない優しさで、みかけによらない芯の強さをもつ男の子。

そして藍華とは、相思相愛のゆっくりとした想いを重ね合わせる少年。





「だってこーでもしないと、あんた達、なんにも決められないでしょ！　はい、発表するわよ！」

ガサゴソと

ポケットから取り出した、くしゃくしゃな紙を手で引き伸ばしながら、藍華が告げる。

「まず、ヒーロー側。メインの赤は、もちろん私。後は会社の色に合わせて、青は灯里。オレンジが後輩ちゃん」

「あの……藍華ちゃん」

「シヤラップ！　話は最後まで聞く」

「……はい」

「敵役は、あゆみさん、杏さん。それにアトラさん。以上！」

「……………」　ほへいやちょそんなダメだよでつかい強引ええ！  
以上ってあらあらうふふわたしはウチも本気ですかつかそんな無理  
ムリむりい　『…………』

「すわあっ」

騒然となる一同を、晃がたった一言で黙らせた。

「おい、藍華……」

「な、なんですか晃さんっっ」

「私とアリシアとアテナは何処だ……」

「はい？」

「だからサ……」

晃の声は「ノームの世界（地の底）」から響いてくるようだ。

「私とアリシアとアテナは、なんの役なんだ!？」

「ええええええっ」

慌てる藍華。

「いや、あのこのお話しは、あくまで私達の話して……」

「私達、ウンディーネの話しだろ？」

「……いや、あの。そんな……第一、アリシアさんに「迷惑わ……」

「あらあらあら。私は構わないわよ？」

「アリシアさん!？」

「だって、楽しそうじゃない？ うふふ」

心の底から、楽しげな笑みを浮かべるアリシア。

藍華は突然、思い出した。

昔訪ねた遠くの村で、グランマ・あめつちあきの天地秋乃が、アリシアを称して言った言葉。 曰く・

・アリシアは、なんでも楽しんでしまう達人

しまったああああ！

この状況をアリシアは、しっかりと楽しんでいるのだ。

「あの……」

おずおずと、杏が手を上げる。

「はい、杏先輩」

なぜか落ち込んでいる藍華に代わって、アリスが発言を促す。

「あのお…ヒーロー側が三人ってゆうのは、少なくともですか？」

「おや、お詳しいんですね」

アルが嬉しそうな声を上げた。

「はい、確かに、いわゆる戦隊モノと呼ばれる、昔、マン・ホームで放送されていた番組では、ヒーローは必ず五人一組でした。

まあ、厳密に言えば、三人のときも何度かあったんですが、途中から二人加わって、最終的に五人になります。

最初から最後まで三人だったのは、一度きりです」

「そ、そうなんですか」

「ええ。さらに15作品目を超えるあたりから、さらに途中からひとりを加え、最終的に六人で1チーム。と、ゆうのが定着します」

「は、はあ……」

「そうなると…ううん。ヒーロー側が三人ってゆうのは、確かに少ないかもしれませぬ」

「それに」

今度はアトラが疑問の声を上げる。

「ショー形式であれば、ちゃんとしたお芝居をしなければいけないのでは？ 進行係や音響、照明、特殊効果…とかも」

「……うっ」

「そうねえ…私達は、そうゆうコトに関しては素人だから…うふふ」  
アリシアが全然困ったふうでもなく、困ったように微笑んだ。

「誰か、そうゆうコトに詳しい人がいれば……」

「……そうだつ！」

突然、灯里の頭の上に、電球マークが浮かび上がる。　　ぴかぴかあ  
ちゅ……なんでもない。

「アイちゃん、あの人！」

「は、はい？　灯里さん？」

突然、名を呼ばれ、きよとん・とする少女。

アイ。

灯里の後輩。　ARIA・カンパニーふたり目の社員。

灯里と同じ、マン・ホーム出身。

灯里がまだシングルだったときからの知り合い。

灯里と出会ったときはまだ、ミドルスクールの四年生だった。

最初、自分の大好きな姉が嬉しげに語るネオ・ヴェネツィアとウン  
ディーネの魅力に対して、幼き心から「やきもち」を焼き  
AQUAが大嫌いだった少女。

けれど灯里やアリシア。　藍華やアリス、その他、たくさんの人達  
との出会いによって、逆にAQUAが…ネオ・ヴェネツィアが  
大好きになった少女。

今では、尊敬し心から慕う灯里の下で、プリマになるべく修行中。

「ほら、元、女優さんで、とっても素敵なウンディーネさん」

「…あつ…もしかして。はい。じゃあ、私、呼んできます」

「うん。お願い。場所は…分かるよね」

「はいっ。あそこしかありませんし…じゃあ、ちょっと行ってきます」

「うん。お願い」

ばたばたと飛び出して行く、アイ。

「ううん？ 灯里…誰のこと？」

そんな藍華の問いかけに、灯里はまるで、いたずらっ子のように微笑んだ。

「みーんなが知ってる、素敵な人だよおへへへ」

待つこと暫し。

…ばあーん！

突然、店の扉が、勢いよく開かれた。

「俺、参上！ さあ、お前達の微笑みを数えろ！」

いきなり言い放った。

(^U^U) e t e n -

E s s e r e C o n t i

- 次回予告

【 ステージに出るウンディーネ達を待ち受けていた彼女は、ついに、その本領を発揮して迫る 】

「お前は……」

「お久しぶり」

「ぐばあ！」

「やあ、やあ、やあ」

「結局、私達はスケープ・ゴート……」

「聞こえないなあ」

【 それは彼女にとっても、ウンディーネ達にとっても、初めて経験する驚愕の体験だった 】

「ふるふるふる……」

「離せ、離せよ！」

「オレンジ・ぷらねっと組は用無しだ！」

- 次回 「ウンディーネ、舞台に立つ!？」  
ることができるか (c v 永井一郎)

- 君は生き延び



どうも私は、脇役を含め、大勢のキャラが出てくる方が「お得」感があって好きなのだと分かりました。

いえ、たんなる貧乏性なのかもしれませんが。

うん。

困ったモンだ……（鹿馬）

「茜くん!？」

最初にその声を上げたのは、蒼羽だった。

第14話

「AQUA Aretalogy」

ウン

ディーネ、舞台に立つ！編

「お久しぶりです。 蒼羽さん。 でも……」

「…でも？」

「私のことは、バツジェーオ - と、呼んでください!」

満面の笑みで言い放つ少女。

茜・アンテエリーヴォ。

「MAGA」社のプリマ・ウンディーネ。

夭折した先代のウンディーネの跡を継ぎ「バツジェーオ (愚か者)

」を名乗る頑固者。

けれどそれは、強き意志の表れ。

けれどそれは、何モノにも流されない確かな想い。

今でも桜の小島で唄を口ずさんでいるバツジェーオ。

灯里達にとって、決して忘れることのできない思い出を、街中の人

々と分かち合った。 そんな優しく素敵なお客者。

「大まかな話しは来る途中、アイちゃんからお聞きしました」  
茜は満面の笑顔で言い放つ。

「不肖、このバツジエーオ。 およばずながら力になりました。  
なんでも聞いてください、蒼羽さん」

「う…うおっおっ…」

絶句するウンディーネ。

蒼羽・R・モチヅキ。

アリス達と同じ、オレンジ・ぷらねっとのプリマ・ウンディーネ。  
けれどゴンドラ・クルーズはせず、専任の指導教官として後輩の育成にたずさわる。

その指導の厳しさと激しさは、晁と双壁をなす。

「アツディエトウロ・アーレア 後方危険」が口癖な、鬼教官。

けれどそれは、過去からの決別。 呪縛への別離。

確かな心と想いを持つ、豪傑なる女性。

アリス達にとって永遠に頭の上がない存在。 けれど永遠に心を預けられる、確かな存在。

「ぶいにゆにゆにゆん」

アリア社長が歓迎の声を上げ -

「まああ  
」

まあ社長がそれに続く -

「にゃふうう  
」

アキラ社長が感謝を返し -

「……………」

そんな三匹を、ヒメ社長が無言で、けれど優しげに見つめていた。

四匹の猫達。

水先案内店の社長ズ。

古くから、ここネオ・ヴェネツィアのウンディーネ達は、蒼い瞳の猫を「アクアマリンの瞳」と呼び、航海の安全を祈る象徴として

「社長」と呼び、大切にし、共に暮らしている。

アリア社長はA R I A・カンパニーの。

まあ社長はオレンジ・ぷらねっとの。

ヒメ社長は姫屋の。

アキラ社長はM A G A社の。それぞれの社長猫だ。

実は、アキラ瞳は蒼ではない。M A G A社のカラーと同じ黄金色の瞳をしている。

けれどアリア達は「そんなことは些細なこと」 - とばかりにアキラを受け入れ、いつでも楽しく、仲良く過ごしていた。

同じ猫として。

「まず最初に、ヒロイン側の人数ですが…やはり三人では少ないでしょう」

「う、うん」

茜は言い切った。

「舞台での迫力も違いますし、人数が多い方が、逆に一人一人の演技の時間が少なくできるので、結果的には負担がかかりません」

「なるほど……」

「さすがは元、トップ・アクトレス（女優）さんですねえ。素敵  
ンぐです」

「ありがとう、灯里さん…で、それに裏方として、簡単とはいえ、照明や音響、特効も使用するとなれば…こんな感じでしょうか？」

茜が一枚の紙に、さらさらと書き込んでいく。

「まずは全体を把握し、見渡せる総合プロデューサー的な存在が一人、必要です……どうかしましたか、蒼羽さん？」

「い、いや。なんでもない」

『プロデューサー』とゆう言葉に、なぜか蒼羽の顔が歪む。

けれどこのとき、

「名探偵」のアトラの目は、晃とアリシアの顔にも、微妙な笑顔が浮かぶのを見逃さなかった。

もっともそれは、私や杏、アリスちゃんも一緒だけれど……

「はあ……まあ、それならいいんですが……で、私はこの役は、蒼羽さんが適任だと思います」

「ぐばあ！」

飲んでいた生クリームのせココアにむせ返りながら、蒼羽がのた打ち回る。

「……あの、ホントに大丈夫ですか、蒼羽さん」

「だ、だいじょうぶ……だ」

息も絶え絶えに、蒼羽が答えた。

アトラは笑いをこらえるのに必死だった。

プロデューサーの悲劇。

あれは……あの後起こったことは「オレンジ・ぶらねっと・七つの秘密」のうちのひとつなのだ。

「アトラ。お前、照明」

「はい？」

蒼羽に、不意に名前を呼ばれ、アトラは絶句する。

「それから杏。お前、音響」

「にゃぶー!？」

同じく、杏の瞳がまん丸になる。

「あ、あの…どうゆう…」

「アリスが舞台上上がるなら、あとの俺達オレンジ・ぷらねっと組は用無しだ。それなら俺達三人で裏方に徹した方が、なにかと便利だ」

「えええっ」

「それに杏っ」

「は、はい？」

「お前、確かフェニーチェ劇場のスタッフさん達とは、顔見知りだったな」

「あ、はい。確かにアテナさんのあのときから、親しくさせてもらっています…」

「なら手助けを頼んでこい」

「はいいい？」

「杏さん、フェニーチェ劇場のスタッフさんとお知り合いなんですか？」

「知り合いつてゆうか、なんてゆうか…お友達？」

「それはスゴい！」

茜が瞳を輝かせて言う。

「あの気難しくて、プライドの高さで有名な、フェニーチェ劇場のスタッフさん達と、お友達だなんて…」

「いや、あの…それは別に私のせいじゃなくて…アテナさんの…」

「よし。頼むぞ、杏っ」

「どええええええええ！？」

うむを言わせぬ蒼羽の命令が耳を打つ。

「あの…蒼羽教官。もしかして……」

「なんだ、アトラ？」

「私達つて、もしかして『スケープ・ゴート』……」

「うるさいな。なんも聞こえん！」

「そんなあ……」

「何だ？何か文句あんるのか？ ああん？」

「ありません……しくしく」

蒼羽は、ひと睨みで、アトラを黙らせた。

「それじゃあ、スタッフの件はそれでOKで……」

「茜さん…ツッコまないんだ……」

アイが小さくつぶやく。

「次に、シヨーが始まる前にお客様を盛り上げるための「前説・マエセツ」用にMC（マスター・オブ・セレモニー 司会者の意）が、ひとり必要です。元気で明るく、朗らかな笑顔が似合う人がいいんですが……」

全員が無言のうちに、ひとりのウンディーネに視線を飛ばす。

「う、ウチ？」

あゆみが自分を指差しながら驚いた。



「うん。 あゆみさんならぴったり！」

「灯里ちゃん？」

「ええ。 あゆみさんが適任だわ」

「お、お嬢？」

「ああ。 お前しかいな……」

「あ、晃さん？ いや、その……」

「はい。 MCは姫屋のあゆみさん…決定」

「いやあのちよ…待つ。 う、ウチわウチわ…うわあ！？ は、離

せアトラ、杏う。

スケープ・ゴート？ なにそれ？

いや、だからちよっ待つウチの話しも聞いて……離せっ離せよ

離して、ら、らめええええええ……」

「さて次は……」

なぜか次第に小さくなってゆく、あゆみの声に何の感情もしめさず、茜は淡々と言葉を紡ぐ。

「場をひっぱる、敵役の悪の女幹部は、晃さんをお願いするとして

……」

「ああ、任せておけ」

晃が不敵に笑った。

「晃さんってば、もう役になりきってるんだ……」

「灯里さん、そこ違います」

「はひ？」

灯里の頓珍漢な感想に、すかさず、アイがツッコみを入れる。

「で、その昇さん演じる悪の女幹部の手下に…アイちゃんと…ア  
リーチエ」

「『 ええええええええええええええええええええええええ！？ 』」

再び、悲鳴が小さな店に木霊する。

「そ、そんな…私達も出るんですか？」

「そ、そんな、アクションなんかできませんよお……」

「アイちゃんはともかく……アリーチエ、お前は当然だろ？」

「ふるふる…ふるふる……」

涙目で激しくかぶりを降る少女。

アリーチエ・P・アントノフ。

自ら「バツジエーオ 愚か者」になることを決めた心優しき少女。

その秘めた情熱は、誰にも止めることはできない。

幼馴染のご近所さんであった、茜を心から尊敬し、ウンディーネと  
しても、バツジエーオとしても、とても敬愛している。

階級は見習いの「ペア」 最近、アイとはよく合同練習をする仲だ。  
後に、ふたりに加え、藍華とアリスのお弟子さん共に「水の四大妖  
精」 - と、呼ばれる運命にある少女

茜にとって、自分が自分であることを改めて気付かせてくれた、大  
切な、とても大切な少女。

「私、演技やアクションの経験なんてありませんよう」

「大丈夫、それは私がちゃんと教えてやる」

「で、でもお……」

「まあ、それ以上、反論は聞かないよ。バツジエーオは頑固なのさ」

「そんなぁ……」

だからこそ茜は、アリーチェに容赦がなかった。

「大丈夫よ、アイちゃん、アリーチェちゃん」

「藍華さん？」

「あなた達はただ、アシスタントとして舞台に立ってるだけでいいの」

「そ、そうなんですか？」

「そうっ」

藍華は、ふたりの両手をしっかりと握り締め、言い放った。

「本当のヤラレ役は、今、決まったから」

「はい？」

「ばあああーん！

再び、ドアが勢いよく開け放たれた。

「やあやあ。待たせたなあ！」  
「みんな、お待たせなのだ！」

無駄に明るく元気な声が、店内に響きわたる。

誰もが優しく微笑んだ。

ふたりのスケープ・ゴート

< 贖罪羊 > に………

・ E s s e r e C o n t i n u a t e ( ^ \_ ^ )

- 次回予告

【 昨日、冷たい雨に打たれ、ひとり佇んでいた 】

「スカート、短かすぎ……」

「はひひひひひひい！」

「とてとてたつたと、とびたつた」

【 今日、全てを焼き尽くす、熱い日差しの中で、ひとり彷徨っていた 】

「お前達に与えられた言葉は、ありがたいことに二つもある！」

「だから照れるっちゅーの！ー！」

「うっつづ。 どうしてこんなことに……」

「バシヨタオレールの悲劇」

「きゃあああああああああああああー！」

のことは分からない (c v 銀河万丈)

- 次回「リハーサル」

明日、そんな先

AQUA Aretalogy      リハーサル編（前書き）

またまたまた -

粗忽な一陣の風の悪ノリが始まりました（汗）

またか…と、どうか思わず、読み進めていただければ、これに  
勝る幸せは、ありません。      ホントに（鹿馬）

しばらくの間のお付き合い。      よろしく願います・

AQUA Aretalogy リハーサル編

「声が小さい。 もう一度！」

「あめんぼあかいな、アイウエオ。 浮藻に小エビも泳いでる」

「まだまだ小さいつ。 もう一度！」

「ふえええええ……」

「あらあら……うふふ」

第14話 『 AQUA Aretalogy 』 リハー

サル編

「柿の木、栗の木、カキクケコ。 啄木鳥こつこつ、カレケヤキ」

「いいですか。 ウンディーネも役者も発声が大事なのは同じです。 強く短く元気よく。 大きな声で、はっきりと」

「とてとてたつたと、飛びつ立った。 雷鳥は寒がる、らりるれろ」

「はい最後、一番大きな声で！」



「わいわいわっしょい、ワイウエヲ。うえきや井戸がえ、お祭りだ！」

・ばちばちばち

「さすがあー！」

アンが拍手を送る。

心底、楽しそうな表情で拍手を送る少女。

アン・シオラ。

ここカフェ「Biancaneve ビアンカネーヴェ」< 白雪姫 > のオーナーで、アリシアや晁の元・クラスメート。

彼女のいれる生クリームのせココアは、ウンディーネ達、絶賛の高級品。

ネオ・ヴェネツィアの隠れた名店として有名だった。

けれど・

もうひとつ、この店を有名にしている、真の理由。

それは……

「みんな、スゴい！ これなら絶対、シヨ　・G O G G M　・ぶぐがわわぶふー！」

意味不明な声を上げて、膝を抱え、転げ回るアン。

元気よく椅子から立ち上がった拍子に、テーブルの角にしこたま膝

をぶつけてしまったのだ。

「うぐぐげびばくげげびばぼぼ……」

ドジっ子。 目も当てられない程のドジっ子。

そう。

この店「ピアンカネーヴェ」を有名にしている、もうひとつの隠れた（実は隠しきれていない）理由。

「オーナーが危なっかしくて、とても見ていられない」（アトラ・モンテウエルディさん談）

これこそが、この店を有名にしている真の理由 - 恐いもの見たさ  
- の心理をくすぐる、最強の理由だった。

「ごめんね、アン。急にこんなことになって……」  
アリシアが優しく手をかしながら、アンを立たせる。

「い、いいのよ、アリシア……」  
アンは涙を浮かべながら答えた。

営業を終えた「ピアンカネーヴェ」の店内を借りて、茜のウンディ  
ーネ達への演技指導が始まっていたのだ。

「私もできるだけ協力したいし…それに」

「ん？」

「アリシアと晃の舞台。 私も、もう一度見てみたい」

小首をかしげるアリシアに、アンが元気一杯に答えた。

「あらあら…ありがとう、アン」

「ばっ、バカ。 だから照れるっちゅーの！」

顔を真っ赤に染めながら、キッチンへと走りこんで行く、アン。

そして・

・DOMZACGUFFZ・GOKGELGOOGMMMM!!

「うんぎゃあああああああああああああつ」

お約束のように、なにかが崩れる音と、アンの悲鳴が店内に鳴り響いた。

「おいっ、がちゃぺん！」

「あによお。 ポ二男」

「なんだじゃねえ。 なんで俺様がこんなことにい！」

怒って…いるのだろう。

だが、ソレのおかげで、ただ単なる『かわいいモノ』が、バタバタ

と騒いでいるようにしか見えない。

「それ、せっかく、アリシアさんが借りてきてくれたんだから、文句言わない!」

「…うっ。あ、アリシアさんが……………」

ずんぐりとした体型。

短い尻尾。

お腹には黄色とピンクの縞模様。

緑の体色。

半開きな眠たげな、ケムラーの目。

小さな前歯……………」

そう!

そこには伝説の幻獣・ガチャペンの姿が!

「いい、ポ二男。アリシアさんのために、頑張んなさいよ!」

「う…お、おっっ」

ポ二男と呼ばれた青年。

出雲 暁 いずも あかつき

このアクアの天候を司る「サラムンダー 火炎乃番人」のひとり。

「大丈夫たる俺様」を名乗る、何かと強気発言な青年。

アリシアが寿退社した後も、彼女に永遠の愛を捧げる…と声高に叫ぶ男。

けれどその実、「もみ子」≡灯里のことが気になって仕方ないのは

- 本人はともかく - 周りにバレバレだった。

ポ二男とは、その髪型から藍華がつけたアダ名だ。

灯里にとって、とても気になる男性。けれど周りには「反応の面白いヘタレ」扱いされる、男の中の男……たぶん。

「それにしても……」

ガチャペンのぬいぐるみを脱ぎながら、暁が言い放つ。

「この美しい僕の顔を、こんなぬいぐるみなんかで隠すなんて、なんと無粋なことであろうかあ！」

「フラワーよ舞い踊れ！ えいっ！」

「ぐわあっ」

突然ポーズを決め、名刺を差し出しながら、ふざけたことを言い出す暁。

そんな彼の頭を、どこからか取り出したのか、アトラの投げつけたタンバリンが直撃する。

「その心の闇、私のライトで照らしてみせる！ 純粹太陽輝、タンバリン！！」

「ほえほええええ……」

「これで大樹がまた元気に！」

照明係のアトラの活躍でもって、暁の心はこうして、無事浄化されたのであった。

「はい、暁さん」

枯れたハートの花を復活させた暁に、灯里がタオルを差し出す。

「お、おう、もみ子、さんきゅ…ぶはわあああー！」

「ほへへへっ、暁さん、暁さん、大丈夫ですか。ど、どうしたんですか？」

「もみ子…そ、その服はあ……………」

「ああ、これですか？」

キューティレンジャー・ブルーの衣装を着けた灯里が、くるり…と、その場で一回転する。

「えへへ、似合います？」

ひらり…と、めくり上がる。

「ぐばっああああああああああああああああっ」  
悲鳴が響きわたる。

「はひひひひいっ。 藍華ちゃん、藍華ちゃん、たいへんたいへん。

暁さんがあ！」

「も、もみ子よお……………」

「はひ？」

息も絶え絶えに、暁が言葉を紡ぐ。

「そのスカート…短かすぎ……………」

鼻から血を濁流のごとく噴出しながら、悶絶する暁。 うむ。 まだ完全に浄化されきっていないのかもしれない……………」

「きゃあああああああああああああああああああああつ  
また悲鳴が響きわたる。」

180センチは軽く超える巨体。

全身を覆う、真っ赤な羽毛。

丸く小さな目玉。

ぽっかり開いた、大きな口。

頭の上には、黄色と黒のストライプなプロペラが回っている。

くるくる。くるくる。くるくるくるりん。

もうひとりの悪役怪人。 幻獣・ムックン現る！

「ムックンんんんん！」

アリスが抱きついた。

「ムックンだあああ！」

杏も抱きつく。

「あただ…ふたりとも急に抱きつかないでほしいのだ」

これまた、アリシアが借りてきた、ぬいぐるみの中から情けない声を出す青年。

綾小路・宇土・51世。通称・ウツデイ。

車の乗り入れが禁止されているここ、ネオ・ヴェネツィアにおいて、エアバイクを使い品物を運ぶ空飛ぶ宅配業者。

飛ぶことを「泳ぐ」と称する、空を愛するナイス・ガイ。

ただ惜しむらくは、方向音痴な点と、地図を読み解くことが大の苦手・と、ゆづのが致命的。

それでも彼は今日も、お届けものを手に、ネオ・ヴェネツィアの空を「泳いで」いく。

アルや暁としては、ご近所さんの幼馴染。そして・

「ちょ…杏先輩。ムツくんにつっ付かないでください」

「大丈夫だよん、アリスちゃん。私は中の人には興味はないからわあは〜い。ムツくんだあ。すりすりっ」と

「で、で、でっかい何を言っんですか！ な、中の人などいません！」

耳まで真っ赤になって否定するアリス。

「そんなことはないのだあ……」

中の人。ウツデイが再び上げる情けない声が、みな笑いを誘う。

アリスにとっては、大好きな幻獣ムツくん。

そのムツくんこそ、中の人。



そう。  
つまりは、綾小路・宇土・51世。通称・ウツディは、アリスの  
そうゆう人なのだ。

「聞けっ、このクソ虫ども！」  
晃の声が爆裂する。

「お前等に与えられた言葉は、ありがたいことに、二つもある！」  
直立不動で聞く、アイとアリーチェに対して、晃は腰に手を当て、  
悪の女幹部そのものの口調で怒鳴り上げる。

「元気良く叫ぶ『イー』と  
それ以外の『イー』だ！  
もちろん、元気よく叫ぶ『イー』以外の言葉は、ここには存  
在しない！」

「そんなあ………」  
「そんなあ……ではない『イー！』だっ」  
情けない声を上げる二人に、晃が吼える。

「い、イーいいいい……」  
「声が小さいっっ」  
「イいいいいいいいいいい！！」

「よおおおし！！ その調子だっ」

ヤケクソ気味に叫ぶアイとアリーチェに対して、晃は満足そうに頷いた。

「アイ先輩……」

すがるような目のアリーチェに、アイは精一杯のはげましの言葉をかける。

「が、がんばろうアリーチェちゃん。きっとこれも立派なウンデ

イーネになるための修行だお！」

「イー……」

「きいやっああああああああああああああああああっス」  
三度、悲鳴が響きわたる。

「うっ……どうしてこんなことに……」  
小さな泣き声も聞こえてくる。

そこには

『美少女』なノームが居た。

話しは、ほんの少し前にさかのぼる。

「あとはヒロイン側ですね」  
藍華が言う。

「ええ。やはり六人は欲しいですね……ひとりはイエローの私が入るとして、あとふたり。あつ、カレーは好きです」  
茜が答える。

「アルくん。色的には、あと何があるの？」  
「そうですねえ……」

藍華の問いに、アルが指を折りながら勘定する。

「今、レッド、ブルー、オレンジ、イエローはいるわけですから……  
残るは -

グリーン。

ピンク。

ブラック。      ホワイト。      パープル。

ですね」

「うーん……」

「あらあら。      じゅあ私、ホワイトね」

「アリシアさん？」

考え込む藍華に、アリシアが言った。

「そんな……いいんですか？」

「もちろんよ」

うふふ - と、天使のような笑みを浮かべる、アリシア。

「私の昔の通り名は『スノーホワイト』 また使わせてもらおうわ。 うふふ」

「ありがとうございますっ」  
藍華は素直に頭を下げた。

「それじゃあ、あとひとり……」

「はい。ピンクは元々、ウンディーネにはいません。

あとは、グリーン、パープル、ブラック…… 色的にはそれぞれ、奇想館とエンプレスですが、残念ながら、今からお願いできるほどの親しい人は…… 残るは、ブラックか…… 『 あっ 』」

突然、誰もが気が付いた。

・そう、ブラックと言えば！

再び・

ひとりの人物に視線が集中する。

「ぼ、僕うううっ!?!?」

アルが自分の顔を指差しながら、絶句した。

「はああ……こいつはなんとも……」

時は戻って・

蒼羽がタメ息をついた。

キューティーレンジャー・ブラックの衣装をつけたアルが、顔を真っ赤にしながら下を向き立っている。

蒼羽が軽く化粧を施しただけで、ホラ、見目麗しい美少女ができあがり。

「うう…足元がスースーする」

アルがスカートの前を押さえながら、つぶやいた。

「あらあら。アルくんつてば、足きれいなのね。うふふ」

「ああ。すらりと伸びて…こいつは素晴らしい」

アリシアと晃が喜色を浮かべる。

「うわあ。アルくん、素敵ソグです」

「はい。でつかい、美しいです」

灯里とアリスが絶賛する。

「ぶいにゆくん」「まあああ」「にやふうう」「みやあつ」

社長ズ達がタメ息まじりに鳴き声を上げる。

「ありゃあ…こりはこりは…困ったモンだ」

「うん…女として、正直、嫉妬するわね…」

杏が困惑し、アトラが怒る。

「はへえ…アルさん、スゴイね」

「イー……」

アイの問いかけに、アリーチェが生真面目な返事を返す。

「うおお…こいつは……ごくり」

「はあ…アル。惚れてしまうのだ……」

暁が息をのみ、ウツデイーが惚ける。

そんなふたりは、すぐさま灯里とアリスによって、脛と脇腹に、それぞれキツイ一発を入れられるハメとなる。

「かわいい、かわいい、かわいいいいいいい！」

藍華が狂言乱舞し始めた。

「ちょっと、藍華……」

「アルくん。アルくん。ううん、アルちゃん、かわいい」

「もう、藍華まで……」

背中から抱きつきながら、赤いアルの頬を、藍華がツンツンし始める。

「あ、藍華。ちょっと止めて……」

「ううん。止めない。絶対、止めない。えへへ。アルちゃ

ん、ホントにかわいい」

「もう、藍華ってば……」

「うふ。うふふふっふ」

そんなじゃれ合う「美少女」ふたりを、みなが、それぞれにそれぞれの思いを抱きながら、けれど微笑ましく見守っていた。

「そう言えば、アテナさん遅いですね」  
「あらあら…そういえば……」

「なっ。まさか？」

「おい、アリシア。アテナをココに - ビアンカネーヴェに誘ったのか？」

「え？ ええ、そうだけど？」

「どうしたんですか、晃さん。 蒼羽教官？ でっかい顔色、悪いですよ」

「お前等…もう忘れたのか？」

「忘れた？ 何をです？」

「藍華…お前もその場にいたろ……」

「晃さん？……はっ まさか！」

「そっ、あの……」

晃と蒼羽の声がハモツた。

「『 バシヨタオレールの悲劇 』」

- ばああーん

三度、ドアが元気良く開け放たれた

「みんなあ、遅くなってごめんなさい。そこで偶然、フェニーチ  
工劇場のスタッフさん達と会ったのお。

一緒に連れてきちゃったあ」

「よう、嬢ちゃん達。お久しぶり」

「みなさん、お早うございます！」

舞台監督と助手の女の子が、スタッフを代表して挨拶する。

アンがキッチンから、ひょっこりと顔を出す。

「あっ、アテナさん、いらっしやがぶっっ！」

「あっ、アンさん、こんにちわげぶっっ！……！」

とたん

激しく激突し、スっ転ぶ、アンとアテナ。

と、同時に、机や椅子が舞い上がり……

ぐしゃばちどかぶがぐばらぎしどてばぎぐしゃああっ

悲劇は再び。





よるめきつつ、茜がつぶやく。

『バシヨタオレールの悲劇』 それは -

ドジっ子オーナーのアン・シオラ

ドジっ子ウンディーネのアテナ・グローリアス

ふたりが出会うそのときは、その場にある物、人、そのすべてが災難に遭遇し、壊滅する - とゆう、恐ろしい都市伝説。  
真実か真実でないかは、あなた次第……おひつ!!

「あらあら、うふふ……」

まるで全ての物が意思を持って彼女を避けたかのように、何故か、かすり傷のひとつ負わず部屋の真ん中に悠然と立つアリシアが、やっぱり天使のように微笑んだ。

こうして

波乱万丈の幕が上がる。

- 次回予告

「みな様にお伝えします」

「出演がドタキャンされた!？」

「今こそ、舞台を我等の手に」

「ウンディーネ達は、どうなるんです!？」

唄

歓声

鳴り止まぬ拍手

「これが舞台？」

「哀れなウンディーネ達だ……」

- 奪われた機会チャンス

「お前達に何ができるってゆうんだ」

「それでもまだ、舞台に立つんですか？」

- 取り返せ 舞台を

「天使とダンスを踊ってきな! 嬢ちゃん!」



「何を言っつていやがる!」

- 未来を

「お前達が舞台に立つても意味はない」

「混乱しているのか?」

「お前が勝手にやりやがれ!」

- 取り戻せ

「責任問題になるぞ!分かっているのか!?」

「承知の上だ」

「今更、止めれるか!」

- みんなの笑顔を

「さあ、天使とダンスを踊りましょうか!」

そして幕は開く

『 AQUA Aretalogy 』 - 幕開きへの挽歌

「終演のあとに、どんな舞台を見せればいいのか……」

「どんな形でも、お芝居は、みんなに届く。必ず……な」

c - 6  
t r a i l e r )  
次回 - 幕開きへの挽歌  
編 ( b y a c & a m p ; i

ええと…

この作品はフィクションであり、実在する全ての人物、団体、事象とは、何の関係もありません。

したがって予告も、もちろんフィクションです。

フィクションなんです！ フィクションなんだよおお！（鹿馬）

おかしいなあ。こんな話じゃなかったハズなのに…初期メモには「軽い話。スラップスティック。さらさらり」とか書いてあるのに！

次回から元にもどります（大鹿馬）

みな様も、軽い気持ちで読み続けていただければ、これに勝る幸せは、ありません。

それでは、しばらくの間のお付き合い。ありがとうございました。

AQUA Aretalogy 開幕への挽歌 編

「天使とダンスを踊れ - ですか？」  
「ええ。昔からの言い伝えで『舞台で輝きたければ、天使と一緒にダンスを踊れ！』って言うのがあるのよ」  
「さすが茜の嬢ちゃんは、古いこと知ってるなあ」  
「そりゃあ、私はバツジエーオですから」

第14話 『AQUA Aretalogy』 開幕への挽歌 編

茜と屈託なく話す初老の男性。  
舞台監督。

フエニーチエ劇場の舞台の総責任者。 三十人近くのスタッフ達を束ねる、昔気質で気難しい鉄板者。  
けれど根は純情で、誰よりも舞台を愛し、そこに関わる人々すべてに愛情をそそぐ、オールド・タイプ。

オレンジ・ぷらねっと組には、アテナの舞台デビューのときの知り合い。  
茜にとつては、女優だった頃、新人の時からお世話になっていた、頼りになる「親父さん」



「どうだい、嬢ちゃん。もう一度、舞台に帰ってこないか？　嬢ちゃんなら、もう一度、天下取れるぜ」

「ありがとうございます、舞台監督。でも私はもう、ウンディーネですから」

舞台監督のいたずらな質問に、茜も笑って答える。

もとより舞台監督は、茜がそう答えることなど、先刻ご承知なのだ。

「それにね、舞台監督」

「ん？」

茜が、キューティーレングジャー・イエローの姿のまま、腰に手を当て、芝居化たつぷりに言い放った。

「私のことは愚かで頑固な、バッジエーオ　と、呼んでください」

・ばああああん

「ぎゃふうー！」

茜が情けない声を上げて、よろめく。

舞台監督が、その背中を思い切り張り倒したのだ。

「よし、それでこそ嬢ちゃ……いや、素敵で優しいバッジエーオさんだ。　わははははっ」

「もう、セクハラですよ！」

豪快に笑う舞台監督に、茜は文句を言いつつも、やっぱりつられて大きな声で笑い始める。

取り囲みながら、その様子を見ていた灯里や藍華達も、同じようにつられて笑い始めた。  
舞台上に楽しげな笑顔が満ちる。

「たいへんです。 みなさん、たいへんです!!」

大声で叫びながら、一人の少女が駆け込んでくる。

「こら、灯梨。 でかい声を上げるな。 もう開場してるんだぞ!」  
「あ、す、すいません。 でも、たいへんなんです!」

謝りながらも、両手をぐるぐると振り回しつつ叫ぶ少女。

灯梨・BAC・ライトニング

舞台監督の下で、一人前のスタッフになるために勉強中。 最近は

簡単な仕事は任されるようになった。

厳格な指導者のもとでも挫けず、舞台を楽しむ元気者。 舞台監督

がもつとも目をかけている若者のひとり。

その行動力と真剣さは、誰もが認めるフェニ・チエ劇場のマスコットの存在。

どこことなく、灯里に似た雰囲気を持つ少女。

アトラヤ杏とは、アテナがオペラ歌手として舞台上に立ったときからの知人。

そこから広がって、今では晃やアリシア。 灯里やアリスといったウンディーネとも仲のいい、お友達。

「で、なにをそんなに慌ててやがる」

「それが……」

灯梨は一瞬、絶句すると、ウンディーネ達を見回し言い放った。

「みなさんの出演が、ドタキャンされています」

「どうゆうことですか!」

蒼羽が主催者に喰ってかかる。

「なぜ私達のショーが、キャンセルされてるんです!」

「え、あの…それは……」

「それも当日になって、急になって。 どうしてです  
藍華も、つかみかからんばかりに迫る。

「で、ですからそれは……」

「ちゃんと納得できる説明、お願いします」

普段は冷静なはずのアトラまでもが、目を釣りあがらせながら声を荒げる。

その背後では、晃が無言で睨みつけている。

けれどその無言が幾百の言葉よりも大弁に、彼女の怒りを物語っていた。

「あらあら、みんな落ち着いて。 ちゃんと話を聞きましょう。」

うふふ。……………ね？」

その言葉にホツとする間もあればこそ、その声の主、アリシア・フロレンスの笑顔を見たたん、主催者は凍りつく。

その優しい言葉とは裏腹に、アリシアの笑顔の下からは、怒りでもない、憎しみでもない。

けれど、悲しみでも、ましてや憐憫の情などでも決してない『ナニカ』が見え隠れしていたからだ。

そう、まるで黄金に光り輝く仏像のような、底知ぬ『ナニカ』が……………

ひっ

そのあまりの迫力に、主催者の腰はくだけそうになった。

「しよーがないじゃん。そーゆーことになったんだからウンディーネ達の背後から、妙に軽い声が発せられる。」

「お前は……………」

「そんな子供だましなお芝居より、アイドルの唄のほづが、よっぽど客受けはいいんだからサ」

蒼羽の言葉をさえぎって、男は…プロデューサーと呼ばれる男は、にやけた薄笑いを浮かべた。

『みなさまにお知らせします。』

本日行なわれる予定でしたウンディーネ戦隊、フレッシュ・ヴェネツィア・キューティールレンジャーのチャリテイションは、

都合により、アイドルグループ「ラズグリーズ・8762」のコンサートへと変更させていただきます。

くり返し、お伝えいたします。本日のチャリテイションは…

…』

「ねえねえ。奥さん、今の放送聞きました？」

「アリーチェちゃん達の演技、ないんですか？」

「どうゆうことかしら……娘は…茜からはそんなこと何も聞いてないわ」

「せっかく茜ちゃんの舞台がまた見れる思ったのにな……」

「まったく。まったく」

「もうすぐウチのヤドロクが来るハズだから、一度締め上げてやりましょう」

なぜか黄色い鉢巻とハッピ。胸には同じ色のリボンを付けた、おじさんおばさん達が客席で騒いでいた。

「つまり、なにもかもアイツの…プロデューサーの仕組んだことって訳ですか？」

アイが訊ねる。

「ええ。その通りです」

プロデューサー。

かつて、アテナ・グローリイのオペラ歌手デビューの演出を手がけた男。

けれどそのあまりに軽薄で不遜な態度で、舞台スタッフのみならず、オレンジ・ぷらねっとの全ウンディーネ達からも総スカンを喰らったいわゆる「プロデューサーの悲劇」と呼ばれる経験をした男。そして恥をかかせたウンディーネ達への復讐を忘れなかった男。

それが今、再び現れたのだ。

「私が調べたところによると……」

アトラが車座になったウンディーネ達の中心に座り、説明を始める。

「三日前、主催者宛てにメールが届いたそうです。キューティールンジャーのアトラクを、アイドルグループのショーと差し替えたって。」

そしてその後すぐ、あのプロデューサーが現れて、改めて変更を伝えたそうです」

「それは誰も確認しなかったのか？」

「はい、蒼羽教官。あいつは、すでにこちらには許可を取ったかのように伝えたそうです。しかも……」

「しかも？」

「どうやら市長にも取り入ってたらしく、それらは全て、市側からの要望……とゆづ形で行なわれました」

「クソ野郎……」

「今から事情を話して、もう一度、変更してもらえないんですか？」  
「それがもう変更の放送はされちゃったし……それに市側が付いて  
るとなると………」

「そんなぁ………」

「哀れなウンディーネ達だ………」

薄ら笑いを含んだ声が、灯里達の背後から聞こえてくる。

「てめえ！」

「うわっ」

暁がプロデューサーの胸倉をつかみ上げる。

だが、ガチャペンのぬいぐるみを着たままだったために、その姿は滑稽以外の何物でもなかった。

まあ、激怒したガチャペンに胸倉つかまれた男が、青い顔で、がくがく揺さぶられている……とゆうのも、それはそれで結構シユールな絵柄だったが。

「暁さん、ダメです！」

灯里が腕にすぎるようにぶら下りながら、ガチャペンを止めにはいる。

「離せ、もみ子。こいつは……こいつが、お前の……俺様達の大事な舞台を台無しにしゃがったんだ」

「舞台を台無しにしたのは、お前達だ！」

「なにぃ！」

ガチャペンの手をなんとか振りほどくと、プロデューサーは、あわてて飛び去った。

「お前等は俺の…この僕の舞台を台無しにした！ AQUA…いや、宇宙いちの、この僕の演出をね。だから…」  
プロデューサーは、顔を引きつらせながら叫んだ。

「だから教えてやるのさ。 お前等のような素人のふざけたショーなんかより、何倍もの優れた、僕のコンサートをね！」

「本番、五分前です」

灯梨がなんの感情も込めずに伝えに来た。

「くふふ。今こそ舞台を我等の手に。 君達はそこでじっと見ていればいい。本物の舞台とは、どうゆうものかを！」

コンサートが始まる。

13人のアイドルのコンサートが始まる。

確かに、それぞれがそれぞれの個性を持ち、かわいい。  
曲も、スローからアップまで、ひとりひとりの個性に合わせた唄を歌いあげてゆく。

盛り上がる客席。 けれど、

「くそつ。コイツら曲と動きがあってないぞ。これじゃあ、照明のタイミングが悪いみたいだ」

「ちっ、クチパクで歌うのなら、マイクなんざいらねえだろ」

「おいおい、立ち位置、間違ってるよ」

フェニーチェ劇場のスタッフ達が、不平を並べる。



「まだまだですね」  
灯梨も言い切った。彼女はもうそこまで見抜けるようになっていた。

「ああ、全員磨けば光りそうな連中ばつかだが、まだ天使とは踊れねえなあ……」

・それにあんなプロデューサーの下では…

舞台監督は、その言葉を胸のうちに押さえ込む。

「ちよつとお。もっと盛り上げてよ。音響、もっと音を大きく！照明、もっとテンポよく！舞台、特効じゃんじゃん使つて！」  
インカム（インターカム スタッフ専用の音声通話装置）から、プロデューサーの罵声が飛んでくる。

「うるせえ。ろくなりハーサルもなしにやらせやがって……」  
音響チーフが、マイクのスイッチを入れたまま悪態をつく。

「客も盛り上がってるのは、サクラばっかりじゃねえか……」  
舞台チーフもボヤク。

「そんなに言うんなら、お前が勝手にやりやがれ！」  
照明チーフが毒を吐く。

「子供達、可愛いそうです」

最後に灯梨がポツリと呟いた。  
喜んでるのは、カメラ小僧か新人おっかけ専門のヲタくらいなもの  
だった。

ところで・

みな様、お忘れかもしれないが、この舞台は市・主催のチャリティ  
ショーである。

当然、客席の一番前には市長以下、街の偉い人が座っている。

みな、舞台上で演じる少女達の唄や踊りに・特にミニスカートには  
・ 普段なら絶対に見せないような、実にだらしない表情を浮かべ  
ていた。

もちろんこれも、名プロデューサーの狙い通りだったのだが……  
そんな席に空席がふたつ。

遅れてやってきた人達。

「いやあ、こんなにジェントルマン（偉い人達）が集まると、  
壮観ですなあ」

「お父さん？」

「やあ、アリーチエ、今朝ぶり。相変わらず、かわいいねえ」

『 親バカだ 』

誰もが瞬時に、ツツコみを入れる。  
そんなバカ親。

オリエーク・P・アントノフ。

娘のアリーチエを溺愛する、よき父親。

ネオ・ヴェネツィア運航局の副局長を勤める、ホントはとても偉い人。  
けれどいつも笑顔を絶やさぬ、ウイット（機知）にとんだ会話を  
する陽気な人。

ご近所さんで小さな頃から顔見知りの茜のことを信頼し、大切な愛娘のアーチエを何のためらいもなく託す、良き父親。  
昔、アリシアと灯里が雪玉を転がしたとき、いの一に手を出した、愛すべきおやぢ。

「ああ、アーチエ。来る途中で聞いたんだが、なんでもお前達のお芝居が中止になったとか…本当かい？」

「イー……」

「そんな…母さんやご近所さん……茜さんのお母様も来ておられるとゆうのに……」

「母が…本当ですか？」

「ああ。君の舞台復帰を、楽しみにされていたのに……」  
「……………」

「こんな所に座って歌を聞いているよりも、局で書類整理のひとつでもやっていた方が、よほど、合理的であるな」

ぶっきら棒な声が響く。

「アドルフ局長……」

茜がその名を呼んだ。

アドルフ・H・ガーランド。  
ネオ・ヴェネツィアを運航する、全ての船の安全と事象を管理する  
航行局の局長。

何年か前にマン・ホームから転任してきた、エリート中のエリート。  
アントノフの上司。

その権力と権限は、ネオ・ヴェネツィア市長よりも強大だった。  
「何事も合理的」が口癖な、きまじめで頭の固い菜食主義者。

茜や灯里達とは、先代のバツジエーオの事件でやり合った間柄。

「うむ。君はMAG A社の茜くん……いや、バツジエーオであるな、  
今は」

「はい。アドルフ局長。お久しぶりです」

「ふむ。ところで君はこんな所で何をしているのかな」

アドルフは茜を見下しながら、傲然と言い放った。

「コンサート終わるみたいですよ」  
アイが呟いた、

アイドル達が袖にひっこんで行く。

大歓声（ ホントはサクラの仕込みなのだが ）  
拍手が鳴り響く。  
熱気があふれる。

「これが舞台？」

アリーチェは改めて足がすくむのを感じていた。  
私達は……いえ、私はこんな所に出て行くこうとしていたの？  
それはどう考えても無謀としか思えなかった。

「コンサートの終わりであるな」

「……………」

「で？」

「え？」

「…………茜くん。君は本当に、バッジエーオなのかね？」

「おい、照明。さっさと灯りを消して。まだ何かあるのかと客  
がカン違いするでしょ！」

「あゝすみませんね。ちょっとトラぶってて、すぐに消せないス  
わ」

「くっ…………音響。今すぐ客出しのBGMをかけて。『蛍の光

』よ」

「それが……すみません。音源を忘れてきました……今、代わりの曲  
探しています」

「この…………じゃあ舞台。さっさと幕を降ろして！」

「はあ？ 仮設の野外ステージっすよ。んなモン、用意してませ  
んよ」

「……貴様等…………覚えてるよ」

捨て台詞を残して走りさってゆくプロデューサーの背中に、三人と  
も大きく舌を出した。

「さあ来い！ ウンディーネさん達！」

「どうゆう…意味でしょうか……」  
茜が小さく訊ねる。

「聞けば、君等のやるハズだったお芝居に、横槍が入って中止させられたそうではないか」

「……」

「それでいいのかね」

「え？」

みな視線が茜に集まる。

「で、でも。私達の出番はもう……」  
なまじ舞台とゆうモノを知っている茜には、それがどうゆう意味なのか必要以上に分かってしまうのだ。  
もう遅い…すべては終わってしまったのだ - と

「終演のあとに、どんな舞台を見せればいいのか……」

「先代なら……」

「え？」

アドルフは冷徹に言い放った。

「アロッコさんなら、決してそうは言いはしないであるかな」

「……」

「彼女なら、どんなときも笑顔を絶やさず、諦めず、頑固に、あがき続けるであろうな……」

「…アロツコさん……」

「どんな形でも、お芝居はみんなに届く。必ず……な」

謳声が響く。

不意に、清んだ謳声が客席に響きわたる。

帰りかけた客の足が止まった。

「アテナさん？」

驚くウンディーネ達の目の前で、アテナが舞台のセンターに立ち、何の脈絡もなく唄を謳っていた。

謳うウンディーネ。

アテナ・グローリイ。 通り名は「セイレーン 天上の謳声」

ウンディーネの歌など、聞き飽きているハズのネオ・ヴェネツィアの住人達が、彼女の謳う舟歌（カンツォーネ）が響いたとたんなにもかも放り出して、その歌に聞き入る。とゆう程の優れた歌声を持つ、オレンジ・ぶらねっとのトッププリマ・ウンディーネ。数年前、今回の事件の遠因となったフェニーチェ劇場で、オペラ歌手としてデビュー。

それ以降も何度か舞台に立ち、人々をその謳声で魅了してきた。

アリス達にとっては、ドジっ子でとても世話の焼ける先輩。

でも「気遣いの達人」と呼ばれる程、優しく、素敵で、誰もが憧れる、素晴らしきウンディーネ。

「ちょっと、あの子なにやってんの!?!」  
プロデューサーがわめく。

「今すぐ止めさせて。コンサートはもう終わったんだから!」  
だが誰もそれを止めようとはしない。

それどころか、誰もが - 市の偉いさんや、アイドル達、プロデューサーの仕込んだサクラ達でさえ、「セイレーン」の謳う唄に魅了され  
動きを止めていた。

アテナは謳い終わると、静かに一礼し、微笑んだ。  
誰もが呆気にとられ、何のリアクションも取れずに固まっている。

- と、その時。  
小さな影が舞台の袖から飛び出してきた。

「みなさん聞いてください!」  
凜とした声が響く。

「アリーチェちゃん?」



客席で、ひとりのおばさんが驚いたように、その名を呼んだ。

スポットライトがアリーチェを浮かび上がらせる。

とっさにスポットライトに飛びついた灯梨が、アリーチェを照らし出したのだ。

「私には舞台のことはよく分かりません。でもどうしても見ても  
らいたい、お芝居があるんです」

アリーチェが叫ぶように言葉を紡ぐ。

「私は確かに素人で、演技もうまくできなくて。唄だってうまく  
歌えません。

でも…でも、一生懸命、練習しました。

みなさんに…子供達に楽しんでもらえるように、一生懸命、がんばりました。だから……

だからどうか…どうかお願いします。私達の舞台。見てくださいー！」

静まりかえる客席。

スポットをあび、足を震わせ、目には涙を浮かべながら、それでも必死に自分の想いを伝えようとする少女を

誰もがしわぶきひとつできずに、ただジッと凝視していた。

・ばちばちばち

拍手が聞こえてくる。

ひとりのおばさんが -

なぜか黄色の鉢巻やハツピをきたおばさん達。その中のひとりが立ち上がり、大げさな手振りで拍手を送っていた。

- ぱちぱちぱち

拍手が重なる。

そのおばさんの横で、同じような格好をしたおじさんが、一心不乱に手を叩き始める。

- ぱちぱちぱちぱち

さらに拍手が重なる。

ふたりの周りにいる、やはり揃いの格好をしたおじさん&おばさん達が、一斉に立ち上がりながら、大きな拍手を送っていた。

「アリーチエちゃん、その通り！ 絶対、見るわよ！」

「頑張つて！」

「行け！ アリーチエちゃん！！」

「さあ、茜。早く始めなさい！」

「わし等はみんな、アリーチエちゃんや茜さんのお芝居、楽しみにしとるんじゃないあ……」

突然 -



「アリーチェ！」

「はいつ、バツジエーオ！」  
最後に。」

涙を浮かべ、まだ震えている……けれど元気よく返事を返す少女を優しく抱きしめながら、茜は言った。

「ありがとう……あなたはまた私を取り戻させてくれた」

「バツジエーオ……」

「でも……でもね、アリーチェ……」

「はい！」

元気よく答えるアリーチェに、茜はいたずらっ子の微笑を浮かべた。

「……返事は『イー』よ」

「舞台監督！」

杏が、インカムにかじりつく。

「待ってたぜ」

苦笑まじりの答えが返ってくる。

「よしきた！」 「OK！」 「まかせとけ！」  
他のスタッフ達も力強い声も響かせる。

「全てのスタッフが、あなた達を手助けします。 さあ、舞台を楽しんで！」

最後に灯梨が叫んだ。

「はい。よろしく願います!」  
杏は、胸にこみ上げてくるものを吐き出すかのように大きな声を上げた。

「ようやく、嬢ちゃん達らしくなってきたなあ……」  
舞台監督が、その敵つい顔をほころばせて笑った。

「今すぐ、公演を中止しろ!」  
そんなウンディーネ達に、走り込んできたプロデューサーが罵声をあびせかける。

「お前達が舞台上立っても意味はない! お前達に何ができるって言うんだ!」

「何、言っていないやがる!」  
暁が叫ぶ。

「五月蠅いのだ」  
ウツディーも叫ぶ。

「このままじゃ終われません!」  
アルまでもが叫んだ。

「さあ、借りを返すわよ！」  
最後に叫んだ藍華の台詞に、誰もがうなずいた。

「お前達が演技しても意味はない！」  
けれどプロデューサーは、なおも喚き続ける。

「お前等、責任問題になるぞ！ 分かっているのか！！」

「そんなことは承知の上よ！」

そんなプロデューサーを、茜が一言で黙らせた。

「今更、止められないわ！！」

「お、お前はいつたい……」  
プロデューサーが気圧されたように絶句する。

「私は……」

茜が腰に手を当て、言い放つ。

「私は、愚かで頑固なバツジエーオよ！ さあ、みんなっ」

茜が全員を見回しながら叫んだ。



## - 次回予告

海・「ねえねえ。マエセツってなに？」

月・「マエセツってゆうのはね。お芝居や催し物が始まる前に出てきて、おしゃべりしたり、歌を唄ったりして、事前に客席を盛り上げる人の事よ」

海・「へええ。たいへんなお仕事なんだね」

月・「ええ。それによって、本編のノリが違ってくるからね」

海・「そっかあ。じゃ、いっぱい盛り上げてもらわないとね」

桜・「それがダメなんです」

陽・「え？ どうしてですか？ たくさん盛り上げたほうが良いんじゃないですか？」

桜・「それが、あんまりマエセツで盛り上がり過ぎて、本編の【ピー】【の】【ピー】【が】【ピー】【になっちゃって……」

月・「そのせいで【ピー】【が】【ピー】【の代わりに本編を【ピー】【して、おかげで……」

桜・「【ピー】【が【ピー】【して【ピー】【になっちゃった。ってことがあったそうなの」

陽・「え？ 【ピー】【の】【ピー】【は、【ピー】【との音楽性の違いから【ピー】【で【ピー】【になったんじゃない……」

月・「表向きはそうだけど、実は【ピー】【は【ピー】【ね」

桜・「だから今でも【ピー】【は【ピー】【を【ピー】【で



海「それじゃあ、こないだ】ピー【した】ピー【も、ほんとは「

桜「それはもちろん】ピイイイイイイ【

(以下自主規制)

「次回、「AQUA Are t a l o g y」オニのパンツ編！」

「『みんなのハートをキャッチだよ!!』」

(CV 水樹奈々&水沢史絵&桑島法子&久川綾)

AQUA Aretalogy オニのパンツ 編(前書き)

ええと…

本来なら、このお話しで本編に突入するはずだったのですが、「オニのパンツ」のメロディが流れた時点で、脳内ドーパント…もとえドーパミンが異常増加してしまい、ついこんな、お話しに……(汗)

一日中、オニのパンツを踊り口ずさんでいました(鹿馬)  
家族からは「うるさい」だの「あっちで踊れ」だの、心温まる、お言葉が…(涙鹿馬)

みなさまも、ぜひ、一緒に謳い、踊っていただければ、これに勝る幸せは、ありません(踊鹿馬)

それでは、またしばらくのお付き合い。 よろしく願います。

AQUA Aretalogy オニのパンツ 編

白のスポットが入った赤いヒラヒラなドレスに、でかい白いリボン。黒いタイツ。

まるで『某ネズミの恋人』のような格好をしたあゆみが、スカート  
の裾を翻しながら、元気良く叫んだ。

「はあーい、お友達。 こんにちは。 … あれえ、声が小さいぞお

? もう一度。 こんにちはー

うわあ、大きなお返事、ありがとう。

私は歌のお姉さんで、あ・ゆ・み っ て言います。

今日はみんな一緒に、キューティーレncyジャーショー、楽しもう

ネー

第14話 『 AQUA Aretalogy 』 オニ  
のパンツ 編

「あゆみさん、お願い」  
袖から茜が叫ぶ。

「15分。いえ、10分でいいから時間をかせいで」

あゆみが前を向いて、MCを続けたまま、しっかりとうなずく。

舞台裏では灯里達やスタッフまでもが、どたばたと走り回っていた。

「アトラ。杏。チェック急げえ！」

「はい、教官」

「らじゃ！」

蒼羽とアトラ、杏が技術ルームに駆け込んで行く。

「クソ虫ども。着付け急げよ。時間は待っちゃくれないぞ」

「イー！」

「よしっ。いい返事だ！」

「イー！」

晃がアイとアリーチェに気合を入れる。

「お、おい。もみ子！」

「はひ？ なんですか？ 暁さん」

「ちよ、おまつ…スカートの下。スパッツをはき忘れてるぞっ」

「はっ、はひいいいいい！ ……すぐに、はきます。よいしょっ」

「ぐはああああああああ」

暁が灯里を見て、のたうつ。

「アルくん。スカート前後ろ逆よー！」

「藍華…どつりで『スカット』しませんでした」

「……………」



そんな魔女の大釜（大混乱）の中でも、ただひとり悠然と、アリスアが白い天使の衣装のまま、楽しげに微笑んでいた。

そして舞台上では -

「じゃあ、今から、お姉さんと唄を歌いましょう。一緒に唄ってくれるのは、ウンディーネのアテナお姉さんです。

はい、拍手う」

「はあーい。みなさん、こんにちずべっ」

これまたオレンジ色の、ひらひらドレスに身を包んで、袖から飛び出してきたアテナが、そのドレスの裾を踏んづけて顔面ゴケする。場内が「わっ」と笑い声に包まれた。

「あ、アテナさん、アテナさん。大丈夫ですか？」

「だ、大丈夫です。いつものことでええす…」

あわてて駆け寄るあゆみに、アテナは何事もなかったように立ち上がる。

啞然とする、あゆみ。彼女はまだ、アテナに慣れていないのだ。

その様子に、また一段と客席が沸き上がる。

「やるなあ……」

舞台監督がつぶやいた。

「はい。さすがですね」  
灯梨も同意する。

「はい？」

「あの嬢ちゃん達、たった三分で客の興味を引き付けた。やるなあ……」

キョトン顔の蒼羽達に舞台監督が説明する。

「すごく計算しつくされた演出ですね」

灯梨が感心したように言う。

「いや『素』です

その台詞に、オレンジ・ぷらねっと組の全員が、胸の中でそっと独り言ちた。

「最初に謳う唄は……みんな知ってるかなあ？ 南の島に住む小さなお猿さんの唄……そうっ、『アイアイ』です。

一緒に、こんな手遊もします。みんな、できるかなあ？」

あゆみとアテナが唄いながら、子供達に振り付けを教えてゆく。  
小さな手や足が客席で踊る。

「じゃあ、みんな静かに、お席から立って。……はい、じゃあ、行きますよお。音楽スタート！」

「杏、音！」

「らじやつ」

蒼羽の声に、杏が間髪入れずスイッチを押し込む。

アイアイ。アイアイ。お猿さあんだよお。

軽快な音が流れ始める。子供達が歓声を上げた。楽しげに謳い踊る、あゆみとアテナ。つられて子供達も、元気いっぱいに唄い、踊り始める。

「はい。お友達。じゃあ、2番はもっと元気な声でうたいましょーお！」

「はあああああーい！」

客席に子供達の歌声が満ちる。

テンポに合わせて、アトラの操作する照明も踊りだす。

【アイアイ】

この曲は1962年。作詞/相田 裕美。作詞/宇野 誠一郎  
によって生み出された。

作詞の相田裕美は「アイアイ」という言葉と、木の葉に包まったアイアイの写真だけで、この歌を作ったため  
実はこの猿が現地のマダガスカルでは、その容姿や動きから「悪魔の使い」として気味悪がられている。とゆうことを知らなかった。

またその「アイアイ」とゆう言葉自体も、現地人が、この猿を見て上げた、驚きの声に由来する。とゆうことも全く知らなかったのだ。



それが今では、この曲のおかげでアイアイは、かわいいお猿さんの代名詞のようになってしまったのだ。

- お猿さんだねえ -

唄い終わると同時に客席からは拍手と歓声がわきあがる。その歓声に顔を上気させながら、あゆみはMCを続けた。

「はあーい。みんな、ありがとう。とっても大きなお声で歌ってくれて、お姉さん達は、とっても嬉しいです」

「はああああーい！」  
こども達も大きな声で返事を返す。

アテナが嬉しそうに微笑んだ。

「それじゃあ、もう1曲。みんな『オニのパンツ』って唄は知ってるかなあ？」

「はああああああい」  
また大きな返事が返ってくる。

「わーすごい。それじゃあ、お姉さん達と一緒に、一度、踊りの練習をしてみましょう。いい？ オニのパンツは、イーパン・ツ！」

「杏？」

「スタンバイ・OKです」

「アトラ？」

「次。Cue-3。いつでもどうぞ」

「よし」

「じゃつ。いくよお。音楽、スタートお！」

あゆみの合図と共に、再び、軽快な曲が流れ始める。

「オニの、パンツは、イーパンツう。強いぞお、強いぞおお  
！」

あゆみとアテナの踊りに、会場が沸き立つ。

子供達があゆみ達に合わせて手を打ち、足を踏み鳴らす。

中には黄色い鉢巻のおじさん、おばさん達も混じっていたが……

## 【オニのパンツ】

原曲【フニクリ・フニクラ Funiculi・funicul

a】は・

1880年に、マンホームのイタリア州、ヴェスヴィオ火山に建設された登山鉄道「フニコラーレ（ケーブルカー）」のために、ルイージ・デンシアが作曲した、世界最古のコマーシャル・ソングといわれている、カンツォーネだ。

そのあまりに軽快さと耳になじむ曲故に、イタリアに古くから伝えられている民謡と、よくカン違いされてきた。

そして【オニのパンツ】  
日本州の国営放送が、子供の音楽番組のために翻訳、発表し、そのコミカルな踊りと相まって、当時の子供達の間で大人気となった曲だ。  
ながらくその翻訳者は不明・とされてきたが、現在では「歌のおにいさん」として有名な、田中 星児氏の作詞である・とする説が定着している。

「アルくん。 さつきから何を、ぶつぶつ言ってるの？」  
舞台を見ながら何事かをつぶやき続けるアルに、藍華が不審気に訊ねる。

「いやあ、なんでもありません。 …いい曲ですね」  
アルは照れたように頭をかいた。

大歓声の中、小さな歌声に気が付いて、灯梨が、ふと横を見れば・  
舞台監督が、表情を変えぬまま、しかし、楽しげに、あゆみと一緒に唄を口ずさんでいた。

その後ろでは、舞台、音響、照明の各チーフが、アテナの踊りに合わせて、踊りまくっていた。

そんな「おバカ」な仲間達の姿を見ながら、灯梨もやっぱり笑いながら、大声で謳い、踊り始めるのだった。

「はこつっ。 はこつっ。 オニのパン・ツう！」

喜びの謳声が天に満ちる。

楽しげに踊る地響きが、地を揺らす。

誰も彼もが大声で謳い、体を揺らしている。

みんながひとつになって声を上げる。

「「「『 みんなで、はこつ！ オニのパン・ツ！ 『「「

ブラボー！！ と

拍手と歓声上がる。

誰もがみな、総立ちとなり、あゆみとアテナに惜しめない拍手を送っていた。

その歓声の中、ふたりは肩を震わせて、荒い息をつき、けれど瞳を輝かせ、満面の笑みと涙を浮かべて抱き締め合った。

いつまでも鳴り止まぬ拍手と歓声が、優しく二人を包んでゆく。

「あのお嬢ちゃん。あゆみさんっていったか……」  
「はい。姫屋の、あゆみ・K・ジャスミンさんです」  
「そうか…ウンディーネにしとくのはもったいねえなあ……」  
舞台監督が、顔を綻ばせながら言い放った。

「はい。今すぐにも、彼女は天使と踊れそうですね」

「『それは無理です』」

そんな灯梨の言葉を、アトラと杏が間髪いれずに否定する。

「え、どうしてですか？」

「だって……」

アトラと杏は、顔を見合わせ笑いあった。

「だって彼女はいつも『AQUAの心』と、踊っているんですから  
」！  
」

「この会場は、我々が乗っ取ったああああああああああああ  
あああああああー！」



AQUA Aretaology オニのパンツ 編(後書き)

- 次回予告

「ウンディーネの舞台はダテじゃない。」

次回「『 AQUA aretaology 疾風怒涛編 』

COOLないじげん。

Let's Party!! 「(c) 中井和哉

」

AQUA Aretalogy 疾風怒濤 編(前書き)

来るべき新しき年への祝福を、みな様に。  
良いお年を。



「この会場は、我々が占拠した。今から、お前等、愚民どもは私の管轄下に置かれる！」

紅い悪魔が宣言した。

第14話 「AQUA Aretalogy」

疾風怒濤 編

真っ赤なボディコン。 ハイレグ。 膝まである長いハイ・ブーツ。

ツン・と張った、猫耳のようにも見える対のとんがりが付いた赤い仮面は謎の人。

どんな顔だか知らないが、キラリと光る、涼しい目。

仮面の悪魔だ。 紅仮面だ。

口元は大きく開き、その妖艶な唇をきわだたせていた。

ナイス・ボディ。

すらりと伸びた、脚線美の誘惑。

肩には同じような格好をした黒い地球猫が、やっぱり背筋をピンと伸ばし、優雅に座っていた。

・やあっておしまい！

と、命令されれば

・あらほらさっさ！

と、脊髄反射で答えてしまいそうな迫力が、そこにはあった。

「私の名前は、ロおおーズ大佐。世界制服を策謀する、悪の秘密結社『クリムゾン・カンパニー』の最高幹部だ！」

「あ・き・ら・さ・まあああああ」

間髪入れず、客席からフアンの声らしい黄色い歓声上がる。バレバレだった。

「ちつがあああう！ 私はローズ大佐だと言っているだろうが！」  
その答えに、場内が爆笑に包まれる。

「愚かな人間どもめ…笑っていられるのは今のうちだ。いでよ！  
我々が生み出した、恐怖の怪人どもおお！」

「うっしやあああっ！」

「おー！ なのだあっ！」

不気味な音楽と、オドロオドロしい照明と共に、二体の黒い影が舞台上に踊りだした。

舞台が明るく照らしだされると、そこには――

くそでかい黒いサングラスをかけ、頬にガムテープで手術痕「メ

「マークを盛大につけたガチャペンと、

目玉に「＼／」を書き足し、オデコの横に、やっぱりガムテ

ープで「#」マークを張りつけたムツくんが、

その短い手足をバタつかせながら、客席を睥睨するかのよう立っていた。

そんなガチャペンとムツくんの姿に、子供達どころか、その親達までもが腹を抱えて笑い転げる。

「さあ、お前達つ。今からこいつらを恐怖のズンドコ……もとえ、どん底へと、叩き込むのだ！」

「おおおおお！」  
「なのだあ」

その時 -

「そんなコトは、させないわ！」  
凜！ - とした声が響く。

「あなた達の悪巧みは、この私がズバツとマルツとピシャツと、お見通しよ！」

その声と共に、音も無く忍び寄る白い影！ さすがに風に乗るのは無理だった！

「貴様は!?!」  
舞台の袖から飛び出してきた人影に、ローズ大佐が叫ぶ。

「私は、キューティ・レッド。あなた達の好きにはさせないわ！」  
藍華、演じるキューティ・レッドがローズ大佐に言い放つ。

「くそつ！ 怪人ども、かかれえ！」

「うつしやあああ！」  
「おーなのだああ！」

ローズ大佐の命令一過。  
キューティ・レッドに襲い掛かる、ガチャペンとムツくん。 だが―

「烈火繚乱大全部刃！」  
真っ赤に塗った、でかいオールを振り回す、キューティ・レッド。

―ばちばちいい！

「ぐわあああああつ」 「やられたあゝなのだあああつ」  
悲鳴を上げつつ、袖に転がり込んで行く、ガチャペンとムツくん。

「おのれええええ。 覚えている！」  
捨て台詞を残して、はけていくローズ大佐。

「あ、こら。 待ちなさい!!」  
その後を追うように、キューティ・レッドも同じく舞台からはけていき……………

「うわあ、みんな、びつくりしたねえ」  
ただふたり残された、あゆみとアテナが会場に呼びかける。

「これからどうなるんだろう？ みんな、キューティー・レンジャ

「、応援してあげてね」

「はああああい」

アテナの呼びかけに、会場中の子供達が元気よき声を張り上げる。

「それじゃあ、続き、見てみよー」

そう言いながら、同じく舞台から消える、あゆみとアテナ。

「アトラ。暗転」

「はい」

「杏、M-5、スタート。続けて、アトラ、明転GO」

「らっじゃっ」

「了解」

一瞬の間を置いて

舞台上に再び、不気味な音楽が流れ始める。

「ああ、びっくりした……」

入ったのとは反対の方向から、やっぱりヒメ社長を肩に乗せ、でかい『ハリセン』を持った晃…もとえ、ローズ大佐が、ガチャペン&ムツくんを従え、現れた。

「キューティー・レッドか…油断できんな。それにしても……」

…すばああああーん！

「がふう！」  
「ぐはあ！」

ハリセンが鳴らす、小気味いい音と、ドツかれた怪人達が上げる、無粋な悲鳴が響きわたった。

「お前達っ、あのテイタラクはなんだ！ それでも誇りある我が「  
クリムゾン・カンパニー」の怪人か！」

「…つつ。 ホントに痛いぞ」  
「痛いのだあ……」

「すわっ！ 台本以外のセリフは禁止！！」

…すばこおおっおおん！  
再び、ハリセンが鳴り響く。

「がっふうふうふう…い、いや大佐殿。 だめだあ…」  
「あだだだだダダ…きゅ、キューティ・レッドは強いのだあ…」  
「愚か者おおおお！」

…呼んだ？  
ひよっこり顔を出す「バッジエーオ」を、灯里とアリスが素早く引きずり込む。  
これには一般客よりも、客席のまん前に陣取った、黄色い鉢巻とハッピを着た  
おじさん、おばさん達が大笑いで喜んだ。

…すばあああああーん！  
そんな身内ネタを無視して、三たび、ローズ大佐の放ったハリセン

が、怪人達を張り倒す。

「ふ…こんな怪人共に任せてはおけんな……」  
あまりの痛さに、無言でのたうち回る怪人達を無視して、ローズ大佐は傲然と言い放った。

「仕方ない。よしっ。戦力補完のため、今からこの会場にいる人間達を、我が『クリムゾン・カンパニー』の下僕としてスカウトしてやるっ。」

出でよ、戦闘員ども！…」

「「「『イイイイイっ！』」」

耳を弄する爆発的な音楽と、壁ぞいに走る三代目大怪盗を探すサーチライトのような照明とともに

元気のいい『イー！』の声を響かせながら、客席にアイとアリーチェの戦闘員が飛び出してくる。

全身、黒タイツ。胸には白く、まるであばら骨のようなマークをつけ、顔は目と口だけを空けたマスクをかぶっている。

そのまだオトナになりきっていない、微妙な体のラインが、黒の全身タイツからくつきりと浮かびあがり

その筋のハートを直撃する。

「ぶいぶいにゅうううううふん！」

「まああああああああああ！」

「にゃふううううううううううう！」

同じく戦闘員の衣装を身につけた、アリア&まあ&アクイラ、の社





そこにはついさっきまで、自分の最高の演出で歌っていたアイドルユニット「ラーズグリーズ・8762」のメンバーが二人も立っていた。

「よおし、まず、お前達から名前を聞いていこうか」

そんな引きつるプロデューサーを尻目に、ローズ大佐がふたりにマイクを向ける。

「はあい。私は、アズサと申します。20歳です。趣味は犬の散歩です。あと、自分ではそんなつもりはないんですが人からはよく、のんびりしているとされます。いえ、ホントはそんなことはないんですよ。

ただ、私の場合は人より少し時間がかかるだけで。

……でも、みんなが言うほど、のんびりしているわけでは決してないんですよ。

それと、たまに道に迷うことも、ふふ……ありますけどお。でもですねぇ……」

「だああああ！ 分かった、分かった、もういい……マイペースな奴だなあ。それになんだその胸のでかさわ！ それどんな凶器だよ」

「あらあら……晃さんだって、そんなに不自由しているわけでは……」

「すわあ！ 余計なこと言わんでいい！ つか、私はローズ大佐だと言っているだろうが！」

「うふふ……すみません」

「くっ…お前、なんだかアリシアに似てるなあ……」

そんなローズ大佐のボヤキに――

「『あらあら…うふふ……』」

と、そんな笑い声が、なぜか表と裏からステレオで聞こえてくるのであった。

「私は、アミだよおおおおー！」

ローズ大佐が、もうひとりのアイドルにマイクを向ける。

「んっふっふっ！ 楽しいこと、面白いこと大好き！ 12歳だよ

お。趣味はメール。それとゲーム！」

「ゲーム？」

「うん。特に対戦ゲーム。 マミと一緒にやると、すっごく楽しいの！」

「マミ？」

「そう。 あっ、マミっていうのは、私のふたごの…」

「あ、アミちゃん！」

不意に、アズサがたしなめるように声をあげる。

「（ぼそぼそ）あ…やばい。アミ達が実は双子の姉妹で、かわりばんこにアイドルしてるってコトは秘密だった…えと…うっん、なんでもないよ。ローズのお姉ちゃん！」

「すわあ？ な、なんだ、小声で何か言ってると思えば、急に大き

な声を出して…びつくりするじゃないか」

「えへへえ…ごめん。なんでもないよ！ それよか、これからもアミ達をよろしくね」

「よろしく、お願いします」

「よ、よく分からんが…：…よおし、みんなこのふたりに拍手だ！」  
ローズ大佐の呼びかけに、ふたりに盛大な拍手が送られる。  
アズサは静かに頭を下げ、アミは飛び跳ねながら手を振った。  
そんな様子をプロデューサーが苦虫を噛み潰したかのような、歪んだ表情で睨みつけていた。

「じゃあ、他の子供達にも名前を聞いていこうか」

ローズ大佐が、舞台上上がった他の子供達ひとりひとりに、インタビューをしてゆく。

みんな少し緊張しながらも、しかし元気よく名前を言い、簡単な質問に答えてゆく。

ローズ大佐が列の一番端に立つ人物にマイクを向けた。

「さあ、最後のひとりだ…：…まず、お名前は？」

その男は無然と言い放った。

「私の名前は、アドルフ・H・ガーランドである」  
「にやふううう」

ネオ・ヴェネツア運行局々長の頭の上に、長々と寝そべるアクイラ

が、嬉しそうな鳴き声を上げた。

ntinuato

Essers  
CO

AQUA    Aretalogy    疾風怒濤 編（後書き）

- 次回予告

「AQUA    Aretalogy」を巡る、三つの出来事。

その1

姫屋の藍華の提案でヒーローショーをやることになった、ウンディーネ達。

その2

そのヒーローショーがプロデューサーを名乗る男に妨害された。

その3

数々の苦難を乗り越え、今、子供達の歌声が高らかに響き渡る。

876

次回

「AQUA    Aretalogy」    コンベエさんとお弁当と  
人参と 編（by 中田譲治）

ゴズニ・ゴズニ（語呂悪い！）

みな様、明けました。おめでとうございます。

今年も生暖かい目でお付き合いいただければ、これに勝る幸せはありません。

それでは、しばらくの間のお付き合い。よろしく願います。



エさんとお弁当と人参と 編

少しだけ時間を戻す。

「お前等、今から何人か見繕って舞台に連れて来い！」

ローズ大佐のその怒声を聞いたとたん、アクイラは一直線に舞台を駆け抜けると、そのままジャンプして、

客席最前列に座る、ひとりの男性の膝の上に着地した。

「にやぶうううう」

「わ、私であるか？」

その男性・アドルフ・H・ガーランド・ネオ・ヴェネツィア運行局々長は、アクイラの瞳を見つめたまま絶句した。

「ああ…局長。選ばれたんですね。実に羨ましい」

横に座るアントノフが羨望の眼差しで、アドルフを見た。

「おおお、我が愛する娘よ。なぜ父を選んでくれぬ…」

父親には見向きもせず、客席内を走り回るアリーチェに、

アントノフはやはり親バカ全開の台詞を吐く。

「局長。そんな猫なんか無視して構いませんよ」

おもねるような声に振り向けば、そこにはまるで媚びへつ



らう様な表情を浮かべたプロデューサーが、もみ手をせんばかりの勢いで、アドルフに言い放った。

「あんな素人のへ々な芝居に、局長ともあるうあなたが付き合う必要などないのです」

・ぴしっ

アドルフは、笑いながら怒る・とゆうのを初めて見た。

自分の横に座るアントノフの顔が笑顔のまま硬直する。

彼の後ろにいる、黄色いハチマキとハツピを着た、おじさん、おばさん連中も、なぜか殺気立つ。

・あんな素人のへ々な芝居。

我が子を溺愛する運輸局副局長は、その言葉に、まるで自分の娘を侮辱されたかのように感じたのだ。

もちろんそれは、背後に陣取る「家族達」にも同じで。

けれどプロデューサーは、そんなアントノフ達には、まるで気が付かない。

「……………」

アドルフは改めてアクイラの瞳を見つめた。

その蒼ではない瞳を。

キラキラと輝く、その黄金色の瞳を。

MEGARLITHのイエローを。

「にゃぶっつっつっつ」

喉をさする。

アキラが嬉しそうに鳴き声を上げた。

「この猫。 さっさと降りろ」

「にゃふっ?」

けれどアキラは、そんなプロデューサーの声などおかま  
いなしに、にゃふにゃふにゃふとアドルフの上に登ってゆく。

「にゃふうううう……」

腕を伝い、肩に乗り、とうとうアドルフの頭の上まで登る  
と、そこで気持ち良さげな声を上げ、長々と寝転んだ。

アドルフは感じる。

アキラの重みを感じる。

アキラの重み。

アッコの思い。

バツジェーオの思い。

暖かなアキラの『オモイ』 -

「このバカ猫。 なにしてる。 局長の頭の上から降りろ!」  
手を出すプロデューサー。

けれどアドルフは、その手をかいくぐるように立ち上がる  
と、頭の上にアキラを乗せたまま、ゆっくりと舞台に向かって歩  
いて行った。

「きよ、局長?」

おもわず伸びるプロデューサーの手を、アントノフが、が

っしりとつかんだ。

「まあまあ。ここでゆっくりと座って、ショーを楽しもうではありませんか。ねえ、プロデューサー殿……」

満面の笑顔のまま、アントノフが言う。

けれど、己が腕をつかんだアントノフの、その手の力に、プロデューサーは悲鳴を上げはじめた。

「私の名前は、アドルフ・H・ガーランドである」

故に、アドルフは今、こうして舞台に立っていた。

「おおっとあ！ こいつはスゴいサプライズだつ。みんな

なアドルフ氏に拍手う！」

割れんばかりの拍手が巻き起こる。

誰もがみな、あの事件をコトをまだ覚えていたのだ。

そんな拍手の中、ローズ大佐・晃は、よくやったとばかりにアクイラの頭をなでてやった。

「聞けっ、チビっ子ども！」

ローズ大佐が叫ぶ。

「お前等が無駄に体力があることは、さっきの、ちゃらちやらした女共の踊りで良く分かった」

・ ちゃらちちゃらって……  
・ 晃ちゃん、ひどいわ……

舞台裏から「マエセツ」ふたりの声が聞こえてくるが、そんなものは当然のごとく無視される。

「だがそれだけでは、我が栄光ある『クリムゾン・カンパニー』の戦闘員にはなれん！」

「我が求めるものは、頭脳だ。知能だ。頭の回転の速さだっ」

・ ずばああああああああああああああん！

ローズ大佐が意味もなく、ガチャペンとムツくんをハリセンを叩きながら吼える。

「波を読み。風を読み。  
空を感じ。海を感じ。  
刻を考え。場所を考え。」

今、お客様が何を求めているかを思い。  
今、お客様が何を感じているかを思い。

どうすれば、より喜んでいただけるかを思い。

どうすれば、より、この街を好きになっていただけかを想う。

それを考えられる頭脳こそが重要なのだ！」

・おおおお！

いつの間に、会場内にあふれんばかりに集まったウンディーネ達がどよめいた。

「おひおひ。ウンディーネ講座になってるぞ  
蒼羽が苦笑する。」

「さあそこで、チビツ子達、こんな歌は知っているか!？」

…ゴンベエさんに赤ちゃんが風邪引いたあ……」

「知ってるううう！」

舞台の子供達も、会場の子供達も歓声を上げる。

「ではこの歌を、手遊びと一緒にやってみよう！　まずは  
戦闘員ども、模範演技だ！」

「イーーーーー！」

アイとアリーチェが舞台の前に飛び出す。

・　　ゴンベエさんの赤ちゃんが風邪引いた。

そこであわてて湿布した。



詩人のジュリア・ウォード・ハウはある夜。 壮烈な夢を見た。

彼女はその夢を詩に起こし、その曲はアメリカ南北戦争での北軍の愛唱歌となった。

作曲者は不明。

その歌詞は -

「我が目は、主の到来を、その栄光を見届けた。

主は、怒りの葡萄の葡萄酒を踏みしめる。

主は、恐ろしい敏速な剣で、死をもたらす稲妻を放つ

た。

主の真理は、前へと進む」

とゆう、少々恐ろしげなモノだ。

日本では明治時代にクリスマスの子供賛美歌として歌われ、

「ともだち賛歌」(作詞/阪田 寛夫) 「おたまじゃく

しは蛙の子(作詞/永田 哲夫・東 辰三)

としても知られている。

- ところで、あわてて湿布した。

「拍手ううう!!」

子供達が歓声を上げながら拍手する。 だが -

「こんな初級編、できて当然だあつ」

ローズ大佐が再び、意味もなくハリセンでガチャペンとム

ツくんを叩きながら吼える。  
のた打ち回るガチャペンとムツくんが、子供達の爆笑を誘  
う。

「次の中級編は少し難しいぞ。しっかりと付いて来い！」  
「——————ッ！」

「よし。今度はそのアイドル。お前達が模範演技だ。  
こっちに来い」

「あらあら……どうしましょう……きゃっ」  
「んっふん。まかせてえ！わふっ」

・ぱっしいいいん

とと・アズサとアミの頭に、ローズ大佐のハリセンが炸裂  
(やや弱め)する。

「すわ！ こっでの返事は『イー！』だけだと言った  
るっがあー！」

「はいい？ そ、そうなんですか……あの、でも……あうっ」  
「ローズのお姉ちゃん。そんなのアミ聞いてながふっ」

ーすばこおおおん

再び、ハリセンがふたりの頭の上から、小気味良い音を響  
かせる。

「こっこっの返事わ……イー！』だ・けっ・だっ  
っっ」



「『い、イイイイイイ！』」

鬼のようなローズ大佐の形相に、アズサとアミは、あわてて返事を返した。

「次は、こんな手遊びだ。……これっくらいの、お弁当箱に……」

「お弁当箱の歌あ！」  
即時に子供達は反応する。

すでに子供達は、ローズ大佐に完璧に心を奪われていた。

「奴はトンデモないモノを盗んでいきました……アナタの……なんでもない。」

「これっくらいの お弁当箱に  
おにぎり おにぎり ちよいと詰めて

見れば、茜やアリーチェの親達も、すっかり童心に帰って踊っている。

「よくできた！」  
「……だが  
「こんなもの出来て、当たり前エダのクラッカー！」

「古！」

舞台監督が破顔する。

【 お弁当箱の歌 】

成立年月日も、作者も不明。

けれど、昔から歌われる手遊び歌。

地方によつては、「具」の内容も変化する。

さらにこの歌には、もうひとつ、とある超電磁砲…ではな  
く、とあるヴァージョンが……

「この阿呆どもお！」

ずばばばばあああーん！

またまた、ローズ大佐が怪人共をハリセンでブチのめしな  
がら叫ぶ。

「はうう。マジでいてえぞ……」

「これじゃあ、体がもたいのだあ……」

暁とウツデイが泣き喚く。 けれど、

「チビっ子ども！ なに、そんな嬉しそうな顔してる！  
問題はこれからだ」

そんなふたりの声など、まったく無視して進行を続ける、  
ローズ大佐。

「いくぞっ。 お弁当箱の歌、サンドイッチ・ヴァージ  
ョンー!!」

会場が低い、どよめきに包まれる。

そう！

この歌には、なんと洋風Verも存在していたのだ。  
悔りがたし「お弁当箱の歌」

これっくらいの お弁当箱に  
サンドイッチ サンドイッチ ちよいと詰めて  
からーしバターに マヨネーズぬって  
いちごさん ハムさん きゅうりさん トマトさん  
丸い丸い さくらんぼさん  
すじのはいった ベーコン!!

わあっ！

っと、歓声上がる。

「よおおし。 チビっ子ども、よく付いてきた。 誉めて  
やろぞ。 そのアイドルもな！」

「は……い、イーーーーー!!」

「わっは……イ……イ……イ……イ……!!」

「よしっ。 みんな、このふたりに拍手っう！」

アズサとアミに惜しめない拍手が寄せられた。

「調子にのるな！ この愚劣な人間どもおおっおおお！  
も早や、お約束と化したローズ大佐の怒声とハリセンの音  
が響き渡る。

ガチャペンとムツくんが、またまたまた、のた打ち回った  
のは言うまでもない。

会場中に笑い声が響く。

「いよいよ。最終試験だ。 これに合格しなければ、お前  
達は決してプリマに……もとへ

我が栄光ある『クリムゾン・カンパニー』の戦闘員には  
なれん！ さあ、検索を始めよう。

三曲目のキーワードは……にんじん・サンダル・ヨット  
……」

「いつぼんでも、にんじん……で、あるか？」  
「は？」

突然の予期せぬ声に、ローズ大佐はおるか、観客までもが  
絶句する。

「う……な、なにか間違ったことを言ったのであるかな……」  
相変わらず『にゃふにゃふ』と気持ち良さ気にタレるアク

イラを頭の上に乗せたまま、アドルフが赤面しながら言った。

「い、いや……その……はっ。さ、さすがは、ネオ・ヴェ  
ネツィア運行局々長だ。よく分かったな。みんな拍手！」

おおおおおと、拍手が巻き起こる。

アドルフは困ったように、照れたように、己が頭の上で気  
持ち良さ気にタレている、アクィラの頭をなでてやった。

みな誰もが、この真面目一辺倒のエリートが、こんな表情  
を見せるとは思ってもいなかった。

「みなさん、認識が甘いですなあ。ねえ、そうは思いま  
せんか？」

なぜか自慢気に語りかけてくるアントノフに、プロデュー  
サーは、なぜか腕をさすりながら、涙目でうなずくのであった。

「さあ、気合を入れて聞け！ 脅威は実力でもって排除せ  
よ！ いくぞっ。音楽スタート！」

ローズ大佐の合図で、軽快な音楽が鳴り響きだす。

・ 1 (いち) いっぱんでも ニンジン

イチゴ ニンジン サンドル ヨット - アイとアリー  
チエが、苺と人参、サンドルとヨットが描かれたプラカードを掲げ  
る。

ゴマシオ ロケット シチメンチョウ - ガチャペンが、  
器用に三本のプラカードを高くかざし。

ハチ クジラ - ムツくんが、両手を大きく広げながら、  
蜂と鯨のプラカードを差し出し。

ジュース! - 最後にアリアとまあ社長が、力を合わせ  
て、一枚の巨大なジュースの絵を振り回した。

【 いっぱんでもにんじん 】

作詞/高田 利博 作曲/佐瀬 寿一 歌/なぎら けん  
いち

1975年 10月5日。

「ひらけポンキッキ」とゆう子供番組の中で発表された数

え歌。

2008年 3月5日には『日本でもっとも売れたシン  
グル』とまでギスブックに掲載された、あの

『およげ! たいやきくん』のB面だった曲。

(今の若い人は「B面」などとゆう言い方、知らないので  
あろうけど……)

歌手のなぎらけんいち氏、曰く。

「本当は『いっぱいんでも、にんじん』の方が人気はあつた  
んだ!

「よし、お前等っ。一番は今日一番の大きな声で歌え！  
いくぞっ！！」

「イーーーーー！」  
会場の子供達はもとより、親達、ウンディーネ達は言うに  
及ばず、舞台上のアズサ、アミ。そして

アドルフに至るまで、誰もが大きな声を上げて歌いだす。

まるで、お祭り騒ぎだった。

- 10 (じゅう) じゅっこでも イチゴ！

印税をめぐる悲喜こもこもな話。

童謡か歌謡曲かをめぐる論争。

レコード会社の新社屋に対する、歌手の嘆き・等々。

それらを全て飲み込んでなを、人々の心に何時までも残る

名曲。

- いっぽん にそく さんそっ よつぶ

ごだい ろくわ しちひき

はっとう きゅうはい

じゅっこ！

子供達の楽しいげな歌声が響き渡る。

「ねえ、ねえ、藍華ちゃん……」

「あによお、灯里い」

「あの……さつきからアルくん。なんかひとりで、ぶつぶつ言ってるんだけど……」

「ああ……いいからほつといて」

「ほへえ。でも、でも藍華ちゃん。いいの？」

「いいの、いいの灯里。どうせいつもの、おやぢギャグか、妙な蘊蓄でも語ってるんだから」

「そう……なの……？」

「ええ。んで、そうやって、少しでも女装してる現実から逃れたいんですよ」

「……………はひっ！」

・くつくつくつ

アルは袖からこつそりと舞台を盗み見しながら、キューティ・レンジャー・ブラックの衣装オウツウシヨウのまま

その小さな眼鏡を輝かせ、いつもでもぶつぶつと笑い続けていた…………… 恐！



さあーで、次回の「AQUA Aretalogy」は・

「ワメです。

このお話し。次回でもキューティーは出ないらしいですよ。  
いったい、何をやってるんでしょうね。

どうやら好き勝手やり過ぎて、収集が付かなくなったらしいですよ。

ドラちゃんに助けてもらえばいいのに……あつ、間違っちゃった。

次回「AQUA Aretalogy」ギターは鳴り響いた

編は

【ジュエシーポーリィ・バアーーーーーイー!】

【仲間になれえ!】

【ぼん・ぼん・ぼん・ぼんぼん・ぼんぼん・ぼんぼん】

の、三本です!」

じゃんけんポン うふふふふ。(c)加藤みどり&野村道子)

旧)

「ARIA Arealogy」 ギターは鳴り響いた 編（前書き）

次回。キューティーズ参上！

次回かよー！

嗚呼…ハートキャッチ、終わってもた（涙鹿馬）

「ARIA Aretaology」 ギターは鳴り響いた 編

- 本当にスゴい。

アイは客席を見ながらつぶやいた。

そこにはたくさんの「笑顔」あつた。

左手ゆんでにマイクを持ち、右手おもてでハリセンを振り回しながら謳う、晃さん…いえ、ローズ大佐。

その謳声に釣られるように大きな声を出す、会場の子供達。舞台上でも、自分達が連れてきた子供達が、元気一杯に唄い踊っている。

舞台にはとても慣れているはずの、あのアイドルさん達も、ノリノリだ。

舞台にはまったく不慣れなはずの、あのお堅いアドルフさんも、とても楽しげだ。

みんなの笑顔。

- これが舞台の天使？

アイは、みんなの背中に、白い羽が見えたような気がした。



もちろん、見苦しくないように、あくまで優雅にな

「おおおお……」

会場中のウンディーネ達が再び、どよめく。

「いやだからさ……」

蒼羽が、再び苦笑する。

「ウンディーネ講座になってるって……」

舞台から子供達が客席に降りる。

子供達は手に手に、お土産を抱えたまま、一目散に親の元へと帰っていった。

みんな両親の元へと全速力で走ってゆく。

満面の笑顔とともに。

「さて、そのアイドルふたりっ」

「『い、イーーーー！』」

ローズ大佐が残った、アズサとアミを睨みつける。

「お前たちもよくやった。最後にお客様に、ご挨拶しろ……普通にしゃべっていいぞ？」

「あ……はい……あの、ありがとうございます」  
アズサが深々と頭を下げる。

「んっふっふ〜ん。アミも、とおおっても、楽しかったよー!」

アミがパタパタと手を振りながら挨拶する。

「みんなこのふたりに拍手う！ よし。 もう帰っていいぞ。 つか帰れ!」

「『 ええええええ〜え! 』」

アズサとアミの声が重なる。

けれど、ふたりとも、やっぱり満面の笑顔だった。

「これからも私達のこと、よろしくお願いします」

「兄ちゃん、姉ちゃん。 おっ友達い！ まった、遊ぼう

ねえーえ!」

そして -

「『 ジュエシーポリー・バアーイー! 』」

見事に声を八モらせると、ふたりは袖に引っ込んで行った。

さて、最後に残ったひとり。

「なあ、お前……」

一転。

ローズ大佐は妖しげな微笑を浮かべ、アドルフに擦り寄ると、足を絡ませ、腰を密着させ、その耳元で熱くささやいた。

「どうだい、どうだい？　このまま私達の仲間にならないかあい？」

我等の力を持つてすれば、このネヴェネツィアも、アクアも、思いのままだよお……」

そのあまりに妖艶な姿に、会場中のファンから悲鳴のような奇声上がる。

それは晃の十八番。

『客いじり』の発展強化増幅版であった。

「さあ、どうだい。　我が「クリムゾン・カンパニー」に入らないかあい？」

だが――

「断る」

アドルフは言い放つ。

「そのような力でもって、物事を進めるのは合理的ではない。

そのような脅しでもって、人の心はつかめないのである。

そのような事では、誰も幸せにはなれんである」

そして、軋るような声でつぶやいた。

「そのような事では、彼女に笑われるのである……」

「……『バッジエーオ』と呼ばれても？」

「もちろんである……」

きっぱりと言い切った。

客席が、三度、どよめく。  
晃はマイクを外すと、アドルフにだけ聞こえるように、そ  
っとつぶやいた。

『ありがとう。これからも、この街をよろしく……』

それからマイクを近づけ吼える。

「この頭の固い、愚か者めえ！ 貴様など我が栄光ある『  
クリムゾン・カンパニー』には不要だ！

さつさと席に降りやがれ！ ……お前等つ。拍手なん  
ぞ、いらんぞ！！」

だが席に戻るアドルフは、みんなの大きな拍手でもって迎  
え入れられた。

「茜さん？」

灯里は袖から舞台を睨んだまま、微動だもしない茜に声を  
かけた。  
だが、その唇は強く噛み締められ、その瞳は、静かに揺れ  
ていた。

「大丈夫ですか？」

「…ええ。大丈夫…大丈夫です、灯里さん……」



そう言つと、茜はまるで何かのついでのように、手でゴシゴシと顔をぬぐつた。

「ねえ、茜さん…素敵んぐですね」

「え？」

そんな茜に、灯里は満面の笑顔で告げる。

「だってこんなにも、あの人は、みんなの心に宿っていてこんなにも、みんなの心に暖かな光を灯していて。」

まるで、暗い水面みなもに光る、ほんの小さな燈籠の輝きのよ

うで……

どこまでも私達を導いてくれていて……

えへへ。素敵で不思議ですね」

「灯里さん……」

「はひ？」

こんな時、言つべき言葉はひとつだけだ。

「恥ずかしいセリフ、禁止い！！」

「えええええ？」

「それから……」

「ま、まだあるんですかあ？」

茜は灯里の両肩を、正面からがっしりとかみ込むと、轟

然と言い放った。

「私のことは、ちゃんと、バッジエーオ。と、呼んでください！」

「は、はひ！」

灯里は、泣きながら笑う、その名を継ぐ、誇り高き彼女に、にっこりと微笑んだ。

一方、舞台では -

「うっさあーいーい！」

ローズ大佐が吼えていた。

「拍手はいらんと言ったのに、この愚民どもめ……いい奴等だ……  
こらっアキラ。」

いつまでそんな奴の頭の上で、気持ち良さげにタレてるんだ！？

さっさと戻って来い！」

「にやぶううう……」

アキラは、とても嫌そうにアドルフの頭から滑り降りると舞台に戻った。

「ぶにゅえり〜」

「まああ」  
そんなアクイラを、アリアと、まあが、声を上げて迎えてくれた。

「聞け、愚民ども」  
ローズ大佐が客席をにらみつける。

「愚かなあの男は、我等の仲間になることを拒んだ。だが……ちびっ子ども。」

お前達は、もっと賢いよなあ……  
さあ、我等の仲間になって、このAQUAを支配するのだ！」

今までの熱気が嘘のように、客席は静まりかえった。

「どうした？ 仲間になるよな？」  
赤い大佐が不気味な笑みを浮かべながら訊ねる。

「どうした。 さあつ。 早く仲間になると言うのだ！」

・じくりっ

と、蒼羽は喉を鳴らす。

・今こそ正に正念場……

そう。今日のこの舞台は、この「一言」を引き出すために仕込まれた。

おちゃらけた怪人達も、かわいい戦闘員達も、晃のあの無茶振りなトークも。

前説の踊りさえも、この一点に絞られ、その「一言」を引き出すための布石なのだ。

もし客席の誰かが、違う台詞を言えば、このお芝居は根本から瓦解する。

それ故に -

蒼羽は…いや、舞台上の晃達も、裏で待機する灯里達も、手を貸してくれているフェニーチェ劇場のスタッフ達さえも

本来、このお芝居には何の関係もないはずのアイドル達も、固唾を飲んで、その言葉を待っていた。

「…いやあ」

小さな声が響いた。

「いやだあ…」

もう一度、小さな声が響く。

子供達が小さく叫んだ。

「あ？ なんだって？」

ローズ大佐が睨みつけた。

「い…いやだあ」

だが子供達は叫ぶ

「いやだ」

叫び続ける。

「いやだ」「いや」「いやだあ」「いやだよあ」

そしてその声は会場中に、まるで波紋のように広がって……

「『』 いやあああああああつ！！ 『』」

会場中を震わせる、ひとつの大きな声になる。

「なん……だと……」

ローズ大佐が低くつぶやく。

それはまるで、悪霊を退治する死神の様な声だった。

「……このちびっ子ども。我等の仲間にはならんと言っの

か？」

・ぱああああああああああああんっ

ローズ大佐のハリセンが、脅かすように大きな音を響かせ

た。

「お前たち。さあ、我々の仲間になると言うのだ！」

だが子供達の答えは、ひとつだ。

「『いやああああああ！』」

「くっ…怪人どもお！」

「っしーあ！」

「おー！ なのだあ」

ガチャペンとムツくんが舞台前に躍り出た。

「お前等。今すぐ我々の仲間になるのだ。でないとはどい目に会っぞ！ さあ、仲間になれ！」

ガチャペンが叫ぶ。

「いやあああああああ！」

だが子供達の大きな声に、ガチャペンは、おもわずよろめいた。

「ホントにヒドい目に会っのだあ。あのローズ大佐は恐

いのだあ。 さあ、仲間になるのだー！」

今度はムツくんが叫ぶ。

「いやあああああああ！」

けれどムツくんもまた、その大きな声によるめいた。

「『お、お前達。 仲間になれえ！』」



返ってしまった。

その瞬間 -

晃は客席には見えないように小さく、右手の親指を立て、ガッツポーズを掲げた。

笑みが広がる。

舞台上の晃に。

アイやアリーチェ。社長ズ。裏で待機するキューティ

ーレンジャー達。

ラーズグリーズのアイドル達。

技術ルームの蒼羽達。舞台監督をはじめとする、フェニーチェ劇場のスタッフ達。

そして、ガチャペンやムックんの中の暁やウツディにも。

笑みが、広がる。

- おいつ。ネオ・ヴェネツィアの子供達は、こんなにも真っ直ぐで、素敵だぞ。

「ええーい！ うるさい！ うるさい！」

ローズ大佐が立ち上がりながら、わめいた。

「頭がガンガンするわ！ このクソ虫ども！！ ……い



い度胸だ」

舞台の中央で仁王立ちになり、客席を睨みつける。

「我等の仲間にならんと云うのだな…ならばしょうがない。  
お前達！」

「イイイイイイイイイイ！」

「この会場の子供達を、ひとり残らず連れてこい。秘密

基地にもどつて、強制的に仲間改造してくれるわ！」

「イイイイイイイ！」

「うっしゃーああ！」

「おー！ なのだあ！」

客席から子供達の悲鳴が上がる。

・その時！

ぼん・ぼん・ぼん・ぼんぼ・ぼ・ぼーん……

ギターの音が鳴り響いた。

S e r s   C o n t i n u a t o   つづく

- E S

「ARIA Aretalogy」 ギターは鳴り響いた 編（後書き）

・次回予告

【 終演。 それは始まりの後で必ず訪れる 】

【 ウンディーネ達の願いは子供達へと連なるのか 】

【 希望は『 演技 』 そのものなのか？ 】

次回 「舞台の中心でアイを叫んだウンディーネ」 次回もサー  
ビス、サービスう！（c.v.三石琴乃）

「AQUA Aretaiology」 舞台の中心でアイを叫んだウンディーネ

今までのコトは、単なるプロローグにすぎなかった。

……おひっ……!

優しげなギターの音色が、会場に響き渡る。

「な、なんだこの音は？ どこから聞こえてくる？ さ、探せ！」

ローズ大佐の命令に「クリムゾン・カンパニー」の全員が、おろおろと舞台上を駆け巡る。

「あつ、あそこだ！」  
散々、探し回ったあげく、ガチャペンが突然、客席の後方を指差した。照明が集中する。

「た、たったひとつの命を捨てて、生まれ変わった不思議な力。  
紅い悪魔を叩いて砕く。 キューティがやらねば、誰がやる！」

赤いギターを持った、蒼いキューティが叫ぶ。

「天が呼ぶ、地が呼ぶ、アクアが呼ぶ。でっかい悪を倒せと私達を呼ぶ！」

横に並んだ、橙色のキューティが叫ぶ。

「あらあら。音も無く忍び寄る、白い影。この世に悪のある限り、正義の怒りが私を呼びます。うふふ……」

白いキューティーが、天使のように微笑んだ。

「き、貴様らはいったい……」

その時早く。 かの時遅く。

そんなローズ大佐の台詞を喰うように、再び、鮮烈な音が会場中に鳴り響いた。

ばばばばあ - ばばあんっ … ばらららーあ！

「トランペット…だと……？」

とまどう、ローズ大佐

「探せ、探せ！」

「い、イiiiiiiiiiii！」

再び、音源を探して右往左往しだす「クリムゾン・カンパ  
ニー」の怪人達。

「あつ。 あそこなのだあー！」

今度はムックくんが客席の反対側を指差す。

「波間にきらめくゴンドラの陰で、悪の笑いが木霊<sup>こだま</sup>する。  
海から海に泣く人の、涙、背負ってアクアの始末。

キューティレンジャー！。 お呼びとあらば、即、参上！」

白いトランペットを持った、黄色のキューティが叫ぶ。

「み、水でもかぶって折檻して、反省してからルナに代わって、おしおきよ！ くう……」

なぜか顔を真っ赤に染めた、黒いキューティが叫ぶ。

そして最後に -

「大地と海風と陽の光浴び月光に映え、宇宙に咲く、大輪の花！」

赤いキューティが叫んだ。

「AQUA Aretalogy」 舞台の中心でア  
イを叫んだウンディーネ 編

瞬間 -

炭酸ガス（CO<sub>2</sub>）が、轟音を響かせながら白い煙が噴出させ、まるで煙幕のように舞台を覆いつくす。

やがて音が止み煙が晴れるとそこには、舞台を踏みしめ、凜と立つ、六つの人影が！

「き、貴様等はいっ……」  
絶句するローズ大佐を尻目に、六人は次々と名乗りを上げ始める。

「紅き薔薇は、勇気のしるし。クイーン・レッド！」

「あ、蒼い海は、や、優しき想い。アクア・ブルー」

「暖かな夕陽は、でっかい心。プリンセス・オレンジい

っ

「澄んだ黄色は。揺るがぬ意志。バツジェーオ・イエロ

ー！」

「……黒い大地は、染まらぬ夢……ノーム・ブラック……う

う

「舞い散る雪は、暖かな未来。スノー・ホワイト。う

ふふ……」

「アクアを守るは、天使の使命！ 六人そろって……！」

・だだんっ

「ウーン(WINN)ディーネ戦隊、フレッシュ・  
ヴェネツィア・キューティールンジャー!!!」

「うりゃっ！」

と、蒼羽がスイッチを押し込む。 間髪いれず

「どっぱああああああーん!!!」

ポーズを決めるキューティーズの背後に、それぞれの色の  
爆煙が吹き上がる。

子供達が歓声をあげた。

「あなた達の好きにはさせない! アクアは…この星の子  
供達は、私達を守る!」

キューティ・レッドが叫ぶ。

「おのれ…小生意気なキューティ・レンジャーめ……お前  
達!」

ローズ大佐が命令をください。

「やああああって、おしまい!」

「イイイイイイイー!」

「あらほらさっさあ!」

「おーし! なのだあ」

クリムゾン・カンパニーの怪人達が、飛び掛って行く。



「いくわよ、みんな！」

「『『『』』』 はい！』』』』』」

迎え撃つ、キューティーズ。

FIGHT!

ここに、壮絶なる死闘が開始された！

BATTLE ?

バツジェーオ・イエロー vs 戦闘員（アイ&アリーチ

エ）

「おどま、オリンポス山たあい。怒ればでっかい、噴火

山たああああい！」

イエローが大地を踏みしめ、仁王立ちになりながら「見得」

をきる。

「『 イイイイ！』」

そんなイエローに飛び掛って行く、ふたりの戦闘員。

ふたりはがっしりとイエローの両腕を抱きついた。

「『 イー！ イイイ！ …イ？』」

だが、押しても引いても動かない。

その細い体のどこにそんなパワーがあるのか。

必死になって力をこめる戦闘員に構いもせず、イエローは



無防備に考え込むイエロー。

その隙に、押したり引いたり、小まめな攻撃を加える戦闘員アリーチエけれどやっぱり身じろぎひとつしない、バツジエーオ・イエロー。

イエロー。

「うん？ 会場のお友達が何か言っているぞ…？」

イエローは、腰にすぎる戦闘員アリーチエを、ずりずりと引きずりながら、客席に近づく。

「おい、お友達い。パンはパンでも、空を飛ぶパンってなんだい？」

耳に手を当て、客席に訊ねるイエロー。  
子供達は、いつせいに叫んだ。

「フライパアアーン！」

「おい、お前……」

「イひっ？」

顔を真っ赤にして自分を押ししている戦闘員アリーチエに、イエローが低く声をかける。

「答えは、フライパン。 正解か？」

「い、イイイイー」

「なるホロ…ありがとう」

「ひえええ！？」

イエローが不意に戦闘員アリーチエを両手でかかえると、頭上に持ち上げ、ぐるぐると回転し始めた。

「イエロー・ジャイアント・スイイイイノーグ！」

「め、目が回るううう。あ、茜さああああん!」

「私は、バッジエーオだあああ!」

「ひいひいひいひいひいひい!」

そのまま、セツト裏に戦闘員アリーチエを放り込む。

戦闘員アリーチエ - しつこいわあ! - は悲鳴とともに、消え

去った。

「ふはははは。俺の強さにお前も泣いたああつ。涙は才

ールでぬぐつとけ! お友達、ありがとー!」

同じように目を回し、客席とは逆の、誰もいない壁に向かって、偉そうに叫ぶ愚か者 - バッジエーオ・イエローであった。

BATTLE ?

ノーム・ブラック vs 戦闘員(社長ズ+ヒメ)

・ざわ、ざわ、ざわ……

客席がざわめく。

誰もが、ノーム・ブラックを見つめていた。

きれい。

かわいい。

素敵。

お姉さま……

妹よおおおつ。

嫁えええ！

さまざまな呟きが聞こえてくる。  
そして誰もが思うひとつの疑問。

- 誰？

誰もがこの見知らぬ黒いウンディーネの正体に、首をひねっていた。

「アルくん、アルくん」

藍華がブラックをつつつく。

「あ、え、な、なに、藍華」

「なに、じゃないわよ。なに、固まってるの？」

「あ…いや、その…みんなの視線が……」

アルはスカートの裾を両手で押さえながら、もじもじと身をよじる。頬が桜色に染まる。

再び - ほつろろ…と客席から、タメ息が漏れた。

「だあああつ。もう、なにやってんのよ。さっさと戦ってきなさい！」

ゲシゲシ。と、レッドの蹴りが、ブラックのお尻に炸裂する。

蹴られたブラックは「きゃあ」と一声、かわいい悲鳴を上げて舞台の前面によるめき出ると、腰が抜けたように座り込んだ。その声と仕草に、またまた、客席がざわめいた。

「サあ、おまえタチイイ。このホシのミライは、ゼッ

タイに、わたさないゾオオ」

座ったまま「クリムゾン・カンパニー」に叫ぶ、キューテ  
イー・ブラック。

「どんだけ棒読みやねん！」

蒼羽が呟く。

「それにしても、アルさん……」

アトラも呟く。

「ホント、かわいい…許せんっ」

ひとり闘志を燃やす、アトラであった。

「なんだその無駄な可愛らしさわあ！！」  
ローズ大佐も吼えた。

「お前は一生、藍華の尻に引かれてろっ。 戦闘員ども、

成敗！！」

「『『』 じゃほいぷいイイまああ 『』』』」

とてとてとて…と、飛び掛って行く戦闘員たち（社長ズ+

ヒメ）

その激闘の果てには！

…結果、不戦勝。

いや、戦いにすらならなかった。

ノーム・ブラックと対峙した途端、まあはブラックの両手の上で踊り始め、ヒメは肩に乗ると、甘えて頬擦りをし始め、

アリアは「ぷいにゅん」と、女の子座りするブラックの膝元で嬉しそうに、じゃれ付き始める。

アキラにいたっては、まったく関係なく、再び客席のアドルフの頭の上で「にゃふううう」と気持ちよさげにタレだす始末。

「お前等……」

ローズ大佐が頭を抱えー

「まあ、猫ですからねえ……」

ブラックが困ったように微笑んだ。

そんな猫達に囲まれ、穏やかな笑顔を浮かべるブラックの姿に、客席からまた、大きなタメ息がもれたことは記すまでもない

……

BATTLE ?

ガチャペン VS アクア・ブルー

「ガチャペン・ビーム！」

ガチャペンの目から、怪光線が放たれる。

いくつものライトが色とりどりに変化しながら迫る。

「ずばばばばあーん！」

と 爆煙があがる。

だが、アクア・ブルーは素早く身をかわし、その攻撃を回避した。

「次は私の番です」

沈着冷静に、ブルーが叫ぶ。

「おお、来やがれ、もみ子おおー！」

「もみ子じゃ、ありませんよお…アタック！」

ブルーのキック攻撃が炸裂する。

「えい！ 中段、中段、下段！」

「ふははははあ。そんな攻撃など当たるものかあ！ それ反撃だあ！」

ブルーの攻撃をさばきながら、ガチャペンのキックも繰り出される。だが -

ガチャペンのその短い足が、ブルーに届くはずもなく、ただバタバタと、可愛くもがいているようにしか見えない。

爆笑が起きる。

「えいつ！ 下段、下段、中段！ まわし蹴り！」

攻撃を続ける、ブルー。

「くっふふふ。もみ子よお。やるじゃないか…」



暁はガチャペンの中でほくそ笑む。

ふたりで夜遅くまで、何度も練習したかいがあるってモ  
ンだ…

この立ち回りの練習のために、暁と灯里は、何度もふたり  
つきりで練習したのだ。

そう。ふたりつきりで。何度も何度も…遅くまで…手  
取り足取り……にやりい。

ぬいぐるみの中を良いことに、暁が無防備に、ニヤける。  
それが油断につながった。

「アクア・ブルーフラッシュー!!」  
ブルーの必殺技が炸裂する。

それは、ハイキックから踵落としへと変化する連続技。

本来ならそれを、ガチャペンは肩で受けるダンドリだった。

だがー  
「ぐつばあああああー!!」

だが、なぜか不意に動きを止めたガチャペンは、それをま  
ともに顔面で受けてしまう。

なぜって?  
それはね…

ガチャペン…いや、暁は見てしまったのだ。

自分の真正面で振り上げられた、灯里の足。スカートを捲り上げながら振り上げられた、灯里の足。

いかにスパッツを履いているとはいえ、その瞬間、おへそから腰にかけての「S」字ライン。ウンディーネとして鍛え上げられた、健康的な太腿。白い肌。

足の付け根まで、丸見え、モロ見え、全部見え。　　だつた。視線は釘付け……

「はうわあっつ」

故に、暁は硬直したまま、顔面に直撃を喰らうハメになる。

・みしりつ　と、嫌な音がした。

「ぐっはあああああ！」

「わっ。　暁さん、大丈夫ですか？」

「だ、大丈夫だ、もみ子よ。　こ、これくらい人造人間たる俺様は……」

「はひっ。　何言ってるんですか？　混乱してますよお」

「はっはっはあ。　もみ子とアクアの平和は、この俺様が守ってや……はうっ」

突然、ガチャペンは、ふらふらと足をもつれさせると、そのまま舞台から客席へと、転げ落ちてしまった。

地獄が出現する。



!!

問いかけた杏も、また気楽に返事を返す。 やっぱり冷た

けれど誰もが、結構、気楽に構えていた。  
なぜなら……

「み、みんな、ダメだよー!」  
ブルーが、ガチャペンと子供達の間**に強引に割り込みながら**  
ら叫んだ。

「いぢめちゃ、だめ!」

「キューティレンジャーは、悪者の味方なの?」  
子供達が訊ねる。

「そ、そんなあ。 私は、お友達のみ方だよ」  
あわてて答える、アクア・ブルー。

「じゃあ、どうして悪者を助けるの?」

「のお?」

「悪者は、やっつけないと!」

「ないとお!」

「そうじゃない。 そうじゃないよお」

ひくひくと痙攣するガチャペンを、ブルーは抱き寄せながら  
ら言った。

「どんなに悪い人でも、このアクアに生きる、すべての命

は、みんな仲間なんだよお。

このネオ・ヴェネツィアに生きとし生ける、すべての命は、みんな仲間なんだよお。

だから、みんな仲良くなれる。

だから、きつと、素敵で笑顔で、みんな、お友達になれる。

だから、きつと、素敵で楽しい、そんなお友達に、絶対になれる。

だから…だから……」

ブルーは泣きながら子供達に叫んだ。

「だから、どんな悪い人でも、いぢめちゃダメ!!」

涙を浮かべながら、ガチャペンを背中から抱きしめる、ア  
クア・ブルー！

その髪にそつと、触れるものがあつた。

ガチャペンだ。

抱きしめられたガチャペンが、ブルーの髪もみあげに、そつとその  
手を触れたのだ。

「ガチャペンさん……」

「アクア・ブルー…ありがとな……」

「はひ……」

はわはわと、涙を流しながらガチャペンを強く抱きしめる、  
アクア・ブルー！

その髪を、いたわるように…感謝するように、優しくさす  
る、ガチャペン。

「恥ずかしいセリ……むがっ!？」

思わずツツコみを入れそうになったレッドに、ブラックが慌てて口を押さえた。

「むごがああん?(アルくん?)」

「ダメですよ。レッド」

アルは優しい瞳を藍華に向けると言った。

「ほら、こんなにも綺麗な景色じゃないですか?」

「……むがあ」

藍華は素直にうなずいた。

「ごめんなさい」

「ごめんなしゃい」

子供達が、口々に謝り始める。

「うん。みんな、ありがとう」

そんな素直な子供達に、涙を浮かべたまま、にっこりと微笑む、アクア・ブルー。

その笑顔に、会場から、大きな拍手が送られる。

誰もが胸に『暖かな何か』を抱いていた。

「なるほど…灯里先輩。 でっかい分かりました」

BATTLE ?

ムックン vs プリンセス・オレンジ

「えいつ。 百花繚乱全部刀・ルーミスの舞！」

オレンジ色のオールを振り回しながら、華麗にムックンに切りかかる、プリンセス・オレンジ。

「ムックン・ハリケーン！」

その攻撃を、ムックンは頭の上のプロペラから発する強風（NIKKI）で迎え撃つ。

「あああゝあ。 でっかいやられましたあああ」

不意に、プリンセス・オレンジがヨロヨロとよろめきながら、ムックンに倒れかかる。

「おわ？ だ、大丈夫なのかあ？」

とっさに抱きとめるムックン。

「……………」

「プリンセス・オレンジ？」

「ふ……………」

「ふ？」

「ふかふか、もふもふううう」

すりすり…と顔を埋め抱きつくオレンジ。

「ああ〜あ。 やられてしまいましたあ。 でも私は、戦い続けますう。 えい、プリンセス・ちょっぷ、ちょっぷっ」

ぼこぼこ〜と、抱きついたまま、ムツくんを攻撃する、プリンセス・オレンジ。

「ああ〜あ。 なんと強い敵でしょう。 でも私は、でっかい諦めませんん。 えい、プリンセス・パンチ、パンチっ」

やっぱり抱きついたまま、パンチを繰り返す、プリンセス・オレンジ。

「ちょ…プリンセス・オレンジ？」  
ムツくんが困ったように声を上げた。

「いったい何をやっているのだあ？ だ、台本には、こんなコト書いてないのだ」

「大丈夫です」  
「へ？」

プリンセス・オレンジは、いつそう強くムツくんを抱きしめながら言った。

「アクア・ブルーの言う通り、私達は、でっかい素敵なお友達になれます」

「へっ？ そ、そうなのかあ？」

「はい。 ですから…」

「ですから？」



「しばらくこうして、もふもふしているのです。もふもふ……」

「プリンセス・オレンジ……」

「いや……」

「え？」

「いやです。お友達なんですから、ちゃんとアリスって呼んでください」

「あ、あのプリンス・オレンジ……こんな所で……」

「ア・リ・ス！」

「いや、あの……」

「ア・リ・スうう！」

「あ、アリス……ちゃん」

「えへへえ……ムツくん　でっかい、やられちゃいましたあ……きゆうきゆうきゆう」

抱きしめながら、いつまでも、すりすり・もふもふを繰り返す、プリンセス・オレンジ。

ムツくんは困ったように、ただ頭をかいていた。

「いいなあ……私も……」

杏がぼつりと言った。

「えつ。　なんだって？」

「杏？　あなた、もしかして……」

蒼羽とアトラが驚いたように訊ねる。

とうとう、杏にも春が来たのか？

「私も、もふもふ、したーい！」

「『 そつちかあああああああ！』」

蒼羽とアトラのリアットが、杏の後頭部に同時に炸裂した。

「なにやつとんじやああー！」

ローズ大佐のハリセンが、オレンジに炸裂する。

「危ないのだ！」

とつさに、ムツくんがかばった。

「ずばばばつばああーんつ。

ほつわあああああああー！！

ぶつ飛ぶ、ムツくん。

「ムツくんつ。ムツくん！」

オレンジがあわてて駆け寄る。

「あ、アリスちゃん……」

「いやあああつ ムツくん死なないでええ！」

「いや、普通、こんなことでは死なないのだあ」

「うわあああん。ムツくん、ムツくんんん！」

倒れるムツくんにすがりつきながら、やっぱり、もふもふを繰り返す、オレンジ。

「残念だったなあ……話し相手がいなくなつて……」  
そんなオレンジに、妖艶な笑みを浮かべたローズ大佐が迫る。

「だが悲しむことはない。すぐにお前もコイツの元へ送つてやる。すわっ！」

再び振り下ろされる、ローズ大佐のハリセン。  
誰もが－これまで！ と、瞼を閉じ下を向く。 だが－

－がきーんんん！

と、なぜか金属的な音が会場中に鳴り響く。

－？

と、みんなが恐る恐る顔を上げれば……

「やらせません……」

そこには、真っ赤なオールで、ハリセンを受け止め、燃えるような瞳でローズ大佐を睨みつける、クイーン・レッドの姿が！

「貴様あ……」

ローズ大佐が唇を歪める。

「殴つてハタいて並べて揃えて蹴り飛ばして……」  
そんな彼女に臆することなく、レッドは言い放った。

「さあ、キューティーを、始めるっちゃー！」

BATTLE ?

ローズ大佐 vs クイーン・レッド

「いきますつ。 晃さ…違った、ローズ大佐！ 必殺・日輪背負い切り！！」

「こい！ 藍華…じゃない。 クイーン・レッド！ 分裂・熱風千本切り！！」

ハリセンを投げ捨て、腰から大太刀を引き抜く、ローズ大佐。

ふたりの大殺陣が展開する。

・がきゅーん

がきいいいいん

ぎゅぎゅぎゅぎゅぎゅ

ちゅいいいいん

ふたりが切り結ぶ音が、会場内に響き渡る。

実はコレ。

技術ルームの蒼羽が、晃と藍華の動きを見つつ、手元のシンセサイザーで音を当てているのだ。

全体の動きを把握しつつ、舞台の動きに合わせて音や照明のキツカケ出し。

爆発や特効のタイミング。

そしてこの効果音 - と、蒼羽はなかなか忙しい。

「くっ…なかなかやるな、クイーン・レッド」

「あなたもね…ローズ大佐……」  
お互いを見合い、不敵な笑みを浮かべるふたり。

「だが…これで終わりだ!!」

- せええのおおおつ!

ローズ大佐の体が、ふわりと浮いた。  
場内から、どよめきが起きる。

「ふははははははっ」

ローズ大佐が宙を舞う。

舞台上のみならず、観客の頭上にまで飛び回る。

ワイヤーワーク。

それはたった1本のワイヤーに身を任せ、空を飛ぶとゆう  
豪快な演出。

裏で、フェニーチェ劇場のスタッフ達が、力任せにワイヤ  
ーを引っ張る…とゆう、実はなかなかマニユファクチャア的な手  
作業だったりするのだが……

けれどそれだけに、演者と裏方の息が合っていないと、大  
きな事故を引き起こす。

また、それだけ演者に対して高い技量を要求する、見た目  
よりずっとハードな技術なのだ。

「喰らえ。 カオスティック・クリムゾン・バアーニング

!!」

空中で静止したローズ大佐から雷光が放たれる。

「アトラ、Go！ 続いて、杏、私と一緒に……スタンバ  
イ・Go！」

照明（アトラ）がローズ大佐の元から、不気味な色の  
光球をレッドに向けて振り向ける。

弾着！

音響（杏）が耳を聳する爆音を上げる。

と、同時に特効（蒼羽）がマグネシウムの爆弾を破裂  
させる。

「きゃあああああつ」

爆煙がクイーン・レッドを包み込む。

「レッド……！」

他のキューティーズが駆け寄る。

だが -

「それ、おしおきだあ！ カオスティック・クリムゾン・  
バアーニング！」

「きゃあ

「うわあ

「あれえ

「にゃあ」  
「あらあらあ」

再び巻き起こる轟音と爆裂がキューティーズを覆い隠す。  
煙が晴れた後、そこには無残に倒れ伏す、彼女達の姿が…

……

「ふはははははあ。見たか、我の力を！ さあ、とどめをさしてやろう……」

空中に浮かんだまま、ローズ大佐が笑う。

客席から悲鳴が上がる。

その時、早く。かの時、遅くうう。

「お友達い、たいへんだああ！」  
マエセツのふたりのMC（司会者）が舞台に飛び出してくる。

「みんな、キューティーズが大ピンチよ！」  
アテナが叫ぶ。

「みんなで、キューティーズを応援しよう！」  
あゆみも叫ぶ。

「さん、はい。がんばれー！」

「『がんばれえええ！』」  
躊躇なく、子供達が叫ぶ。

「もう一回！ がんばれー！！」

「『』 がんばれええええ！ 『』」

アテナとあゆみが叫ぶ。

「『』 がんばれええええ！ 『』」

同じように、会場中の子供達と一緒に叫ぶ。

「『』 がんばれええええ！ 『』」

「最後にもう一回。一番の大きな声で。 さん、はい！」

「『』『』『』 がんばれええええ！ 『』『』『』」

その声は会場中に満ち溢れ、ついにつ

「…くっ」

ゆっくりと、レッドが立ち上がる。

歓声上がる。

「みんな…私たちはまだ、倒れるわけにはいかないわ……」  
そんなレッドの台詞に、他のキューティ達も、ゆっくりと



起き上がり始める。

「こんなにも私達を応援してくれる、お友達がいる……」  
再びオールを構え、ローズ大佐にファイティング・ポーズをとる、クイーン・レッド。

「私達には絶対にあきらめない！ だって……」  
会場を見回す。

「だって、こんなにも素敵な、お友達がいるんだもの！！」

「はひっ」

「でっかい、おー！」

「はい」

「任せておけえ！」

「うふふふ……」

他のキューティー達も立ち上がると、改めてポーズを決める。

子供達の歓声が爆発する。

「お友達い。ありがとー！」

「最後まで、アリシアちゃん…じゃなかった。 キューティーを応援してあげてねえ」

そう言って、マエセツ二人は袖に消えて行く。

頭上から、憎憎しげな声が響いた。

「おのれ… キューティレンジャーめえ……カオスティック・クリムゾン・バアーニング！」

三度<sup>みたひ</sup>放たれる、ローズ大佐の必殺技。  
閃光。 爆煙。 轟音。

だが煙が晴れるとそこには、凜！ として立つ、キューティレンジャーの姿が！

「くつ。 なぜだ。 なぜ倒れぬ！」

「お友達が、私達に力をくれたわ！」  
レッドが叫ぶ。

「お友達ひとりひとりの声援が、私達に熱い心と、勇気をくれたの！」

「くつつ……」

「今こそ、お友達からもらった力をひとつに集めて、必ず、あなたを倒す！」

「な、なにい……」

「行くわよ、みんな！」

ガキガチャカキンと、それぞれが持つ全部<sup>オール</sup>刀が重なりあり、巨大な複合兵器へと変化する。

「完成！ スーパーハイパー・アームストロングサイクロンゴンドラジェットアームストロング・キャノン！！」

「なげえわ！　つか、完成度高いなあ、オイ！」

「斉射三連！　ファイアー！！」

叫ぶローズ大佐を無視して、スーパーハイパー・アームストロングサイクロンゴンドラジェットアームストロング・キャノンが火を吹く。

それは一直線にローズ大佐に向かって行き・

「ぐっわああああああああああああああ！！」  
爆音とともに、まるでストロボのような光が炸裂する。

・ひゆるるるっる……

と、低温花火を振りまきながら、舞台に落ちてゆくローズ

大佐。

・ひゆるるるるう…ポテリ・ぽてこ……

舞台上に着地。

と、同時にガチャペンやムツくん、戦闘員達が、ローズ大佐を取り巻くように倒れこんだ。

「キューティー・ホワイト。　今です！」

「あらあら。　分かったわ」

レッドの声に進み出たホワイトが、手に持った白いオイルを振りかざす。

「カタルシス・カンツォーネ！」

解説しよう（c v）は、やっぱり富山　敬（

「カタルシス・カンツォーネ」とは、悪い心を善に改心させるとゆふ、問答無用、理屈ぬき、斟酌不要の、素敵で素晴らしき謡声のノトである。

「うわああああああっ」

「クリムゾン・カンパニー」達が悲鳴を上げる。

舞台が光に包まれた。

アリシアの謳声（ あらあらあらく ）とともに、

舞台奥に設置された照明が、まるで目潰しのように客席の視界を奪う。

その光は、後光のように輝いて、ホワイトをまるで「例のモノ」のように、黄金色に染め上げた。

その隙に・

ぺたぺたぺた

はがしはがしはがし

ばさばさばさ

ぬぎぬぎ ぺろん

光が収まり、客席の視野がもどると、そこには・

サングラスと「メ」を取った、ガチャペンと

「＼ノ」と「」を取った、ムツくんと

ヒキヌキ（マン・ホーム。日本州の郷土芸）で、一瞬にして普通のウンディーネや猫に早変わる、戦闘員達が…

「あれ。私達はどうしてこんなところに…」

「うん？ 俺様、いったい何を……」

「はてえ？ 私は何をしていたんでしょう」

「まああ」

「ぷいにゅん？」

「あなた達は、操られていたのよ」

怪訝な表情で、あたりを見回すガチャペン達に、キューテ  
イ・レッドが答えた。

「あなた達は、あのローズ大佐に操られて「クリムゾン・  
カンパニー」の悪企みに利用されていたの」

「そんな……」

「でももう大丈夫。会場のお友達が、みんなを救ってく  
れたわ」

「そ、そうなのかつ。お友達、ありがとう」

「おー。お友達、とっても感謝するのだあ」

「ありがとうー！」

「まああああ」

「ぷいぷいにゅーんん！」

「はああああー……いー！」

感謝するガチャペン達に、子供達も元気良く返事を返す。

誰もがハッピーエンドを予感したその時！

「カオステイック・クリムゾン・バアーニングー！」

・ちゅどおおおおおおつおおおおおんん！

きやあああああああああああつ！

鋭い声とともに捲き起こる爆音が、再び、全員をなぎ倒した。

「ローズ大佐……」

そこにはゆっくりと身を起こす、ローズ大佐の姿がっ。

「くつくつくつ……よくもやってくれたなあ……」

「そんなつ。ホワイトの『カタルシス・カンツォーネ』が  
きかないなんて……」

「あらあら……」

「とつさに、そいつらを盾にしたからなあ……役立たずども  
が、最後の最後に役立つたわ……」

「仲間を盾にするなんて……」

「ふ……卑怯も兵法。　　ようは勝てばいいのだ。　　勝てばな

……」

憎しみの炎を上げ、ゆっくりと近づく、ローズ大佐。  
だが、不意にその体がよろめいた。

「ぐう……予想以上のダメージを受けていたか……おい、キ  
ューティールレンジャー」

「あ、あによお……」

苦しそうに立ち上がりながらも、ファイティング・ポーズ  
を崩さない、キューティーズ。

ガチャペンやムツくん。　　アリア社長までもが、今やロー  
ズ大佐に対して、身構えていた。

「今回は見逃してやる…だが、今度会ったその時が、お前達の最後だ……」

「な、なんですって!?!」

「それまで、せいぜいゴンドラ・クルーズを楽しんでおくことだ!」

「ふわり……」

と、ローズ大佐の体が宙に舞う。

「忘れるな。お前達は自らの力で勝ったのではない。この会場の… AQUAの子供達の手で勝ったのだ! はっはっはっあ」

笑い声を上げながら、天井裏に消えて行く、悪の女幹部。

「くっ…私はあの人に勝ちたい……」

万感の思いを込めて、レッドがつぶやいた。

た」

「お友達、みんなのおかげでAQUAの平和は守られました。クイーン・レッドが客席に向かって叫ぶ。」

「みんなに、たくさん勇気をもらいました」  
アクア・ブルーが礼をする。

「みなさんに、でっかい感謝です」  
プリンセス・オレンジが頭を下げる。

「みんな、ありがとう。いつでも沢山、カレーを食べよう」  
う

バッジエーオ・イエローが、愚かなことを言う。

「えと…みなさん、愛してます」  
ノーム・ブラックの台詞に、またまた会場がどよめく。

「あらあら…みんな、ありがとうございました。うふふ」  
最後に、スノー・ホワイトの微笑みで、会場中が癒された。

「はあーい。お友達、今日は本当に、ありがとうー！」  
飛び出してきた、あゆみが笑顔で言う。

「みんなのおかげで、キューティ・レンジャーは悪者を、  
やっつけることができましたあ」

アテナが謳うように言う。

「最後にみんなで、大きく手を振って、お別れしましょう。」  
「はい」

「ありがとうーお友達。ありがとう、キューティーレンジャーー！」

会場内に、みんなの元気な声が満ち溢れる。



みんな、一心不乱に手を振り続ける。

「ありがとう、お友達」

レッドが手を振りながら言う。

「悪者達は、いつもみんなを狙っている。　だけど心配しないで。　みんなには、そんな悪者をやっつける、強い心があるわ。

いつまでも、その心を忘れないでね！」

「はあああああああああああああああああああああああああああああああ  
あああいいい！」

キューティーズは強く頷くと、もう一度、名乗りを上げ始める。

「紅き薔薇は、勇気のしるし。　クイーン・レッド！」

「蒼い海は、優しき想い。　アクア・ブルー」

「暖かな夕陽は、でっかい心。　プリンセス・オレンジい

っ

「澄んだ黄色は。　揺るがぬ意志。　バッジエーオ・イエロ

ー！」

「く、黒い大地は、染まらぬ夢。　ノーム・ブラック！」

「舞い散る雪は、暖かな未来。　スノー・ホワイト。　う

ふふ……」

「アクアを守るは、天使の使命！　六人そろって！！」

「『ウン(WIN)ディーネ戦隊、フレッシュ・ヴェ  
ネツィア・キューティーレンジャー!!!』」

「蒼羽さん、今です。そのSPと描かれたスイッチを！  
灯梨が叫ぶ。

「お、おお!?!」

とまどいながらも、躊躇なく、SPスイッチを押す、蒼羽。  
とたん -

- ちゅどおおおおおおおつおおおおお  
おおおおおおおおおおおおおおおおお  
むうう!!!

このお芝居中、最大の爆発と爆音と爆風が舞台を駆け抜け、  
舞台上のキューティーズ達はおろか、客席最前列にいた、アドルフ  
達をも吹き飛ばした。

「ありい…火薬の量、サービスし過ぎたかな？ かな？」

- てへりっ

と、頭をかく灯梨に、舞台監督のパチキが炸裂したことは、

言うまでもなかった。

「アイちゃん……」

藍華が倒れたまま、声を絞り出す。

「アイさん……」

そんな藍華を、かばうように抱きしめながら、アルも声を上げる。

ただひとり。

そんな大惨事の中で舞台に立ち続け、正気を保っている少女。アイ。

たまたま偶然、アリシアの前にいて、爆発から逃れたのだ。

爆風がひとりでに避けたかのように、アリシア自身は押し倒されることはなかったものの、そのあまりな轟音を受け、さすがに目を回していた。

けれどアイだけは、そんなアリシアに守られたかのように、倒れることも、目を回すこともなく、ただひとり、舞台の上に立っていた。

「アイくん。し、締めめの台詞を……」

茜がやっぱり、明後日の方向をみながら言う。

「アイちゃん。お願い」

ガチャペンを下にひきながら、灯里が願う。

「アイちゃん。さ、最後の決めを……」

やっぱり、ムツくんの上に乗りながら、アリスがつぶやく。

「アイ先輩」「アイくん」「アイさん」「アイちゃん」「アイアイ」「アイ!」「ぷいいにゅん!」

舞台の中心のアイを叫ぶ、ウンディーネ達。

それは、技術室の蒼羽達や、灯梨達。

舞台裏のアイドル達や、スタッフ達にも広がって……

アイは、意を決したように、力強く頷くと、右手を上げ、元氣よく叫んだ。

「!」  
「イイイイいつー……!」

「だめだ、こりゃ……」

いった。

全員の眩きと、会場の大爆笑と共に、ショーの幕は閉じて

- E s s e r s C o n t i n u a t o )

つづく

「AQUA Aretaology」 舞台の中心でアイを叫んだウンディーネ

- 次回予告

【変わってゆくから大切なもの。 変わらないから大切なもの】

【今日も素敵な一日でした】

【未来はいつも、ちよっぴり不安顔です。 だから笑顔で会いに行きましょう】

【移りゆく日々。 いとおしい時間。 それぞれの未来。 そして私は歩きだす】

「 最終回 その新しいステージに… 」

【さあ、素敵なお手と時間を、一緒に、どうぞしましょ  
う）（c v 葉月絵里乃）

「AQUA Areta1ogy」【最終回】 その新しいステージに… 編

「お前等、みんなクビだああ!!」  
ヒステリックな金切り声が響き渡った。

「AQUA Areta1ogy」 【最終回】 その新しいステージに… 編

「いったい何を考えているんだ。  
いったい何を勝手に動いてるんだ。」

お前達は、僕の作品なんだ。  
お前達は、僕の駒なんだぞ。

お前達は、僕の言う通りに動いていけば、いいんだ!  
お前等は、僕の言う通りに、歌って踊っていれば、いいんだ。

お前達は僕の演出で輝くんだ。  
お前達は僕の演出でだけ輝くことができるんだ

みんな、僕のおかげなんだ。  
みんな、僕力なんだ。

いいかつ。 主役はお前等じゃない。

僕だ！

僕なんだ！

僕の演出こそが主役なんだ。

僕こそが主役だ。

僕を立てろ！

僕をひき立てろ！

僕より目立つな！

僕を目立たせる！

僕より前に出るんじえねえええ！！！」

プロデューサーと呼ばれる男は、一気にそう捲くし立てると、激しく肩を上下に震わせた。

「とにかく、僕の顔に泥を塗ったお前達を許すほど、僕は甘くないぞ。

お前等、みんなクビだつ。

つか、この世界にいられなくしてやる。

お前等は、今日で終わりだ！ 終わりにしてやる！

そこで自分達のものでかしたことを、じっくり後悔している！」

言っただけ言つと、プロデューサーは足音も荒く、楽屋を出て行った。



「すまなかつた……」  
残されたアイドル達に、晃がローズ大佐の衣装のまま頭を下げた。

「私がお前達を無理に舞台に出さなければ、こんなことはならなかつた……」

謝って許してもらえとは思わないが……すまなかつた」

深々と頭を下げる、晃。

「いえ、晃さん。頭を上げてください」

「アズサくん……」

「実は私達、もう限界だったんです」

「限界？」

「はい。あの人の強引な演出や、私達の個性を無視したやり方に、私達の誰もが、もう限界を感じていました……」

「それにアイツってば、アズサ姉にちょっかいだそうとしてたしい」

「うん。それってば、ロコツなセクハラって言うんだよねえ」

同じ顔をした少女がふたり、息もぴつたりと言う。

「『サイテエーだね！』」

「アミ、アミ……」

「だから私達みんな、ホントはあの人から離れたかったんだよお」

「その通りい！ んっふっふくん。なんかこれで、逆に清清したよねえ」

そんな双子の笑顔に、他のアイドル達も同じように微笑を浮かべる。

「だから晃さん。どうか気にしないでください。

それに私達自身、この舞台に出れて、とても楽しかったんですから……」

「……ありがとうございます。

どうだ。もし、お前達の誰かひとりでも、ウンディーネに興味があるのなら、必ず姫屋に入れるように、私がこの身にかけて、会社と交渉させてもらうが……」

「ありがとうございます」

アズサも、深々と礼をする。　しかし――

「でも、その申し出も辞退させていただきます」

「……やっぱり」

「はい」

アズサは微笑みながら言った。

「私達は、もちろんアイドルに興味はありますが、なによりも、舞台で歌うことが大好きなんです。

ですから、決して舞台から離れたくありません。　それにも……」

「それに？」

「それに私達はいつまでもこの13人でいたいんです」

「みんな一緒に？」

「はい」

アズサはきっぱりと言いつつ切った。

「私達は13人でひとつの『ラーズグリーズ』なんです」

アズサのその顔は、いつもの「おっとり」とした、どこか危うげなモノを感じさせる表情ではなかった。

彼女達のリーダーとして

仲間……いや、愛する妹達を、どんなことをしてでも守ろうとする、強固で凜とした、姉の顔だった。

「アズサ姉……」

アミとマミが声を震わせた。

他のアイドル達も、そんなアズサに感謝のまなざしを送る。

アズサは照れながら、けれど、しっかりと頷いた。

「それについてちゃ、ちよいと話があるんだが……」

野太い声が割り込んできた。

「市長。どうもすいません」

プロデューサーが媚を売るように言う。

…僕…

「いや、ホント。素人共が勝手に舞台を進めてしまつて…

私をもっとちゃんと、舞台を管理できていれば、こんなことにはならなかったんですがねえ」

揉み手をせんばかりの勢いで、プロデューサーは甘い声を出す。

「今度は私がきからちゃんと演出して、誰にも横ヤリをいれられないようにしますから……

そうそう。 どうです、これからちょっと一席。 なんなら、あのアイドル達も同席させますよ」

満面の笑顔で、そう言う。

先程、そのアイドル達に解雇通告したことは、もうAQUAの空の彼方らしい。

露骨な営業だった。

そこにゆっくりと近寄る、ふたつの人影。

「いやあ、市長さん。 楽しい時間をありがとうございました」

「うむ。 久しぶりに、良き時間を過ごせたのである」

ネオ・ヴェネツィア運行局・副局長と、なぜか頭の上に子猫をタレさせた、運行局々長だった。

「こ、これは、アントノフさんにアドルフさん。 お疲れさまでした」

プロデューサーの標的が変わる。

「いやあ、特にアドルフ局長は、ご苦労様でした」

なにしろ、運行局々長といえば、市長よりも権力は上なの

だから。

「あんな素人どものお芝居に付き合うなんて、なんてお心が広いんでしょうか。それをあいつ等ときたら、どれだけ分かっているのやら…」

にやけた追従の笑みを浮かべるプロデューサー。

その笑みが、アントノフの一言で凍りつく。

「その素人のひとりが、私の娘なんですわあ」

「……はい？ 今、なんと？」

「いやあ。あの素人芝居に、私の愛娘が出演してましてねえ……」

満面の笑顔。

その笑顔が幾百の言葉より、アントノフの心情を物語っていた。

いつかの時のように、汗が濁流となってプロデューサーの頬を伝う

「おかげで、ずいぶんと楽しめました。 いやいや、親バ

カとお笑ください。 わはははははは」

「いや…そんなバカな……」

「そう言えば……」

固まるプロデューサーに追い討ちをかけるように、アドルフが言う。

「この素晴らしい舞台に、どこからか圧力がかったとゆう噂を聞いたのであるが…市長は何か、ご存知であるかな？」

問われた市長は、ぶんぶんと首を振る。  
視線をやれば、他の職員達も連鎖的に首を降り始める。

「そうであろうなあ」

アドルフは、あくまで無表情だった。

「これほどネオ・ヴェネツィアの子供達が喜ぶショーを妨害するような、たちの悪い企てに、市長殿や他の職員の方々が関わってるハズはないのである」

今度は縦に、ぶんぶんと首を振る、市長一同。

それはまるで、出来の悪い喜劇を見ているようだった。

「し、市長……」

悲惨なのはプロデューサーだ。

二階に上がって、梯子を外されてしまったのだから。

絶句するプロデューサーに、アドルフが決定的な一言を告げた。

「で、君には何も聞こえないのであるか？」

「たまにゃ近道してみるのも悪くないぜ」

いかつい顔をほころばせながら、舞台監督がラーズグリーズに言った。

「……どうゆう意味ですか？」

「実は俺の古くからの知り合いで、丁木ってゆう、とある芸能社の社長がいるんだが、そいつがあんたらの舞台を見て気に入っちゃってな。」

「そうゆう理由なら、あんた達を丸ごと面倒みたいって、言ってるんだ」

「私達を……全員をですか？」

「ああ。もっとも、そいつのトコも小さな会社だからな、必ずしも全員がアイドルになれるって保障はないんだが。」

「だが、そいつは誠実な奴だ。決して、あんた等を道具としてだけは見ない。」

「それだけは、俺が保障する」  
「……………」

アズサは迷う。

はたして、この申し出を受けるべきなのか。

この申し出を受けて、いいものなのか。

それが私の……いえ、この子達の幸せにつながるのか。  
大切な妹達にとって、未来へとつながるのか。

「どうってことないじゃん！」

「そうだよ、アズサ姉え！」

双子の姉妹が、アズサの両腕にしがみつきながら言った。

「『 私達、どんなことがあっても、ずっと一緒だよ！』

「アミ、アミ……」

アズサは見回す。

自分を囲む、妹達を見回す。

誰もがしっかりとアズサを見返し、力強くうなずく。

「……みんな、ありがとう」

アズサは軋るような声で答えた。

「舞台監督さん……」

「おうよ」

アズサは深々と頭を下げながら言った。

「そのお話し、ありがたくお受けします」

ラーズグリーズの仲間達が、ものも言わずにアズサにしがみつく。

そんな妹達を、アズサもしっかりと抱きしめて……

やがて小さな嗚咽が聞こえてくる。

ラーズグリーズの全員が、肩を震わせ、声を殺して泣いていた。

その様子にウンディーネ達も、灯梨をはじめとする、フェニーチェ劇場のスタッフ達も、みんなもらい泣きしはじめ……



「おい、こんな湿っぽいのは願い下げだ」  
再び、頑固者の野太い声が響きわたる。

「それよりおめえら、あの声が聞こえネエのか？」

耳をすませるまでもない。

まるで地鳴りのように、アンコールを求める声が、休むことも止むこともなく、ずっと響きわたっていた。

「さあ、アンコールだ。今日最高の元気と笑顔で行って来い！」

「アズサ姉え」

アミが叫ぶ。

「アズサ姉ちゃん！」

マミが叫ぶ。

「アズサさん」「アズサ様」「アズサ姉」「アズサさん」

「アズサさんっ」「アズサさん！」

口々にその名を呼ぶ、ラーズグリースの妹達。

「みんな……」

アズサはゆっくりと顔を上げると、泣きながら、けれどはつきりと、力強く言い切った。

「さあ、また、始めよう」

自由なカラーで描いてみよう！ 必ず見える。 新  
しい世界！

爆発的な音楽が響き渡る。

音とともに飛び出してきたラースグリーズとキューティーズ  
が、仲良く、元気よく、謳い踊り始める。

知らずに -

何かに甘え、誰かを傷付け、自分に逃げ込んでいた。

でもみんなの希望の音が聞こえてくるよ。

ゴールは近い。

もう少し、走り続けよう！！

突然、客席の上から、色とりどりの風船が舞い落ちて来た。  
歓声上がる。

その歓声と風船の間を縫う様に、再びローズ大佐が舞い降り、舞台に着地する。

瞬時、にらみ合う、キューティーズとローズ大佐。

だが次の瞬間 -

権力の象徴であるハリセンを投げ捨て、大太刀も捨て、満面の笑顔でキューティーズ達と抱き合い、笑いあう、ローズ大佐。それは、どんな悪い人とでも、最後には笑って分かり合える。とゆう、このお芝居のメッセージが込められていた。

BOOOM!!!

「銀弾」 - と呼ばれる、まるでチェフ（皿の物体）のような銀色の帯が、いつせいに打ち上げられる。

それは照明により、いろいろな色に光り輝きながら、客席を染めていき……

- オレンジ。 パープル。 ブルーにレッド。

フレッシュ・グリーン。 ライトブルー。

素適。

ノーマル・グリーン。 ホワイト。 ブラック。

ピンクにイエロー。

みんな素適だね。

それぞれに、それぞれの「色」を身に纏うウンディーネ達が、その「色」を受けとめる。

それぞれが、それぞれの「色」に染まる。会場中のウンディーネ達が、その「色」になる。

- とても素適だね……

誇らしく、その「色」を受けとめる。

- 天使に歓迎されたのであるか？

「バカなつ。バカなつ。そんなバカなあつ！」  
プロデューサーが、そんな舞台を見て叫ぶ。

「舞台は選ばれた者だけが輝けるんだ。素人ごときが……僕の演出が、あんな素人どもに負けるはずがない！」

こんな……こんなバカな話があるか！　ここは僕のものなんだ。  
僕が輝く場所なんだ。

すべての栄光は、僕のためだけにあるんだっつ」

「貴君を見ていると、まるで昔の自分を見ているようであるなあ……」

「なにい！？」

激昂するプロデューサーに、しかしアドルフは静かに、諭

すよつじに言ひ。

「まだ分からののであるか？ 彼女達は自分達のためでもましてや貴君のために踊っているわけではないのである。」

子供達の…この会場にいる、すべての人達のために踊っているのである。

だから、輝いているのである」

「そ、そんな…すべての輝きは、この僕のために……」

惚けたようにつぶやくプロデューサーに、アドルフはきっぱりと言いつつ切った。

「輝いているから素晴らしいのではない。」

素晴らしいから輝いているのである！」

「にやふうう」

頭の上で、アクイラが嬉しそうに一声鳴いた。

歓声と笑顔があふれる舞台。

人々の幸せがあふれる舞台。

その光景に背を向け、プロデューサーは、がっくりと肩を落とすと、よろめくように外へと出て行く。

その背中をアドルフは、憐憫の情をもって見送った。

歌があふれる。

誰もが楽しげに謳い、手を振り、踊っている。

会場中に歓声が満ちる

会場中に笑顔が満ちる。

会場中に幸せが満ちる。

光、輝く。

フ達も、  
舞台のウンディーネ達も、アイドル達も、舞台裏のスタッ  
フ達も、そして客席の観客達も -

そのすべての背中で、白い羽が、はばたいてた。

説・

【最終回 その新しいステージに…】

「AQUA Aretalogy - アクア・英雄伝

- L a f f i n e

おまけdeアリアあ その？

「どうでしたか？ 楽しんでもらえましたか？

ああ。それなら良かった。 ふふふ。

え？ ウチ？ ウチはもちろん楽しかったですよ。

え？ ええ、そりゃまあ、恥ずかしくなかったか - と言

われれば、もう二度とやりたくはありません。

いや、マジで。 えへへ。

あははは。 確かに、まさかウチがマエセツを任される  
とは……え？ 上手かった - ですか？

ありがとう テレテレ。

でも、そうゆうあなたも、あの時、とっさにウチやアテ  
ナさんを抱きとめてくれて、感謝してます。

ええ。 ウチはともかく、アテナさんは危なかったです  
からね。

うふふ。 でも久しぶりのあなたの『もふもふ』は、ホ  
ント、気持ち良かったですよ。

あ痛っ。 なにも叩かなくても……

それに、 あなたが踊る『オニのパンツ』ってゆづのも、  
なかなかシユールで。

いやあ、他の人に見せられないのが残念……痛あ！

だから叩くの禁止！

ふふふ。 照れなくても……あだだっ！

AQUAの心が躍るオニのパンツ。

いやあ、ホントにみんなに見てもらいたかったなあ……あだ  
だだだだあっ！！



おまけ de アリアあ その？

「いつたい、なんの騒ぎ？」

舞台の後片付けも終わり、茜とアリーチェが家に帰りついてみれば、そこは阿鼻狂乱の巷と化していた。

「やあ、我等が天使達のお帰りだっ」

すっかり「出来上がって」いるアントノフが上機嫌に叫んだ。

「茜ちゃん。今日のステージ最高だったわ！」

「さすがは元、トップ・アクトレス。輝いてたねえ！」

「アリーチェちゃんも素敵だったわあ」

「うん。さすがは師弟コンビ。息もピッタリだった」

「さすが。さすが！」

「うんうん。その通り。その通り」

何故か黄色いハッピに、黄色いハチマキをまいた、まるで猛虎軍団の応援団のようなご近所さん達が、家の前の広場に集まり、大騒ぎしていた。

「みんな今日のあなたの舞台に感動しているのよ」

茜の母親がパニーニを手渡しながら言う。

「ええ。素晴らしいステージでしたな」

アントノフも真っ赤になった顔で楽しそうに笑う。

「そんな大げさな……」

「なにが大げさなモンか。お前も気が付いてたんだろ？」

「……………」

「あの会場中の子供達の笑顔と歓声。とても嬉しそうだった」

「お母さん……………」

「私はお前の母親であることを誇りに思うわ」

茜の母親が満面の笑顔で言う。

「アリーチエ。我が愛しき娘よお！ お前の演技もなかなか素晴らしかったぞお！

まるで天使が舞い降りて来たかのようにだったあー！！」

「お父さん、恥かしいから止めて」

親バカ全開発言のアントノフにアリーチエは冷たく答える。

「うわああああん。茜さん、娘が冷たい！」

「うっさい。私はバツジエーオだ！」

「うわああああん。茜さんまで冷たい！」

アントノフの鳴き声に、またひとしきり大きな笑い声が響き渡る。

「ねえ、お姉ちゃん」

「なんだい。アリーチエ」

尚も大騒ぎし続ける近所の人達から少し離れて、アリーチエがそっと茜に訊ねた。

「お姉ちゃんはホントにウンディーネでいいの？」

「うん？ どうゆう意味？」

「あのね、お姉ちゃん……………」

アリーチェはそつと息を吸い込むと、意を決したように一氣に言葉を紡ぐ。

「今日のお姉ちゃん……茜さんを見て思ったの。  
ああ、

この人は舞台上でこんなにも輝けるんだって。  
この人は舞台をこんなにも楽しく演じられるんだって。

だから……

だからもしかしたら、茜さんはまた舞台に戻ったほうが良いんじゃないかって。

もしかしたら、茜さんはまた舞台に戻りたいんじゃないかって」

「アリーチェ……」

「だからね、だから茜さん」

アリーチェは必死に上を向こうとする。  
けれど、どうしても視線は自分の爪先を見続けてしまう。

「もし、もしも茜さんが……お姉ちゃんが舞台に帰りたいなら、  
それでもいい。

私は大丈夫。

MAG A社は私ひとりで大丈夫。

私ひとりで、MAG A社を守ってみせる。

だから……だからお姉ちゃんはっ」

「無理だ」

茜が冷たく言う。

「そんなつ。お姉ちゃん。無理だなんて……そんなのやってみなければ分からないじゃない。」

絶対。絶対。私は頑張ります。

頑張つて、お姉ちゃんに心配かけないようにします。　　だか

ら……だからっ」

「無理だつて言ってるだろ？」

「お姉ちゃん……そんな……」

今にも泣き出しそうなアリーチェの髪を、茜が優しくなでた。

「お姉ちゃん？」

「だから無理だつて言ってるだろ？」

そう言う茜の声は、穏やかで優しくかった。

「私はもう舞台に帰るのは無理だ」

「……お姉ちゃん」

「舞台は確かに楽しい。」

けれどウンディーネのお仕事は、もっと楽しい。

バツジェーオが…アロッコさんが残してくれた、ウンディー

ネとゆう、お仕事は楽しくてしょうがない。

それは舞台よりも何倍、何十、何百倍もだ。

私は今、ウンディーネとゆう仕事が最高に楽しいんだ。

それに……」

「それに？」

茜はアリーチェの肩をそつと抱きしめた。

「それに今では、こんな素適なお弟子さんもいることだしな」

「お姉ちゃん……」

今度はアリーチェが茜に抱きつく番だった。

「なあ、アリーチェ」

そんな彼女に、茜はいたずらな視線を送りながら言った。

「本当に、お前もバツジエーオ（愚か者）だなあ」

「はい」

そんな茜に、アリーチェは満面の笑顔と涙で答える。

「私は、お姉ちゃんと一緒に、バカで愚かで心優しいバツジエーオです！」

そう言つて、再び強く茜を抱きしめるアリーチェ。

茜もそんなアリーチェの髪を優しく、いとおし気に、いつまでも撫で回していた。

そんなふたりを、アントノフや茜の母親。近所の人達が、暖かな満ち足りた微笑で、いつまでも、そっと見守っていた。

おまけ de アリアあ その？

- 数日後

「だあああつ。藍華さん。もうなんとかしてください！」  
「のんびり、お買い物もできません」

「はつきり言っただけで営業妨害です」

「藍華先輩。でっかい迷惑です」

「お嬢：最近の朝の挨拶は、決まってそれですよ」

「ああもう、ゆっくり昼寝もできやしない…藍華さん、お願いしますよお」

「藍華ちゃん。藍華ちゃん。ネットでもスゴいことになってるよ。素敵んぐだね」

「ちょ、ちょっと待ってよ。いきなりみんな、何の話？」

「『』 キューティ・ブラックです！！ 『』」

みんなの声が重なった。

「もう。来るお客様、お客様。ブラックは誰なんだって、同じことばかり聞かれるんです！」

アン・シオラが言う。

「お買い物してても、逆に、お店の人に聞かれるんですよ」

杏が言う。

「マンホームから来たお客様が、観光案内そっこのけで聞いてきます」

アトラが言う。

「私も散歩中に聞かれるんです。無視することも、でっかい出来ませんしい……」

アリスが口を尖らせながら言う。

「ウチもトラゲットで、シングル達の最初の挨拶が、まず、それですからねえ」

あゆみが言う。

「人が気持ちよく、いつもの小島で昼寝をしているのに、わざわざゴンドラで漕ぎ寄せて来てまで、訊ねてくる奴もいるんだ」

バツジェーオが言う。

「藍華ちゃん。藍華ちゃん。もうネット上でも、スゴい有名だよ。非公認のファン倶楽部もあるみたい」

灯里がパソコンを見ながら、嬉しそうに言う。

「…ファンクなラヴ？ なんのこっちゃ？」

未だ事態を把握できていない藍華が、きょとん顔で言う。

「であるからして、庁舎にも問い合わせが殺到して、業務にも支障をきたしておるのである。非効率きわまりないのである」  
もうそれが当然かのように、頭の上にアクイラ社長をタレさせたアドルフが、アントノフと一緒に生クリームのセココアを飲みながら言う。

「業界でも噂になってます。大手のプロダクションが血眼になって彼女を探してるって。」

ああ、彼女といえば、彼女達、再デビューが決まったそ

うですよ」

灯梨が舞台監督と顔を見合わせ、笑いながら言う。

「えっ……えと……だから？」

「だから、さっさと公開してくれ」

蒼羽が突き放すように言う。

「公開？」

「ああ。キューティ・ブラックの正体は、私の最愛の人です！  
つてナ」

「えええええ！？ い、いったい何、急に言い出すんですか！  
晃さん！！」

「はあ……それはいいわねえ。そうすれば、みんな平和になるし……  
つて、どうして私とアンさんは、縛られているの？」

「あらあら。うふふ……」

「ちよっ、ちよっと待ってください」

ようやく事態を把握したらしい藍華が、顔を真っ赤にして

叫ぶ。

「いやだつて、キューティ・ブラックの正体は、ノーム  
のアルくんであ……」

「だから、おめえの最愛の人だろ？」

「黙れ、ポ二男！！」

「あははは。いまさら隠すことはないのだあ、藍華くん」  
「黙れ、ムツくん！！」



「アイ先輩。 藍華さんってば、最愛ってトコは否定しないんですね」

「しつ。アリーチエちゃん。 藍華さんは素適な泣き虫さんなんだから、ああやって、きつと照れてるだけなんだよ」

「はい、そのふたりい…恥ずかしい台詞禁止！ つか、それ以上、くだらないこと言ってる…」

「い、言ってる…？」

「藍華特製。スペシャル・ウルトラ・スーパー？メニューで、特訓するわよおおお！」

「『 イイイイイイイイイイ！ 』」

アイとアリーチエは抱き合いながら肩を震わせ、泣き叫んだ。

そして当のキューティー・ブラックはといえば、

「ぷいねぷいにゅぷいにゅーん」

「まあああ」

「……………」

「みんな、かわいいですねえ」

何かに目覚めたかのように！

薄く化粧をし、社長ズ達をはげらせ、優雅に小指を立て、

紅茶なんぞを飲みながら、にっこりと微笑むのであった。

「藍華さん！」

「藍華ちゃん！」

「藍華先輩！」

「藍華くん！」

「藍華殿！」

「おい、藍華！！」

・どうにかしろっ！！

と、ばかりに、みんなの視線が藍華に集中する。

藍華は……

「うわあああああん。ヒーローショーは、もうゴリゴリよおおおおお！」

戦隊モノ、お約束の悲鳴が、店中に響き渡った。

こうして歴史は伝説になる。

「許さない…絶対に許さない…くっふっ…ブラック…くっ  
ふふふふ…許さない……」  
アトラが、サンシャインとは似ても似つかぬ声で呪詛の言  
葉をエンドレス……………（泣）

おしま

「AQUA Aretaology」【最終回】 その新しいステージに… 編

気がつけば「Traghetti」なみの長いお話に！（鹿馬）

PV・111343

ユーク・22144

これが現時点での数字です。  
ちよつと呆然。

こんな愚作品に、これだけの方がアクセスしていただけてるだなんて……あれ？ なにこの頬を伝う涙は？（鹿馬）

感謝します。ありがとうございます。

「こんなのARIA」じゃ、ねえしっ！！

と、感じつつ、読み続けていただけただけことに感謝します。

次回作も、思いつき悪ふざけの自都合ですが、読んでいただければ幸いです。

それでは、長らくのお付き合い、ありがとうございます。

いえ、まだ続けさせていただけますが（鹿馬）

15本目のお話しをお届けします。

「ARIA」を描いていて、とんでもないモノを書いてしまったあ。

……どうしよう。(c v 納谷悟郎)

ファンの方々、すいません。あっちもこっちもすいません。

そんな決して、あの方をナニするつもりは、これっぽっちもありません。

つか、できません。できるワケもない！(なにその偉そう)

ですから、このお話しを読み終えた後に、みな様はほんの束の間でも、夜空を見上げていただければ、これに勝る幸せは、ありません。

それでは、しばらくの間。よろしくお付き合いください。

Il pilastro del anello di Tempo

ひかりわななくあけぞらに -  
私はその日、宇宙に登った。

第15話 「Il pilastro del anello di Tempo」

ここネオ・ヴェネツィアでは猫が多い。

『それはね。ここは猫の王様・ケット・シーが治める土地だからよ』

とは私の祖母の言葉。

亡くなった祖母はよくそう言って、街を歩いて行く猫達に微笑んでいたものだ。

祖父もそんな祖母を優しく見守っていた。

けれど -

残念ながら現実主義者の私は、そうは思わない。  
ただ単純に、この街が猫達にとってとても住みよい所であるからなのだろう。

事実、この街の代表的な職業のひとつ。ウンディーネ（水先案内人）と呼ばれる人達にとって、

蒼い瞳の猫は、航海の繁栄と会社の発展を司る守り神として、「社長」と呼ばれ優遇され、ウンディーネ達と一緒に暮らしている。

つまりこの街は、猫にとっても優しい街なのだ。  
だから猫は必然的に多くなる。

そして私のような職業が必要とされる。

私の名前は、ゆずりはあまぎり 楪・天霧

ここ水の惑星AQUAの一都市ネオ・ヴェネツィアにおいて、なくてはならない仕事。 すなわち -

獣医をしている。

「先生、ありがとうございます」

ピンクの髪の毛のウンディーネが頭を下げる。

「いいのよ。たいした事なくて良かったわ」

「ぶいにゆううう……」

彼女の腕の中で、白くて大きなお腹の猫が情けない声をあげた。

よ。「アリア社長。食べ過ぎてお腹を壊すだなんて、ダメです  
今度やったら、お薬じゃなくて、注射しますからね」

「ぶいぎゅん……」

私の言葉にアリア社長は、半べそをかきなら逃げ出して行



く。

「あ、アリア社長。 待ってくださいよお！ 先生、本当にありがとうございます」

そう言って、あわててアリア社長を追いかけて行く少女。

「お大事に」

その姿が可笑しくて、私は笑いながら手を振った。

「うーんん」

と、のびをひとつ。

気が付けばもう夜の10時を回っていた。

朝の早いネオ・ヴェネツアにしてみれば、この時間はもう深夜に近い。

緊急で担ぎ込まれてきた、さっきのアリア社長が今日、最後の患者だった。

「さあ、お終いお終い」

私はそう呟きながら店仕舞いを始める。

この建物は私の自宅も兼ねている。

一階が診療所で、二階が私の部屋だ。

表のドアに「close」の看板を掛け、鍵を閉める。

治安の良いこの街において、基本的に鍵など必要ないのだが、ここには劇薬も置いてある。

用心に越したことはない。

電気を消し、白衣をロッカーに仕舞い、私は二階へ上がった。

「ただ今」

答える人とてない部屋に、そう声をかけるようになったのは、いつの頃からだろう。

いや、昔からの習慣が、いまだに続いているだけなの知れない。

暗い部屋。

冷たく冷え切った部屋。

そこには祖父や祖母。

それどころか両親の姿すらないとゆうのに。 さびしい？

…ふっ……

なぜか不意に、そんな思いにかられる自分が可笑しくなつて、私は小さく笑ってしまう。

いけない、いけない。

今日は予想以上に疲れているのかもしれない。

コンロに火を点けてお湯を沸かす。

シロン産の紅茶葉を、少し濃い目に放り込む。

やがてまったりとした香りが漂ってくる。

ブランデー

今日はいいか。

その代わり、たつぷりのミルクを入れ、ミルクティにする。

甘め。

ホット・ミルクティ。

気分が高ぶっていたり、何気に疲れているときは、私はビ

ールやワインよりこちらの方を良く飲む。

この方が落ち着くのだ。

「ふう……」

ティカップを両手で持ち、湯気を顎に当てながら、私はゆっくりと思い出す。

早く逝った両親のこと。

最後まで私の心配をしながら逝った祖母のこと

最後までにこやかに微笑みながら逝った祖父のこと

瞳を閉じればそこには、いまでも懐かしい人達の笑顔が……

「よきロダイトのさまなして……かあ」

ティーカップのふちを、なでるかのように玩まてあそびながら、私は独言ちた。

……カタン……コト……ン……

不意に小さな音が聞こえてくる。

……カタ……コトン……カタン……コトン……カタン  
……コトン

- あれはなんの音？

まだ幼かった私は父に訊ねてみた。

『あれは銀河鉄道が宇宙<sup>ソラ</sup>を走る音だよ』

『銀河鉄道？』

『そう。いつか天霧も乗れるといいね』

父はそう言って、私の頭をなでてくれた。

それはとても暖かくて、柔らかかで、優しくて……

……カタ……コトン……カタン……コトコト……カタ  
ン……コトコトン

けれどオトナになった私は知っている。

その音は

あの音は

このネオ・ヴェネツィアと本土を結ぶ唯一の鉄道。その

貨物列車が走る音なのだ。

銀河鉄道。

それは子供の頃の夢にしか過ぎない。

オトナなそんな夢は見ない。

人はオトナになる度 そうして何かを失ってゆく。

いや、失ってゆくからオトナになるのだろうか？

それならば、私はいままで、どれ程のモノをなくしてきた

のだろうか。

・トントントン

小さく、けれど、はっきりとした音で、ドアが叩かれた。

「先生。お願いします。先生っ」

男性……にしてはどこか、甲<sup>かんだか</sup>高い声私を呼ぶ。  
急患だ。

私は急いで階下に降り、ドアを開けた。

「ああ、先生。良かった。お願いします」

声の主を見た瞬間。

失礼ながら、私は硬直してしまう。

目の前に立っている人物。

巨体。

黒いダークスーツ。 白いシャツ。

蝶ネクタイ。

なによりも特徴的なのは、その大きな顔にちょこんと乗った、小さなサングラス。

「先生、こんな夜分にすみません。 一緒に来ていただけませんか？」

アンドレアルフスと名乗ったその男性は、その大きな体を小さく縮込ませながら、さかんに恐縮する。

私は症状を問いただし、いくつか必要な薬品を鞆に詰めた。

火の元点検。 よし。  
戸締り点検。 よし。

私はロッカーから白衣とコートを取り出すと、家を飛び出した。

吐く息が白く凍る。  
その凍った白い息が、またたくまに風に捕まり運び去られる。

季節はもう24月。

夜空には満天の星の輝きと、煌々と光る月がふたつ。

「寒っ」

私はコートの襟を掻き合わせると足早にアンドレアルフス氏の後を追った。

「ここで少し待ってください」  
そう言って彼が立ち止まったのは、運河沿いの何も無い小道の真ん中だった。

「え？」

「もう少しすれば来ますので」

来る？ 何が？

「あ、あの……」

けれど私が問いただす前に、それは現れた。

- ピイイイイイ

何も無いただの路地。

そこに突然、ライトが灯される。

最初、遠くに見えていたその輝きが、だんだんと大きく、強くなつてゆく。

呆気を取られる私の耳に、音が響いてくる。

- ガタンゴトン・ガタンゴトン

この音は。

夜のしじまに聞こえてくる、この音は。

- キキキキイイイイ

車輪を軋ませながら、ソレが止まった。

- しゅううつう

と、噴出す蒸気が束の間、暖かな風を送る。

「これは……」

蒸気機関車……？

こんな時代に？ え？ 何故？ ええ？ 何処から？ え

ええ？

「さあ、先生。 お乗りください」

ぐるぐるする私に、アンドレアルフス氏が静かに言う。

「え、でも……」

「大丈夫です、先生。 何の心配もいりません」

そう言っただけで妖しく笑うアンドレアルフス氏。

その時、私は気が付いた。

彼のその瞳。

そのつばらな瞳の形が、縦長で……まるで猫のような瞳であることに。

にこにこ微笑むアンドレアルフス氏。

私は何かに操られるかのように、列車に乗り込んだ。

・ガタンゴトン ガタンゴトン

窓の外を星が流れて行く。

私は信じられぬ思いで、その光景をながめていた。

「座って待っていてください」

アンドレアルフス氏は、私を四人がけの対面座席のひとつに座らせると「それでは」と言って、隣の車両へと消えて行った。

・ガツチャアンンン

やがて小さな衝撃と共に列車が走り出す。



それは見る間に高度を上げると、あっという間に星空の中に走り出していた。

「宇宙ソラを走ってる……」

「銀河鉄道さ」

「え？」

不意の声に振り向くと、私の正面。すぐ前の座席にふたりのウンディーネが座っていた。いつの間にか？

「あの……」

「あんたもアイツに呼ばれたんだな」

そのウンディーネは、窓の枠に肘付いた手で顎を支えながら呟くように言った。でも……

「呼ばれた。ではなく招待されたって言うのですよ」  
その横に座った、もうひとりのウンディーネが微笑みながら言う。

「招待だとお？」

「ええ。僕達は彼に招待されたのですよ」

「夜中、強引に連れ出すのが招待って言うのかよ」  
窓側で頬付けを付くウンディーネの「少年」が、窓の外を見ながら吐き捨てるかのように言う。

「あははは。そんな風に言っではいけないのですよ。ウンディーネさん」

「うっせい。僕ちゃん少女！」

「あ、あのっ」

「うん？」

「はい？」

思わず話しに割って入ってしまう。

「あの、あなた方はARIA・カンパニーの方なんですか？」

少女の方は、そのままの。

少年の方もパンツ姿ではあるものの、やはり白地に青のラインとマークが入ったARIA・カンパニーの制服を着ている。

「その通りだ」

目だけをこちらに向けて蒼い髪の「少年」が答える。

「はい。私はARIA・カンパニーのウンディーネなのですよ」

少女も輝くようなシルバーブロンドの髪を揺らしながら笑顔で答える。

「あの、でも、今。ARIA・カンパニーのウンディー

ネは、灯里さんだけで……わっ!？」

「『ふいにゆ〜ん!』」

突然、白い「もちもちぼんぼん」が、声を八もらせながら抱きついてきた。

声を八もらせて？

そう・

「ARIA社長が二人……?」

絶句する私に、ふたりのアリア社長は「ぷいぷい」と笑いながら、私に膝の上に腰をすえた。

……うつ。正直すごく重い。

「あははは。アリア社長。ダメですよ」

「アリア社長。ヒメ社長に怒られるぞ」

ウンディーネの少年・少女が、アリア社長を抱きかかえる。

「これは、いったい……」

「これは僕のアリア社長です」

少女が言う。

「これは俺のアリア社長だ」

少年が言う。

「ふたりのアリア社長……」

ふたりのアリア社長は、同じ黒のボアの帽子に、同じ黒のストールを肩に掛け、同じ笑顔で私を見ている。

「そんな、どうして……あの、あなた達は……」

「あんたの泣きぼくろ、可愛いいな」

「え？」

蒼い髪のウンディーネの言葉に、私は反射的に自分の左目の下にあるぼくろを押さえてしまう。

「はい。とても色っぽいですね。ぞくぞくするのです」

「よ」

銀の髪のアウンディーネが、少しハニカミながら言う。

泣きぼくろ。私の左目の下にある黒いぼくろ。  
これはいつからだろう。いつからあっただろう。  
確か両親がなくなつた頃……………

「口のまわりにできるぼくろは『愛情ぼくろ』って言うって、  
セクシーなんだよなあ。

もちろん、目の下のもソソるが」

「目の下にできるぼくろは『泣きぼくろ』」

占いによると『異性にだまされやすい』『甘えたがり』  
『泣き虫』って意味があるそうなのですよ。

うふふ。抱きしめたくになりますね」

「な、なにをいきなり勝手なことを。年上をからかうも  
のじゃないわ。それに私は同性との趣味はありません」

うわあ……………頬が熱い。

とゆうか、私は何をムキになっているのだろう。

ふっ

うわっ。コイツ、鼻で笑いやがった。蒼い髪のウンディ

ーネ。コイツ、今、鼻で笑いやがった！

「あははは。この人、若く見えますが実は300歳を超え  
ているのですよ。僕や先生の方が、よっぽど年下なのですよ」

え？ 300？

どう見ても20歳位にしか見えないのに？

「ふん。そう言う、お前さんだって、外見はそんなだが、

中味は立派な男じゃないか。先生、見た目に騙されるなよ」

え？ 中味は男？

胸の膨らみも、体のラインも、そのまま女性なのに？

見た目に騙されるな？ それはあなただって……

「ふいにゆにゆにゆ」

アリア社長が楽しげに笑った。ふたり同時に……

・ゴウッ

再び、ぐるぐるしだす私に、またひとつ衝撃が重なる。

・ゴウッゴウッゴウッ

窓の外を輝く何かが通り過ぎてゆく。

私はあわてて立ち上げると額を窓に押し付けた。

・ゴウッ

またひとつ、それが流れてゆく。

・ゴウッ

それは柱だ。

-ゴウツゴウツ

まるで昔読んだ絵本に描かれていた、古代の神殿の柱のようなモノが、光り輝きながら何本も通り過ぎてゆくのだ。

「天気輪の柱だ」

「天気輪の柱？」

彼が窓を開けてくれる。

私は乗り出すように頭を外に突き出した。

-ゴウツ

また柱がひとつ。私の目の前を過ぎてゆく。

風が私の髪を揺らす。

宇宙なのに何故、風が？

宇宙なのに何故、息が？

そう気が付いたのは、ずっと後のことだった。

-ゴウウウツ

「天気輪の柱」が目の前を通り過ぎてゆく。

え？ ……ひ…と？

私は見た。確かに見た。

今、目の前を通り過ぎた柱の中に、少女の姿を。

鞆を持ち、桜柄の着物を着た小さな人形を抱え、微笑む少女の姿を。

女の姿を。

その背後には、両親らしい二人の大人の姿も。これは  
いつたい……

「『銀河鉄道の夜』の作者の宮沢賢治は、改稿魔として知られていた」

彼が呟くように言う。

「賢治は、いったん完成した作品でも徹底して手を加えて他の作品に改作することが珍しくなかった。

賢治はどうやら『最終的な完成』がない、特異な創作概念を持っていたらしい」

「賢治の書き残した『農民芸術概論綱要』とゆう本の中に「永久の未完成これ完成である」という記述もあるのですよ」

彼女が言う。

「『天気輪の柱』は『銀河鉄道の夜』の第1稿から第3稿にかけて、ブルカニ口博士と共に書かれていた。

けれど今、みながよく知る第4稿の『銀河鉄道の夜』には、いつさい書かれなくなった描写のひとつだ」

「おかげで本当の『天気輪の柱』とは何なのか、永遠の謎のままなのですよ」

「永遠の謎……」

「ただ賢治の生まれたマンホーム、日本州の東北地方には「天気柱」もしくは「天気輪」と呼ばれる石や木でできた構造物があつて

そこについている輪を回すことで、死者に呼びかけるこ

とができると言われているモノがあるのですよ」

「死者に呼びかける……」

「賢治はそれをイメージしていたのかもしれないね」

「あとは『太陽柱』<sup>たいようちゅう</sup>とする説もある」

「太陽柱？」

「太陽柱は、日出または日没時に太陽から地平線に対して垂直な方向に、焰のような形の光芒が見られる大気光象のことなのですよ」

「……………」

「それはそれは綺麗なモノで、まるで死者の魂が天に昇る一筋の道に見えます」

「道……………」

「俺達ウンディーネなら『航跡』かな」

「そうですね」

そう言つと、ふたりは顔を見合わせ小さく笑つた。

「『ふいにゆううん』」

ふたりのアリア社長も同じ顔で同じ声で同じ仕草で、同じように笑つた

「お待ちせしました」

・ドクン！ ドキドキッ

心臓が飛び跳ねる。



突然、背後から聞こえてきた声に振り向けば、そこにはアンドリアルフス氏のにこやかな笑顔があった。

「それでは先生、一緒に来てください」

その言葉に私はここに来た、本来の目的を思い出す。

私はあわてて鞆を抱きしめると、アンドリアルフス氏の後を追った。

当然のように。

彼と彼女のウンディーネも、それぞれのアリア社長を抱きかかえながら付いて来た。

「わふうっ!？」

隣の車両に入った途端、私は棒立ちになる。

そこには巨大な車掌さんが居た!

巨体のアンドリアルフス氏よりも、さらに大きい。

決して小柄ではない私が、見上げるように顔をあげなければ、その顔を見ることができない。

もっとも -

なぜか影がさし、その表情は暗く隠れて良く分からなかったのだが。

「お久しぶりです」

彼女のにこやかな声が背中から聞こえる。

「あんまり呼び出すなよな」

彼の疲れたような声が背中から聞こえる。

「にゃう……」

小さな声が足元から聞こえてくる。

視線を下げれば、そこには一匹の子猫が私を見つめ、嬉しそうに鳴いていた。この子は!?

私は思わず、その子を抱きかかえてしまった。

「にゃううん」

子猫は、私の指を舐めてくる。

そうだ。この子は確かに。

「そうです、先生。この子はあなたの患者でした」

アンドレアルフス氏が言う。

「野良猫で病気にかかり道端で倒れていた。そんなこの子を先生は助け、看病してくれた」

「え、ええ。でも……」

「はい。そうです。この子は……」

【 ひかりわななくあけぞらに 】

突然、彼がその詩を口にした。

【 清麗サフィアのさまなして 】

「その詩は……」

【 きみにたくへるかの惑星の 】

「宮沢賢治『敗れし少年の歌へる』なのです  
ね」  
彼女が言う。

【いま融け行くぞかなしけれ】

「お前の父も祖父も好きだった詩だ」

「光が身を震わせる明け方の空に

清く麗しいサファイヤの様な

君によく似たあの星が

融けゆくように消えてしまつのは悲しいことだ」

そつだ。

父も祖父も、よくこの詩を私に聞かせてくれた。

幼い私には、その意味はよく分からなかったけれど、その物悲しい詩は私の心の中にずっと残っていた。

【雪をかぶれるびゃくしんや】

遠い記憶を呼び覚ますように、私もその詩をそつと紡ぐ。

「雪をかぶつた」百櫃ひゃくしんの木や」

彼女が言う。

【百の海岬いま明けて】

「たぐさんの海の岬にいま朝が来て」

彼が続ける。

【 あをうなばらは万葉の 】 「 青い海は万葉の頃  
から  
」

【 古きしらべにひかれるを 】 「 古き調べに光って  
いるよ  
」

【 夜はあやしき積雲の 】 「 夜には妖しげな積  
乱雲の  
」

【 なかより生れてかの星ぞ 】 「 その中から生まれ  
てきたようなあの星たちは  
」

【 さながらきみのことばもて 】 「 あたかも君のよう  
な言葉で  
」

【 われをこととひ燃えけるを 】 「 わたしに何かを問  
いかけるように輝いている  
」

「 あ、あなた達はいつたい。 なぜその詩を私の父や祖父  
が  
」

【 よきロダイトのさまなして 】 「 良質のロダイト  
( 薔薇輝石 ) のように  
」

そんな私の疑問を無視して、彼と彼女は詠い続ける。

【 ひかりわなゝくかのそらに 【 キラキラとひかるあの空に】

【 溶け行くとしてひるがへる 【 「溶けるようにひるがえっている」

【 きみが星こそかなしけれ 【

「賢治は最愛の妹を26歳の時になくします。病死だったそうなのです」

彼女が言う。

「彼女を失った時、賢治は押入れに顔を突っ込んで号泣したと言われている」

彼が言う。

- 泣けるなんて幸せだわ  
私は無意識にそう思った。

「そして、彼女の亡き骸をひざに乗せて優しく髪をくし梳った - とも伝えられているのですよ」

「賢治の妹に対する愛情は、兄が妹を思うより、むしろずっと恋愛感情に近かったそうだ。」

賢治が生涯独身を通じた事をもあって、近親愛がかなり

強すぎるという相姦説がささやかれたこともあったようだ」

「近親愛……」

「この『敗れし少年の歌へる』は、そんな大切な妹を亡くしてから3年後。

1925年に三陸地方を旅行したときに書かれたと言われている」

「一種の傷心旅行だったのかもしれんな」

【 きみが星こそかなしけれ 】

「だからこの部分。本来なら『君によく似た星がとても愛しい』とでも訳すんだろうが……」

「僕は……僕達はこう思うのですよ。」

『 星になってしまった……逝ってしまったあなたが、  
今でも悲しほどに好きで好きでたまらない 』 と

「逝ってしまったあなたが、悲しいほどに好き……」

「そしてそれから8年後の1933年。賢治自身も37歳でこの世を去ります。急性肺炎だったそうです」

「賢治の墓には彼の遺骨の他に、妹の骨も一緒に葬られているそうだ」

「だから『敗れし少年の歌へる』……」

「にゃうん」

子猫が鳴き声をあげた。

私は腕の中の子猫を、改めて抱きしめた。 だってこの子は……

「そうです。 この子はもうなくなっています」  
アンドリアルフス氏が静かに告げる。

そうだ。

この子は看病のかいもなく、三日後に息を引き取った。  
まるで眠るかのような死だった。

そして私はまたひとつ、敗北を重ねる。

「にゃうん」

子猫は私の左の頬を舐めてくる。

「その子はあなたに感謝しているのですよ」

「そんなつ。 私は……私はこの子を救えなかった。 それなのに、それなのに」

「それなのに、この子はあなたに。 先生に感謝しているのです」

「それは……」

「それはお前が本物の獣医だからだ」  
彼が言う。

「あなたが本当の優しさにあふれているからなのですよ」  
彼女が言う。

「お前は、どんな夜更けであつても、どんな早朝であつても」

「あなたは、どんな暑い日であつても、どんな寒い日であつても」

「先生は、どんな風の日であつても、どんな雨の日であつても、診察を断つたことは決してありません」

「それは……」

「そしてその子のように、例え金にならないような子でも」「そしてその子のように、例え助からないと初めから分かっていた子でも」

「先生は最後の最後まで、決して治療を止めようとはしませんでした」

「にゃおん」

私の腕の中で、小さな猫は嬉しそうに鳴き声を上げる。

「ここにいる全ての猫達は、みな、そんな、あなたに感謝しているのです」

「全ての？」

私は気が付いた。

いつの間にか、私の周りにたくさんの猫達がいることに。車掌さんを中心に、何匹もの猫が私を取り囲んでいた。

そして、どの猫も、その最後を看取った、私が敗れし猫達ばかりだった。



「なあああーっ」

ひと際、堂々たる猫が、私のすぐ目の前にいた。  
大きな三毛猫。

他の猫の三倍はあろうかと思われる体。ふさふさで太い

尻尾。

そしてなによりも特徴的な、その澄んだ蒼い瞳。アクアマリンと呼ばれる、社長猫特有の瞳。

「オレンジ社長……」

「『ぶいにゅーん！』」

私の背後からふたりのアリア社長が駆け抜ける。  
ふたりは懐かしそうにオレンジ社長へと擦り寄ってゆく。

「にゃあーっ」

そんなふたりをあやしなから、オレンジ社長は嬉しげな鳴き声を上げた。

「そう。オレンジ社長も、あなたが最後を看取ってくれたのでしたね」

「そうだ。この子は「オレンジ・ぷらねっと」の社長猫だった」  
「オレンジ社長だ。」

「そうだ。私は確かにオレンジ社長の最後を看取った。老衰だった。」

最後にオレンジ社長は、満足そうな顔をして静かに息を引き取った。大往生だった。

「泣かないんですね」

オレンジ・ぷらねっとのウンディーネの声がよみがえる。

「先生は泣かないんですね」

大勢のウンディーネに看取られて、オレンジ社長は逝った。みんなが泣いていた。周りを取り囲むウンディーネ。その誰もが泣いていた。

けれど――

「やっぱり毎日、動物の死を見慣れている獣医さんは、こんなときでも、でっかい泣かないんですね」

目を真っ赤に染めながら、そのウンディーネは私に言った。

私は……ちがう。私は……

「医者は泣くことができない」

私の心を読んだように、彼が言う。

「どんなに悲しくても、どんなに辛くとも、医者は決して泣いてはならない」

「それは患者に対する冒瀆。遺族に対する失礼。そう

思っているんですね」

彼女が言う。

そつだ。医者は……命を預かる者は泣いてはいけない。  
泣いても命は戻らない。泣くことで逝ってしまった命が  
戻るのならば、私はネオ・アドリア海をあふれさせるくらい泣こう。  
でも、泣いても命は戻らない。

だから私は泣かない。泣いたことがない。  
両親が亡くなったときも。祖母が亡くなったときも。  
祖父が亡くなったときも。

決して泣かない。泣いては……いけない。  
その亡くした命。失ってしまった命。その重みをた  
だ受け止めるだけで……

「にやおうん」  
子猫が私の頬を舐める。  
それはまるで……

・ポウツ  
いきなり腕の中の子猫が金色に輝き始める。

「え？」  
オレンジ社長も、周りの猫達も金色に輝きだす。

「にやふう」  
腕の中の子猫が小さな光の球になる。  
その光はまるで飛び跳ねるかのように私のまわりを巡ると、  
窓の外へと飛び出していった。

-ゴウッ

その光は走ってきた天気輪の柱に吸い込まれるかのように消えていく。

次の瞬間。 天気輪の柱はひととき大きく輝いた。

-ポウッポウッポウッ

たくさん光の球が私を取り囲む。

その全てが私の周りを懐くように跳ね回り、楽しそうに舞い踊る。

やがて光の球は一斉に外に飛び出していく。

「待つて！ いかないで！」

私は窓に駆け寄り、開け放つ。

手を伸ばす。

でも届かない。届かない。届かない。

私の手は、また届かない。

「なつづつううーごう」

大きな鳴き声を残して、オレンジ社長が光になる。

光は私に近付くと、私の頬に触れた。

そう。 泣きぼくろに触れた。

いとおしそうに触れてくれた。

オレンジ社長……だった光の球は、最後に私の周りを一回りすると、外に飛び出し天気輪の柱と一体化した。

ひととき大きく輝く、オレンジ社長の天気輪の柱。

見回せば、銀河鉄道は光の柱に包まれていた。

光の柱の中を、銀河鉄道は駆け抜けて行く。

それはとても綺麗な光景で……私はただ啞然と、それを見つめていた。

「あの子達はみな、本当にあなたに感謝しているのです」  
アンドレアルフス氏が言う。

「でも私はあの子達を救えなかった」

「はい。それでもあの子達は、穏やかに逝きました。心  
静かに逝けました。先生のおかげでね」

「それでも私が敗れたことに変わりはないわ……」

- そつと

ハンカチが差し出される。

見ればあの蒼い髪の毛のウンディーネが、白いハンカチを差し出しているのだ。

「これは……なに？」

「お前はハンカチも知らないのか？」

ぶっきら棒に言う。

「それは知ってるわ。分からないのは、なぜ、あなたがそれを差し出しているかよ」

「……お前、気付いてないのか？」

「え？」

「お前の、その両目から流れているものはなんだ」

「何を言っているの。私は泣かない……え？」

気が付けば、私の頬は濡れていた。

気が付かぬまま、私は泣いていた。

「これは……なんで……」

「それは先生が本当に優しいからですわ」

「私は……私は……ただの敗れし……」

「ええ。確かに。」

でも天気輪の柱にいる者達はみな、そんなあなたに感謝し、見守っているのですよ」

「見守って……いる？」

「はい。あなたの悲しみや寂しさは、いつもあの子達の気がかりでした」

「だから今夜。あなたはこの列車に招かれましたわ」

「あの子達の想いを告げるために。感謝の想いを伝えるために」

「私は……私の父や母。祖父母達も、あそこで見守って

いてくれるのかしら……」

「もちろんです」

彼・彼女達は私の本当に言っただけの言葉を聞かせてくれた。

「きみが星こそ かなしけれ」

そっと抱きしめられる。

背中から何かとても軟らかくて暖かなものが、そっと私を抱きしめてくれる。

まるですべてを包み込むように。

車掌さんだ。

私は無意識にそう思った。そう感じた。

暖かくて、柔らかで。

もしかして、この人が猫の王様……  
ケット・シー

その優しさの中で、私は声を上げて泣いた。

\*\*\*\*\*

「ぷりきゅん」

何かが私の鼻を舐める。

「ぷりきゅん」

ちゅぱちゅぱと舐め続ける。

「先生、先生。天霧先生。起きてください。こんな所で寝ると、風邪を引いちゃいますよ」「  
激しく肩を揺さぶられる。

・ちゅぱちゅぱちゅぱ

・わさわさわさっ

・ちゅぱちゅぱちゅぱ

・わさわさわさっ

・ちゅぱちゅぱちゅぱ

・わさわさわさっ

「だわあああああっー！」

たまらず私は目を覚ました。

「ぶいにゅーにゅにゅにゅう」

寝ぼけ眼（目ま）の目をやれば。すぐ目の前に白くて憎いあんチクシヨーが。

「はふう。あなたはどっちのARIA社長？」

「にゅ？」

「どっちのって……この方はARIA・カンパニーのARIA社長ですが……」

ピンクの髪のウンディーネ・水無灯里さんが戸惑ったように答えた。



気が付けば私はあの運河沿いの小道に居た。  
眠っていたようだ。

よく凍死しなかったものだ……と改めれば、なぜか私は大きな黒い毛布のようなモノに包まれていた。

「こんな所に、こんな時間に、どうしたんですか？」

時刻はようやく陽が昇り始める頃。

灯里さんは早朝練習の途中だったそうだ。

あれは……あれは夢だったのだろうか？  
一夜の夢だったのだろうか。

無意識に泣きぼくろを触ろうとして気が付いた。  
私の左手。  
その手が白いハンカチ握り締めていることに。

これは……

これは、あの蒼い髪のウンディーネが手渡してくれた、白いハンカチだ。

あの生意気な300歳を自称する、蒼い髪のウンディーネが優しく手渡してくれた白いハンカチだ。

そして、

キラリと朝日に光るものがある。

私を包んでいた黒い毛布。 ふかふかで暖かな毛布。

そこに張り付くようにくっついていて、銀の髪。

あの僕ちゃん少女のシルバーブロンドの髪。

きらきら輝く、銀色の長い髪。

どうやら夕べのことは、夢ではないらしい。

でもそれを私は、灯里さんにどう説明できる？

猫目の巨体な人間に誘われ、銀河鉄道に乗り、ふたりのウンディーネに会った。

それはあなたと同じ、ARIA・カンパニーのウンディーネで、300歳の少年と、どう見ても女性なのに、中味は実は女の子の子。

それぞれにそれぞれの、ふたりのARIA社長。

天気輪の柱。

敗れし少年の歌。

私が看取った猫達。

オレンジ社長。

そして最後に、猫の王様・ケットシー

はああ……

こんな話、信じる方がどうかしている。

「うーん。言ってもいいんだけど……信じてもらえるかど

うか……」

私は髪をかき揚げながら呟く。 とたん -

- がばちよっ！

と、ばかりに灯里さんが抱きついてきた。

「ちよっ。灯里さん、どうしたの？ い、いったい何をっ」

「あわあわ…あわあわ……」

妙な声を上げつつ、灯里さんはポケットから小さな手鏡を  
取り出した。

「先生は……天霧先生は乗れたんですか!？」

そう言って突き出された彼女の鏡には、私の額に押された  
猫のマークのスタンプが、しっかりと写し出されていた。

\*\*\*\*\*

私はもう寂しくない。

なぜなら夜の空を眺めれば、星空いっぱい「天気輪の柱」  
が見えるからだ。

いつでも会える。

いつでも見守っていてくれる。

「きみが星こそ かなしけれ」

今日もあの列車は誰かを乗せて走っているのだろうか。

今日もあの列車はさびしい誰かを乗せて走っているのだろうか。

さびしい人を乗せて、今日も優しく宇宙ソラを駆け巡っているのだろうか。

耳をすませば -

カタン…………コトン…………カタン…コトン…………

あの音が、今でも響いてくるようだ。

o d e l T e m p o a n e l l o ( 天 気 輪 の 柱 )  
a · f i n e 1

先生の泣きぼくろって素敵ですね。

ええ。これは私の宝物なの。

ほへえ……

Il pilastro dell'anello di Tempo (後書き)

オノマトペ  
擬声語

って難しい…… (涙)

「敗れし少年の歌へる」の現代詩訳は、一部、個人的に意訳しています。

ご了承ください。

またー

作中に出てくる、ふたりのウンディーネに関しては

別SS投稿サイト「Arcadia」に掲載されている

「ARIA The parallelism world」 跳

梁さま

「ARIA Un Mistero Meraviglioso」

風月さま

おふたりの作品を、ご照覧ください。

この愚作の足元にも及ばぬ、素晴らしき「ARIA」世界があります。

(ちなみに風月さまは、こちらでも「風月ごん」のお名前で、別の心が「ほえええ」となる、素適な作品も掲載されています。そちらの方も、なにとぞ、ご照覧のほどを)

16本目のお話しをお届けします。

懲りずに「彼」分投入です（鹿馬）

しかも書き終えてから気が付けば、今回のお話し、あの方  
とあの人を除いて、全てオリキャラで展開しています（汗）

ARIAファンの方々、すいません。

それでも許していただけた、みな様の心に、ほんの一片の  
桜の花びらが見えていただければ、これに勝る幸せはありません。

それでは、しばらくの間、お付き合いください。

ちなみに私は「超ド級」の愛煙家です（大鹿馬）

【 みんな素適なバツジエーオね 】

ネオ・ヴェネツア運輸局々長。      アドルフ・H・ガーラン  
ドの朝は早い。

6時、起床。

そのまま軽くストレッチの後、散歩を兼ねて1ブロックを  
ジョギングする。

「おはようございます」  
顔見知りとなった近所の人達が声をかけてくる。

「おはようございます」  
開店準備に忙しい、店員達も声をかけてくる。

「お早うございます」  
早朝練習中らしいウンディーネ達も、ゴンドラの上から声  
をかけてくる。

「うむ。みな、お早う、なのである」  
そんな人々に答えながら、アドルフは走る。  
三十分かけて一回りすると部屋にもどり、シャワーを浴び  
て朝食へ。

菜食主義者のアドルフの朝食は、質素なものだ。



野菜のサラダにポテト。それにライ麦のパン。  
それを六種の新聞を読みながら、紅茶で食する。

そして7時30分。

後片付けを済ましてから家を出て、庁舎へと向かう。

掃除や洗濯は、契約しているメンテナンス会社から派遣が  
来て、すませてくれるのだ。

つまり -

ネオ・ヴェネツア運輸局々長。 アドルフ・H・ガーラン  
ド氏は、パリパリの「独身者」なのである。

第16話 「Una persona ostina  
ta & Fanciulla differro」

庁舎までの道のりを、ゆっくりと歩いて行く。

本来なら彼クラスの役職ともなれば、行き帰りには専属の  
ゴンドラ（姫屋、もしくはオレンジ・ぷらねっとの）が付くのだが、  
最近、アドルフは、それを断っていた。

経費削減。

健康管理。

癒着禁止。

言い訳はいくらもあった。  
けれどその本当の理由は -

移りゆくこの街の景色を眺めながら、のんびりと歩きたか  
った - からだ。

- 私達は、このAQUAの不自由さが、とても愛しいんで  
す。

ふとアドルフの脳裏に、そう叫んだピンクの髪のウンディ  
ーネの言葉が甦る。 ふふふ  
苦笑ともとれる小さな微笑みを浮かべ、アドルフはゆっく  
りと歩を進めた。

8時 -

執務室着。

今日もアドルフが一番の登庁だった。

「上司たる者。誰よりも先に来て、仕事の用意を始めねば  
ならない。それが給料分の仕事。」と、言うものである。

とは、問われて答えたアドルフの台詞。

「責任」「信条」とか言わないあたりが、アドルフのウイ  
ットなのだが、おかげで「重役出勤」なる言葉は、ここ運輸局にお  
いて

死語となりつつあった。

もつともアドルフはその事を自ら実践するものの、それを部下に強制的に押し付けたことは一度もなかったのだが。

執務室に入ったアドルフは、おもむろに全ての窓を開け放つと、机の中から小さな箱を取り出した。

それは「ヒュミドル」と呼ばれる、特別な箱だった。

表面にはなぜか、手に斧と拳銃を持った、某・鼠の絵が描かれている。

ゆっくりと蓋を開ける。独特な匂いが立ち込める。

その箱の中から取り出した物。それは葉巻たばこだった。

アドルフが自ら「我が懺戒の悪癖」と呼ぶそれは、マンホーム、キューバ産。プレミアム・シガー。

それも職人が一本一本、手巻きで作る、ハンドメイド・シガーと呼ばれる最高級品だった。

片方の先端を、ナイフで切り落とす。俗に「フラットカット」と呼ばれる切り方だ。

マッチを取り出し、火をつける。

まず一本目で、カットしなかった方を全体にあぶる。

続いて二本目で、葉巻を回転させながら点火する。

このとき、間違っても紙巻たばこのように吸い込んだりしてはいけない。

そんなことをすれば、燃え方に偏りができて、風味や味が落ちてしまうからだ。

充分、先端が燃えたことを確認して、そこで初めて、ゆっ

くりと吸い込む。

至福の時。

もちろん、執務室はおろか、庁舎内すべてが禁煙なのだが、この一本だけはアドルフは止められなかった。

実際、朝一番に登庁する、これはその理由の一部だったりするのだ。

もちろん。

この一本以外は、退庁まで葉巻を吸うことはない。だが、この一本を吸うか吸わないかで、その日の作業効率<sub>が</sub>まるで違うのだ。

「お父さん、行ってらっしゃい」

開け放した窓の下から、可愛い声が聞こえてくる。

まなむすめ  
愛娘のゴンドラに送られて、副局長のアントノフが登庁して来たのだ。

オリエーク・P・アントノフ。

陽気で明るい、典型的なネオ・ヴェネツア人。

就任以来、アドルフを支えてくれる有能な部下。そして

大切な友人。

「はあーい。アリーチェがそう言うなら、お父さん、頑張つてきちゃうぞお！」

「お父さん。恥ずかしいから止めて」

「うわあああん！ 茜さん、娘が冷たいんですう！！！」

「泣いてる！ ってか私は、バツジエーオだ」

「うわあああん！ 茜さんまで冷たい！！」

「はあ…毎日毎朝。彼等はいったい何をやっているの  
であ  
るかなあ……………」

『いつものように』泣き叫ぶアントノフの声を聞きながら、  
アドルフは小さなタメ息をついた。

最後の一服、葉巻を消す。

この時。灰を落としてつぶしたり、灰皿に葉巻を押し付  
けて消すのは厳禁だ。

葉巻、その独特の匂いが広がって、他人により不快感を与  
えてしまうのだ。

そつと臭い消し付き灰皿に葉巻を置く。

あとは自然消火を待つばかり。

大丈夫。彼女が来るまで、まだ15分もある。

9時。

・トントントン

と、ドアがノックされ、アントノフと、首席補佐官のアレ  
ックスサンドラ・フェスタ・パナーロがやって来る。

「お早うございます、アドルフ局長」

陽気に挨拶する、アントノフ。

「…………お早うございます。局長」

アントノフとは真逆な、抑揚のない、冷めた声で挨拶するアレックスサンドラ。

アレックスサンドラ・フェスタ・パナール。

中央大学を首席で卒業した才女。

若干、24歳にして運輸局の首席補佐官に昇進した秀才。

まるでモデルと見間違えるかのようなプロポーション。

その眼鏡の下に垣間見える氷の瞳は、何事も見逃さず、何事も見落とさない。

なかなかの美人なのに、その性格故か、浮いた話しのひとつも出ない。

別名「Fanciulla di ferro 鉄の処

女」

「いやあ、だいぶ寒くなりましたねえ。こりゃ、もうす

ぐ初雪ですかねえ」

「うむ。そうなればまた、ユキダマを作ってみたいもの

であるな」

「もちろんですよ。あれは、なかなか奥が深くてですね

え……………」

「吸いましたね」

「おっ

硬直するアドルフとアントノフに構わず、アレックスサンドラが言う。

「局長。また葉巻を吸いましたね」

その声は、まるで雪男でも出てきそうなブリザード系の凍れる魔法の声であった。

「う、うむ。し、しかしだな、アレックスサンドラくん……」

「何度も言っているように、庁内全館が禁煙です」

「いや、確かに……だ、だが」

「禁煙です」

「……はい」

その冷たい瞳にアドルフは屈服する。

アレックスサンドラは畳み掛けるように言い放つ。

「ネオ・ヴェネツィア運輸局々長ともあろう方が、自ら規則を破るなど許されることはありません。」

たかが一本といえども、規則は規則。館内は絶対禁煙です。

何か間違っていますか？」

「い、いや、間違っていないのである……」

「理解していただけて幸いです。それでは今日のスケジュールを確認します。まず -

10時から各部々長とのミーティング。

12時から商工会議所のメンバーと昼食会。

アドルフ局長の食嗜好に合わせて、自家生産野菜で有名なお店を予約しています。

13時からゴンドラ協会との打ち合わせ。

15時から観光局との新規事業に対する会議。

16時には戻ってきていただいて、退庁時間の17時まで、全ての書類整理及び、決済を完了していただきます」

「う、うむ。なかなかハードな一日であるな。頑張るので

ある」

「ちなみに会議内容。予想進行速度。並びに局長の書類整理速度から想定すると、休憩時間はありません」

「そ、そうなのであるか？ ならもう少し量を減らして……」

「こちらで決裁できるものは、あらかじめ抜いてあります。これでも必要最小限です」

「いや。で、でも、あのトイレとかは……」

「その時になったら自己申告してください。30秒差し上げます」

「鬼かあ！ 貴様っ」

「私は現在考えられうる、全てのアクシデントを想定し、どうすればよりスムーズに進行するか考えています。

で。何かご質問でも？」

氷点下の瞳がアドルフを見下ろす。

「……ないのである」

アドルフが弱弱しく答える。

「それでは書類をお持ちします」

そう言うと、アレクサンドラは背中を向け、靴音も高らかに部屋を出て行った。

「局長……」

同情しますよ・と言わんばかりの顔で、アントノフがアドルフを見る。

「これぞまさしく、合理的・であるのかな？ かな？」



アドルフが眩く。  
冷たい風が吹き抜けてゆく。

10時 -

各部長とのミーティングは時間通りに終了した。  
問題点を整理し、過去のデータから、より効率的に改善  
を目指すにはどうしたら良いのか。

各部長とディスカッションを重ねてゆく。

資料は、全てアレックスサンドラが用意したものだ。

問題点も予め提議されていて、とても有効な資料だった。

彼女のおかげで、今日最初のメニューは、滞りなく終了し  
た。

12時 -

食事を兼ねた、非公式な会合。

腹の探り合いをしながら、腹を満たしてゆく。

ここでもアレックスサンドラの用意した資料は役立った。

相手が実は何を望み、どんな言葉を欲しがっているのか。

その資料を見るだけで、相手の心の内は、その全てが見通  
せていた。

どうとも取れる内容の言葉をアドルフは投げ与える。

だがそれは、相手にとって充分喜ぶべき言葉だった。

彼等は満足して帰っていった。

アドルフも充分、満足していた。

アレックスサンドラがセッティングしてくれたこの店の野菜

スープは絶品だった。

コンソメなぞ使わず、ただ自分の庭で取れた野菜だけで作られたスープ。

質素で素朴だが、それはアドルフの最も好む味だった。

・このお店は要チェックであるな。

アドルフは胸の中で呟いた。

ここまででは全てが順調に推移した。

全てがアレックスサンドラの計算通り。

しかし・

次のゴンドラ協会との会合で、その全てが無に帰した。

13時20分・ 定刻二十分遅れ

「すいません」

白い妖精が頭を下げた。

「あなたは何を考えているのであるか！」

知らず知らず、アドルフの声がかきつくくなる。

「ここを何処だと思っっているのであるか。 そんなことで

ゴンドラ協会の代表としての……」

「いやいや……局長。これは仕方ない」

アントノフの顔が歪む。

「あ、あ、あ……アドルフ局長。 こ、これはしょうがない

のでは……」

アレックスサンドラが、なぜか顔を真っ赤にしながら、噛みぎみに呟いた。

「何がしょうがないのであるか？ 大事な会合に遅れてきて、しかもこの有様はっ。」

貴殿には責任感が欠如しているのではないのであるか？  
だいたい、こんな所に……

つて、誰も聞いてないのであるー！！」

『スノーホワイト』 白き妖精。 アリシア・フローレンス。

「水の三大妖精」と呼ばれていた、元トッププリマ。数年前にARIA・カンパニーを「寿」退社した後、請われてゴンドラ協会の要職に就いた彼女は、

今後10年、100年先に続く水先案内業界の繁栄の礎を築くために、今日も忙しく動き回っていた。

そんな彼女の腕の中で。

小さな赤ん坊が静かな寝息を立てていた。

「すいません。いつも、この子を見てくださるベビーシッターの方が急病で……あいにく主人も仕事があつて……」

本当に、申し訳ありません」

「いえいえ、アリシアさん。そんなことはお構いなく。

この子がアリシアさんのお子さんですか？」

「わあ……寝てるう」

「かわいい！」

「素適だ」

「うん。アリシアさんに似て、まるで天使のようだ」

「いやーん。食べたいちゃいー!」

「あの……諸君」

「お名前はなんと?」

「アリアドネです」

「アリアドネ……とりわけて潔らかに聖い娘。ですね。」

マンホームに残る太古の神話のひとつで、クレタ王・ミノースと、その妃、パーシパエの娘。

ラビュリントス（迷宮）に入るテーセウスに毛玉を渡し、その糸を繰りつつ、ラビュリントスに入っていくことを教えた。

『アリアドネの糸』と呼ばれるエピソードの持ち主。

転じて、難問解決の手引き、方法を意味する言葉……」

「あらあら。さすがはアレクサンドラさんは、物知りです  
ね。うふふ」

「い、いえ。私は知っていることしか知りません。全て  
を知っているわけでは……」

「いや、だからであるなあ……」

「いやあ、アレクサンドラくんの博識ぶりには、いつも驚  
かせていますよ」

「アントノフ副局長……」

「ホントですねえ」

「いつも助かってます」

「頼りにしてます」

「いえ、あの私は……」

「あらあら、うふふ」

「いやいや、まったく。まったく。わははははっ」

「……誰か構ってくれねば、局長、そろそろ泣きだすんじゃないのかなあ……………」

盛り上がる一堂の前に、振り上げた拳の降ろし所を探しさ迷う、涙目のアドルフであった。

「以上がゴンドラ協会の提案する、今後のプランです」  
アリシアがよどみなく説明してゆく。

その姿はなんの迷いも躊躇もなく、実に堂々としたものだった。

眼鏡をかけ、白いスーツにロングスカート。ときおり束ねた長い金髪が揺れる。

それはまさに「惚れ惚れするような」立ち振る舞いだったけれど -

そわそわ

そわそわ

みんなの視線はアリシアではなく、その横の箆に釘付けだった。

誰もがもう一度、アリアドネの顔を見たくて、うずうずしていたのだ。

とりわけアレクサンドラは、さっきから落ち着かない。

いや、だからと言って……

「分かりました。（早口で）アリシアさんの説明は完璧で、これ以上の質問の必要性を感じません。」

これで今日のゴンドラ協会との会合は終了させていただきます」

「いや、ちょ、待つ。アレックスンドラ君。急になに仕切っているのである……」

「局長。まだ何かご質問が？」

アレックスンドラさん。

あなたの背中に吹雪の雪山が見えるのは、きっと我輩の見間違いなんであるよね？

なんか『ゴゴゴゴッ』言ってますけど。

「ないのである……」

アドルフは、ぐっと涙をこらえた。

「それでは今回のゴンドラ協会との会合は、これで閉会とします。

アリシアさん。今、お茶を入れますので、ゆっくりしていってください」

「ありがとうございます。……あっ」

「ふ……うあ」

籠の中から小さな声が聞こえた。

「起きたの？ アリアドネ……」

アリシアが優しく声をかける。

その聖母のような笑みに、籠の中からも清らかなる笑い声が響いた。

・わっ……！

と、ばかりに、みんなが籠を取り囲む。

誰もが笑みを浮かべ、まぶしそうに籠の中を見ていた。

『みんないつたい、どうしたと言うのだ……』  
アドルフは独り言ちる。

『なにがそんなに楽しいのであるか？

なにがそんなに嬉しいのであるか？

人は誰でも赤ん坊として生まれてくるのである。

みな誰でも一度は赤ん坊だったのである。

それを何を今更……やれやれ。である。

子煩悩なアントノフくんは仕方ないとして、いつもは冷静なアレックスアンドラくんまで、何をそんなに興奮しているのか？

まったく理解できません。

だいたい赤ん坊が可愛いのは、それを利用した生存術の一種で……」

そのまで。

「あらあら。いけない……」

「どうしました、アリシアさん」

「すみません。今日お届けするはずの書類を、協会に忘れてきてしまいました。どうしましょう」

「いや、そんなもの、また明日でよいのでは……」

「いえ、そうは言っても、今日中に、どうしてもお渡ししないといけないもので……」

「すみません。ちょっと取ってきます。アリアドネは

……」

「私が面倒をみるのである！」

部屋中から「は?」「ほ?」「へ?」の三和音が聞こえてくる。

アドルフは見た。

アドルフは見てしまった。

毎回派遣された先で事件に巻き込まれてしまう家政婦さんのように。

毎回行く先々で事件を目撃するルポ・ライターのように。

アドルフは見てしまったのだ。

まるで某・超伝導的対空兵器を打ち込まれた攻撃機のごとく。

まるで黄色や北欧神の名を冠したエース達に追い回される爆撃機のごとく。

なすすべもなく、アドルフ・H・ガーランドは一撃で墮とされた。

アリアドネ微笑に。

アリアドネの、天使のようなその微笑に。

「う、うむ。で、あるからしてアリシアくんが帰ってくるまで、この子は責任を持って我々が預かるのである」

「局長?」

アントノフがあきれたように言い。

「局長……」



アレックスサンドラが目を潤ませる。  
他の者はみな、キョトンとするばかり……

・しばらくの間、お願いします

そう言ってアリシアはゴンドラ協会へと向かう。

アドルフは書類整理をしながら、ときおり籠の中に視線を

向ける。

アリアドネは無垢に微笑んでいる。

その横ではさつきから、口元をうずうずさせながら、それでも冷静に書類を差し出すアレックスサンドラが。

穏やかな風が吹き抜けてゆく。

静かな波音が聞こえてくる。

何気に奇妙な風景だった。

何気に心温まる風景だった。

14時30時 -

だがそんな風景もぶち壊しになる。

「現地集合であるか？」

「はい。どうしても現地で説明したいと観光局が……」

「アリシアさんはまだ戻られないのであるか？」

「はい。もう少しかかるようです」

「……仕方ない」

「局長？」

「私はアリシア殿に、この子を預かると約束したのである」

「はあ……」

「で、あるからして」  
アドルフは憤然と言いつつ放った。

「このまま、アリアドネも一緒に連れていくのである!?!」

・なにその熱血。

アントノフが呆気に取られる。

15時 -

「わつ。なんですか、その赤ん坊!?!」

茜が叫んだ。

茜・アンテリーヴオ。

「MAG A」社、唯一のプリマ・ウンディーネにして責任者。

『バツジエーオ』の名を引き継ぐ女性。

夭折した先代、アロツコ・J・ルイ『バツジエーオ』

愚か者（『の名を引き継ぐ誇り高き女性。』

「にゃほ?」

アキラが不思議そうに一声鳴いた。

アキラ社長。「MAG A」社の社長猫。

茜に拾われ、アロツコに救われた黄色い瞳の社長猫。

そのアキラが、にゃほにゃほとアドルフの頭の上に登ってゆく。

途中「にゃほ」と片手をあげ、アリアドネとの挨拶も忘れない。

「にゃほお〜お」  
到着。

アドルフの頭の上にタレたアクイラ社長が、満足気なため息をつきながら寝そべった

「ねえ、お父さん。その子、もしかしてアドルフさんとアレッサンドラさんの子供？」

アリーチェが訊ねる。

アリーチェ・P・アントノフ。

「MAGA」社、唯一の社員。階級は見習いの「ペア」  
両手袋)

アントノフ副局長の愛娘。

小さいときからご近所さんで顔なじみの茜の元で、一人前のウンディーネになるために修行中。

バッジエオ。茜のことを心から尊敬し、敬愛する女の子。

後に「水の四大妖精」のひとりとなる女の子。

「な、な、な、な、な。何を言ってますか！」  
そんなアリーチェの問いかけに、なぜかアレッサンドラが顔を真っ赤にしながら叫ぶ。

「そんな訳はないのである。この子はアリシア・フローレンス嬢のお子さんで、アリアドネと言うのである。」

故あって、少しの間、預かっているのである

！」

断じてアレックスサンドラくんと私の子供ではないのである

アリアドネを胸に抱きながら、きっぱりと答えるアドルフ。  
その耳には・

「そこまで否定しなくても……」  
と、呟いたアレックスサンドラの声は届かない。

「で、約束通り此処にきましたが、いったい何の御用ですか？」  
バッジエーオが訊ねる。

「はい。実は今、観光局の方でこの桜を……アロッコさんの島を中心とした、アミューズメント・パーク設置の構想があります」  
「

一瞬にして冷静さを取り戻したアレックスサンドラが、眼鏡を光らせて返答する。

「うわっ。変わり身、早！！ お断りですね」

「うわっ。返事、早！ 茜さん？」

「この島は……アロッコさんのこの島は、このままで充分です。」

なんの手もいらさない。 なんの変化もいらさない。

「ここはこのままで、良いっ」

アレックスサンドラの突っ込みを無視して、バッジエーオが即答した。

「まあまあ。そう言わずに、よく考えてくださいいよお」

不意に背後から聞こえてきた、その言葉に。

その声に。

その言い回しに。

全員が硬直する。

「いやあ、お久しぶりですねえ」

彼　プロデューサーとのみ呼ばれる男は、にやけた笑いを浮かべ立っていた。

「茜さん!!」

突然、殴りかかろうとするバツジエーオを、アレックスサンドラが慌てて止める。

「離せ! このXX野郎! てめえつ。　この! 離せ!

」

「いけません、茜さん。暴力はいけません!」

「五月蠅い。離せ、離せよ、アレックスサンドラ!!」

「そうである、バツジエーオ。何事も力での解決はよくないのである」

アドルフが茜の前に立ち、静かに言った。

その腕の中で、アリアドネがじっと茜を見つめている。

「くっ……」

茜はアレックスサンドラの手を振り解くと、いまいましげにプロデューサーを睨みつけ、そっぽを向いた。

「おや、可愛い赤ちゃんですねえ。　局長さんのお子さん

ですか？」

おもねるように問いかける、プロデューサー。

「私は今も独身である。この子は少し預かっているだけである。で、貴殿は何故ここにいるのであるか？」

「いやあ、町おこしですよ」

「……どうゆう意味であるか？」

あえてアドルフは、プロデューサーではなく、その横に立つ観光局の職員達に訊ねた。

「あ、あの……こ、この方はマンホームを代表される有名なプロデューサーの方で……」

「ノンノンノン」

・ちゅちゅちゅ　と、人差し指を降りながら、プロデューサーは答える。

「僕はマンホームじゃなくて、宇宙を代表する名プロデューサーなのさ」

うざっ！

瞬間・みんなの心がひとつになった。

「それで？」

さらに無表情になったアドルフが職員達に先を促す。

「そ、それで、今回、町おこしの一環として、この島を……通称『バジエーオ』の小島を中心とした、

アミューズメント・パークの建設の計画を持ち込まれてきたのです」

「持ち込み……？」

「も、もちろん。まだまだ検討中の事案であり、なによりもこれはプロデューサー氏から持ち込まれた懸案でありますし、わ、我々としてもこれから更なる検討の必要を痛感している次第で……」

汗みどろで言い訳ともとれる発言を繰り返す、観光局職員達。

彼等もアドルフ達から発散される、危険な香りを敏感に感じ取っていたのだ。

「それですねえ。もう墓碑銘ってゆつか、キャッチコピーも考えてあるんですよ」

唯ひとり。空気を読めない男が鼻高々に言い放つ。

【 幸いなるバツジエーオ。ここ眠る。彼女の魂は桜とともに咲き、桜とともに散った。

けれど彼女の想いは、今でもこの島に。この桜に……】  
どうです？ グツとくるでしょう？ わははははは「

「バツジエーオは……アロツコ殿は、こんなことを喜ぶとはとても思えんのである」

アドルフが軋るような声で言う。  
だが、

「そんなこと、どうでもいいんですよ」

プロデューサーは事も無げに言い切った。

「どうしても……いい？」

「ええ。どうでもいいんです」

「……………」

「だって彼女、アロツコ…ですか？　は、死んじゃったんでしょ？　もう。」

はい。それで終わり。

彼女がどんな考えを持ち、どんな想いでいたか。　どんな気持ちでいたか。

そんなの関係ない。　意味がない。　問題ない。

だって、死んじゃったんですから」

「……………」

「人間死んだら、はい、それまでよ。

あとは土に帰るか、火に焼かれるか。　それともここでは海に還す。　ですかね。　あははは。

いずれにせよ、死んだらそれでお終い。　ジ・エンド

なにも残らず、なにも残せない。

なら、後はその事実を、状況を、シチュエーションとして生かし、我々が利用するだけ」

「貴様……………」

「それにサ。自分のおかげでこの街が発展するんですよ。

アロツコも本望ですよ。きつと。

こんな裏錆びれた陰気な島が、僕の手でネオ・ヴェネツアいち。　いえ。

AQUAいちの観光名所になるんです。　素適でしょ？」

「ならば、さっきの台詞はなんなのであるか？」

「は？」

「さっき、貴様が言った、アロツコ殿の魂が桜とともに…」



…とゆうやつである。

貴様は彼女の想いはここにあると言ったではないのか」

「だからあ……」

プロデューサーは物分りの悪い生徒に言い聞かせる教師のような口調で言った。

「そんなのは方便ですって。誰がそんなこと本気で信じますか。あははははは」

「ばあーん！」

小気味良い音が響く。

プロデューサーが、もんどりうってひっくり返った彼の顔面に、バッジエオの……茜の平手打ちが炸裂したのだ。

「にや、にやにおしゆるうう……」

くつきりと頬に残った茜の手形を両手で押さえつつ、プロデューサーが悲鳴を上げた。

「お前に……」

「ふえ？」

「お前にいつたい何が分かるって言うんだ!!」  
悪鬼のごとき形相で、茜が睨みつける。

「バッジエオを……アロッコさんをバカにするな!!」

だがその双眸からは、濁とばかりに涙があふれ、頬を濡らし続けていた。

「お前に何が分かるって言うんだ！  
お前にアロッコさんの何が分かるって言うんだ！  
お前にアロッコさんの想いの何が分かるって言うんだっ  
！」

茜は見る。

小さな島に悠然と立つ大きな桜の木を。

茜は思う。

自分の腕の中で息絶えた最愛の人を。

茜は感じる。

あのと時の愛しき人の想いを。

茜は聞こえる。

あの日、語りかけてくれた穏やかな風のささやきを。

「だから……」

茜は叫ぶ。

「だから……」

心の奥から叫ぶ。

「だから、アロッコさんはいなくなった訳じゃない！ア  
ロッコさんの想いはなくなった訳じゃない！

アロッコさんは……

アロツコさんはいつだって。今だって、ずっと私の中にいるんだ！

アロツコさんは私の中で、今でもずっと生き続けているんだー！」

「今度は止めないんですか？」

「はい。彼は叩かれることをしました。叩かれても当然のことをしました。」

ですから止めません。その必要を感じません」

アントノフの少し意地悪な質問に、アレックスサンドラはなんの感情も込めずに答えた。

その答えに、アントノフは満足気に頷く。

彼女の涙には気付かぬふりで……

「帰り給え」

「ほえ？」

「今すぐ、この街から出て行き給え」

静かに告げるアドルフ。

けれどその声色は、どこまでも暗く。どこまでも重く。どこまでも冷たかった。

「今すぐ、この星から立ち去り、そして二度と来るな」

・ぞっ

とばかりに茜が詰め寄る。

「ひっ」

腰を抜かしたまま、這うように逃げ出すプロデューサー。

あっちにぶつかり、こっちにぶつかりながら遠ざかって行

く。

- ぼてちっぼっちゃん！

あつ。 海に落ちた。

あつ。 ぶかぶかと流されて行く。

けれど最後のそのとき -

「お、覚えてるお！

この俺は死なない。死ぬはずがない！」

捨て台詞は忘れない。

「いいかつ。この俺様は。

何度でも甦って。何度でもこの街に来て。何度でも

プロデュースしてやるううッう！

バイバイキ - ぐべばああ！！」

あつ。 ヴアポレットに轢かれた。

あつ。 夕陽に向かって流されていく。

あつ。 とうとう、そのまま見えなくなった……まっいつ

か。

「バッジエーオ！」

アリーチェが茜にしがみついた。

もう大丈夫です。

もう終わったんです。

もう誰もあなたを傷つけません。

もう誰もアロツコさんを貶めません。

そう告げるかのように。

「ありがとう、アリーチェ……」

茜……バツジエーオは、ふう……と、ひとつ深呼吸をすると、しがみつくアリーチェの髪を優しくなでた。

「もう大丈夫だ。ありがとう。アリーチェ。また助

けてもらったな……」

「バツジエーオ……お姉ちゃん……」

今度はアリーチェが泣き出す番だった。

【 幸いなるバツジエーオ。ここ眠る。彼女の魂は桜とともに咲き、桜とともに散った。彼女の魂は桜と

けれど彼女の想いは、今でもこの島に。この桜に……】

- 死んでいった者にいつも、言葉だけは美しいけれど……

アレッサンドラは見た。

アリアドネを抱きかかえながら、小さく上下するアドルフ

の肩を。

アレッサンドラは聞いた。

アクイラ社長を頭にタレさせながら、小さく響くアドルフ

の嗚咽を。

我々はいつもそうだ。

いつも後悔ばかりする。

いつも悔やんでばかりだ。

いつも間違った道を選ぶ。

これほど失敗から学ばない生物も珍しい。

我々は……いや私は、いったい、どれほどの愚か者なのであろう。

「たあーい」

そんなアドルフの額に、何かが優しく触れた。

アリアドネだ。アリアドネがその小さき手で、まるで「

いい子」をするように

アドルフの頭を優しくなでているのだ。

「にやふうう」

アクイラ社長も、そっとアドルフの頭にすりすりする。

「アリアドネ……アクイラ社長」

顔を上げるアドルフの前を、一片の桜の花びらが飛び去っ

た。

はっ……とするアドルフの耳に、みんなの歓声が響いた。

「うわっ。桜が！」

「これは……いったい」

「きれい……」

「これがアロッコさんの桜かあ」  
「アロッコさん。 バッジエーオ……」

見上げれば。

あの小島の桜がいつせいに花を咲かせていた。  
すでに秋は過ぎ去り、季節は初冬にはいるうとする時期な

のに。

咲いたそばから散りゆく桜の花びら。

それはどこまでも美しく、どこまでも儂くて……

突然、アドルフは気が付いた。

アロッコの島。

バッジエーオの小島。

その島に不釣り合いなほどの枝を広げた桜の木。

その枝に。

その桜の枝に腰かけ、こちらを見ているアロッコに。

優しいな微笑を浮かべながら、静かに自分を見つめている

アロッコの姿に。

その横では、大きな黒い猫が 手に持った籠の中から、何かをさかんに飛ばしている。

透き通った彼女の体を、桜の花びらが舞い踊ってゆく。  
風が、アロッコの髪を静かに揺らしていた。

【 ありがとう 】

「なに？」

アドルフの頭の中に、あの懐かしい声が甦る。

【 ありがとうございます、アドルフさん。 私、とても  
幸せです 】

笑みを浮かべ語りかけてくる、アロツコ。

「アロツコ殿……」

【 やっぱりあなたも、この街を……このAQUAを愛す  
る、素適で優しいバツジエーオですね。ふふふ 】

「私は……私はあなたにそう言ってもらえる資格があるの  
であろうか？」

【 アドルフさん？ 】

「私は、私はあなたに許しを得ることができたのであり  
か……」

【 ……………… 】

アロツコは何も答えず、ただ無言で黒い猫を見やる。  
黒い猫はまた、籠に入った灰を撒き始める。

瞬間。 花びらがまるで競うかのように咲き乱れた。

灰を撒き、桜に包まれる猫の王。

その姿はまるで『 花神 』 - 花咲か爺さんのようで……



満開の桜。  
散りゆく桜。

その桜を見ながら、アドルフは泣いた。

アリアドネを抱きしめたまま、アキラ社長をタレさせた  
まま、アドルフは静かに泣いた。

そつと誰かが背後から抱きしめてくれる。

それはまるで許しを得たように。

それはまるで想いを伝えるかのように。

暖かな温もりが伝わってくる。

桜の枝に腰掛けながら、アロツコは、いつまでもそんなア  
ドルフを優しい瞳で見つめていた。

アキラが嬉しそうに鳴いた。

アリアドネが大きな声で笑った。

桜の花びらが踊るように舞い散っていた。

アドルフを包み込んでいた。

\*\*\*\*\*

数日後 -

「おや、今日はひとりなのであるのかな？」

机の上いっぱい、赤ちゃん用の玩具を並べながらアドルフが言った。

「局長。今朝の禁煙は無駄になりましたね」

アレックスサンドラがやはり氷の声で言い放った。

けれど背中に隠した彼女の手の中には、何故かガラガラが握られていた。

アントノフをはじめ他の局員達も、あわてて手に持ったオモチャを隠す。

「あらあらあら……」

アリシアが困ったように微笑んだ。

「お父さん。お疲れ様」

やがて退庁時間。 迎えに来たアリーチェが父親に大きく手を振る。

「やあ、アリーチェ。 今朝ぶり。 相変わらず綺麗だね」

「お父さん。恥ずかしいから止めて」  
「うわああああん。茜さん。娘が冷たい！」  
「うっさい。泣いてる！つか私はバツジエーオだ！！」  
「うわああああん。茜さんまで冷たい！！」  
見慣れた光景が繰り広げられる。

「ねえ。お父さん」

「なんだいアリーチェ」

「アレックスンドラさんってば、アドルフさんのことが好き

なの？」

「……………分かる？」

「うん。普段の態度を見てれば誰だつて……………」

「そうだねえ。やっぱりみんな気付くよねえ……………」

「うん。もちろん」

「でもね、アリーチェ」

「なに？ お父さん」

「アレックスンドラくんは、みんながそれに気付いてないと  
思ってるんだ」

「えっ？ そうなの？ あんなにバレバレなのに……………」

「そうなんだけどねえ……………彼女は天然さんだからねえ」

「アドルフさんだって、アレックスンドラさんのコト好きな  
んでしょ？」

「うん。本人は気付いてないようだけど、局長が弱くなる

は、彼女の前だけなんだよ」

「そうなんだ」

「なにしろ……………」

「うん？」

「なにしろ、ふたりは真っ白なスケッチブックのように、  
純粹な人だからねえ」

「真っ白なスケッチブック……お父さんってば詩人みたい  
だね」

「おおっ、アリーチェ。我が最愛なる愛しき娘よおお。

いつかお前も知る日が来るのだよお！ お父さんは相手は決して許  
さないけど……」

「お父さん、恥ずかしいから止めて！」

「うわああああん。茜さん。娘が冷たいんです！」

「……………」

「茜くん？」

「お姉ちゃん？」

いつもの掛け合いに、茜は参加しなかった。  
ただ黙って一点を見つめている。

「バッジエーオ。どうしたんですか？」

その問いかけに無言でふたりの背後を指を差す、バッジエ  
ーオ。

何事か - と振り向くふたりの、その視線の先には……

「!?!?」

玄関の扉の影から顔だけのぞかせ、こちらを睨むアレッサ  
ンドラの姿がっつ。

・ぼろり

「!?!?!?」



「今、アレックスサンドラくとすれ違ったのであるが、彼女  
どうかしたのであるか？」

「局長さん。アレックスサンドラさん、何か言っていましたか  
？」

「私のことはアドルフで良いのである。アリーチェくん。

……いや、特になにも」

「何もなかったのぉ!？」

「うむ。私の前で立ち止まると、真っ赤な顔で、ただ口  
をばくばくさせるのみ。」

それから、また泣きながら何処かへ走り去っていったの  
である。

……いったい、何があったのであるか？」

「えと……アドルフさんは彼女を追わなかったんですか？」

「バツジエーオ。私が？ いや」

「つか、追いかけるよ!」

「は？ いや、しかし……」

「しかし?」

「退庁時間であるからして……」

「……お父さん」

「ああ、アリーチェ……」

「ダメだ、こりゃ」

げんなりとした声で、三人が大きなため息をつく。

「にやぶ!」

いつの間にかアドルフの頭の上にタレたアクイラ社長が、  
ひと声叫んだ。

「アクイラ社長？ はい。その通りですね。アドルフさ

んっ

「な、何かな、アリーチェくん」

「今すぐ、アレックスサンドラさんを追いかけて!!」

「は？」

「今すぐ、アレックスサンドラさんを追いかけて捕まえてください!!」

「ハア？」

「いやあ、彼女何かプライベートなことで悩みがあるみたいで……ホラ、前に行ったあの野菜の美味しい店。」

これからそこで食事をしながら、彼女の話聞いてあげてくださいよ」

「アントノフ君。君はいつたい何を言っているのか？ そんなプライベートなことは私に相談するより……」

「だあああああ！ いいからさっさと追いかけて来い！」

「あ、茜くん。いつたい何を……」

「私はバツジエーオだつ。いいからさっさと行きやがれ!!」

その剣幕に気圧されるように、尻を蹴り飛ばされたかのように、戸惑いながらも走り出すアドルフ。

その後姿を見送って、三人は同じ思いを胸の抱く。

「この『Una persona ostinata』  
(朴念仁) 『め!!』 -と。」

その夜。

頭の上に子猫をタレさせた男と、顔を真つ赤に染めながら  
食事を楽しむ美女。

そんな不思議なカップルがネオ・ヴェネツィア某所で見ら  
れたと言う。

そして -

【 みんな素適なバツジエーオね うふふふ 】

そんなこの街の人々を、鳥の名前を冠する透き通った女性  
が、桜の木の枝に腰掛けながら、いつまでも楽しげに見つめていた。



l a n c i u l l a d i f f e r r o  
l a f i n e

Una persona ostinata & F

(朴念仁と鉄の処女)

桜が舞う。

葉巻たばこのくだりは、Wikiを参照しました。

私も年、2・3本を吸う程度なので非常に勉強になりました

た（鹿馬）　そして・

私信陳謝

この愚にもつかないお話を、先日無事、初めての子を出産した義妹に。

そして元気よく生まれてきてくれたS O君に。

君の未来に「幸、多かれ！」　と願いながら。

U n s o f f i t t o i g n o t o (前書き)

晃ファンの方々。そして、蒼羽ファン（いるなら）の方々。  
すいません。

できれば生暖かい目で見逃していただければ、幸いです（鹿馬）  
それではしばらくの間のお付き合い、よろしく願います。

「見知らぬ天井だ

彼女はゆっくりと目覚めた。

え？ 転生？

第19話「 U n s o f f i t t o i g n o t o

「

ボウっ - とした頭で考える。

ここは何処だ。

なぜ私はここに居る。

ゆっくりと、あたりを見回す。

小さな部屋だ。

寮にある自分の部屋と同じくらい。もしくはもう少し狭いくらいの。

窓辺に置かれた、今、自分が寝転んでいるベッド。

その他には、小さなテーブルがひとつ。椅子がふたつ。

奥の方にはおそらくトイレやバスにつながるであろう小さな通路。

壁際には本棚が……なんじゃこりゃ。

彼女は驚く。

その本棚の数に。その本の量に。

所狭しと置かれた本棚には、ぎっしりと本が並べられている。

もっと良く見てみよう。

そう思って、ゆっくりと上半身を起こす。

・ペロリ

と、掛けていた布団が落ちる。

見下ろせば、豊満なちよっと自慢な自分の胸が見えた。

そこで初めて気が付く。

自分が一糸纏わぬ姿でいることに。

もちろん、最後の一枚まで……はいていない。

……

……

「ここは何処だあああああああ!!」

布団をあわてて体に巻きつけながら、晃・E・フェラーリ  
イは絶叫した。

\*\*\*\*\*

ボウっ - とした頭で考える。

ここは何処だ。

なぜ私はここに居る。

ゆっくりと、あたりを見回す。

窓から少し強めの木漏れ陽が部屋の中に降り注いでいる。  
優しい風が白いカーテンを揺らしている。

自分の部屋ではない。

寮の自分の部屋より、はるかに広くて大きい。 なにより

明るい。

ゆっくりと頭（うづ）を巡らす。

頭の上。 ベッドの上には大きなプロペラが回っている。

でかい扇風機だ。

視線を飛ばす。

寝室とダイニングが、そのまま一体化している。

どっしりと落ち着いたテーブル。 ゆったりとしたソファ

が三つ。

白いカーペットは、ふかふかで、そのまま寝転がっても気持ち良さそうだ。

あとはクローゼット。 食器棚。 本棚。

そのどれひとつとっても、センスのいい、ちょっと値が張る高級品ばかりだ。

-なにこれ？　どんな金持ち？

その時。　彼女は自分が何かを抱きしめていることに気が付いた。

何か、やわらかくて暖かいものを抱きしめている。足までからませて。

ゆっくりと視線を戻し、自分がしがみついているものを見る。

そして -

「ここは何処だあああああああああああああ！」「男をベッドから蹴り落としながら、蒼羽・R・モチヅキは絶叫した。

【 SIDE・晃 】

ずりずりずり - と。

体に巻きつけた布団を引きずりながら、晃はベッドから降りた。

- ないないないないっ

四葉のクローバーではない。  
自分の服が……ない。

ウンディーネの制服はおるか、下着類までなにもない。  
ベッドの下まで覗き込んで見る。  
けれど、やはりない。

ふと思いついて、ダンス箆笥を探る。

誰のものとも知れぬ箆笥を探るのは気が引けたが、背に腹は変えられない。

男性用の下着が出てきた。

顔を真っ赤にしながら、晃は素早く下着をダンスに押し戻す。

どうやらこの部屋の持ち主は男性らしい。  
そうなれば、なおさらここには居られない。

違う引き出しも開けてみる。

だが出てくる服は、そのどれもこれも小さい。  
とても晃が切れるようなサイズではない。無理すれば着れないことはないだろうが……

悲しいくらいに「つんつるてん」であろう。

- なんだなんだなんだ。ここに住んでいるのは子供か？

ウロウロ・ウロウロ

部屋中を歩きまわる。

バスルーム。その脇の洗濯機。



蓋を開ける。 ない。  
やはり中には何も無い。

洗面所。 歯ブラシが二本。 下に置かれている籠の中も  
見る。

やっぱり、ない。

ウロウロ・ウロウロ

ふと、窓を見やる。

窓の外に広がるは海。 見慣れた海。

どうやらここは、ネオ・ヴェネツィア市内ではあるようだ。

「はあ………」

晃はタメ息をつきながら、ベッドに腰掛けた。

改めて布団を体に巻きつける。

そうして、ゆっくりと昨日のことを思い出してみる。

何があつて、何故、こんな状況に陥ったのか。

ゆっくりと思い出してみる……

【 SIDE・蒼羽 】

「う……あつあ。 おはよう、蒼羽………」

「おはよーじゃねええええ！」

寝ぼける男をもう一度、蹴り飛ばしながら、蒼羽は再び絶

叫した。

「な、なにすんだよ、蒼羽あ」  
一向にこたえてない様子で、ベッドの下で、ひっくり返りながら男が話しかける。

蒼羽は改めて、目の前の男をガン見した。

こいつの名前は、出雲新太<sup>いずもあらた</sup>

貿易会社「ウツチエロ・ミラグラトール」の主任業務担当

者。つか、社長。

難関で有名な中央大学を卒業したエリート。

分厚い体。分厚い顔。

けれど優しげな瞳。可愛い口髭。

ARIA・カンパニーのプリマ・ウンディーネ。水無灯

里ちゃんの恋人、出雲・暁の兄。

ヘタレな弟に振り回される、不幸な男。

人には優しく。とても頼りになる男。

社員や取引相手からの信頼も厚い男。

けれどその弟には拳でもってのみ語り合う、男の中の漢。

(作者注 - あくまで、蒼羽主観です)

今、その男がピンクなハート柄のパジャマを着、ご丁寧に  
も同じ色と柄のナイトキャップまでかぶって、目の前にあった。

対する蒼羽は、新太のものであるう、真っ白なカッターシ  
ヤツを一枚、ダブっと着ているのみ。

もちろん、下着類は何も身に付けていない。

「お、おま……お前、私に何をした!？」

新太を睨み付けながら、蒼羽は押し殺した声を出す。

「は？」

「だ、だから。お前、私に何かしたのか!？」

新太は少しポウつとした顔で蒼羽を見たあと、不意に悪魔のような笑みを浮かべて言い放った。

「もちろん。全部さ」

「!!!?」

絶句する蒼羽に畳み掛けるように、新太は言った。

「蒼羽のすべては、この俺が、いただいた」

・すべて……それはつまり……つまり……つまり……

ぐるぐるしだす思考の中で、蒼羽は必死に考える。  
必死に思い出す。

昨日、何があったのか。 何故、こんな状況に陥っているのか。

もう一度、新太を蹴り飛ばしながら、必死に思い出してみ  
る。

【 SIDE・晃 】

・そうだ。昨日は確か、営業が昼までで、次の日…つまり今日が休みだったので、午後、ひとり街にくりだして……

久しぶりに街の中を目的もなく、ぷらぷらとウィンド・ショッピングなどしながら歩きまわり。

ふと思いついてアリシアやアテナ、蒼羽に連絡してみる。

飲もう！

アリシアとアトラは捕まったものの、蒼羽とは連絡が取れなかった。残念。

「あらあら。じゃあ、仕事が終わったら行くわね。う

ふふ、楽しみ」

「はあーい。じゃあ、営業が終わったら行くねえ。え

へへ、楽しみ」

夜、待ち合わせの店に。

その途中、偶然出合った、灯里ちゃんとヘタレを引きずるよつに連れて行く。

互いの健康を祝して杯を掲げる。

酔ってアリシアに迫るヘタレを、灯里ちゃんと一緒にシバキ倒す。

そしてその時、初めて知らされた。

アリシアが母になるとゆつことを。

アリシアがその身に、新たな命を宿しているとゆつことを。

楽しい酒となった。

くそっ。どうりであんまり飲まなかったわけだ。  
私がアリシアに飲み勝つなんて。

その後は……問題のその後は……

アリシアとアテナを先に帰して……

自棄酒やけ酒気味に飲むヘタレと飲み比べをして……

当然のごとく、私が勝って……

つぶれたヘタレの介抱を灯里ちゃんに任せて……

私は帰ろうと店を出て……それから。それから。そ

れから……

駄目だ。さっぱり思いだせん。

ふらふらと歩いていた記憶はある。

- そうだ。

晃は不意に思い出す。

帰り道の途中で、誰かと出合った。

出合ったそいつに連れられて、歩いた記憶がかすかに……

ならば此処は、そいつの家？

私は「お持ち帰り」されたのか！？

- やばい！

晃は改めて部屋の中を歩きまわる。

そいつが何者かは思い出せないが、この部屋の住人には間  
違いないだろう。それも恐らく男。

そいつが帰ってくる前に。

そいつが戻ってくる前に。

なんととしてでも、此処から脱出しなければ！

そして晃は発見をする。

最悪の発見をしてしまう。

ふと見つけた黒いコート。

壁に吊るされた黒いコート。

それは「ノーム（地重管理人）」と呼ばれる人々がいつも着用している、黒いコート。

箆笥の中の、小さめの服。

本棚いっぱい詰り込まれた専門的な本の数々。

妙に小奇麗で心温まる部屋。

それは晃の知る、ある人物のことを真っ直ぐに示していた。

恐る恐るコートに手を伸ばす。

裏地を見る。

そこにはこのコートの所有者の名前が、はっきりと縫い付けられていた。

アルバート・ピット。

それは藍華の……自分が一番に可愛がっているウンディーネの彼氏の名前だった。

晃の顔から、音を立てて血の気が引いていった。

【SIDE・蒼羽】

・そうだ昨日は確か、ペア達への指導が昼までで、次の日…つまり今日が休みだったので、午後、ひとり街にくりだして……  
久しぶりに街の中を目的もなく、ぶらぶらとウィンド・ショッピングなどしながら歩きまわり。

夕方、営業を終えた、アトラや杏。

トラゲットを終えた、姫屋のあゆみくん。

そこにたまたま居合わせた、姫屋の藍華ちゃんや、その  
彼氏とも一緒に海鮮焼きの店で食事をして……

飲もう！

その後はどうなったんだっけ？

ものすごく楽しいお酒で。

まるでちよっとしたパーティのような騒ぎで。

それから…それから……

みんなと別れて、もう少し飲み足りなかった私は、ひとり二次会に突入して……

駄目だ。その後の記憶がない。

ぶらぶらと歩いてきた記憶はある。

そして気が付いたら今。

あるうことが、新太とベッドを共にし、しかも抱きついて寝ていたとはっ。

「で、よく眠れたかい」

新太が挽きたてのコーヒーを差し出しながら言う。

「いやあ、蒼羽とこうしてモーニング・コーヒーと一緒に飲めるとはなあ……」

いやらしい笑い顔で言う。

「き、昨日は何があった？」

消え入るような声で蒼羽は訪ねる。

「はっ？」

「だ、だから昨日、いったい何があったんだ！」

「お前、覚えてないのか？」

「……くっ」

絶句する蒼羽に新太は再び、悪魔の微笑みを浮かべながら語り出した。

「夜中、オイラが家に帰ってくると、お前が玄関で座り込んでてな。いい調子に酔っ払ってるじゃねえか」

「酔っ払って……」

「ああ。よっぽど楽しかったんだな。そのままオイラの家で二次会さ。覚えてないのか？」

「……」

「覚えてねえようだな」

「それから……」

「ん？」

「それからどうなった」

小さな声でささやくように訊ねる蒼羽。

「見ての通りさ」



新太は再び、悪魔的な微笑みを浮かべた。

「蒼羽とオイラは、ベッドを共にした。意味分かるよな

」?

蒼羽の顔から、音を立てて血の気が引いていった。

【 SIDE・晃 】

こうなれば仕方がない。

晃はもう一度、箆筭に向かうと、今度は遠慮の欠片もなく引き出しを開け始める。

シャツ。 パンツ。

とりあえず、それだけでいい。

ベッドの上でのたうち回りながら、パンツをはくが、なかなか太股を通らない。

- くそつ。 アルの奴、 もっと太りやがれ！

あお向けにベッドの上に寝転びながら、足を宙にバタつか  
ながら、なんとかパンツを腰に押し込もうと苦闘する晃。

あつちを向き、こつちを向き。

腰を浮かせながら、なんとかズリ上げる。

よしつ。

なんとか、はくことが出来た。 けれど -

腰まで届かない。チャックを上げることもしかない。  
足元はふくらはぎまで。

- こりゃ、どんなサブリーナ・パンツだよ

続いてシャツを羽織る。

羽織ろうとする。

届かない。ボタンがどうしても届かない。 胸の前のボ

タンがどうしても届かない。

- 嗚呼。自分のスタイルの良さが妬ましい。

勝手なことをほざく。

よしっ。

なんとか留められた。

けれど、ぱつつんぱつつんには変わらない。

ヘタに動けば、すぐにボタンが飛びそうだ。

しかもおへソも丸出した。

だがこれで、コートをパレオ風に腰に巻けば……なんとか  
なるかな？かな？

ゆっくりとドアに近付く。

急げばすぐに弾けそうだ。 いろいろと。

ドアノブに手を伸ばす。

- もう少し。もう少しで

ガチャリ -

突然、ドアノブが音をたてて回り扉が勢いよく開かれた。  
立ち竦む晃の目の前に、晃が誰よりも信頼し、大切にす  
るウンディーネの姿があった。

「藍華……」

「晃さん」

見る間に藍鼻の双眸から、濁とばかりに涙がこぼれ落ち始  
めた。

【 SIDE・蒼羽 】

こうなれば仕方ない。

酔った上とはいえ、新太の部屋に自ら行き。  
覚えていないとはいえ、一夜を共にした。  
当然、それは一線を越えたことで……

嫌ではない。

もちろん、嫌じゃない。

相手が新太であったなら。

でも - でも、でも、でも。

「幸せしてくれるんだろっな……」  
「はっ？」

蒼羽は覚悟を決めた。

「だから……お前は私を……」

間の抜けた声を出す新太を睨みつけながら、蒼羽は言葉を続ける。

きつちりさせなければ。

だから -

「だから、お前は私を幸せにしてくれるのかって聞いているんだっ」

新太は改めて蒼羽を見やる。

自分が渡したコーヒーのカップを両手でかかえ。  
自分のシャツを荒く着て。

うん。胸元が危ないぜ……

自分のベッドの上で、顔を真っ赤にして、こちらを睨むように見上げている蒼羽。

目にはうっすらと涙が光っている。

「嗚呼……」

新太は軋るような声を上げた。

「もちろん……」

手を伸べ彼女の頬に触れる。

「俺の……」

ゆっくりと顔が近付いてゆく。

「一生分かけて」

蒼羽が濁と涙を流しながら瞳を閉じた。

上を向く。

小さく開いた形の良い唇が近付く。

- もう少し。 もう少しで

ガチャリ -

突然、金属的な音がして扉が勢いよく開かれた。

固まるふたりの耳に、無駄に元気の良い大音声が響き渡っ

た。

「おはようアニキ。 また少しばかり金を貸してくれ！」

【 SIDE・晃 】

「晃さんっ」

「藍華っ？」

「おはようございます」

「おはようございます。晃さん」

「アル。あゆみ……」

突然抱きついてきた藍華に戸惑いながら、晃は彼女は背後を見やる。

そこには朝の柔らかな日差しを浴びながら立つ、一組の男女の姿があった。

ひとりは、あゆみ・K・ジャスミン。

同じ姫屋のシングル・ウンディーネ。トラゲットと呼ばれる「渡し舟」に心血を注ぐ男前なウンディーネ。

今は藍華のもとで、カンナーレジョ支店の副支店長を勤めている。

もうひとり。

アル。アルバート・ピット。

小柄な体型。優しい微笑み。藍華と暖かな想いを紡ぐ男。

この部屋の主。

そして、

私を「お持ち帰り」した男。

「あ、藍華。違うんだ。これは誤解で。なにかの間違いでっ」

「もう、晃さん。心配したんですよ」

「へ？」

晃は藍華を見下ろす。

藍華は涙をためた瞳で晃を見上げながら、口を尖らせる。

「灯里から聞きました。昨日はアリシアさん達と飲んでたんですって」

「あ……ああ……」

「その後。行方不明になったって灯里は言うし」

「う……おお……」

「結局、無断外泊しちゃうし……ホントに。本当に心配してたんですよ」

「藍華……」

「今朝、アルさんから連絡があったときは、びっくりしました」

あゆみが笑いながら言う。

「昨日、酔っ払ってふらふら歩く晃さんを回収したって」

「回収……」

「はい。道の真ん中で座り込んでる晃さんを見たときは、本当に驚きましたよ」

アルも微笑みながら言う。

「きつととても嬉しいことがあったんですね。とても楽しそうに酔ってらっしゃいました」

「酔って……」

「それでもう夜も遅かったので、遠くの姫屋よりも僕の部屋で飲もうと誘われまして」

「誘った。私が？」

「はい。あいにくと藍華とも連絡が取れず、仕方なく僕の部屋にお連れすると、晃さんは、そのままベッドに直行されて……」

「ちょ、ちょっと待て」

「はい？」

「私は自分からお前のベッドに入ったのか？」

「はい」

アルは少し困ったような表情を浮かべた。

「その…いきなり服を脱ぎだすと、そのままベッドに寝転がって寝息を立て始めて……」

「わ、私の服は？」

「お酒と埃で少し汚れていたので、クリーニングに出しておきました。はい、これです」

紙袋を差し出すアル。

のぞき込むとそこには確かに、自分の制服が入っていた。

「な、なあ、アル」

「はい？」

「その…わ。私のし…下着は？」

「ああ。それも一緒にクリーニングに出しておきました。

中に入っていますよ」

「……………」

晃はもう一度、マジマジとアルの顔を見る。

それからようやく気が付いた。

「こいつ、藍華以外は眼中にない！」

いくら私が裸になろうが、ベッドの上で寝てようが。いくら私の服や下着が脱ぎ散らかしていようが。



そんなモノは、こいつには……アルにとっては、なんの価値もないものなのだ。

・はあっ

「アル。すまなかつたなあ。迷惑をかけた」

タメ息を付きながら、アルに謝罪する晃。

「いえいえ。お気になさらず。晃さんが良く眠れたなら十全です」

「すまない。それはそうと、お前は昨日どうしたんだ？」

「僕は外の天文台で星を眺めながら休ませてもらいました。星空の中で眠るのは、なかなかオツなものなんですよ」

そう言っつて屈託のない笑みを浮かべるアル。

「そうか。悪いな。藍華やあゆみも心配をかけたな」

一部意味不明な台詞（天文台とか）があったが、とりあえず大丈夫なようだ。いろいろと。

「もうホント。少しはお酒、控えてくださいね」

ようやく体を離しながら藍華が言う。

「今度、アルくんを煩わせるようなことがあったら、本気で怒りますよ」

・そこか！

「ごめん。ごめん。藍華。ちゃんと反省する。もう二度と

アルやお前達に迷惑はかけないさ」

「本当かしら……」

ちよっぴり怒りつつも安堵の表情を見せる藍華。その向

こうではアルとあゆみが、さも可笑しそうに笑っている。

- やれやれ とんだ朝だったな

晃は照れたように笑い、頭を掻く。  
それが油断につながった。

- ぴしっ

突然、鋭い音と共にシャツの釦ボタンが跳んだ。  
弾けるように、晃の形の良い豊満なバストが飛び出す。

「うわっ」

「きやっ」

「わあっ」

藍華の顔が真っ赤になる。

アルの口がまん丸になる。

あゆみは手で顔を覆いながら、それでもしっかりと指と指の間からこちらを見ていた。

「すわっっ」

あわてて両手で己が胸を押さえる。

けれどその衝撃で、今度は腰にまいたパレオ代わりのマントがズリ落ちた。

おへソはおろか、腰、あるいはその先まで、まる見えだった。

「禁止！ 禁止！ 見るの禁止いっついー！」

「うわっ。藍華！ くっ…苦し…い…息があっ。む、胸っっえ」

「あははははっ」

とっさにアルの視線を塞ごうと抱きついた藍華に、顔を押しさえられ悶絶するアル。

その様子を見て、大笑いするあゆみ。

真っ赤になりながら再びベッドに飛び込む晃が、同じ言葉を呪詛のように繰り返す。

「もう酒はコチゴリだ。もう酒はコリゴリだ。もう酒はコリゴリだ」

朝日を浴びる小さな部屋に、楽しげな喧騒が響き渡った。

【 SIDE・蒼羽 】

「おはようアニキ。また少しばかり金を貸してくれ！」

「……わーっ」

「おはようございます。新太さん。……はひいっい

っ！」

「おはようございます。あの蒼羽ちゃん、こちらにお邪魔してませ……お邪魔でしたか？」

いましも触れ合いそうな、ふたりの唇が急停止する。体をピクリツと震わせて、ゆっくりと声の方を振り返

る蒼羽の目に、

大汗をかき立ち竦むヘタレと、両手で真つ赤な頬を抱きしめている、その恋人と、

優しげで、どこか意味ありげな微笑みを浮かべる、同僚の姿が飛び込んで来た。

「ヘタレ……灯里ちゃん…アテナ……」

奈落の奥底から響くような声で、蒼羽がささやいた。

「ち、ちがうんだアニキっ。俺様は……俺は何も知らなかつたんだ！」

・ゆらり

つと、新太が黙ったまま身を起す。

「ま、待ってくれアニキ。お、俺はもちろん祝福するぞ。もちろんさ。か、彼女を『お姉ちゃん』と呼んでも構わない！」

「あ、あの…おめでとうございます、蒼羽さん。お、お幸せに」

「うふふ。蒼羽ちゃん。とっても良かったわね。幸せ」

ゆつくりと三人に近付いて行く、新太。

「も、もちろん、お袋には俺からちゃんと伝えといてやる。そ、そんな、結婚前にやつちまったなんてことは決して……」

「あ、暁さん。それは……」  
「お赤飯炊いて、みんなでお祝いしなくちゃっ」

新太はヘタレの前で立ち止まり。

「そつだお祝いだ。お祝いしなければ」  
「そ、そつですよね。お目出度いことがあれば、お祝いしないと」

「そつよねえ。目出度いわぁ」

そしてゆっくりと弟の肩にその両手を乗せた。

「と、とりあえず、おめでとうアニキ」

「おめでとうこいざいます、新太さん」

「おめでとう。蒼羽ちゃん」

「こんのド阿呆おおおお!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!」

・ドギヤスツ!

怒号と共に、新太のパチキが炸裂した。

「がはっ……て、テメエつ。なにしやがゲフう!」

頭を抱えて悶絶する暁に追い討ちをかけるように、新太のドリル・轟天・パンチが炸裂する。

「あだだだだ。痛い痛い痛い!」

「あ、新太さん、新太さん。落ち着いて」

灯里があわてて止めに入る。

「わ、私達はお祝いを……………」

「あゝそんなに照れなくてもいいのに」

「死にさらせえええええええ! せっかくのチャンスをつ。」

お前等なあ!」

・ドゴバスズコバコ

「痛い痛い痛てえぞアニキ。俺はたんにお祝いとお袋への報告を」

「バカ野郎！ そんなこと言わなくていい！」

「そんなこと!？」

突然の蒼羽の声に、新太の動きが止まった。

「そんなことって…お前……」

見れば蒼羽はシャツ一枚の姿で立ち上がり、真っ赤な顔で新太を睨みつけていた。

「おま…お前にはそんなことでも……」

切れ長な目が新太を睨みつけ離さない。

「私…私にとっては……とても、とても大切な……」

その瞳から不意に大粒の涙がこぼれだす。

「大切な…大切な……お前は私を幸せにするって……」

・ぼろぼろぼろぼろ

涙が止め処なく、こぼれ落ちる。

「私のこと、一生かけて幸せにするって言ったじゃないか

号泣。

「蒼羽さん!」「蒼羽ちゃん!」

灯里とアテナがあわてて駆け寄る。

「新太さん！ 蒼羽さんをいぢめないでください！」  
もらい泣きしながら灯里が叫ぶ。

「社長さん。責任はちゃんと取ってくださいましね」  
普段とは全く違う、恐ろしげな声でアテナが言う。

「アニキ。女を泣かせちゃイカンなあ……がふっ！」  
「バカ野郎！」

再び弟に鉄拳を振るいながら、新太が叫んだ。

「なんにもなかったんだ！」

「……はひ？」

灯里が間抜けた声を上げる。

けれどそれは、その場にいた全員の声でもあった。

「なにもなかったんだよ！」

「あ……それはどうゆう……」

「どうゆうことも、D O Y O U K N O W ? も、そう  
ゆうこともあるか！」

新太が吼える。

「おめえ等が妄想してるようなことは、これっぽちもなっ  
かったんだ！」

顔を真っ赤にして吼える新太。 それは怒りか、それとも  
照れなのか。

「夕べ、蒼羽は俺ん家に入ると、そのまますぐベッドに直  
いきなり服も下着も脱ぎ捨てて真っ裸になってな！」  
行だ。

「………はえ？」

「このままじゃ風邪を引くって思ったから、強引に引きず

り起こして無理矢理、俺のシャツを着せたんだ。 大変だったんだぞ！」

「……………なんですと？」

「んで、俺様がソファで寝ようとする、今度はしがみついて離さねえ」

「……………おやおやお？」

「だからしょうがないから、そのまま抱き枕になってやってたんだ。 まあ気分は悪くなかったがな」

「あ、新太……………」

「なんでえ、蒼羽」

「じゃ、じゃあ。今朝、お前が言った、私の全てをいただいたって台詞は……………」

「ああ、全部いただいたよ」

新太は、ニヤリと笑った。

「蒼羽の寝顔と寝息と、柔らかな肌の感触を……………」

「…………… テメエ！」

・ゲシゲシゲシッ

翔ぶが如く新太の元に走りこんだ蒼羽の蹴りが炸裂する。

「おまつ。おまつ。お前とゆう奴わあああああああああああああ  
あああ！」

やっぱり顔を真っ赤に染め、涙を流しながら新太を蹴り続ける蒼羽。

「私は……………私はてつきり……………お前に……………お前と……………私の初めて……………」



「痛い。痛い。痛いぞ、蒼羽！」

「この、この、このオ！　じゃ、じゃあ、あの台詞はなんだ。なんだったんだ！」

「へ？」

「私を一生かけて幸せにするって台詞は……」

「そりゃ本当だ」

「ううっ」

不意に蒼羽の動きが止まる。

上げかけた足の健康的な太股が、白いシャツの裾から見えて、とてもセクスイ〜イ

「あの台詞だけは本当だ」

新太は立ち上がると、ゆっくりと蒼羽の顔を見た。

「あの台詞は……あの気持ちは本当だ。俺は…俺はお前を一生かけて……」

「新太……」

ゆっくりと近づく、ふたりの顔。

「灯里ちゃん。見ちゃダメ。あなたにはまだ早いわ！」

そう叫んだアテナの声は、ふたりを現実に戻す。

見れば、ヘタレな暁は腰をぬかしたまま、ふたりをガン見している。鼻血を流しながら。

灯里はアテナにふさがれた指を、なんとかこじ開けようとジタバタしている。

当のアテナは、ものすごく嬉しそうな笑みを浮かべ、ふたりに見せていた。

ふたりは顔を見合す。　　すぐ目の前に相手の顔があった。  
優しい新太の顔。

「！！」

蒼羽は新太を突き飛ばすと、ベッドに逃げ込んだ。

新太の下敷きになった暁が、潰れた蛙のような声をあげた。  
灯里がなんとかアテナを振りほどこうと大騒ぎしている。

そんな灯里を抱きしめながら、突然、アテナが『祝福の歌』  
を謳いだした。

頭から布団をかぶりながら、真っ赤になった蒼羽は同じ言  
葉を呪詛のように繰り返す。

「もう酒はコチゴリだ。　もう酒はコリゴリだ。　もう酒はコ  
リゴリだ」

朝日を浴びる大きな部屋に、　　楽しげな謳声が響き渡った。

\*\*\*\*\*

ネオ・ヴェネツアを俯瞰で見てよう。

大きな逆「S」字を書く運河、カナル・グランデが街の中央を流れている。

それ以外にも細かな水路が街の中を、縦横無尽に走り回っている。

そんな小さな流れのそのほとり。

カツレと呼ばれる小道を、今、ふたりのウンディーネが互いの存在に気付かず歩いてくる。

ふたりとも何故か奇妙に疲れた表情を浮かべ、とぼとぼと歩いて来る。

時刻はすでに夕暮れ。

茜色に染まった陽が、そんなふたりを優しく包んでいた。

曲がり角。

ふたりは、ばったりと顔を合わす。

偶然は必然。

見知った顔。いや、見慣れた顔 - と、いった方が正しい

か。

ふたりは同時に互いの名を呼び合う。

「やあ、晃」

「やあ、蒼羽」

それからふたりは同時に、深い深い夕メ息をつく。

「どうした、晃。元気ねえなあ」

「お前こそ、蒼羽。なんか疲れてないか？」

「ああ…実は今朝、いろいろあってな」

「お前もか…実は私も今朝、いろいろあってなあ……」

沈黙。

やがてふたりは、仲良く同時に叫んでいた。

「一杯、いくか？」

ふたりのウンディーネは、互いに肩を抱き合つと、夕闇迫る街の中へと消えていった。

楽しげな笑い声と、しっかりとした足音が、闇の中にも響いてた。

「 Un soffitto ignoto  
la fine

(見知らぬ天井)

- 見知らぬ天井だ

ふたりは同時に目を覚ます。

ゆっくりと覚醒する。

それから互いを見やる。

見知らぬベッドの上で、互いに抱き合いながら寝ている、  
相手の顔を見やる。

もちろん、ふたりとも一糸纏わぬ姿で……

「『ここは何処だあああああああああああああああ

あああああ……』」

晃と蒼羽は同時に絶叫した。。

「にゅ?」

「あれ。おふたりとも起きたみたいですよ」

「そうみたいだね。ちょうど朝ご飯の用意もできたから、呼んできてくれる？」

「分かりました」

「でも、びっくりだったねえ」

「はい。夜中、おふたりが急に訪ねて来られたときは、びっくりしました」

「にゅーにゅー」

「それも、いきなり私のベッドに飛び込んで仲良く寝ちゃうんですもの」

「ふふふ。それも服を脱ぎながら？」

「はい。もうどうしようかと……一応、お洗濯はしてあります」

「ありがとうございます。でも私の部屋に泊まってもらって悪かったね。ちゃんと眠れた？」

「あ。はい。大丈夫です。それはぐっすりと。それに……」

「……」  
「ん？」

「夜遅くまで、いろいろなお話しができて、とっても楽しかったです」

「ふふふ……」

「ほんと、素敵大発見！ って感じで」

「ぷいにゅーん」

「ねえ、知ってた？」

「なんですか」

「あのね。素敵なものは無限大なんだよ」

「素敵は無限大……」

「にゅっ」

「ねえ、灯里さん」

「なにアイちゃん」

「見知らぬ天井で寝るって、ドキドキしますね」

「……じゃあ、ときどき、ドキドキしに来る？」

「……はいっ。喜んで！」

「ふふふ」

「にゅんにゅん」

GWのジタバタの中で、PCがお亡くなりになりました(涙)

みなさま、お久しぶりです。

このお話しは「アリス」と聞けば誰でも思い浮かぶ、アノお話しです。

この機会に、改めて読み返してみたんですが、原作って結構「不条理」なんですねい(鹿馬)

そんな雰囲気のはんの少しでも感じていただければ、これに勝る幸せはありません。

それではしばらくの間、お付き合いください。

追記

「後書き」にちょっとした宣伝があります。よろしく願いします(大鹿馬)



こんにちは。アリス・キャロルです。

今日は私が体験した、でっかい不思議なお話しをします。

あれは桜の花の咲き咲き誇る春のことでした。

第20話 「Alice Carroll in Paese delle Meraviglie」

「アリスちゃん。ピクニックに行きましょう」

アテナ先輩がそう声をかけてくれました。

「ピクニックですか？ でも私はもう、プリマですけど」

私は素手の両手をアテナ先輩に示しました。

「ふふふ。アリスちゃん、天然？」

な、な、な、何を言い出すんでしょう、この人は！

ネオ・ヴェネツィア……いえ、AQUAいちのドジっ子さ

んが、何を言い出すんでしょう。

アテナ・グローリイ

「セイレーン・天上の謳声」の通り名を持つ、我がオレン

ジ・ぶらねっとのトップ・プリマ。

でもドジっ子。

とんでもないドジっ子。

「浮かれている時ほどおっちょこちょい」なドジっ子。  
私がいっつもフォローにまわるドジっ子。

「私は天然じゃありません！」

ぶつと頬を膨らませて抗議すると、アテナ先輩はとても嬉しそうな顔をして私を抱きしめます。

「本当にアリスちゃんは、かわいいわね。ふふふ」  
でも愛すべき先輩。

私の敬愛する、とても素敵な先輩。

「あのね。こないだアリシアちゃんに、とっても素敵な場所を教えてもらったの。」

ふたりで行ってみましょ？」

私の頭を撫で回しながらアテナ先輩は言いました。  
その結果。

私とアテナ先輩は今ここにいます。

「見て、見て。アリスちゃん。スゴいわあ」

「まあああああ！」

アテナ先輩と、まあ社長が嬉しげに声を上げます。  
私も思わず見とれてしまいました。

ここはネオ・ヴェネツィアから少し離れた島の中。  
もう使われなくなった電車の線路伝いに、少し歩いた丘の

上。

廃車となった電車の車両の奥に、大きく枝を広げる桜の木。  
その大きな桜が、満開の花を咲かせていました。

「アリスちゃん。こっちこっち」

アテナ先輩が電車の中から手招きします。

「お邪魔します……」

そう言つて、まあ社長を抱えながら、ちよつと恐々、中に入る私を、アテナ先輩が座席のひとつで待っていてくれます。

「ここではこうして桜を見るのが作法なの」

どんな作法ですか、それは!?

私がツッコみを入れる間もなく、アテナ先輩は座席の上に「えい」とばかりに寝転がりました。

「うわあ。アリスちゃん。とつても綺麗よあ」

私が戸惑っていると、アテナ先輩は優しく微笑みながら、座席を指差します。

もう、こんなところで寝転ぶなんて……えいつ。

ばふん。

うわあ。

空、一面の桜。

蒼い空に桜の花びらが透けて見えます。

下から見上げる桜の木は、また一段と凄さをまして……まるで  
るで

まるで桜色の空を眺めているよう……って

恥ずかしいセリフ禁止!!

なぜか藍華先輩の声が聞こえてくるようでした。

「素敵ねえ。来て良かった」

アテナ先輩がお弁当に持ってきた、手作りのピーチパイを

食べながら言いました。

私もパイを手に頷きます。

とゆうか、私はこんな美味しいパイを焼けるようになった  
アテナ先輩にも感動です。

「まああああ」

同じ気持ちだったのか、まあ社長も嬉しそうな声を上げな  
がら、パイを口にしてます。

「でつかい、美味しかったです  
お腹いっぱい。」

私は満ち足りた気持ちで、もう一度、座席に寝転がります。

「ああ、ダメよ、アリスちゃん！」

「は？ なにがダメなんですか？」

「食べてすぐに横になると……」

「牛になるって言うんですか？」

「ううん。食べ物が耳たぶについちゃうわよ」

「……………耳たぶ？ うさぎ……………？ 耳たぶ？」

心地よき風。

気持ちいい景色。

ぽかぽかとした陽光の光。

お腹はいっぱい。

そして小さく謳う、アテナ先輩の声。

セイレーン・天上の謳声が低く優しく響き渡ります。

そのあまりの心地良さに、私はついウトウトして……

【 時間がない！ 時間がない！ 】

突然の声に私が飛び起きると、そこには灯里先輩がいました。

水無 灯里先輩。

「アクアマリン 遙かなる蒼」の通り名を持つ、ARIA・カンパニーのプリマ・ウンディーネ。

笑顔がとても似合う、先輩。

他社の私にも優しく声をかけてくれた、素適な先輩。

その灯里先輩が、なぜか白いウサギの格好をして、なぜか二頭身な姿で走っていました。

.....

啞然とする私を尻目に、手に時計を持った灯里・シロウサギ先輩は「時間がない。時間がない」と呟きながら

桜の木の根元にある、小さな穴の中へと入って行きました。のぞいて見ます。

その穴は真っ暗で、どれだけの深さがあるのか、まったく分かりません。

灯里・シロウサギ先輩はこんな中に入って行って、大丈夫なんでしょっか？

ートンッ

と背中を押されました。

「!?!」

私は悲鳴を上げる暇もなく、穴の中に落ちてしまいました。落ちながら振り向けば、そこにはにっこりと笑うアテナ先輩の姿が。

「アテナ先輩に突き落とされた!?!」

「いったい何をしてくれるんですか?。このドジっ子さんわ

!?!」

「行ってらっしゃい。楽しんでね」

暗い穴の中に落ちながら、私はアテナ先輩の、そんな呟きを聞いたような気がしました。

\*

これって「不思議の国のアリス」ですよ。

この展開ってば「おとぎのアリス」(原題)ですよ。なぜ?

私の名前がアリスだから?

だとしたら、なんて安直な!?!」

暗い穴の中を落ちながら、私は割りと冷静に考えていました。

だとしたらこの後は、藁の上に落ちて、それから……

「ボスッ

ほらね。

やっぱり藁のベッドの上だった。そしたら次は……

私はゆっくりと藁から抜け出しました。

そこは小さな部屋で。

小柄な私（まだ成長過程なんです！）でも腰をかがめなければ立つてもいけません。

「時間がない。時間がない。女王様との会見時間に遅れてしまう」

目の前を灯里・シロウサギ先輩が走りぬけて行きます。

「あつ、灯里先輩！」

「そんな事になれば、打ち首になってしまう。ああ、時間がない、時間がない」

けれど灯里・シロウサギ先輩は、私の声を無視して、小さなドアから外に出て行ってしまいました。

私は這いつくばるように顔を下げて、その小さなドアから外を見ました。

そこは一面の白い薔薇畑で……

でもドアは小さすぎて、とても私では通れそうにありません。確か原作では……

「ほりゃ、これをお飲よみ」

声の方を見やると、そこには藍華先輩が居ました。

黒猫の格好をした、やっぱり二頭身な藍華・クロネコ先輩が。

藍華先輩。

藍華・S・グランチェスタ先輩。

水先案内業界いちの老舗「姫屋」の一人娘。

「ローゼン・クイーン 薔薇の女王」の通り名を持つ、ト  
ッププリマ。

姫屋・カンナレージョ支店の支店長。

灯里先輩共々、昔からお知り合いの、素敵なお友達。

……少し口が悪いことが難点ですが……

「ほら、後輩ちゃん。飲むによ？ 飲まないによ？ に  
やぶー!?」

そのあまりな可愛さに、私は思わず藍華・クロネコ先輩を  
抱きしめてしまいました。

「にやつ、にやつ、にやにすんにや！ はにやせつ。離す  
にや、後輩にやん!!」

「でつかい嫌でえす。きやああつ。藍華先輩、かわいい  
!」

「にやつ、にやつ、にやああああ!!」  
なぜかムズがる藍華・クロネコ先輩を抱きしめながら、私  
はそれから小一時間ほどモフモフしました。

「と、とにかく、このジュースをによめば、外に出られる  
にや……」

なぜかぐつたり（お髭もおれてます）している藍華・ク  
ロネコ先輩が、囁くように言いました。

「はい。でつかい、ありがとうございます。藍華先輩」  
私は机の上にあったピンを手に取ると、一気に飲み干しま  
した。

するとどうでしょう！  
見る間に私の体は縮んでいき、ついにはネズミほどの大き  
さになってしまいました。



これであるドアから出れます。

「藍華先輩、ありがとうございます……って、な、なんなんですか？」

私が礼を言おうと振り向けば、そこには何故か恐い目で私を見下ろす、藍華・クロネコ先輩の姿が……

「あ、藍華先輩？」

「にゅふふ……じゅる」

「じゅる？」

「後輩にゃん」

藍華・クロネコ先輩が、ゆらりと近づきます。

「こんにゃに、ちっちゃくにゃっちゃって……美味しそう」

「！？」

「にゃふふつふ。今まで散々可愛がってくれたお礼にゃ

……」

「お、お礼にゃ？」

「……にゃ。いただきにゃーす！！」

私は全速力で逃げ出しました。

「待てえ。逃げるにゃ。逃げるにゃ、後輩にゃん！

可愛がってあげりゅからあ！」

「でつかい遠慮しまーす！」

私は森の中を散々、逃げ回ります。

でもとうとう、崖の上に追い詰められてしまいました。

下を覗き込むと、そこには大きな池が広がっていました。

「追い詰めたにゃ」

「あ、藍華先輩。と、とりあえず落ち着いて」

「くつくつくつ。そこにや『涙の池』と言ってにや。いい  
くたの涙でできてるんにや……」

「涙の池……」

「にやははは……ではいただきまほあああああ!?!」  
落ちます。

また、落ちて行きます。

飛び掛ってきた藍華・クロネコ先輩を避けるために、私は  
自ら崖から飛び降りました。

下は池です。なんとかなるでしょう。

で、勢い余った藍華・クロネコ先輩も一緒に落下して……

ードッポーン!

派手な水しぶきが上がりました。

「にやにやにやあああああああああああああああ!」

藍華・クロネコ先輩が暴れています。

ああそつだ。確か猫は水が嫌いで……

「にやにやにやああ……ア、アルくうんん!」

溺れながら藍華・クロネコ先輩が叫びます。

「た、助けてえええ、アルくんん!」

そんなこと言っても、そう都合よくは……。「はい。藍華」  
………いました。

涙の池で溺れかける藍華・クロネコ先輩を助けたのは、や  
っぱりアルさんでした。

アルバート・ピットさん。

ノームと呼ばれる地重管理人のお仕事をされている男の人  
です。

一見、女性と見間違えそうな優しげなお顔。  
でも理知的な光が、その眼鏡の奥の瞳から輝いています。  
藍華先輩の想う人。 相思相愛の想い人。

「で、アルさん」

「なんですか、アリスさん。 がお」

「非常にお聞き苦しいのですが」

「なんなりと。 がお」

「……なんで狼なんですか？」

「がお……」

そこには藍華・クロネコ先輩を背負った、アル・ハイイロ  
オオカミさんが困った顔で立っていました。

「ええと、本当の不思議の国のアリスでは、この場面はド  
ードー鳥が出てくるハズなんですが

たぶん次のお話の都合で、こんなことになってるんだと  
思います。 がお」

ええと……

いくら「がおがお」言われても、ファイナルフュージョン  
じゃないんだし、全然、恐くありません。

それより、その優しげな顔を見ると、余計にその灰色な毛  
皮に、もふもふしたくなります。

でも背中から藍華・クロネコ先輩が、そんなことは絶対に  
許さん！

とばかりに、怖い顔で睨んできます。

「痛い、痛い。 藍華、そんなに爪立てないで。 がお」

「ふーっ。ふーっ。ふーっ」

藍華・クロネコ先輩。鼻息荒いです。

アル・ハイイロオオカミさんが困ったように笑っています。はい。本当におふたりは仲良しさんですね。

「それじゃあ服も乾いたみたいなんで、私は先に行きます。おふたりさんはいつまでも仲良く」

「は、恥ずかしいセリフ禁止いいいいいい！」

藍華・クロネコ先輩が顔を真っ赤にして叫びます。

「いたたたた。だから藍華、あんまり背中に爪立てないでください。がおがおっ」

アル・ハイイロオオカミさんが、やっぱり叫びます。

背中に爪を立てる……まあまあまあ。

私はおもわず、赤面してしまいました。

女の子って耳年増うづめ

\* \*

「そんなわけで、あの家から扇子と手袋を取ってきてほしいの」

灯里・シロウサギ先輩が言います。

「はあ……あの家から扇子と手袋を取ってくればいいんですか？」

藍華・クロネコ先輩と、アル・ハイイロオオカミさんと別れたあと、再び出会った灯里シロウサギ先輩に連れられて

やって来た小さなお家の前で、私は聞き返しました。

「うん。扇子と手袋がないと、女王様にはお会いできないの。お願いアリスちゃん」

「分かりました。でっかい待っていてください。ところで……」

私は扉に手をかけながら訊ねました。

「どうして灯里先輩は、ご自分で取りに入らないんですか？」

扉を開け、一歩中に。

「だって……」

もう一歩。

背中から、灯里・シロウサギ先輩が言います。

「だって、その中には、大っきなトカゲがいるんだもの」

どわっ

私は立ち竦んでしまいました。

部屋の真ん中。大きなテーブルがあります。

その上には例の扇子と手袋が。

そしてその向かい。

がっしりとした椅子に腰かけている、でっかい緑色の爬虫類が！

蒼羽・ミドリオオトカゲ教官でした。

蒼羽・R・モチヅキ教官。

我がオレンジ・ぷらねっとの指導教官。

お客様を乗せるゴンドラ・クルーズはしない代わりに、そのウンディーネを指導、教育するウンディーネ。

特に蒼羽教官は、その指導の正確さと厳しさではネオ・

ヴェネツィアいち！ と呼ばれる存在でした。

とても恐い教官。でもとても優しく頼れる教官。

「あんまりだ……」

その鬼教官が泣いてます。

「あんまりだ……なんで私がよりもよって、ミドリオオトカゲなんだ……」

「蒼羽教官……」

「私が爬虫類は苦手と知つての、嫌がらせか!?!」

蒼羽・ミドリオオトカゲ教官が身を震わせながら叫びます。

「くそっつ。こうなつたらアリス!」

「は、はい」

突然、矛先が私へと向きます。

「帰つたら特別メニューで、お前を指導してやる!」

「そんなつ。私とオオトカゲとは、でっかい関係ない……」

「うるへえ！ 問答無用!」

「ええええええええ!」

私は思わず大きな声で叫んでしまいました。  
すると――

・ポーンっ

とやたらと軽い音がして、蒼羽・ミドリオオトカゲ教官は暖炉を通つて煙突から、スっ飛んで行ってしまいました。

「次はせめてヒトガタにしてくれええええええつ」

蒼い空に蒼羽・オオトカゲ教官の叫び声が木霊し、消えてゆきました。

「ホント。素適な蒼い空だねえ」

灯里・シロウサギ先輩が、のんびりと呟きました。

\*\*\*

みなさんは「キツネノテブクロ」とゆう花をご存知でしょうか？

薄紫色の鈴なりになった釣鐘状の花を持つ、ゴマノハグサ科の植物。

あるいは「ジキタリス」とゆう名前の方が有名かもしれませんがん。

そう。薬草＝毒草です。

「魔女の指抜き」「血の付いた男の指」などと呼ばれていた地域もあったとか。

「おとぎのアリス」の中では「やまびと（妖精）のてぶくろ」とも書かれています。

で、なぜ私がそんなことを長々と語っているかとゆうとその花が根元にある大きな木の枝に、アリア・ちえしゃねご社長がとまっているからです。

「あ。アリア社長？」

「やあ、アリスちゃん」

「ぬわっ！ アリア社長がしゃべった！..！」

私は本当にびっくりしてしまいました。

アリア社長はARIA・カンパニーの社長猫さんです。  
猫が社長？　そうです。　ネオ・ヴェネツィアの水先案内  
業では、青い瞳の猫さんを

航海の安全と無事を祈る象徴として、一緒に暮らして（飼  
ってる訳では、でっかいありません！）います。

特にアリア社長をはじめとする火星猫さん達は、頭もよ  
く、人の言葉を理解することができるのです。

でもー

でも話すことはできません！　普通の火星猫さん達である  
ならー！

「どうした、アリスちゃん。何か聞きたいことがあったん  
じゃないのかい？」

アリア・ちえしゃねご社長は、西村ともみさんばりの良い  
お声で話します。

「え……えと。　では教えて欲しいんですけど……」  
私は心の動揺をなんとか押さえ込むと、改めてアリア・ち  
えしゃねご社長に訊ねました。

「いひひ。　僕に答えられることならね」

そう言うとアリア・ちえしゃねご社長は「にいい」と笑い  
ました。

それは普段のアリア社長からは、まったく想像もできない  
ような嫌らしい笑い顔です。

口なんか、耳元まで裂けてます。

「あの……私はこれから何処へ行けばいいのでしょうか」  
いつの間にか、灯里・シロウサギ先輩は何処かに行っ



まいりました。

私はひとりで、とぼとぼと道を歩いて来たのです。

「それならこの道をお行き」

アリア・ちえしゃねご社長は尻尾で一本の道をしめしました。

「そっちに行けば、ぼうし屋と三月うさぎが居るから、そこでもう一度訊ねてごらん」

そう言うと、アリア・ちえしゃねご社長は、笑い顔だけを残して、ゆっくりと消えてゆきました。

専門用語ではF.O。フェード・アウトと云うそうです。でもどうやって笑い顔だけを残せるのでしょうか？

\*\*\*

三月うさぎ。帽子屋さん。そして大ねずみ。

そして私の4人のお茶会は、いつまでも続いています。

「まああああ」

「にやぶ、にやぶ」

「……………」

「ぶひゃひゃひゃひゃ」

「まああああ」

「にやぶ、にやぶ」

「……………」

「ふひゃひゃひゃひゃひゃひゃ」

「まああああ」

「にゃふ、にゃふ」

「……………」

「ふひゃひゃひゃひゃひゃあ」

さつきからこの会話のくり返しです。

「まああああ」と、まあ・三月つさぎ社長が叫べば、

「にゃふ、にゃふ」と、アキラ・帽子屋さん社長が答え、

「……………」と、ヒメ・大ねずみ社長は居眠りを続け、

「ふひゃひゃひゃひゃあ」と、いつの間にか加わった、アリ

ア・ちえしゃねこ社長が笑います。

その間私は、ひとりで紅茶を飲み（いくら飲んでも減りません！）クッキーをボリボリと食べるだけ。

（だってお腹が空いたんですもの）

ちなみにー

まあ社長は我がオレンジ・ぶらねっとの社長猫。 私が街で見つけた子猫さん。

「まあ」と云う名前は、彼女（女の子なんです！）を抱き上げると、必ず「まあ〜」と鳴くからです。

で、そんな、まあ・三月つさぎ社長は、なぜか頭の上に麦わらで作ったリングを乗せています。

でっかい、謎です。

それから

さつきからずっと「ゴンドラ（舟）を漕いで」「いるのは、

姫屋のヒメ・大ねずみ社長。

藍華先輩の「姫屋」の社長猫さんです。

凜！ とした黒猫さんの地球猫さんです。

それが今は、ぼつてりと、ただひたすら眠ってばかり。

よだれ、たれてますよーお。

そんな気持ちよさげに眠る、ヒメ・大ねずみ（猫がネズミ

？）社長に

アクイラ社長が気持ちよさそうに寄っかかっています。

そのアクイラ・帽子屋さん社長。

「MAGA」社の社長猫さんです。

．．．．．ですが、アクイラ社長は本当の社長猫ではありません。

なぜならその瞳は蒼くないからです。綺麗な黄金色をし

ています。

それでもアクイラ社長は社長猫とみんなから認められてい

ます。

それは、あの人の。あの素晴らしき「愚か者」の想いを、みんなが理解しているから……

「にゃふ、にゃふ」

でも今のアクイラ・帽子屋さん社長はホントに「バッジエーオ」です。

サイズの合わない、ぶかぶかの大きな帽子をかぶり（帽子には10シリリング・6ペンスとゆう値札が張ってあります）

さかんに私に向かって叫び続けています。

「アリスちゃんは、髪の毛を切ったほうがいい！ だって

サ。ふひゃひゃひゃひゃひゃひゃあ」

アリア・ちえしゃねこ社長が、あの妙な笑い顔で通訳して

くれます。

どろぢらお話しできるのは、アリア・ちえしゃねご社長だ  
けのようです。

ちよっと安心ですね。

「にゃふ、にゃふ。にゃふ、にゃふ」

アキラ・帽子屋さん社長は鳴き続けます。

髪を切れですって？

でっかい大きなお世話です。

私の髪の毛のどこが長いとゆうのでしょ。

つか、ロングのどこが悪いとゆうのでしょ。

これでも自慢の髪なんですよ！！

それを何故切らないといけないんですか？

みなさんは、どう思いますか？

\*\*\*\*\*

ぷっかり

と、煙の輪が浮き上がります。

ぼわぼわ

白い白い煙の輪が、ゆっくりと風に乗って流れてゆきます。

「まあ、なんだな……」

晃さんが言いました。

ぷかぷか・ぽわぽわ

「これはないよな……………」

ぷっかり・ぽわぽわ

再び白い輪っかが浮き上がりました。

社長猫さんズ達との、いつ終わるとも分からないお茶会を  
抜け出した後、再び、とぼとぼと歩く私は

でっかいキノコの上に座り、煙を噴かしている晃さんに会  
いました。

晃さん。

晃・E・フェラーリさんは「クリムゾン・ローズ 真紅の  
薔薇」の通り名を持つ「姫屋」のプリマ・ウンディーネさんです。

いえ、ただのプリマではありません。

「ARIA・カンパニー」のアリシアさん。　ウチのアテ  
ナ先輩と共に「水の三大妖精」と呼ばれ、

全てのウンディーネ……………いえ、全ての人々から賞賛と憧れ  
の視線を贈られていた、素晴らしきウンディーネ。

アリシアさんが寿引退され「水の三大妖精」が自然解消さ  
れた後も、名実ともにトップ・プリマとして

このネオ・ヴェネツィアの水先案内業を牽引する、最高の  
プリマ。

その晃さんが大きなキノコの上に座って、ぽわっと煙を噴  
かせていました。

アオムシの格好で……………

「前回といい、今回といい」

ぷっかり・ぷっかり

「私と蒼羽の扱い、酷くね？」

輪っかになった、白い煙が流れて行きます。

ぼわぼわぼわ

「だいたい、クリムゾン・ローズの私が、よりもよって、なぜ、アオムシなんだ！」

ぷっかり・ぷっかり

ぼわぼわぼわ……

「あの晃さん……」

「ああん？」

晃・アオムシさんが、やさぐれきった顔でこちらを睨みま  
す。  
……こ、恐ひ。

「あ、あの……煙草は喉に悪いんじゃない……」

ぷかりぷかりと煙を吐き出す、晃・アオムシさんの前には、  
水キセルとゆう喫煙器具がありました。

水キセル。もしくは水パイプ。あるいは「シーシャ」と呼  
ばれるこの道具は、

タバコの煙を水にくぐらせた後、極めて長い煙路を経て吸  
引する、マンホームの中東エリアで主に使用される

煙草の喫煙道具です。

晃・アオムシさんは、さらにもう一度「ぶっぶっぶっ」と白

い煙を吐き出すと言いました。

「これは煙草じゃねえよ」

「はい？」

「これは喉薬の噴霧器だ」

ぷかり・ぷかり

「つか誰が煙草みたいな体に悪いものを吸うかつ！

吸えばビタミンは破壊されるし、血管は収縮するし、肺は真っ黒になるし。

まわりは副流煙で迷惑するし、火傷するし、スモークハラスメントだし。

煙草は百害あって一利なし！

それが分からんような奴は、ヤニチューでもなんでもかかりやがれ！」

愛煙者の方々が聞けば、号泣するであろうことをサラッと  
言っ、晃・オオアオムシさん（やさぐれ中）はもう一度

ぷっかり

と、煙の輪を浮かべました。

「でもな……」

ぷっかり

「煙は嫌いだが、匂いなら少しは好きだ」

ぷっかり

「ちよつと落ち着く」

誰のことをいつてるんでしょうか？

ぷっかり

晃・アオムシさんは、煙を吐き続けます。  
煙の輪は風に乗って、ゆっくりと流れていきました。

\*\*\*\*\*

最初にこの世界に落ちたときの小部屋のお話し。覚えて  
ますか？

あのととき、私が屈んで見た小さな扉のお話し、覚えていま  
すか？

そこから見た景色のお話し、覚えていますか？  
そう。いつぱいの白い薔薇が咲き乱れる景色。

今、私の目の前にも、たくさんの薔薇の花が咲き誇ってい  
ます。

紅い……真っ赤な薔薇の花が。

「どうしてアトラちゃんだけなの？」

「え？ だってそれは……」

「まあまあ。落ち着けよ。杏」

「私だって、そっちがいい！」

「そんなコト言っても……」

「ぶっぶっぶっぶっ」

「拗ねるな、拗ねるな」

「どうしたんですか？」



私は訊ねました。

トランプに。三人のトラゲッツ・トランプさん達に。

「あ、アリスちゃん。聞いてよお」

まん丸なオメメを、さらにまん丸にして、杏先輩が叫びます。

夢野 杏先輩。

オレンジ・ぷらねっとの先輩。

その名の通り夢見がちな先輩で、先輩の部屋には沢山のぬいぐるみが所狭しと並べられています。

でもその童顔からはとても想像できないような、真の強い心の持ち主。

「やわっこく、やわっこく」

いつもそう言いながら、どんな苦難や試練にも立ち向かっていき、決して「夢」をあきらめない。

そんな素適な先輩。

「アトラちゃんはハートなんだよ。私はクラブなのに」「ぷいっ」と膨れる、クラブのトランプな杏先輩。

ホント。私より年上なのに、どうしてこんなに可愛いんでしょう。

「仕方ないわよ、杏」

そう答えるのは、アトラ・モンテエウエルディ先輩。

杏先輩と同じく、私と同じオレンジ・ぷらねっとの先輩ウンディーネ。

治療法は確立されているにもかかわらず、いつも眼鏡をかけている先輩。

その眼鏡もその日の気分で、いろいろと架け替えるこだわりの持ち主。

その眼鏡の奥の瞳は理知に満ち、人呼んで「ウンディーネいちの名探偵」

「だって私はキャッチ・プリ〇ユアだから」

アトラ・ハート先輩が断定的に言いました。

うん。

アトラ先輩は……… 理知的……… なハズです。

「つかー。 ホラホラ、杏。 杏。 そんなこと気にしない、気にしない。 あはははは」

陽の光浴びるような、明るい笑い声が響きました。

あゆみ先輩です。

あゆみ・K・ジャスミン先輩。

晃さんや藍華先輩と同じ「姫屋」所属のウンディーネさんです。

お客様を乗せるゴンドラ・クルーズより、ネオ・ベネツィアの街の中を逆「S」型に流れる大運河

「カナル・グランデ」での「トラゲット 渡し舟」に力をそそぐ、明るく元気なウンディーネ。

トラゲットを愛するあまり、実力はあるのに、いつまでもシングルの位置にとどまっている、男前なウンディーネ。

今は藍華支店長の元で、姫屋カンナーレジョ支店の副支店長を務めているウンディーネ。

「誰がハートでも関係ないさ」  
そう言う、あゆみ先輩のトランプはスペードでした。

「で、みなさんは何をしていたんですか？」  
私はトラゲッツ・トランプさん達に訊ねました。

「あ。そうだ。いけない」  
「急がないと」  
「早く、早く」

そう言うと、トラゲッツ・トランプのみなさんは、紅い薔薇に白いペンキを塗り始めました。

「な、何をしてるんですか？ そんなことをすれば、せっかくのお花が、でっかい大変なことに！」  
「女王様は、白い薔薇がお好きなんだよ。 いっしっしっしっし」

再び現れたアリア・ちえしゃねご社長が、笑いながら言います。

「一本でも白くない薔薇が見つかったら、このトランプ達は首をはねられるだけさ」  
「そんな、ひどい！」  
「ぶひゃっひゃっひゃっひゃ。そら、女王様のおでした」  
そう言うと、アリア・ちえしゃねご社長はまた、笑い顔だけを残して消えてしまいました。

\*\*\*\*\*

「あらあら、うふふ。 今日も白い薔薇がいっぱいね。  
嬉しいわあ」

アリシアさんが言いました。

アリシアさん。

アリシア・フローレンスさん。

「スノーホワイト 白き妖精」の通り名を持つ、元トップ・  
プリマ。

晃さん、アテナさんと共に「水の三大妖精」とひとりだった、元ウンディーネ。

その華麗で優雅な操舵術で、ネオ・ヴェネツィア中のウンディーネの、もっとも憧れる、元ウンディーネ。

所属していた「ARIA・カンパニー」の全ての権利を灯里先輩に譲り渡し、寿退社した、幸せのウンディーネ。

今ではゴンドラ協会に所属し、私達ウンディーネのことを優しく見守ってくれている、優しき人。

そんなアリシア・女王・フローレンスさんが、なにやら妖しげな微笑を浮かべています。

「でもね。私は知っているのよあ。うふふふ」

その言葉にトラゲッツ・トランプさん達の顔が強張ります。

「この中に紅い薔薇があるでしょう？」

「い、いえ女王様！」

「そんな滅相もない！」

「そんなことある訳が！」



「待つてください！ そんなのでっかいヒドイです！」  
私は思わず叫んでいました。

「あらあら、アリスちゃん。この私に逆らうの？」  
アリシア女王は元の大きさに戻ると、私の顔を真正面から  
見据えました。

うっ。 満面の笑顔がまた、いち段と恐いです。 でもー

「紅い薔薇を咲かせただけで首をはねるなんて、無茶苦茶  
ですっ」

「うふふ。それならアリスちゃん。私と勝負をしなさいな」  
「勝負？」

「そう。クリケットの試合をして、私が勝てば首をはねる。  
あなたが勝てば胴をはねる。どう？」

「……………それ、どっちにしる死刑ですよね？」  
「あらあら。バレちゃった？ うふふふ」

なんなんですか？  
なんなんですか？ このクロさは！？

「あらあら。冗談よ冗談。あなたが勝てば、ちゃんとト  
ランプ達は助けるわ。 うふふ」  
「……………でっかい分かりました。 その勝負、受けてたちま  
す」

「うふふ。たーんと頑張りなさいな」  
クロシア……………もとへ。 アリシア女王はそう言うと、天使  
のような微笑を浮かべました。

\*\*\*\*\*

クリケット。

実はよく知りません。マンホームのイギリス州って所のスポーツで、アメリカ州のベースボール。

野球と同じで、バット（平たいのです！）とボールを使って得点を競う球技のようです。

でも野球と違うのは、合間に休憩があったり、お茶の時間があったりすることです。

そんなワケで、私とアリシア女王は、お茶の時間を楽しんでいました。

ちなみに。

ここまでの得点は100002点对、100001点で、女王がリードしていました。

「あらあら。やっぱりアンの生クリームの子ココアは最高ね」

「はい。でっかい美味しいです」

私達ふたりの賛辞に、カフェ・ビアンカネーヴェのオーナーで、アリシア女王の幼馴染でもある

アン・生クリーム・シオラさんは、照れて、そのまま溶けてしまいました。

「さあ、これから最後のターンよ。うふふ」  
アリシア女王が宣言するように言いました。

「そこで、新しいバットとボールを使います。　うふふふ  
ふふふ」

そして改めて手渡されたのは、宇土・フラミンゴ・バット  
さんと、暁・ハリネズミ・ボールさんでした。

「やあ、アリスちゃん。こんにちわ。　なのだあ」

「……ウツディーさん。　こんなトコでなにやってんです  
か？」

ウツディー・フラミンゴ・バットさん。

綾小路・宇土51世。　通称ウツディーさん。

車両の出入りが禁止されているネオ・ヴェネツィアで、エ  
アバイクを使い、郵便以外の荷物を運ぶ、

「シルフ　風追配達人」　空飛ぶ宅配業者さん。

ウツディーさんはその中で私とともに仲の良い人。　幻の  
怪獣「ムツクン」にそっくりな人。

私の大好きな、ムツクンのぬいぐるみにそっくりな人。  
だから……大好きな……いえ、その……あの……

「なあに照れてやがんだ。　後輩ちゃんよお。　そんなに  
バットなウツディーに触れて嬉しいのかあ？」

ボールが言いました。

暁・ハリネズミ・ボールさん。

出雲　暁さん。　通称ポ二男さん（長髪を後ろ頭でくくっ  
ているが故に）





牛海亀とグリフォンが踊っています。

いえ、正確には、茜・牛海亀さんと、アリーチェ・グリフオンちゃんが踊っていました。

茜さん&アリーチェちゃんは、MAGA社とゆう水先案内店のウンディーネさんです。

プリマな茜・アンテエリーヴオさんと、そのお弟子さんのペア、アリーチェ・アントノフちゃん。

そんなふたりをネオ・ヴェネツィアの人々はこう呼びます。

「ME(A)GARLITH(遺跡)」のバッジエーオ  
(愚か者) と

それは賛美の言葉。

それは力強い想い。

それは優しい心。

自らを「愚か者」と呼び、その最後のときまで、みんなに暖かな想いを伝え続けた、

ひとりのウンディーネの言葉。

その言葉をずっと守り続ける、ふたりの確かな心。

そんな誰もが敬愛してやまないふたりが、牛海亀とグリフオンとなって踊っています。

「あ、茜さん…お姉ちゃん……」

「アリーチェ。私のことはバッジエーオと呼びなさい」

「……ば、バッジエーオ。恥ずかしいです……」

アリーチェ・グリフオンちゃんが、顔を真っ赤にして踊っ

ています。

「おい、アリーチエ。そんなことでは、りっぱなバツジエ  
ーオにはなれないぞ」

茜・バツジエーオ・牛海亀が心底楽しそうに歌い踊ります。  
(ちなみに牛海亀とは、牛の顔に体は海亀とゆう、よく分  
からない生物でした)

(あつ、グリフォンは分かりますよね。そうそう。じゃじ  
や馬メイヴになついている魔獣で……

え？ 違う?)

「はうううう……」

「ほらほら、どうしたアリーチエ？ もっと楽しく踊らな  
いか。アリスちゃんの勝利に対するお祝いの舞だっ」

「え？ そうなんですかあ!？」

驚いて思わず駆け寄った私は、ふたりに思い切り足を踏ま  
れてしまいました。

\*\*\*\*\*

「これより裁判を始めます!!」

突然、裁判長が叫びました。

「本日の裁かれるべき問題は、誰がパイを食べたか？ で  
す!」

アリシア女王の横に座った、アイ・王様裁判長が叫びます。

アイ。 アイちゃん。

ARIA・カンパニーのシングル・ウンディーネ。

灯里先輩のお弟子さん。 私とは彼女がまだ小さかった頃からのお友達です。

最初は、ネオ・ヴェネツィアやウンディーネが嫌いだった少女。

でも、灯里先輩や藍華先輩。

そして私達と仲良くなることで、このAQUAの魅力に付き、大好きになり、

ついにはARIA・カンパニーのウンディーネへとなった、とても素適な女の子。

でもその彼女がなぜか今、出合った頃の小さな少女にもどり、王様の格好をして裁判長席に座っています。

まあ無理してお髭まで付けちゃって……でっかい可愛いです

「ああ、間に合った。 間に合った。 ああ、良かった」

突然、灯里・シロウサギ先輩が駆け込んできます。

「灯里さん」

アイ裁判長が嬉しそうな声を上げます。

「アイちゃん、元気してた？」

「うん、灯里さん。 私はいつだって元気元気！」

「ほへえ。 それは嬉しいなあ」

「灯里さん……てへっ」

「うおっほんっ」

アリシア女王がワザとらしく咳をします。

灯里さんは、あわてて元（？）に戻ります。

「あわあわあわ……ア、アリシア女王さま。準備はできております」

「あらあら、灯里ちゃん。間に合ったみたいね。うふふ。残念だわ」

残念って……間に合わなかったら、どうするつもりだったんでしょう。

「それでは被告、アリス・キャロル。一步前へ！」

へ？ 私が被告？ なんのことでしょう？

気が付けば、私は被告人席に立たされていました。横にはトラゲッツ・トランプの三人が、槍を片手にこちらを睨んでいます。

なんなんですか？ なんなんですか？ これっ。

「灯里・シロウサギ検察官、この者の罪状を読み上げてください」

「はい、アイ裁判長。このアリス・キャロルちゃんは、アテナさんの作ったピーチパイを5つも食べました」

「それは許しがたいわね」  
アリシア女王が叫びます。

「アテナがせっかく作ったピーチパイを食べるだなんて。それも5つも！」

「そうです。私も食べたかったです」

「あつ。私も、私も！」

灯里・シロウサギ先輩と、アイ・王様裁判長が同時に叫び

ます。

「いやちょっと待ってください。そのとき私以外は誰もいなかったですし」

私は思わず叫んでしまいました。

「それに私は5つも食べていません。せいぜい3つしか

……」

「検察側は証人を招聘します！」

「認めます。検察側の証人をここへ！」

「はあーい」

「アテナ先輩!？」

呼ばれて楽しそうにスキップしながら現れたのは、間違いなくアテナ・グローリイ先輩でした。

「やつほー アリスちゃん。お元気？」

『そのまま』のアテナ先輩が、楽しそうに言いました。

「アテナさんにお聞きます。アリスちゃんは、アテナさんの作ったピーチパイを食べましたか？」

「うん。灯里ちゃん。アリスちゃんは私の作ったピーチ

パイを『美味しい、美味しい』って

いっぱい食べてくれたのお。えへへ。嬉しい」

「いっぱい……それは3つですか。それとも5つですか？」

「ううん」

アテナ先輩は満面の笑みで言いました。

「6つでえす！」

「それでは判決を言い渡します」

「ちよ、ちよっと待ってください!」

私は叫んでしまいました。

「なんですか。アリスさん」

「私の…弁護側の証人や弁論はないのですか？」

「ありません」

「早！」

アイ裁判長は即答しました。

横でアリシア女王が扇子（灯里・シロウサギ先輩が、私に取りに行かせた、あの扇子です）で

顔を隠しながら笑っています。

「陪審員のみなさん。アリスさんは有罪ですか、無罪ですか？」

振り向けばそこには、藍華・クロネコ先輩はじめ、この不思議な世界で出会った、全ての人々、

社長猫さんズまでもが居ました。

みんな、一斉に叫びだします。

「有罪！ 有罪！ 有罪！！」

「判決。被告アリス・キャロルを有罪と認め、首八ネの刑に処します！」

アイ裁判長が言い放ちました。

「そんなあ……」

杏さん達、トラゲッツズ・トランプさん達が怖い顔で迫ってきます。

私が思わず逃げだそうとして身を翻すとー

ぐわしゃばああああーん！

と、陪審員さん達の座っていた席が、私のスカートにひっかかって、ひっくり返ってしまいました。

当然、藍華先輩以下、陪審員さん達も悲鳴を上げてひっくり返り……

あたりは大混乱になってしまいました。

「アリス・キャロルを捕まえて、首をハネよ！」  
アリシア女王が叫んでいます。

けれどそのアリシア女王も、アイ王様と一緒に、悲鳴を上げてひっくり返ります。

灯里・シロウザギ先輩も、ただ、右往左往するばかり。

そんな光景を、近くの木の上からアリア・ちえしゃね社長が、例の薄気味悪い声で「しっしっし」と笑いながら見えています。

トラゲッツズ・トランプさん達は、私が息を思いつきり吹きかけると、空高く舞い上がってしまいました。

「アリスちゃん。アリスちゃん。こっちこっち」  
アテナ先輩が手招きしています。

「もう、アテナ先輩があんなこと言うからです」

「あゝアリスちゃん、どうして怒っているの？」

「だってアテナ先輩が、私がパイを6つも食べた。なんて言うから、こんなでっかい騒ぎに……」

「ええ？ そうなの？」

「もう。ホント、天然、ドジっ子さんです！」

「うーん……よく分からないけど……ねえ、アリスちゃん



ん。ピーチパイ、食べない？」

「こ、こんなときに何言ってるんですか！　うぐっ！！」  
アテナ先輩が無理矢理、パイを私の口に押し込んできます。

「ほら、アリスちゃん。　いっぱい食べてね。　嬉しい」

「うぐぐぐぐぐぐ……」

とても嬉しそうなおアテナ先輩。　確かに美味しいですけど、  
無理に口の中に入ったままでは……

見る間に私の体が大きくなります。

どんどんどんどん、私の体が大きくなります。

パイを食べたからです。

私の体は、際限なく大きくなって行きます。

アリア・ちえしやねこ社長が乗っている木より高く。

遠くに見える山より高く。

やがて空に浮かぶ雲さえも突き破って、私の体は大きくなります。

そこへさつき私が空高く吹き飛ばした、トラゲッツ・トランプさん達が舞い落ちて来て……

それはまるで雨のように私にふりそそぎ……

\*\*\*\*\*

「アリスちゃん。アリスちゃん。起きて。もう帰りましよう」

目を覚ますと、そこにはアテナ先輩の笑顔が……

私の顔には、頭の上の桜の花びらが、まるで雨のように降り注いでいます。

そっか。

桜の花びらだったんですね。やれやれ。

「アリスちゃん、大丈夫？」

アテナ先輩が覗き込むように言いました。

「もう、アテナ先輩のせいですからね！」

「へ？」

「アテナ先輩が、美味しいピーチパイを作るから、みんなが怒ったんです」

私は思わず怒鳴ってしまいました。

「え？ あ、あのアリスちゃん、ごめんなさい。怒られ

たの？」

アテナ先輩は困ったように、おろおろ仕出します。

その姿に、私はもう何も言えなくて……

「なんでもないです」

「ええ？」

「なんでもないんです。でっかい私の我儘わがままですから」

「そ、そうなの？」

「はい。ですからアテナ先輩……」

「は、はい、アリスちゃん」

「今度は私の作ったアップルパイを、いっぱい食べてくださいね！」

「……………う、うん。ありがとう！」

アテナ先輩は最初とまどい、それからとても素適な笑顔で答えてくれました。

\*

これで今日は私が体験した、でっかい不思議なお話しは終わりです。

もしあなたが私と同じ体験をしたければ……………簡単です。

桜の木の下に寝転び、手に時計を持った灯里・シロウサギ先輩が、そばまで走ってくるのを

待っていてあげたいんです。

そしてアリスになったつもりで、灯里・シロウサギ先輩と一緒に木の祠の中に飛び込めば！

きっと素適な冒険に出会えるでしょう。

それではみなさん。

さよなら、さよなら、さよなら。

「 Alice Carroll in Paese  
delle meraviglie (不思議の国のアリス・キャ  
ロル) 」

- l a · f i n e

### 参考図書

『 THE NURSERY ALICE 』  
ルイス・キャロル作 ジョン・デニエル絵 高山宏訳 ほ  
るぷ出版

イースター&クリスマスの挨拶は割愛(汗)

【 宣伝 】

実は私のオリキャラである、蒼羽・R・モチヅキのイラストを  
同じARIA・SS小説書きの、流離人さま が描いてくれました。

蒼羽教官立ち絵

<http://2974.mitemin.net/i22221/>

蒼羽教官プロフィール

<http://2974.mitemin.net/i22223/>

おまけのようなにか

<http://2974.mitemin.net/i22224/>

作者の思い描いてた蒼羽の 何倍もの素晴らしい蒼羽です。  
みな様。是非とも、一度ご覧ください。

そしてこの場を借りまして、改めて流離人さまに感謝を。  
素適な蒼羽をありがとうございます。

ちなみに

流離人さまの作品は↓

ARIA The AFTER story  
↓  
です。

まだ始まったばかりですが、とても先が楽しみな良品です。  
こちら是非とも、ご覧のほどを！！

実はこのお話し。

前作「Alice Carroll in Paese delle Meraviglie」との2本立て投稿させていただきました。  
くはずでした。

それがPCの反乱により……（涙）

ま、まあ。

同じようなお話しなの、いわゆるパラレルだと思っていたんだけど  
うにか許していただけなら幸いです（鹿馬）

それではしばらくの間。よろしく、お付き合いください。

こんにちは。アリス・キャロルです。

今日は私が体験した、でっかい不思議なお話しをします。

あれは桜の咲き誇る春のことでした。

第20話

「Alice Carroll in

Paese delle meraviglie  
「Und  
ramma」

前略

【時間がない！ 時間がない！】

突然の声に私が飛び起きると、そこには灯里先輩がいました。

水無 灯里先輩。

「アクアマリン 遙かなる蒼」の通り名を持つ、ARIA・

カンパニーのプリマ・ウンディーネ。

笑顔がとても似合う、先輩。

他社の私にも優しく声をかけてくれた、素適な先輩。

その灯里先輩が、なぜか白いウサギの格好をして、なぜか二頭身な姿で走っていました。

……  
……

啞然とする私を尻目に、手に時計を持った灯里・シロウサギ先輩は「時間がない。時間がない」と呟きながら

桜の木の根元にある、小さな穴の中へと入って行きました。のぞいて見ます。

その穴は真っ暗で、どれだけの深さがあるのか、まったく分かりません。

灯里・ウサギ先輩はこんな中に入って行って、大丈夫なんでしょうか？

ートンッ

と背中を押されました。

ー！？

私は悲鳴を上げる暇もなく、穴の中に落ちてしまいました。落ちながら振り向けば、そこにはにっこりと笑う、アテナ先輩の姿が。

アテナ先輩に突き落とされた！？

いったい何をしてくれるんですかっ。このドジっ子さん

わー！

「行ってらっしゃい。楽しんできてね」



暗い穴の中に落ちながら、私はアテナ先輩のそんな呟きを聞いたような気がしました。

\*

これって「不思議の国のアリス」ですよ。

この展開ってば「おとぎのアリス」（原題）ですよ。

なぜ？

私の名前がアリスだから？

だとしたら、なんて安直な！！

暗い穴の中を落ちながら、私は割りと冷静に考えていました。

だとしたらこの後は、藁の上に落ちて、それから……

どっばあああああーん！

水の中に落ちました。

え？

なんで？

原作では確か藁のベッドで……うえっ。なにこれ？

塩辛い。

ええ？ 海水？

そんな……確か「不思議の国のアリス」には、海なんて出てこない……

あうあうあう。

あやうく溺れそうになった私は、すぐ横を流れてきた丸太にすがりつきます。

海に落ちたときは、なにかにしがみついて、溺れないようにするのが基本です。

「はあ……助かりました。 それにしても……」

私は周りを見渡します。 ところが夜なのか、あたりは薄暗く、遠くまで見通せません。

「でつかい困りました。 これからどうすれば良いのですよ……」

暗い夜の海。 原作にない展開。 私は途方に暮れてしまいました。

「重いぞ。 オレンジ・プリンセス」

「わふっ？」

突然、私がついている丸太がしゃべりました。 びっくりしている私に向かって、丸太はしゃべり続けます。

「誰が丸太かあ！」

それは、蒼羽さんでした。

蒼羽さんが丸太です。

「ちげえよ。 よく見てみる！」

言われて改めて自分のつかまっている丸太を見やれば……服を着ています。

黄色いシャツ。 赤い短パン。 黒いベスト。 青い蝶ネ  
クタイに麦わら帽子。

こりわ……

「確かにさあ、今度はヒトガタって言ったけどナア……」  
蒼羽・ピノキオ教官は、長いお鼻を私に向けながらボヤき  
ました。

「木の人形とはねえ……なんか悪意を感じるぞ？」

「教官。 こんなところで何やってるんですか？」

「ああ？ なにやってるってお前、ゼペットのじいさんを  
探してるに決まってるだろ？」

「ゼペットさんを探して……つか、なんでピノキオなんで  
すか？」

このお話しつてば、アリスじゃないんですか？」

「知らねえよ、そんなこと。 戯言だからじゃないのか？」

「はあ……」

「とにかく、この世界はそうゆう世界で、俺はゼペットを  
ここから救出して、本物の人間にしてもらうのさ」

やがて私達は小さな島にたどり着きました。

「おい。ゼペット。ゼペットのおやぢ。何処だ！」

「おや、ピノキオじゃないか。 どうしてこんな所に……」

そうやって私達の前に現れたのは、新太・ゼペットさんで  
した。

「よう。蒼羽。俺様を迎えに来てきてくれたのか？ 嬉し

いねえ」

「ざけんな、クソ野郎。 てめえを連れて帰らなきゃ、俺は木のまんまなんだよ！」

そう言うと、蒼羽・ピノキオさんは、げしげしと、新太・ゼペットさんを蹴りつけます。

「べ、別に、お前のためにやってるわけじゃないんだからな！ 俺の…俺様のためなんだからな！」

……蒼羽教官ってば、ツンデレだったんだ。

「ほら、行くぞ。 さつさとゴンドラに乗りやがれ！ アリス。 操舵は任せた」

いつの間にやら私は、オールを手に海に漕ぎ出していました。

「いいか、アリス。 ここは実はでかい鯨の腹の中だ。

だから、もうちょっと行くと鯨が潮を噴く場所に着く」

「はい」

「そしたらタイミングを見計らって、そこに飛び込んで、

潮と一緒に外へ出る」

「はい。 分かりました」

「……でなあ、アリス」

「はい。 なんですか」

「お前の操舵。 少し右に揺れるクセがあるな。 今のうち

に治しておけ」

「……でっ、でっかい、はい！ です」

ピノキオさんになっても、やっぱり蒼羽さんは蒼羽さんです。 少し嬉しいです。

「あそこだ」

「あそこだ」

蒼羽・ピノキオ教官の声に目をやれば、そこにはまるで柱のようなものが空に伸びていました。

「よし！ アリス。突っ込め！」

「は、はい！」

私は夢中でオールを漕ぎました。

「きゃあっ」

水に飲み込まれ、ゴンドラから放り出されます。

「アリス！」

咄嗟に蒼羽・ピノキオ教官が私の手をつかんでくれます。

そしてその蒼羽・ピノキオ教官の手を、新太・ゼペットさんがつかんで……

次の瞬間。 私達は空高く、放り出されていました。

\*\*\*

「アリス太郎さん。 鬼が島はまだですか？」

「アリス太郎さん。 私、頑張っちゃいますね」

「アリス太郎さん。 きっと守ってみせます！」

あゆみ・オサル先輩。

杏・シロワンコ先輩。

アトラ・雉先輩。 が口々に言いました。

蒼羽さんと新太さんと別れた後――

（おふたりはこれから、魔法使いさんに会いに行くそうです。）

仲良く手をつないで歩いて行く、おふたりの姿は、とても微笑ましかったです)

私が森の中を歩いていると、いつの間にかトラゲッツズの先輩方が仲間になりました。

犬。猿。雉の。

.....

ってコレは桃太郎？

な、なんで？

さっきの蒼羽・ピノキオ教官といい、トラゲッツズな先輩達といい。

この世界はどうゆう世界なんでしょうか。

あゆみ先輩。アトラ先輩。杏先輩。

お三方とも、優しいな笑みを浮かべて、私を見えています。

えい。

でつかい、えい！

こうなれなもう、突き進むだけです。

私はトラゲッツズな先輩達と一緒に旅をすることに決めました。

いつの間にか、ポケットの中には、きび団子。

みんなで美味しくいただきました。

「で、鬼が島まであとどれくらいなの？ アリスちゃん」

「へ？ 杏先輩。私、鬼が島の場所なんて知りませんよ？」

「え？ アリスちゃん、場所知らないの？」

「はい。アトラ先輩。とゆうか、私この場所、初めてなんです」「

「かつー。そっか。でも知らないんじゃない。まあ、誰かに聞けばいいよ」

「ありがとうございます。あゆみ先輩。あつ、ちょうどあそこに誰かいます」

道の先のお花畑で、ひとりの少女が花を摘んでいました。

(ちなみに、アトラ先輩が『見渡す限りの一面の花』と呟いたのは秘密です)

「ちょっと聞いてきます。すいませーん」

私は少女に駆け寄りつつ、声をかけました。

「はあーい。なんですか?」

あ、そうゆうことですか

「うーん。鬼が島の場所かあ……ごめん、私には分からないわ」

「そうですか……」

「あ、でも、おばあちゃんなら知ってるかも。物知りで有名なの。」

今から私、おばあちゃん家に届け物がるから、一緒に行かない?」

藍華先輩は、赤い頭巾の中から、ニッコリと微笑みました。

「おばあちゃんの耳は、どうしてそんなに大きいのか?」

藍華・アカズキンちゃん先輩が訊ねます。

「それは藍華の声がよく聞こえるようにだよ。がおっ」

お約束通り、アル・ハイイロオオカミさんが答えます。

「きゃっ　おばあちゃんの手は、どうしてそんなに大きいの？」

「それは藍華が逃げないように、しっかりと抱きしめるためだよ。がおっ」

「きゃっ　おばあちゃんのお口は、どうしてそんなに大きいなの？」

「それは藍華を食べちゃうわああっ！？」

アル・ハイイロオオカミさんが全部を言う前に、藍華・アカズキンちゃん先輩が飛び掛りました。

「ちよっ、藍華！　な、なにをがうっがうっ！？」

「えっへっへえ。　アルくん、アルくん。　私を食べちゃうのお？」

「いや、藍華ちよっと待って。がう。　これ、そうゆうお話しだから。がう。　ほんとに食べちゃうワケじゃないからっ」

「えへえ。　アルくん、私を食べてくれないのお？」

「藍華。　藍華。　これ童話だから！　これ童話なんだから！」

「えへへえ。　お腹裂いちようぞおおっお。　すりすりっ」  
「待って、待って。　藍華。　みんな見てるし。　アリスちゃん

も見てるし！！」

「そんなの関係ないよん。　しっぱも、もふもふ」  
「アーーーーーーー！！」

「……行きましょうか。　アリスちゃん」

「はい、アトラ先輩……」





私達の必殺技を喰らって、暁・アカオニさんは悲鳴を上げて空の彼方に飛んで行きました。

これで鬼退治は無事終了です。  
良かった良かった。

\*\*\*\*\*

「さあ、出発です。アリスちゃん」  
あゆみ・ブリキの木こり先輩が言います。

「さあ、エメラルドの都に行きましょう」  
杏・臆病ライオン先輩が言います。

「行って、オズの魔法使いに、願い事をかなえてもらいましょー！」

アトラ・藁人形かし先輩が言います。

…………… 今度は「オズの魔法使い」ですか。

ホント。この世界は、でっかいなんなんでしょう。  
もうホント。

『でっかい、どうにでも、なれ！』な心境です。

次に私達が森の中に出会ったのは、ふたりの姉妹と一匹の猫さんでした。

「僕達は青い鳥を探しています」

「はい。お姉ちゃんと一緒に、探しています」

「にゃふにゃふ」

茜・バツジエーオ・ヘンゼルさんと、アリーチエ・グレー  
テルちゃん。

そして籠の中のアクィラ・青い鳥社長が言います。

「道に迷ったのかい？」

「と、ゆうか、どの道を行けばいいのかすら、分からない  
のですが……」

私達はエメラルドの都への道を探していました。

「うーん。エメラルドの都への道は分からないけれど、道  
に迷うことはないよ」

「どうしてですか？」

「迷わないように、少しずつパンをちぎって道に落として  
きたからね」

「え？」

杏・臆病ライオン先輩が、パンの欠片を口にしながら硬直  
します。

……  
……

「杏!」「杏っ」「杏先輩!」

「ご、ごめんなさい。お腹減って……つい、美味しそうだ  
ったから……」

「もう、あんたつて子は。あんたつて子は！」  
「あうあう……痛い。痛いよ、アトラちゃん」  
杏・臆病ライオン先輩のお髭を、アトラ・藁人形力カシ先輩が「ウリウリ」と引っ張ります。

「まあまあ。そんなに気にしないでください。帰れなくても大丈夫ですよ」

茜・ヘンゼルさんが言います。

「帰れなくても大丈夫。ですか？」

「はい。なにしろ……」

「なにしろ？」

茜・ヘンゼルさんは、ちよつと悪魔的な笑みを浮かべながら言いました。

「僕達には、お菓子の家がありますから」

「ごちそーさまでした」

私達はお行儀よく、最後に手を合わせて、お礼を言いました。

「いやあ、美味しかった」

「はい。お腹いっぱいです」

「ほんと。いっぱい食べたわねえ」

「つあつ。喰った喰った」

「うん。私ももう食べれません」

「にやふううううつう」

みんな、骨と土台だけになったお菓子の家を前に、満足のタメ息をつきました。

「お、お前等。なんてことしてくれたんだ！」  
悲鳴のような絶叫が響きわたりました。

「ここまで喰うか？　ここまで喰く尽くすか！　普通っ？  
なんも残ってないじゃないか。　悴しか残ってないじゃないか！」

「こんなの予算オーバーだ！  
つか、なんでお前等6人もいるんだ！　ヘンゼルとグレートルの二人だけじゃないのか！？」

「なんだっ。勝手なアドリブか？  
そんなの僕は認めないぞ。　絶対に認めない！  
勝手に動くな！　勝手に演じるな！  
お前等は、僕の演出通りに動けばいいんだ！」

「悪い魔法使い・プロデューサーさんが、叫び続けます。  
ちなみに私は、この人がつかい大嫌いです。  
みんなもジト目で、悪の魔法使い・プロデューサーさんを見えています。」

「いいか、お前等。　今からこのカマドでこんがり焼いてやるからな！  
覚悟しておけえ！」

「……火加減はどんなモンかな」  
「悪い魔法使い・プロデューサーさんが、腰をかがめてカマドの中を確認します。」

「お前等、絶対押すなよ。　俺が見てる背後から絶対に押すなよ！」

叫びつつ、カマドの中を確認し続ける、悪い魔法使い・プ

ロデューサーさん。

「おい、絶対押すなよ。押すんじゃないぞっ」

「……………」

「押すなよ。押すんじゃないぞっ」

「……………」

「分かってるか？ 押すんじゃないぞお」

「……………」

「なんで押さないんだあ！」

「うざいわあっ！」

お約束通りの展開に、茜・ヘンゼルさんの蹴りが炸裂します。

「これでこそ、僕の演出通りいつ！」

なぜか嬉しそうな悲鳴を上げて、悪い魔法使い・プロデューサーさんはカマドの中で溶けていきました。

「苦いですね……………」

「にやふっ」

アリーチェ・グレーテルちゃんと、アキラ・青い鳥さんが呟きます。

\*\*\*\*\*

「時間がない。時間がない」

「灯里先輩？」

灯里先輩がドレスの裾をひるがえしながら、階段を駆け下りて来ました。

「幸せの青い鳥は、すぐそばに居たんだ」

今更ながら幸せそうに手をつなぐ、茜・ヘンゼルさんとアリーチェ・グレーテルちゃん。

その頭の上で『にゃふ、にゃふ』と嬉しそうに鳴く、アキラ・青い鳥社長に別れを告げ、

私達は道を急ぎました。

そして次のお話しは―

「時間がない。時間がない」

「灯里先輩？ シロウサギのコスプレは……」

「ああ。ごめんなさい。アリスちゃん。今、時間がないの。またあとでね」

そう言うと灯里先輩は、私達の前を駆け抜けて行きました。ガラスの靴を残して……

ぬう……今回は灯里・シンデレラ先輩ですね。

どこからか12時を告げる鐘の音が聞こえてきました。

「おお。麗しき人よ。いずこに？」

「イージス・インパクトおおお！」

―ちゅどおおおつおおおむ！

「うんぎゃあああああああああああああああああああああああああああああああ  
ああああ！」

反射的に放ったアトラ・藁人形力カシ先輩の攻撃が炸裂します。

ひゅっううううううう……ぽてっ。 ぽてり。

「な、なにしゃがんでえ！」

ポロポロになった、暁さんが叫びます。

いえ、私でも反射的に攻撃しそうでしたから……

だって再登場の暁さんってば……王子様なんですから。  
ヤっっちゃっていいですか？

「この靴に合う足を持った女性を、我が妃とする」

ポ二男さんが言います。

「おい、後輩ちゃん」

「なんです、ポ二男さん」

「ポ二男って言うなあ！ 今の俺様は、王子さまだぞ！」

「ポ二男さんは、どこまでいつてもポ二男さんです。さっ

きまでは赤鬼さんだったじゃないですか？」

「……くっ。ダブルキャストだし、しょうがねえだろ！  
と、とにかく話しを進めるぞ。」

さあ、ものども、靴をはいてみよ！」

いきなり話しを進めます。 しょうがありません。

私達はわかるがわるガラスの靴に足を通します。 もちろん  
履けません。

「それでは灯里先輩。どうぞ」

「あ、はい。 アリスちゃん」



私の呼びかけに、灯里・シンデレラ先輩がゆっくりとガラスの靴に足を入れます。

「ちよ、ちよつと待ったあ!」

暁・ヘタレさんが突然叫びます。

「こらあつ、後輩ちゃん。俺の呼び方変わってるぞお!」  
「すみません。訂正します。暁・ヘタレ王子。どうぞ」  
「誰がヘタレかあ! ……まあ、いい。だがちよつと待  
て」

「でつかいなんですか? 暁・ヘタレポニ男さん」

「くつ……。あ、あのだなあ」

「はい」

「これでもし、もみ子が靴を履いたらどうなんかい……」

「その時は、灯里先輩が、ポニ男さんのお妃様になるんじゃないんですか?」

「……! や、やめろ! も、もみ子。靴を履くんじゃない!」

「ええ〜もみ子じゃありませんよお……それにもつ、靴、履いちゃいましたよお?」

「うがっ!」

見れば、すでにそこにはガラスの靴を履いてたたずむ、灯里・シンデレラ先輩の姿が。

「おめでとう。灯里ちゃん」 「灯里ちゃん。よかったね」

「灯里ちゃん、素敵!」 「灯里先輩。でつかい良かったです」

「だから、ちよつと、待てえええつえええええ!」

私達の祝福の音が響く中、暁・ヘタレポニオ王子が悲鳴をあげます。

「なんですか？ せっかくお妃様が見つかったんですよ？」  
「いやちよっと待て。おかしいだろう！ 俺は、俺様は  
アリシアさん一筋で」

「物語がそうなってるんですから、でっかいしょうがない  
でしょう。」

さあ。ヘタレさん。 灯里先輩をお妃様として迎えてく  
ださい。

まずはプロポーズです」

「う……うお。 あう。 その…はう……ぬおう……も、  
もみ子よ」

「は、はひ……で、でも私、もみ子じゃ……」

「う……うぐ……いや、その……あ……あ……あか……あかりい  
ひ……」

「は、はひ……」

「……………」

「……………」

「行こっか。アリスちゃん」

杏・臆病ライオン先輩が言いました。

私達は、互いを見合ったまま真っ赤になって硬直している  
灯里・シンデレラ先輩と、暁・ヘタレポ二男さんをホツタラカシに  
して

その場を離れました。

お幸せに

\*\*\*\*\*

ー　　ハ○ホー！　ハ○ホー！　仕事が好き！

　　みんなで楽しく、ハ○ホー！　ハ○ホー！　ハ○ホー！！

「リンゴはいらないかい。　アリスちゃん」

私達に、アリア社長&ヒメ社長&まあ社長を加えた七人の  
小人が、歌いながら森を歩いていると

ひとりのおばあさんが話しかけてきました。

「どうだい、見るからに美味しそうなりんごだろ。アリス  
ちゃん。　さあ、どうだい」

「いえ、いりません。そんな毒りんごなんか食べたくない  
です」

「くっ……どうしてこれが毒りんごと分かったんだ!？」

「いや、どうしてって言われても……晃さん」

「……ちっ。　バレてしまっではしょうがない。　わはは  
はははっ」

リンゴ売りのおばあさんはバサリと、かぶっていたフード  
を取りました。

その下から現れたのは……

「よくぞ見破った！　私こそが晃・E・フェラーリ・王妃  
だああ！」

晃・新しい王妃様さんが高らかに叫びます。

「だかな、もう遅い。お前達の大切な白雪姫は、この私が葬ったあ！」

「ぷいにゅん！」

アリア・ドーピー（おとぼけ）社長が驚きの声を上げます。

以下

まあ・ハッピー（幸せ）社長。

ヒメ・スリーピー（眠い）社長。

あゆみ・グランピー（怒りんぼう）先輩。

アトラ・ドク（先生）先輩。

杏・バッシュフル（恥ずかしがりや）先輩 達も驚きの声を上げます。

みなさん、ノリノリです。

ちなみに私は「スニージー」（くしゃみっぽい）「だそうで

……でっかいワケ分かりません。

「白雪姫っ」

私達が駆けつけると、そこには眠るように横たわる、アリ

シア・白雪姫さんが……

アリスシアさんの白雪姫。

まあ、当然ですね。

さすがは「スノーホワイト」の通り名を持つ、アリスシアさんです。

この人以外に、誰が「白雪姫」になれるとゆうのでしょうか。

姫です。

その穏やかな寝顔は、まさに「ビアンカネーヴェ」 白雪  
でっかい綺麗です。

みんな泣きながらアリシア・白雪姫さんをガラスの棺の中  
に横たえました。

で。

もうすぐ来るハズです。

……来ました。

白馬に乗り、颯爽と現れた王子。

当然のことながら、それはまたもや、晃さんでした。  
早変わり、お疲れ様です。

「ああ。なんと美しい人だ」

凜！

とした晃さんの立ち姿は、まさに「クリムゾン・ローズ」  
のトップ・プリマにふさわしい、

雄雄しく、気高く華麗な、晃・白馬の王子様でした。

でっかい見惚れてしまいます。

「さあっ。今すぐ、私の口づけで目覚めさせてみせようっ」  
すっ と。

アリシア・白雪姫の眠るガラスの棺に身をかかめる、晃・  
白馬の王子様さん。

ふたりの唇が近付きます。

晃・白馬の王子様さんは、なんの躊躇いもなく、唇を近付けていきます。

アリシア・白雪姫さんも、微笑みを浮かべたまま、目を閉じ、ただじっとしています。

「うおっっ！」

「ぷいにゅん！」

「まああああ！」 とー

みんなが唸り声を上げます。

「ぎゅりー」と、誰かのノドが鳴りました。

これはまさに、晃さん&アリシアさん、恋人説の証明なんでしょう！

ふたりは腐〇子の憧れの世界に入ってしまうのでしょうか！

私の胸は、でっかい高鳴ります。

ふたりの唇は、ますます近付いて……

がたんっ

私はカブリツキで見ようとして足を滑らせ、アリシア・白雪姫さんの横たわるガラスの棺おけに、ぶつかってしまいました。

その拍子に、アリシア・白雪姫さんのノドに詰まっていたリンゴの欠片が飛び出し、アリシア・白雪姫さんは目を覚ましました。

「あらあらあら。私、どうしたのかしら？」

ゆっくりと身を起こす、アリシア・白雪姫さん。

「ぷいにゅん！」

と、アリア・ドーピー社長が抱きつきました。  
「アリア社長？」

わっ。 と、ばかりに、みんながアリシア・白雪姫さんを  
囲みます。

「うふふ。みんな、ありがとう」

アリシア・白雪姫さんが素適な笑顔で言ってくれました。  
でも。

「ア・リ・ス・うううう」

晃・白馬の王子様が、恐い顔で私を睨んでいます。

「せつかくの私の見せ場を、お前わああああ」

「あ、晃さん。あれは事故です。 でっかい不可抗力です

」!

「すわっ! 問答無用! オールを持って来い! 今すぐ、  
みっちりと指導してやる!」

「ひええええっ」

「ああああ。晃ちゃん。どうしたの?」

アリシア・白雪姫さんが間に入ってくれます。

「うるさい、アリシア。ああああ禁止!」

「うふふ」

「うふふも禁止!」

「ああああ、うふふ」

「一緒に禁止!」

「あああ?」

「ちよつと変えても禁止!」

「うふふふふ」

「禁止! 禁止! 禁止!」

楽しげに喧嘩する、晃・白馬の王子さんと、アリシア・白雪姫さん。

私達はこっそりと逃げ出した。

お幸せ……ですね。

\*\*\*\*\*

「ようこそ、アリスちゃん」  
「グランマ！」

ようやくエメラルドの都に着いた私達を迎えてくれたのは、  
グランマ・善き魔女さんでした。

「グランマ、お願いがあります！」  
「はいはい。アリスちゃん。帰りたいのね？」  
「は、はい。グランマ。でっかい、はい！ です」  
さすがはグランマ・善き魔女さんです。何も言わなくとも、私の願いはお見通しです。

「ほっほっほ。じゃあ、ちょっと待っててね。先に他の人達の願いを、かなえてしましましょう」  
こうしてー

あゆみ・ブリキの木こり先輩は、自由を  
杏・臆病ライオン先輩は、勇気を



アトラ・藁人形かかし先輩は、知恵を

それぞれ、もらうことができました。

「ほっほっほ。違うわよ。アリスちゃん」

「グランマ？」

グランマ・善き魔女さんは穏やかな笑みを浮かべていました。

「あゆみさんも、杏さんも、アトラさんも。みんなそれぞれに願いは最初から持っていたものよ」

「そう……なんですか？」

「ええ。私はそれに気付くキツカケを教えただけ。そしてなによりもそれをみんなに与えたのは、アリスちゃんよ」

「わ、私ですか？」

「そう。あなたがみんなに、その願いを引き出す力を与えたのよ」

私が、みんなの願いを……

「そう。あなたとの冒険で、みんなは、とっても素適な経験をしたわ。それこそが願いを叶える、不思議な魔法。夢を叶える、不思議な力。」

アリスちゃん。あなたは、とっても素晴らしいわ」

「『アリスちゃん』」

トラゲットズな先輩達が、優しく私を抱きしめてくれます。

「私に『知恵』を、ありがとう」アトラ先輩が言います。

「ウチに『自由』を、ありがとう」 あゆみ先輩が言います。

「私に『勇気』を、ありがとう」 杏先輩が言います。

「わ……私も」

私も先輩方を、思いっきり抱きしめました。

「私もみなさんと旅ができて、とっても幸せでした！」  
不覚にも涙があふれて………止まりませんでした。

えぐえぐーと。

泣き続ける私を、トラゲットな先輩達は、ずっと抱きしめてくれていました。

とても素敵な時間でした。

「じゃあ、アリスちゃん。帰りましょうか」

「はい」

グランマ・善き魔女さんの言葉に、私はしっかりと答えました。

「さあ、この人がアリスちゃんを送ってくれるわ」

そう言って指さすグランマ・善き魔女さんの、その先には

「やあ、アリスちゃん。お待たせなのだ」

「ウツディーさん？」

綾小路・宇土・51世さんが、エアバイクにまたがっていました。

「じゃあね、シルフさん。あとはお願いね」

「はい。グランマ。任せて欲しいのだ」  
「グランマ。いろいろと、ありがとございました」  
ウッディーさんのエアバイクに捕まって、私はグランマに  
お礼を言いました。

「ううん、アリスちゃん。元気でね」  
グランマが微笑みます。

「アリスちゃん。気をつけてね」

「アリスちゃん。頑張つてね」

「アリスちゃん。またね」

あゆみさん。アトラさん。杏さんが笑顔で言います。

「はい、先輩方」

だから私も笑顔で答えました

「また明日！」

笑い声が響き渡りました。

ウッディーさんのエアバイクは、ゆっくりと空に上がって  
行きます。

みんな、手を振ってくれています。

見る間に、グランマのお城は小さくなっていきます。

私はその姿が見えなくなるまで、いつまでも手を振り続け  
ていました。

\*\*\*\*\*

嵐に巻き込まれました。

ごめんなさい。油断していました。

もう終わりかと思って、少し油断していました。

私はあつという間に、ウツディーさんのエアバイクから振り落とされてしまいました。

ちっ。

どうせなら、ウツディーさんにもっと引っ付いておけば良かった……いえ、なんでもないです。

で、振り落とされた私は――

ど、ぱああああああああああん！

再び、海に落ちてしまいました。

幸い、浜辺が、すぐ目の前にありました。

あぶあぶーと、私が泳ぎ着くと、そこには。

ぷかり ぷかぷか……ぷかり

ゆっくりと煙草をふかす郵便屋さんが、大きなアイ・亀ちゃん  
の背中に座っていました。

「よう、アリスの嬢ちゃん。こんにちは」

「こんにちは、アリスさん」

「あ、こ、こんにちは。郵便屋のおじさん。アイちゃ

ん。

……こんな所で、何をしてるんですか？」

「ほいよお」

ぷかり

郵便屋さんはもう一度、白い煙を噴き上げました。

「嬢ちゃんからの手紙を待ってるんだ」

「私の手紙ですか？」

「ああ」

「アリスさんからのお手紙を、乙姫様に届けるために、ここで待っていました」

アイ・大亀ちゃんが嬉しそうに言います。

「そんなつ。私、手紙なんて……え？」

気が付けば、いつの間にか私のポケットに手紙が。

きび団子といい、このお手紙といい。

私のポケットは、いつからド○えモンの四次元ポケットになったのでしょうか。

「はいよお。確かに預かったよお」

郵便屋（庵野波平さん）・浦島太郎さんが言います。

「じゃあ、竜宮城に出発！」

アイ・大亀ちゃんが言います。

やがてふたりの姿は、ゆっくりと波間に消えて行きました。それにしても、乙姫様……あの人しかいません。

しばらくして。

私の予感は、でっかい当たりました。

がぼがぼがぼ

不意に水面にいくつもの泡が弾けるとー

「ぐぼがふげふげふ……ああ、溺れるかと思った………」  
アテナ・乙姫先輩が顔を出しました。

「どこの世界に、溺れる乙姫様がいるんですかつ」  
私は思わず、叫んでしまいました。

\*\*\*\*\*

アテナ先輩は、ゆっくりと浜辺に近付いてきます。

「ちよつ。アテナ先輩。なんて格好してるんですか!？」

「へえ？ なにか変？」

いつもの、のほほんとした表情で、アテナ・乙姫先輩が言いました。

「いえ、変てゆうか………」

アテナ先輩は上半身裸でした。

褐色の肌が綺麗です。

もちろん胸の大事な場所は、貝殻で隠していましたが、おへソは丸見え。

その姿はまるで……

「あのね、アリスちゃん、見て見て。ホラ。ぴちぴち

い

びったん、びったん - と。

波間から尾びれが振られます。

「どうやらアテナ・乙姫先輩の足が、尾びれになっているようです。」

「ねえ、アリスちゃん。私まるでお魚さんみたいねえ」

「アテナ先輩」

「なあに。アリスちゃん」

私は冷たく言い放ってしまいました。

「……それ、乙姫様じゃなくて、人魚姫です」

沈黙。

アテナ・人魚姫先輩はしばらくの硬直の後、照れたように言いました。

「てへっ」

「あのね、あのね。アリスちゃん」

岩場の上に座りながら、びたびたと尾びれを揺らしながら、

アテナ・人魚姫先輩が言いました。

「なんですか、アテナ先輩」

「最近、謳うのがとっても楽しいの」

「は？」

今更、何を言っただいしょう。

今更、このAQUA最高の謳姫さんは、なにをコイている  
のでしょうか。

「アテナ先輩から謳うことを奪ってしまえば、何も残らな  
いと思いますか？」

「ふふふ。きつとそうねえ」

皮肉のひとつもききやしません。でも……

「でね。最近こうやって浜辺で謳うと……」  
でも、私は……

「いろんな舟に出会えるの」  
そんなアテナ先輩が……

アテナ先輩はゆつくりと謳いはじめました。  
『天上の謳声』が響き渡ります。  
穏やかに。けれど力強く、波間に響いて行きます。

私はゆつくりと目を閉じました。  
音が体の中を駆け巡っていきます。  
唄が心の隅々にまで、広がっていきます。  
まるで自分の体が、歌でできているかのように。

嗚呼。心地いい。

だから私は、そんなアテナ先輩が……

「あ。またたくさん、出会えたわ」  
アテナ先輩が嬉しそうな声を上げます。  
その声に目を開ければ――



のわっ！

私は思わず立ち上がってしまいました。

そこにあっただのは、見渡す限りの舟・船・艦。

小さなゴンドラから、漁船。

水上バス（ヴァレット）から、コーストガード（沿岸警備隊）のパトロール船に至るまで。

幾多の船が、アテナ先輩を取り囲んでいました。

しかも無人で。

これはまるで……

「あれ？ おっきい子もきたわ。嬉しい」

ふと、影がさしました。

え？ と、見上げる視線の先には……大きい！

とても大きな船が！

いえ、この艦は！！

排水量・33 550 t 全長・262.5 m 全幅・  
31.5 m

200,000 hpの機関出力でもって、最大速力・35 ktを誇る、旧ドイツ海軍の幻の空母。

「グラフ・ツエッペリン」号！

彼女は誘われるかのように、一直線に私達の方へ突進して

きて……

どつかああああっん！  
きやあああああああああああああ！！

私とアテナ先輩を、岩ごと吹き飛ばしました。  
……だから私は、アテナ先輩のことが

でっかい、大ッ嫌いです！

\*\*\*\*\*

「これはセイレーンですから！ 本物のセイレーンですか  
らー！」

私はアテナ・セイレーン先輩を正座させると、お説教を  
しました。

海の航路上の岩礁から美しい歌声で航行中の人を惑わし、  
遭難や難破に遭わせるー

と、ゆう「セイレーン」  
歌声に魅惑されて殺された船人たちの死体は、島に山をな  
したー

と、ゆう「セイレーン」

「でも、アテナ先輩は人魚姫……じゃない、乙姫様なんで  
すから。

今は通り名の『セイレーン』じゃないんですから。

それに本物の『セイレーン』の下半身は、鳥なんですから！」

ホントにもう、アテナ先輩は、でっかいドジっ子さんです。ひと時も目が離せません。

幸いふたりとも怪我はなく、集まった船も三々五々、帰っていき、今はこの浜辺にも静寂が戻っています。

「ごめんなさい、アリスちゃん。これおわびに」  
そう言っつて、アテナ・乙姫様先輩が取り出したのは小さな箱。

・はっ、こ、これは！

開ければ白い煙が出て、あっという間に、ご老人になってしまうとゆう、あの伝説の箱。

どんな凶悪な怪物も、一瞬で骨と化してしまう、O・デストロイヤーのような危険な箱。

その名も・

玉手箱

「あっあっ。ダメです。アテナ先輩！ その箱をあけるとっ」

「へ？」

気が付けば、アテナ先輩はすでに、箱を開けていました。

とたんあたりは白い煙に包まれ……

やっぱりアテナ先輩は、でっかい、でっかい、ドジっ子  
です……！

\*\*\*\*\*

「アリスちゃん。アリスちゃん。起きて。 もう帰りまし  
よう」

目を覚ますと、そこにはアテナ先輩の笑顔が……  
私はあわてて飛び起きると、あちこち自分の体を触りたく  
りました。  
どうやら、おばあさんには、なっていないようです。  
やれやれ。

「アリスちゃん、大丈夫？」  
アテナ先輩が覗き込むように言いました。

「もう、アテナ先輩のせいですからね！」

「へ？」

「アテナ先輩が、乙姫様と人魚姫とセイレーンを間違える  
から、あんなことになったんです」  
私は思わず怒鳴ってしまいました。

「え？ あ、あのアリスちゃん、ごめんなさい。 あんな  
こと……」

アテナ先輩は困ったように、おろおろ仕出します。  
その姿に、私はもう何も言えなくて……

「なんでもないです」

「ええ？」

「なんでもないんです。 でっかい私は楽しかったですか

ら」

「そ、そうなの？」

「はい。ですからアテナ先輩……」

「は、はい、アリスちゃん」

「今度は私と一緒に、歌を謳ってくださいね！」

「……………う、うん。ありがとうー！」

アテナ先輩は最初とまどい、それからとても素適な笑顔で

答えてくれました。

\*

これで今日は私が体験した、でっかい不思議なお話しは終わりです。

もしあなたが私と同じ体験をしたければ……簡単です。  
桜の木の下に寝転び、手に時計を持った灯里・シロウサギ



ここからは没ネタです。

えと今回。

なんか色々と考え過ぎまして、どうにも收拾がつかず、何本かのエピソードを割愛、修正してしまいました。

このまま捨てるのも、なんか勿体ない！

とゆう、作者の貧乏性を反映して、没ネタを掲載させていただきます。

本編以上の鹿馬なので、お目汚しにしかありませんが、よろしく願います。

決して言い訳じゃないお！！（大鹿馬）

没その1

「私は藁で家を造っています。　ぶひ」

茜・長女コブタさんが言いました。

「私は木で家を造っています……ぶ、ぶひ」

アリーチェ・次女コブタさんが、顔を真っ赤しながら言いました。

その気持ち、でっかい分かります。

「にゃふ、にゃふううう」

アキラ・三女ブタさんが言いました。

きつと『レンガで家を造っています』と、言っているの  
しょう。

うう。「三匹の子豚」

MAGA社のみなさんが、子豚さんなんですね。  
では、狼さんは……

「あ。アルさん。お疲れ様です」

「すいません。また出てきてしまいました。がお」

困ったように頭をかきながら、アル・ハイロオオカミさ  
んが現れました。

背中に藍華・アカズキンちゃんを背負って……

「どうもダブルキャストみたいで……申し訳ない。がお  
がお」

「ご自分が悪いわけでもないのに、アルさんが謝ります。

「アルくんは悪くないわ。こんなお話しが、おかしいの  
よ！」

背中に張り付いた、藍華・アカズキン先輩が、ぶち壊しな  
台詞を言います。

「とにかく、早く終わらせて、ちゃっちやと帰るわよ」

「藍華先輩。やっぱりでっかい我が儘です」

「うっさい。後輩ちゃん。ぐだぐだ言うの禁止！」

藍華・アカズキン先輩は、その可愛らしい格好とは似つか  
ぬ迫力で、私を睨みました。



「んじゃ、まずは藁の家ね。行け！ アルくん」

「はい。藍華。がお」

すっかり藍華・アカズキン先輩に飼い慣らされたアル・ハイロオオカミさんが、

ぷーぷーと大きな息で、茜・長女ブタさんが寝転んでいる藁の家を吹き飛ばしました。

「なにしやがんでえええ！」

茜・長女コブタさんが、アル・ハイロオオカミさんに喰ってかかります。いやいや。

「お姉ちゃん。お姉ちゃん。これ、そうゆうお話しだから！」

アリーチエ・次女コブタちゃんが、あわてて止めに入ります。

「そんなん知るかあ！ 人がせつかく昼寝してるのに。」

それにつ

「そ、それに？」

「それに私はバツジエーオだあああああああああああ！」

お決まりの台詞を言うと、茜・バツジエーオ・長女コブタさんは、藍華・アカズキンちゃん先輩を背負ったまま、逃げ回るアル・ハイロオオカミさんを追って

土煙を上げて、走り去って行ってしまいました。

「……不条理にもほどがあるわね」

アトラ・藁人形カカシ先輩がポツリと言いました。

私も、でっかいそう思います。







と、私を乗せたウツディーさんのエアバイクは、空に舞い上がります。

「アリスちゃん！」

トラゲットズな先輩方が、大きく手を振り叫んでいます。私も別れが辛いです。

「先輩方、いろいろ、ありがとうございましたあ！」

私は日ごろ鍛えた大きな声で、お礼を言います。

「アリスちゃん。あのねえ」

先輩方も大きな声で叫んでいます。

でもその声は、エアバイクのエンジン音にまぎれて切れ切れにしか聞こえません。

「アリスちゃん。しましまあっっ」

【没理由】

すいません。すいません。ホントすいません。

アリス・ファンにシバかれそーなのと、

違う「ARIA」SS小説のパクリになってしまったので

……（激汗）

以上、今回の没ネタでした。

た。

こんなくだないネタにお付き合い、ありがとうございます。

みな様は

「ARIA The ORIGINATION 蒼い惑星のエル  
シエロ」

とゆう PS2ソフトは、ご存知でしょうか？

このゲームの主人公がメインのSSが、2chの「蒼い惑星のエル  
シエロ？」スレッド内に存在します。

とても素晴らしい、読み応えのあるSSです。

もちろん作者は私ではありません。

あのような「凄み」のある話は、私ではとても描けません。

ぜひとも機会があれば、みな様、ご一読のほどを！！

また、このSSを紹介していただいた

「ARIA The AFTER } another stor  
y」

の作者である、流離人さまに改めて感謝の念を！

ありがとうございました。

以上、小さな独り言でした（鹿馬）

U n t e g a m e d i o s c u r r i t a (前書き)

21本目のお話をお届けします。

まあなんだね。　ポンっ（煙草盆に煙管の灰を落とす音）

急に暑いよね。

暑さでみんなダレるよね。

だから中には、こんなお話し、あってもいいよね！？（鹿馬）

作中に登場するアニーこと、アニエス・デユマは、P S 2ソフト「蒼い惑星のエルシエロ」の主人公です。

みな様がこのお話しを読み、少しでも彼女に興味をもたれたならば、これに勝る幸せは、ありません。

それでは、しばらくの間のお付き合い。よろしく願います。



# U n t e g a m e d i o s c u r r i t a

「禁止。禁止。禁止いいい」

「でつかい。でつかい。でつかい」

「つかあー！　つかあー！　つかあー！」

「だからこの事件の盲点は、途中でゴンドラを乗り換えた  
ことにあるのよ」

「やわっこくく　　やわっこくく　　やわあっこくくう」

「うらあつ。サイレンかかってこいやあ！　振り返ちじゃ

あ！

『ミラクル・ガッツ』じゃあー！」

「ほえほえほえへへへえ」

「……なんだ、この修羅場は」

「すっごく楽しそうねえ」

「いや、そう見えるのは、お前だけだから」

「あらあらあら」

## 第21話　「U n t e g a m e d i o s c u r

i t a  
」

「闇鍋ってしてみたいです」

それはアリスちゃんの、この一言から始まりました。

こんにちは。

アニーこと、アニエス・デユマです。

早いもので、私がこの水の惑星「AQUA」に来てから一年ちよつとが経ちました。

ふとした手違いで、あやうくウンディーネになりそこなうところだった私も、希望通り「姫屋」のシングル（半人前）として、毎日、修行の日々を送っています。

そして私をウンディーネへと導いてくれた恩人。

今は引退され、マン・ホームで星間コンダクターとして働いている、アンジェさん。

アンジェリカ・フェルナンデスさんとは、今でも時々、メールでやりとりをしています、

時には励ましの言葉や、時には厳しいお話しも聞かせてくれます。

同室で一緒に寝起きしている、藍華・S・グランチェスタさんや、同じ姫屋のトップ・プリマ。

晃・E・フェラーリさん。社長猫の、ヒメ社長。

そのご友人で、ARIA・カンパニーの「スノー・ホワイト」こと、アリシア・フローレンスさん。

同じく、ARIA・カンパニーの水無灯里さん。アリア社長。

オレンジ・プラネットの「セイレーン」こと、アテナ・グロリーさん。

素適な後輩。アリス・キャロルちゃんに、まあ社長。

いろんな人達との出会いが、私をより強く、より高みへと導いてくれます。

「めぐり合い」とか「偶然」だとか、この星には不思議な力があります。

だから私は、このAQUAが。このネオ・ヴェネツィアが。

そしてウンディーネが。

とつても大好きです！

\*\*\*

「で、急に何を言い出すの？ 後輩ちゃん」

「はい、藍華先輩。実はこの前、マンホームの本を読んだんですが……」

アリスちゃんは、私達を見回しました。

それはある日の午後のことでした。

毎日恒例。

午前の合同練習を終えた私達は、カナル・グランデのそばのカフェで、昼食を取っていました。

そこにはちょうど、休憩時間になって、同じく昼食を取りに来たトラゲットな先輩方。

同じ姫屋の、あゆみ・K・ジャスミン先輩。

アリスちゃんと同じ、オレンジ・ぷらねつとの、アトラ・モンテウエルディ先輩と、夢野 杏先輩もいました。

ちなみにトラゲットとゆうのは、この水の都ネオ・ヴェネツアを逆「S」の字に流れる大運河「カナル・グランデ」を渡る渡し舟のことです。

シングルにしかできないお仕事で、違う会社からのウンディーネが、二人ひと組でゴンドラを操舵する

ちよつと珍しい、お仕事です。

その分、観光名所としても人気はあるんですよ。

私もいずれトラゲット、してみたいなあ……

「アニーさん。私の話、ちゃんと聞いていますか？」

アリスちゃんの鋭い声に、私はあわてて戻ってきました。

「う、うん。アリスちゃん。ちゃ、ちゃんとしっかり聞いてたよ」

「……で、アニーさんはどうなんですか？」

「へ？」

「ですから、やったことはあるんですか？」

「やる？ いったい何を……？」

「やつぱり、でっかい聞いていませんでしたね」

「う……ご、ごめんなさい」

「アニーちゃんの想いや言葉は、時々、お空の彼方に飛んで行っちゃうんだよねえ。 素適」



うのが載っていてね。それがとても面白いパーティーなんですって  
「ここには、そんな風習ないから、とっても興味があるの」  
「杏先輩？」  
「だからさ。今度、みんなで作ってみようって話しになっ  
てね」

「あゆみ先輩。 闇鍋をですか？」

「そう。 だからアニー。 あんたや灯里みたいに、マンホ  
ーム出身者に、どんな風にするか、聞いているのよ」

「うーん。 闇鍋ですかあ……」

藍華さんの問い掛けに、私は顎に人差し指を当て、少し上  
向き加減に考えました。

「私が、お友達とかでやった闇鍋は、各自が持ち寄りたい  
ろんな食材を鍋に入れて、

それを灯りを消した部屋の中で、みんなで食べる。っ  
て云うモノでした」

「持ち寄るのは何でもいいの？」

「はい。何でもOKです」

「何でも……」

「それを真っ暗にした部屋で食べるの？」

「はい。 それでその時、自分がとったモノは、必ず食べ  
なきゃいけない。

ってゆうのが、作法でした」

「作法……」

「ねえ、灯里ちゃん。 あなたのところではどうだったの  
？」

「ええと、アトラさん。 私のトコでは……」

今度は灯里さんが、顎に人差し指を当てます。

「だいたいは、アニーちゃんと一緒にですね。 ちょっと違うところと言えば……」

「言えば？」

「食べるときには部屋を明るくして、お互い何を取ったか確認しながら食べる。」

「ってコトかなあ」

「なるほど。ズルや誤魔化しはなしてコトだな。」

「つかあー。そいつは楽しみだ」

その独特な、人好きのする笑顔を浮かべながら、あゆみさんが言いました。

「でも……」

少し言いくそくに灯里さんが言います。

「あによお。灯里」

「うん。私のところは、月に一回くらいしか闇鍋ってしないから、作法とかは、他のところとは、ちょっと違うと思うの……」

・ 月に一回も闇鍋するんかい！

「まあ、いいわ。とにかく一度やってみましょう！」

私がツッコみを入れる前に、藍華さんが、きっぱり言い切りました。

「じゃあ、明後日。場所は『ARIA・カンパニー』で

いい？」

「はひ。アリシアさんには、私からお願いしとくね」

「でつかい、分かりました」

「あゆみさん達も、それでいいですか？」

「いいわよ」

「らっじゃっ」

「了解！」

「あ、藍華さん」

ふと、思い出したかのように、アリスちゃんが藍華さんに  
言います。

「なに？ 後輩ちゃん」

「アルさん。呼ばなくていいんですか？」

「な。な。な。な。な」

とたんに藍華さんは顔を真っ赤にして叫び始めます。

「なんでこんなトコに、アルくんの名前がでてくるのよ！」

アルさん。

アルバート・ピットさんは、地重管理人。

通称「ノーム」と呼ばれる、ここAQUAの重力を常に1  
Gに保つ仕事をされている方です。

藍華さんの恋人。

相思相愛の（時々、見てて歯がゆくなるほどの）ゆっくり  
とした想いを、藍華さんと重ね合わせる人です。

「お月見の時のように、星といえばアルさん。

そして鍋といえば、やっぱり『きのご鍋』の、アルさん  
ではないのかと……」



『きのこ鍋』

確かにあれは美味しかったなあ……

前に、アルさんに連れて行ってもらった地下世界（ノームさん達の、お仕事場）で食べさせてもらった『きのこ鍋』は、絶品の美味しさでした。

今、思い出しただけでも……じゅるり。  
よだれが落ちてきそうです。

「ですから今回も、アルさんに誘わなくていいのかと……」  
アリスちゃんは無表情に言います。

でも私には分かります。  
きつと灯里さんや、トラゲットズな先輩方にも分かっているんでしよう。

実はアリスちゃんが、そうやって藍華さんをからかっているってこと……

「こ、今回のことは、私達だけでやるの！」  
顔を真っ赤にしたまま、藍華さんは叫びます。

「今回の闇鍋はレディ限定！ 女人以外は立ち入り禁止！  
ま、まあ、もし楽しかったなら、次から呼んでもいいわよ……」

最後は呟くように言う、藍華さん。  
そんな藍華さんに私達は、こっそりと顔を見合わせ、くすくすと笑い合いました。

ホントに素直じゃないんだから……

けれどこの時 -

私達は鍋の達人たる、アルさんと呼ばなかったことを深く後悔することになるとは……

私は想像すらできませんでした。

\*\*\*\*\*

「それでは第1回。闇鍋大会を始めます！」

「わーい」

ぱちぱちぱち

灯里さんの宣誓(?)に、みんなの拍手が起りました。

ARIA・カンパニーの一室。

そこに私達は集まっていました。

みんな一様に具材の入った袋を抱え、わくわくとテーブルの真ん中で湯気上げる土鍋を見据えていました。

ちなみに土鍋は、前にアリシアさんが通販で購入したものだそうです。

今、その土鍋は、カセットコンロの上に鎮座し、中に入れた昆布の良い匂いが漂ってきています。

「あの……灯里ちゃん」

おずおずとー

アトラさんが灯里さんに声をかけます。

「なんですか、アトラさん」

「いや……あのね」

「はひ」

「これ、必要なの？」

「はひい？」

そう言うとアトラさんは、改めて自分の服を見ました。

そこにはとてもコケティッシュで可愛い、メイドさん達の姿がありました。

そうです。

今、私達は全員。メイドさんの服装で、この場にいました。

「ええ？ 何か変ですか？」

「いえ……変てゆうか、なんてゆうか……」

アトラさんは何故か顔を紅らめ、もじもじと体を擦っています。

「ええと……これが闇鍋をいただくときの正装なんですけど……」

「そうなの!？」

「はひ!」

アトラさんの疑問に、躊躇することなく、灯里さんは返事を返します。

「ねえ、アニー」

「なんですか、藍華先輩」

藍華さんがそつと囁くように、私に訊ねます。

「メイド服の話し、本当なの？」

私は改めてみんなを見回しました。

そわそわ　そわそわ

みなさん落ちつかずに、もぞもぞと体を揺らしています。

みなさん、スカート裾や胸元をさかんに気にしています。

みなさん、少し恥ずかしげに頬を染めながら、もじもじしています。

OK！

黒いメイド服に白いフリフリ・エプロン。

少し短めのスカート。

そこから伸びる足には、黒いニーソ。もちろんガーターベ

ルト。

頭に当然、純白のカチューシャ。

(アリスちゃんと、あゆみさんは何故かネコ耳)

もう、みなさん。

壮絶に可愛いメイドさんと化しています。

「はい。もちろんです。藍華先輩」

私は鼻息も荒く、言い切りました。

「闇鍋のときは、この服装になるのが、エチケットなので  
すー!」

もちろん

そんな風習は聞いたこともありませんでしたけど……じゅ  
るり。

「それでは今から灯りを消しますので、みんな各自が持ち  
込んだ材料を、鍋の中に入れてください」

灯里さんが灯り……なんでもないです。

灯里さんの言葉に、みんなは「はい」と返事をする  
と、袋に手を入れます。

「では消します」

真っ暗になりました。かすかに見えるのは、月灯りとコ  
ン口の炎のみ。

私達は鍋の中に持ち寄った具材を入れ始めました。

ドサ・バサ・ドバ・ベチヨ・ジヨワ・ビツタン・ボキ・

ポトン

……なんか一部、変な音が混じっていてような気が……

「じゃあ一度、蓋をしまーす」

すっかり鍋奉行になった灯里さんが仕切ります。

ぱっ

と、灯りが点きました。

みんな、わくわくしながら鍋を見つめていました。

それから鍋が煮える間。

私達は仕事のこと。練習のこと。トラゲットのこと。いつぱいな、お喋りを楽しみました。

「そろそろいいかなあ」

再び灯里さんが仕切ります。

「それではみなさん。お箸をお持ちください。はい。いいですか？

じゃあ今からまた灯りを消します。そしたら中の具材を取ってください。

一度取った具材は、灯りが点くまで絶対に離しちゃダメですよ」

「はい」

と返事をして、私達はお箸を手にしました。

「では、消します」

再びの暗闇。

「じゃあ、蓋を取りまーす」

ガサゴソと、シルエットの灯里さんが動きます。

その手が鍋の蓋に手をかけ、ゆっくりと取り始めます。

とたん

「!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!」

えもいわれぬ匂いに、私達全員が声にならない悲鳴を上げました。

な、なんですか、コレは？

甘いような辛いような。

痺れるような震えるような。

燃えるような凍えるような。

そんな、なんとも表現し難い、匂い。

「さ、っさあ、みなさん。鍋の中にお箸を入れて、食材をつかんでください」

灯里さんが、若干震える声で言いました。

私達は恐る恐る、鍋にお箸を突っ込みました。

…にゅるり

何かつかんだ感触。

なんだろ。これ……

冷たい汗が頬を滑り落ちていきます。

「はい。じゃあ、灯り点けます。みんなそのままですよ」

ぱっ

と。再び灯りが点きました。

-!?

私は自分がお箸でつまんでいるモノを見て、息を呑みました。

お箸の先。

そこにあるものは！

……デロリとした紫色の何か。

他のみんなも引きつった顔で、己がお箸の先を見つめています。

ああ……

確かに入れるモノは何でも良いって言ったけど……

鍋に入れるんですから、それなりに考えましようよ。

つか

せめて食べれるモノを……

「じゃ、じゃあ。みなさん。今、お箸でつかんだモノを

食べましよう」

灯里さんが無理矢理の笑顔で言いました。



「甘いいい」  
「辛っっ」  
「すっぱいいい」  
「にがっ」  
「美味しい」  
「マズっ」  
「はひい」

いきなり阿鼻狂乱の世界が広がりました。

戦

【 1 1 s e c o n d o s f i d a ( 2 回 目 の 挑

「ぬな」  
「ぐがっ」  
「げふっ」  
「あうっ」  
「ひい」  
「がっ」  
「はひい」

【 1 1 q u i n t o s f i d a ( 5 回 目 の 挑 戦 (

「いったい……」  
「誰が……」  
「どんなモノを……」

「いつ……」  
「何処に……」  
「入れたのか……」  
「5W1はひっ……」

】 l l o t t a v o s f i d a ( 8 回 目 の 挑 戦 )

「負けない」  
「負けません」  
「負けるかつ」  
「負けんぜよ」  
「負け…負け……」  
「負けてたまるかあ」  
「はひい」

】 l l d o d d i c e s i m o s f i d a ( 1 2 回 目 の 挑 戦 )

「あはははははは」  
「ふふふふふ」  
「くっくっくっくっ」  
「ぢぢぢぢぢぢ」  
「いひひひひ」  
「ふはははははは」  
「はひひひひっ」

【 11 16 s f i d a 】

「禁止。禁止。禁止いいい」

「でつかい。でつかい。でつかい」

「つかあー！ つかあー！ つかあー！」

「だからこの事件の盲点は、途中でゴンドラを乗り換えた  
ことにあるのよ」

「やわっこく〜 やわっこく〜 やわあっこく〜う」

「うらあつ。サイレンがかかってこいやあ！ 振り返ちじゃ

あ！

『ミラクル・ガッツ』じゃあー！！」

「ほえほえほえへへへえ」

【 11 21 s f i d a 】

「.....」

「.....」

「.....」

「.....」

「.....」

「.....」

「.....はひっ」

【 11 28 s f i d a 】

アリスちゃんが倒れています。

あゆみ先輩が目を開いたまま固まっています。

杏先輩が口から何か白いモノを漂わしています。



影も形も見えません。

によつ。

ヒメ社長。

なに興味深そうに鍋を見つめているんですか？

まあ社長。

闇鍋はアリア社長の「もちもちぽんぽん」で

はありませんよ。

アリア社長。

そんなに、よだれ垂らして……だつ、だめ

です。

みんなつ。

その鍋はつ。

その鍋はっ！

【 11 ( ? ) s f i d a 】

あつっ。

また気を失っちゃってたのかな……うう……なんて凄い闇鍋

まるで本当の『 闇 』に引き込まれるかのような……は

つ。 力。

そうだ、社長ズさん達は……ひっ！

私は思わず息を呑みました。

さつきまで、社長ズ猫さん達がいた席。

さつきまで、灯里さん達が楽しげに座っていた席。

そこには本当の『 闇 』が広がっていました。

真っ黒なドレスの女性が座っています。

黒いヴェールで顔は見えません。

静かにたたずみ、倒れている灯里さんをじっと見下ろして  
います。

でも。

でも私は知っています。

あの人に……あの女性に顔などないとゆうことを！

「噂の君」

藍華さんに聞いたことがあります。

昔、灯里さんを連れて行こうとした、闇の存在。

お墓の島。 サン・ミケーレ島に灯里さんを誘い込んだ、  
喪服の女性。

禍々しき喪服の悪魔。

そしてもうひとり。

「サイレン……の悪魔」

その横には黒い毛皮を着込んだ、貴婦人が座っていました。

サイレンの悪魔。

灯里さんに対する「噂の君」のように。

私の弱さに付けこみ、私を惑わせ、私を『闇』に連れ  
て行こうとした邪悪な存在。

あの時は、アンジェさんや、みんなのおかげで私は戻るこ  
とができた。

でも今は……

今のこの弱った状態では……

彼女達もそう知って、再び私達を『闇』に引き込みにきたのでしょうか。

そのとき私はふと、もうひとつの存在に気が付きました。そのふたりの『闇』に対するかのように、もうひとつの『光』の存在があることに。

視線を向けます。  
そこに居たのは、とても大きな黒い猫さんでした。

大きな黒い猫さん。  
まるでカーニバルのときに着るような、昔の宮廷衣装。  
大きな手には、やっぱり大きな肉球（触りたい！）  
全てを見通すかのような大きな瞳。  
けれど優しい瞳。

その膝に（あきらかに気を失っている）社長ズ猫さん達を優しく寝かせながら、  
ただ黙って、その大きな瞳で『闇』を見つめる黒い猫さん。

これは…この人は、まさか……

驚く私の前で、人ならぬ存在の彼、彼女等は、ゆっくりと鍋に箸を近付けました。

え？

鍋から何かを摘み上げました。

ええ？

そのまま、ゆっくりと口に近付けます。

えええ？

「@く¥+%\$V#!！」

人には理解できない叫び声を上げ「噂の君」がひっくり返ります。

帽子とヴェールが飛び、顔のない顔で悲鳴を上げます。  
ドタバタと転げ回り始めました。

まるで黒いドレスだけが、のたうち回っているかのようにです。

「！！！」

「サイレンの悪魔」も同じような悲鳴を上げ、転げ回りだします。

転げ回りながら、その姿はアンジェさんになったり、黒いネコになったり、また黒い毛皮に戻ったり。

その様はまるで出来の悪い恐怖映像ように不規則で滅茶苦茶な動きです。

あっちにシユビビン。

こっちにシユビビン。

黒い喪服と黒い毛皮が部屋の中を飛び交います。

そしてついに黒い喪服と毛皮は正面から激突すると、その



まま絡み合い、何処かへ、すっ飛んで行ってしまいました。

ドオオオオオオオオオオオ

そしてこの間。

優しい瞳の黒い猫さん。

我等が「AQUAの心」は、その大きな瞳を目一杯広げながら、「濁」とばかりの涙をこぼしていました。

微動だにせず、瞬きすらせず、ただ茫々と無言で泣き続けています。

……なんぞコレ

「ふ……闇鍋が『闇』の存在に打ち勝つとはな……」

「あゆみ先輩？」

あゆみ先輩がネコ耳を揺らしながら、私の横に這い寄ってきていました。

「これで、我々は、あいつらに対抗する手段を得た……」

これでウチらは奴等の魔手から、この世界をま……っかあー……」

まるでどこかの冒険ドラマのような台詞を言いかけた、あゆみさんが、白目をむいて悶絶します。

私も釣られて……気絶……あれ？ 字が違っ

暗転。

「……なんだ、この修羅場は」  
「すっごく楽しそうねえ」  
「いや、そう見えるのは、お前だけだから」  
「あらあらあら」

後から聞いた話です。

仕事を終え、ARIA・カンパニーに連れだって帰ってきた、晃さん。アテナさん。蒼羽さん。アリシアさん。がー  
鍋を囲みながら倒れている私達（メイド服）を見て、  
そう呟いたそうです。

そしてー

\*\*\*\*\*

・ 数日後

「とても楽しかったわねえ。 （実は覚えてないけどお）  
カフェ・フロリアンでのひととき。  
藍華さんが言いました。

「でっかい楽しかったです。 （実は覚えてませんけど）」

「まったく楽しかったわね。　（実は覚えていないんだけど）」

「わくわくで楽しかったねえ。　（実は覚えてないんだよ）」

なあ」

「つかあー！楽しいかったぜ。　（実は覚えてねえんだけど）」

どな」

「はひ。素適んぐで楽しかったです。　（実は覚えてないんですけど）」

アリスちゃん。　アトラ先輩。　杏先輩。　あゆみ先輩。　そして灯里さんも、口々に満面の笑顔で、そう言います。

「楽しかったのか？」

「あゝ、やっぱり楽しかったのねえ」

「そんな風には見えなかったんだが……」

「あらあら、うふふ」

晃さん。　アトラさん。　蒼羽さん。　アリシアさんが言

います。

「それは是非とも体験してみたいのだあ」

「つか、俺様も最初から呼びやがれ！」

「あははは。　それはとても興味がありますねえ」

シルフさん。　サラマンダーさん。　ノームさんが言いま

す。

「っじゃ、今度はみんなでやりましょう。　闇鍋！」

私は元気良く、そう答えました。

……  
……  
でも実は、どれだけ楽しかったか、覚えてないんだよねえ。  
みんなが楽しいって言ってるなら、きっと楽しかったんだ  
よねえ。

なんか忘れてるよなあ。  
てか、忘れてたほうが良い気が………なんでだろう？

\*\*\*\*\*

私の名前は、アニエス・デュマ。　　アニーって呼んでくだ  
さい。

私はいつでも、これからも。

元気いっぱい、このAQUAで生きていきます。  
元気いっぱい、このネオ・ヴェネツィアで、一人前のウ  
ンディーネになるために頑張っていきます。

この星の奇跡を、いつまでも探していきます。  
素適な仲間やお友達。　　先輩方や後輩達と一緒に。

だから、お母さん。お父さん。  
そして、アンジエさん。

これからも私のこと。　　ずっと見守っていてくださいね。

私は何処までも続く、青いネオ・ヴェネツィアの『空』  
Il Cielo・エルシエロ（を見上げました。』

「Un te game di os cur ita  
- la - fine  
（闇鍋）」

「あれ？ 社長ズのみなさん。食べないんですか？ 闇鍋」

「ぶいぎゅううううううう」

「まはあああはあああ」

「……………げふっ」

U n t e g a m e d i o s c u r r i t a (後書き)

実はアニーが登場するお話としては、2ch内に

「ARIA The ORIGINATION 蒼い惑星のエル  
シエロ〜?」

とゆう、とても素晴らしい作品が存在します。

この良作を紹介していただいた、

「ARIA The AFTER another story  
y」

の作者である、流離人さまに改めて感謝を。

そして、みな様にも是非とも読んでいただきたい、オススメの作品  
です。

(読み終えた後、その読み応えの太さに凹む凹む(涙))

あ、ちなみに『ミラクル・ガッツ』なる言葉も、そこからの引用  
です。この言葉だけでも、この作者の方のセンスに圧倒されます

(鹿馬)( )

**A l l e i n g e n g e r** (前書き)

今年もまた『今日』がやってきました。  
今年で4回目の8月4日です。  
そして今年は……

もう2度とオリジナルのアテナ・グローリに逢うことは適いませ  
ん。

このお話しを読んだただけなみな様の心にー

川上とも子 さん

河井英里 さん

おふたりの声と謳が、一瞬でも蘇れば、これに勝る最上級の幸せ  
はありません。

それではしばらくの間、よろしく、お付き合いください。

## Allieingenger

「レッド・アラーム！ グレード（危険度数）最大値！」

「緊急消火装置、作動しません」

「第三隔壁閉鎖不能」

「エンジン圧力臨界まで10分です」

「操舵できません。コース外れて行きます」

「延焼広がります」

「お父様……お母様……」

「490！ 490！ ガイドビーコンに反応あり！」

「もう間に合わん」

「私が行きます」

「臨界爆発まであと5分！」

「待て、伍長！」

「止せ！ 引き返せ！」

「やめろ。アイン！」

「……この子をお願いします」

「490発見つ。白人。女性。推定年齢15。左手肘下から欠損。」

大。他、各所に打撲と思われる痕跡あり。内臓にも障害の可能性・

意識レベル30。脈拍・血圧低下。止血の上、エマージェン

シー・ポッドに収容。



他に140、二名……」

「臨界まであと3分！」

「伍長と合流した。脱出する」

「軍曹つ。通路は炎上中。脱出できません！」

「中尉！」

「分かった軍曹！ 側壁を砲撃で吹き飛ばす」

「みんな固まれ。アンザレインだ！ 伍長！？」

「はい、軍曹。ポッドは私が」

「臨界まで1分！」

「3・2・1 ファイアー！」

「よし。側壁の消滅を確認」

「行け行け行け！」

「さつさと出る！」

「ふかせえー！」

「臨界点突破。爆発します！」

「うわあああああああ！」

「伍長！伍長！ 無事か！？」

「こらアイン、応答しろ！ おい、返事をせんか！」

「このアラインゲンガー！！！」

第23話 「Alleingenger」

「ねえ。知ってた？」

「私もいつもあなたを、そうして見ていたことを……」

「救難隊の英雄かあ……」

穏やかなネオ・ヴェネツアの午後。

いつものように午前の自主練習を終えたあと、灯里達はカフェ・フロリアンで、のんびりと  
カフェオレを飲んでいた。

「どうしたの、藍華ちゃん」

「どうしたんですか、藍華先輩」

「なんなんですか、藍華さん」

新聞を広げ、つぶやいた藍華に灯里とアリスとアニーが訊ねた。

「ぼら灯里、後輩ちゃん。それから、アニー。この記事よ」

「アイン・シュバルツ伍長？」

「アクア・コーストガード？」

「救難隊の英雄？」

「そ。その人がまた活躍したんだって」

「なになに……」

「どれどれ……」

「ほーほー……」

灯里とアリスとアニーは新聞をのぞき込むと、声を上げてその記事を読み上げ始めた。

『アクア・コーストガードの英雄が、再び奇跡を起こした。』

先日発生したアクア近郊宙域での遭難事故で出場した、アイン伍

長は、

爆発寸前の宇宙船から、ひとりの少女を救出した。

……ほええええええ』

『残念ながら他の乗客（この小型宇宙船を所有する夫妻）を助けることはできなかったが

アイン伍長は、その身の危険も顧みず、燃え盛り、軌道もはずれた宇宙船に果敢に突入。

重傷を負った、夫妻のひとり娘の救助に成功したのだ。

……でっかいスゴイ人です』

『アイン・シュバルツ伍長は、これまでも数々の困難な救助を成し遂げ、

多くの人命を救ってきた。

その勇気と行動力は、他の救難隊員達の模範ともゆうべきもので、  
行政府は、これまでの彼の功績を讃え、賞状を授与する予定である。

……素晴らしいですね』

「この人、どこかで見たことあるわあ」

「へえ。何処で？」

「えーと。何処だったかなあ。覚えてる？ 晃ちゃん」

「おいおい。私を知るわけないだろ」

「そうだった」

「お前なあ」

「あらあら……」

「アテナ先輩？」

「晃さん？」

「アリシアさん！」

「ほわあ？」

いつの間にか灯里の背後に立ち、新聞の写真をのぞき込んでいた「水の三大妖精」が  
楽しげに笑っていた。

「水の三大妖精」 それは―

「白き妖精『スノーホワイト』」こと、ARIA・カンパニーの、  
アリシア・フロレンス。

「真紅の薔薇『クリムゾン・ローズ』」こと、姫屋の、晃・E・フ  
エラーリ。

そして

「天上の謳声『セイレーン』」こと、オレンジ・ぷらねっとの、ア  
テナ・グローリイ。

このトップ・プリマ三人を称して呼ぶ言葉。

操舵術。接客。ゴンドリエレ 舟歌。

その全てにおいてネオ・ヴェネツィア・ウンディーネの頂点に立ち、  
誰からも畏怖と尊敬と愛情の眼差しを持って、賞賛される存在。

そしてこの三大妖精は、シングルの時からの親友としても知られて  
いた。

「ところでアリシア。 あの人とは上手くいつてるのか？」  
晃が小声で訊ねる。

「きゅ、急に何を言いだすの、晃ちゃん」  
アリシアが珍しく、あわてた声を上げる。

「いやあ、やっぱり幼馴染で親友の私としては、ちょっと気になるんだよな」

「あ。私も私も」

「もう、ふたりとも……」

小悪魔的な笑みを浮かべる晃。

くつつたのない笑顔を浮かべるアテナ。

そんなふたりの視線に、頬を染めながらアリシアが答えた。

「今度の『海との結婚』の時に、指輪をいただけるそうなの……」

「おう？」

「それって……」

海との結婚。 それはー

ここ水の都市「ネオ・ヴェネツィア」で四年に一度開かれる水の祭典。

サンマルコ広場の岸边を目指して、何百艇ものゴンドラがパレードし、

最後には総督ドーチェの乗る巨大なお召し船、『ブチントーロ』から、ゴンドラ協会の会長が

取り巻くウンディーネ達と共に、指輪を海に投げ入れ、市民の前で海との結婚を誓う。

と、ゆう、カーニバルとはまたひと味違った、水の都、ネオ・ヴェネツィアならではの象徴的なお祭りだった。

そしてその時、ウンディーネ達から放たれる指輪は、身近な人からもらうのが慣しで、

一般的には父親から。けれどなによりも恋人からもらうのが、ベストとされていた。

つまり……

「そうか。結婚でもお前に先を越されるのか」

「そ、そんな晃ちゃん。まだ結婚だなんて……」

「ううん。アリシアちゃん。幸せになつてね」

「アテナちゃんまで……ありがとう。あ。でもこのことは……」

「ああ。もちろん内緒にしておくさ」

晃はそつと灯里達を盗み見た。

彼女の後輩達は、こちらの会話に気付きもせず、さっきの新聞記事について未だに騒いでいた。

「このことは、私達だけの秘密ね！」

アテナが、フン！ とばかりに胸の前で腕を組み、うなずいた。

「ところで、晃ちゃんやアテナちゃんは、どうなの？」

お返し！ と、ばかりにアリシアがふたりに訊ねる。

「うーん。私はまだウンディーネの仕事が楽しいからなあ……」

晃が手で顎を支えながら言う。

「晃ちゃんは、女の人からよく、お付き合ひ、お願いされるのよねえ。あうつ。痛い痛い」

「よけいな事は言わんでよろしい」

晃がアテナの手の甲をつねりながら、憮然と言った。

「あらあら……」

「そうゆうお前はとうなんだ？ アテナ」

「はづうう。 私は……実は……」  
晃につねられた手の甲に息を吹きかけながら、アテナが言いよどんだ。

「おっ。もしかしてそうなのか？」

「アテナちゃん？」

晃とアリシアが身を乗り出す。 だが――

「ぜんぜん、気配もないわね」

空を見上げながら、轟然と言い切るアテナ。  
晃とアリシアは盛大に、ずっこけた。

\*\*\*

アテナの唄が運河に響く。

「セイレーン・天上の謳声」が、ネオ・ヴェネツアに響き渡る。

その歌を聴く全ての人達……いや、猫や犬や鳥達でさえ口をつぐみ、アテナの歌をじっと聴いていた。

あ………

アテナは気付く。

今日も気付く。

帰り道。

オレンジ・ぷらねつと近くの水路の脇。

海に沈む夕陽に染まりながら、ひとりの男性がじっとベンチにたたずみ、自分を見ていることに。

最近よく見かける、あの人。

いつもじつと、私を見てくれている、あの人。

アテナはなんとなく好きだった。

その瞳。優しい眼差し。

いつも恥ずかしそうに私を見つめてくれる、その瞳。

・今日も見えていてくれる……

通り過ぎてから気が付いた。

あ的人是……

男は、いつまでもその余韻にひたっていた。

さつき目の前を通り過ぎて行ったゴンドラ。

そのゴンドラを操るウンディーネ。

アテナ・グローリイ。

「セイレーン」の通り名を持つ、トップ・プリマのひとり。

今日も彼女の謳声を聴けたのは幸이었다。

男はゆっくりと瞳を閉じる。

目の前に迫る業火。

崩れてゆく隔壁。



不規則に揺れる船内。  
軋む構造物。

そして―

男はそつと左手で右手を押さえた。

「こんばんわ」

不意の声に振り返ればそこに、セイレーンの笑顔があった。

「……………!?!」

「隣に座ってもいいですか?」

返事もできずに固まっている男の隣に、アテナはごく自然な仕草で、ゆっくりと腰を降ろした。

アテナはそつと、男の横顔を盗み見る。

一見して無口な人だと分かった。

不器用そうな表情。

頑固そうな瞳。

意思の強そうな、真一文字に閉じられた唇。

いつも何かを考えているかのような、眉間の皺。  
がっしりと握り締められた太い指。

ひとめでアテナは引きつけられた。 けれど……

微かに震えている?

「いつもここに座っていますね」

アテナは訊ねる。



「最近よくここに座って、私の歌を聴いてくれていますね」  
「つこりと男に微笑みかけながらアテナは言った。

「いつも、すっごく熱い視線で私を見てくだっていたので……ふふ  
ふ。」

正直ドキドキしていました」

「……………あなたの謳は」

男は静かに言葉を紡ぐ。

「あなたの謳を聞いていると、心が安らぎます。　心が落ち着くの  
です」

「ありがとうございます。　あの……………」

「はい」

「今度、私のゴンドラに乗っていただけませんか？

私、喜んでいっぱい謳わせてもらいます。　アインさん」

「！？　どうして自分の名前を……………」

「私だって新聞くらいは読みますから。　ふふふ。」

アイン・シュバルツ伍長……………アクア・コーストガードの英雄さん」

「…自分は英雄では、ありません……………自分はただのアラインゲンガ  
ーです」

\*\*\*\*\*

・バキッ

どんがらがっしゃんあんん！

派手な音を立てて、アインの体がひっくり返る。

コーストガード基地。 格納庫の隅。

今しも救助作業から帰還してきたアインを、軍曹が呼び出し、殴りつけたのだ。

「立て！ この野郎っ」

軍曹が胸倉をつかむと、片手一本でアインの体を持ち上げた。

「いいか、よく聞け、伍長！」

噛み付かんばかりの距離で、軍曹が叫ぶ。

「俺の隊に英雄はいらん！ まして英雄と呼ばれ、いい気になってる奴もだ！」

この日。

アインはまたもや軍曹や隊長である中尉の命令に背き、ただひとり。爆発、炎上する宇宙船に乗り込み、幾人もの乗客の救助に成功していた。

だが―

「俺たちは16人で行って、16人で帰ってくる。 ひとりの欠損も許さん」

「……………」

「俺たちが気をつけなければならんのは、なによりも二次災害を防ぐことだ。」

助けに行つた我々が、遭難してはならんのだ。  
救助者の俺たちが遭難する事は、決して許されんのだ！」  
軍曹が憤怒の表情で叫ぶ。

「お前の行動は仲間を不必要な危険にさらす。  
俺の大切な部下を、お前の勝手な行動で失うわけにはいかん！  
そんなことで俺の大事な部下を失うわけにはいかん！  
もちろん、それはお前もだつ。  
分かつたか！ アイン！  
分かつたのか！ このアラインゲンガー！！」

「アラインゲンガー？」  
アテナが首を傾げながら訊ねた。

「アラインゲンガー……」  
元々は山岳用語で、ただひとり、パートナーやアシストもなしに  
山を登つて行く人のことです」  
アインは途切れ途切れ、ゆっくりと喋った。

「自分はよく単独行動を取るの、みんなから、そう呼ばれていま  
す」  
「それって危なくないんです？」  
「……危険です。危険ですから、なおさらパートナーは連れてい  
けない」  
「……………」  
「単独で……ひとりであれば何が会っても責任は自分ひとりですみま  
す。」

けれどパートナーがいれば、その安全も確保しなければならない。

そんな余裕はない。

それでは迅速に行動できない。

そうなれば助けられる命も助けられない」

「……お優しいんですね」

「……………」

「仲間を……お友達を傷つけないから、ひとりで行く。お優しいんですね」

アテナの微笑がまぶしくて、アインはそっと視線をそらした。

「自分は優しくなどありません。ただアラインゲンガーだけで

……………」

「ねえ、アインさん」

「はい」

「アインさんは、どうしてそんなことをするんですか？」

アインはゆっくりと瞳を閉じた。

目の前に迫る業火。

崩れてゆく隔壁。

不規則に揺れる船内。

軋む構造物。

そして――

泣き叫ぶ遭難者達。

「この前、自分はひとりの少女を救助しました……………」

あの新聞記事の子だ。　アテナは無言で頷いた。

「自分が駆けつけたとき、少女はすでに意識を失っていました。けれど、

そんな彼女を母親がしっかりと守っていたんです。　自分自身は重傷を負いながら……」

アインは目を開けると、そのまま自分の手を見下ろした。しっかりと膝の上で組まれた、己が両手を……

「母親は自分に言いました。

『この子をお願いします』と。

そのときすでに、船は爆発寸前でした。　とてもふたりともを助ける余裕は……

ですから自分はトリアージ（選択）しました。

娘の方を選んで、エマーゼンシー・ポッドに入れたんです。

母親を……

まだ息のある母親を、見捨てて。

もしかしたら助かったかもしれない、その母親を」

今やはつきりとアインの手は震えだしていた。

指が白くなるほど、きつく握り締めているにもかかわらず、その手はぶるぶると震えだしていた。

「自分は今までそうして、何度も助けられたかもしれない命を見捨ててきました。

泣き叫びながら助けを求める命を。

絶望に打ちしひがれながらも、必死に生きようとする命を。

自分に向かって、救いを求め手を伸ばす、その命を。

そんな命を見捨てて、自分はいつも、そこから逃げ出してきたんです」

そんな命を見殺しにして、自分はいつも生き永らえてきたんです。  
自分は……」

やがてその手の震えは全身へと移り、今ではアインはその全身を震わせていた。

ぼふん - と

アテナの紫がかかった銀色の美しい髪が、震えるアインの肩に寄りかかる。

「あ、アテナさん？」

「このまま私の話しを聞いて……」

アインの手にアテナの手が被さった。

ぶるぶると震えるアインの手に、アテナの柔らかかな手が、そっと添えられた。

「私達ウンディーネも、アラインゲンガーなんですよ」

「え？」

アテナがゆっくりと謳いだした。

I           Ogni   qualvolta   canto   le   m  
ie   canzoni  
          sul   palcoscenico   su  
ny   possieda  
          Io   il   genere   degli   p  
iacque   il   suo   modo



e i  
.....  
C h e i o a v e s s i i l m i o s u l

その謳は夕闇迫るネオ・アドリア海に響き渡る。

I C a r o c o s i l a L e i e  
C o m e s e s u o m a i i l m a l e  
C o m e s e s u o m a i i n g g i u

低く、小さく。

けれどその柔らかな謳声は、どこまでも広がってゆく。  
アインの心にも、ゆっくりと、静かに広がってゆく。

- C o m e i o L e f e c c i s a p e r e  
I o s o n o p i u p o i i l v e s t i t  
o e l a v o c e.....

助けを求め、泣き叫ぶ人達の声。 声。 声。

そんな地獄の光景を彼女の歌は.....

アテナ・グローリーの謳声は、優しく取り去ってくれる。

まるですべての悪夢を取り去ってくれるかのようじ。

I C h i L a p i z z i c a l e g g e r m e n t  
e m a s i c u r o  
I o s a p r o c h e L e i n o n e s o  
g g n a t o r e.....

アインの震えが、ゆっくりと消えてゆく。

「謳うときはいつも、私達はひとりきりです」

謳い終え、アインの肩に頭を乗せたまま、アテナが静かに言う。

「どんなことがあっても、どんなトラブルがあっても、ゴンドラ・クルーズ中は、私達もひとりきり」

「……………」

「でもだからこそ」

「ありがとうございますー」と告げた時の爽快感。

「ありがとうございますー」と言ってくくださった、お客様に対する達成感。

「またねー」と何度も手を振りながら帰って行く、お客様に対する幸福感。

そんな喜んでいただけた、お客様からいただく感謝の言葉。 笑顔。

「それがとても嬉しい。それがとても幸せ」

「……………」

「ねえ、アインさん。あなたに助けられた人も、そうだと思います」

「……………」

「あなたに助けられた人は、みんな、あなたに感謝しています。喜んでいきます。」

「けれど、自分は……………」

「その少女のお母様も」

「……………え？」

「その少女のお母様も、きっとあなたに感謝しています。自分の娘を助けてくれた、あなたに……………命がけで娘の命を救ってくれた、あなたに。アラインゲンガーに」

「アテナさん……………」

「アテナって呼んでください」

「え？」

「私も、アインって呼びますから……………ね。アイン」

「あ……………いや……………」

「アインは、いつもこの場所で、ずっと私の歌を聞いてくれてた。アテナはアインに寄り添いながら言葉を紡ぐ。」

「アインは、ずっと私のこと見つめてくれてた。」

「そんな穏やかなアインの瞳に見つめられて、私、どれだけ嬉しかったか……………」

「どれだけ幸せだったか……………」

「アテナさん……………」

「アテナです。ふふふ。」

「ねえ、アイン。」

「あなたはそこで相変わらずな表情で。」

「あなたのいつものその変らぬ表情で。」

「傷ついたりしないかのような。」

「落ち込んだりしないかのような。」

「なんの苦痛も苦悩もないような、その瞳で。」

ずっとひとりで……アラインゲンガーで。

でもね、アイン。

これからは、私にも分けて。

それが、涙をこらえる苦惱なら、それでもいい。

それが、なにかに怯える恐怖なら、それでもいい。

それが、なにかに耐える悲しみなら、それでもいい。

いつかそれが、アインの幸せに……喜びに変わるまで。

ずっと私と分かち合って……」

「アテナさん……」

「アテナです」

そう言うと、アテナはアインの腕に、自らの腕を絡ませた。

「まるで夢を見てるようだ……」

「はい？」

「セイレーン。天上の謳声として知られるアテナ・グローリィと、こうしていられるなんて……」

「私は制服や謳だけで、できているわけじゃない」

アインにもたれかかったまま、アテナが甘えたように告げる。

「私もただの、ひとりの女の子」

私もただの、アラインゲンガー。  
私もただの、アテネ・グローリイなんですよ」

「アテナさ……………痛っ。アテナ？」

アインが小さな悲鳴を上げた。

アテナが、重ねたアインを手の甲を、軽くつねったのだ。

「ふふふ。やっとアテナって呼んでくれた。ねえ、アイン。  
痛かった？」

「あ、ああ……………」

「それじゃあ……………」

アテナは、にっこりと微笑んだ。

「じゃあ、これが夢を見てるんじゃないって、分かってくれたわね」  
「アテナ……………」

「ねえ。知ってた？」

私もいつもあなたを、そうして見ていたことを…………

燃えるような夕陽が、ふたりを染めていた。

その輝きは水の都、ネオ・ヴェネツィアを、どこまでもオレンジ色  
に染め上げていた。

その茜色の夕陽の輝きの中。

アインとアテナ

ふたりは、まるでひとつの……………ひとりのアラインゲンガーのように。

離れること無く、長く強く、その影法師をどこまでも伸ばしていた。

\*\*\*

「状況を説明する」

仁王立ちながら、指揮官である女性士官が声を上げた。

「アクアの衛星軌道付近で、観光用の小型クルーズ船が事故を起こした。」

エンジンのトラブルで出力が上がらないらしい。

このままでは、アクアの大気圏に急角度で再突入。摩擦により炎上、崩壊してしまうだろう。

その前に、乗員・乗客すべてを救出するのが、今回の任務である。「どれくらい的人员が乗っているんです？」

軍曹が手を上げ、質問する。

「……乗員・乗客、合わせて五十人」

「!？」

「ああ、その通りだ、軍曹。」

明らかに定員オーバーだな。だからこそ機関故障なんざ起こしたんだろう」

「残り時間は、どれくらいですか？」

「おおよそ、30分」

全員の表情が固まった。

「そつだ。あまり時間はないぞつ。各員、いつも以上に迅速に行動しろ。」

何か質問は？ …… よろしい。時間がない。いますぐ準備にとりかかれ！」

「『アイ、ショーティ！』」

「軍曹。アンザレイン（相互確保のため、1本のザイルに複数の間が結び合うこと）」

「お願いします」

「ほう……アラインゲンガーは止めか？ アイン伍長」  
軍曹が揶揄するように言う。

だがアインは、何も言わずにザイルを自分と軍曹のカラビナにかけると、

そのまま待機室の固い椅子に座り込む。

そんなアインの様子に、何故か安堵したような笑みを浮かべると、  
軍曹もその隣に

ゆっくりと腰を降ろした。

「こちらはアクア・コーストガード所属、哨戒艇『フーケ』。

これより貴船の救助を開始する。

こちらの誘導に従い、速やかに救命艇で脱出せよ」

「娘が、娘がいないんです！」

「落ち着いて。落ち着いてください。奥さん」

「伍長、どうした」

「中尉。この方の娘さんが行方不明だそうです」

「あの子はきつと船室に戻ったんです。　あの子の大切にしていた、ぬいぐるみを忘れてきたので」

「『フーケ』状況は？」

「はい、中尉。」

救助はほぼ終了。　その救命艇が最後の一隻です。

大気圏再突入までの残り時間は、あと10分」

「よし。総員退艦。　『フーケ』まで戻れ！　女の子は……」

「私が行きます」

アインが叫んだ。

「自分も行きます」

「軍曹？」

「こいつとはアンザレインで結ばれてます。　アラインゲンガーにはさせませんよ」

「……分かった軍曹。　必ず戻ってこいよ」

「アイ・シヨーティー！」

「パパー！　ママー！」

軍曹とアインは、泣いている少女を、最深部の通路で発見した。

どうやら道に迷っていたらしい。

その手の中には、薄汚れたぬいぐるみが大切そうに抱きしめられていた。

「490！　490！（要救助者）　発見！」

「お嬢ちゃん、もう大丈夫だよ。　さあ、パパとママの所に行こう」  
アインの言葉に、少女は涙を拭きながら、そっと頷いた。



「伍長、時間がない。その子はそのままポッドに入れて運ぶぞ」  
「アイ・フェロー。わっ!?!」  
突然、船体が激しく傾いた。

「……くっ」

咄嗟に女の子をかばった軍曹が、足首を抱えて呻き声を上げる。

「くそつ。足を痛めたようだ」

「軍曹。聞こえるか軍曹。どうなっている。おい。返事をしろ」

すでに「フーケ」への退避を完了し、全体の状況を見ていた中尉が叫ぶ。

「軍曹。こら、どうした。答えろ！返事をせんか、軍曹！」

「聞こえてるよ、アン。そう怒鳴るな」

「軍曹。任務中は階級に敬意を払え！」

「はいはい、中尉殿。状況報告。490発見。ポッドに収容。これより離脱」

「急げ、軍曹。船の角度が変わった。予想より早く、その船は大気圏に再突入するぞ」

「軍曹、その子と一緒にポッドに入ってください。私が搬送します」

「なに言っでやがる」

だが軍曹にも分かっていた。

それが一番ベストな選択であることに。

だから渋々ながら彼はポッドの中に入り、女の子を抱きしめた。

「もう大丈夫だ。泣かなくてもいいよ。」

あの男はコーストガードの英雄だからね。

ちゃんと君をパパとママの所に連れてってくれるからね。

それまで、おじちゃんと一緒にいよう」

軍曹の優しい言葉に、女の子は、ぬいぐるみを握りしめながら頷いた。

「よし、行け。 伍長。 ポッドへのアンザレインは解くなよ」

「……アイ・フェロー」

アインはポッドを引きずりながら、素早く通路を移動して行く。

だが―

それでも遅かった。

「軍曹！ 大気圏突入まで、3分だ。 急げ」

「中尉。 船倉で火災の発生を確認。 爆発的に広がりつつます」

「消火装置は!？」

「作動確認できず。 隔壁も閉鎖しません。 ええい。 くそっ。

あのボロ船め!」

「営利優先のツケか……帰ったら、このクルージング会社、ただじや済まさん。

軍曹、急げ。 もうその船は火に包まれるぞ」

アインは全力で走った。

ポッドを引きずりながら、全力で走った。

背後から劫火が迫ってくる。

間一髪。

エア・ロックの中に逃げ込む。

閉じた隔壁の向こうで、炎が舞い踊る音が響いていた。

安堵のタメ息をつく暇もなく、アインは宇宙そふにつながる隔壁を開け

て……怯んだ。

そこもすでに炎に包まれていた。

大気圏に再突入し始めていたのだ。

絶望的に見上げるその視線の先。

信じられぬ程の近距離に「フーケ」の姿があった。

彼等を助けるために、安全を無視して強引に近寄ってきたのだ。

「軍曹。いや、アイン伍長。今からアンカーを射出する。

それに捕まって脱出しろ！」

ーポムッ

と、「フーケ」のアンカー（碇）が打ち出された。

それは狙い違わず、エアロックの近くに突き刺さる。

「急げっ。もう時間がないぞ！」

中尉が怒鳴る。

すでに視界は紅く染まり始めていた。

宇宙服を通して、熱気がジワジワと伝わってくる。

アインはアンカーの先端をポッドのフックに引っ掛けた。

「OKです。回収してください」

「了解。巻き取れ。慌てるな。ゆっくりとだ」

ークンッ

と張力が働いて、アンカーが引っ張られる。

それに釣られて、ポッドもゆっくり動きだした。

アンザレインされた、アインのザイルも徐々に伸びていく。

なんとか間に合う

そう誰もが確信したとき―

「わっ!？」

突然、船が傾いた。

大気圏再突入の衝撃で、バランスが狂ったのだ。

小規模な爆発も起こり始める。

そのひとつに巻き込まれ、アインは激しく船体に叩きつけられた。

遠のく意識を必死にたぐり寄せ、目を開いたアインの瞳に映ったものは、最悪の状況だった。

叩きつけられ影響で、足と左手が何処かに挟まっている。

右手の自由はきくものの、身動きはまったくできない。

「ごぶっ

と、口の中に血が吹き上げかける。

内臓まで痛めたようだ。

アインは必死にその血を飲み下す。

宇宙のような無重力空間で吐血してしまえば、その血自体で窒息し  
かねない。

そして気付く。

エマーゼンシー・ポッドは？

あわてて宇宙に目をやれば、そこには不安定に揺れるポッドの姿が  
あった。

軍曹と少女を乗せたポッドは、自分にアンザレインされたザイルと、

「フーケ」からのアンカーに引っ張られ  
中途半端な位置で漂っている。  
その表面は大気との摩擦熱で、不気味に紅く染まり始めていた。

パパー！ ママー！ 恐いよー！  
少女の泣き叫ぶ声が聞こえてくる

できることは、ひとつだけだ。

「よせつ。アイン！」

「止めろっ。 伍長！」

軍曹と中尉が同時に叫んだ。  
だがアインに躊躇はなかった。

唯一、自由になる右手でナイフを引き抜くと、すっぱりとザイルを  
断ち切る。

引っ張られる片方を失って、軍曹と少女を乗せたポッドが、アンカ  
ーに引かれ離れて行く。  
しかしそれはまた、アインを助ける術をも失くしたということ……

「アイン！ 馬鹿野郎！」  
軍曹が叫ぶ。

「伍長！ 伍長！ 伍長！」  
中尉も叫ぶ。

分かっている。  
分かっていた。

誰もが分かっていた。

それ以外、方法がなかったことに。  
それ以外、少女を助ける術すべがなかったことに。  
救難隊の隊員ならば、誰もがそうしたのであることに。

それでも彼・彼女等は叫んでいた。  
声のかぎりに叫んでいた。  
燃えゆく船にたったひとり残された、アインに。  
たったひとり落ちて行く、アイン・シュバルツに。

アラインゲンガーに

ふと。

アインは誰かに呼ばれたような気がした。  
ゆっくりと目を開けるとそこは、一面のオレンジだった。  
まるであの時。

彼女と見た夕焼けのように。  
どこまでも茜色で。　ただ紅色で。

- 燃える自然ってどうしてこんなに美しいのかしら……

そんな言葉が蘇える。

― 美しい

それは何よりもあなたのことだ。  
アインは思う。

美しい褐色の肌  
美しい紫色の髪  
美しい蒼色の瞳  
美しい天上の声

そして何よりもー

美しいその心

そっと寄り添ってくれた、その心。

全身を紅く染め上げながら、アインは……  
アラインゲンガーは、満ち足りた想いで、そのオレンジをじっと見  
続けていた。

\*\*\*

「あ、あれ。あそこ！」  
夕闇迫る空の一点を、アニーが指差した。

「どうした、アニーくん」  
「あゆみさん、あそこ。ホラ。みんなも見てください。流れ  
星！」

茜色に染まる空に負けなくらいのオレンジが、まっすぐに流れ落  
ちて行く。

「本当！ 急いでお願いしなきゃ！！」

灯里が、あわてて両手を合わせる。  
つられたように、あゆみ達も、アリシア達も、社長ズ達でさえ、両手を合わせ目を閉じた。

「ねえねえ。みなさん、何をお祈りしたんですか？  
アニーが訊ねる。

「みんながいつまでも仲良しでいられますようにって。 えへへ」  
「あ。私も同じです。 いつまでも、ずっとお友達でいられますようにって」

「はい、そのふたりい。 恥ずかしいセリフ禁止い！」

「『ええ』え 『』」

「そうゆう藍華さんは、何をお祈りしたんですか？」

「わ、私は別に何も……」

「恐らく、アルさんのことですね」

「な。な。な。なにを言いやすか、後輩ちゃん！」

「……こんなに分かりやすいのも、でっかいありません」

「ぎゃああああーす！ 禁止！ 禁止！ 禁止い！」

「うふふ。晃ちゃんは何をお祈りしたの？」

「私は個人的なことは祈らん。 このネオ・ヴェネツィアの発展を願っただけだ。

「……で、アリシア。 お前は、あの人のことだろ？」

「あらあら……いい、嫌だわ、晃ちゃん」

「照れるな。 おい、アテナ。 お前はどつなんだ？」

「え、私？ 私は……」



アテナは心から祈った。

- あの人が幸せでありますように

(  
r - l a - f i n e  
r A l l e i n g e n n e r  
) 単独行者

## A l l e i n g e n g e r (後書き)

自分じゃハイキングすらしないくせに、いわゆる「山岳小説」を読むのが好きです。

この「アラインゲンガー」はそんな小説のひとつ。

戦前に活躍した登山家・加藤文太郎の生涯を綴った、谷甲州氏の同名小説から取りました。

加藤文太郎は昭和初期。

まだまだ冬山登山が上流階級のスポーツで、しかもグループ登山が主流であった時代に、

貧弱な装備で、たった一人、厳寒期の冬山に挑み、ついには「単独行の加藤」「不死身の加藤」

そして「孤高の人」

とまで称された人でした。

最終的に彼は、冬の槍ヶ岳で遭難死（皮肉にも、単独ではなく、パーティーを組んだ上の遭難でした）

してしまうのですが、その業績は小説やドラマなどで紹介され、いまや伝説の人となっています。

もし、みな様がこのお話しを読んで、少しでも彼に（そして山に）興味をもたれれば幸いです。

んでー

今回の奨励BGMは、ファイナルファンタジー8の主題歌。

「Eyes On Me」です（ゆーてもた!）

いろいろ言われるFF8ですが、ラストのこの曲からED「レクイ

エム」(まさに!)にかかる流れは  
最高に好きな演出のひとつです(笑)

特にその一節。

「I'm more than the dress and  
the voice」(私は、ドレスと声ばかりじゃない)  
って歌詞を読んだときに、このお話しはできました(笑)  
ちなみに本編は、イタリア語変換です(大鹿馬)

最後に今回のお話しの主役「アクア・コーストガード」の設定を、  
快く使わせていただいた、

「片腕のウンディーネと水の星の守人達」の作者。  
omega12様に、最大限の敬意と感謝を。

師の作品は、SS投稿サイト「Arcadia」の「その他」板で、  
見る事ができます。

師の作品の万分のいちでも、素晴らしさを共有できたのであれば幸  
福です。

もちろん、本編での、アクア・コーストガードに対する不自然な箇  
所、間違い等は、  
すべて、一陣の風の責任です。

はあ……言い訳はこれくらいかな?(鹿馬)

お心治しに、河井英里さんや、川上とも子さんの謳を聞いていただ  
けるなら、十全です。

ではまたよろしければ、次回もお読みください。

ありがとうございました。

U n G u i d a i s t r u t t o r e (前書き)

人を叱るのって難しい。

みなさま、ご無沙汰しております。

ようやく世間が涼しくなり、トロケかけた緑色の脳細胞も、どうにか固まり始めました。

こんなカビた脳細胞しか持たない私ですが、これからも変わらぬ御鼻負のほど、よろしくお願いします。

もちろん叱っていただいても結構です(鹿馬)

それでは、しばらくの間、よろしくお付き合いください。

「よろしく。アリスちゃん」

「よろしくねえ。アリスちゃん」

「アリスさん。よろしくお願いします」

「は、はい。きよ、今日は一日、よろしくお願いします」

我等が「オレンジ・プリンセス」こと、アリス・キャロル  
ちゃんは、そう言うと下を向き、  
頬を紅色に染めました。

……くう。かわいいぜ。

第 22 話 「 U n G u i d a i s t r u t t o r e 」

「今日も気持ちのいい、お天気ねえ」

「うん。とっても良い陽射し」

「はい。風も気持ちいいです」

こんにちは。

アニーこと、アリエス・デユマです。

いろいろあって、あやうくウンディーネに成り損ねるとい

ろだった私が、

なんとかオレンジ・ぷらねっとのウンディーネとして、ゴンドラを漕げるようになって、早。一年。

つい先日、見習いの「ペア」から、半人前の「シングル」へと、昇進することができました。

これも全て、素適な先輩であるアテナさん。アトラさん。

杏さん。

指導教官の蒼羽さん。

そしてアリスちゃんのおかげです。

私、アニーことアニエス・デユマは、これからも一人前の「プリマ」めざして頑張ります！！

\*\*\*

「ほら、アニーちゃん。見て見て。あそこ。海鳥さん

達があんなに

「あ、ホントだ。杏先輩。すごいですねえ」

「へえ。あんなに海鳥が舞ってるなんて。魚の群れでも

いるのかしら

「魚がいると、海鳥さん達が舞うんですか？」

「ええ。だから昔から漁師さん達の格言に、

『魚の群れを見つけたければ、まず、海鳥を探せ』」

て云うのがあるのよ

「へええ。さすがにアトラ先輩は博識ですね」

「うふふ。ありがとう」

「あれえ。アトラちゃん、照れてるのうううふげっ」

「いらんこと言う、余計な口は、この口か!? この口か  
ああああっ」

「ふげげげえ」

「……あの」

「ん? なに。アリスちゃん」

「そ、そろそろ、指導を始めたんです……けど……」

私達の会話に、アリスちゃんが水をさしました。

私達は口をつぐむと、ジト目でアリスちゃんを見返しまし  
た。

そうです。

今日は、アトラ先輩。杏先輩。

それに私が、先日めでたく「ペア」から「プリマ」へと、  
ウンディーネ業界初の二階級、飛び級昇格したアリスちゃ  
ん……いえ「オレンジ・プリンセス」の  
ゴンドラ指導を受ける日なのです。

「はいはい。それじゃあ、私からでいいですよね?」

アトラ先輩が突き放したように言います。

アトラ先輩。

アトラ・モンテヴェルディ先輩。

赤味がかつたブラウンの長い髪。ポニーテール

治療法が確立されているのもかわらず、決して手放さな

い眼鏡。

その奥に知的に輝く、紫の瞳。

さっきの海鳥の会話でも分かるように、その知識は多方面に、しかも豊富に広がっています。

人呼んで「オレンジ・ぷらねっと、いちの名探偵」  
とても頼りになる、優しき先輩。

「よおーしつ。アトラちゃん、しゅっぱーっ!」  
杏先輩が右手を挙げ、陽気に叫びます。

杏先輩。

夢野・杏先輩。

黒い髪のショートなボブ。

その髪と同じ色の瞳。大きな、くりくりとした瞳。

小さなお鼻。

知的なアトラ先輩とは間逆の、コケティッシュで、あどけない、お顔。

陽気で明るくて、でも「やわっこく、やわっこく」を信条とする、本当は芯のとても強い人。

ムード・メイカー。

とても素適で、朗らかな先輩。

今はおふたりとも半人前の「シングル」だけど、プリマ昇進は時間の問題。

ーと、言われる程の素晴らしいウンディーネさん達です。

でも



\*\*\*\*\*

「ゴンドラ通りまーす。おっとつと……」

「アトラ先輩!？」

曲がり角。ゴンドラが不必要に傾きます。

あわてて修正するアトラ先輩。

「ごめん、ごめん。アリスちゃん。次はちゃんとやるわ」

苦笑いを浮かべるアトラ先輩。

「よおーし。次こそは決めるわよお」

そう元気良く言い放つと、アトラ先輩は再び強くオールを漕ぎ出しました。

「アトラ先輩……」

「ん？ なに、アリスちゃん」

そんなアトラ先輩に、アリスちゃんは何か言いかけ、でも結局は何も言わず、口を閉じます。

そんなアリスちゃんの様子に、私と杏先輩は、そつと顔を見合わせました。

「このサン・ジョルジョ・まっちゃ……違つ。まっちょ

……でもない。ええと……」

「杏先輩。マツジョーレです。サン・ジョルジョ・マ

ツジョーレです」

「ああ。そうそう。それぞれ。ごめんアリスちゃん。

噛んじゃった。えへへ」

杏先輩が舌を出しながら笑います。

「ネオ・ヴェネツィアってば、言いにくい名前の名所が多  
くって」

「それ、分かります。 サンタ・マリア・デッラ・サル  
テ聖堂とか」

「うんうん。 そうよね、 アニーちゃん。 スフォリアテッ  
シとかね」

「杏。 それはお菓子でしょ」  
アトラ先輩のツツコみに、私達の笑い声が弾けます。

「あの……杏先輩」

「なに、アリスちゃん」

何事かを言いかけるアリスちゃんを、杏先輩が正面から見  
据えます。

くりくりとした杏先輩の瞳が、アリスちゃんを真っ直ぐ  
に見据えます。

「……いえ、なんでもないです」

アリスちゃんを黙って下を向いてしまいました。

私とアトラ先輩は、そっと、顔を見合わせました。

「アニエス・デユマ。 行きます！」

私達を乗せたゴンドラは、いよいよネオ・ヴェネツィアの  
メインストリート。

カナル・グランデと呼ばれる大運河に差し掛かっていまし  
た。

特にその中でも交通量の多い、通称「Graceful

Way（栄光の道）」と呼ばれる水路を

私達は進んでいました。

「おっとつと。なんとおつ。ありゃりゃりゃ」  
でも私の操るゴンドラは、あっちにふらふら。こっちに  
ふらふら。

悲しいくらいに安定しません。

・っつ……

昇格したての新米シングルの私では、同じシングルでも年  
季の入ったおふたりにはとても敵いません。

「アニーさん。もっと力を抜いて……」

「わ、分かってるわよ、アリスちゃん。でも……」

「アニーさん。端によつてください。後ろからヴァポレ

ット（水上バス）が」

「分かってるって、アリスちゃん。やってるでしょ！」

「アニーさん……」

アリスちゃんがものすごく悲しげな顔で私を見ます。

ぐがががががが

分かってる。分かってる。けど……嗚呼。

「ちよつと寄り道するわよ」

「アトラ先輩？」

「アニーちゃん。この先のトラゲット乗り場までお願い」

「アトラ先輩」

「なに、アリスちゃん」

「あの今は、指導の最中で……」

「ちよつとくらい構わないでしょ？　ちよつと挨拶しにい

くだけよ」

「そうそう、アリスちゃん。 あゆみちゃんに、ちょっとだけ。ね？」

「杏先輩まで……………」

「よおーし、アニーちゃん。 行きましょう」

アトラ先輩が有無を言わず、私に指示を出します。

アリスちゃんは黙ったまま。

そんな様子に、つい私も小さな「サイ（タメ息）」を吐いてしまいました。

「あゆみちゃん！」

杏先輩が右手を上げながら、大きな声で呼びます。

「おー！ 杏にアトラにアリスちゃん。 それに…………アニ

ーくんだったっけか？」

あゆみさんが満面の笑みで、返事をしてくれました。

あゆみさん。

あゆみ・K・ジャスミンさん。

姫屋のウンディーネで、階級は私達と同じシングル。

気さくで明るくて、いつでも元気いっぱい。

プリマを目指す大多数のウンディーネの中で、トラゲットを続けるために、

ずっとシングルを希望する、ちょっと変わったウンディーネさん。

アトラ先輩や杏先輩とよく、トラゲットをする親友さんです。

あ。それからー

トラゲットってゆうのは、大運河、グラン・カナルの何箇

所かに設けられている「渡し舟」のことです。

船の前と後ろにウンディーネがつき、大勢の人達をゴンドラに乗せ、運びます。

そのウンディーネはシングルだけが漕げ、しかも色々な会社のウンディーネが、会社に関係なく、

仲良く操舵するってゆう、ある意味、ネオ・ヴェネツィアの観光名所的な存在でもありました。

私もいつか、トラゲットしてみたい

「こんな時間にこんな所で何してるんだい？」

いつものニコニコ顔で、あゆみさんが問いかけてきます。

「今日はねえ。私達。アリスちゃんの……オレンジ・プリンスの指導を受けてるの」

「つかあー。 そうなんだ。アリスくん。すごいなあ」

あゆみさんがアリスちゃんに笑いかけます。

アリスちゃんは恥ずかしそうに顔を伏せると、「どうもと、小さな声で答えました。」

「そうだ。あゆみちゃん。これから一緒に、ご飯しない

？」

杏先輩が誘います。

「うん。いいわね。ちようどお昼だし。あゆみ、どう？」

アトラ先輩も誘います。

「あ。 それいいですね。あゆみさん、一緒に行きまし

「よ

私も馬尻に乗って言いました。

「え？ いやでもまだトラゲット残ってるし……それに」  
あゆみさんは、うつむいたままのアリスちゃんをチラッと見ました。

「それにお前等、まだ指導の途中なんだろう？」  
その言葉に、アリスちゃんは顔を上げ、口を開きます。

でも

「いーの、いーの。ね、アリスちゃん？ みんなで食事した方が楽しいものね」

アリスちゃんが何かを言う前に、アトラ先輩が、その言葉を封じ込めます。

「そうだよ、あゆみちゃん。そんなことより、一緒にお昼行こうよ」  
「そんなことって……」

杏先輩の台詞に、あゆみさんは一瞬顔を強張らせ、無言で私達を睨みます。

でもその視線を真っ正面から受け止め、アトラ先輩が微妙に首を横に振ります。

杏先輩も小さく頷きました。  
それだけで。

それだけのことで、あゆみさんにはちゃんと伝わったようです。

「つかあー。残念だけど、また今度な。んじゃアリスちゃん、頑張つてな」

言うだけ言うと、あゆみさんは踵を返しトラゲット乗り場に帰って行きました。

ん。

そんなあゆみさんの背中を、寂しそうに見送るアリスちゃん。

そんなアリスちゃんの姿に、私の指先は震え始めました。

\*\*\*\*\*

その後も私達の指導は続きました。

途中、じゃがバタ屋さんに寄りたり（その時うつかり、じゃがバタを川に落としたのを、笑って誤魔化したのは内緒です）私と杏先輩がふざけて大騒ぎして、あやうく他社のゴンドラとぶつかりそうになったり、

アトラ先輩がスピードを出しすぎて、ダーマ（運河に顔を覗かせている、三本の木を束ねた棒。

運河の入り口や、水路の交差点を示す標識です）に軽くぶつかってしまったり……

とかはありましたが、おおむね平凡で、穏やかな一日でした。

「お疲れ様」

夕暮れ迫る黄昏時。

私達は無事、オレンジ・ぷらねっとに帰ってきました。

「今日は楽しかったわ。ありがとう、アリスちゃん」

ゴンドラの片付けもそこそこに、私達はアリスちゃんに話しかけます。

「うん、とっても有意義な一日だったねえ」

「はい。良い一日でした」

「ところで、アリスちゃん。私達どうだった？」

アトラ先輩が満面の笑顔で訊ねます。

「合格？ 私達、合格だよね？」

杏先輩も、さも嬉しそうに聞きます。

「確かに、おふたりの技量は素晴らしいものでした。す  
ぐにでもプリマになれるくらいの……」

アリスちゃんは下を向きながら、ぼつりと答えました。

「やったあ。聞いた聞いた？ アトラちゃん」

「ええ。ありがとう。アリスちゃん」

お二人が喜色を浮かべます。

「ねえねえ、アリスちゃん。私は？ 私はどうだった？」

私も一生懸命、笑みを浮かべて訊ねます。

「はい……アニーさんも、最初の頃から比べると、でっか  
い勢いで成長してます」

「本当？ えへへへえ。ありがとう、アリスちゃん」

「でも……」

「ん？」

「でも？」

「なに？」

不審気な私達に、アリスちゃんは下を向いたまま、でも、  
はっきりと言いました。



「お三人とも、でっかい不合格です！」

「なんでかなあ……」

杏先輩が恐い顔で、アリスちゃんを睨みます。

「……………どうゆうことかしら」

アトラ先輩が冷め切った声で言います。

アリスちゃんは声を震わせながら、必死になって言いまし

た。

「操舵は不安定。

観光案内もちゃんと覚えていない。

ミスしても笑って誤魔化す。

他の会社の方にもご迷惑をかける。

川を汚しても気にしない。

自分達が使ったゴンドラの後始末も、おざなりに済ます。

そして、自分勝手な行動を取る。

私……私だって昨日、考えたんです。

今日どうするか一生懸命、寝ないで考えたんです。

それなのに……」

「それなのに、なに？」

アトラ先輩が、さらに冷たい声で訊ねます。

「それなら何故、最初から、ちゃんと言わないの？

それなら何故、最初から、ちゃんと指示しないの？

それなら何故、最初から、ちゃんと自分のしたい事を言

わないの？」

アトラ先輩は、私や杏先輩がドン引くくらいの激しさで、

アリスちゃんを攻めたてます。

「なぜ最初から、ちゃんと私達を指導しないの？

ねえ、アリスちゃん。

あなた……」

アトラ先輩は、とても意地悪く言いました。

「自分がプリマだって自覚。 本当にあるの？」

私は見ました。

確かに見ました。

そう言い放つアトラ先輩の顔がゆがむのを。

いつもの清麗な顔を歪ませて、アリスちゃんを攻め立てる、まるで鬼のようなアトラ先輩の顔を。

「そ、それにさ、アリスちゃん」

今度は、杏先輩が顔を真っ赤にして言い募ります。

「私達、お友達だよ。 お友達なんだから、少しくらいのこと、多目に見てよ」

まるで『 文句あるか 』と、ばかりに、杏先輩が顔を真っ赤にして、アリスちゃんに言い募ります。

「そ、そうだよ。 アリスちゃん。 プリマとかシングルとか。 そんなの関係なしに、楽しくやろうよ」

私も体が震えるのを止められずにいました。

「それにさ。 確かにアリスちゃんの方がプリマとしても、ウンディーネとしても先輩だけどさ。

ホラ。私の方が年上じゃない？ その辺、ちょっと考え  
てみてよ」

ああ……私にはとても無理です。  
とてもこんなことには耐え切れません。  
我慢なんかできません。

自分でも自分の声が裏返ってるのが分かります。  
プルプルと体中が小刻みに震えだします。

「さあ、アリスちゃん」  
アトラ先輩が言い放ちます。

「ちゃんと答えなさい。  
言いたいことがあるなら、ちゃんと言いなさい。  
誰かに届けたい言葉は、ちゃんと口に出さないと、その  
想いは誰にも伝わらないのよっ」

顔を微かに歪ませながら、平然と、無表情に、冷徹な声で  
言い放ちます。

嗚呼……アトラ先輩はスゴいなあ……………

「確かに私は……………」  
アリスちゃんは下を向いたまま、囁くように答えます。

「まだプリマになって日が浅い若輩ものです。  
まだとてもみなさんを、ちゃんと指導なんかできません。  
それに……………」

みなさんはお友達です。　みなさんは私とって、とても大切なお友達です。

それこそ、プリマだとかシングル・ペアとか関係なしの、素適で大切なお友達です。

でも……」

アリスちゃんは下を向いたまま、声を震わせながら、でもはっきりと言葉を紡ぎます。

「でも、だからこそ、言わなきゃいけないんです！

私は言わなきゃいけないんです！

私はプリマとして、シングルを、ペアを……みなさんを指導しなければいけないんです！

歳とか、お友達とか関係なしに。

プリマとして。

オレンジ・ぷらねっとを……いえ、このネオ・ヴェネツィアのプリマ・ウンディーネとして。

この街をより良き街にしていかなければならない、プリマ・ウンディーネとして。

だから……だから、言います。

プリマの……オレンジ・プリンセスとして、言います」

アリスちゃんはしっかりと顔を上げ、私達を見据えると、きっぱりと言いました。

「お三人とも、プリマとしても、ウンディーネとしても、でっかい不合格です……！」



「ごめんなさい。アリスちゃん！」  
涙が止まりません。

私は涙を止められぬまま、アリスちゃんに抱きつきました。  
見れば同じように杏先輩も泣きながら、アリスちゃんに抱  
きついていきます。

「杏先輩？　アニーさん？」

「ごめん。アリスちゃん！」

最後にアトラ先輩が私達ごと、アリスちゃんを抱きしめま  
す。

「あ、アトラ先輩。あの……わふ？」

さらにもうひとりの人物が、アリスちゃんを背後から抱き  
しめました。

「アリスちゃん。良かったあ」

「アテナ先輩？」

「ああもう。　本当にお前は、アリスに甘甘だなあ」

蒼羽教官があきれたように声を上げました。

先ほど私の目の端に映ったのは、泣きじゃくるアリスちゃ  
んに駆け寄ろうとするアテナ先輩を必死に羽交い絞めする、蒼羽教  
官の姿だったのです。

「あ、あのみなさん方。　これはいったいどうゆう……」

まるでお団子のように――

私達に抱きしめられ、身動きひとつできないアリスちゃん  
が、泣きながら、きよとんとした顔で訊ねます。

「今日はね、本当はアトラ達の指導の日じゃなくて、あなたへの指導の日だったのよ」

アレサ部長が微笑みながら言いました。

「私への指導の日……」

「ああ、そうだ。オレンジ・プリンセス」

蒼羽教官が、アリスちゃんを通り名で呼びました。

「プリマになったお前はこれから、ペアやシングルの指導も行なっていかなければならない。

その時、相手が自分より年下のペアな場合は良い。

だがー」

蒼羽教官は、噛んで含めるように言い聞かせます。

「相手が

自分の同期なペアな場合もあるだろう。

自分の親しいシングルの場合もあるだろう。

自分より、年上の、先輩なシングルの場合もあるだろう。

そう。まさに今日のアトラや杏や、アニーのようにな」

「あ……」

「その時、あなたが本当にそんな友人や先輩達を指導できるか。

プリマとして……このネオ・ヴェネツィアのプリマ・ウンディーネとして、そんな人達を

ちゃんと従わせられるか。

ちゃんと誉められるか。

そして……

ちゃんと叱れるのか。

今日はそのテストの日だったの」

アレサ部長が微笑みを浮かべながら告げます。

「もしかして……あの……だから……」

「ああ。その通り」

蒼羽教官が小悪魔的な笑みを浮かべます。

「アトラと杏、そしてアニーには、今日、お前に対して『  
いぢわるな態度』を取るようと、私が命令した」

「……蒼羽教官」

「プリマ・ウンディーネというのは、それほど責任ある立  
場なんだ」

蒼羽教官はそこだけは射るような眼差しで、アリスちゃん  
を見据えました。

1295

「ごめん、アリスちゃん」

「ごめんなさい。アリスちゃん」

私と杏先輩は、いっそう強くアリスちゃんを抱きしめまし  
た。

「私も、すごく、意地悪だったわ。ごめんね、アリスち  
ゃん」

アトラ先輩が言いました。

眼鏡の奥のその瞳は、涙で真っ赤になっていました。

「あのね。あのね。アリスちゃん」

アテナ先輩がアリスちゃんを背後から抱きしめながら言い



ます。

「みんな、悪気はなかったの。　ううん。　本当に、本当にアリスちゃんが大好きだから、  
大好きだからこそ、みんな、こんなことしたの。　分か  
つてあげて」

そうです。　あの時―

アリスちゃんをみんなが激しく攻め立てていた時。

アトラ先輩の顔が恐ろしげに歪んでいたのは、自己嫌悪からだったんです。

大好きなアリスちゃんに、意地悪なことを言わなければならぬ。

嫌味なことを言わなければならない。

その悲しみと苦痛を、必死に押さえ込もうとして歪む、アトラ先輩の顔。

杏先輩の顔が真っ赤になっていたのも、もちろん怒りのせいではありません。

涙をこらえるのに必死になっていたんです。

大切なお友達のアリスちゃんに、馴れ合いめいたことを言わなければならない悲しみ。

我が儘に振舞う哀しみ。

その涙をこらえるために、杏先輩は真っ赤になっていたのです。

そしてそれはもちろん私にも。

何度叫びだしそうになったことか！

何度叫びながらアリスちゃんに今日の真相をバラし、謝罪しようとしたか！

それでも、それはアリスちゃんのためにならない。と

必死に耐えるために。

必死に自分の感情を押さえ込むために、ぶるぶると震える私の指先、体。

きっと、アリスちゃんの目には、私が怒りに震えてるよう  
に見えたでしょう。

私が怒りに震え、威嚇するかのように見えたでしょう。

なんて酷い私。

なんて醜い私達 . . . . .

「 . . . . . 分かってます」  
でもアリスちゃんは言うてくれました。

「そんなこと、でっかい分かってます」  
再び、ぼろぼろと涙を流しながら、アリスちゃんは言うて  
くれました。

「アトラ先輩や杏先輩。 アニーさんが私のことを思って  
くれてて、

大切に思ってくれてて。

心配してくれてて。

自分だって傷つくのに。  
自分だって辛いのに。  
自分だって悲しいのに。

それでもワザと私に嫌な態度を取ってくれて。  
それでもワザと私に厳しいこと言ってくれて。

みんな、お友達だから……

みんな、とつても大事な、お友達だから……

だから、だから……」

アリスちゃんは泣き続けます。

けれど、その顔がパツと輝きました。

「だからみんな、でっかい大好きです！」

それは向日葵のような、素適で暖かな泣き笑顔でした。

ーぱちぱちぱちっ

拍手がわきあがります。

ーぱちぱちぱちぱちぱちぱち！

大きな拍手がゴンドラ置き場に木霊しました。

わあっ！

と、歓声も上がります。

見れば沢山のウンディーネが……  
オレンジ・ぷらねっと全てのウンディーネが……

賞賛するかのように。  
祝福するかのように。

アリスちゃんに。  
我等がオレンジ・プリンセスに。  
彼女を取り囲みながら、拍手と歓声を送っていました。

「……………みなさん」

アリスちゃんが満面の笑顔で泣き続けます。  
涙を流しながら笑顔を見せてくれます。

アレサ部長が小さく微笑みました。  
蒼羽教官が豪快に笑いました。  
アテナ先輩が愛おしそうな笑みを浮かべます。  
アトラ先輩が号泣します。  
杏先輩が嬉しそうに笑います。  
私も泣きながら、アリスちゃんに笑いかけました。

取り囲むオレンジ・ぷらねっとの仲間達も、みんな幸せそ  
うな表情を浮かべています。

おりからの夕陽が、私達を染め上げます。

その夕焼けの広い空の下、落ちた雫も波にまぎれて消えてゆきます。

私達みんなを……素晴らしき仲間達の、その笑顔をおレンジに染め上げます。

それはまさに、ネオ・アドリア海に沈む、あのオレンジ色の夕陽のように。

暖かで綺麗で優しく暖かい。  
とても素適な笑顔達でした。

\*\*\*\*\*

「アトラ先輩。 オールの返しが遅いし大きいですっ」

「杏先輩。 観光案内は、もっと簡素に、はっきりと！」

「アニーさん。 もっと力を抜いて、余裕を持って……！」

「『』 はあああー……い 『』」

私達は、疲れ切った声で返事をしました。

「ああ。 蒼羽さんが、ふたりになった……」

アトラ先輩がボヤきます。

「本当だよお。 てか蒼羽教官より厳しいよお……」

杏先輩が泣き言を言います。

「まったくですう。マジ、キツいっス……しくしくしく……」  
私はホントに泣き出します。

「あはははははっ」  
あゆみさんが大笑いしました。

数日後ー

私達はまたアリスちゃんの指導を受けていました。  
もちろん今回は、プリマなアリスちゃん。  
我等が愛すべき、オレンジ・プリンセスの、マジでガチな  
指導です。

そして何故か横には、あゆみさんのゴンドラが……

やっぱりあの時ー  
あゆみさんは全て分かっていたみたいですよ。  
私達がワザと、いぢわるな事を言ってるってことに。  
ほんの僅かなアトラ先輩と杏先輩の仕草、表情の変化で、  
それに気付いたそうです。

これがやっぱり、トラゲットで培った三人の絆？  
以心伝心？

なんか羨ましいです。  
嗚呼。

私もいつか誰かと、そんな風になりたいなあ……

「みなさん、無駄話しはでっかい禁止です！」  
アリス『教官』が叫びます。

「さあ、あの水平線の彼方まで、頑張って漕いで行きまし  
よう！—！」

—むん！

と、ばかりに右腕を上げてガッツ・ポーズをとる、アリス  
ちゃん。

その姿を見て—

「『』 はあああああつあああ…… 『』」

私達は、大きな大きな「サイ」を付きました。  
あゆみさんがまた、大笑いし始めました。

しくしく……………

教官（「UnGuida istruttore」）指導  
「liafine」

「……ところでアトラ先輩、杏先輩」

「なに、アニーちゃん」

「おふたりは、いつになったら、プリマに昇格するんですか？」

「つかあー！ アニーくん、言うねえ！」

「それはね、アニーちゃん……」

「私達も、でっかい知りたいっつ  
」



U n G u i d a i s t r u t t o r e (後書き)

え〜どうでも良い話しを、ひとつ。

とうとうストック(書置き)が無くなってしまった！(涙

ですから次からは基本、新作ができない限り更新できません。

きつと。ものすごく間延びした更新になるかと思いますが、どうか  
お見捨てなく、これからもよろしくお願いします。

すいません。 やっぱり叱ってください(鹿馬

**I l p a s s a t o (前書き)**

パソコンが壊れ(あのね。あのね。スイッチ入れると、ガタピシ鳴るの)

忙しさにかまけ(次から次へと降りかかるイベントの数々)気がつけば、こんなに間が開いてしまいました。

どうかみな様。お見捨てなき様、よろしく願います(涙)

それではしばらくの間、よろしく、お付き合いください。

I l p a s s a t o

私はその時、まるで決戦に臨む勇者のような気持ちで、AQUAに降り立ちました。

「アイちゃん！」

「アイちゃん、お久しぶり」

「ぷいぷくにゅ！」

そしてー

「こんにちは。 アイちゃん」

第 23 話 「 I l p a s s a t o 」

空港のゲートをくぐると、ARIA・カンパニーのみんなの笑顔が、私を待っていてくれました。

「灯里さん！ アリシアさん！ アリア社長！」

私は、みんなのもとへ駆け寄りました。

おりから迫ったカーニバル。

そのせいか、空港は観光客でにぎわい、混雑を極めていました。

「あらあら。 ここじゃ挨拶もできないわね。 一度、会社に戻りましょうか」

アリシアさんがいつもの微笑みで言います。

「はい。アリシアさん」

「じゃあ、荷物は私が持つてあげるよ」  
もうひとりのウンディーネが言います。

「いえ、結構です。自分で運べます！」

私はそう言つと、荷物を持ち上げ、歩き始めます。

振り向くと、びっくり顔の灯里さんと、困つたようなアリシアさんの笑顔がありました。

でも、しょうがない

そんな私の足元を、アリア社長が嬉しそうに飛び跳ねて行きました。

\*\*\*

「改めて紹介するわね。　この子はアイちゃん。　私達の古くから  
のお友達。　うふふ」

アリシアさんがいつもと変らぬ、素適な微笑みで言ってくれました。

ARIA・カンパニー

落ち着ける場所。　心、安らぐ場所。　でも今は――

私達はそのリビングルームでお茶を飲みながら、語らっていました。

「そして、こちらが――」

灯里さんも満面の笑顔を浮かべて言います。

……ちっ

「アニエス・デュマちゃん。こないだARIA・カンパニーに入ってくれたの」

「初めまして、アイちゃん。アニエス・デュマです。でも私のことはアニーって呼んでね」

そのウンディーネは、くつたくのない笑顔で手を差し出してきます。

「アイです。よろしく」

私はその差し出された手を無視して、ストローで、オレンジ・ジュースを吸い上げました。

「……………」

とまどったように右手を空中にとどまらせるアニー。

その様子に灯里さんとアリシアさんは「？」「マークを頭に浮かべながら顔を見合わせています。」

やっぱり分かってないんだ

私は無言のまま、オレンジ・ジュースを吸い上げます。

「あ、あのさ。アイちゃん。アニーちゃんは私達と同じ、マン・ホーム出身なんだよ」

「知ってます。前にもらった灯里さんのメールにそう書いてありました」

「えっ…そ、そう。そうだったかなあ。えへへ……………」

「姫屋に入るはずだったのが、書類の不備で入れなくなつて。

それでウンディーネにもなれなくて。

そんな彼女をアリシアさんや灯里さんが不憫に思つて、ARIA・カンパニーに入れてあげた。」

「つてことも知っています」

「そ、そんな不憫だなんて……」

「でも結果的には、そうなんです！」

「アイちゃん……なんか怒ってる？」

「怒ってなんかいません。なんで私が怒らなきゃいけないんですか！？」

「あははは……そ、そうだよね」

灯里さんが困ったように頬をかきます。

もうホントに……分らんちん。

「さあ、灯里さん。早くカーニバル会場に行きましょう！」

・ズズズズ　　と

ジューズを一気に飲み干すと、私は灯里さんに言いました。

「あ……それが……実はね、アイちゃん」

灯里さんが言いにくそうな顔をします。

「え？　どうしたの？　まさか行けなくなったの？」

「ううん。違うよ。違うんだよ、アイちゃん。そうじゃなくて」

「そんな！　私、灯里さんとのカーニバル。とっても楽しみに来たのに！」

「あらあら。違うのよ、アイちゃん」

落ち着いて　と、言わんばかりの笑顔でアリシアさんが言います。

「実はこのあと、お仕事が入ってしまったの」

「お仕事が……」

「ええ。それが団体さんでね。 灯里ちゃんにもお手伝いしてもらわなきゃならないの」

「そう…なんだ……」

「だからその間、アニーちゃんと先に行っててくれない？ お仕事、夜には終わるから」

「……………」

「ごめんね、アイちゃん。 明日は朝から遊べるから」

「……分かりました」

「うん。本当にごめんね。 じゃあ、私達、もう行かなきゃいけないから」

そう言っていると灯里さんとアリシアさんは立ち上がります。

「行ってらっしゃい」

アニーとアリア社長が手を振り、ふたりを送り出します。 灯里さんも手を振り返してくれます。

けれど私は、そんなふたりのゴンドラを、手を振ることもなく、ただ黙って見送りました。

\*\*\*\*\*

「じゃあ、アイちゃん。 行こうか」

アニーが声をかけて来ます。

「行かない」

私はぶつきら棒に答えます。

「え？ 行かないの？」

「ちよっと疲れたから、灯里さんの部屋で夜まで休む」

そう言うと私は荷物を引きずるようにして、三階の部屋へと続く階段を上がり始めました。

「あっ、待って。アイちゃん！」

あわてた様子でアニーが追いかけてきます。

私はそんなアニーを無視して階段を上がると、灯里さんの部屋の扉を開きました。

！？

とたんに感じる違和感。

どこか感じる違和感。

見回してから気が付きました。

見知らぬ棚。 見知らぬ本箱。 見知らぬベッドの上のシート。

部屋に漂う微かな香りも、灯里さんのいつもの香水じゃない。

何か知らない、違う香り。

ココは……ここはまるで、あの部屋であって、あの部屋ではない……  
…なにが……

「ごめんね、アイちゃん」

追いついてきたアニーが、すまなそうに言いました。

「今、この部屋は私が使わせてもらってるの。 灯里さんは近所のアパートに下宿してるんだ」

!!!!!!

私は踵を返すと、足早に階段を降ります。



カバンをリビングのテーブルに叩きつけるように放り投げると、私は外に向って飛び出します。

あんな部屋。

1秒だっっていたくない！

「待つて、アイちゃん！」

「ぷいぷいいいいいい！？」

そんな私に、驚きながらもアニーとアリア社長が追いかけてきました。

\*\*\*

「ねえ、アイちゃん。どうかした？」 「ぷいぷい？」

ズンズンと、脇目もふらずに歩いていく私に、アニーとアリア社長が心配そうに声をかけてきます。

「大丈夫です。何の問題もありません」

私は吐き捨てるかのように答えました。

「ねえ、アイちゃん。何処に行くの？」

「何処つて、カーニバルの会場に決まってるじゃないですか」

「道分かる？」

その言葉に、私は思わず立ち止まり、アニーの顔を見返しながら言うてしまいました。

「私は何回も、AQUAに来てるの。      ネオ・ヴェネツィアにたくさん来てるの。」

カーニバルだって、何回も来てるの。      だからー

だから私、迷ったりしない。  
間違えたりしない。

私はあなたより、この街のことを、いっぱい知ってるの!-!」  
叫ぶように言いました。

「そっかあ。確かに。私よりアイちゃんのほうが、よっぽどの  
街に詳しいんだよね」

それでもアニーは笑います。  
くったくなく笑っています。

ふん!

「じゃあアイちゃん。引率よろしく」

「え?」

「実は私。未だにネオ・ヴェネツィアの地理に詳しくないんだあ。

だから私を会場まで連れてって。ね、アイちゃん」

照れたように後ろ髪をかき揚げながら笑うアニー。

私は……私は……

ズンズンズン! -と

再び私は無言で歩き始めました。

「あ。アイちゃん、待ってよ!」

「ふいふいにゆー!」

そんな私に、アニーとアリア社長が小走りについてきました。

\*\*\*

夕暮れ迫るネオ・ヴェネツィア。

私はカーニバルの会場に急ぎました。  
ひよいと横のカツレ（小道）に入ります。

「あれ？ アイちゃん。 何処行くの？ 会場はこっちだよ？」

「こっちの方が近道なんです！」

問いかけるアニーの言葉を断ち切るように答えると、私はそのままカツレの奥へと入っていきます。

ココはあの時。

一番最初に灯里さんとカーニバルを見に行ったとき。

ボサノヴァさんに出会ったカツレ。

灯里さんと一緒に、ボサノヴァさんとその小さな楽団さん達と共に、練り歩いたカツレ。

私と灯里さんが気が知っている、秘密のカツレ。

アニーの知らないカツレ。

「へえ。 こんなカツレがあつたんだ。 初めて知つたよ」

「勉強不足ですね」

「あははは。 本当にその通り。 まだまだいっぱい勉強しなくちゃね。 立派なウンディーネになれないわ」

その言葉がまた私をイラつかせます。

私は無言で歩き続けます。

「ぶいにゅん？」

前に行くアリア社長が、不意に立ち止まりました。

「アリア社長。 どうしたんですか？」

私の問いかけに、アリア社長は私とアニーの顔を見ると、突然走り出しました。

「あ！ アリア社長？」

私とアニーはつられたように走り出しました。

走る

走る

走る

私とアニーはアリア社長を追って、カッレを走り続けます。

「待って、アリア社長！」

「待ってくださいーい。アリア社長！」

そんな私とアニーの呼びかけにもアリア社長は答えず、一目散に走って行きます。

私達は必死に追いかけます。

「アリア社長」。どこに行くのー？」

そんな私の問いかけにも答えず、アリア社長は走って行きます。

「アリア社長？」

私達はアリア社長を見失っていました。　それどころか……

「ここは何処……？」

いつしか私は薄暗いカンポ（広場）の中に居ました。

周りを建物の壁で囲われた暗いカンポ。

見知らぬ暗く広いカンポ。

「私もここは初めてだよ……」

アニーが不安そうな声をあげます。

な、なによ！　怯えてるの！？

「と、とりあえず来た道を引き返しましょう。　あれ？」

道が……無い

ついさつき、今まで私達が歩いてきたはずの道がなくなっていました。

「そんな……」

戸惑う私の手を、何か暖かいものが包んでくれました。

「大丈夫。アイちゃん。大丈夫だから」

それはアニーの手でした。

アニーの左手が私の右手を優しく、でも力強く握ってくれています。

「手、震えてるけど？」

それでも私は冷たく言ってしまう。

「えへへ。ほ、本当はちょっと怖い……でも」

それでもアニーは気丈夫に言います。

「大丈夫。きつと、だいじょうぶだよ！」

「何よ、その根拠の無い自信は……」

嗚呼。

これがもし灯里さんだったら私は安心していられるのに。  
手を握ってくれてるのが灯里さんだったら。  
わたしは、もっと安心していられるのに。

「見て、アイちゃん！」

アニーが空いてる右手で一点を指差します。

「光？」

そこには薄暗いカンポに差し込むように。まるで私達を導くように。  
一筋の光が指し込んでいます。

「アイちゃん！」

アニーの問いかけに、私は無言で頷くと走り出しました。  
アニーと手を繋ぎながら、その光目指して走り出します。

そして――

「抜けた！」

気がつくと、私達はまばゆい輝きの中にいました。  
うっ……

目はその輝きに追いつきません。

「あれ……」

「ここは……」

私とアニーは戸惑ったように声を上げます。  
ようやく光に慣れた目。  
その目に映ったモノは……

木の橋

森の中の小道。

流れる川。

その川の上に、天井と壁までもを囲った「カバードブリッジ」と呼ばれる木の橋。

「ここは……」

「どこ？」

私とアニーは呆然と立ち尽くしていました。

今の今まで、私たちはネオ・ヴェネツィアの街中に居たはずなのに。  
ここは……こんな山道に……

「ネオ・ヴェネチアには間違いないみたいだけど……」

私達はあたりを、きよときよと見回します。

でもどこか感じる違和感。

無意識に感じる違和感。

まるでアニーの部屋……いえ。灯里さんの部屋に入ったときのよう  
な……

だって私達は今の今まで、夕暮れに染まる、冬のネオ・ヴェネツア  
の街にいたはずなのに。

「暑い……」

つい、つぶやいてしまいます。

そう！

私達は今、太陽が燦々と降り注ぐ、真夏の山の小道にいたのです。

「そんな……」

「あっ。アリア社長」

とまどう私達の前に、再び白いもちもちポンポンが！

私とアニーは再び、アリア社長を追いかけ始めました。

「アリア社長」

「待つて。アリア社長」

アリア社長が突然、道をそれ、林の中に駆け込みます。

私達も続けて木を曲がろうとして！

ドシンッ！

「きゃあっ」「うわあっ」「のわあっ」「ぐはあっ」「っかあ」

五つの悲鳴が上がりました。

勢い良く曲がった私達が、ちょうど歩いて来た誰かとぶつかってしまっただけです。

「ご、ごめんなさい」

「すみません。大丈夫ですか？」

「だ、大丈夫。大丈夫」

「ええ。ちよつとびっくりしただけだから……」

「くう。いつたいなにがっ」

絡み合ったまま、私達は言い合いました。

「みんな、大丈夫？ あれ。あなたは……」

絡んだ足を解こうと苦闘を続ける私達の頭の上から、そんな声が聞こえてきました。

見上げれば、眼鏡をかけた女性が、驚いたように私達を見下ろしていました。

「私はアニエズ・デユマです。 アニーって呼んでください」

「私はアイです。 初めまして」

「私は杏子あんこです」 どんぐり眼の子が言います。

「私はアントラ。よろしくね」 眼鏡をかけた女の子が言います。

「ウチはあゆみみ。初めまして！」 ショートヘアな女の子が、元気がいっぱいに言います。そして――

「……あなた達、もしかして灯里ちゃんのお知り合い？」

最後に眼鏡をかけた大人の女の人が、そう訊ねます。



「灯里さんを知ってるんですか!？」

「ええ。だって彼女はー」

その女の方は、にっこりと微笑み、言いました。

「私の『アツヴェニーレ』だから」

\*\*\*

「はい。お待たせ」

明子さんが、ロールキャベツを持ってきてくれました。

・私の名前は星野明子。よろしくね。

女の方は改めてそう言うと、にっこり微笑みました。

「ここです。立ち話はなんだから、ウチに来ない？」

そう言うと明子さんは、私達を自宅へと招いてくれました。

明子さんのお家は、小さな街の集合住宅のひとつでした。

「ここは、私の手作りなの」

そう言って明子さんは、私達を家の外のバルコニーに案内してくれました。

「陽だまりのカフェにようこそ。  
メニューは、真心とやすらぎ。心のリフレッシュしたい方、大  
歓迎!」

「『恥ずかしいセリフ。禁止!』」

「ええ〜え!?!」

何故か一緒について来たあゆみみさん達が言います。

……うん、似てる。

「『いただきます!』」

テラスのテーブルで、杏子さん達が、一斉にロールキャベツにかぶりつきます。

「はいはい。熱いからゆつくり食べてね」

「はふはふはふ」「もぐもぐもぐ」「がふがふがふ」

「うふふ。アニーちゃんも、アイちゃんも、冷めないうちにどうぞ」

「は、はい……」

「いただきます……」

私とアニーも、ホクホクと湯気を上げるロールキャベツを口にしました。

美味しい!

「どう? そのキャベツ。今朝採ったばかりなの」

「は、はい。美味しいです!」

「うん。すつごく美味しい」  
それはとても素朴な……けれど、大地の香りがたつぷりな、優しい味がしました。

「灯里ちゃんときは、焦がしちゃったのよねえ……」  
明子さんが思い出すように言います。

「あ、あの……灯里さんてー」

「先生、おかわり！」

そんな私の言葉を遮るように、杏子さんが言います。

「はいはい。ちょっと待っててね」

そう言つと明子さんはお皿を受け取り、キッチンへと消えていきます。

「先生？」

アニーがその後姿を見送つて、杏子さん達に訊ねます。

「そうだよ」

「知らなかった？」

「明子先生は、ウチらの学校に先生なんだぜ」

「そうなんだ……」

「てか、お前、転校生じゃないのか？」

あゆみさんが私に聞いてきます。

「いえ。私はマンホームから遊びに来ただけで……」

「え？ あなたマンホームから来たの？」

「う、うん……」

「じゃあ、すぐ帰っちゃうんだ……せつかくお友達が増えたかと思

つたのに」

「杏子さん？」

「- かあつ。『さん』はいらないよお。そんなに歳も離れてなさそうだしな」

「うんうん。私もあなたのこと、アイって呼ぶから、あなたも『さん』はいらないわ」

「そうそう。お友達。お友達」

「そう…なの？」

「『』 そうそうそう！ 『』」

三人は、屈託のない笑顔を浮かべます。

「で。アニーはアイのお姉ちゃん？」

「私まで呼び捨て？ いや、私は……」

「それに何か不思議な服だね」

「え？」

「マンホームじゃ、そんなファッションが流行ってるの？」

「いや、これはウンディーネの制服で……」

「ウンディーネ？」

「そう。アニーはARIA・カンパニーのウンディーネ。ただの知り合いよ。」

「姉でもお友達でもないわ」

「アイちゃん……」

ほんの少し、アニーが悲しそうな顔をします。

「だって……だって仕方ないじゃん？ アニーが悪いんだから……」

「ARIA・カンパニー？」

「ウンディーネ？」

「なにそれ？」

杏子達が聞き返してきます。

え？ この子達、もしかして、ARIA・カンパニーもウンディーネも知らないの？

「ウンディーネって言うのは、ゴンドラを使って街の観光案内をする人達のことよ」

おかわりのお皿を抱えた明子さんが、にこやかに笑いました。

「ウンディーネのこと分かるの？」

「ええ」

明子さんは満面の笑みで答えます。

「あなた達は私の『アツヴェニレ』だから  
また、そう答える明子さん。」

・アツヴェニレ

それは「未来」を意味する言葉。

いったいどうゆう……

「私が灯里さんと出会ったのは、ここの水路に初めて水が来た日のことよ」

明子さんは思い出すように、ポツリと言いました。

「水路に初めて？」

「水が来た？」

私とアニーは思わず顔を見合わせました。

明子さんが言ってる意味が分からなかったからです。

大規模なテラ・ファオーミングの結果、水の星となった「AQUA」  
そこでは、大きささまざまな水路にまで、たくさんに水があふれてい  
ます。

今更、初めて水が来たときだなんて……あれ？　もしかして。

「もしかして明子さんは『不思議な過去』の人なんですか？」  
「知ってるの？」

やっぱり明子さんは、優しい微笑みを浮かべたまま答えます。

「不思議な過去？」

「灯里さんが前に教えてくれました。　アリア社長とお散歩してた  
ら、過去のAQUAに行ってしまったって。」

そこで、もうひとりの自分に会ったって……」

「もうひとりの自分？」

「うふふ。　そう言ってもらえるのは嬉しいわね」

アニーの問いかけに答える私に、明子さんが言いました。

それはある寒い日のこと。

お休みだった灯里さんが「探検」しに行った橋での不思議な出来事。  
アリア社長と橋を越えたとたんに出会った、不思議な体験。

もうひとりの「自分」に出会った、過去への不思議な旅。

その人が――

「明子さん？」

「ええ。『ご名答』」

嬉しそうに答える、明子さん。

その微笑みは、まるで……

「そう、私は前に灯里さんに会ったことがある。あの日。あの水路に初めて水がやって来た日。

この星が本当に水の星『AQUA』になった、あの日……」

「……………」

「あのとき、灯里さんは言っていた。

『どうして水は、こんなにも心を潤すことができるんだろう？』  
……  
「……………」

「灯里さんらしいなあ……………」

「うん。ホント。灯里さんらしいや……………」

「そっかあ。明子さんが誰かに似てると思ったのは、灯里さんだったんだ」

「ええ。あのとき、私も思った。

どこか自分が灯里さんに似ているって。だって二人ともー」

明子さんは、空に自分の両手を掲げると、叫びました。

「私と灯里さんは、ほんわり、キラキラ。これからのAQUAを

照らす運命なの。

……………お日様からの使者って感じ？」

「『 恥ずかしいセリフ禁止ー！ 』」

「ええ〜え！？」

再び、あゆみ達のツッコみが炸裂しました。

うん。ホントに明子さんと灯里さんはそっくりだ。

私は胸の中でそっと、呟きました。

\*\*\*\*\*

「ぶっひにゅ〜ん」

そんな私達の前に、見知らぬ茶色の猫さんを背負ったアリア社長が、何事もなかったように現れます。

「アリア社長！」

私は思わず立ち上がると、バルコニーの手摺に駆け寄りました。

「ぶいぎゃ!?!」

私の叫び声に、びっくりとして涙目になるアリア社長。

「何処に行つてたんですか！」

私は思わず身を乗り出していました。

「探してたんですよ! ……えっ?」

不意に体が傾きます。前のめりに倒れていきます。

めきっ

手摺りが。私が身を乗り出していた手摺りが倒れて行きます。

手摺りが。柵の手摺りが、ゆっくりと倒れて行きます。

私と一緒に。

「きゃあああぁ」

「危ない、アイちゃん！」

手をつかまれます。

誰かの手が私の手をつかみます。

そしてそのまま、ぐいっ - と引っ張られ……



「あんぎゃああああ！」  
代わりに、アニーがすっ飛んで行きました。

「あ、痛痛痛……」

「ぷ…ぷいぎゅ…ふん」

「大丈夫？」

「猫さんもつぶれてるわ」

「みんな生きてるかあ？」

あゆみ達が駆け寄ります。

アニーはアリア社長を下敷きに地べたに引っくり返っていました。

「ごめんなさい。なにぶん手作りだから。アニーちゃん、大丈夫？」  
起き上がるアニーに手を貸しながら、明子さんが謝ります。

「だ、大丈夫です。ちよつとびっくりしただけで…それより、ア  
イちゃん」

「な、なによ」

呆然と立ち尽くす私に、アニーが言います。

「怪我はない？ 大丈夫だった？」  
につこりと微笑みます。

私は

私は

そんなんじゃない誤魔化されな……

「だ、大丈夫よ。だいたいアニーに助けてもらえなくても、私は大  
丈夫だったんだからね！」

「……アイちゃん」

「でも」

「えっ？」

「い、一応お礼は言っておくわ。……ありがとう」

「……うん。うんうん！」

アニーは、ものすごく嬉しそうな顔をしました。　　ーちっ

「にゃうん」

「ああ、ピート。見ないと思ったら、アリア社長さんと遊んでたのね」

明子さんが言いました。

「ピート？」

「ええ。この子はピート。灯里さんが来たとき、アリア社長と仲良くなっちゃって」

ピートと呼ばれた猫さんが、アリア社長を心配そうに覗き込みます。

「ぶいぶい〜にゅ」

大丈夫！ と、ばかりにアリア社長が胸を張り…腰の痛みに悶絶します。

「にゃおん」

そんなイマイチ決まらないアリア社長の顔を、ピートは何度も優しく舐めまわします。

「仲良しさんだね」

「アリア社長。ヒメ社長に言いつけちゃっぞ」

「ぶいぎゅんっ」

たちまち涙目になるアリア社長。

「ヒメ社長？」

「ヒメ社長は姫屋の社長猫さんで、アリア社長と大の仲良しなんです」

「なにに。アリア社長の彼女なの？」

アントラさんが目を輝かせます。

「-かあつ。浮気はダメだぜ。アリア社長」

「おー。三角関係ってヤツですなあ」

あゆみさんと杏子さんが、ニタリーと笑います。

「あれ、でも……」

そして明子さんの一言が、トドメを刺します。

「ピートは男の子よ？」

……

……

「ぶいぎゃんー！」

ピートに舐められたまま、アリア社長の顔に青い縦線が入ります。そんなアリア社長に、私達の笑い声が響きます。

\*\*\*\*\*

「パラレルワールド……かな？」

明子さんがつぶやくように言いました。

「パラレルワールド？」

「ええ。どうも、そんな気がする。単純な過去じゃない」  
「単純な過去じゃない？」

「うん。どうもアイちゃん達の未来は、私達の未来とは少し違う気がする」

「それが、パラレルワールド？」

「そう。多重世界。または並行世界とも言うわね」

「多重世界……」 「並行世界……」

「まあ、私もそんなに詳しくないんだけど……」

「ご存知の範囲でいいので、教えてください」

アニーの言葉に、明子さんは小さく頷きながら、ゆっくりと語り始めました。

「あのね。この世界はひとつじゃないの」

「ひとつじゃ……ない？」

「ええ。目には見えないけど。触れることもできないけど。」

私達のすぐ横に、ほんの少し、ほんの少しだけ、この世界とは違う世界が存在するの」

「ほんの少し違う世界……」

「すぐ横に……」

私は思わず、自分の横を見てしまいました。

「それは本当に、ほんの少しだけ違う世界。」

アイちゃんと同じアイちゃんや、アニーちゃんと同じアニーちゃんがいる世界。

でも、アイちゃんの髪を結んだりボンの色が少し違う世界。

アニーちゃんのはいている靴下の柄が少し違う世界。 あゆみみの……」

明子さんはそっと、あゆみみの顔を見ます。

「あゆみみの、そのイヤリングの色が違う世界」  
あゆみみの白いイヤリングがキラリと光ます。

「アントラの眼鏡の形が違う世界」  
アントラが紅い眼鏡の奥の瞳を白黒させます。

「杏子のそばかすが、ひとつ多い世界」  
「んな！」

杏子があわてて鼻を押さえます。

「そんなほんの少しだけ違う世界が、実はすぐ隣にあるって考えなの。」

でもその違いが大きければ大きいほど。

その違いが、多ければ多いほど、居るはずのない人がいたり、本来なら有り得ない事象が起こりうる世界。

そして、そんな世界が実は無数にある。ーって考えなの。」

なんか都合のいい、SS小説みたい……

「私達は違う世界にきた？」

「断定はできないわ。」

「だけど、前の灯里ちゃんとの出会いも、今日のアイちゃんや、アニーちゃんとの出会いも」

ただ単純なだけの過去への旅じゃないような気がする。

まるでそこに、誰かの意思が働いているかのような……」

「うーん……」

私達はみな、頭を抱えていました。

明子さんの説明は分かっても、それが問題解決にはつながらないか

らです。

「問題は……」

杏子が両手で頭を抱えながら言いました。

「問題はどうかしたら、アイやアニーが元の世界に戻れるかってことだよ」

「うん。まあ簡単に言えば、それが一番の問題点ね」

「ねえ、ふたり共。私達に出会うまで何か変わったことはなかった？」

「あつ」

「そういえば……」

不意に駆け出したアリア社長。

行き着いた、薄暗いカンポ。

まるで誘つかのような、眩い光。

気がつけば、目の前にあった、あのカバードブリッジ。

アントラの問い掛けに、私達は思い出します

「それじゃあもう一度、あの橋に行ってみましょう」  
明子さんの言葉に、私達は頷き、立ち上がりました。

\*\*\*

「そっかあ。じゃあ、灯里さんも元気にやってるんだ」

「はい。灯里さんはいつも元気、元気。毎日、笑顔で過ごしてま

す

「そうなんだ…じゃあ、いつでも、のんびり？」

「はい。いつでも、のんびり、まったり。恥かしいセリフ、たくさん言ってます」

「うふふ。灯里さんらしいなあ。素敵」

「あ。今の言い方。灯里さん、そっくり！」

「ええ〜え」

笑い声が弾けます。

辺りがオレンジに染まる頃。

橋へと歩きながら、アニーと明子さんが話しています。

そんな、ぽかぽか、まったりな会話に、私はイライラします。だつて。

だつて、アニーってばー

「ええ。本当に灯里さんは、毎日、毎日。素敵ングなんですよ！」

なによ。

知ったかぶりして…灯里さんのこと。

灯里さんのこと、ホントにちゃんと分かってるのは、私の方なんだから……

私の方がずっと長く、灯里さんと一緒にいるんだから。

「じゃあ、アニーちゃんは灯里さんの後輩になる訳ね」

不意に明子さんが、そう訊ねました。

「はい。私は灯里さんに直接の後輩で……つか、お弟子さんで……」

「そうなんだ。一番弟子ってわけね」

-ムカツ!

その明子さんの問いかけと、アニーの答えに、私は心は、一気に沸騰します。

「そんな一番弟子だなんて……えへへ。まあ、そうなんですけど

……

なんだかそう言われると、照れくさいなあ」

「うふふ。彼女がどんな風にアニーを教えるのか。

すっごく興味があるわあ」

-ムカムカ

一番……なんですって!?

「すっごく親切に教えてくれますよ。いっつもニコニコして。

ゆったり、まったり。のんびりと。ほんとにあのままです。

あのままの笑顔で、手取り足取り教えてくれるんです」

「あはは。灯里ちゃん笑顔が目浮かぶわあ」

-ムカムカムカ

コノコノ……その笑顔は私の……私だけの……

「私は灯里さんの一番弟子になれて、とっても幸せです!」

満面の笑顔で言うアニー。ついに私は。

「いい加減にして!」

そう叫ぶと、明子さんとアニーを睨んでしまいました。

みんなが驚いたような顔で、私を見ます。

「アイ?」

「どうしたの?」



「ん？ 何があつた？」

あゆみみ達の声にも答えず、私は明子さんとアニーを睨みつけます。

「アイちゃん、どうしたの。私、何か変なこと言った？」

無邪気な微笑みを浮かべ、何事もないようにアニーが言いました。

その笑顔に――

ぶちむっ

私の中で何かが切れました。

何かが切れる音がしました。

耐えていた。我慢していた。

朝からずつとこらえていた何かが切れる音がしました。

「ふざけんな！ このバカ！」

私は絶叫します。

顔を真っ赤にして叫びます。

「この、バカバカバカバカ！！」

「あ、アイちゃん？」

「何が灯里さんの後輩よ。何が灯里さんのお弟子さんよ。

何が灯里さんの一番弟子よお！ なんなの？ なんなの？ バカなの！？」

私は我を忘れて叫びます。

「あの、アイちゃん？」

「アニーはスルい！ スルい！ スルい！ スルい！ スルい！！！」

有無を言わず、私は叫びます。 叫び続けます。

アニーが引いてます。

明子さんや、あゆみ達も、ドン引きしています。

当たり前だ。 私は怒ってるんだ！

「なによ。

なにでいきなり、A R I A・カンパニーに入ってるの!？」

なにでいきなり、A R I A・カンパニーのウンディーネになってるの!？」

なにでいきなり、A R I A・カンパニーの、あの部屋に住んでるの!？」

なんでいきなり、灯里さんの一番弟子。 みたいな顔をしてるの

!？」

私は……それは私の………」

何か熱いモノが両目から溢れてきました。

止められません。 その熱いモノを止めることもできず、私は叫び続けます。

「ホントは私が、私が次のA R I A・カンパニーの社員になるハズだったのに！」

ホントは私が、次のA R I A・カンパニーのウンディーネになるハズだったのに！」

ホントは私が、灯里さんの最初のお弟子さんになるハズだったのに！」

ホントは私が、灯里さんの一番弟子になるハズだったのに！

それを……それがなんでアニーなの!？」

それがなんで、急に横から現れた、アニーなの!？」

ズルい。 そんなの、ズルい!」

私は泣きながら叫び続けます。

「私の場所、取らないでよお！」

私の灯里さん、取らないでよお！」

私と灯里さんの場所。取らないでよおおおおお……！」

分かってる。分かってます。

こんなの、ただの言いがかりだって。

こんなの、ただの我が儘だって。

こんなの、ただの自分勝手な言い草だって。

分かってる。分かってる………けどー

けど。けど私は………私は灯里さんの………一番の………

「ぶいにゆんにゆん？」

心配そうに近寄ってきたアリア社長を抱きしめ、私は、えぐえぐーと、泣き続けました。

「アイちゃん………」

明子さんが私の頭をナデながら、優しく話かけてきます。

でも私はアリア社長を抱きしめながら、まるでイヤイヤをするかのように、頭を振り続けます。

ああ。私はなんてイヤな子なんだろう………

でもそんな私に、明子さんはー

「よく言えたわね」

「え？」

と、顔を上げる私に、明子さんが言いました。

「どんな思いも言わなきゃ分からない。どんな思いも、ちゃんと言葉に出さなきゃ伝わらない。」

アイちゃんは、ちゃんと自分の『オモイ』を口にだした。言葉に乗せた。

それはとても良いことよ

横であゆみみが『うんうん』と、何故か、したり顔で頷いています。

「でも…でも私は、とっても非道いことを……」

「そんなことはないわ。そうよね、アニー」

「うん。ごめんなさい、アイちゃん」

アニーが言っていくれます。

「私、考えが足りなかった。」

私、アイちゃんのこと、ちゃんと思えてなかった」

「アニー……」

「そうだよね。アイちゃんはずっと前から、灯里さんのこと大好きだったんだよね。」

本当は灯里さんの一番弟子は、アイちゃんなのに。

それなのに、私が横入りして……ごめんね、アイちゃん」

そっと、アニーが私を抱きしめてくれます。

優しく抱きしめてくれます。

「だからね。アイちゃん」

アニーが囁くように、けど力強く言います。

「絶対、元の世界に帰ろう。」

絶対、灯里さんの所に帰ろう。

絶対、ふたりで、灯里さんの所に帰ろう」

「アニー……」

「アイちゃん」

アニーを呼びます。

アニーが呼んでくれます。

「だって、あなたは……」

そして、アニーは言ってくれました。

「あなたは灯里さんと私の」

ぎゅっー と抱きしめる手に力が入ります。

ぎゅっー と強く抱きしめてくれます。

「とっても大切な、お弟子さんなんだから……」

あーーーーー！

さっきとはちょっと違う熱いモノが、私の頬を流れていきました。

\*\*\*

カバードブリッジ、到着。

「風が強いわね……」

アントラが言います。

強い風が私達の髪を揺らしています。

「みんな私の後ろを付いて来て。決して離れちゃダメよ」

明子さんはそう言つと、先頭を切つて歩き出しました。なんて勇気があるんだらう。

私は右手をアニーにつなぎながら、その後に続きました。あゆみ達は後ろを守ってくれています。

「それにしても、暗いわね」

私の声は、少し震えていました。

「もう、夜だからね」

答えるアニーの声も震えていました。

気がつけば、あたりはすっかり日が暮れて、夜の闇が色濃く広がっていました。

「でもさ、でもさ」

杏子が明るく言います。

「何事も、やわっこく、やわっこくしていれば、何でもできる。

何でもできちゃうんだよ！」

「なに？ その何の根拠もない自信」

「ええええ」

すかさず入ったアントラのツッコみに、杏子が情けない声を上げます。

私達はたまらず、ぷつーと、吹き出してしまいました。

ありがとう

杏子は、にへへへ。と、笑っています。

私を。 私達の緊張をほぐすために、杏子はワザとそんな言い方をしてくれたのでしよう。

おかげで少し、場が和みました。

「見て！ あそこ！」

アニーが一点を指差し、叫びます。

「光……」

アニーが指さす、その先に。

深い闇に閉ざされた橋の上に、一点の光が輝いています。

それはゆらゆらと揺れながら、まるで私達を呼ぶように、誘うように、妖しく瞬いています。

先頭に行く、明子さんが振り返りました。

私達は無言で頷きます。

明子さんも無言で頷くと、ゆっくりとその光に向かって歩み始めます。

「アイちゃん」

突然、アニーが私の手を握ってきます。

それはあの時。

あの路地の中で不安に押しつぶされそうになった私に、そって触れしてくれたあの時と同じ手で……

「大丈夫……だよ」

「手、震えてるわよ」  
でも私はまた、そう言っただけです。  
実際、アニーの手は氷のように冷たくて、固くて、小刻みに震えて  
しました。  
ああ……でもアニーは私のこと。

「えっへっへ……本当はちょっと怖い。でも……」  
アニーは引きつった笑顔で私に言いました。

「アイちゃんだけでも、なんとしても帰してあげなきゃ……ね」  
「迷惑です」

「……え？」

戸惑うアニーに、私は冷たく言い放ちました。

「そんな自分勝手な考え。迷惑です」

「ちよつと、そんな言い方はないでしょう!？」

私達の話を隣で聞いていた、アントラが怒ったように言います。

「アニーは、あなたのことを心配して」

「だからそれが迷惑だっただけです!」

私は、ぴしゃりと、言っただけです。

「私だけ? そんな自分勝手に安っぽいヒロイズムなんて、迷惑だ  
っただけです。」

……帰るならふたりで。ふたりで一緒に帰らなきゃ、ぜんぜん  
意味がないんです!」

「アイちゃん……」

アニーが潤んだ瞳で私を見ます。

アントラも、みんなも微笑んでくれています。

恥ずかしくなった私は、そっぽを向いてしまいました。



「ジュジュジュ」と。

風がさらに激しさを増しました。  
私達の真つ正面から吹き付けてきます。  
まるで私達を押し返すかのように。  
まるで私達の歩みを拒むように。

「あれは！」

突然、先頭に行く明子さんが声を上げました。  
轟々と周りの闇を吸い込みながら輝く光の渦。  
それはまるで何かのゲート…「門」のようでした。  
その横に。 そのすぐ横に。

彼女は立っていました。

「お前は!?!」

アニーが叫びます。

眩しい光のせいで、より濃くなった闇の中に、彼女はいました。  
薄く笑いを浮かべ、彼女はじっと、私達を凝視していました。

噂の君

黒い喪服のようなドレス。

顔を覆う黒いヴェール。

長い黒髪。 黒いレースの手袋。

かつて灯里さんを闇に連れて行こうとした、謎の女性。

風に揺れるヴェールの下には、その顔がありません。

けれど、彼女が薄く微笑んでいるのは、そのヴェール越しにはつきりとは分かりました。

「なぜ、あなたが此処に……」  
アニーがつぶやきます。

その声はあまりに小さすぎて、私にしか聞こえなかったでしょう。でも私にはその理由が分かっていました。

### サイレンの悪魔

それは今、目の前に立つ噂の君と同じく、闇の存在。  
黒い毛皮の女性。

かつての、噂の君に対する灯里さんのように、アニーを。  
アニエス・デユマを、その心の弱さに付け込んで、闇の世界へ連れ去ろうとした邪悪な存在。

その時は、灯里さんや、藍華さん。アリスさん。水の三大妖精。

そして元・姫屋のプリマで、今はツアーコンダクターとして、AQUAの素晴らしさを、  
多くの人々に紹介し続けている、アンジェさん。  
アンジェリカ・フェルナンデスさん。

そして「AQUAの心」と呼ばれる、あの方の活躍で、引き込まれる寸前のアニーは、  
どうにか帰ってくる事が出来たのです。

きっと、その時の恐怖が甦ってきたのでしょう。  
私の手を握るアニーの手は、ますます冷たくなっていき……

「どうして、あなたが此処に……」

もう一度、アニーが小さく呟きます。  
でも彼女は……噂の君は、アニーのその言葉が聞こえたかのように、私達に囁きます。

『ここからお帰りなさい』

「え？」

『でも、もう。あまり時間はないわよ。アニー？』

そう言うと、噂の君は、ゆっくりと後退り、まるで融けるかのように闇の中へと消えていきました。  
私達はしばらく、啞然とその闇を見つめていました。

轟っ

一段と激しさを増した風が、私達の意識を引き戻します。

「いけない！ 門が閉じる！」  
明子さんが叫びました。

見れば少しずつ、光が小さくなって行きます。  
確かにあまりもう、時間はありません。

「アイちゃん！ アニーちゃん！ 早く……！」

明子さんが強く私を引っ張ります。  
でも、その光から吹き付ける風が、私の足を絡めとります。

「だめ。風が強くて歩けない！」

「アイちゃん。しつかり！」

アニーも同じように私の手を引っ張ってくれます。

「アイちゃん。頑張つて！」

トンっ と、背中に回った明子さんが、あゆみ達と一緒に押してくれます。

吹き付ける風はさらに激しさを増します。

顔を下げなければ、息をすることもできません。

それでも私は、アニーに手を引かれ、明子さん達に背中を押され、ゆっくりと光に向かって足を進めます。

「アイちゃん、もうちよつとだよ！」

すでにその身の半分を光の中に突き入れた、アニーが叫びます。

風の音に邪魔されて、叫ばなければ何も聞こえません。

「ほら、頑張れ。アイ！」

背中からあゆみ達が叫びます。 けれどー

「うううううう」

動けません。 風に吹き付けられて、一歩も動けません。

それどころか、逆に後ろに飛ばされそうです。

「ぷいにゅん」 「にゃうーん」

私の足にすがりつくアリア社長を、私はあわてて抱き上げました。明子さんもアリア社長の背中 पीटを抱きしめます。

「もうちよつと。もうちよつとよ」 明子さん達が押します。

「もう少し。もう少しだ」 アニーが引っ張ります。

光の門は、どんどん小さくなっていきます。

今や、私の身長程の大きさしかありません。

「だめ。このままじゃつ。アニー。あなただけでも帰って！」  
「何言ってるのアイちゃん！ふたりに帰るんでしょ！」  
小さくなっていく光の中から、アニーが叫びます。

「その通りだ、アイ。未来をつかめ！」  
背中から、はげますようにあゆみみが叫びます。

「あゆみみ……」

「そうそう。あなたはちゃんと帰って、ARIA・カンパニーの  
ウンディーネにならなきゃ！」

「うんうん。やわっこく、やわっこく。そんな素敵なウンディー  
ネになってね！」

「アントラ。杏子……」

「ねえ、アイちゃん」

不意に明子さんが私の耳に口を近づけ、囁くように言います。

「あのね。たぶん私達はもう、アイちゃんには会えない」  
「え？」

「なんとなく分かるの。」

私は……私達は、あなたの世界には居ないんだって。  
アイちゃんや、アニーちゃんの世界は、私達のこの世界とは、ち  
よつと違うんだって

「ええ？」

「だからね。私達は、今、ここに居る私達だけ。」

あなたの世界や、他の世界の何処にも居ない。この世界だけの

存在……」

「明子さん？」

「だからね、アイちゃん。

私はあなた達に会えて良かった。

灯里さんに会えたことも、本当に良かった。

「明子さん……」

「だからアイちゃんは、しっかり灯里ちゃんの一番弟子になってね。それが私の……私達の大切な『アツヴェニーレ』への、何よりも願いだから！」

「アツヴェニーレへの願い……」

「よし。それじゃ、いち、にの、さん。で、力を合わせるわよ！」

明子さんが、今までにない大きな声で叫びます。

「それ！ いち。にの。 さああああああん！！」

ぐいつ！ と。 手を引かれ。

ぐいつ！ と。 背中を押され。

私は転げるように。 倒れ込むかのように。 門の中に飛び込みました。

「明子さん！ あゆみみ！ アントラ！ 杏子！」

あわてて振り向けば、どんどん小さくなって行く門の外に、みんなの笑顔がありました。

四人とも、満面の笑顔で私達を見てください。

あゆみみは、まるで、いたずらっ子のように微笑みで。

アントラは、胸の前で小さく両手を振りながら。

杏子は、大きく口を開け、勝ち誇ったようなガッツポーズで。

そして、明子さんは……

あの暖かな微笑みで。

その柔らかな微笑みで。

私達を見えています。

その口が小さく動きました。

・さようならと。

「あ……」

けれど私が何かを告げる前に、門はしまり、輪は閉じます。

あたりは、あの轟音が嘘のように静まりかえり、真っ白な光に満たされています。

そつとー

アニーが背中から抱きしめてくれました。

アリア社長が前から抱きしめてくれました。

包み込みように。守るように。ふたりは優しく私を抱きしめてくれます。

「アニー。アリア社長。私……私、言えなかった……」

また熱いモノが私の頬を流れ落ち始めました。

「みんなにお礼の言葉、言えなかった。みんなに想いを伝えられなかった……」

「大丈夫だよ、アイちゃん」

「ぶいにゆうくにゅっ」

アニーとアリア社長が声を合わせて言ってくれます。

「きっとアイちゃんの想いは伝わったよ。ちゃんと伝わったよ。

だって……」

アニーの腕に入ります。きゅっーって、抱きしめてくれます。

「だってみんな、私達の大事な、大事な」 I l p a s s a t o

『なんだから』

あ—————っ！

私の泣き声はいつしか、まばゆい光の中に埋もれていきました。

\*\*\*

カタ・カタ・カタ。

私は今、メールを書いています。

カタ・カタ・カタ。



マンホームの自宅で、メールを打っています。

結局あの後。

私達はカーニバル会場近くのベンチの上で、仲良く手をつなぎながら寄り添うように眠っている所を、

灯里さんと、アリシアさんに見つけてもらいました。

どうしたの？

そう訊ねてくる灯里さんやアリシアさんに、私達は曖昧に微笑むばかり。

だって、うまく説明できないんだもの。

アリア社長もただ「ふいにゆん」と首を傾げるばかり。

ただ私とアニーはその後、ふたりで、カーニバルを楽しみました。

ふたりで手を取り合いながら、思いつきり、カーニバルを楽しみました。

夜はARIA・カンパニーのあの部屋で……今はアニーの、あの部屋で。

ふたり仲良く、ひとつのベッドで眠りました。

ふたり仲良く、抱き合いながら、ぐっすりと眠りました。

カタ・カタ・カタ。

そしてカーニバルも終わり、私はARIA・カンパニーのみんなに見送られて、マンホーム帰ってきました。

カタ・カタ・カタ。

私とアニーは「こちらの世界」に帰ったあと、みんなのことを調べてみました。

私達の大切な、あの人達を探してみました。

結果は―

残念ながら、あの四人は、この世界には存在していませんでした。AQUA。マンホーム。

そのどちらのライブラリーの記録をあたってみても、あゆみみ。アントラ。杏子。

そして星野明子とゆう人物の記録は確認することは出来ませんでした。

でも―

私がマンホームに帰る日。

ふと立ち寄ったトラゲットと呼ばれる大運河の渡し舟。

その乗り場で、あゆみみ。アントラ。杏子達にとてもよく似たウンディーネさん達を見かけました。

残念ながらその時はもう時間がなく、声もかけられなかったけど、今度、私がまたAQUAに来る時まで、アニーが友達になっれてくれているそうです。

うふふ。楽しみ！

そして、最後に―

星野明子さん。

もうひとりの灯里さん。 アッヴェニーレ。 私達の大切な『 I

l p a s s a t o 』

だけどー

彼女は……彼女自身の、その不思議な予言の通り。

この世界の何処にも、その痕跡さえありませんでした。

すべての記録。 すべての学校の記録。

このネオ・ヴェネチアに水が満ちた、あの時代にまでさかのぼって探してみても。

この世界に『 星野明子 』なる人間の存在は、一切、確認できませんでした。

カタ・カタ・カタ。

やっぱり、パラレルワールドだったんでしょか。

カタ・カタ・カタ

やっぱり、誰かの思惑が働いていたのでしょうか。

カタ・カタ・カタ。

だから私はメールを書いています。

あなたにメールを書いています。

カタ・カタ・カタ。

書き終えれば『宛名不明』で送信するつもりです。  
宛名のないメールを送るつもりです。

そう。

AQUAは奇跡の星です。

偶然や、めぐり逢いがいっぱいある、奇跡の星です。

それを信じて。

それを願って。

あなたにメールを送ります。

いつかあなたに、このメールが届くと信じて。

いつかあなたに、このメールが届くことを願って。

あの日、言えなかった言葉とともに。

あなたに、このメールを送ります。

星野明子さん。

ありがとう。

親愛なる、あなたへ。

私の……私達の大切な「 I l p a s s a t o 」へ。

「 I l p a s s a t o ) ( 過 去 ) 「  
- l a - f i n e

**I l p a s s a t o (後書き)**

それでもなんとか、年内にこのお話しをお届けすることができました。

こんな愚作ではありますが、作者はホツとしています(鹿馬

それではみな様。

メリークリスマス。そして、良き年を!(寿

H A I A ! V I V A ・ N O N N N ! ! (前書き)

新年明けました。おめでとうございます。

嗚呼。温泉行きたい！近所のスーパー銭湯でもいい！

鳥…違つ。ラドン温泉でもいいから行きたい！

大浴場で、泳ぎたい！

つてトコから、このお話しが出来ました(大鹿馬)

そして今回。「あの方」にも、ご登場いただきました。

みな様が温かい目で見逃していただけるなら幸いです(汗

今年もこんな駄文書きではありませんが、みな様。

お見捨てなく、ご贖罪にさせていただければ幸いです。

それではしばらくの間。お付き合いください。

H A I A ! V I V A ・ N O N O N N ! ! !

「はふうふう〜う」

「はづふうふう〜う」

ピチャン

「うっひゃあああああああ!？」

「ん? どうしたの?」

「い、いえ。何かが背中に……」

「ふふ。湯気が天井から、ポタリと背中に?」

第24話 「H A I A ! V I V A ・ N O N O N N ! ! !」

それは雪の降る寒い日だった。

「はふうふう〜う」

「はづふうふう〜う」

ふたりの白い吐息が、24月の木枯らしにさらわれ、たちまち空に消えていく。



「寒いですね」「寒いねえ」

ふたりのウンディーネが肩をすくめながら言い合う。

「何、言ってるの。冬が寒いには当たり前。ふたりとも 気合が足りないわよ」

ひとりのウンディーネが、だが言葉とは裏腹な優しいげな口調で嗜める。 けれどー

「ふうあああくん。寒いよ。冷たいよおお。なんとかしてえええ！」

もうひとりのウンディーネが泣き叫ぶ。

「あなたが泣き言なんか言わないでください！」

「ふええええーん。言葉まで冷たいいいい。しくしく……」

「泣いてもダメです。バツジエーオ！」

茜は憤然と言い放った。

\*\*\*\*\*

大規模なテラフォーミングを受け、青い星へと生まれ変わった、火星。

水の惑星「AQUA」

そのいち都市。ネオ・ヴェネツィア。

地球。マンホームのイタリア州にあった都市、ヴェネツィアを模して作られた観光都市。

逆「S」を描く大運河「グラン・カナル」を中心に、幾多の水路が街中を縦横無尽に駆け巡る水の街。

人々は、その水の流れと共に暮らし、生きていた。

ウンディーネとは、そんな街、ネオ・ヴェネツィアをゴンドラを使い、観光案内を行う、水先案内人のことだ。  
女性しかねず、ネオ・ヴェネツィアを代表する「アイドル」  
のような存在。

総勢、300名程の彼女達は、さまざまな会社に所属しており――  
老舗の「姫屋」 中堅の「天神遊船」 新進気鋭の「オレン  
ジ・ぷらねっと」  
少数精鋭で有名な「ARIA・カンパニー」と。  
それぞれ競合しつつ、協力しつつ、日々、ネオ・ヴェネツィアを訪  
れる人々を手厚くもてなしていた。  
そして――

「温泉行きたあぁー……………い！」

そんなお店のひとつ。

MAGA社は、今日もまた「愚か者」に振り回されていた。

「温泉……………」

アニーこと、アニエス・デユマが呟く。

アニーは、片手袋の半人前「シングル」 　　まだお客様を単  
で乗せる事はできず、  
ただプリマが同乗している時のみ、お客様を乗せ営業できる、少々、  
半端な立ち位置。

「温泉ですかぁ……………」

アリーチェが、うつとりとした顔で遠くを見る。

アリーチェ・P・アントノフ。 両手袋の見習い「ペア」  
新人。

もちろんお客様を乗せる事もできず、日々、操舵の練習を続ける毎日。

「温泉ねえ……」

茜がぼつりと言った。

茜・アンテリーヴォ。手袋なしの一人前「プリマ」

特別な白いゴンドラにお客様を乗せ、街中を観光案内できるウンディーネ。

通常「ウンディーネ」と呼ぶ場合。多くは彼女達、プリマの事を示していた。

「うんうん。温泉、温泉」

アロツコが満面の笑顔で言った。

アロツコ・J・ルイ。MAG A社の代表取締役。

『バツジエーオ（愚か者）』の二つ名で呼ばれる、プリマ・ウンディーネ。

『バツジエーオ（愚か者）』の名前に誇りを持つ、プリマ・ウンディーネ。

「にゃふ・にゃふ」

小さな猫が、アロツコの腕の中で楽しげな鳴き声を上げた。

小さな猫。アキラ社長。

ネオ・ヴェネツィアの水先案内店では、航海の安全と無事を祈って、蒼い瞳の猫を「社長」として一緒に暮らすのがしきたりだった。

けれど、アキラ社長は蒼ではなく、MAG A社のカラーである、黄色の瞳を宿した猫だった。

「私、実は温泉。入ったことないんですよねえ」

「アニー先輩。そうなんですか？」

「うん。マンホームには、温泉なんかなかったから……」  
アリーチェの問いに苦笑を浮かべ、答えるアニー。

アニー。

こと、アニエス・デュマは、マンホーム出身だった。

そして本来、彼女はMAG A社ではなく、姫屋に所属するはずのウンディーネだった。

ところが姫屋側の書類の不備で就職できず、途方にくれていた時に、たまたま出会ったアロッコに誘われ、  
MAG A社に入社したのだ。

その時の条件はひとつだけ。アロッコのことを、バツジエーオと呼ぶこと。

ただ、それだけだった。

啞然とするアニーに、茜が笑いながら説明してくれた。

アロッコの病気のこと。残された時間のこと。

そんなアロッコの思い。そんなバツジエーオとしての思い。

笑顔で語る、茜。

そんな彼女に頷きつつ、けれど、アニーは納得できなかった。なぜなら……

\*\*\*\*\*

「私も最近、温泉行ってないなあ……」  
アリーチェがつぶやくように言った。

「最後の記憶は、お姉ちゃんやパパとママ。ご近所の人達と行った

ときかなあ……」

そう言いながら、アリーチェは、盗み見るように茜を見た。

「こら、アリーチェ。会社では、お姉ちゃんじゃなくて、ちゃんと名前で呼びなさい」

茜が、ぴしゃり！と言った。

アリーチェと茜は、小さい時から一緒に育った、ご近所さんだった。お互い、ひとりっ子だった、アリーチェと茜は、まるで本当の姉妹のように仲良く育った。

一時は女優として大成した茜が電撃引退し、MAG A社のウンディーネになったとき。

それを何よりも喜んだのは、アリーチェだった。

自身、ゴンドラが大好きだったアリーチェは、なかば強引にMAG A社に入社すると、

そのまま茜のお弟子さんになったのだ。

「ごめんなさい……」

シューン となるアリーチェ。

「だ、だからと言って……」

そんなアリーチェに、あわてたように茜が言い足す。

「し、仕事が終わったら、お姉ちゃんって言っても良いのよ!」

「仲良いですね」

「うふふ。素敵なツ・ン・デ・レさんね」

アニーとアロッコが微笑む。

「お だ ま り!」

「ひええええっ」

笑い声が響きわたる。

「よしっ。決まり！」

突然、アロッコが…… バッジエーオが元気よく叫んだ。

「今から我が、MAGGA社は、全社員、温泉旅行へと出発します！」

「い、今からですか!？」

あきれたように茜が言う。

「茜。思い立ったが祝日！ って言うでしょう?」

「それを言うなら吉日です！ いやでも……着替えとかは」

「そんなの向こうでも売ってるわよ」

「でも、もし、お客様が来たら……」

「大丈夫。大丈夫」

そんな茜に、アロッコは満面の笑顔で答えた。

「お客様なら、どうせ来ないわ」

「それが経営責任者が言う、台詞かあああああ!！」

茜の絶叫が響き渡った。

『ME(A)GARLITH (メガリス)』

社名の「MAGGA」社にひっかけて、『遺跡』を意味する言葉。

揶揄する言葉。

偶然に声をかけてくる、お客様のみを相手にする、古臭い営業方針。そしてそれを改めようともしない、アロッコ達を笑う言葉。

『MEAGARLITHのバッジエーオ』 遺跡の愚か者  
ーと

けれどMAGGA社の社員達は、そんなアロッコの、のんびりとした

生き方が好きだった。

\*\*\*\*\*

「ほわ〜あ」

アニーが感嘆の声を上げた。

小島の上に立つ洋館。

煙がその建物を包むかのように立ち上っている。

「あれは湯気です」

「湯気？」

アリーチェが人差し指を立てながら、解説する。

「はい。温泉が冷たい空気と反応して、煙のような蒸気をあげているのです」

「ふへえ……」

「この温泉宿はもともと、普通の古い屋敷だったんですが、温泉が出たときに持ち主の老夫婦が、

そのままお屋敷ごと、お風呂にしちゃったんですよ」

「へえ〜」

「うふふ、粹つてもんだわね〜」

そうこうしている内に、船着場に到着。

「行くつ。アリーチェちゃん！」

「はい。アニーさん！」

入口まで。

アニーとアリーチェが手をつなぎながら、飛ぶように走っていく。

そんなふたりを微笑ましく見守りながら、茜とアロツコが、ゆつくりと後に続く。  
やがてー

「アリーチェちゃん。見て見て！ このカーテン、すっごく大きいよ」

ー 男

ー 女

ドンツ！ と。

入口には赤地に白の文字で、そう書かれた巨大な布が吊るしてあった。

「ふふふ。これは暖簾のれんと言つのです」

アリーチェが、再び人差し指を立てながら得意気と言つ。

「これによつて、男の人が入る温泉と、女の人が入る温泉とを分けているのです。」

もつとも地方によつては、男女が一緒の温泉に入るー とゆう風習があつて、それは『混浴』と呼ばれているのです。

元はマンホームの日本州であると言われていますが、同じくドイツ州でも同じ習慣が見られたそうです。

ですが今はもちろん、そんな風習はなくなり、ちゃんと男女別風呂に入るのが、当たり前になっています。

あつ。ちなみに家族や恋人同士で入るのは、厳密に言つて『混浴』では、ありません。

……つて、アレ？」

元氣よく、指を立てたまま得意気に解説を続けるアリーチェ。でもー



ひゅっつっつっつ

木枯らしが吹き抜けていく。

気が付けば、アリーチェはただひとり、暖簾の前で突っ立っていた。彼女を置き去りにして、みんなもう中に入ってしまったのだ。

「みんな、非道いいい……」

泣きながら、あわててみんなを追いかけていく、アリーチェ。

そんな彼女を、中でちゃんと待ち構えていた、アロッコ達の笑い声が出迎えた。

「にゃふ？」

そんなアロッコ達を、アリーチェの手に抱かれたアキラ社長が、不思議そうな顔で見上げていた。

「いらっしやい」

入ってすぐ横にある、少し高い台の上から、おばあさんが声をかけてくる。

「こ、これは番台と言いまして……」  
アリーチェが、みたび、人差し指を立てて説明し始める。

「本来はここで料金を払って入るのです。」

昔は、野球選手、総理大臣と並ぶ『あこがれの職業』と、して呼ばれていたそうです。

理由はよく分かりませんが……」

「うふふ。それはね、アリーチェちゃん。異性の裸が見……」

「はい、バツジェーオ。そこまで。つかアリーチェに変なこと教えないでください！」

「ええ〜。つまんな〜い。　　ってゆーか『オトナのカイダンの  
ぼる』 みたいなの？」

「なに、バカなこと言ってるんです！　ホラ。　さっさと行きますよ  
「はにゃああああ〜」

そして脱衣所―

「はい、アニー」

「はい？」

茜から手渡された籠を、ガン見するアニー。

「これは……何を……」

「この中に脱いだ服を入れておくの」  
そう言うと茜は、服を脱ぎ始める。

―はらり　―ひらりと。

茜が服を脱いでゆく。

なんの躊躇いもなく、制服を脱いでゆく。  
衣擦れの音が妖しく響く。

しなやかな肌。　　極めの細かい、上質の絹のような白くて、柔らか  
な肌。

女優としても鍛えられた、抜群のプロポーション。

ボンツ　キュツ　ボンツ

湯気に当てられたのか、その白い肌が、ほんのりと紅く染まってい

る。

同性でありながら、アニーは思わずその体に見惚れてしまった。見慣れているハズの、その項うなじでさえ、まるで、たおやかに輝いていて……

「どうしたの、アニー。行くわよ」

タオルを全身に巻きつけて、茜が言う。

「あ……はい。いえ……その」

アニーは真っ赤になりながら、もじもじと言いよどむ。

「あ、あの私。誰かと一緒にお風呂に入るなんて初めてで……」

「うふふ。恥ずかしくなんてないわよおお。さあ、脱ぎ脱ぎ

しましょっ

「ぎいやああああああああああっ！」

いつの間にか背後に立ったアロッコが、アニーの服を脱がし始める。

「いやっ。ダメです。ダメですってば！」

「ふへへへ。ウイヤつよのおお。ほれほれ、さっさと脱がんかい！」

「バツ、バツジエーオ。ひ、ひとりで脱げますからあー！」

「くっくっくっ。苦しゅうない、苦しゅうない……」

「お、お許してください、バツジエーオさまああー！」

「口ではなんと言つても、体は正直なもののおおお。もう、

こんなにも……ひひひ」

「そ、そんな処。ら、らめええええええっ！」

「さあ、くるくる脱がせの刑じゃあああ！それっ。くるくるっ。くるくるっ」

「アッレ……」

「ぐうへっへっへっええええええはぎやっ」「ぎやぶー！」

ガスつーと  
鈍い音がして、アロッコとアニーが頭を抱えてうずくまる。その背後には―

「お前等、何やっとなのじゃー!」

ぜはあゝぜはあゝぜはーつと。

鼻息も荒く、拳骨を握ったまま、鬼のような形相で二人を見下ろす、茜の姿があつた。

「くすん。ちよつとした、お茶目な冗談だつたのに……」  
「なんで私まで……」

正座させられた上に、お説教までされたアロッコとアニーがつぶやく。

「あれのどこが、お茶目なんですか!」

まだ温泉にも入っていないのに、顔を上気させて茜が怒鳴る。

「でもまあ、茜。終わったことはどうでもいいわよね。温泉だから……」

「はい?」

「だから温泉なんだから、お互い全部、お湯に流すーつてことであ……お先に!」

「それは水です。つか、バツジエーオ。待ちなさい!」  
素早く服を脱ぎ捨て、素っ裸になって浴場に走って行くアロッコ。

「あつ。バツジエーオ。お姉ちゃん。待ってえ!」

ーバツジエーオ!　せめて前は隠してください!

そう叫んで遠ざかっていく茜の後ろを、なんのためらいもなくバス  
タオル一枚になったアリーチェが追っていく。

「うわあーん。待って！ 待って！」  
やっぱり出遅れたアニーが、もたもたと、その後を追って行く。

「はにゃん？」  
アキラ社長が、やっぱり不思議そうな顔で、そんな四人を見送っ  
ていた。

\*\*\*

「ヴうららっしやうついくづららあぁア」  
と、まるで若本ボイスのような声を上げ、アロッコが湯に身を浸す。

「あんたは、おやぢか！… はぁぁあ」  
そう言いながらも茜も満足のタメ息を漏らす。

「はにゅーん」  
溶けそうな声でアリーチェがつぶやく。

「き、気持ちいい……」  
肩までお湯に浸かりながら、アニーが驚いたような声を上げる。

「どう、アニー。 気に入ってもらえた？」

「はい。 バッジエーオ。 すごく気持ちいいです！」

「ふふふ。 アニーが喜んでくれて良かった」

「はい。 もう大感激です。 ありがとうございました、 バッジエーオ」

「元来温泉とはー」

再びアリーチエが指を立てながら説明しだす。

「摂氏25以上の温水か、一定の物質を有するものをいいます」

「ふむふむ」

「その含有成分によつて、いろんな性質に分けられ、医療的に治療効果のある温泉は、

医療泉として、大きく九つの種類に分類されています」

「うふふ。よく知ってるわね、アリーチエちゃん」

「はい。ここへ来るまでの間。調べておきました」

「それはスゴいわね。素晴らしいわ」

「えへへ。褒めてもらいました」

「うむ。その調子で今後もしつかり勉強しろよ」

「はい！ お姉ちゃん！」

「だから会社では、名前で呼べと……」

「あ……」

苦り切った顔の茜に、真っ赤になるアリーチエ。

「本当にお二人は、仲が良いですねえ」

「ええ。MAGA社は、このふたりに任せておけば安心ね。」

う

ふふ

「ば、バツジエーオ。からかわないでください！」

やっぱり耳まで真っ赤にして、茜が叫んだ。

「BABANBA・BANBANBAN……」

不意にアッコが、歌を口ずみさみ始める。

「いい湯だな」

それはどこか人を笑顔にさせる、和ごます、陽気で明るい歌。

何故か最後に「へソ出して寝るなよ!」とか「勉強しろよ!」とか「風邪引くなよ!」とか

「なんだ馬鹿野郎!」とか

謎の台詞が入ることだけが疑問だったが……

「ここはAQUAの、ネオ・ヴェネツィアの湯」

「楽しい歌ですね」

「ふふふ。アニーもそう思う?」

「はい。バツジエーオ。それもゴンドリエーレ（舟歌）のひとつですか?」

「ううん。違う違う」

アロツコが微笑みながら言った。

「これは、マンホームの歌よ」

「え? そうなんですか?」

「ええ。マンホームに昔から伝わる温泉の歌。実はアリーチエちゃんに教えてもらったの」

「アリーチエちゃんに?」

「はい。私のお祖母様が、マンホームの古い歌が大好きで、よく唄ってくれたんです。

そしたらいつの間にか、私も覚えちゃって……」

えへへーと

恥ずかしそうに笑う、アリーチエ。

「そっかー。ならアリーチェちゃん。今度、私にもいつぱい教えてよ」

「はい。喜んで！」  
生き生きと話すアニーに、アロツコはいつまでも優しげな微笑みを浮かべていた。

\*\*\*\*\*

「ぶっふあーああー！」

アニーとアリーチェは、よく冷えたコーヒー牛乳を（もちろん飲むときは、腰に手を当てて）  
茜とアロツコはビールを（もちろん飲み終えた後は、膝を、カポーンっつ！と叩きながら）  
いっきに飲み干す。そしてー

「いただきまあー！す！」  
目の前には、超豪華な料理の数々。  
みんな、夢中で貪り喰う。

アニーとアリーチェは、互いの料理を取り合い。  
茜とアロツコは、差しつ差されつ。  
和気藹々とした笑い声が響く。

「にゃほほほほー」  
アクイラ社長も、猫用特別料理をもらい、大喜びだった。



「うにゅん」

そんな大満足な夕食の後、アニーはひとりでまたこっそりと、お湯につかりに来ていた。  
やっぱり恥ずかしい。

いくら気心が知れた仲間でも、裸の自分を晒すのは、やっぱり恥ずかしいのだ。

ありのままの自分を、さらけ出すのは。

昼間、目を付けていた「立ち入り禁止」の看板をすり抜ける。  
その先が、海につながる露天風呂になっているのは知っていた。  
ただ男湯からも丸見えなので、昼間にはこれなかったのだ。

「星が綺麗……」

お湯につかりながら空を見上げる。

すでに陽は沈み、空には満点の星空と、白く輝くふたつの月が、煌々と夜のネオ・アドリア海を照らしていた。

「まるで降るような星空ね……」

「バツジエーオ？」

いつの間にか、すぐ横にアロッコが座っていた。

驚くアニーに、アロッコは静かに言った。

「ねえ、アニー」

「はい？」

「なにか、私に聞きたいことがあるんじゃない？」

「え？」

「あなたがウチに来てからずっと、あなたが私に何か聞きたがっているのは分かっていた。

だってアニーってば、そんな時は口をムズムズさせて、困ったよ

うに私を見るんだもの。

可愛らしい癖ね。　　うふふ

「……………」

全てはお見通しかあ……………アニーは真っ赤になってうつむいた。

「あの……………茜さんとアリーチェちゃんは？」

「ふたり仲良く寄り添うように寝ているわ。アキラ社長と一緒にね。」

昼間、あんなに、はしゃいでたから……………きっと疲れたんでしょ。

ふたりで来た温泉が、よっぽど楽しかったのね。　　うふふ。

だから……………」

アロツコは、にっこりと微笑んだ。

「だから、今なら聞きたいことは、何でも聞き放題！　オマケも付けるわよ！」

「オマケって……………あの、バツジエーオ」

苦笑を浮かべながら、けれどアニーは静かな声で訊ねる。

「うん？」

「バツジエーオのご病気は、もう治らないんですか？」

バツジエーオの……………アロツコの病気。

それは先天性の病気。　　決定的な治療薬もなく、原因も不明。

「今」は元気でも、「明日」は分からない。

そんな恐ろしい病気。

この科学が発達した世界でも治せない。　　治療できない、悲しい病気。

「私も小さい頃、不治の病にかかっていました」

アニーが思い出すように語り始める。

「そう……ね」

「だけど今は元気です。元気になりました。でもー」  
アニーは視線を自分の手元に落とす。

「バツジエーオは、どうなのかって。恐くないのかなって……」

「もちろん、怖いわよ……」

「アロツコさん……」

「バツジエーオって呼んでね。うふふ。でもね、アニー。私

が本当に恐いの、私のことじゃない」

「え？」

「私が本当に恐いの……」

アロツコは夜空を見上げる。

「私が本当に怖い……恐かったのは両親のことよ」

「ご両親のことですか？」

「ええ」

アロツコは抱えたひざの上に顔を乗せると、アニーの方に視線を移した。

「こんな子に生まれて、ごめんなさい。

こんな辛い思いをさせて、ごめんなさい。

こんな怖い思いをさせて、ごめんなさい。

私がこんな病気だったばかりに、あなた達を苦しめて、恐がらせて、ごめんなさい。

いつもそう思ってた。それが恐かった」

それはアニーも同じ思いだった。

もし、自分が他の子のように、元気で、なんの心配もなく生きてい

ける子だったら。

毎日、毎日。

身を削るような思いで、病院に私を見舞いに来てくれる両親に。後悔しきれぬ思いを胸に秘め、毎日、笑顔を私に向けてくれる両親に。

こんな子に生まれて、ごめんなさい。

こんな私に生まれて、ごめんなさい。

こんな私が生まれて、ごめんなさい。

そんな私に。

こんな私に。

「でもねー」

アロッコが言い聞かせるように言う。

「でもふたりとも、変わらぬ愛情を注いでくれた。

いつも笑顔で私に語りかけてくれた。

いつもいっぱいの愛情で私を育ててくれた。

だからー」

アロッコはきつぱりと言い切った。

「だから私は死ぬまで生きる。笑顔で生きていく。

ふたりのために。

大好きな両親のために。

私をいっぱい愛してくれた父と母のために。

毎日、楽しいことを探して。

毎日、楽しいことを見つけて。

毎日、楽しい笑顔で。

最後のそのときまで、笑顔のまま。そう決めていたの」

「バツジエーオ……」

「そして、その想いは、決して消えない……」

ざわざわーと。

波音が響く。

静かな波のうねりが聞こえてくる。

ふたりは暫し間、無言で、その音を聞いていた。

「ねえ、アニー。あなたの唄。聞かせてくれない？」  
アロッコが不意に言った。

「え？ わ、私の唄……ですか？」  
「ええ。」

あなたがこつそりと唄の練習をしてるのは知ってるわよ。うふふ。

バツジエーオは、なんでもお見通しなのだ！」

得意満面の笑顔で言う、アロッコ。

「だからお願い。あなたを……あなたの唄を聞かせて。アニー  
ス・デユマ」

「バツジエーオ……」

ふたりの視線が絡みつく。

先に視線を逸らしたのは、アニーの方だった。

私が唄を。  
私が唄を謳う。

「……分かりました」  
決心したように。  
決意を固まるように。

アニーは、アロッコに小さく頷くと、大きく息を吸い込んだ。

―静かに祈る、声が……

アニーの謳声が響く。  
か細く、小さく。 けれど力強く。

―いつもそつと示す

―夢を描く意味は…光の中

アニーが一心不乱に唄を謳う。  
アニエス・デュマが、謳う。

―ありがとこの言葉を、あなたに送りたくて

―必ず空を見上げる

おりからの月明かりを浴び、アニーの姿が幻想のように揺らぐ。  
その透明な体を、星明かりが通り過ぎてゆく。

―生まれた命の意味は、生み出してくれたこと

私が生まれた意味を届けたいよ　いつまでも　いつまでも……

「ねえ、アニー。　あなたは今、幸せ？」

謳い終えたアニーに、アロッコがそつと訊ねた。

「はい……たぶん」

曖昧に答えるアニー。　けれどー

「そう。それなら良かった」

「え？」

アロッコは、さも楽しそうに言葉を紡いだ。

「それがきつと明日のあなたに繋がるから」

「私にも生まれてきた意味があるんでしょうか……」

「ええ。もちろんよ。　だから笑顔で、胸張って生きていきなさい」

「バツジエーオ……」

「私達は何時まで、何処でも、何処までも。　お友達だから。」

それに……」

「え？」

「いいものも、見せてもらっただし……」

その意味ありげな視線を目で追って、そして気付いた。

自分が無防備に立っていることに。

自分がタオルも巻かずに、生まれたままの姿で、アロッコの前に立っていることに。





ふたりの、はしゃぐ声はいつまでも夜の温泉に響きわたっていた。  
湯煙りがいつまでも、そんなふたりを暖かく包み込んでいた。

そして時は刻み込まれてゆく。

\*\*\*

「BABANBA・BANBANBAN！」

「HA！ VIVANONON！」

楽しげな唄声が響く。

楽しげな唄声が、ネオ・アドリア海に響き渡る。

温泉宿の島を背に。

ゆっくりと進む、ゴンドラの上で。

イエロー・スコードロン。

MAGA社の制服を着たウンディーネ達の楽しげな唄声が、ネオ・アドリア海に響き渡る。

「BABANBA・BANBANBAN」

「HA！ VIVA・VIVA！」

三人の楽しげな唄声が海を渡る。

「HAI A! VIVA・NONNON!! ( いい湯だな! )  
L - la·fine

「いい湯だな」 作詞・永 六輔 作曲・いずみだく  
「Il Cielo」 作詞/作曲/編曲・水野 大輔

\*

「お帰りなさい」  
「はあ。いい。ただ今」  
「どうでしたか?」  
「ええ。とっても良いお湯でした」

「ーがあつ。じゃなくて……大丈夫でしたか？」

「もちろん、大丈夫よ。ええ。きつと大丈夫ね」

「なら良いんですけどね……」

「信じましょう。あの子を」

「……はい。どちらにせよ、もう時間もありませんし……」

「ええ。そうね。そうなのね」

「すみません。でも、それはっ」

「ううん。いいの分かってる……分かってるわ。じゃ、後はお願いね」

「はい。ありがとうございました」

「……お願い」

「え？」

「……本当に。本当に、お願い。あの子は……彼女は、とっても良い子だから」

「……」

「うふふ。やっぱり私は、バッジエーオ（愚か者）ね……」

次回【アニー編・最終話】「El Cielo」につづく

H A I A ! V I V A ・ N O N N N ! ! ( 後書き )

あああああ

またやつちまった。その……いろいろ、ごめんなさい(土下座)  
でかい風呂敷まで広げたビック・マウス。

ちゃんと回収できるのか？

ちゃんと説明しきれるのか？

ちゃんと「落ち」はつけられるのか？

そしてなによりもー

みな様に、ちゃんと納得していただけるのか？

いまから( )( )。;( )( ) ( )です(鹿馬)

それではー

みな様の新しい年に祝福を！

次回も、よろしく願いします。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2525j/>

---

A R I A いろいろなお話 ?

2012年1月6日12時54分発行